一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

郷ヶ原遺跡

福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

郷ヶ原遺跡
ごうがはる

福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

郷ヶ原遺跡全景（東上空から）

2号溝状遺構出土鉢

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパスの建設に係る発掘調査を昭和62年度から実施し、平成６年度に現場作業を終了したところであります。引き続いて整理・報告書の作成を行い、この度最終となる第10冊目が刊行の運びとなりました。

ここに報告する郷ヶ原遺跡は、平成元年度に発掘調査を行い、多数の住居跡とともに環濠が発見されて注目された遺跡です。

発掘調査そして整理・報告にいたる間には、大平村教育委員会をはじめとして地元有志、そして実に多くの方々のご指導・ご協力を得ることができ、無事にすべてを終了することができました。深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が地域史解明の資料としてだけでなく、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも貢献できれば、望外の喜びとするところであります。

平成10年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安　常喜

例　言

1．　本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所の委託を受けて実施した、一般国道10号豊前バイパス建設に係る埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2．　本書には、平成元年度に発掘調査を実施した福岡県築上郡大平村大字上唐原・下唐原に所在する郷ヶ原遺跡の報告を収めた。

3．　出土遺物は福岡県立九州歴史資料館において、土器類を文化課岩瀬正信氏、金属器を同館横田義章氏が、それぞれ指導してその整理を行った。

4．　本書に使用した図面は、遺構を御屋敷千鶴子・村上京子・村上智文・井無田栄子・鷲見昌尚・平田由美・飛野が、遺物を秦憲二・安住美代子・江口幸子・岡由美子・坂田順子・田中典子・棚町陽子・久富美智子・藤原さとみ・堀江圭子・堀之内久美子・山本千鶴美・若松三枝子・飛野が作成し、製図を豊福弥生・原カヨ子の各氏が行った。

5．　本書に使用した写真は、遺構を飛野が、遺物については九州歴史資料館において、巻頭図版を同館石丸洋氏が、その他大部分については同氏の指導の下で北岡伸一氏がこれを行った。また、石皿・凹石・用途不明石製品等の大部分は文化課吉田東明氏が撮影した。
　なお、空中写真は（有）稲富に委託した。

6．　本書に使用した方位は、地形図・遺構配置図は基本的に座標北（G.N.）を使用した。

7．　本書の執筆・編集は飛野が行った。なお、赤色顔料の分析については、別府大学助教授本田光子氏の玉稿をいただいた。

本文目次

頁

Ⅰ　はじめに ……1

Ⅱ　位置と環境 ……7

Ⅲ　遺構と遺物 ……13
1．竪穴式住居跡 ……14
2．掘立柱建物跡 ……143
3．方（円）形周溝遺構 ……144
4．甕棺墓 ……161
5．溝状遺構 ……169
6．その他の遺構と遺物 ……232

Ⅳ　おわりに ……243

Ⅴ　自然科学的分析 ……256

図 版 目 次

巻頭図版１　遺跡全景（東上空から）

巻頭図版２　２号溝状遺構出土鉢

図版１　豊前バイパス周辺航空写真

図版２　上；調査区全景（南東上空から）　下；調査区全景（東上空から）

図版３　上；調査区東半（東上空から）　下；調査区西半（東上空から）

図版４　上；１号竪穴式住居跡（南東から）　下；３号竪穴式住居跡（南から）

図版５　上；４号竪穴式住居跡（北東から）　中；５号竪穴式住居跡遺物出土状態(北東から）
下；５号竪穴式住居跡（北西から）

図版６　上；６・７号住居跡（北から）　下；７号住居跡（西から）

図版７　上；６～10号竪穴式住居跡(南から）下左；９号竪穴式住居跡土坑付近（南西から）
下右；９号住居跡北隅付近土器出土状態（南から）

図版８　上；11号竪穴式住居跡（南東から）　下；14･17号竪穴式住居跡（東から）

図版９　上；14号竪穴式住居跡（東から）　下；15・16・34・35号竪穴式住居跡(南東から）

図版10　上；15号竪穴式住居跡（南東から）　下；同遺物出土状態（南東から）

図版11　上；16号竪穴式住居跡（南東から）　下；17号竪穴式住居跡（南東から）

図版12　上；18号竪穴式住居跡（北西から）　下；19号竪穴式住居跡（北西から）

図版13　19号竪穴式住居跡遺物出土状態

図版14　上；20号竪穴式住居跡（南東から）　下；同遺物出土状態（南から）

図版15　上；21号竪穴式住居跡（南東から）　下；同遺物出土状態（北から）

図版16　上；22号竪穴式住居跡（南東から）　下；同遺物出土状態（北西から）

図版17　上；23号竪穴式住居跡（北東から）　下；24号竪穴式住居跡（東から）

図版18　上；25号竪穴式住居跡（北から）・同遺物出土状態（同）
下；26号竪穴式住居跡（西から）

図版19　上；27号竪穴式住居跡（北東から）　下；29・30号竪穴式住居跡（東から）

図版20　上；31号竪穴式住居跡（北西から）　下；32号竪穴式住居跡（北から）

図版21　上；33号竪穴式住居跡（南東から）
下；34・35・41号竪穴式住居跡（北西から）・34号住居跡土坑（同）

図版22　34号住居跡遺物出土状態

図版23　上；36号竪穴式住居跡（北西から）　下；38号竪穴式住居跡（西から）

図版24　上；38号竪穴式住居跡遺物出土状態（西から）
　　中；同（同）　　下；同（同）
図版25　上；39号竪穴式住居跡（南東から）　下；40号竪穴式住居跡（南東から）
図版26　上；40号竪穴式住居跡遺物出土状態（北西から）
　　中；同（南から）　　下；同（南東から）
図版27　上；41号竪穴式住居跡（北西から）　下；同上層埋甕（北西から）
図版28　上；42号竪穴式住居跡（北東から）　下；43号竪穴式住居跡（北西から）
図版29　上；44号竪穴式住居跡（北西から）　下；45号竪穴式住居跡（西から）
図版30　上；46号竪穴式住居跡（北西から）　下；47号竪穴式住居跡（北西から）
図版31　上；48号竪穴式住居跡（北西から）　下；49号竪穴式住居跡（南西から）
図版32　上；50号竪穴式住居跡（南西から）　下；51・52号竪穴式住居跡（東から）
図版33　上；53号竪穴式住居跡（北西から）
　　下；54～56号竪穴式住居跡（南東から）・54号竪穴式住居跡遺物出土状態（東から）
図版34　上・下；56～59・68・69号竪穴式住居跡（西から）
図版35　上；58号竪穴式住居跡（西から）　下左；58号住居跡遺物出土状態（東から）
　　下右；68号竪穴式住居跡遺物出土状態（西から）
図版36　上；59号住居跡遺物出土状態(北から)　下；60号竪穴式住居跡（西から）
図版37　上；61号竪穴式住居跡（西から）　下；62号竪穴式住居跡（南東から）
図版38　上；63号竪穴式住居跡（東から）　下；64号竪穴式住居跡（西から）
図版39　上；64号竪穴式住居跡遺物出土状態（東から）
　　下；65号竪穴式住居跡（東から）
図版40　上；65号竪穴式住居跡遺物出土状態（東から）
　　下；66号竪穴式住居跡（南から）
図版41　上；67号竪穴式住居跡遺物出土状態　下；71号竪穴式住居跡北東土坑（北から）
図版42　1号甕棺墓（北東から）
図版43　2号甕棺墓（上；北西から、中；北東から、下；北西から）
図版44　上；3号甕棺墓（南西から）　　下；1号方形周溝（南東から）
図版45　1号方形周溝遺物出土状態(右上;東辺北、右下;北辺東、左上;西辺北、左下;北辺西)
図版46　上；2号方形周溝（西から）　　下；3号方形周溝（北西から）
図版47　2号方形周溝遺物出土状態(右上;西辺中央、右下;東辺中央、左上;北辺中央、左下;西辺中央)
図版48　上；3号方形周溝遺物出土状態（北西から）
　　下；4号方形周溝（西から）
図版49　4号方形周溝遺物出土状態(右上;東辺南、右下;北辺西、左上;北辺東、左下;南辺西)

図版50　上；４号方形周溝遺物出土状態（左；南西隅、右；北辺土層）
　　下；円形周溝（北から）
図版51　上；１号溝状遺構（北西から）　　下；同土層（北東から）
図版52　上；２号溝状遺構（南西から）　　下；同（西から）
図版53　上；２号溝状遺構Ⅰ区北畦土層（南から）下；２号溝状遺構Ⅱ区北畦土層（南西から）
図版54　２号溝状遺構遺物出土状態
図版55　２号溝状遺構遺物出土状態
図版56　２号溝状遺構遺物出土状態
図版57　２号溝状遺構遺物出土状態
図版58　上；調査区東端溝状遺構群（南東から）下；11号溝状遺構遺物出土状態（南東から）
図版59　上；縄文時代埋甕（北西から）　　下；42号竪穴式住居跡北方土器溜状遺構（北から）
図版60　上；調査区西半全景（東から）　　下；調査区西半全景（西から）
図版61　出土遺物１（住１・５）
図版62　出土遺物２（住５・７・８）
図版63　出土遺物３（住８・９・10）
図版64　出土遺物４（住10・11）
図版65　出土遺物５（住15）
図版66　出土遺物６（住15・16・17）
図版67　出土遺物７（住17・18・19）
図版68　出土遺物８（住19）
図版69　出土遺物９（住19）
図版70　出土遺物10（住19）
図版71　出土遺物11（住19）
図版72　出土遺物12（住19・20）
図版73　出土遺物13（住20・21）
図版74　出土遺物14（住21・22）
図版75　出土遺物15（住22）
図版76　出土遺物16（住22・24）
図版77　出土遺物17（住25・27）
図版78　出土遺物18（住28・30・31）
図版79　出土遺物19（住32・34）
図版80　出土遺物20（住34）
図版81　出土遺物21（住34）

図版82　出土遺物22（住34）
図版83　出土遺物23（住35・36・38）
図版84　出土遺物24（住38・39）
図版85　出土遺物25（住39・40）
図版86　出土遺物26（住40・41・42）
図版87　出土遺物27（住42・43）
図版88　出土遺物28（住44・45・46・47・49）
図版89　出土遺物29（住49・50・51・52）
図版90　出土遺物30（住52・53・54・58）
図版91　出土遺物31（住58・59・60・61）
図版92　出土遺物32（住61・62・63・64）
図版93　出土遺物33（住64・65）
図版94　出土遺物34（住65・66・67・68）
図版95　出土遺物35（住68・69）
図版96　出土遺物36（住69・71）
図版97　出土遺物37（住71・１号方形周溝）
図版98　出土遺物83（１号方形周溝・２号方形周溝）
図版99　出土遺物39（２号方形周溝・３号方形周溝）
図版100　出土遺物40（３号方形周溝）
図版101　出土遺物41（３号方形周溝）
図版102　出土遺物42（３号方形周溝・４号方形周溝）
図版103　出土遺物43（４号方形周溝）
図版104　出土遺物44（４号方形周溝・１号甕棺）
図版105　出土遺物45（２号甕棺）
図版106　出土遺物46（２号甕棺・３号甕棺）
図版107　出土遺物47（２号溝状遺構：ガラス製品・鉄製品・土器）
図版108　出土遺物48（２号溝状遺構：土器）
図版109　出土遺物49（２号溝状遺構：土器）
図版110　出土遺物50（２号溝状遺構：土器）
図版111　出土遺物51（２号溝状遺構：土器）
図版112　出土遺物52（２号溝状遺構：土器）
図版113　出土遺物53（２号溝状遺構：土器）
図版114　出土遺物54（２号溝状遺構：土器）

図版115　出土遺物55（２号溝状遺構：土器）
図版116　出土遺物56（２号溝状遺構：土器）
図版117　出土遺物57（２号溝状遺構：土器）
図版118　出土遺物58（２号溝状遺構：土器）
図版119　出土遺物59（２号溝状遺構：土器）
図版120　出土遺物60（２号溝状遺構：土器）
図版121　出土遺物61（２号溝状遺構：土器）
図版122　出土遺物62（２号溝状遺構：土器）
図版123　出土遺物63（２号溝状遺構：土器）
図版124　出土遺物64（２号溝状遺構：土器）
図版125　出土遺物65（２号溝状遺構：土器）
図版126　出土遺物66（２号溝状遺構：土器）
図版127　出土遺物67（２号溝状遺構：土器）
図版128　出土遺物68（２号溝状遺構：土器）
図版129　出土遺物69（２号溝状遺構：土器）
図版130　出土遺物70（２号溝状遺構：土器・石製品）
図版131　出土遺物71（２号溝状遺構：石製品）
図版132　出土遺物72（２号溝状遺構：石製品）
図版133　出土遺物73（２号溝状遺構：石製品）
図版134　出土遺物74（２号溝状遺構：石製品）
図版135　出土遺物75（２号溝状遺構：石製品）
図版136　出土遺物76（２号溝状遺構：石製品・11号溝状遺構）
図版137　出土遺物77（11号溝状遺構・13号溝状遺構）
図版138　出土遺物78（14号溝状遺構・１号時溜状遺構）
図版139　出土遺物79（埋甕・縄文土器）
図版140　出土遺物80（その他の遺物）

挿図目次

頁

第1図　豊前バイパス路線図（1/500,000、道路施設協会「九州自動車道」1997を改変）…2
第2図　豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡（1/20,000）……3
第3図　周辺遺跡分布図(1/50,000)　……6
第4図　1・3・4号竪穴式住居跡実測図（1/60）……14
第5図　1・3・4号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……15
第6図　5号竪穴式住居跡実測図（1/60）……16
第7図　5号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）……18
第8図　5号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4,2/3,1/1）……19
第9図　6号竪穴式住居跡実測図（1/60）……20
第10図　6・7号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……21
第11図　7号竪穴式住居跡実測図（1/60）……22
第12図　8号竪穴式住居跡実測図（1/60）……23
第13図　8号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……24
第14図　郷ヶ原遺跡出土鉄製品実測図（1/3）……25
第15図　9・10号竪穴式住居跡実測図（1/60）……26
第16図　9号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……27
第17図　10号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/6,1/3）……28
第18図　11号竪穴式住居跡実測図（1/60）……30
第19図　11号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）……30
第20図　12～14号竪穴式住居跡実測図（1/60）……32
第21図　14号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……33
第22図　15・16号竪穴式住居跡実測図（1/60）……34
第23図　15号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）……35
第24図　15号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/6,1/3）……36
第25図　16号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）……37
第26図　17号竪穴式住居跡実測図（1/60）……38
第27図　17号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……39
第28図　18号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……40
第29図　18号竪穴式住居跡実測図（1/60）……41
第30図　19号竪穴式住居跡実測図（1/60）…… 41

頁

第31図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……42
第32図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）……44
第33図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図３（1/4）……45
第34図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図４（1/4）……46
第35図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図５（1/4）……47
第36図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図６（1/4）……48
第37図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図７（1/4）……49
第38図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図８（1/4）……50
第39図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図９（1/4,1/3）……51
第40図　20号竪穴式住居跡実測図（1/60）……53
第41図　20号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……53
第42図　21号竪穴式住居跡実測図（1/60）……54
第43図　21号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……55
第44図　21号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/6,1/4,1/3）……56
第45図　22号竪穴式住居跡実測図（1/60）……58
第46図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……59
第47図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）……60
第48図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図３（1/6,1/4,1/3）……61
第49図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図４（1/4）……62
第50図　23・28号竪穴式住居跡実測図（1/60）……63
第51図　24号竪穴式住居跡実測図（1/60）……64
第52図　23・24号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……65
第53図　25・26号竪穴式住居跡実測図（1/60）……66
第54図　25・26号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……67
第55図　27・37号竪穴式住居跡実測図（1/60）……68
第56図　27号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……69
第57図　27号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）……70
第58図　28号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）……71
第59図　29・30号竪穴式住居跡実測図（1/60）……73
第60図　30号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……74
第61図　31号竪穴式住居跡実測図（1/60）……74
第62図　31号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……75

頁

第63図　32号竪穴式住居跡実測図（1/60）……75
第64図　32号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……76
第65図　32号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4,1/3）……77
第66図　33号竪穴式住居跡実測図（1/60）……78
第67図　34・35号竪穴式住居跡実測図（1/60）……79
第68図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……80
第69図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）……81
第70図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図３（1/6）……82
第71図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図４（1/4）……83
第72図　34・35号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……84
第73図　36号竪穴式住居跡実測図（1/60）……85
第74図　36号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図（1/4）……86
第75図　38・39号竪穴式住居跡実測図（1/60）……87
第76図　38号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……88
第77図　38号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/6）……89
第78図　39号竪穴式住居跡実測図（1/60）……90
第79図　39号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……91
第80図　40号竪穴式住居跡実測図（1/60）……92
第81図　40号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/6）……93
第82図　41号竪穴式住居跡実測図（1/60）……94
第83図　41号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……95
第84図　42号竪穴式住居跡実測図（1/60）……96
第85図　42号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……97
第86図　43号竪穴式住居跡実測図（1/60）……98
第87図　43号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……99
第88図　44号竪穴式住居跡実測図（1/60）……100
第89図　44号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……101
第90図　45・46号竪穴式住居跡実測図（1/60）……102
第91図　45号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/6）……103
第92図　46号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……104
第93図　47号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……105
第94図　47・48号竪穴式住居跡実測図（1/60）……106

頁

第95図　49号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……106
第96図　49・50号竪穴式住居跡実測図（1/60）……107
第97図　50号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……108
第98図　51・52号竪穴式住居跡実測図（1/60）……109
第99図　51号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,2/3）……110
第100図　52号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……111
第101図　53号竪穴式住居跡実測図（1/60）……112
第102図　53号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）……113
第103図　53号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4,2/3,1/3）……114
第104図　54・55号竪穴式住居跡実測図（1/60）……115
第105図　54号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……115
第106図　56～58号竪穴式住居跡実測図（1/60）……117
第107図　58号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）……118
第108図　58号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）……119
第109図　59号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……121
第110図　60号竪穴式住居跡実測図（1/60）……122
第111図　60号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……122
第112図　61号竪穴式住居跡実測図（1/60）……123
第113図　61号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……123
第114図　62号竪穴式住居跡実測図（1/60）……124
第115図　62号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……125
第116図　63号竪穴式住居跡実測図（1/60）……126
第117図　63号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……126
第118図　64号竪穴式住居跡実測図（1/60）……127
第119図　64号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……128
第120図　65号竪穴式住居跡実測図（1/60）……129
第121図　65号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4,1/6）……130
第122図　65号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）……131
第123図　66号竪穴式住居跡実測図（1/60）……132
第124図　66号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……132
第125図　67号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）……133
第126図　68号竪穴式住居跡実測図（1/60）……134

頁
第127図　68号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）……135
第128図　68号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）……136
第129図　69号竪穴式住居跡実測図（1/60）……137
第130図　69号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）……138
第131図　71号竪穴式住居跡実測図（1/60）……139
第132図　71号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図１（1/6）……140
第133図　71号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図２（1/4,1/3）……141
第134図　掘立柱建物跡実測図（1/80）……143
第135図　掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/4）……144
第136図　１号方形周溝遺構実測図（1/80）……144
第137図　１号方形周溝出土遺物実測図１（1/4）……145
第138図　１号方形周溝出土遺物実測図２（1/4）……146
第139図　２号方形周溝実測図（1/80）……147
第140図　２号方形周溝出土遺物実測図１（1/4）……148
第141図　２号方形周溝出土遺物実測図２（1/4）……149
第142図　３号方形周溝実測図（1/80）……151
第143図　３号方形周溝出土遺物実測図１（1/4）……152
第144図　３号方形周溝出土遺物実測図２（1/4）……153
第145図　３号方形周溝出土遺物実測図３（1/4）……154
第146図　３号方形周溝出土遺物実測図４（1/4）……155
第147図　３号方形周溝出土遺物実測図５（1/4）……156
第148図　４号方形周溝実測図（1/80）……折込
第149図　４号方形周溝出土遺物実測図１（1/4）……157
第150図　４号方形周溝出土遺物実測図２（1/4,1/3）……158
第151図　５号方形周溝実測図（1/80）……159
第152図　５号方形周溝出土遺物実測図（1/4）……160
第153図　円形周溝実測図（1/80）……160
第154図　１号甕棺墓実測図（1/20）……161
第155図　１号甕棺実測図（1/6）……162
第156図　２号甕棺墓実測図（1/20）……163
第157図　２号甕棺実測図１（1/4）……164
第158図　２号甕棺実測図２（1/4）……165

頁

第159図　2号甕棺実測図3（1/4）……166
第160図　3号甕棺墓実測図（1/20）……167
第161図　3号甕棺実測図（1/20）……168
第162図　溝状遺構土層図（1/80）……169
第163図　1・4号溝状遺構出土遺物実測図（1/4,1/3）……170
第164図　2号溝状遺構出土遺物実測図1（Ⅰ区上層1）(1/4)……172
第165図　2号溝状遺構出土遺物実測図2（Ⅰ区上層2）(1/4)……173
第166図　2号溝状遺構出土遺物実測図3（Ⅰ区中層）(1/4)……174
第167図　2号溝状遺構出土遺物実測図4（Ⅰ区下層1）(1/4)……176
第168図　2号溝状遺構出土遺物実測図5（Ⅰ区下層2）(1/4)……177
第169図　2号溝状遺構出土遺物実測図6（Ⅰ区下層3、Ⅱ区上層）(1/4)……178
第170図　2号溝状遺構出土遺物実測図7（Ⅱ区中層1）(1/4)……180
第171図　2号溝状遺構出土遺物実測図8（Ⅱ区中2・下層1）(1/4)……182
第172図　2号溝状遺構出土遺物実測図9（Ⅱ区下層2）(1/4)……183
第173図　2号溝状遺構出土遺物実測図10（Ⅱ区下層3）(1/4)……184
第174図　2号溝状遺構出土遺物実測図11（Ⅱ区下層4、Ⅲ区上層1）(1/4)……185
第175図　2号溝状遺構出土遺物実測図12（Ⅲ区上層2）(1/4)……186
第176図　2号溝状遺構出土遺物実測図13（Ⅲ区上層3）(1/4)……188
第177図　2号溝状遺構出土遺物実測図14（Ⅲ区上層4）(1/4)……189
第178図　2号溝状遺構出土遺物実測図15（Ⅲ区上層5）(1/4)……190
第179図　2号溝状遺構出土遺物実測図16（Ⅲ区上層6）(1/4)……191
第180図　2号溝状遺構出土遺物実測図17（Ⅲ区中層1）(1/4)……192
第181図　2号溝状遺構出土遺物実測図18（Ⅲ区中層2）(1/4)……194
第182図　2号溝状遺構出土遺物実測図19（Ⅲ区中層3）(1/4)……195
第183図　2号溝状遺構出土遺物実測図20（Ⅲ区下層）(1/4)……196
第184図　2号溝状遺構出土遺物実測図21（Ⅳ区上層1）(1/4)……197
第185図　2号溝状遺構出土遺物実測図22（Ⅳ区上層2）(1/4)……198
第186図　2号溝状遺構出土遺物実測図23（Ⅳ区上層3）(1/4)……199
第187図　2号溝状遺構出土遺物実測図24（Ⅳ区上層4）(1/4)……200
第188図　2号溝状遺構出土遺物実測図25（Ⅳ区上層5）(1/4)……201
第189図　2号溝状遺構出土遺物実測図26（Ⅳ区上層6）(1/4)……202
第190図　2号溝状遺構出土遺物実測図27（Ⅳ区中層1）(1/4)……204

頁

第191図　2号溝状遺構出土遺物実測図28（Ⅳ区中層2・Ⅴ区上層・その他の土器1）(1/4)…205
第192図　2号溝状遺構出土遺物実測図29（その他の土器2）(1/4) ……206
第193図　2号溝状遺構出土遺物実測図30（その他の土器3）(1/6) ……208
第194図　2号溝状遺構出土遺物実測図31（その他の土器4）(1/6) ……209
第195図　2号溝状遺構出土遺物実測図32（その他の土器5）(1/6) ……210
第196図　2号溝状遺構出土遺物実測図33（その他の土器6）(1/4) ……211
第197図　2号溝状遺構出土遺物実測図34（その他の土器7）(1/4) ……212
第198図　2号溝状遺構出土遺物実測図35（ガラス製品・石製品1）(2/3、1/3) ……214
第199図　2号溝状遺構出土遺物実測図36（石製品2）(1/3) ……215
第200図　2号溝状遺構出土遺物実測図37（石製品3）(1/4) ……216
第201図　2号溝状遺構出土遺物実測図38（石製品4）(1/4) ……217
第202図　2号溝状遺構出土遺物実測図39（石製品5）(1/4) ……218
第203図　2号溝状遺構出土遺物実測図40（石製品6）(1/4) ……219
第204図　2号溝状遺構出土遺物実測図41（石製品7）(1/4) ……220
第205図　2号溝状遺構出土遺物実測図42（石製品8）(1/4) ……221
第206図　2号溝状遺構出土遺物実測図43（石製品9）(1/4) ……222
第207図　2号溝状遺構出土遺物実測図44（石製品10）(1/4) ……223
第208図　2号溝状遺構出土遺物実測図45（石製品11）(1/4) ……224
第209図　11号溝状遺構出土遺物実測図 (1/4) ……226
第210図　11号溝状遺構ほか出土遺物実測図 (1/3) ……228
第211図　13・14号溝状遺構出土遺物実測図 (1/4) ……230
第212図　埋甕等検出状態実測図 (1/20) ……232
第213図　埋甕等実測図 (1/4) ……233
第214図　土器溜状遺構出土遺物実測図1 (1/4) ……234
第215図　土器溜状遺構出土遺物実測図2 (1/4,1/3) ……235
第216図　縄文土器実測図1 (1/3) ……236
第217図　縄文土器実測図2 (1/3) ……238
第218図　縄文土器実測図3 (1/3) ……240
第219図　表採その他の出土遺物 (1/4,2/3,1/3) ……241
第220図　高杯変遷図1 (1/12) ……242
第221図　高杯変遷図2 (1/12) ……244
第222図　2号溝状遺構出土その他の土器1 (1/12)……246

頁
第223図　2号溝状遺構出土その他の土器2（1/12）……247
第224図　2号溝状遺構を中心とした遺構の先後関係(1/800）……251
第225図　郷ヶ原遺跡遺構配置図(1/400）……折込
第226図　郷ヶ原遺跡・上唐原遺跡周辺地形図(1/2,000）……折込

表　目　次

頁
第1表　一般国道10号　豊前バイパス関係遺跡一覧表 …… 5

調査前の郷ヶ原遺跡　（西、金居塚遺跡から望む）

Ⅰ　はじめに

1　はじめに

一般国道10号は、福岡県北九州市から鹿児島県鹿児島市へ続く全長約450㎞の道路で、東九州の主要都市を南北に貫く動脈である。しかし、その多くの部分で山岳地が海岸に迫り出すため、代替となる道路が乏しい。中でも北九州・大分両市の間は、大企業の進出・ベッドタウン化の進行が顕著となりつつあるが、やはり地形的な制約などから、交通対策が遅れており、地域の発展・活性化のためにも早急な改善が迫られていた。

そうした情勢の中で北大道路（北九州市～大分市；全長125.1㎞）が計画・着手された。

それに伴う埋蔵文化財の調査は、北九州市域を同市教育委員会が、京都郡苅田町から大分県境となる築上郡大平村の間を県教育委員会が担当することとなった。県教育委員会が担当する総延長は約38.4㎞であるが、そのうちの苅田町部分は現道拡幅であり、豊前市内の大部分はすでに供用されている主要地方道豊前万田線を利用する計画で、本格的な埋蔵文化財の調査は行っていない。また、新設区間も、京都郡豊津町徳永の主要地方道椎田勝山線交差点から築上郡椎田町上の河内間は日本道路公団が、その他の部分を建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所が建設・管理することとなり、県文化課内部でも調査担当が異なる。

福岡県教育委員会では、昭和60年（1985）年度、苅田町大字与原に所在する九州でも屈指の規模の前方後円墳であり、国指定史跡でもある御所山古墳に接する地点の工事立会調査から開始、翌61（86）年度、築上郡椎田町石堂中後ヶ谷古墳群より本格的な発掘調査に着手した。続いて62年度に大平村上唐原で一部の調査を行って後は豊前市以西で優先的に調査を実施した。豊津町内では町教育委員会の全面的な協力を得て、調査報告書を刊行した地点もある。

平成３年度からは豊前バイパス(築上郡新吉富村～大平村)を残すのみとなったが、それも６年度にすべて終了、７年３月に福岡県内の10号バイパスはすべての改良工事を終え、開通した。

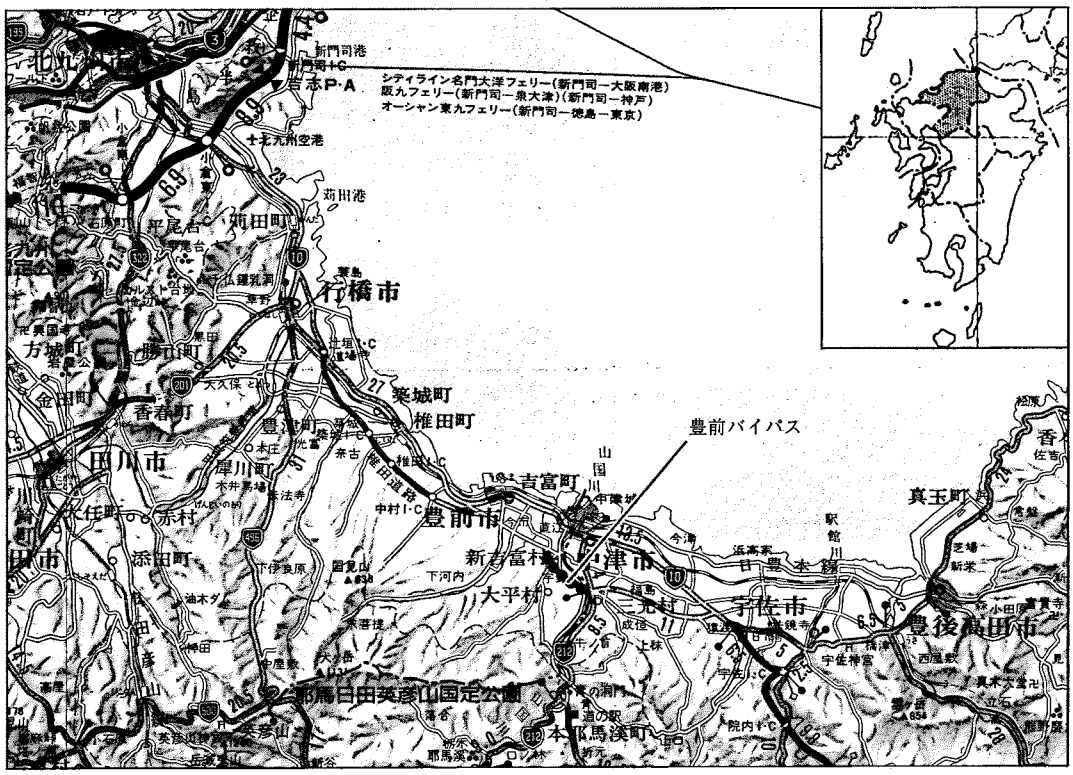
一方、福岡県文化課では10号バイパス関係の調査報告書の作製を調査中から実施してきたが、それも本年度の豊前バイパス関係の３冊をもってすべてが終了する。

この10号バイパスの調査は、それまで開発が低調であったがために人知れず埋もれていた各種の遺跡を目覚めさせることとなり、記録保存と引き替えに多くの遺跡を失ったが、反面、地域の人々の文化財・郷土の歴史に対する意識を大いに高めた。なお、豊津町川の上遺跡・新吉富村池ノ口遺跡では遺跡そのものは消失したものの、モニュメント・案内板等が設置された。

2　調査の組織と関係者

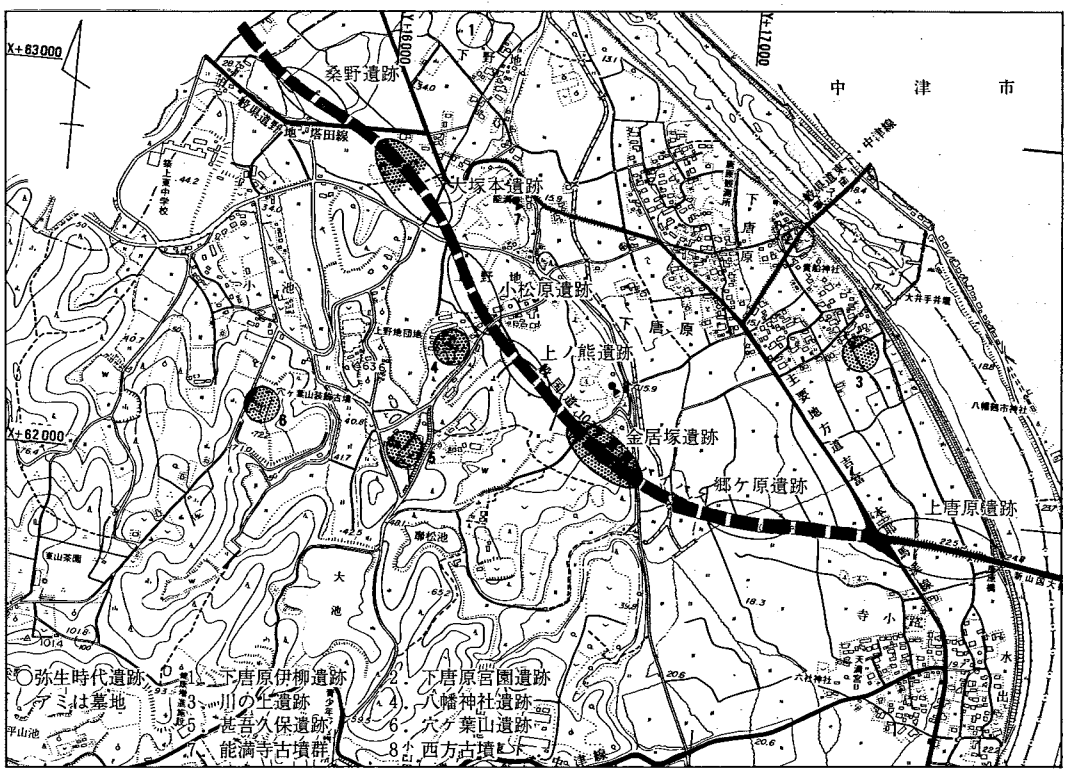
発掘調査を実施した平成元年度、および本報告書を作成した９年度の関係者は以下の通り。

	元年度	９年度
建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所		
所　　長	高橋　松男	徳永　和幸
副 所 長	久谷　秀明	高崎　寿男
建設監督官	中川　博勝	中野　道男
工務課長	衛藤　恒利	田中　常美
同係長	諏訪　憲二	總崎　祐二
調査課長	久良木　裕	田中　敏則
同係長	田中　敏則	桜井　敏郎
調査係主任		田邊　　稔
建設技官	井上　敏彦	大川　雄一郎



第１図　豊前バイパス路線図（1/500,000、道路施設協会「九州自動車道」1997を改変）

	元年度	9年度
福岡県教育委員会		
総　括		
教　育　長	御手洗　康	光安　常喜
教育次長	渕上　雄幸	松枝　　功
指導第二部長	月森清三郎	竹若　幸二
文化課長	六本木聖久	石松　好雄
参　　事	森本　精造	柳田　康雄（兼文化財保護室長）
課長補佐	平　　聖峰	城戸　秀明
課長技術補佐	宮小路賀宏	井上　裕弘（兼文化財保護室長補佐）
参事補佐	柳田　康雄（調査班総括）	橋口　達也（調査班総括）
	井上　裕弘	木下　　修
		中間　研志
		新原　正典
庶　務		
管理係長	池原　脩二	黒田　一治
事務主査	和田　健作	鶴我　哲夫



第2図　豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡（1/20,000）

調 査 担 当

主 任 技 師	飛野　博文	飛野　博文（北筑後教育事務所技術主査）

平成９年度整理関係者

整理担当	文化課参事補佐		中間　研志	
	同　主任技師		秦　　憲二	
整理指導員	岩瀬　正信（接合復原）		平田　春美（土器実測）	
	北岡　伸一（写真撮影）		豊福　弥生（製図）	
整理作業員	原　カヨ子	関　　久江	土山真弓美	岡　由美子
	田中　典子	堀江　圭子	棚町　陽子	久富美智子
	坂田　順子	藤原さとみ	江口　幸子	堀之内久美子
	山本千鶴美	辻　　清子	山田　智子	安住　美代子
	安永　啓子	若松三枝子		

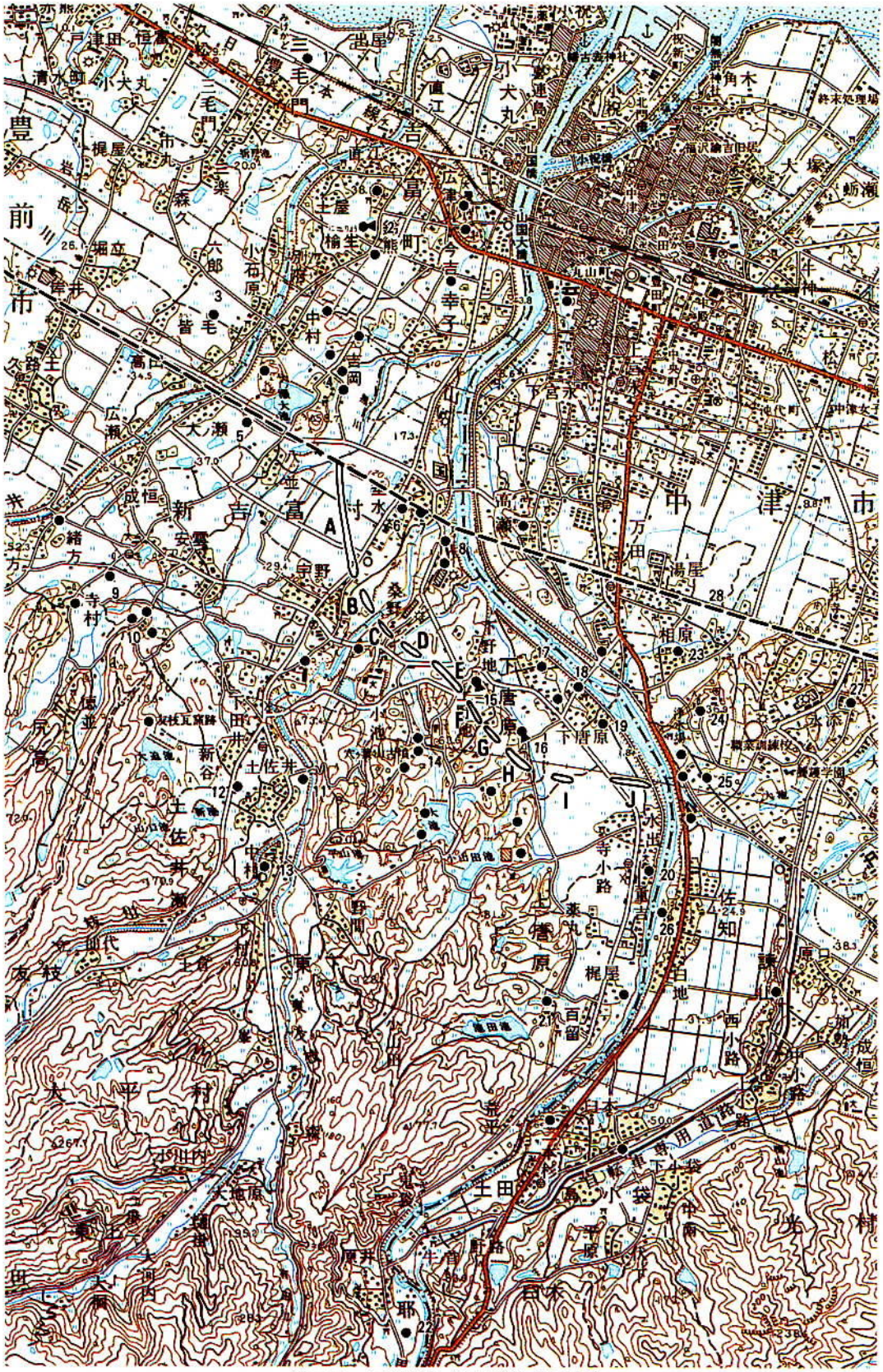
この郷ヶ原遺跡の発掘調査は、平成元年４月11日から重機による表土剥ぎを開始し、同14日より作業員を投入した。調査開始当初は好天に恵まれたものの、地山が砂質のために白くなり、散水しながらの調査であった。６月上旬、黄色く熟れた麦の刈り取りが終了するとともにあわただしく田植えの準備が始まった。調査区を斜めに横切る水路に放流、周囲の水田に水が満たされるとともに、水路からの漏水と地山の土質のために調査区内も水で溢れることとなった。以後は連日水の汲み上げ作業が続き、空撮前には調査区内でトンボを使用しての代かきすら行う羽目となったが、9月13日に器材を撤収してすべての作業を終えた。

また、調査・報告書作製中には多くの方々のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

福岡県文化財保護指導委員宮本工・濱島三司・川本義継（現豊津町教育長）・一川淳江、福岡県立求菩提資料館長重松敏美（当時）、福岡県教育庁京築教育事務所生涯学習課、同北筑後教育事務所生涯学習課、高橋章（現北九州教育事務所）、吉永真砂子、木村康子、横山康子、中原三枝子、大平村教育委員会、同藤井較一氏、大分県教育委員会坂本嘉弘、大分県中津市教育委員会栗焼憲児（現福岡県豊前市教育委員会）、平田（旧姓植田）由美（大分県三光村教育委員会）、鷲見昌尚（現佐賀県三田川町教育委員会）、大平村・豊前市・椎田町の方々。

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積(㎡)	調査面積(㎡)								報告書
					62年度	63	平成元	2	3	4	5	6	
1-A	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落	40,000							3,500	2,000	3
1-B		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落							4,000	1,800		3
1-C		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落							3,200			3
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安 集落							3,500			6
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落								5,000	1,900	6
1-F	大池添・ウツケ畑遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落								4,000	500	6
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落							3,000		500	6
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落・墓地他						2,000	5,000			1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落・墓地	4,000					700	3,000			8
2-B		新吉富村垂水	近世	1,600					1,600				8
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800					4,800				6
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000					16,000				9
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200					10,000				6
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器 集落地	4,500					4,500				6
7	金居塚遺跡 (旧カネツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	14,000				13,000					4・7
8-A	上唐原遺跡	大平村上唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	20,000							2・5
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生～古墳 集落	6,500			6,500						10
計				120,600	10,000	20,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900	

表1　一般国道10号　豊前バイパス関係遺跡一覧表



第３図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

1.三毛門放生田遺跡　2.檜生山古墳　3.小石原泉遺跡　4.巨石塚古墳　5.大瀬下大坪遺跡　6.垂水廃寺　7.垂水縄文遺跡　8.牛頭天王(中桑野)遺跡　9.尻高畑田遺跡　10.照日・山田窯跡群　11.土佐井遺跡　12.土佐井ミソンデ遺跡　13.今蔵遺跡　14.穴ケ葉山古墳　15.能満寺古墳群　16.西方古墳　17.川下遺跡　18.下唐原宮園遺跡　19.川の上遺跡　20.上唐原稲本屋敷遺跡　21.百留横穴墓群　22.原井三ツ江遺跡　23.相原廃寺　24.永添遺跡　25.上ノ原横穴墓群・塔助野地遺跡・幣旗邸古墳群　26.佐知遺跡　27.長者屋敷遺跡　28.古代官道推定線　A.垂水地区遺跡群　B.宇野代遺跡　C.上桑野遺跡　D.桑野遺跡　E.大塚本遺跡　F.小松原遺跡　G.上ノ能遺跡　H.金居塚遺跡　I.郷ケ原遺跡　J.上唐原遺跡

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

ここに報告する郷ヶ原遺跡は、福岡県の最東部、大分県と接する築上郡大平村大字上唐原および下唐原にまたがって位置する。

大平村は人口4,400人ほどの農村で、南部は英彦山（標高1,200m）から派生した雁股山・大平山などの山岳で大分県下毛郡と接し、特に西部（西友枝地区）では深い谷が入り込む。東は一級河川山国川を挟んで、大分県中津市・下毛郡と接するが、歴史的・地理的理由から経済圏はほぼ中津市に収斂される。北にかけては築上郡新吉富村・豊前市と接し、遠浅の豊前海まではなだらかな地形が続く。

遺跡周辺の地形は、先の山国川水系に大きく影響される。すなわち、大平村梶屋から下唐原地区にかけては山国川の自然堤防・沖積地が発達し、その背面（西側）に比高20mほどの低位段丘（中津面）が発達する。さらに西側の低丘陵を友枝川が開析し、左岸に小規模な沖積地と低位段丘（垂水面）を形成しつつ、山国川に合流する。この垂水面が発達する地域（新吉富村大字垂水・宇野など）には条里遺構が良好に遺存しているといわれていたが、ここ数年の大規模圃場整備事業によって大きく変貌した。垂水面の西端にやはり山国川に流入する黒川という小河川があり、そこでも左岸に標高5～10mの段丘（安雲面）を形成し、その西北側は、現在豊前市と新吉富村を画す二級河川佐井川まで続く。これらの低位段丘は中津面が7.5万年以前、下末吉期（6～13万年前）に形成され、以後、安雲面、垂水面の順に形成されたと考えられている[註1]。

郷ヶ原遺跡は山国川左岸の沖積地にあるが、この周辺には明らかにそれと見て取れる旧河道が数本入っており、本遺跡はその流路間の微高地上にある。遺跡の地山は細砂が硬化・安定したものであるが、旧流路部分は砂礫層あるいは青灰色粘土層となっていて、居住地選択に対する先人の知恵を強く感じる。

2　歴史的環境

県下でもこの地域は開発が遅れていたために資料が乏しく、考古学的に取り上げられることもあまりなかったが、ここ数年の北大道路新設・大規模圃場整備事業や各種公共事業に伴う発掘調査の急増によって新たな知見が続いている。

さて、大平村は昭和30年に唐原村・友枝村が合併して発足したもので、村名は南になだらかな山容を見せる標高611mの大平山に由来する。また、築上郡は明治29年に築城、上毛両郡が

合併したものである。郷ケ原遺跡の所在する旧唐原村は旧上毛郡に属する。以下で、旧上毛郡を中心に考古学的な知見を記す。

縄文時代以前

この周辺では旧石器時代の遺跡と呼べるものはまだ未確認であるが、遺物は散見する。量的にかなりまとまった遺跡として豊前市青畑向原遺跡[註2]がある。圃場整備事業に伴う事前調査で発見され、黒曜石製・水晶製ナイフ形石器、安山岩製剥片尖頭器などが出土した。他には豊前バイパスに関わる段丘上の大平村桑野遺跡・上の熊遺跡・金居塚遺跡[註3]などの調査で、遺構に伴わない状態でナイフ形石器、剥片尖頭器等が採集されている。

縄文時代の遺跡は特に後期に属する集落跡の発見が相次いでいる。山国川左岸の大平村原井三ツ江遺跡[註4]、同上唐原遺跡[註5]、左岸の大分県三光村佐知遺跡[註6]、友枝川左岸の大平村土佐井遺跡[註7]、同新吉富村垂水遺跡[註8]、佐井川左岸の豊前市狭間宮ノ下遺跡[註9]、小石原泉遺跡[註10]、中川左岸の河内楠木遺跡[註11]等が旧上毛郡域に属する。いずれも大小の河川に接する段丘上に営まれた集落跡で、同様な立地を見せる遺跡は豊前市角田川左岸の中村石丸遺跡[註12]、築上郡椎田町山崎[註13]・石町遺跡[註14]、同郡築城町松丸遺跡[註15]、京都郡豊津町節丸西遺跡[註16]など、周防灘沿岸に広く共通する様相である。

後期以前の遺跡も若干知られている。豊前市吉木遺跡[註17]は、標高12mほどの低丘陵の東側縁部に位置する。ここでは明確な遺構を確認できなかったが、押型文土器などがかなりまとまって出土しており、生活の場であったことが想定されている。また、周辺の調査でも同じ頃の土器・石器が出土し、遺跡の広がりが確認されている。椎田町小原岩陰遺跡[註18]は当地で調査されたはじめての洞窟遺跡である。トレンチ調査で、前期と考えられる埋葬人骨や、早期、前期、後・晩期などの数枚の文化層が確認されている。この岩陰遺跡は小河川である真如寺川に浸食されたとされ、間口82m、高さ18m、奥行き6mの大規模なものである。その他、遺物は各地で採集されている。

晩期の遺跡も調査例が乏しいが、山国川左岸の自然堤防上の大平村下唐原川下遺跡[註19]で晩期中頃ないし若干下降する時期とされる採集資料が紹介されている。

弥生時代

山国川流域の弥生時代の遺跡は、弥生時代前期後半でも末葉に近い時期の遺跡が中流域の段丘上・自然堤防上などで確認されている。代表的な遺跡は段丘上の新吉富村牛頭天王（中桑野）遺跡[註20]で、ここでは中期前半までに巨大な掘立柱建物跡を営み、中期後半頃には環濠を備えるなど、拠点的な集落とみて間違いない。豊前バイパス路線内で発見した大型の方形周溝墓（墳丘墓）を含む墓地である大塚本遺跡[註21]や、桑野遺跡[註22]・上桑野遺跡[註23]なども牛頭天王遺跡を中心に形成された遺跡と考えられる。その他には、大平村上唐原・下唐原、三光村佐知の山国川両岸の自

然堤防上、新吉富村垂水の友枝川左岸段丘上で前期末から中期にかけての遺物が出土しているが、調査面積が狭小で、遺跡の広がりや性格を把握するにいたっていない。

旧上毛郡域で最も古式の弥生土器は、豊前市赤熊の昭和町遺跡[註24]から出土したという壺棺であるが、これは偶然の発見であって遺跡の内容ははっきりしない。しかし、位置的には海岸に近い砂丘上にあることから伝播ルートが推測できる。

牛頭天王遺跡周辺を除くと中期の遺跡はまだ調査例が少ない。中で、下唐原宮園遺跡[註25]でまとまった土器が出土した。佐井川左岸で平成８年度に実施された豊前市河原田塔田遺跡では、箱式石棺・土壙墓群から各種の玉類や細型銅戈片が出土し、中期前半の有力集団の墓所と推定された。同地区では破壊・集積された中期後半の丹塗土器や当地域で初出の大型器台片も出土し、長期にわたる集落の存在が推測されている。また、周辺地域では該期の集落も調査された。

後期でも後半の遺跡は、ここに報告する郷ヶ原遺跡や近接する上唐原遺跡、大分県三光村佐知遺跡などが自然堤防・微高地上で発見された。友枝川左岸から黒川にかけての新吉富村宇野・垂水地区でも圃場整備事業等に伴って100軒以上の該期の住居跡が確認されていて、ここにもいくつかの集落が並立していたようである[註26]。佐井川左岸の段丘上の小石原泉遺跡[註28]などにも濃密に分布していた。しかし、郷ヶ原遺跡のように明らかな濠を伴うものは未見である。

弥生時代の墓地としては先の大塚本遺跡が中期に遡る集団墓として重要である。開墾のために残存状況はよくないが、周辺で列状配置をとる土壙墓群も検出された。後期の墓地は調査されたものとして大平村穴ヶ葉山遺跡[註28]、そして金居塚遺跡[註29]があるが、他にも各所で石蓋土壙墓が発見されている。穴ヶ葉山遺跡では、二次にわたる調査で密集する80余基の石蓋土壙墓、２基の土壙墓が検出され、舶載内行花文鏡片１点、素環頭を含む刀子や鉄鏃、鉇等39点の鉄製品などの豊富な副葬遺物を有していた。構造的にも、大部分が削出しの枕を付設し、ベンガラを多用するなど、優位にある集団を想定できた。

青銅器としては、古く大平村東下で出土したという中広銅矛１点の他は、先の穴ヶ葉山遺跡・小石原泉遺跡の鏡片、金居塚遺跡・佐知遺跡出土の細型銅剣片、河原田塔田遺跡の細型銅戈片・鬼木西反田遺跡の古式小型仿製鏡・銅鉇片などが知られる。

古墳時代

従来、広く築上郡内で前・中期の古墳あるいは前方後円墳は全く知られていなかったが、平成２年に西方古墳[註29]（前方後円墳）、次いで同５年にはその北500ｍの段丘肩で偶然に能満寺古墳群[註30]が発見・調査された。能満寺古墳群は１号墳（円墳、木棺）、２号墳（方墳、石蓋土壙墓）、３号墳（前方後円墳、竪穴式石室？）が調査され、２号墳から完形のいわゆる弥生時代小型仿製鏡・鉄剣・玉が、３号墳から舶載夔鳳鏡片・同四獣鏡が出土するなど、内容的にも特筆されるものである。これらに次ぐ５世紀を前後する遺跡として、山国川右岸の段丘縁に勘助野地遺[註11]

跡や幣旗邸古墳群[註32]などの方墳があり、5世紀中葉頃には永添遺跡[註33]の造出しを有する円墳が続く。山国川左岸では5世紀代の有力な古墳は、中葉前後の前方後円墳と推定される楡生山古墳[註34]以外にまだ未発見であるが、後期には再び下唐原地区の段丘肩付近に大型古墳が占地する。金居塚古墳群[註35]や穴ヶ葉山古墳[註36]などである。穴ヶ葉山古墳は葉・鳥などの線刻を有する国指定史跡の円墳であり、近年環境整備に先立つ調査が実施されて、多量の土器が出土し、大規模な墳丘の様子が明らかとなった。これ以外にも、旧上毛郡西端の豊前市黒部古墳群[註37]、新吉富村山田古墳[註38]などの線刻壁画古墳が知られる。また、横穴としては豊前市平原横穴墓群[註39]や大平村百留横穴墓群[註40]が、凝灰岩に彫り込まれた精美な姿を有して知られる。また、学史的にも重要な遺跡となった大分県三光村上ノ原横穴墓群[註41]は、山国川を挟んで金居塚遺跡横穴群とちょうど対峙する位置にあり、段丘の法面に掘り込むという同様なあり方をしている。

古墳時代の集落は、前期に属するものは弥生後期以来の集落と連続性がある。中期に属するものはまだ例が乏しく、新吉富村宇野・垂水地区で発見されるのみである[註42]。後期の集落は、上唐原遺跡[註43]・佐知遺跡・小石原泉遺跡等前代以来の場所に占地する例や、豊前市荒堀中ノ原遺跡[註44]のように内陸部の低丘陵上に位置するものなどがある。豊前市域の低丘陵は開墾が進んで遺跡の遺存が悪いため、特異な状況を示すものか、まだ今後の資料の蓄積が必要である。また、新吉富村大ノ瀬下大坪遺跡では6・7世紀代の大集落が発見されている[註45]。調査が郡衙推定地の確認調査であるために該期集落の発掘を行っていないが、近くに独立して所在する吉岡巨石塚古墳[註46]の存在とも併せ、後代の繁栄の先駆けとなるものであろう。

生産遺跡としては新吉富村山田[註47]・照日窯跡群[註48]が6世紀中葉頃から須恵器生産を開始し、やがて瓦生産へと移行する。

歴史時代

『和名抄』ではこの地域を「上毛（加牟津美介）郡」と記した。また、『釋日本紀』巻十三には筑紫君磐井の最後について『筑後国風土記』をひき、「豊前国上膳縣」との記述がある。同時代の記銘としては、文武天皇2（698）年に鋳造された筑前観世音寺梵鐘の口縁下端に「上三毛」の線刻が、また、大宝2（702）年戸籍断簡に「豊前国上三毛郡塔里」、同「加目久也里」とあり、上膳から上三毛、そして上毛へと転訛したことが窺える。先の戸籍などから秦氏が広く豊前地方に進出していたことが指摘されているが、考古学的にそれを傍証する資料は乏しい。中で注目されているのは古代寺院に使用された瓦である。豊前では旧京都・仲津・上毛・下毛・宇佐の各郡で古代寺院の存在が確認されているが、屋瓦は大宰府系と呼ばれるものの他に高句麗系・新羅系・百済系といった多様なものが出土し、渡来系工人の活躍を想定できる。

上毛郡では新吉富村垂水廃寺[註49]が古くから知られ、確認調査もなされたが、伽藍配置や規模などはまだ判然としていない。推定寺域の南に隣接する小学校講堂改築に際して行った垂水高木

遺跡の発掘調査では真北に近い方位をとる掘立柱建物跡や、垂水廃寺に使用された軒瓦を利用した小規模な竪穴式住居など[註50]が、次いで同寺域内の果樹移植に先立って行った調査では方位を異にする溝・掘立柱建物跡が瓦を伴って発見された。少なくとも方位（北）に近い遺構と、条里方向（官道に規定されたようである）にのる遺構とがあり、今後の調査が期待される。

瓦を供給した窯跡は、大平村に所在する国指定史跡友枝瓦窯跡[註51]、新吉富村桑野窯跡[註52]・同山田窯跡[註53]などが知られ、一部は調査を実施している。また、牛頭天王遺跡にはかって礎石列が存在したといい、須恵器と同様な製作手法などを有する特異な瓦が採集されており、古代の重要な遺跡が存在した可能性が高い。この瓦は、中津市伊藤田窯跡群から供給されたといい、6世紀末から7世紀初頭を下らない時期に比定される[註54]。

また、平成6年には従来から推定されていた付近で古代官道と思われる遺構が確認[註55]され、7・8年には新吉富村大字大ノ瀬の段丘上で、官道推定線に隣接して郡衙と思われる遺跡が発見された[註56]。中央付近に一辺60m前後の柵列で囲繞された政庁域と、その四周一辺150～160mの範囲を柵・溝で囲み、多くの建物跡が配置されている。郡衙政庁の調査としては画期的なものとなった。ちなみに、この上毛郡衙の郡倉は未発見であるが、大分県中津市長者屋敷遺跡では下毛郡衙の郡倉が発見された[註57]。いずれにしても、郡衙・廃寺の存在からして、現新吉富村北部が旧上毛郡における古代の政治・文化の中心的役割をになっていたことは間違いない。

古代末期以来、豊前一円に宇佐八幡宮の荘園が成立する。また、鎌倉時代には関東下り衆宇都宮氏が仲津郡木井郷（現京都郡犀川町木井馬場）に入り、やがて豊前一帯に一族を配することとなる。それと前後する中世居館跡の発見・調査も近年相次いでいる[註58]。中でも、大平村庁舎改築工事で発見された「林崎城」と伝承される遺跡は、従来宇都宮氏との関係で語られることが多かった地域にあって、平安後期に遡ることが判明した点でより重要である。

註1　千田　昇他「山国川流域の地形」（『山国川－自然・社会・教育－』　大分大学教育学部、1989）
註2　小池　史哲「旧石器時代」（『豊前市史　考古資料』、1995）
註3　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅱ」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1997）
　　福岡県教育委員会「桑野遺跡・上の熊遺跡」（『同上』第6集下巻、1997）
註4　大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」（『大平村文化財調査報告書』第5集、1989）
註5　福岡県教育委員会「上唐原遺跡　Ⅱ」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996）
註6　大分県教育委員会「佐知遺跡」（『大分県文化財調査報告書』第81輯、1989）
註7　大平村教育委員会「土佐井遺跡群」（『大平村文化財調査報告書』第6集、1990）
註8　渡辺正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」（『古文化談叢』第11集、1983）
註9　圃場整備事業に先立ち、1994～95年にかけて豊前市教育委員会が調査。
註10　小池　史哲「小石原泉遺跡」（『豊前市史　考古資料』、1993）
註11　棚田昭仁・坂梨裕子「豊前市大字川内所在の川内楠木遺跡について」（『豊豊』Vol.7、1996）
註12　福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」（『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1996）
註13　福岡県教育委員会「山崎遺跡」（『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』－7－、1992）
註14　椎田町教育委員会「石町遺跡」（『椎田町文化財調査報告書』第1集、1988）
註15　築城町教育委員会「城井谷Ⅰ」（『築城町文化財調査報告書』第2集、1992）
註16　豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第9集、1992）

註17　福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第83集、1989)
　　小池　史哲「吉木常松遺跡」(『豊前市史　考古資料』、1993)
註18　椎田町教育委員会「小原谷Ⅰ」(『椎田町文化財調査報告書』第4集、1992)
註19　宮本　工・村上　久和・城戸　誠「山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡」(『九州考古学』59、1984)
註20　新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集、1978)
　　新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡　垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)
註21　福岡県教育委員会「大塚本遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998)
註22　註3文献
註23　福岡県教育委員会「上桑野遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1998)
註24　武末　純一「昭和町遺跡」(『豊前市史　考古資料』、1993)
註25　福岡県教育委員会「下唐原宮園遺跡」(『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1998)
註26　平成6年度から開始された宇野地区県営圃場整備事業に伴って調査。
註27　平成5～7年度にかけて、豊前東部工業用地造成に伴い、市教委が発掘調査。
註28　大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第8集、1993)
註29　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅱ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1997)
註30　大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
註31　大分県教育委員会「勘助野地遺跡」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(1)』、1988)
註32　中津市教育委員会「幣旗邸古墳」(『中津市文化財調査報告書』第4集、1984)
註33　中津市教育委員会「永添遺跡　中津城跡(御用屋敷跡)　ホヤ池窯跡」(『中津市文化財調査報告書』第13集、1993)
註34　吉富町教育委員会「楡生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991)
註35　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996)
註36　大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第3集、1985)
註37　玄洋開発株式会社『黒部古墳群』、1979
註38　北代茂ほか「山田古墳」(『新吉富村誌』、1990)
註39　丹羽　博「平原横穴墓群」(『豊前市史　考古資料』、1993)
註40　宮本　工「先史・原始時代」(『大平村誌』、1986)
註41　大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(2)～(4)』、1989～91)
註42　福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集、1996)
　　ほかに、平成6年度から開始された宇野地区県営圃場整備事業に伴って調査。
註43　福岡県教育委員会「上唐原遺跡　Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1995)
註44　豊前市教育委員会「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告－Ⅲ－」(『豊前市文化財調査報告書』第7集、1991
註45　新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第10集、1997)
註46　註38文献に所収。
註47　新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976)
註48　新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第9集、1995)
註49　註47文献に同じ。
註50　新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡　垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)
註51　大平村教育委員会『友枝瓦窯跡』、1976
　　大平村教育委員会「友枝遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第4集、1988)
註52　森田　勉「垂水廃寺」・「友枝瓦窯跡・山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編、1981)に触れている。
註53　註47・48・52文献などと同じ。
註54　村上　久和・吉田　寛・宮本　工「豊前における初期瓦の一様相－大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦－」(『古文化談叢』第18集、1987)
註55　註42文献に同じ。
註56　註45文献に同じ。
註57　平成7年度、市営住宅改築に伴い調査。現地説明会資料など。
註58　大平村今蔵遺跡、豊前市小石原泉遺跡、同三毛門放生田遺跡、椎田町西八田堂の本遺跡等がある。
　　大平村教育委員会「恵良古墳群・今蔵遺跡・縄手遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第10集、近刊予定)
　　福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995)
　　平成6年、椎田町教育委員会が国営農地再編パイロット事業に伴い発掘調査した例など。

Ⅲ　遺構と遺物

調査対象地は山国川流路とその西に聳える比高20m余の段丘の中間付近、標高17mほどの地点で、現状は水田であった。調査区中程を通称大池から導水する用水路（鳴水用水）が斜めに横断しており、その周辺は発掘地からはずした。また、この用水路の完成した時期がはっきりしないが、水源の溜池が大きな改修を受けたのは明治34年であり、鳴水用水はそれ以降に設置されたものと思われる。鳴水用水設置以前は、調査地付近は桑畑であったという。

地山は概ね硬く締まった細砂層であるが、調査区東端付近から礫が混ざる石原状となって、15号溝状遺構付近で段落ちとなる。この石原状の地質は、先年報告をおこなった上唐原遺跡との間の低い部分を覆うようである。また、西端では調査区横を農道が走り、さらに西側は大きく落ちる。この低い部分を試掘調査した結果、段丘裾付近まで青灰色粘質土（いわゆるグライ土）が厚く堆積しており、山国川の旧流路であったことを確信させた。ちなみに現在は新貝川という小河川が存する。

検出した主要な遺構は以下の通りである。

竪穴式住居跡……67軒
掘立柱建物跡……1棟
甕棺……3基
方（円）形周溝遺構……5（1）基＋α
溝状遺構……10数条（環濠を含む）
埋甕……1基

水浸しの郷ヶ原遺跡

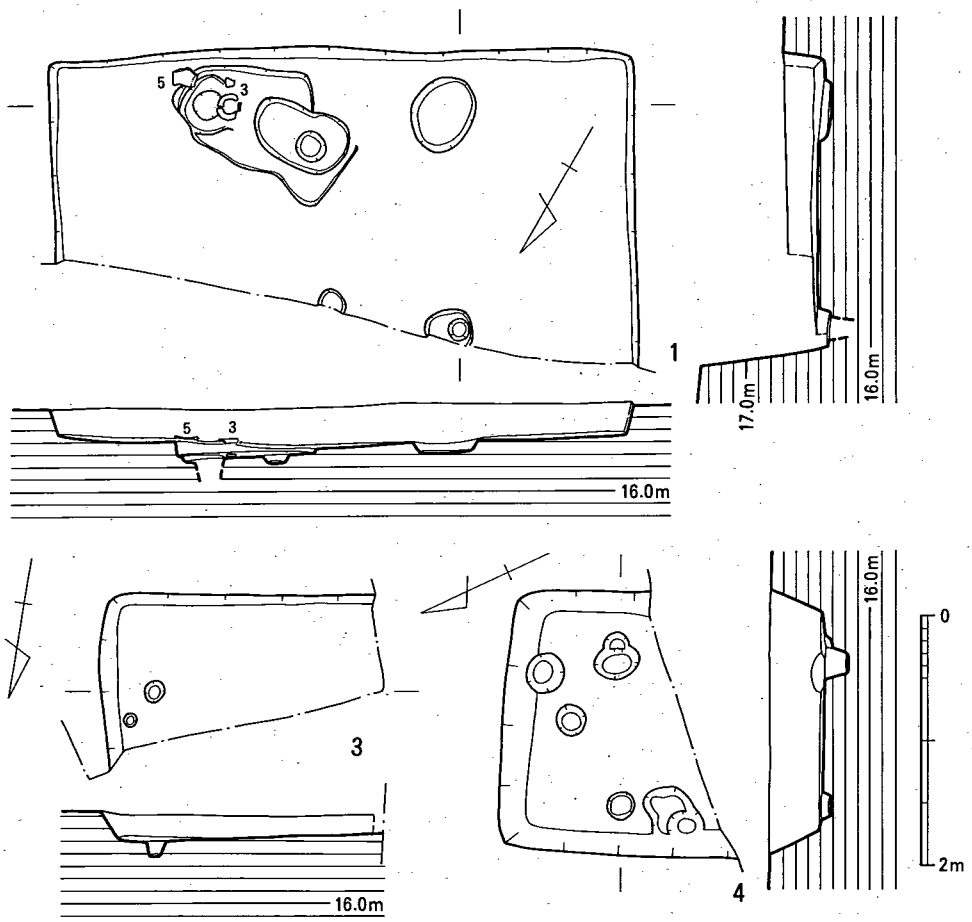
1．竪穴式住居跡

調査区のほぼ全域で多数の竪穴式住居跡を検出した。特に調査区東半の南に集中する様子が窺える。ここが環濠である2号溝状遺構内にあり、さらに環濠が南へ広がることを併せるとこの集落の中心部がその付近にあって、さらなる規模を有していたことを予想させる。

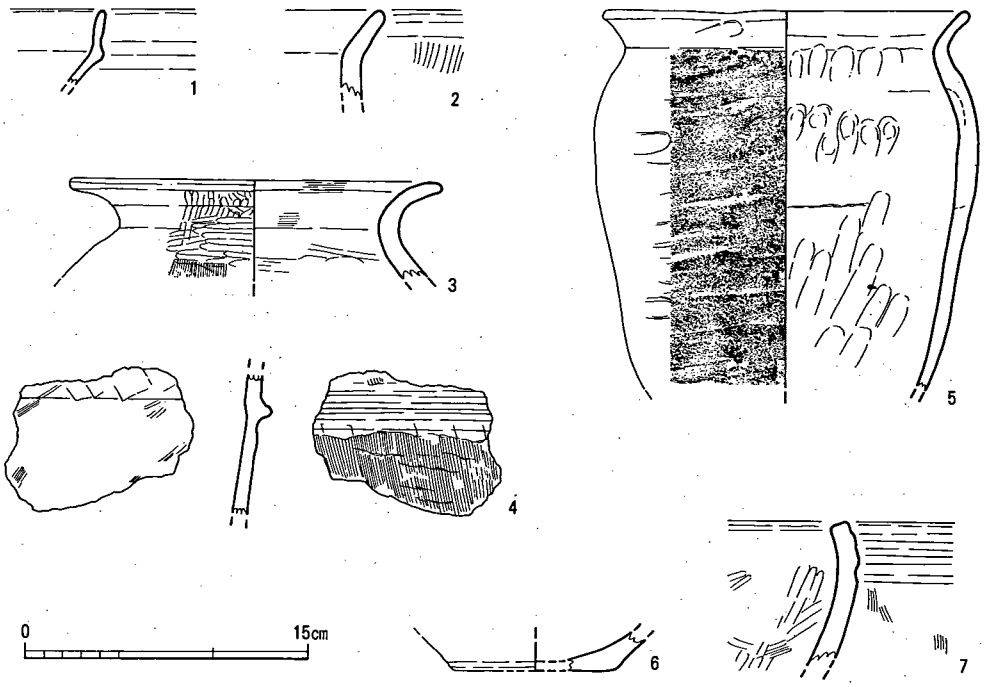
1号住居跡（図版4、第4図）

用水路のために掘り残した部分に隠れることから全体の発掘は行っていない。確認できた規模は4.7×2.5m以上で、平面形は方あるいは長方形であろう。深さは0.3m強が残存する。

主柱穴は2本柱を想定でき、その1つが水路付近で検出された。ただし、深さの記録を怠る。



第4図　1・3・4号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第5図　1・3・4号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

出土遺物

南東隅付近の不整形の落ち込み・柱穴付近から集中して出土した。

土器（図版61、第5図1～5）

1・2は小片。1は二重口縁壺で、器表の磨滅が著しい。2は外反度の弱い甕。3は図示部分がほぼ完存する。C字形に強く外反する壺で、口端部のかなりの部分に意識的に面取りを施したようである。体部内面は篦削りとも刷毛目ともつかないような雑な調整で仕上げる。4は壺の小片。断面三角形のシャープな突帯を付し、その下位は丁寧な刷毛目で仕上げるものの、それ以前に施された叩き痕が微かに見える。5は明瞭な肩部をもち、直角に近く外反する甕。体部外面に幅1㎝強の叩き痕が見えるが、その凹部は平坦となる。あるいは叩きではなく、篦状工具で強く撫でたものであろうか。内面下半は指撫で痕が顕著で、それ以上は指撫で痕のほかに削り痕らしきも見える。

2号住居跡

1号住居跡と3号住居跡の間で土器片を検出したために住居跡を想定したが、掘形・柱穴等認められなかったことから欠番とした。

3号住居跡（図版4、第4図）

1号住居跡の東にあって、これも水路下に入るために一部を確認したのみである。深さは0.2mほどが遺存するのみ。

出土遺物

土器（第5図6）

1点のみを図示した。壺あるいは甕の底部小片で、明瞭な平底を呈する。1/4ほどが残存。

4号住居跡（図版5、第4図）

2号溝状遺構内最西端で検出した小型の住居跡で、調査区外へ延びるためにすべての発掘を行っていない。判明した規模は2.1×2m以上の方形あるいは長方形平面となる。深さは0.4mが遺存する。

床面で検出した柱穴はいずれも浅いもので、主柱穴を想定できるものはない。

出土遺物

土器（第5図7）

高杯あるいは鉢の口縁部であろう。内彎し、口端部が面をなす厚手の土器である。口端直下に3条のごく甘い凹線を刻む。調整は丁寧。

5号住居跡（図版5、第6図）

4号住居跡の東に隣接し、コーナーの一つが調査区外となって未検出。また、北コーナー付近の平面形が乱れるのは発掘時のミスであろう。それを考慮しての平面規模は4.6×3.6mの長方形となり、深さは最大で0.3mが残る。

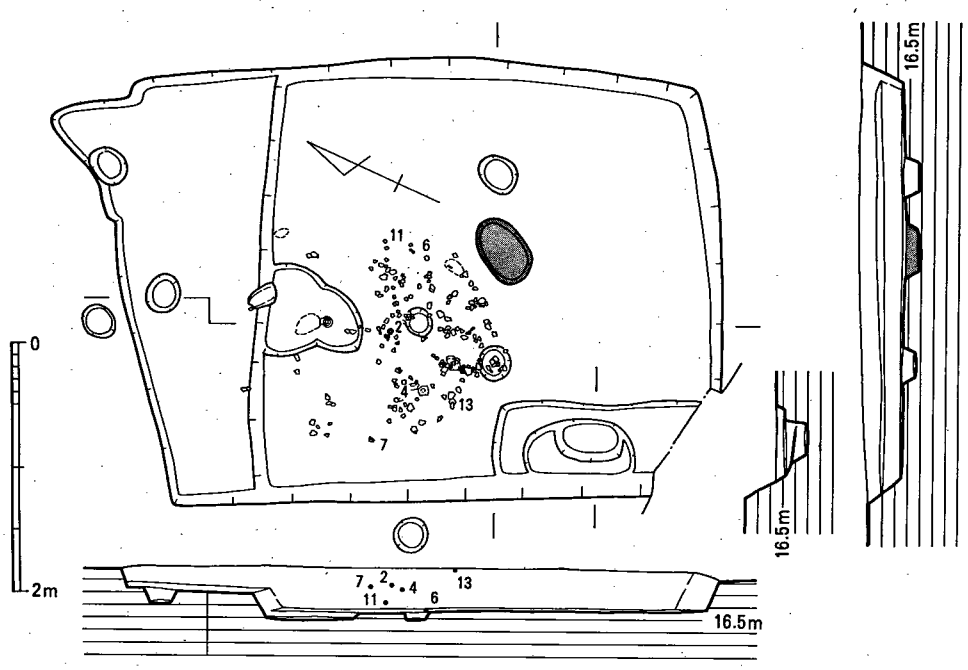
北辺のみに幅0.7m、床からの高さ0.2mほどのベッドが地山を掘り残して付設される。低い部分の床面中央付近の偏円形土坑内から若干の焼土や炭を検出していて、これを炉と想定しているが、通常炉と直線上に配置される屋内土坑（出入口）の位置が本例ではずれている。また、これも通常ベッド状遺構(以下、ベッドと略す)に接して配置される主柱穴が本例ではベッドと平行に配される浅い柱穴以外に想定できないことと関連しているのであろう。

出土遺物

埋土中から多くの土器が細片化して出土している。一括投棄したような状況でもない。また、埋土中から管玉・台石が出土した。石庖丁片は5・6号住居跡周辺出土で位置を特定できないがここにあげておく。

土器（図版61・62、第7・8図）

1～5は相似た形状の小型・中型の壺。1・2は磨滅して調整痕ははっきりしない。3は口縁部が小さく蛇行しつつ大きく開くもので、肩部に2条の沈線が刻まれるが、意味は不明。4の口縁部も3と同様で、端部が小さくつままれる。5の口縁部も変化の度合いは小さいが、基本



第6図　5号竪穴式住居跡実測図（1/60）

的に外方へ一旦膨らむ。この口端部外面に一見沈線状のものが見えるが、意図的なものとは思えない弱いものである。なお、4・5の中型品では体部内面を篦削りで仕上げる。また、5は二次的な熱を受けて赤変する。

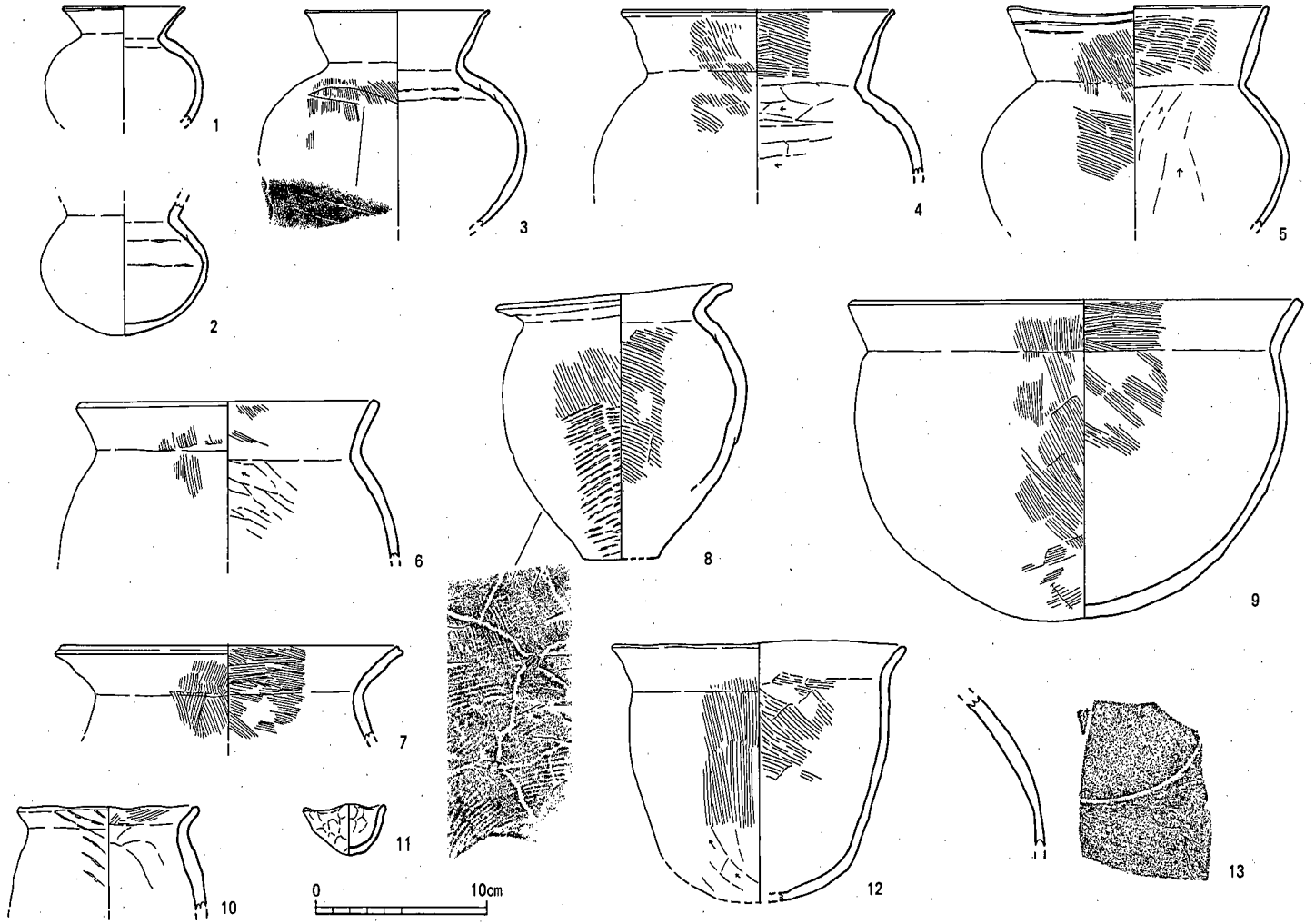
6・7は口縁部の外反が小さい甕で、いずれも小片からの復原である。体部内面の調整技法は篦削り・刷毛目と異なるが、口端部を断面方形に仕上げる点で共通する。8は口縁部が強く外反する甕で、口端部は薄くなって終わる。体部外面下半に平行叩きを残し、以上を刷毛目で仕上げる。なお、平行叩きは途中で傾斜を変えていて、変換部分が継ぎ目であることがよくわかる。10は小型の甕小片で、これにも粗い叩き目が口端部まで観察できる。体部内面は篦削りのようである。

9は球形胴をもつ鉢で、口端部は断面方形に成形する。調整は全体に刷毛目を多用する。12は長胴の鉢。口縁部の反転は弱く、口端部も丸くおさめる。また、底部外面付近を篦削りするほかは刷毛目を多用する。

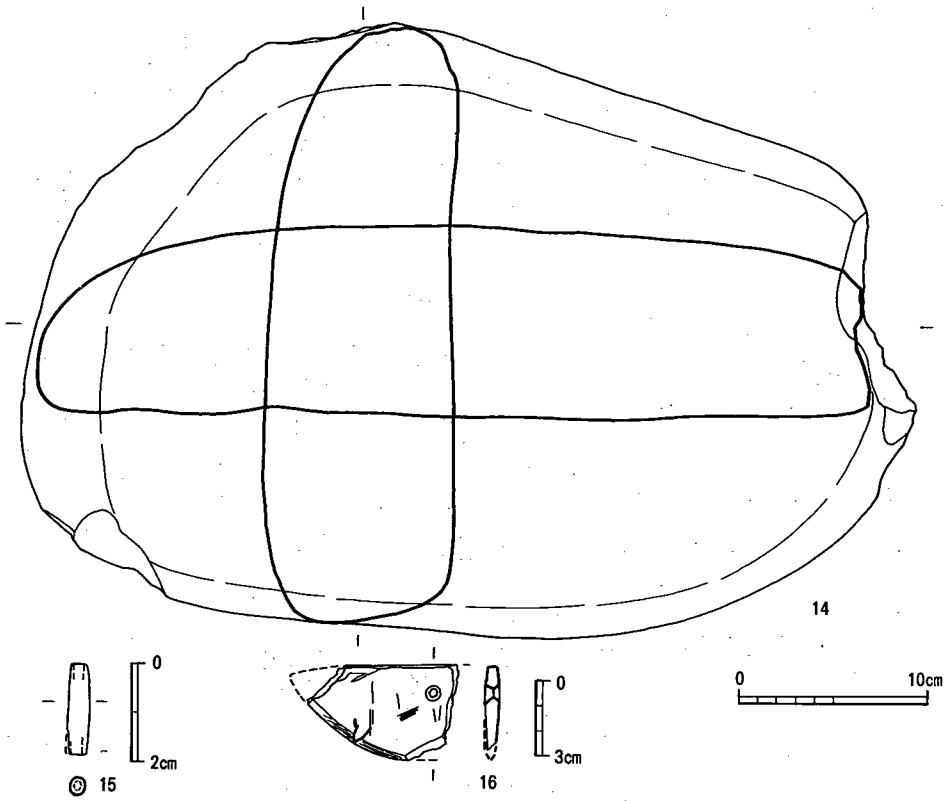
13は壺と思われる小片。全体に磨滅が甚だしいが、沈線が刻まれる。

石製品（図版62、第8図）

14はベッドの肩から出土した台石。長軸47cm、単軸32cm、厚さが10cmとほぼ均質な安山岩で、触ると全体につるつると滑らかになっているが、これといった使用痕などは肉眼では見えない。



第7図　5号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）



第８図　５号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4,2/3,1/1）

15はいわゆる碧玉製管玉。材質は悪く灰緑色を呈し、一部を欠損するが全長1.8㎝、直径0.4㎝である。

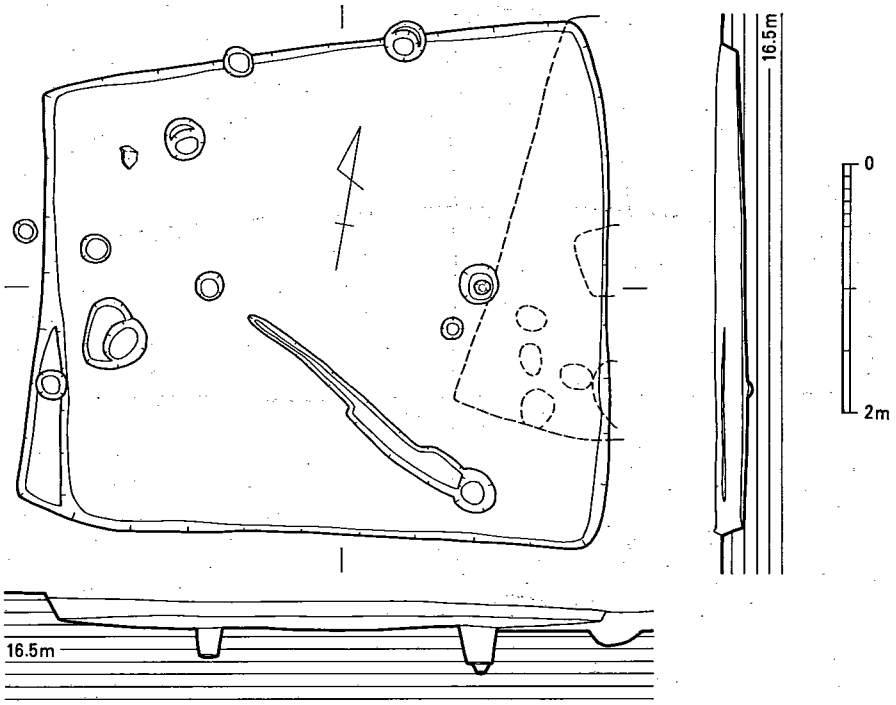
16の石庖丁は幅3.8㎝、背の厚さ６㎝を測る。図下面は全体に薄く剥離し、刃部は両刃となる。輝緑凝灰岩製と思われる石材を使用し、暗灰色を呈する。

６号住居跡（図版６・７、第９図）

５号住居跡の東に隣接し、7号住居跡を切って重複する。南辺に重複するようにみえる掘り込みは発掘ミスである。また、北辺の掘形に重なる柱穴は出入口の痕跡であるかも知れないが、西辺際にも小土坑があり、5号住居跡を考慮すればこれが出入口である可能性もある。

規模は一辺長4.5×3.6～4.2ｍの歪んだ長方形平面を呈し、深さは0.2ｍほどが残る。

床面に炉跡を想定できる土坑を検出できなかったが、２本柱となる主柱穴が通常の位置にあることから、本来はその間に炉が設置されていたと思われる。なお、床面を斜めに走る溝は深さ10㎝ほどの規模で、埋土は特異なものではなかった。



第9図　6号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

6号住居跡に固有の出土遺物は少量小片で、図示に堪えるものはない。観察の結果では強く反転して端部を断面方形に近く成形する甕口縁部や内面を篦削りで仕上げる甕体部片などがある。ほか、6・7号住居跡出土と注記したものの一部を第10図に示した。

7号住居跡（図版6・7、第11図）

6号住居跡に切られ、8・9号住居跡を切る。南東部の張り出しは平面を確認するために一段掘り下げたもので本来の遺構ではない。平面形は4.2×3.3mの長方形プランとなり、南辺にのみベッド状遺構を付設する。また、ベッドは溝底に小ピットを穿つ周壁溝を伴う。

主柱穴は断面図に示した2基と思われるが、その南に偏した位置に焼土・炭などを若干出土した炉跡があり、東辺に接して出入口を示す土坑が位置する。

出土遺物

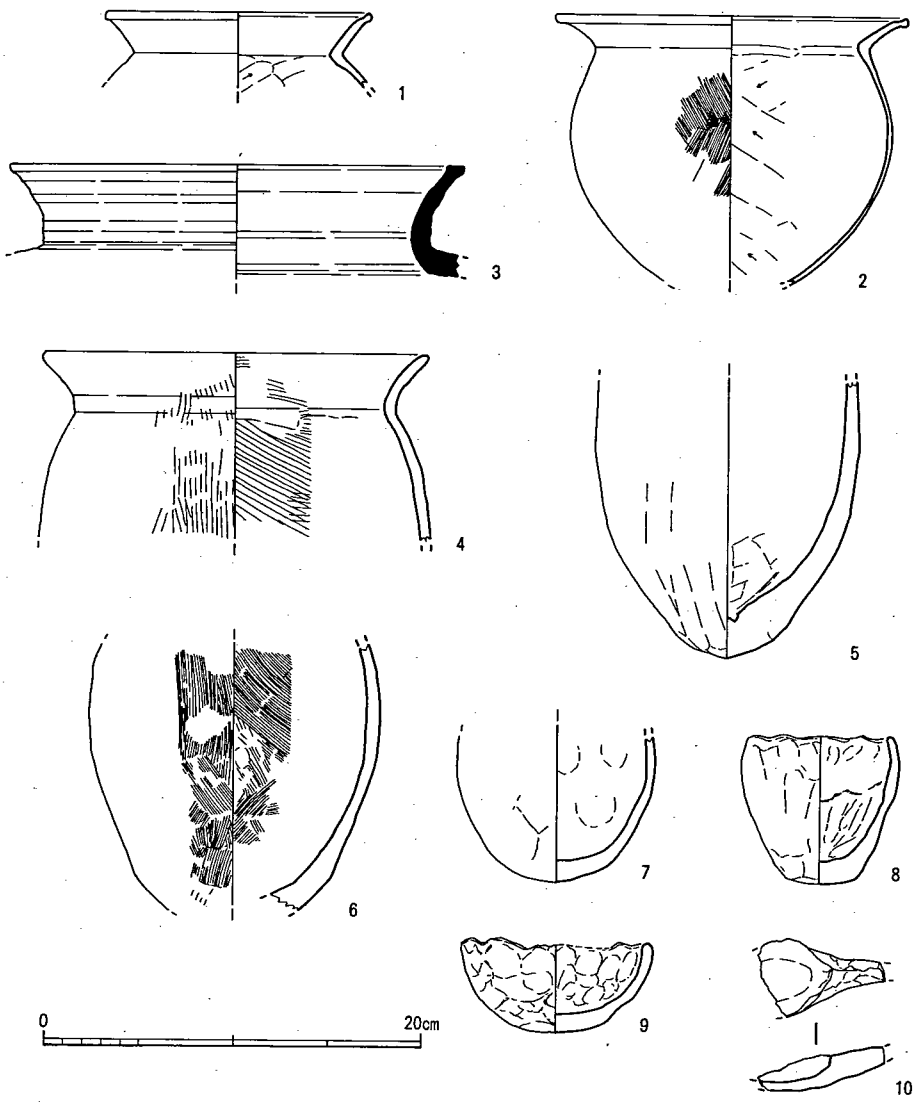
1～3は6・7号住居跡のいずれに伴うか特定できない個体である。4～10は埋土中出土。また、鉄製鉇は「6・7号住居跡周辺包含層」出土の注記がある。

鉄製品（第14図20）

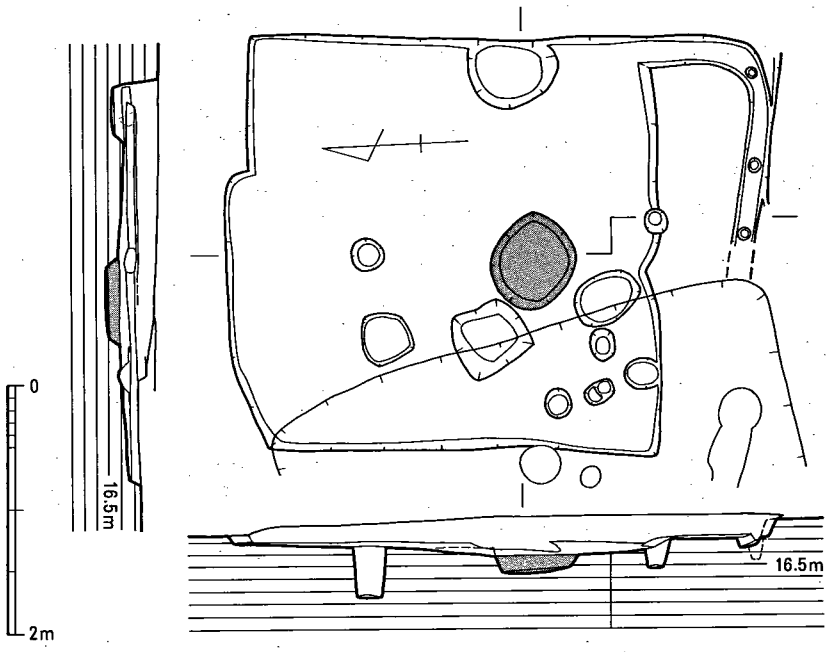
鉄製鉋の残欠。残存長3.3cm、幅１cm、厚さ0.2～0.3cmを測り、断面形はU字形に湾曲する。

土器（図版62、第10図）

１・２ともに相似た個体で、強く外反する口端部を小さくつまんでいる。また、体部外面を刷毛目で、内面を篦削りで仕上げる。叩きは見えない。３は須恵器の甕。口端部を水平に近く仕上げる。



第10図　６・７号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）



第11図　7号竪穴式住居跡実測図（1/60）

4は口縁部が緩く外彎する口縁部片。5は尖底を有する甕で、内外面に指撫での痕跡が見えるが、二次的火熱を受けて器表の荒れが著しい。6も同様の器形の甕で、これは内外面の刷毛目がよく残る。7は小型の甕で小片からの復原であり、形状にはやや不安がある。器表は磨滅が著しいが、わずかに工具痕が見える。8・9は手捏の鉢で、8は外面に比して内面は丁寧に仕上げる。10はスプーン状の手捏土器。灰褐色～灰黒色を呈する。

図示した以外では口端部を断面方形に近く成形した口縁部や須恵器小片などがある。

8号住居跡（図版7、第12図）

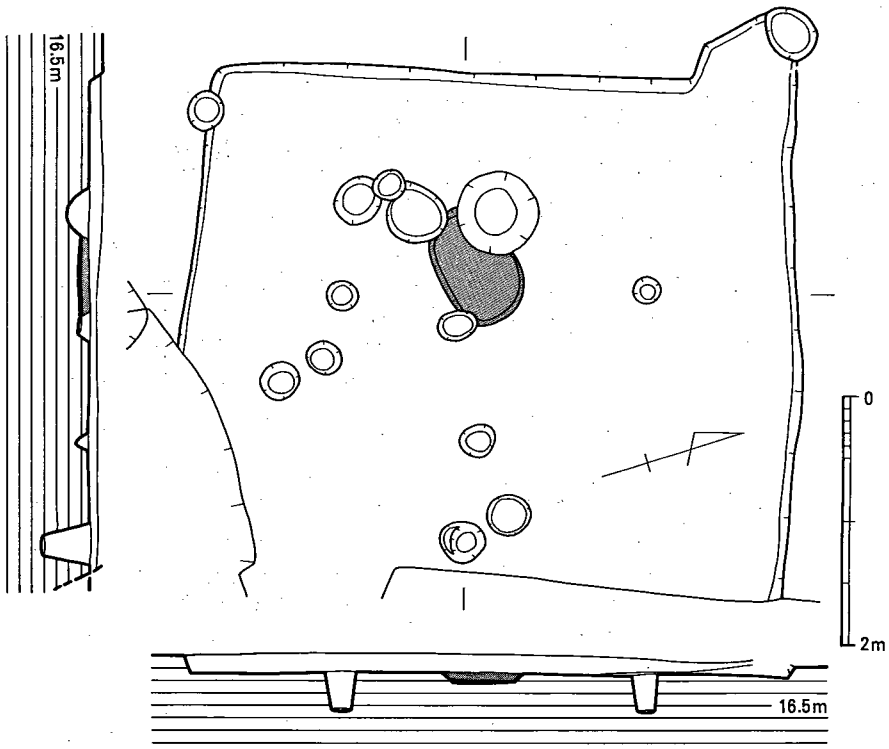
7号住居跡に切られ、9号住居跡とも切合関係にあるが、その先後は確認できなかった。平面形は長方形となり、長辺4.8m、短辺は4mまでが確認できる。

中央やや西によって位置する長円形の土坑から若干の炭が出土するとともに、その床面の一部が焼けて赤変していることからこれを炉跡と認定でき、主柱穴は小規模であるが炉跡の南北に位置する2本を想定できる。いわゆる屋内土坑は検出されなかった。

出土遺物

いずれも埋土中から出土したものである。

鉄製品（図版63、第14図13）



第12図　8号竪穴式住居跡実測図（1/60）

直刃鎌で、柄の一部と切先を欠くがほぼ全体を窺うことができる。残存長10.5cm前後、最大幅は折返し部分周辺で3.5cmほどである。背の厚さは0.2cmとなる。折返し部に近い図の右半分ほどが錆のために膨らみ、細片化していて刃・柄の境は判然としない。木質も見えない。

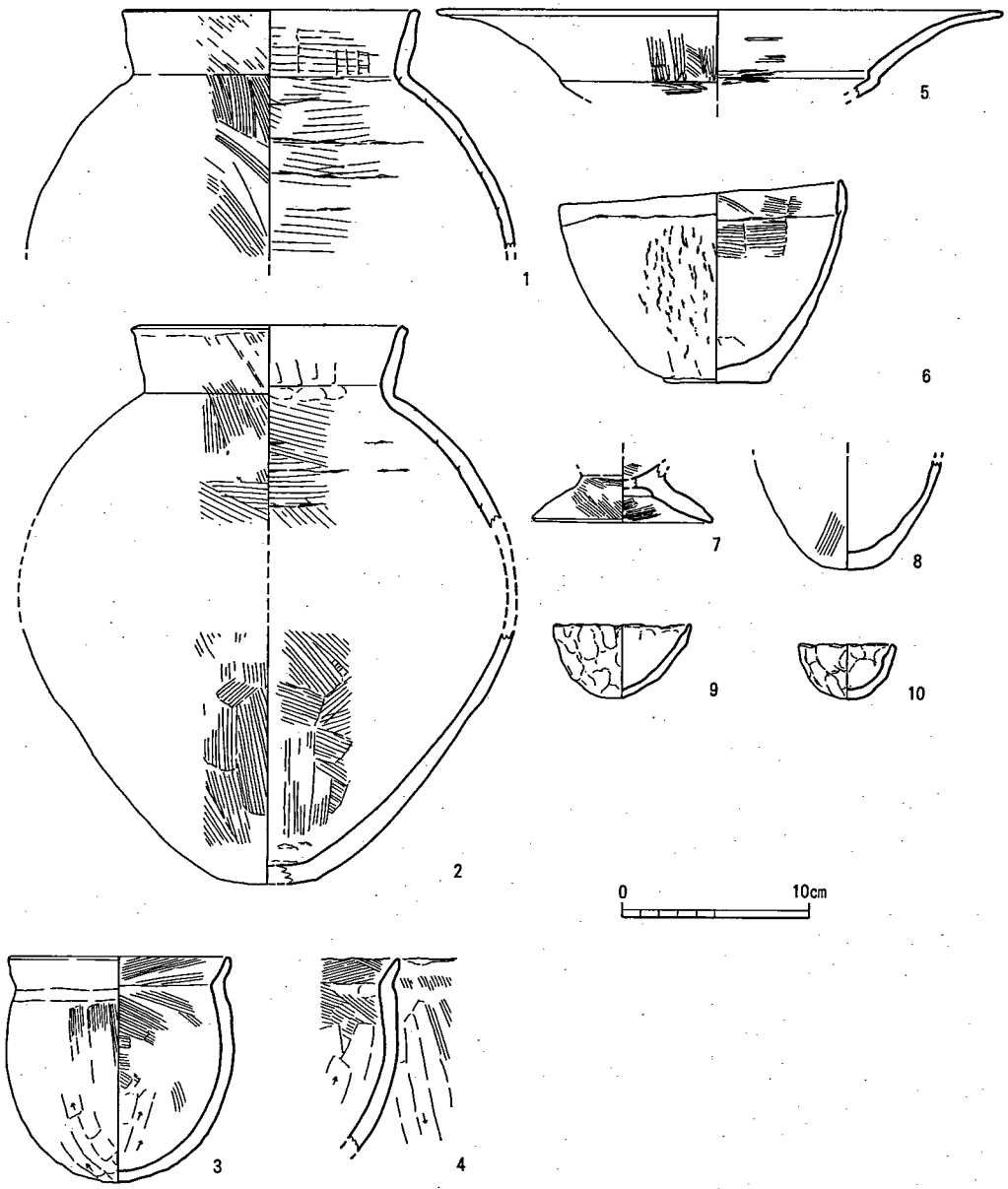
土器（図版62・63、第13図）

1・2はよく似た直口壺で、1は口端部をほぼ水平とする。2は口端部が外傾する面となり、接合しえないがレンズ状の底部へと続く。いずれも刷毛目を用いて仕上げ、体部上半内面には幅2cm前後の粘土紐の継ぎ目が残る。

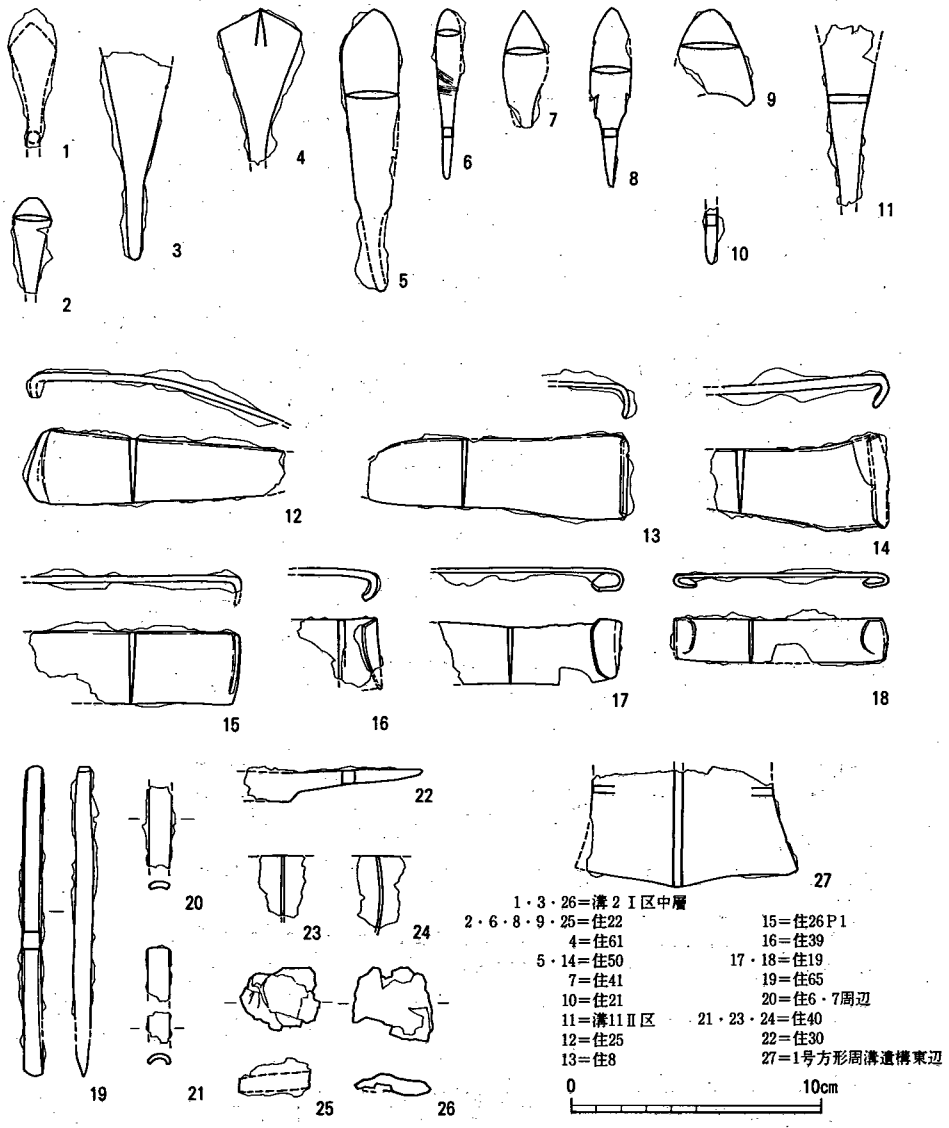
3・4も口縁部が短い同形の小型甕。3は体部下半の内外面を篦削りで、以上を刷毛目で仕上げる。口縁部は短く、外反も弱いが、頸部内面は明瞭な稜をもつ。

5は杯部が大きく開く高杯の小片で、復原口径にはいささか不安がある。

6は平底の底部をもつ鉢で、体部外面全体に縦方向の無数のシワが入る。しかし、内面の調整は丁寧。7は脚付鉢であろう。8は小型の甕あるいは鉢で、底部は若干丸みを有する。9・10は手捏の鉢。



第13図　8号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

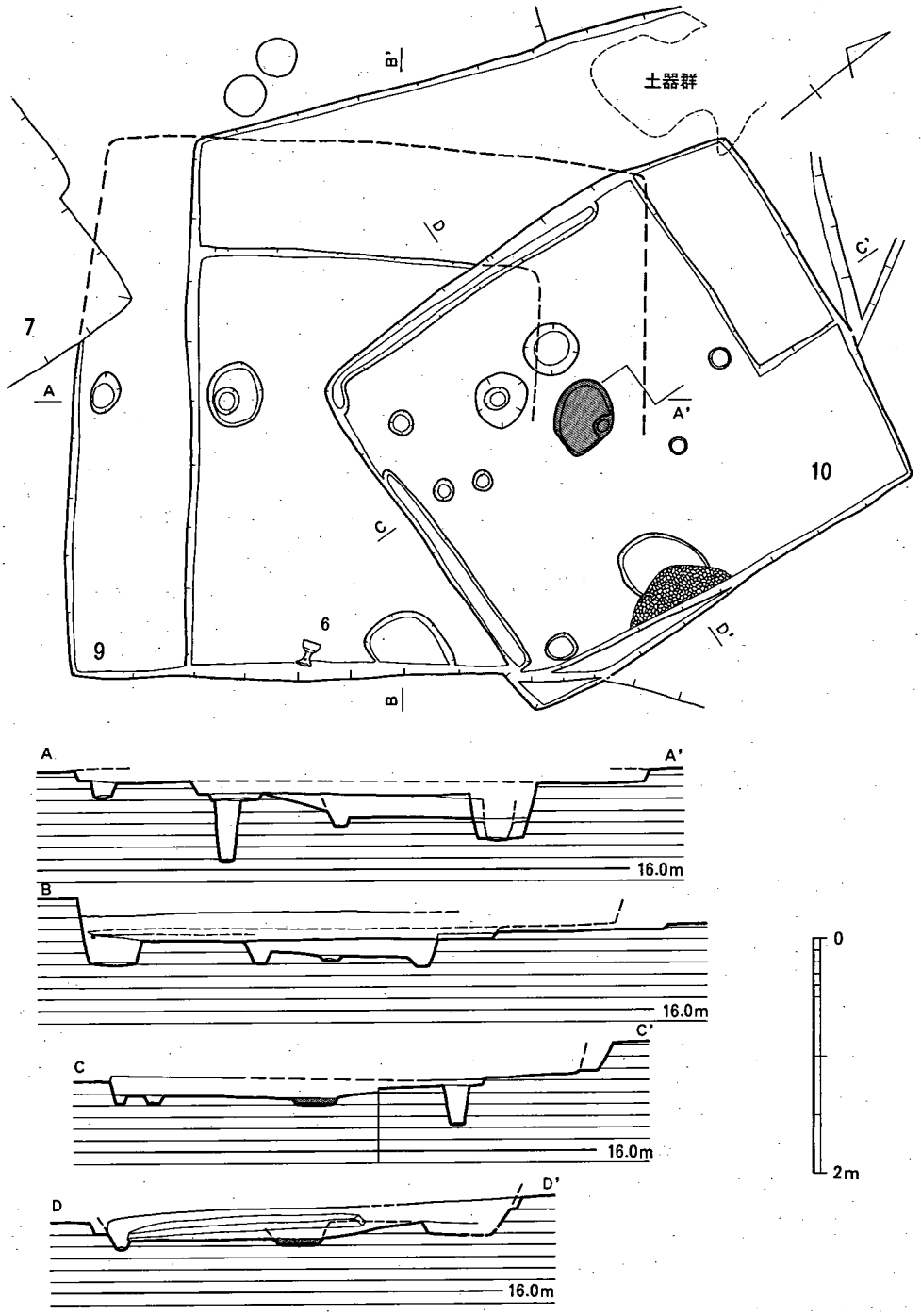


第14図　郷ヶ原遺跡出土鉄製品実測図（1/3）

9号住居跡（図版7、第15図）

9・10号住居跡は大きく重複するものの、非常に判別が困難な土質であったために、その先後関係は把握できていない。しかし、9号住居跡の炉跡を想定できる部分でそれにまったく気付かなかったことから10号住居跡が後出するものと思われる。

図では確認のために薄く掘り下げたラインなども入っていて判りづらい部分もあるが、本来



第15図　9・10号竪穴式住居跡実測図（1/60）

の形状は3辺にベッドを付設したものである。最もしっかり確認できた部分の状況では、ベッドの幅は0.5m、床面からの高さは0.1mほどであった。この平面規模と主柱穴配置から推定できる住居跡の規模は4.9×4.6mの方形に近いものとなる。

炉跡は上記したように検出できなかった。

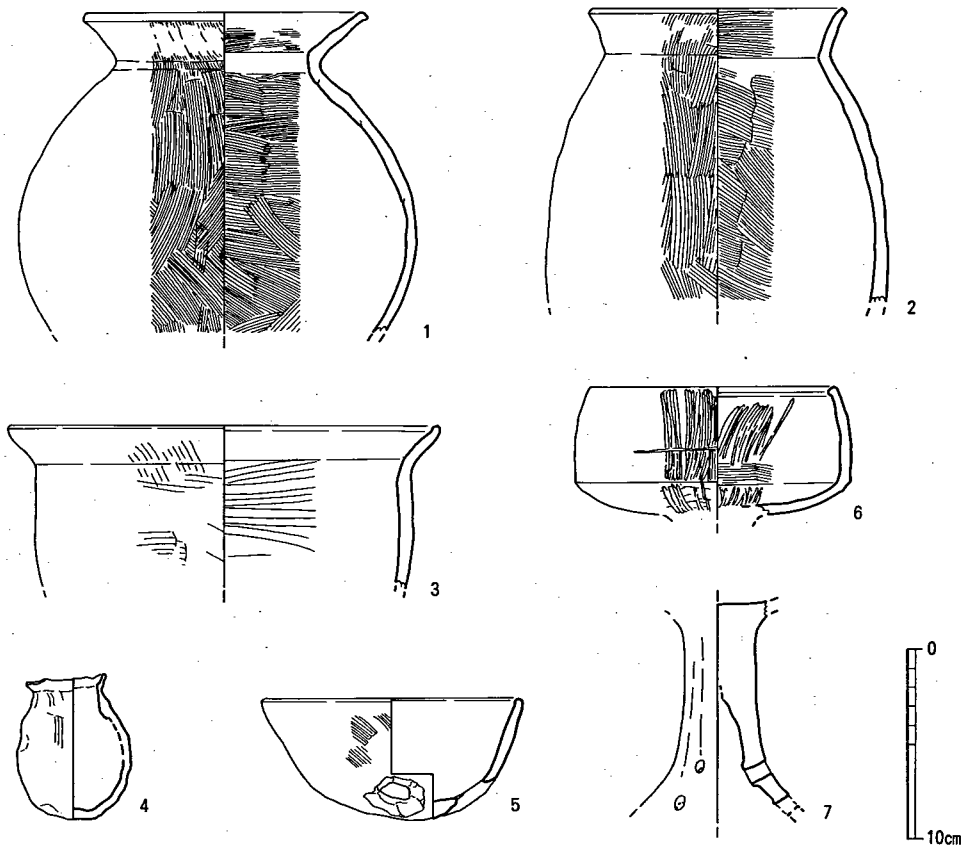
出土遺物

6が屋内土坑に近い床面から、ほかは埋土中の出土である。

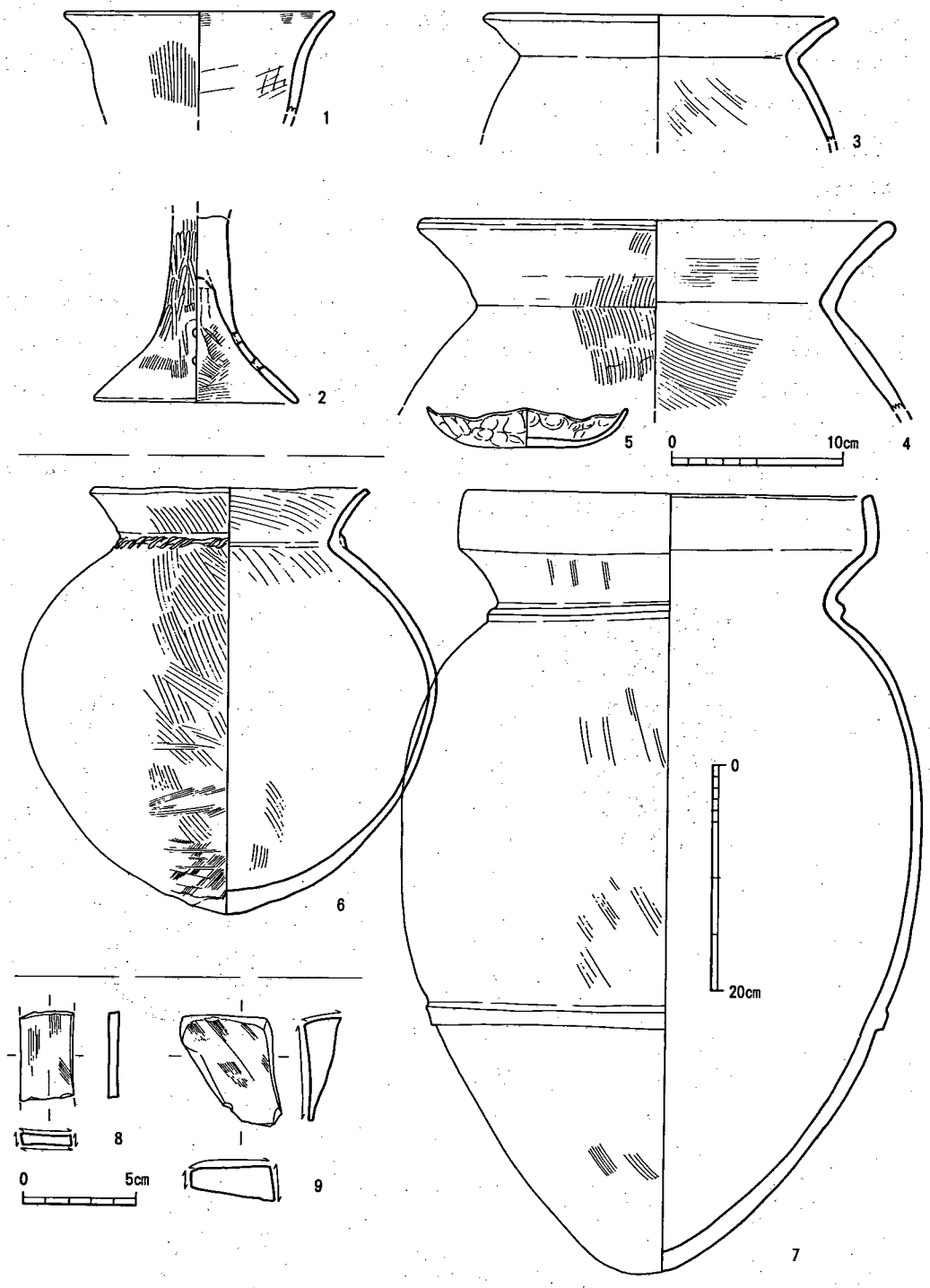
土器（図版63、第16図）

1は口縁部が強く外反し、頸部内面に明瞭な稜を有する甕で、約1/4が残る。口縁部外面は小さく膨らみ、端部は外傾するシャープな面をもつ。体部は内外面に細密な刷毛目が残る。2は口縁部の外反が弱く、体部の張りも小さい甕。口端部は断面方形に仕上げ、全面に刷毛目が残る。3は鉢であるかも知れない。口端部は小さくつままれる。

4は手捏の壺で、口縁部は不揃いとなり、体部外面に刷毛目が残る。5は鉢で、内面は丁寧に仕上げる。底部付近に焼成後の孔があるが、意図的なものかはっきりしない。



第16図　9号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）



第17図　10号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/6,1/3）

6は遺構図に図示した高杯。出土時は脚部まで残存していたが、取り上げの段階で脚部が細片化して復原しえなかった。杯部上半が内傾内彎し、端部が内側へつままれる椀形のもので、刷毛目の後を全体に粗く篦磨きを施す。7は別個体の高杯で、図示部分は完存する。脚部が発達した形態で、穿孔は上下2段3方に施す。器表が磨滅するが、微かに篦磨きらしき痕跡が見える。

10号住居跡（図版7、第15図）

上記したような状況であり、細部に見落としがあるかも知れない。

検出できた規模は4×3.6mの長方形プランで、深さは最大で10cmに満たない。北辺のコーナーにベッドを有し、南辺および西辺では部分的に途切れる周壁溝を巡らせる。

炉跡は中央付近に位置する扁円形の土坑であり、2本の主柱穴を想定できるものの同定にはいささか自信がない部分もある。

なお、東辺の屋内土坑では、壁体に近い部分に集中して大小の礫のまとまりが検出された。

出土遺物

埋土中から土器・砥石などが出土している。2の高杯は9・10号住居跡のいずれに伴うものか特定できないがここで図示しておく。

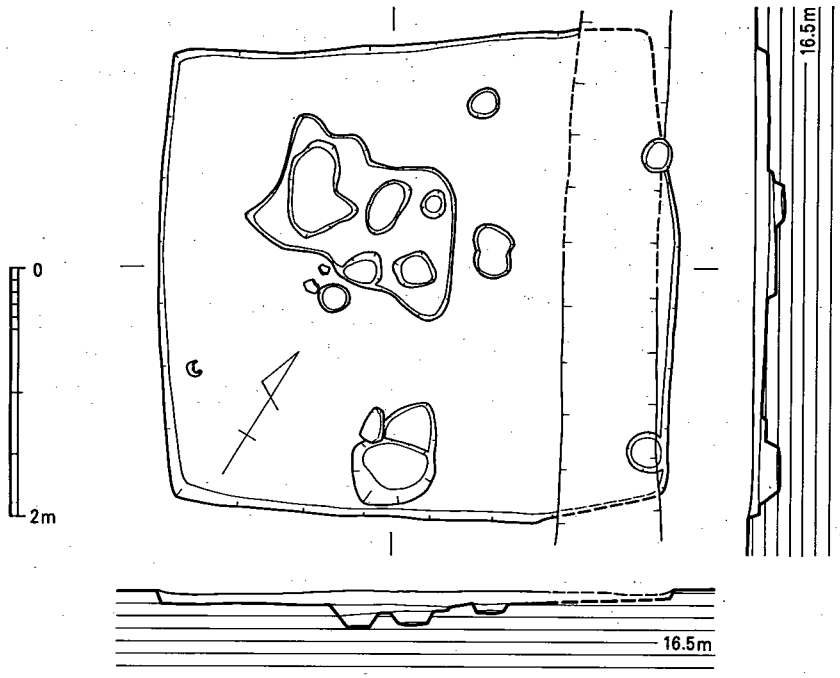
また、北西隅に近い住居跡外方で土器群が一括して出土している(4～7)。住居自体のプランの把握が遅れて、少しずつ掘り下げたために結局掘り込みなどを確認できないままに終わってしまった。当時は甕棺などと思えるような状態でなく、雑然としていたために出土状態は記録していないが、土器の復原・実測を終えた今はあるいは破壊された甕棺ではなかったかと考えている。この住居跡に伴うものとの確信はないがここで紹介しておく

土器（図版63・64、第17図）

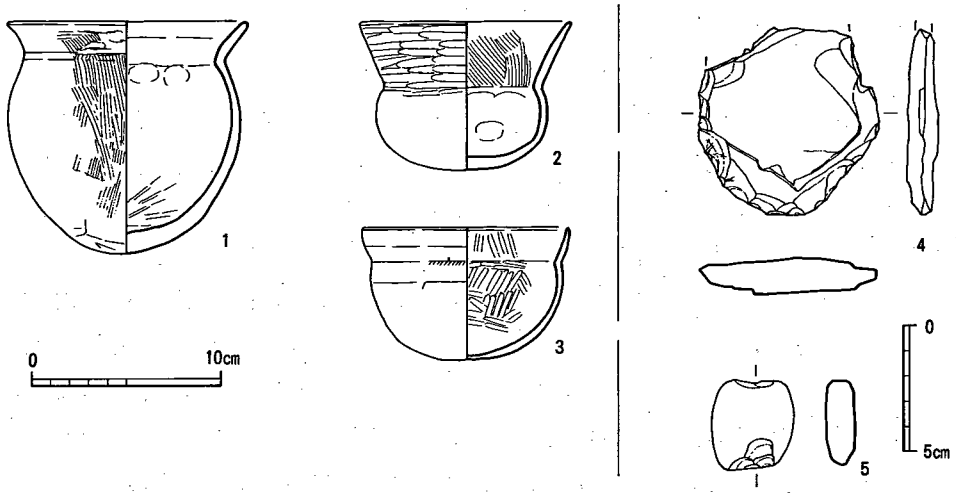
1は鉢あるいは小型の甕で、体部から口縁部へ緩やかに移行する。2は高杯脚部で、上下2段4方向に円孔を穿つ。軸部は完存に近い。3は約1/4が残存する甕。口縁部外面が膨らみをもって強く外反し、端部は断面方形になる。器表が荒れるが、内面に刷毛目が微かに見える。

4は口縁部が強く外反する甕で、頸部内面に明瞭な稜を有する。調整は全体に刷毛目を使用する。5は手捏の皿状の土器で、口縁部は不揃いで波打つ。

6は大型の広口壺で完存する。口縁部は強く外反し、端部は断面方形となって内側は匙状に小さく窪む。頸部には篦状工具による鋭利な刻みを付した突帯をめぐらせ、張りの強い体部から尖底気味の底部へ続く。調整は全体に浅く幅広い刷毛目を多用するが、体部外面下半では細かい刷毛目を使用する。全体に雑な感を受ける土器である。7は器高70cm近い大型の壺でほぼ完存する。口縁部は二重口縁で、反転部以上は内彎気味に内傾し、端部も内傾する面をなす。頸部および体部下半に断面台形の突帯を付すが、精美なものではない。底部は丸みの強い尖底



第18図　11号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第19図　11号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）

となる。調整は全体に刷毛を使用するようであるが、内面は殊に器表の荒れがひどく判然としない。

石製品（図版64、第17図８・９）

いずれも暗灰色を呈する粘板岩製砥石で、目は緻密。８は図上下端を欠損するがその他の4面を使用する。９も大きく折損する。

11号住居跡（図版８、第18図）

10号住居跡の東に隣接し、３号溝状遺構に一部を切られるが全体は窺える。

一辺長4.2×3.7mの方形に近い平面プランを有し、深さは0.1mほどに過ぎない。床面の状況は通常と異なり、主柱穴がはっきりせず、かつ炉跡の痕跡も観察できなかった。床面で検出された柱穴はいずれも浅く、また炉があるべき中央部分には浅い不整形の落ち込みがあって、その内部にも浅い柱穴様のピットなどが数基穿たれていた。

出土遺物

土器の内、１・３は床面から、２は南辺の屋内土坑から出土したもの。４の打製石斧はこの住居跡出土ではなく、11～15号住居跡付近出土のものであるが、ここで紹介する。5の石錘は埋土中出土。また、屋内土坑付近で台石が出土しているが、回収していないあるいは注記が不明で紹介できない。

土器（図版64、第19図）

１は口縁部を約1/2欠くほかはほぼ完存する甕。口縁部は強く外反するが、内面の稜は弱く、口端部も丸くおさめる。器肉が厚い。２は小型丸底壺で、体部下半は接合しえないが図上復原した。口縁部は直行し、体部は偏球形となる。全体に粗雑なつくりの土器である。３は小型の鉢。口縁部は短く直立気味に内彎し、体部は深みをもつ。体部外面は弱い刷毛目あるいは撫で、内面は篦磨きで仕上げる。

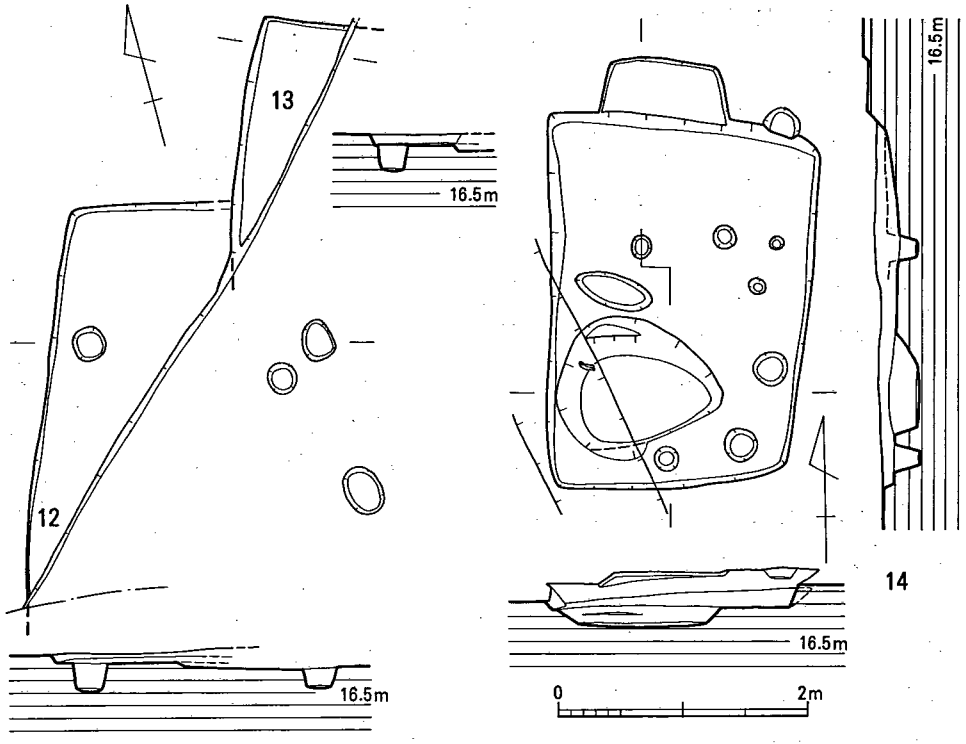
石製品（図版64、第19図４・５）

４は緑泥変岩製の打製石斧片で、粗雑なつくりである。５は遺跡西方の段丘上などで一般的に地山に含まれる風化安山岩を使用した石錘状の石であるが、風化のために人為的であるとの確信はない。重量は16ｇを測る。

12号住居跡（第20図）

11号住居跡の南に近く位置し、大きく削平されて大部分がすでに失われていた。

検出した規模は3.2m、1.3mに過ぎず、深さも0.1mに満たない。主柱穴は定かでなく、炉跡は検出できなかった。



第20図　12～14号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器小片が数点出土するのみである。口端部を方形に仕上げたものや、底部の剥離した平底の甕片などがある。

13号住居跡（第20図）

12号住居跡を切って位置するが、これも一部を検出したのみで、あるいは住居跡ではない可能性もある。これも主柱穴は判らない。

出土遺物はない。

14号住居跡（図版８・９、第20図）

11号住居跡の東に隣接し、17号住居跡を切る。また、４号溝状遺構に切られる。

平面形は3×2.1mの小型長方形プランを有し、深さは0.1mほどである。また、北辺に幅１m、長さ0.5mほどの舌状の張り出しがあって出入口を想定できる。

床面で数基の柱穴を検出したが、必ずしも規則性を持つものではない。また、南西隅に近い

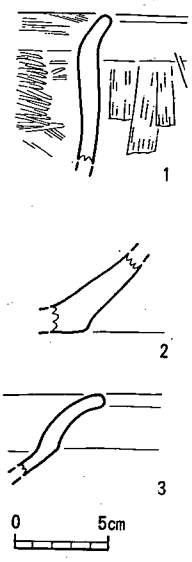
位置に長軸1.3m、単軸1m、深さ0.2m強の大型土坑が位置するが、用途を示すような特殊な埋土・遺物などは出土していない。

出土遺物

土器小片が若干出土している。

土器（第21図）

1は口縁部が弱く外反する小型の甕小片。体部外面は弱い刷毛目で、内面は篦磨きで調整する。内面篦磨きの手法は弥生中期初め頃によく使用されるもので、あるいはまったく異なる時期の土器であるかも知れない。2は平底の底部片。3は口縁部が強く外反する高杯の小片。



第21図　14号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

15号住居跡（図版9・10、第22図）

14号住居跡の東に近接して位置し、合計5基の住居跡が重複していた。この住居跡は41号住居跡を切り、16号住居跡に切られる。

平面プランは4.8×3.7mの長方形を呈し、深さは最大で約0.2mが残存する。両短辺に幅0.8～0.9m、高さ0.1～0.2mほどのベッドを付設し、その肩付近に2基の主柱穴を配する。

床面中央に不整円形の炉跡が位置するが、埋土に炭や焼土を含み、かつ床面の一部および内部から出土した土器が焼けて赤変していた。南辺中央に出入口を示す屋内土坑がある。

出土遺物

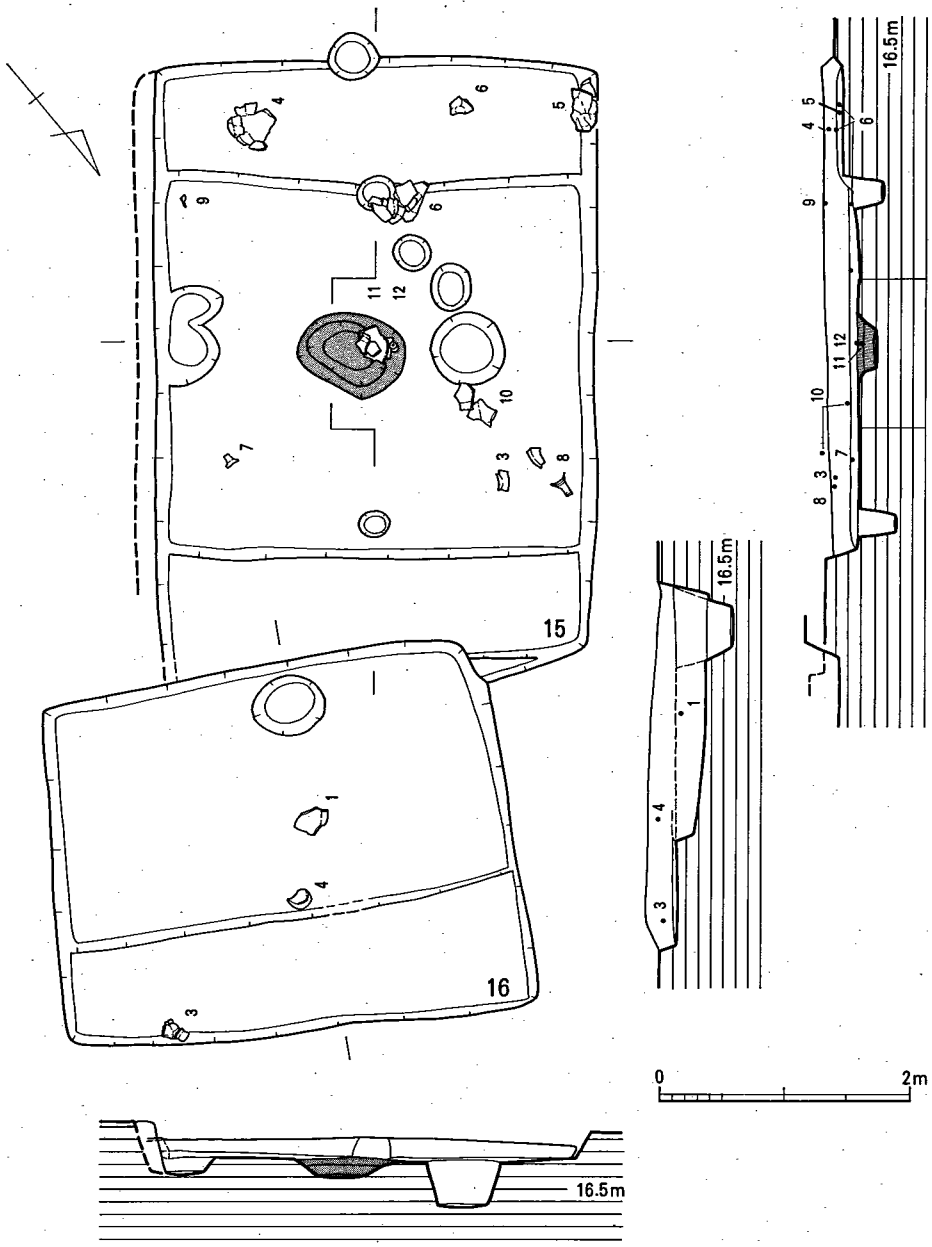
図示したようにベッド上などでまとまって土器が出土している。ただ、垂直分布でみるように、10の甕は北隅付近から投棄された状況を示し、3の甕、8の高杯も同様の可能性がある。遺構図に番号を付していない土器などは出土地点を記録していない。

土器（図版65・66、第23・24図）

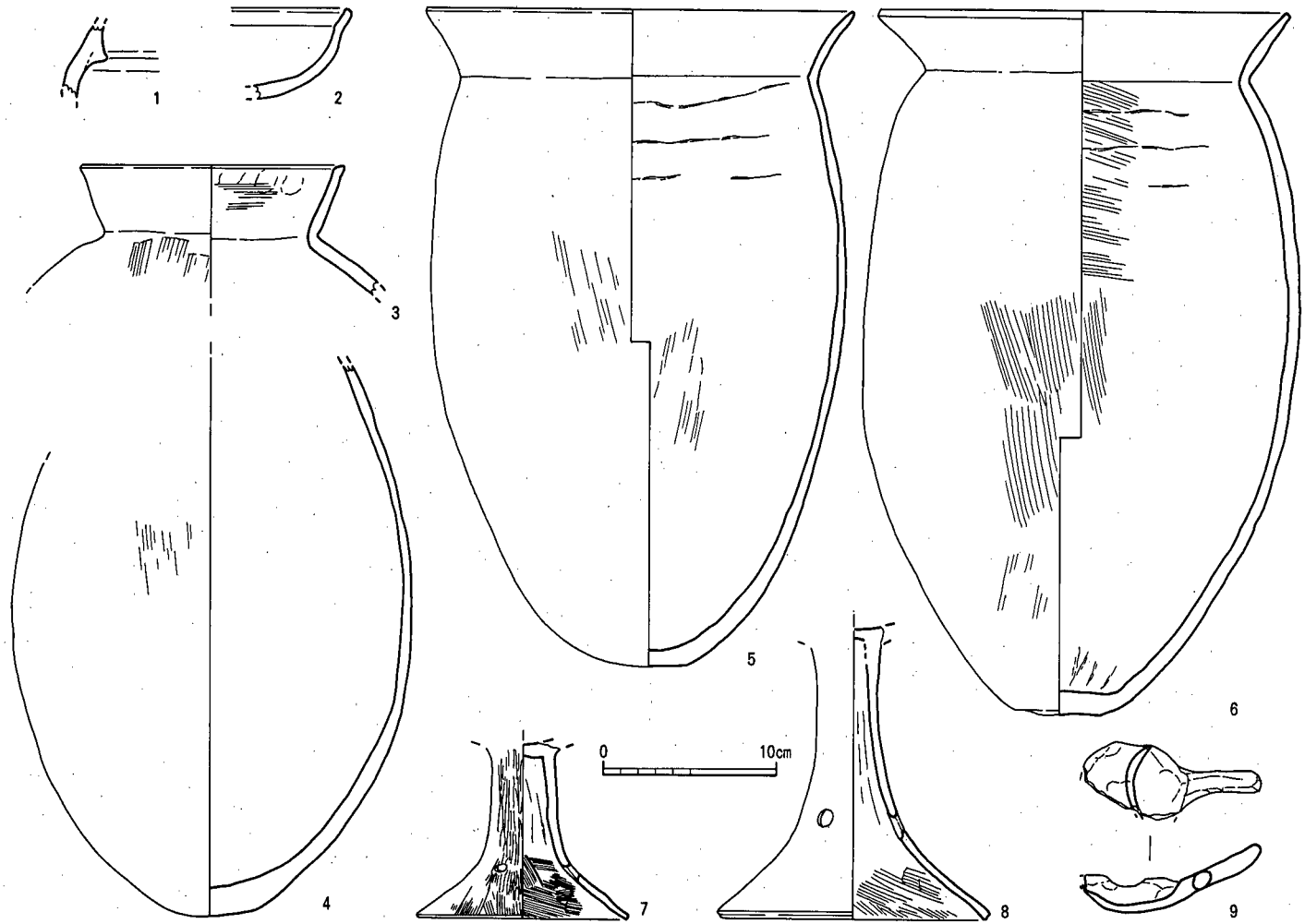
1は二重口縁壺の小片。2は鉢小片で、口縁部は小さく外折し、口端部は断面方形となる。また、端部は小さく内側へつままれる。11は炉上面から出土した大型壺の残片。体部下半に断面長方形となる突帯を付すもので、図上半（突帯以上）は焼けて赤変する。内面は風化が著しく、調整痕は不明。外面には粗い刷毛目が残る。

3は口縁部が外方へ膨らみつつ強く外折し、口端部が水平に近い面をなす。頸部内面の稜は甘く、体部外面は縦方向の刷毛目で仕上げる。同内面は磨滅してよくわからない。3/4が残存する。4は口縁部を欠くが体部はほぼ完存する。底部付近はよく焼けて赤変し、内外面ともに器表の荒れが著しい。なお、底部は直径3cmほどの小さな平底となる。5の底部付近は完周し、口縁部は1/2強が残存する。口縁部は外彎しつつく字状に開き、端部は丸くなる。底部は内側

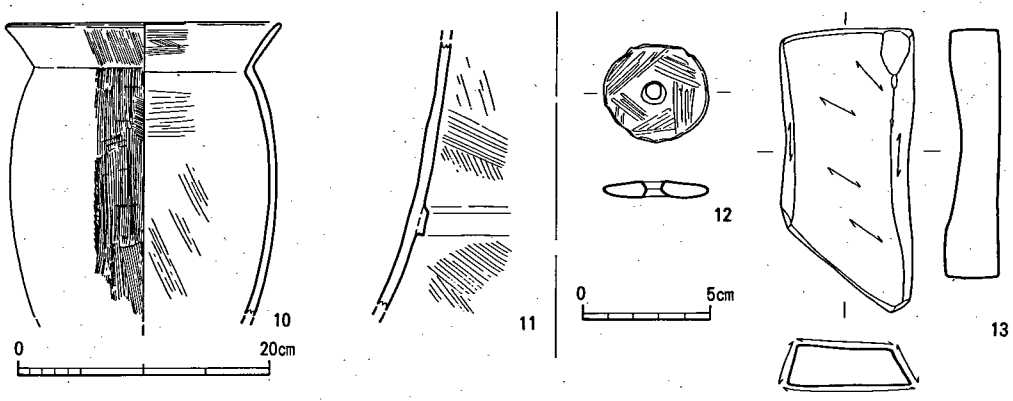
に指頭痕を残して丸底となり、体部内外面には刷毛目が微かに見える。頸部内面の稜はシャープでその下位に幅2㎝強の粘土紐接合痕がよく見える。6はほぼ完存する。5に比して口縁部が直行しつつ外側へ膨らみ、体部が張りをもつ。底部は丸みをもつが平底に近い。体部内外面を刷毛目で仕上げ、シャープな頸部下に幅2㎝ほどの粘土紐が観察できる点は同様である。



第22図　15・16号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第23図　15号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）



第24図　15号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/6,1/3）

7は脚部の多くを失うが、柱状部は完存する。3方向の孔を穿ち、杯部中央を充填して成形する。8は長脚の高杯であるが、杯部との接合部は短脚の7と同様と思われる。これも3方向の穿孔を行うが、孔の内側は弾けたようになっておりあるいは焼成後になされたものかも知れない。円孔以上は完周し、端部は約1/2が残存する。10は図示部分の約1/4が残存。口縁部はく字状に鋭く外折して直行し、口端部は断面方形となる。体部外面に微かに平行叩きが残るが刷毛目で丁寧に消される。11は大型壷で無文の突帯を付す。

9はスプーン状の手捏製品。12は土製紡錘車で直径4㎝前後、最大の厚さ0.6㎝、重量9.5ｇ。図上面では篦磨きがみえるが、下面は荒れる。また、穿孔は両面からなされる。

石製品（図版66、第24図13）

明黄褐色を呈する凝灰岩質砂岩製の砥石で、材質は緻密である。小口を除く4面を使用。

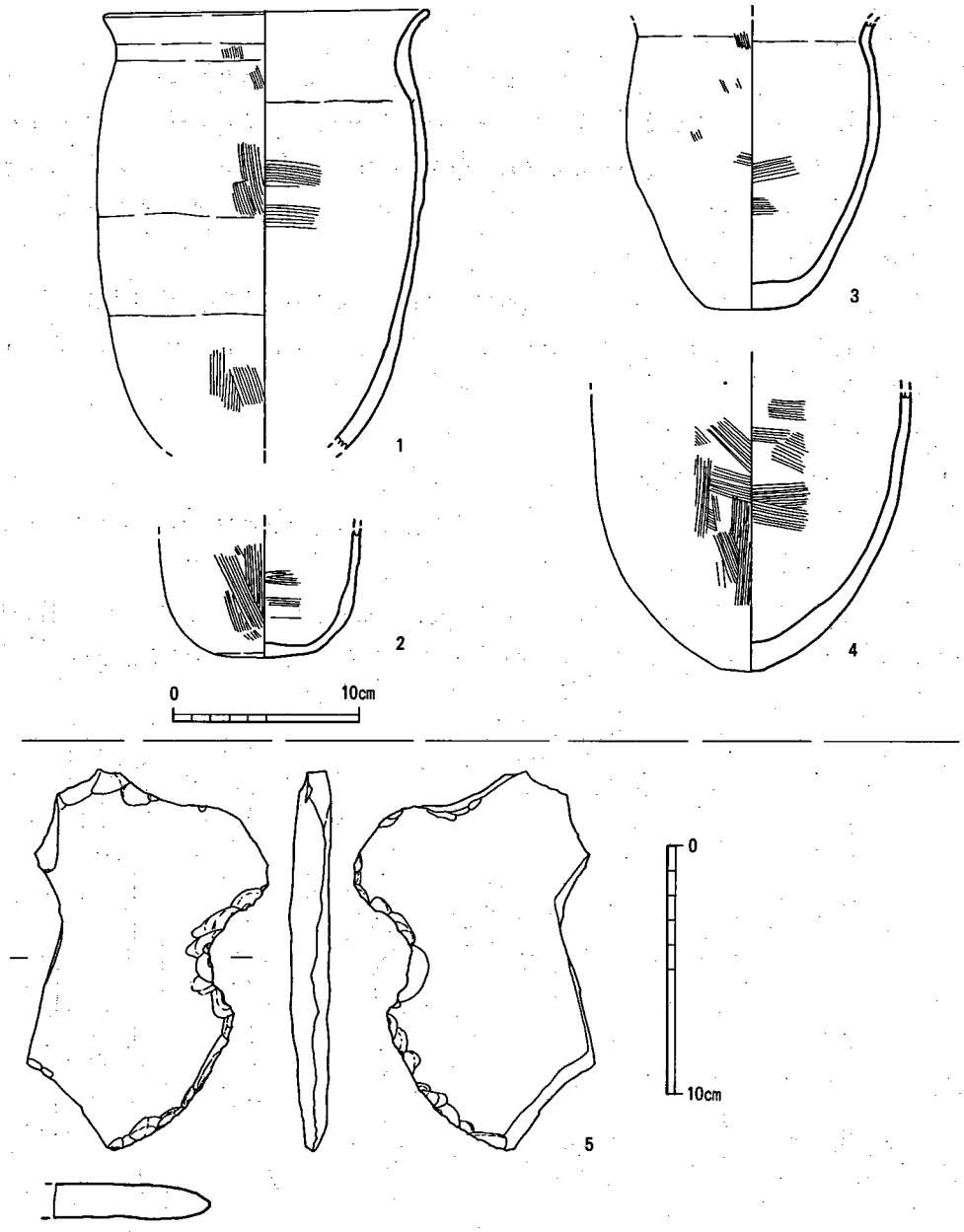
16号住居跡（図版9・11、第22図）

15・34・35・41号住居跡などを切るが、この付近は地山も黒色系となっていて非常に判別しがたく、加えて湧水の甚だしい状況下でもあり細部が不明のままで終わった。

平面形は3×3.7ｍの長方形プランとなり、北西辺付近の深さは約0.2ｍであった。発掘時にはこの辺にベッドが付設されたものかと考えていたが、それが見事に41号住居跡のベッドのラインに連続したことから発掘ミスであろうと判断している。また、この遺構に確実に伴う柱穴・炉跡ともに確認できていない。

出土遺物

図示したように床面から若干浮いた位置で土器を検出している。ただし、1に示した土器は推測される床面の下位に位置し、あるいは下層にある41号住居跡に伴うものかも知れない。また、図示した石斧は住居跡内出土ではなく、15・16号住居跡東側出土のものであるが、ここに



第25図　16号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）

示す。

土器（図版66、第25図）

1は図示部分が完存に近い。緩く外彎する口頸部を有し、口端部は断面方形に近い。二次的な火熱を受けて変色、器表が荒れるが、わずかに刷毛目が観察できる。2は大きな平底を有する甕あるいは鉢の底部。平底といっても立ち上がりへ移行する部位は丸みをもつ。3も同様の底部。4は直径2～3cmの小さな底部を有する甕。これら3点も図示部分はほぼ完存する。

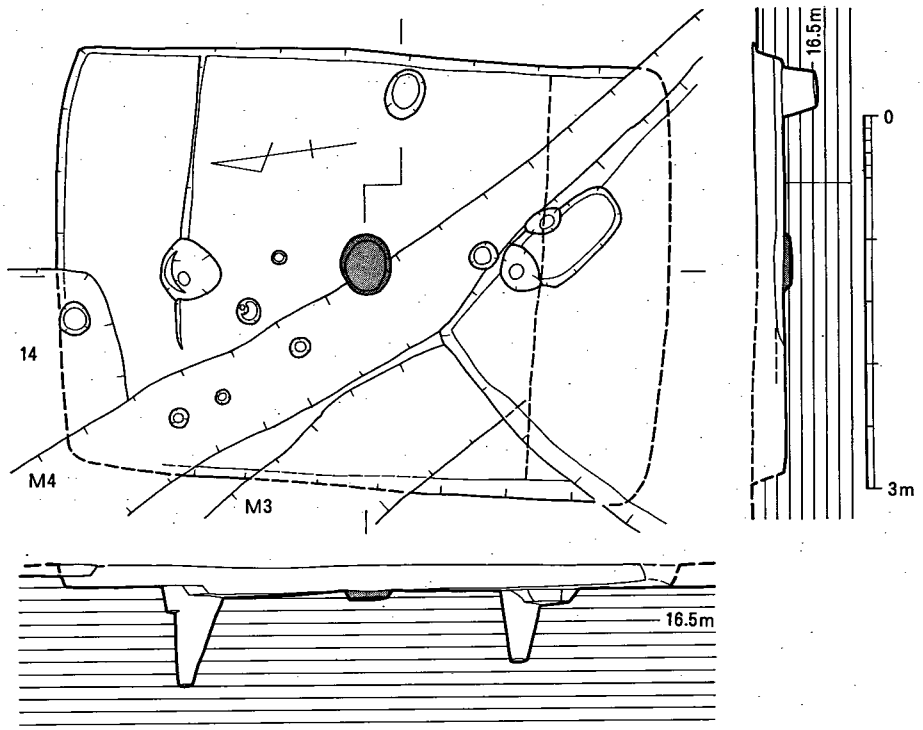
石製品（図版66、第25図5）

安山岩製の打製石斧であろう。抉りの入った一辺および上下端に簡略な細部調整がみられる。調整のみられない部分は折損したものであろう。その場合には両側に抉りの入った分銅型を想定できる。

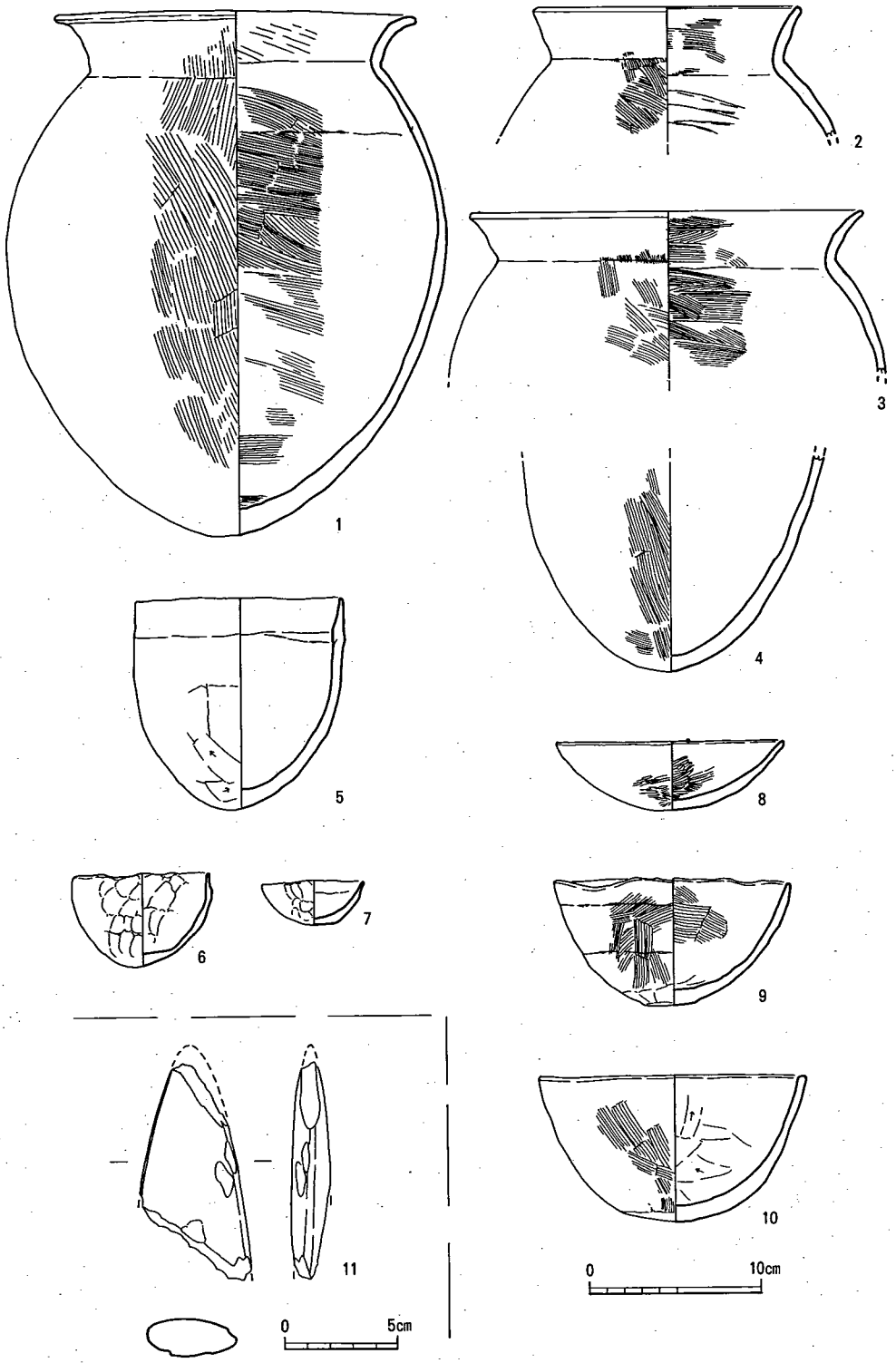
17号住居跡（図版11、第26図）

14号住居跡の南にあって、それに切られる。また、3・4号溝状遺構や開墾などによっても破壊されているが、主要な部分は辛うじて残存している。

長辺は約5mに復原でき、短辺は3.5m、深さは最大で0.2m強である。北辺に沿って幅1m、高さ0.1mのベッドが付設され、その肩に主柱穴の一方が配される。南辺では破壊が著しいが



第26図　17号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第27図　17号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

主柱穴を特定できる。また、南東隅の床面が若干高くなっており、ここにもベッドがあった可能性が高い。

炉跡は中央付近にある小型土坑で、内部から炭や焼土を多く出土している。

出土遺物

出土状態を図示していないが、1～6・9・10および17の磨製石斧片が床直上から、その他が埋土中から出土したものである。

土器（図版66・67、第27図）

1はほぼ完形の短頸壺で、口頸部は高く、先端でより大きく外彎して開く。体部は球形に近く、最大径は中位にある。底部は直径3㎝ほどの小さな、丸底に近い形状となる。全体に弱く幅広の刷毛目を用いて仕上げる。2の口縁部は外反の度合いが弱いが、外面が膨らみ、端部も小さくつまれる小片。3も2に似るが、強く外彎するやはり小片。この両者は外面を細かな刷毛目で、内面を粗い刷毛目で調整する点も共通する。4は図示部分がほぼ完存する。外底面はほぼ半分がよく焼けており、器台の使用法を窺わせる資料である。

5は完存する鉢で、体部外面は縦方向の篦削りで、内面は磨滅のために調整痕はわからない。手捏に近い粗製の土器。6・7は文字どおりの手捏土器。6は完存、7は約1/2が残る。

8は篦磨きと撫でで仕上げる丁寧なつくりの土器であるが、口縁部は小さく波打つ。約1/4が残存。9は外底面を篦削りで仕上げ、刷毛目を多用する土器で、これも口縁部は波打つ。完存。10は先の2点に比して大型品で約1/4が残存する。外面は雑な刷毛目で、内面は丁寧な篦削りあるいは撫でで仕上げる。

石製品（図版67、第27図11）

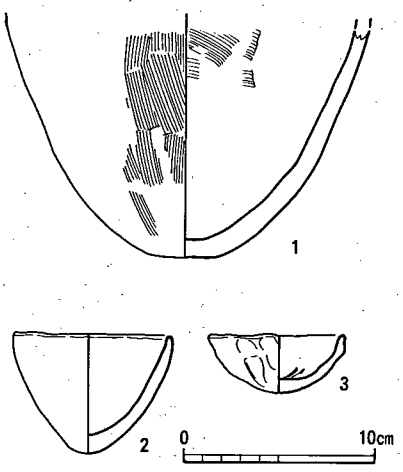
青緑色を呈する蛇紋岩製の磨製石斧。頭部および身の大部分を欠くが、残存部では側縁にいたる屈曲部が鋭利な稜となる。

18号住居跡（図版12、第29図）

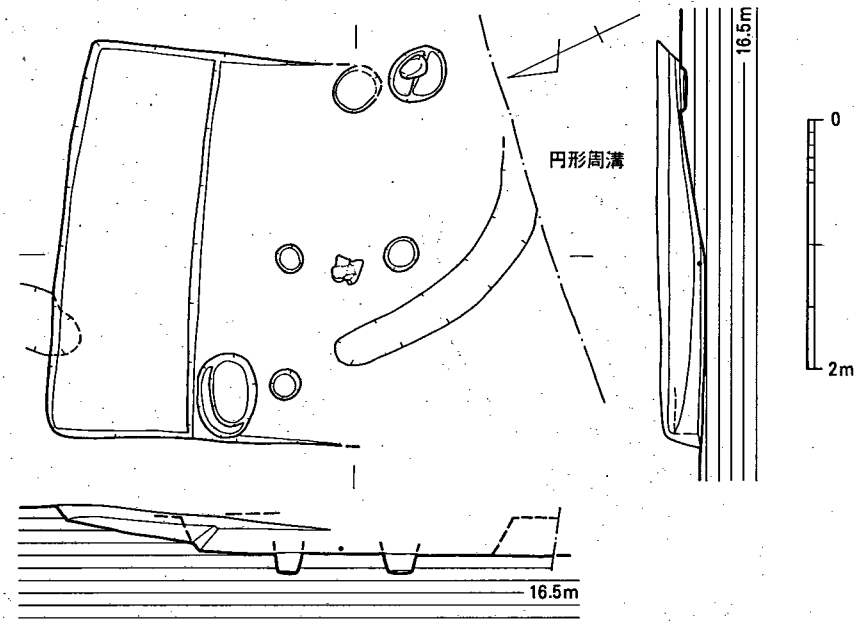
15号住居跡の南、調査区南辺に位置する。当初10号溝状遺構とした円形周溝遺構を切るが、遺存状況が悪く、北半分を残すのみである。

東西長は3.2m、南北長は2.4mを確認できるが、床面上で検出した土器片に炉を想定すると4.6mに復原できる。その土器の南北に等間に位置する柱穴は、通常のベッドと主柱穴との位置関係と比べると距離が離れているが、これが主柱穴であったと考えている。

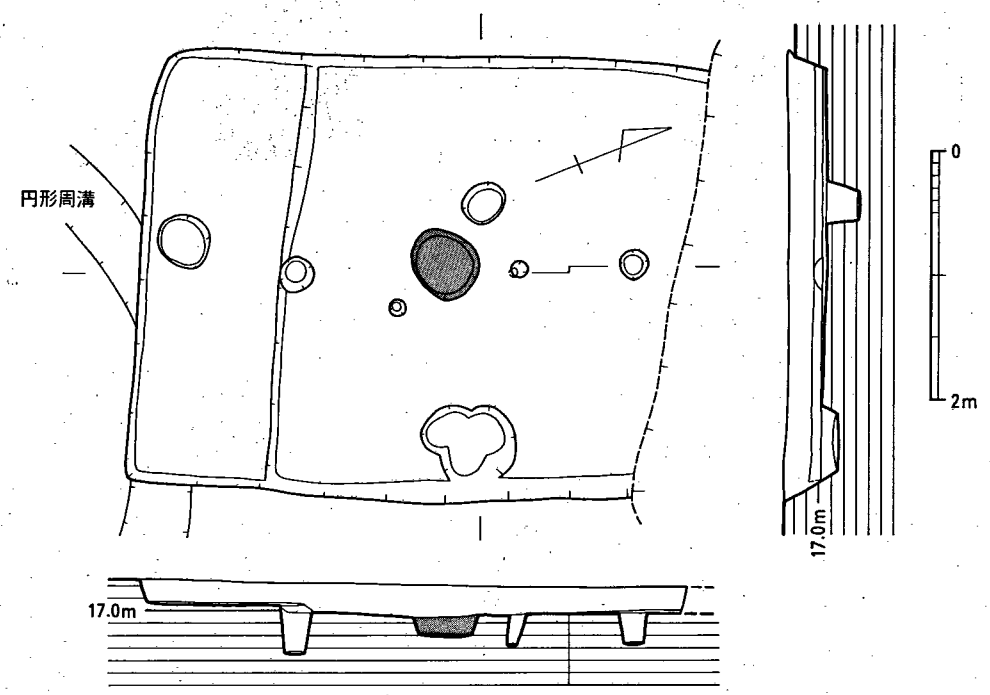
なお、東西断面図に示した屋内土坑と炉を想定する



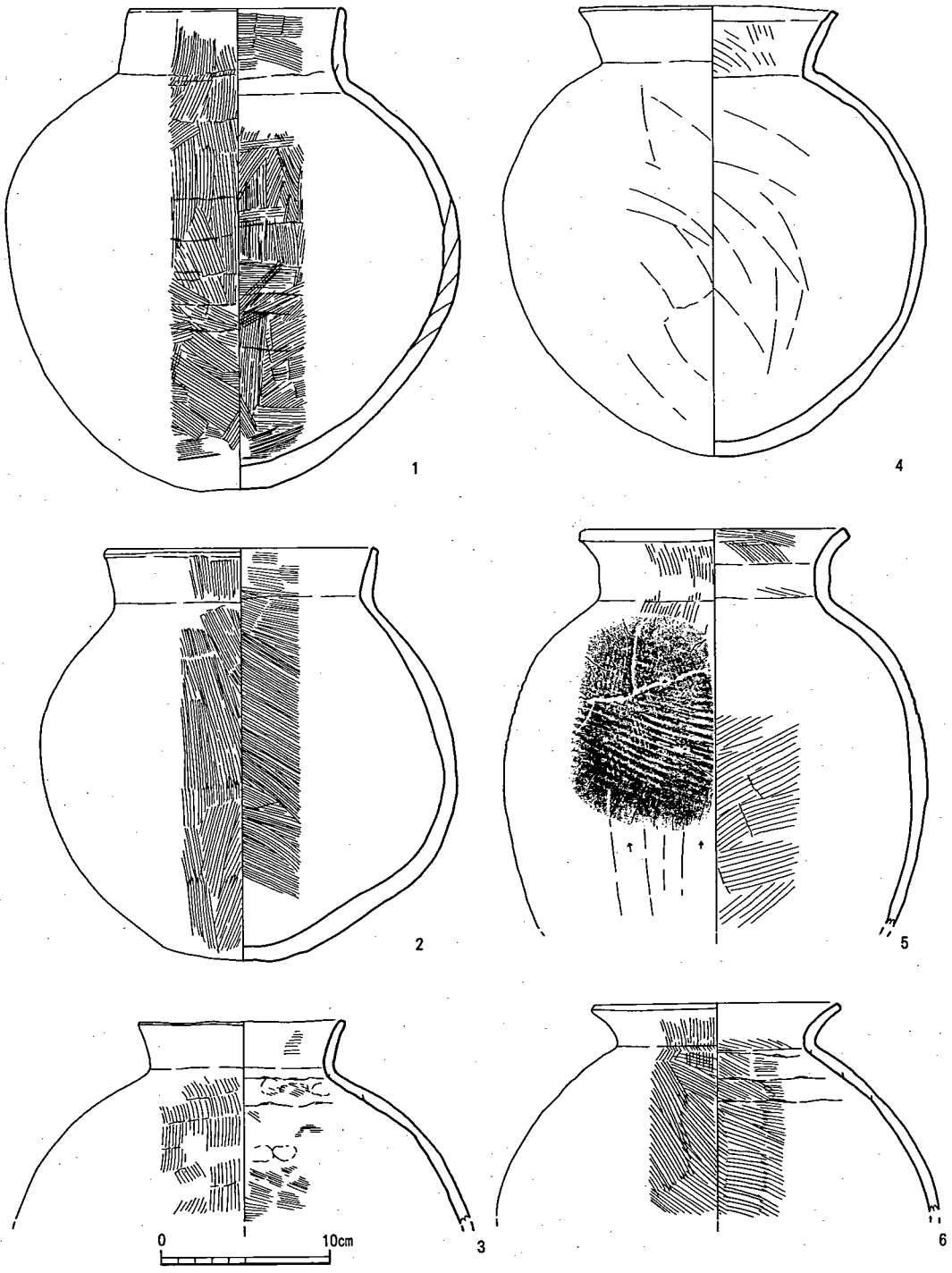
第28図　18号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）



第29図　18号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第30図　19号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第31図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）

土器のレベル差は発掘のミスによるもので、この土器が炉底に据え置かれたものと想定すれば理解できる。

出土遺物

若干の土器が出土している。炉跡出土の甕は図示していないが、内外面を刷毛目で仕上げた体部片で、あまり焼けたようには見えない。

土器（図版67、第28図）

1は1/2弱が残存する長胴の甕で、外面はよく焼けている。底部は3㎝強の小平底を呈する。2は1/4ほどが残る小型鉢で、つくりが丁寧である。3はほぼ完存する手捏製品。

19号住居跡（図版12・13、第30図）

18号住居跡の南西に隣接し、それとほぼ辺を揃える。北辺を撹乱坑で破壊されるが、ほぼ様子は窺える。

平面形は長方形を呈し、短辺長3.5m、長辺は4.5mまで確認できるが、主柱穴を基準に反転すれば5.3mほどに復原できる。深さは最大で0.2m強が残る。

中央付近に炭・焼土を交えた炉跡が設置され、それを中心に2本の主柱穴が配される。南西辺では主柱穴のすぐ南西に幅1.1m、高さ0.1mほどのベッドが付されるが、反対側では確認できていない。

なお、この住居跡は10号溝状遺構とした円形周溝を切る。

出土遺物

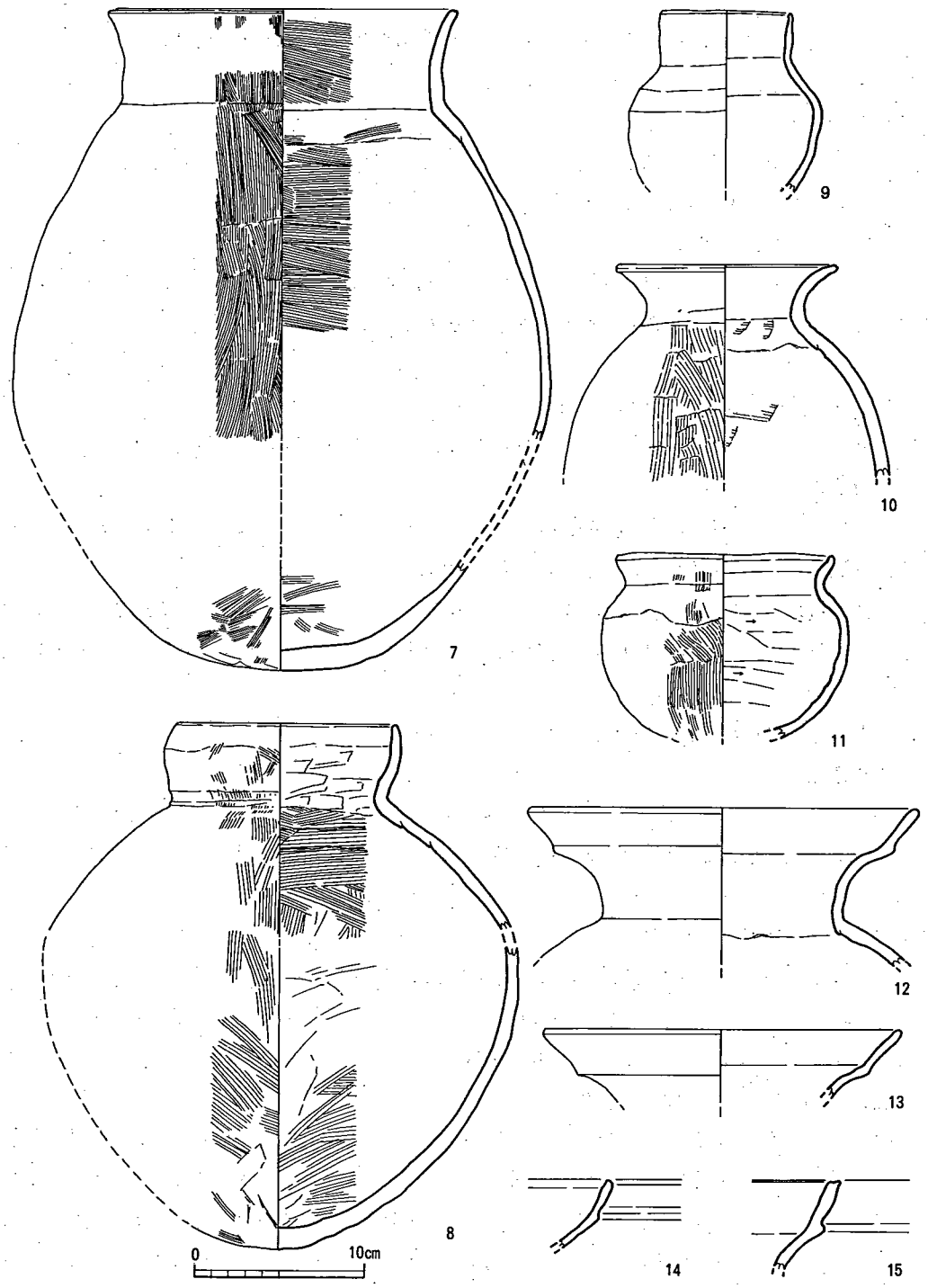
住居跡の全面から多量の土器が出土したがその状態に規則性はなく、乱雑に投棄したようなものであったために記録は写真にとどめて図示していない。図示した以外にもパンケース4箱ほどの土器片がある。

鉄製品（図版72、第14図17･18）

いずれも手鎌。17は残存幅7.5㎝前後、刃部幅2.3㎝を測る。背の厚さは0.2㎝ほどである。18は刃部の一部を欠くが全体を窺えるもので、17に比して刃部の幅が狭くなる。全長8.5㎝ほど、刃部幅1.8㎝前後で、これも背の厚さは0.2㎝ほどである。

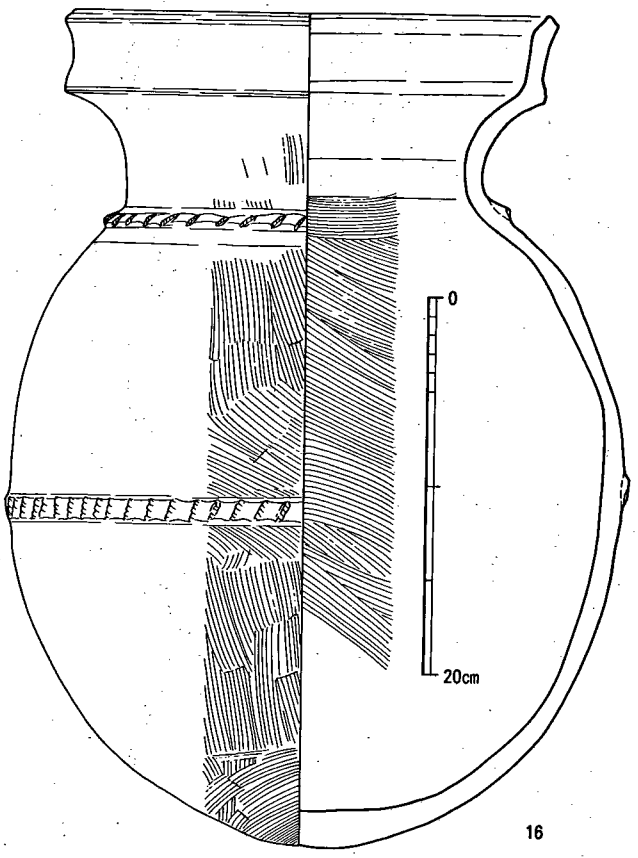
土器（図版67～72、第31図～第39図）

1はほぼ完存。口縁部は直立して、端部を丸くおさめ、体部は張りをもってレンズ状に近い底部へ続く。全体に刷毛目を主体として調整するがつくりは雑である。2も雑なつくりの土器で、口縁部が小さく外傾し、端部に面をもつ。体部は張りをもつが、1に比して最大径部が下位にある。約1/2が残存する。3も2に似る残片で、これも口端部に面をもつ。4は頸部内面の稜がシャープで、口縁部の外反が強い完形品。体部は球形に近く、尖り気味の底部へと続く。体部内面では棒状の工具で引っかいたような痕跡が無数見え、外面も同様である。篦削りや刷



第32図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）

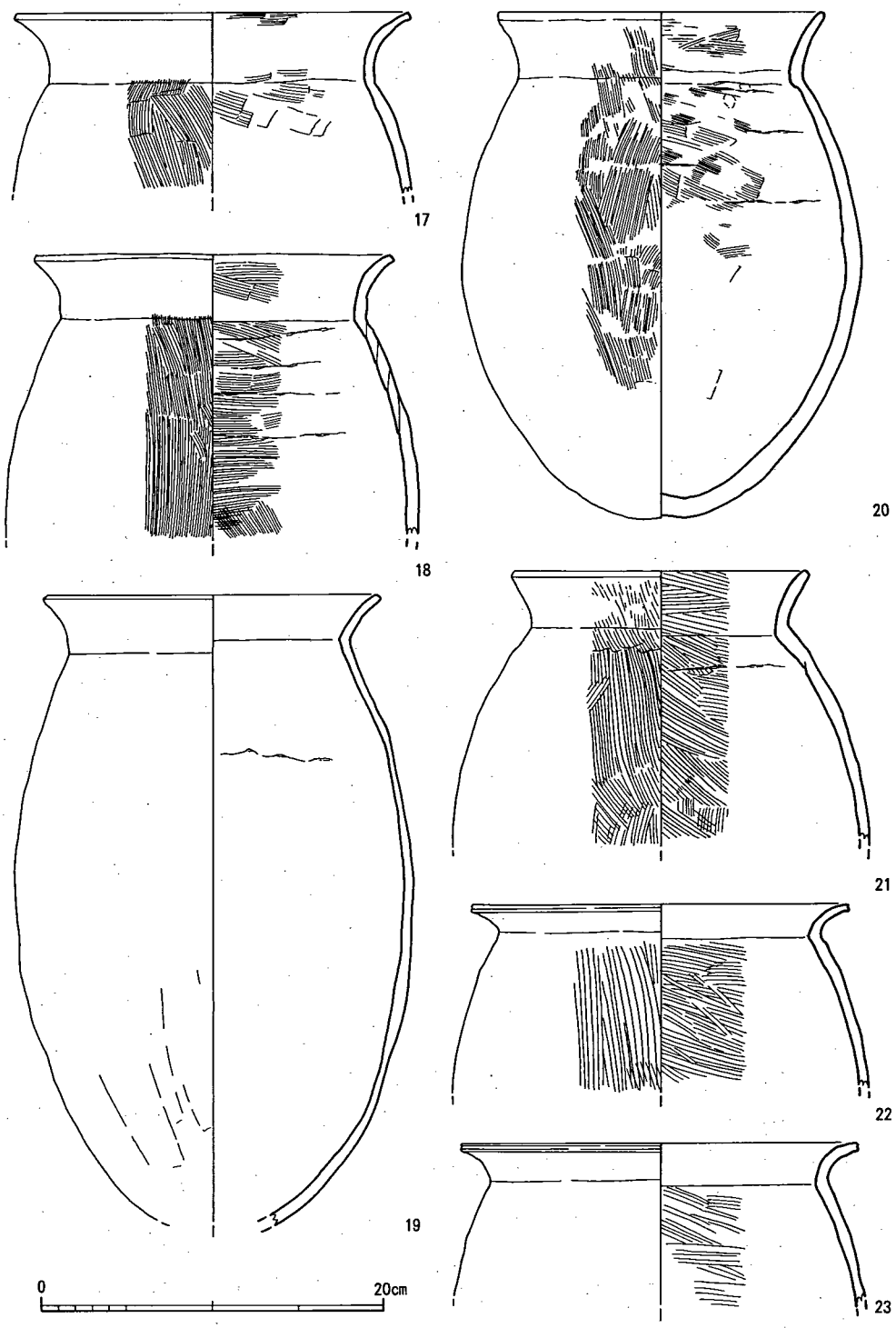
毛目ではないようである。5は口縁部が高くのびてその上半で外反し、端面に刻みを付す。体部は張りをもつが胴長となるようで、外面に粗い平行叩きがはっきり残る。なお、叩きの下位は篦削りのようである。6は口縁部の外反が強く、やはり端部に面をもつ。体部外面は丁寧な刷毛目で、内面は弱い刷毛目で仕上げる。7は上半部と底部が接合しえないが同一個体。口縁部は高く長くのびて、端部に面をもつ。体部は張りが弱く、かつ最大径部が下位に位置するようである。底部は平底に近い。肩部以下が非常に焼けており、煤けた粗雑なつくりの土器。8も図上復原した土器で、これも非常に熱を受けている。口縁部は袋状口縁の名残であるのか、あるいは内彎直立を意識したものか判然としないが端部は丸くおさめる。これも全体に刷毛目を多用する粗雑な土器である。



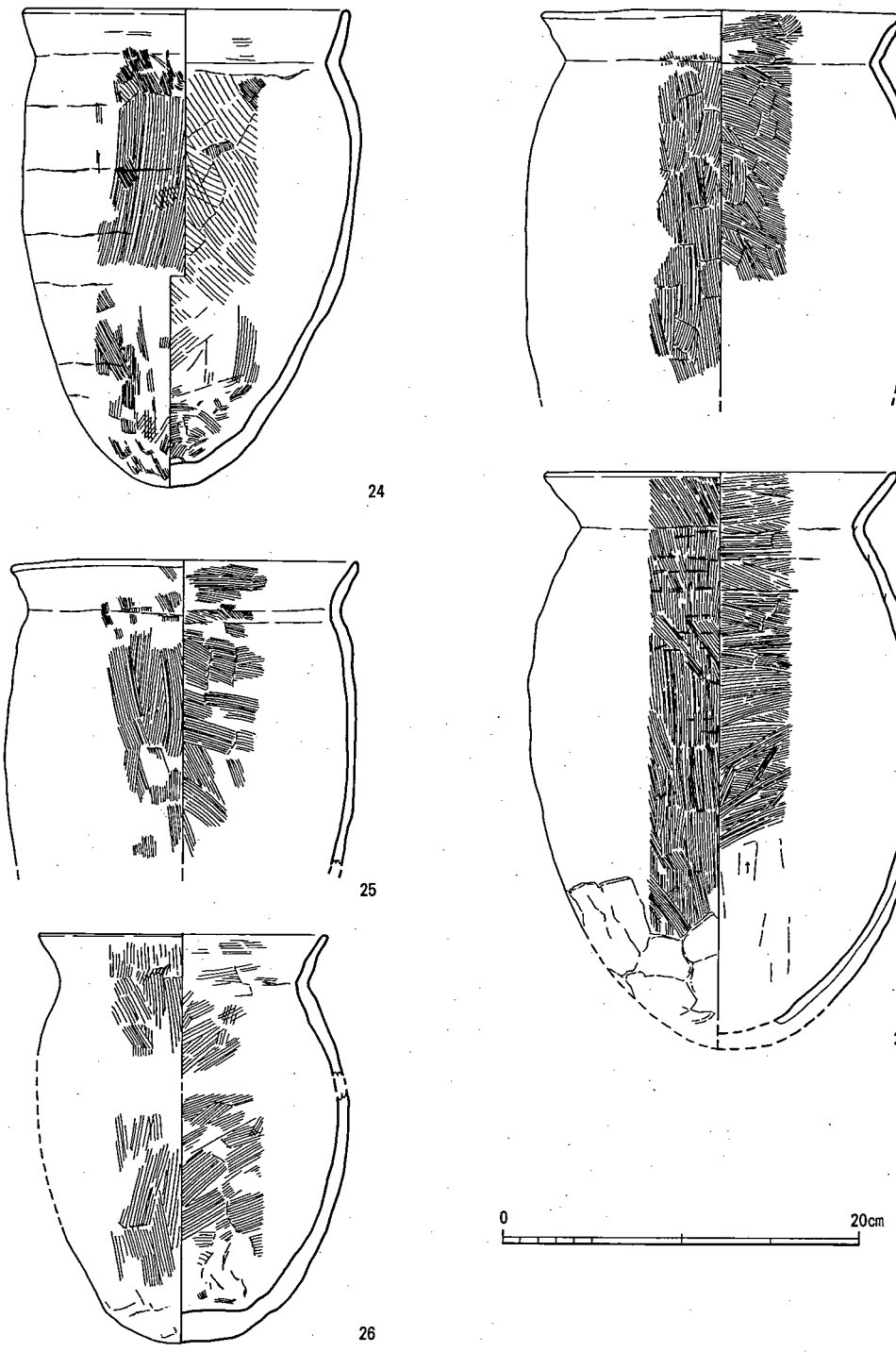
第33図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図3（1/4）

9は小型の直口壺で、体部に比して口縁部は発達し、端部は小さくつまれる。調整痕ははっきりしない。10は頸部がよく締まる壺で、口縁部は浅く大きく開く。体部外面には叩きが使用されたようにも見える。11は約1/2が残存。口縁部は緩く外反し、端部がつまれる。体部内面は横方向の篦削りで調整される。12～16は二重口縁壺で、前4点は小片である。16は体部の一部を欠くがほぼ完存する。口縁部は直立して上半部が外反するが、端部に面をもち、上面は小さく匙面となる。肩部に断面三角形の、体部最大径部に断面台形の刻目突帯を付すが、いずれも整ったものではない。底部は完全な丸底とはならず、中心をややずれた位置でそれと意識したような、刷毛目の空白部が見られる。調整は頸部以上は丁寧に横撫でが施されるが、体部は全体を雑な刷毛目で仕上げる。

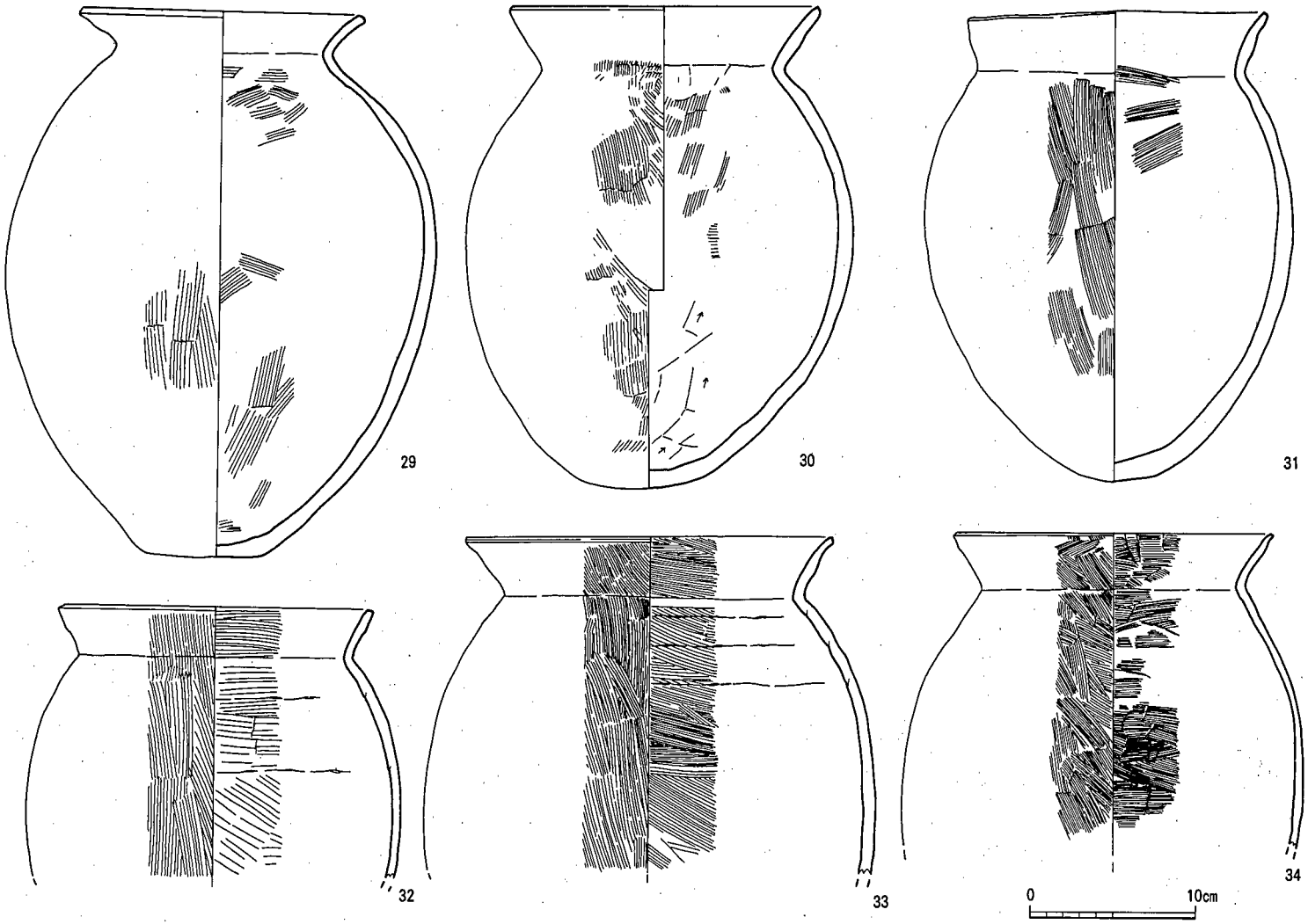
17は頸部の締まりが弱く、口縁部が強く外反外彎して長くのびる。18も似た形態である。



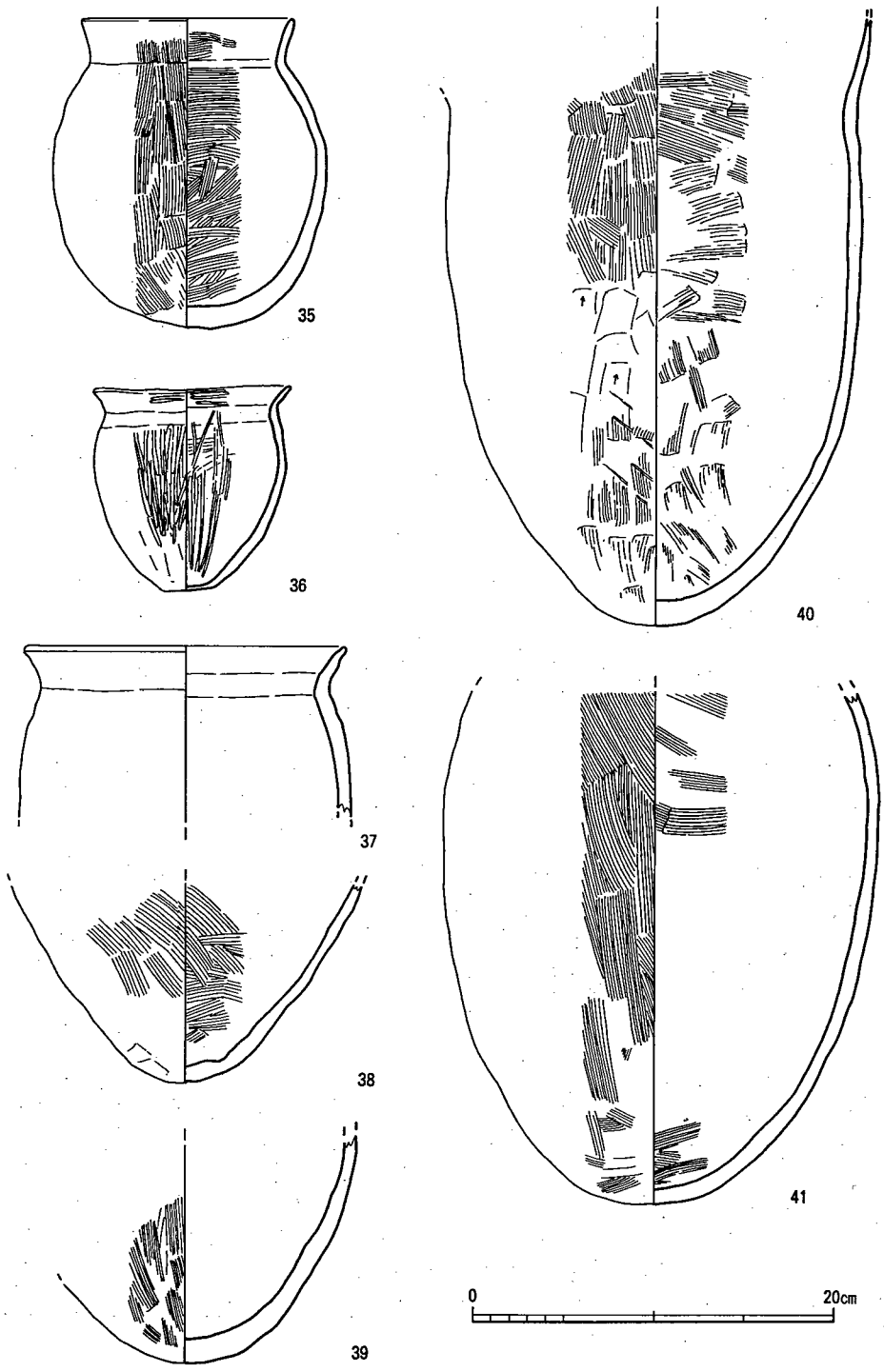
第34図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図４（1/4）



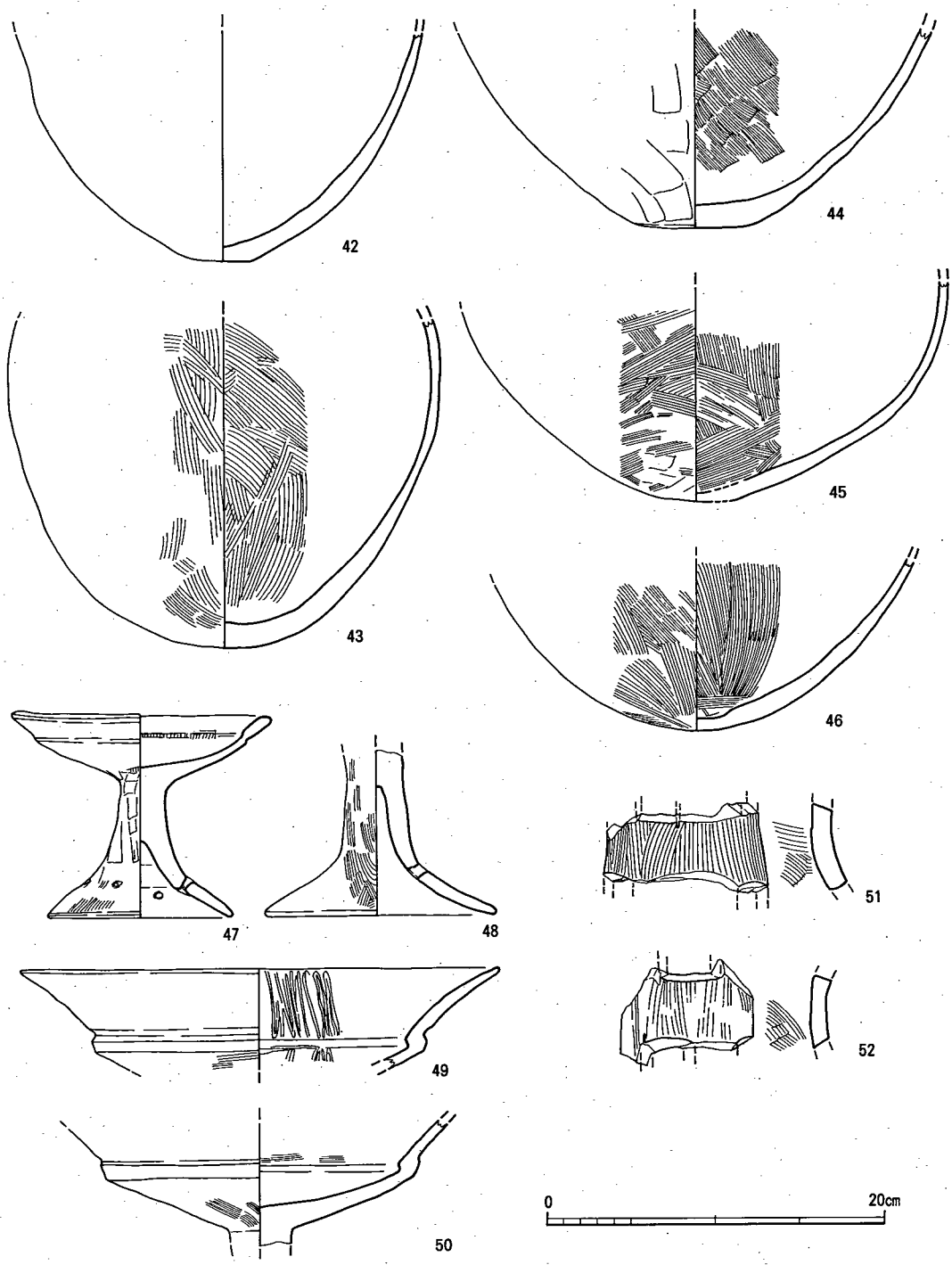
第35図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図５（1/4）



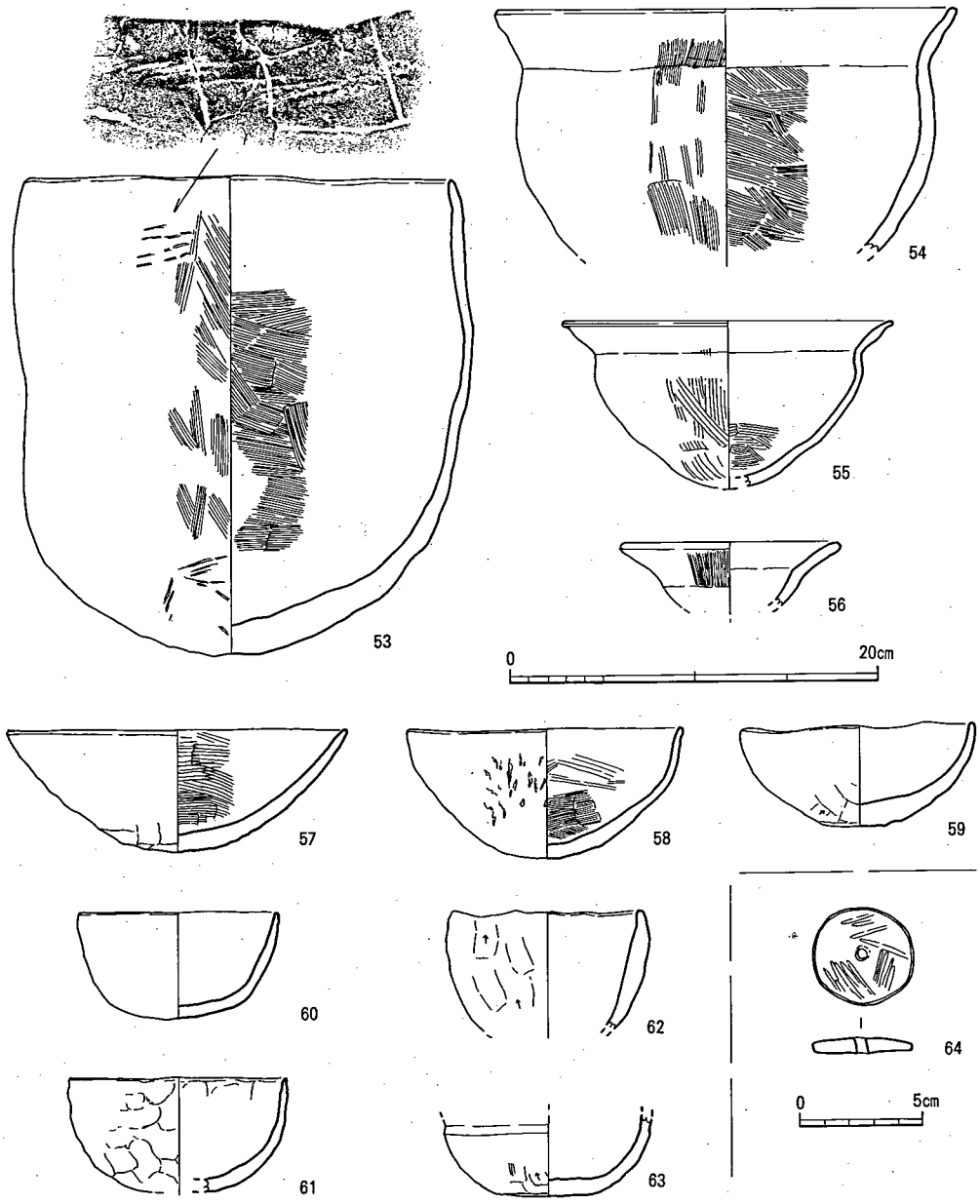
第36図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図６（1/4）



第37図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図７（1/4）



第38図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図８（1/4）



第39図　19号竪穴式住居跡出土遺物実測図９（1/4,1/3）

19は口縁部の外彎が弱い長胴の甕で、体部の調整痕はよく見えないが、刷毛目のようである。20も口縁形態は先の土器に似るが、体部は丸味が強い。21は体部の大部分を欠くが、口縁部は同様である。22・23は口縁部がさらに強く外彎外傾するもので、口端部はシャープな面をもつ。24は口縁部が内彎気味に高く立ち上がり、頸部内面にシャープな稜をもつ。体部は長胴で、尖り気味の底部へ続く。25も頸部の締まりが弱い。端部に面をもつが、形状は不整なものである。全面を細密な刷毛目で仕上げる。26も粗雑な土器で、口縁部は波打つ。体部は長胴丸底となる。27・28も長胴の甕であるが、口縁部はシャープに屈曲し、外面が微妙な曲線を描く。28の底部外面付近は焼け弾けが著しい。29は体部の張りが強い甕で、底部は平底となる。30も体部が張り、口縁部は直線的に外折する。内底面付近に篦削りが見える。31～34は口縁部が中膨らみとなる形態で、端部に面をもつ。いずれも刷毛目を主体として用いるが、31・34では細密な刷毛目原体を用いる。

35は器形がいびつな小型の甕で、底部付近がよく焼ける。36は小型精良な甕で、意識的に赤く焼成されたようである。体部内外面ともに篦削りの後に大雑把な篦磨きを施す。

40は長胴の甕で図示部分は完存する。体部外面は刷毛目原体を用いて篦削りのような痕跡を残す。41も図示した部分はほぼ完存。内底面に焦げ付きがある。42～46の底部は丸底あるいはそれに近い底部のもので、いずれも刷毛目で調整するが、45・46ではとくに細かい原体を使用する。

47は完形の小型高杯。杯部は中位上方で屈曲するが、口縁部は矮小化する。なお、口端部は水平な面をもつ。脚部は内彎気味に踏ん張り、4方に透孔を穿つが、その配置は均一ではなく2孔1対といった配置である。器表は全体に荒れる。48は柱状部が完存し、脚端部は大部分を欠くが、透孔は3方向である。49・50は同様な形態の高杯片で、屈曲部が非常に誇張されたもの。これも器表が荒れるが、前者では暗文らしきがみえる。51・52は異形の土器で器台であろうか。残存部の復原径は9㎝ほどとなる。外面に縦方向の粗い刷毛目を、内面では横方向の刷毛目あるいは撫でで調整し、長方形の透孔を千鳥に近い配置で開けている。残存部から推して4方向に穿孔するようである。

53は砲弾形の鉢。刷毛目を主体とするが、口縁部付近の外面では棒で引っかいたような痕跡が残り、また底部外面では露骨に指撫で痕を残す非常に雑なつくりの土器である。54・55は口縁部が微妙な曲線を描く。55・56は小片で、とくに56では復原径に不安がある。57は粗雑なつくり。58は外面に無数のシワが残る。59は非常に肉厚な土器であるが、内面は丁寧に仕上げる。外面底部は篦削りで調整する。61・62は手捏土器。

土製品（図版72、第39図64）

直径4㎝、厚さ0.6㎝、重量10.4ｇを測る紡錘車。表面にはわずかに篦磨きが施されるが、下面のつくりは雑である。また、孔は焼成前に軸を用いてつくっている。

20号住居跡（図版14、第40図）

19号住居跡の北東に隣接するが、大きな撹乱坑によってその大部分が失われる。

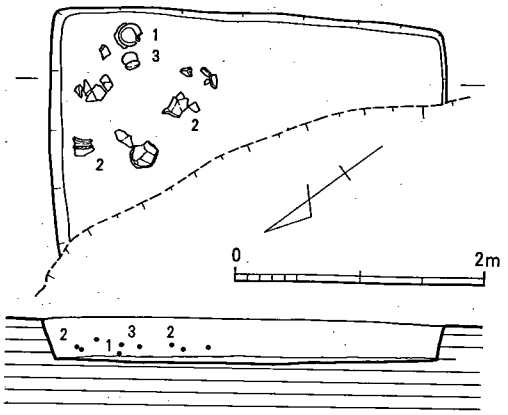
残存する規模は短辺と思われる部分が3.2m、長辺と思われる部分が2m以上である。柱穴は確認できず、ベッドも残存部には存しなかった。

出土遺物

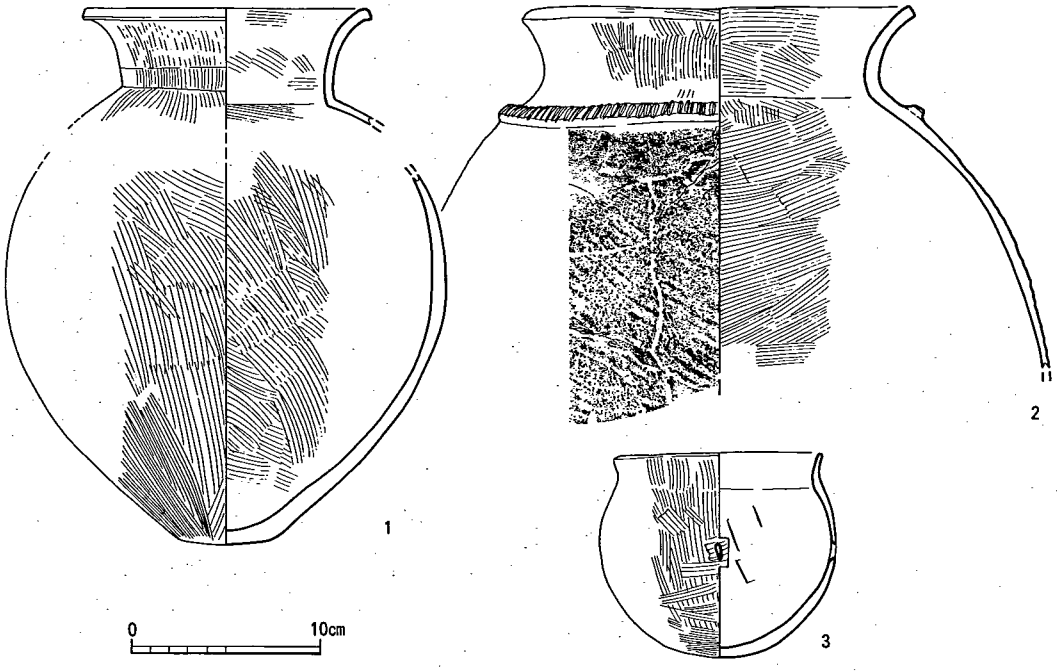
北辺付近に集中して土器の出土が見られた。

土器（図版72・73、第41図）

1は接合しえないが同一個体であろう。口縁部は完周し、端部は小さく下方につまみ出され、頸部内面に明瞭な稜をもつ。全体に刷毛目で調整するが、丁寧に造られた土器である。2も図示部分はほぼ完存する。頸部下の突帯は丁寧に刻みを付す。体部外面は粗い叩きの後にやはり粗い刷毛目を付す。3は埋土中出土の土器でこれもほぼ完



第40図　20号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第41図　20号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

存する。体部内面は篦削りの後に丁寧に撫でるようである。なお、体部中位に焼成後に穿たれた孔がある。

21号住居跡（図版15、第42図）

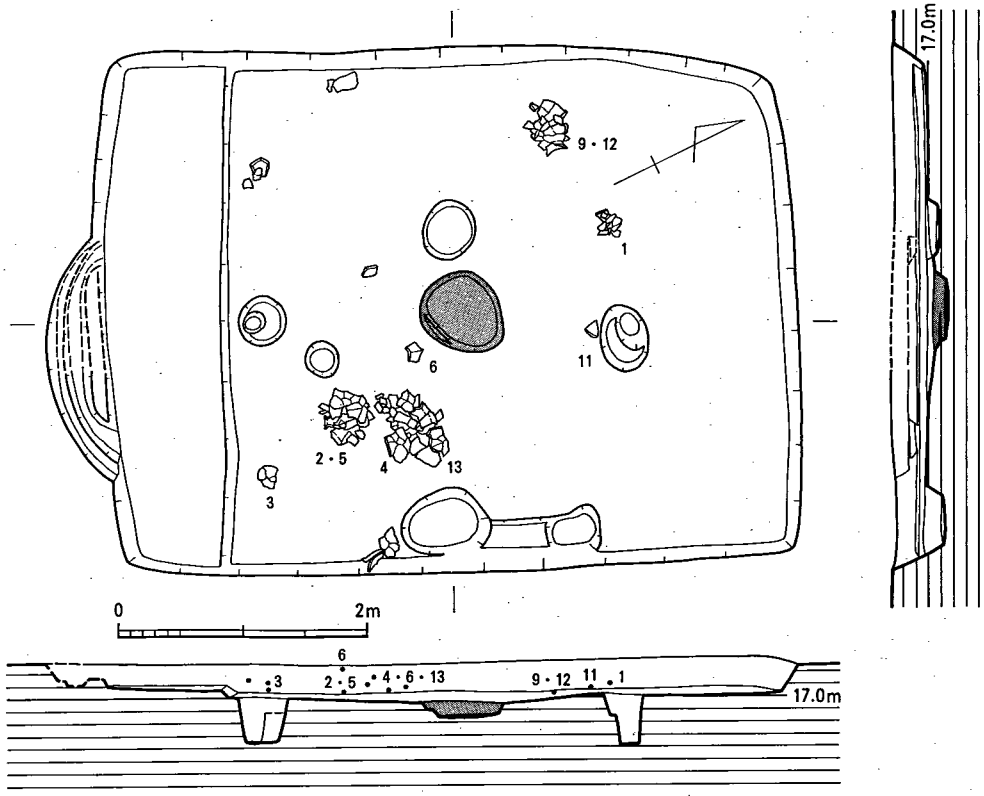
20号住居跡の東に接して位置するが、他の住居跡との切合関係はない。しかし、16号溝状遺構とした小規模な円形周溝を切る。

平面形は長方形で、規模は4.2×5.6m、深さは最大で0.3mほどとなる。これも南西辺にのみ幅0.9m、高さ0.1mの規模のベッドを配する。また、主柱穴は長軸線上の２本となる。

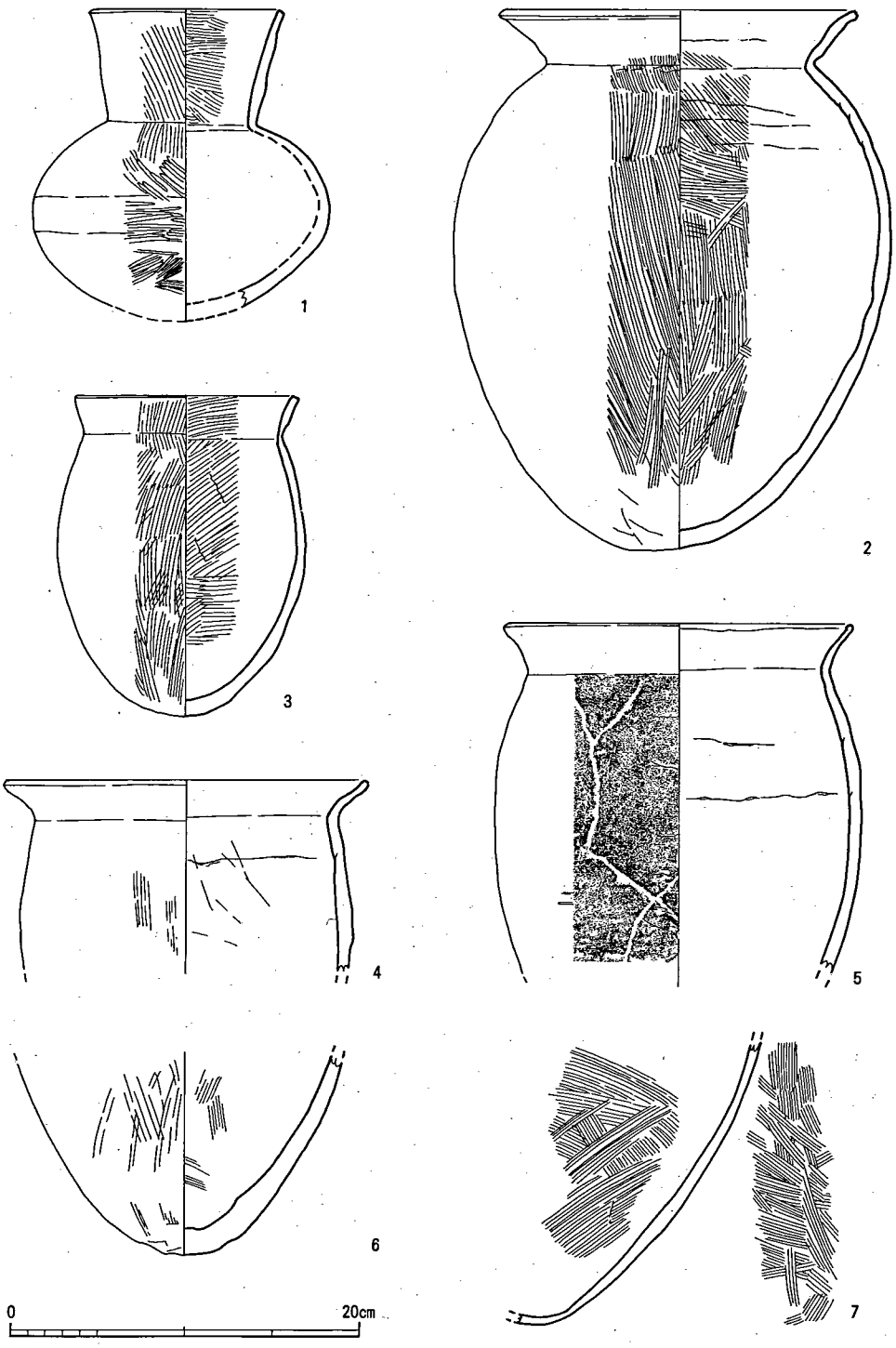
この住居跡ではベッドの付く南西辺に幅２m、長さ0.5mほどの弧状の張り出しが取付く。調査段階ではこの遺構の性格を思わせる痕跡は得られなかった。

出土遺物

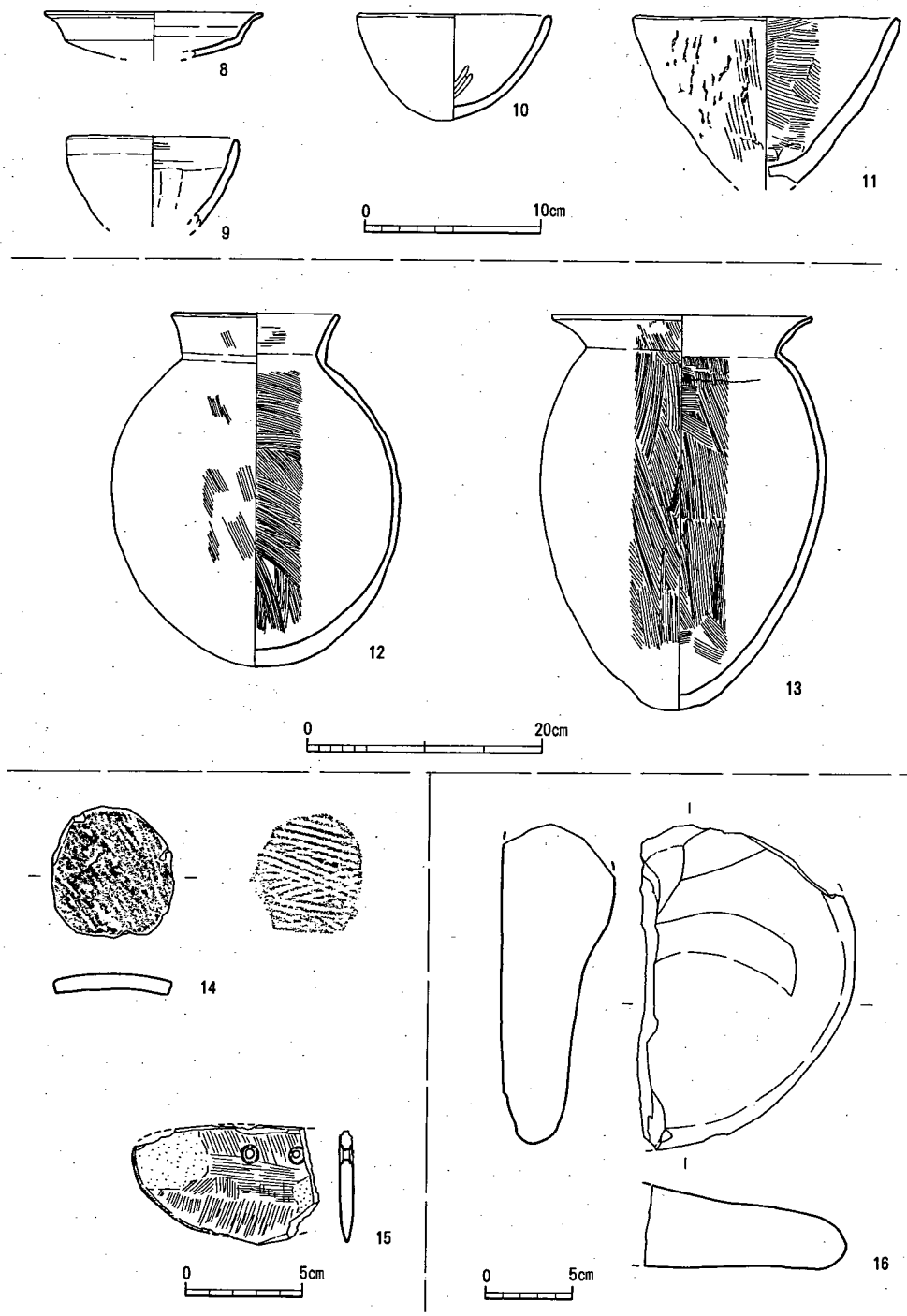
床面近くから良好な状態で数点の土器が出土している。遺構図に番号を落としていない土器は埋土中として取り上げたものである。また、土製円板は住居跡内部ではなく、周辺の遺構検出作業中に出土したものであるが、ここで説明を加える。



第42図　21号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第43図　21号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）



第44図　21号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/6,1/4,1/3）

鉄製品（第14図10）

鉄鏃の茎と思われる残欠。残存長2.3cmで、断面形は最大部で一辺長0.5cmの方形となる。

土器（図版73・74、第43・44図）

1は偏球形の体部に円筒形の口縁部が付き、口端部を断面方形に成形する。体部外面は篦磨きで仕上げるが、内面の調整はよくわからない。口頸部はほぼ完存、体部の1/4を欠く。2も完存に近い。口端部が外折し、端面をもつ。体部内面上半に幅1cm強の粘土紐の継ぎ目が見える。12も完存する。口縁部は小さく外傾し、これも端部に面を付し、全体に主として刷毛目を用いて仕上げる。

3は上半の1/2を欠くほかはよく残存する。長胴の甕で、底部は小さな平底を残す。4は口端部を内側上方へつまむ。体部内面を篦削り状の刷毛目で、外面を弱い刷毛目で仕上げる小片。5も同様の甕で、器表が磨滅するがわずかに粗い平行叩きが観察できる。6・7は尖底気味の底部。13は全体の3/4が残る。2と同様、口端部付近で外折する。

8は高杯のような形態であるが口径12cmほどの小型品。小片である。

9は図示部分がほぼ完周し、内面に刷毛目の工具痕が微かに見える。10は約1/4の残片。内面の調整は丁寧である。11は脚が付くかも知れない。外面は部分的に刷毛目を施すが、無数のシワが残る。

土製品（第44図14）

住居跡周辺から出土した円板で上下両面に条痕が残る。縄文土器かと思われる。

石製品（図版74、第44図15・16）

15は暗灰色を呈する輝緑凝灰岩製と思われる石庖丁の残欠。穿孔は両面ともに2段におよび、ほぼ直線的に穿たれる。使用痕は孔直下付近は刃部とほぼ平行に、それ以外の部分では同じくほぼ直角方向に走る。図左端付近は研磨が及んでいない。

16は安山岩製の石皿様の石製品。全体に滑らかな面となるが、使用痕らしきは見えない。

22号住居跡（図版16、第45図）

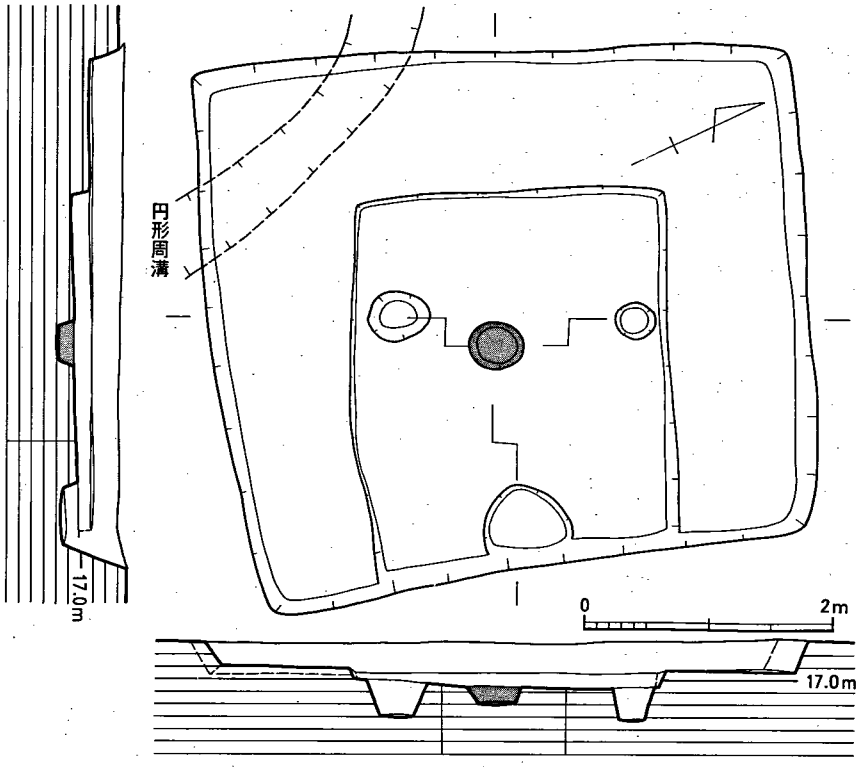
19号住居跡の南東に近接し、やはり10号溝状遺構を切っている。

平面形はややいびつとなるが、ほぼ4.2～4.9m、深さは最大で0.3m強を測る。中央やや南西に偏して炭を出土した炉跡が設置されるが、主柱穴はそれに近接して2本が配される。平面形は主柱穴方向が短く、奥行きのあるものとなっている。

ベッドは屋内土坑の取付く辺を除いて3辺に付され、その幅は0.9～1.2m、高さは最大で0.2m近いものとなる。

出土遺物

南側主柱穴を覆うような位置でまとまって土器が出土している。その状態は南側から投げ込



第45図　22号竪穴式住居跡実測図（1/60）

まれた様を呈する。鉄製品もそれに混入していたようである。

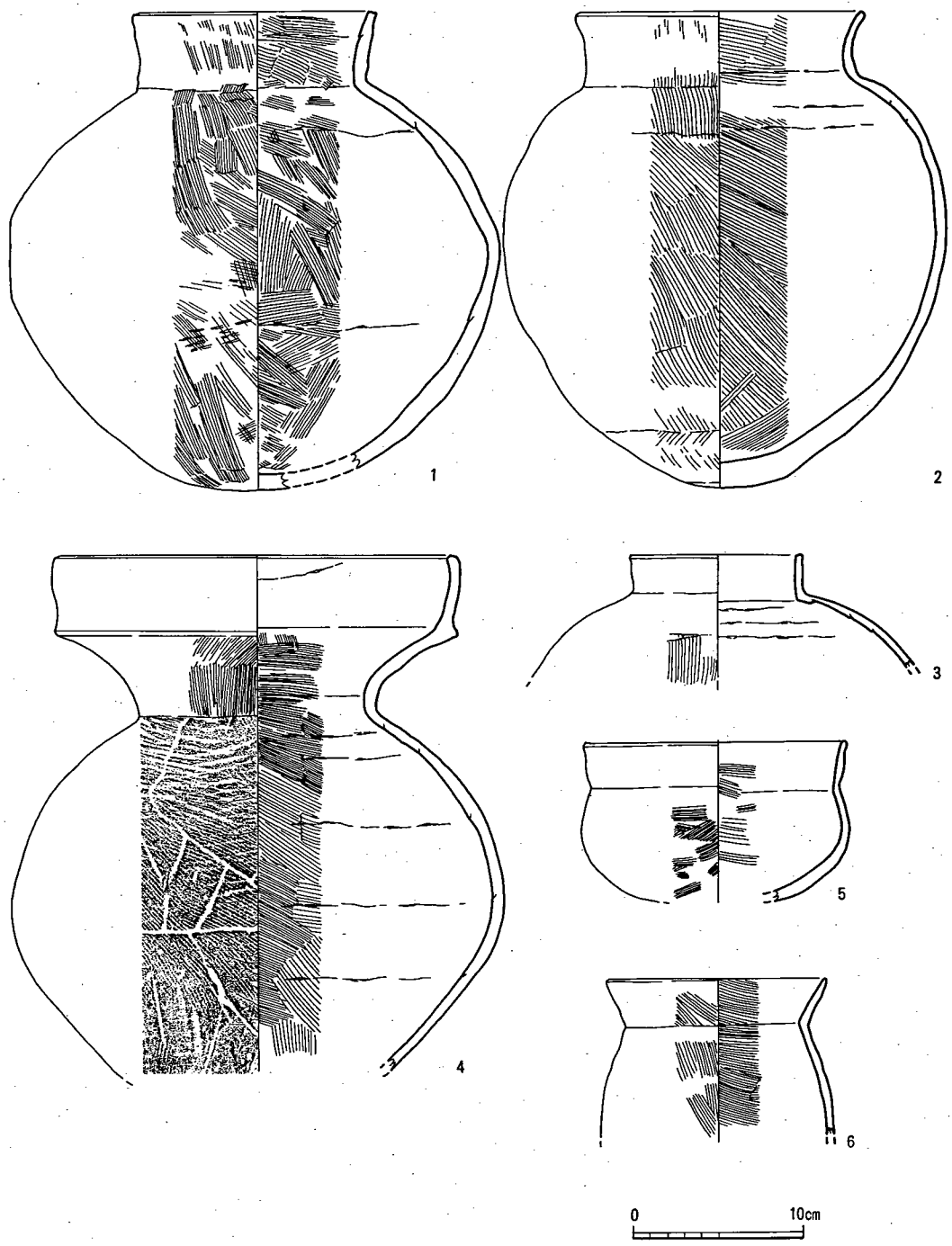
鉄製品（図版76、第14図２・６・８・９・25）

２は圭頭式鉄鏃と思われるものであるが、錆のために細部ははっきりしない。最大の厚さは0.2cmほどである。６は完形品であるが、これも錆びて膨らみ、細部は不明。逆刺のない柳葉式と思われ、全長約6.9cm、刃部の厚さは0.2cmほど、茎は断面方形のようである。８も完存する。全長7.2cm、刃部の厚さ0.2cmほどである。身は柳葉式で鋭い逆刺を有する。逆刺の下位に篦被の突起が見えるが左右非対称である。９は凹基式の三角族で、右側の逆刺先端付近も欠損するのかも知れない。これも錆びて膨らむ。

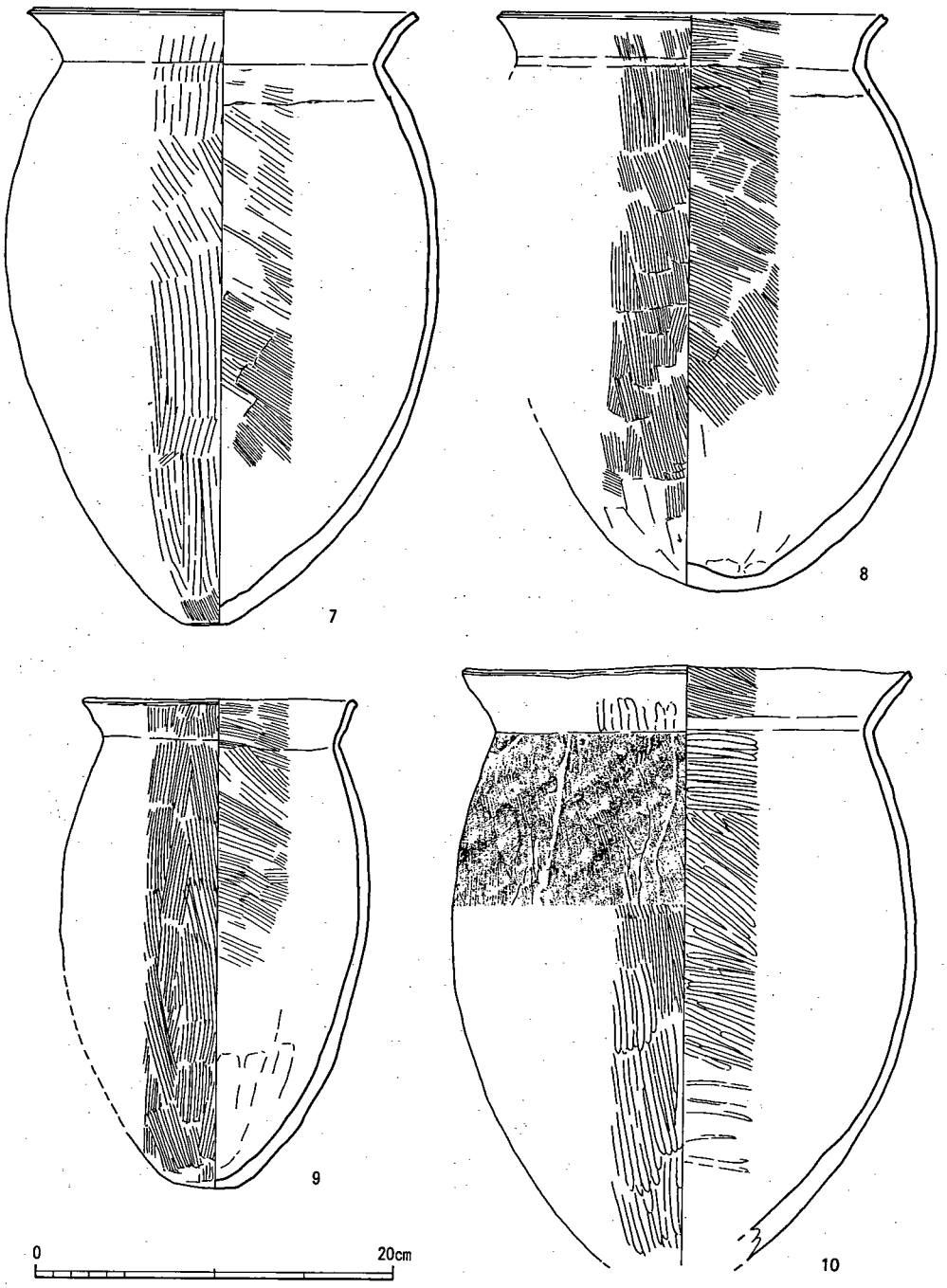
25は錆がひどく、形状がわからないほど膨らむ。ただ、0.5cm強の厚みがあるようで、鉄素材であるかも知れない。

土器（図版74～76、第46図～第47図）

１は二次的な火熱のために赤変する壺。体部外面下半に叩きの痕跡が見える。全体に粗雑なつくりである。２は口縁部が緩く外彎する。体部の形状も１とは異なり、張りが弱い。底部外面は刷毛目の後に部分的に篦削りを行うが、刷毛目の方向もある部分を境に異なっている。こ



第46図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）



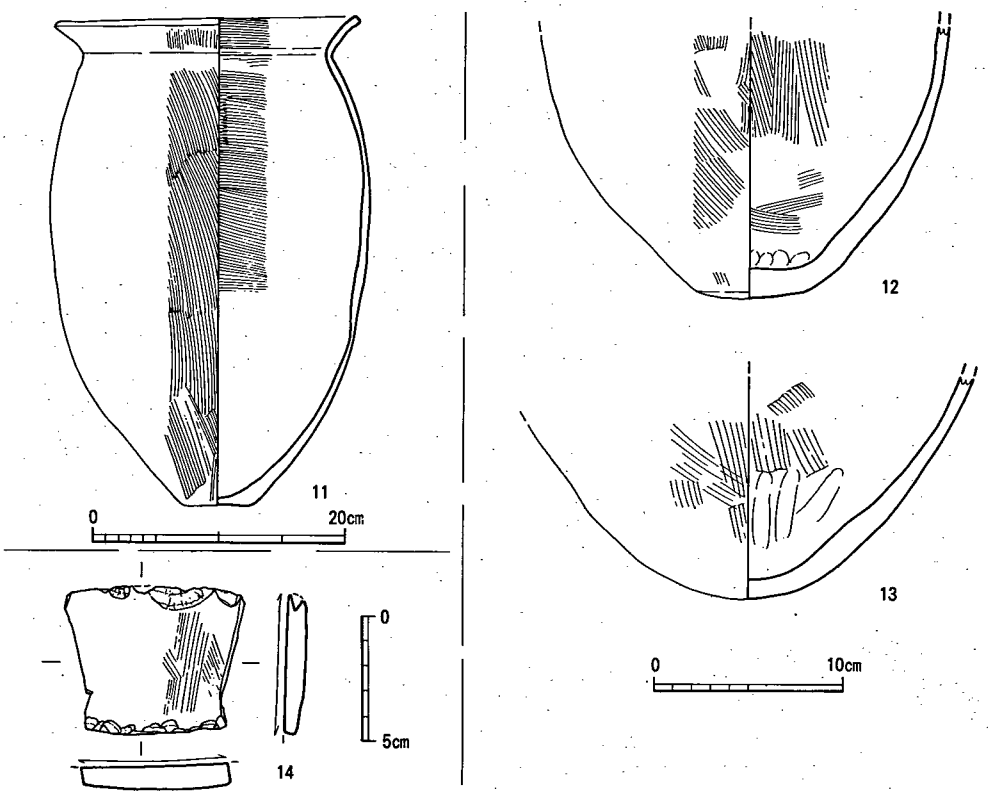
第47図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）

の2点はほぼ完存する。3は小片。体部内面に幅1cmほどの継ぎ目がよく残る。4は図示部分が完周する。体部外面は粗い叩きの上を粗い刷毛目で仕上げる。内面には粘土紐の継ぎ目がよく残り、全体に雑なつくりである。

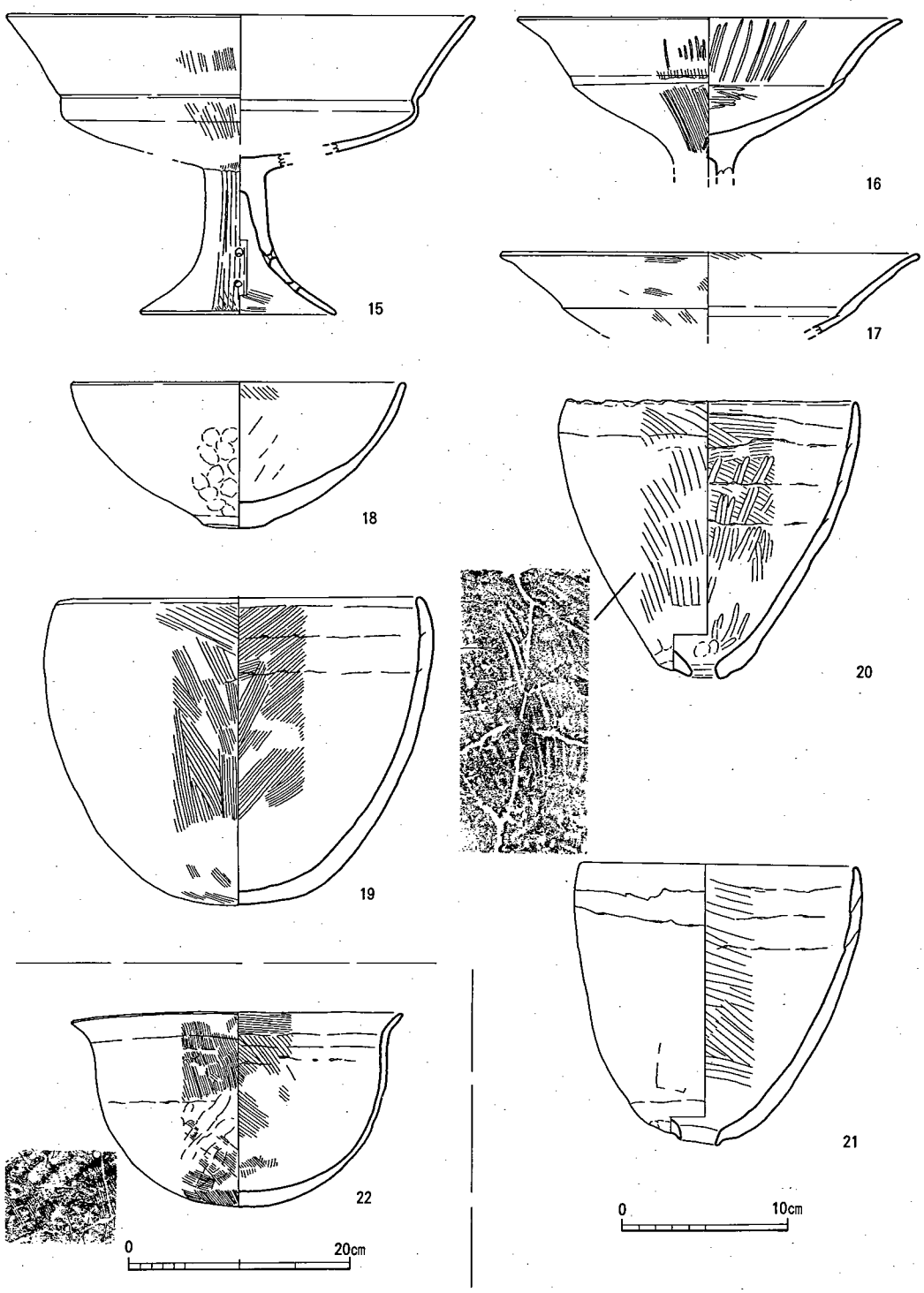
5は全体の1/4ほどが残る。これも粗雑なつくりである。

6は小片。頸部内外面の稜はシャープである。7・8は口端部が外折するよく似た甕だが、底部の形状は異なる。7は体部以下がほぼ残るが、口縁部のほとんどを欠く。体部内面では中位付近を境にして刷毛目原体を変えている。8は約1/2が残存し、底部外面を篦削りで丸底化している。9は口縁部が内彎気味に立ち上がり、底部は刷毛目で平底化する。10は約3/4が残存する。全体に刷毛目を多用するが、体部外面に斜めに走る指撫で痕かと思われる凹凸がよく見える。11は長胴平底の甕。外底面の全体がよく焼けており、内定面に焦げ付きがある。12・13は内底面に指撫であるいは指頭痕が残る。

15～17は高杯。15は接合しえないが、同一個体であろう。脚部の透孔は2方に穿たれる。16は雑な磨きを暗文風に施す。中位の屈曲部は弱く、凹線を刻んだような状態である。



第48図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図3（1/6,1/4,1/3）



第49図　22号竪穴式住居跡出土遺物実測図４（1/4）

18は外面に指頭痕を多く残し、口縁部付近には篦削りを入れるが、内面はごく丁寧に仕上げる。19は全面が焼けて赤変する。内底面付近は指撫で、それ以外はほぼ刷毛目で仕上げる。

20は粗雑なつくりであるが、内面には篦磨きが使用される。外面はごく浅く、幅広の刷毛目を使用する。21も雑なつくりで、口縁部が歪む。外底面付近には指撫で痕が残り、中位付近には篦削り状の痕跡がある。いずれも粘土紐の継ぎ目がよく見える。

22は口径30㎝ほどの鉢。これも体部外面に斜位の指撫で痕が残る。

石製品（図版76、第48図14）

砂岩製の砥石状の石製品。縁辺の剥離は非常に浅く、意図的になされたものかわからない。図示した付近にのみ微細な条痕が見える。図下面は剥離面である。

23号住居跡（図版17、第50図）

22号住居跡の南東に近接し、大部分が調査区外へ続く。また、28号住居跡と大きく重複する。判明する規模は短辺3.2m、長辺は1.6mを検出したのみである。深さは最大で0.2m。

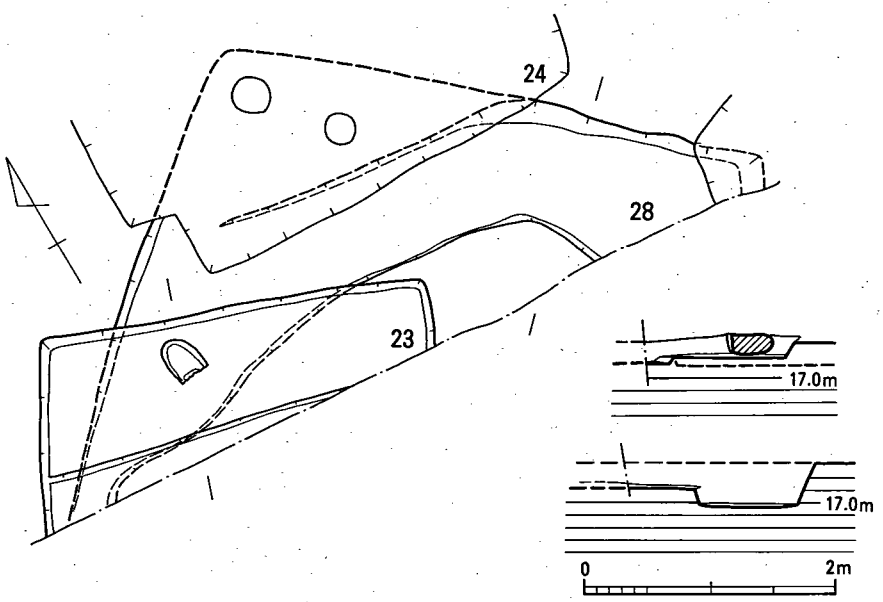
北辺に幅0.8～1.1m、高さ0.1mほどのベッドを配する。主柱穴は未確認。

出土遺物

強く外反する、口端部を断面方形につくる甕などの土器小片が若干出土する。

土製品（第52図７）

直径５㎝弱の円板で重量は23.7ｇ。下面に縦位に近い条痕が見える。



第50図　23・28号竪穴式住居跡実測図（1/60）

24号住居跡（図版17、第51図）

23号住居跡の北に接して位置し、やはり28号住居跡を切っている。

平面形はほぼ3.8×4.5mの長方形を呈するが、南西隅が直角に内側へ小さく張り出している。深さは最大で0.3mほどである。

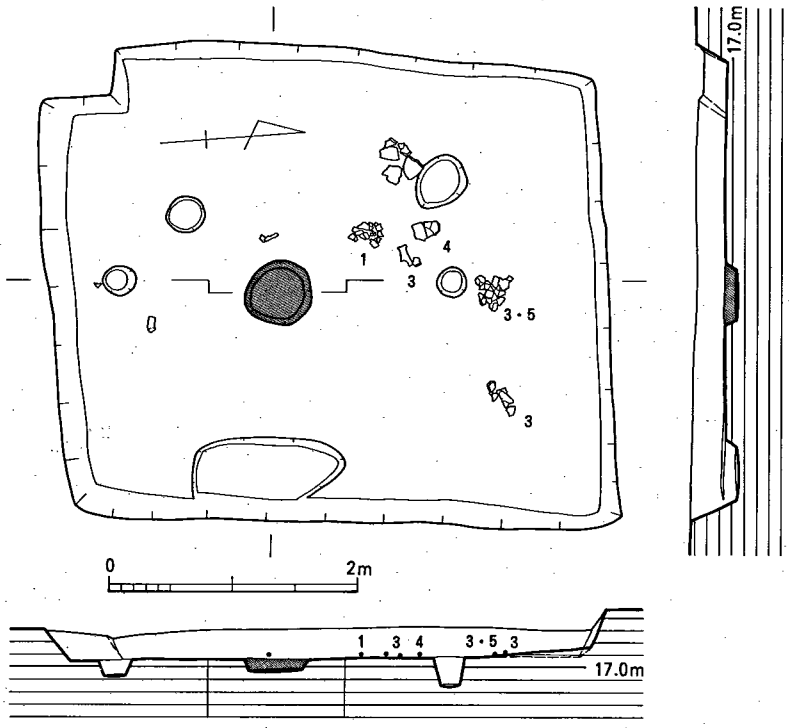
中央から南へかなり大きく偏して炉跡が位置し、それを中心としてほぼ等間に2本の主柱穴が配される。屋内土坑も炉跡に対応して南へ偏る。この偏りがベッドに規制されたものでないことは、北主柱穴のさらに北側の床面に接して土器が出土していることから判る。

出土遺物

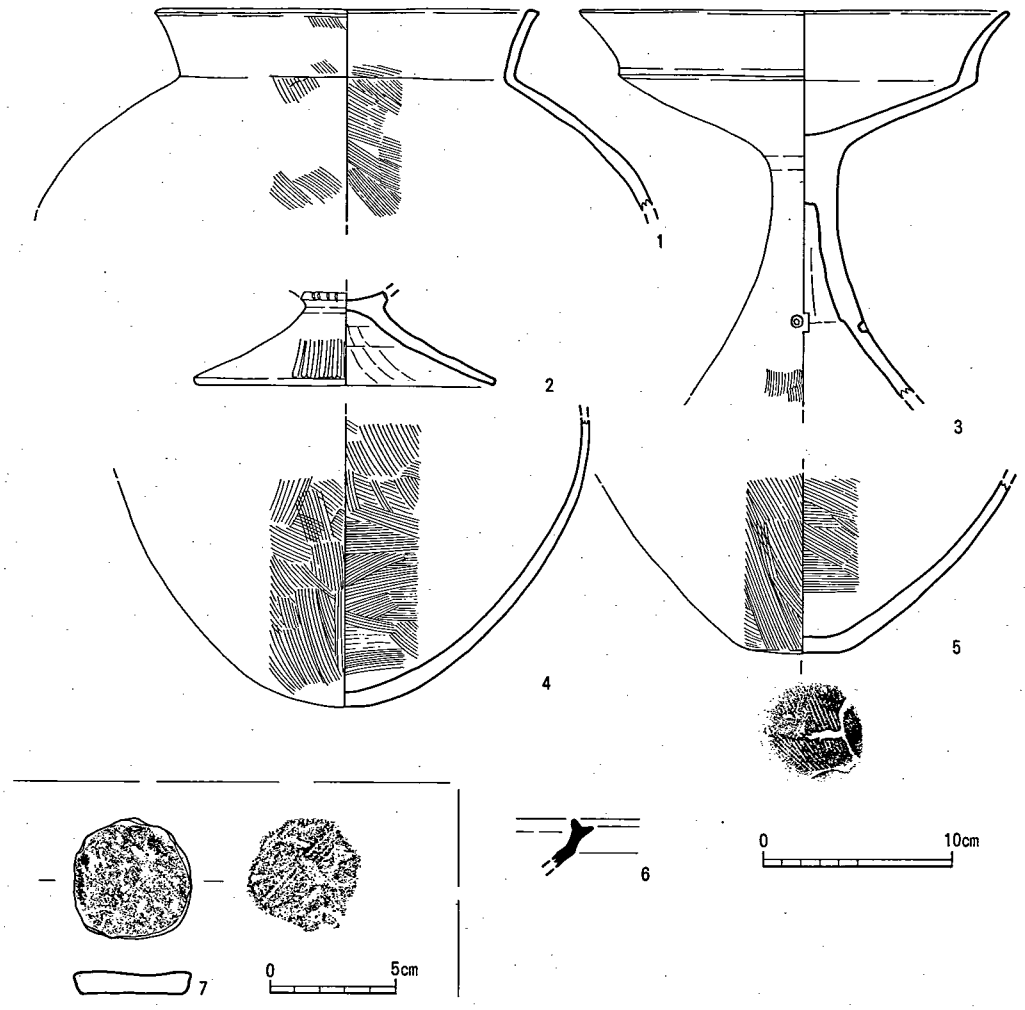
北側に偏って、床面直上でいくつかの土器が出土した。なお、埋土中から須恵器片が出土しており、それも図示している。

土器（図版76、第52図）

1は約1/4が残存する。口縁部の外反はシャープで、口端部は断面方形につくられる。2は脚台。剥離部には接合のための刻みが残り、内面は丁寧に仕上げる。3は図示部分がほぼ完周する高杯で、杯部の外反は高く、短い。脚部には4方向の刺突があるが、通常のようには貫通していない。器表は風化が著しい。4・5は底部。4は底部まで刷毛目が及んで丸底となるが、5では底部に刷毛目を施して平底化する。6は須恵器小片。



第51図　24号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第52図　23・24号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

25号住居跡（図版18、第53図）

23号住居跡の東に近接し、これも多くが調査区外へ続く。26号住居跡と大きく重複し、28号住居跡の一部を切る。

北辺長は4.6m、東辺は約3mまで確認できる。深さは最大で0.2mが残るが、ベッドは確認できない。また、炉跡・主柱穴も同様である。

出土遺物

図示した以外では、粗い叩きを有するものや外来系の体部内面篦削りの甕などの小片が若干出土する。

鉄製品（図版77、第14図12）

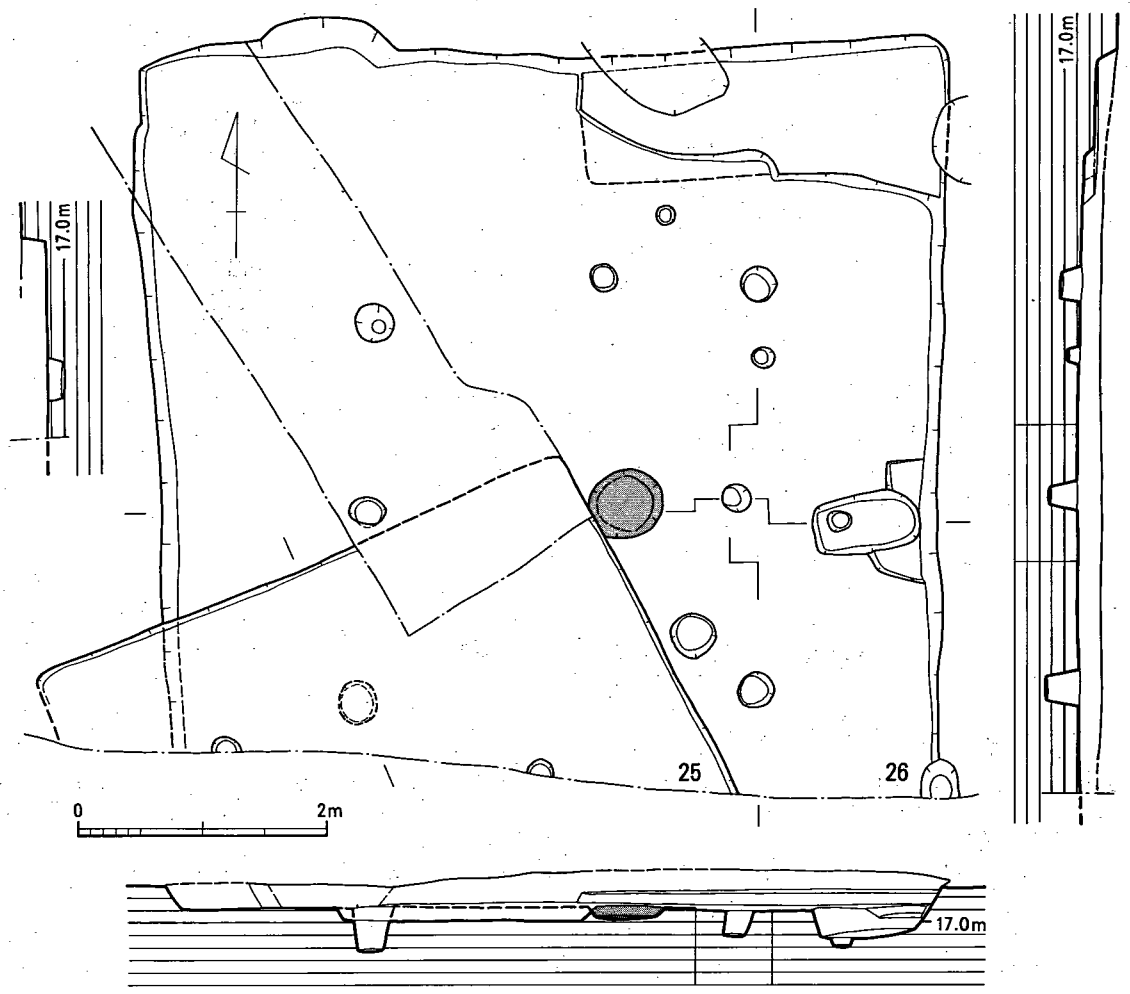
残存長10.5cmほど、最大幅３cmの鉄鎌。切先を欠くとともに、折返し部も欠損するようである。これも錆のために細部は不明であるが、本遺跡の他の鎌と折返しが逆になっている。

土器（図版77、第54図１～４）

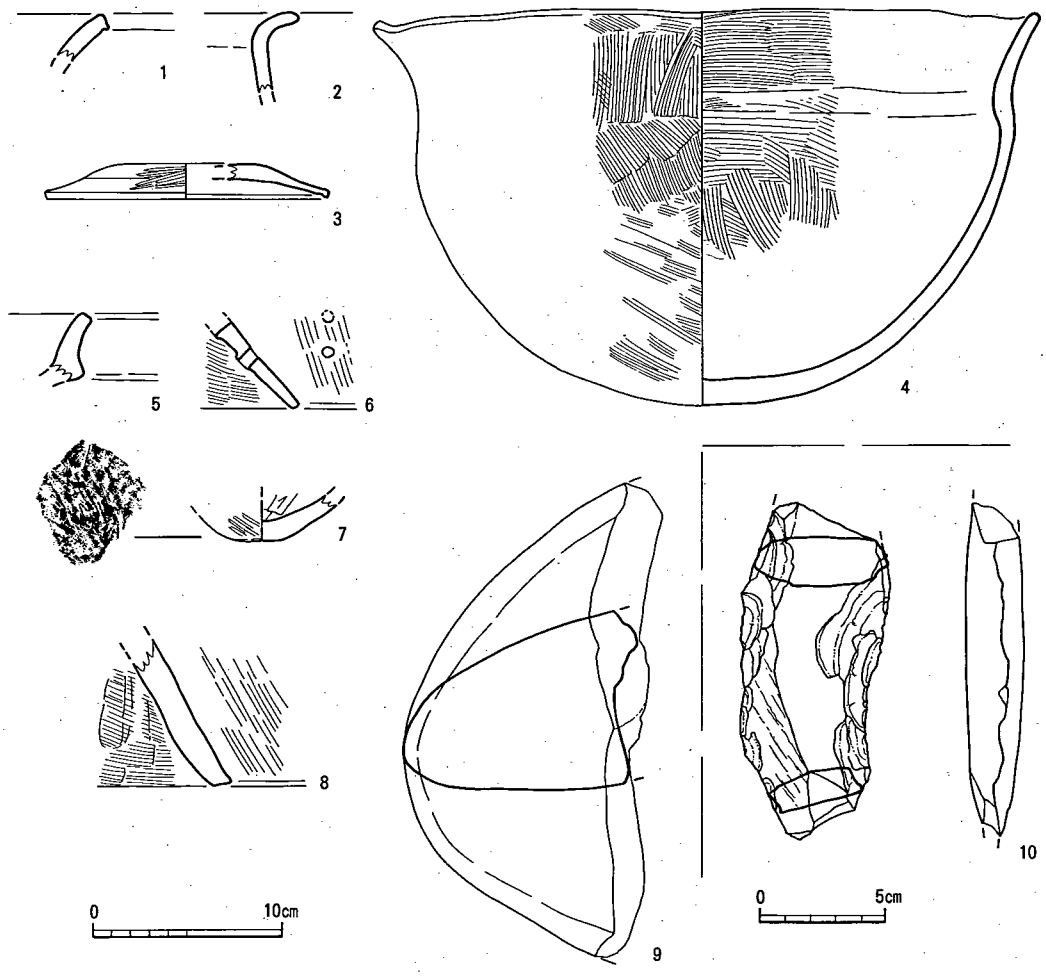
１は口端部を断面方形に、２は同じ部位を丸くおさめるいずれも小片である。

３の器形は須恵器蓋と同じであるが土師質で焼成されたもの。外面調整も篦削りの後で篦磨きを施しており、焼き損じではない。

４は床面直上から出土した大型の鉢で、残存状態も良好である。口頸部の反転は弱い。



第53図　25・26号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第54図　25・26号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

26号住居跡（図版18、第53図）

25号住居跡に大きく切られ、30号住居跡に一部を切られる。

一部が調査区外へ続くが、平面規模が6.4×6.0以上の比較的大型の住居跡である。炉跡を中心に反転すれば南北長は7mを越えるものとなる。深さは最大で0.2mほどが残る。

この住居跡では本遺跡中唯一6本の主柱穴を有する。これらは桁行長がほぼ1.6m、梁行長が3.0～3.2mの柱間距離を有していて規則的に配されている。炭・焼土を出土した炉跡は中央から東へ偏した、柱穴に近い位置で検出されている。

ベッドは北東隅で幅1m強、長さ2.9m、高さ0.1mほどの規模で検出しているが、北辺全体には付設されていないようである。また、北西隅付近には小さな弧状の張り出しが見られるが、

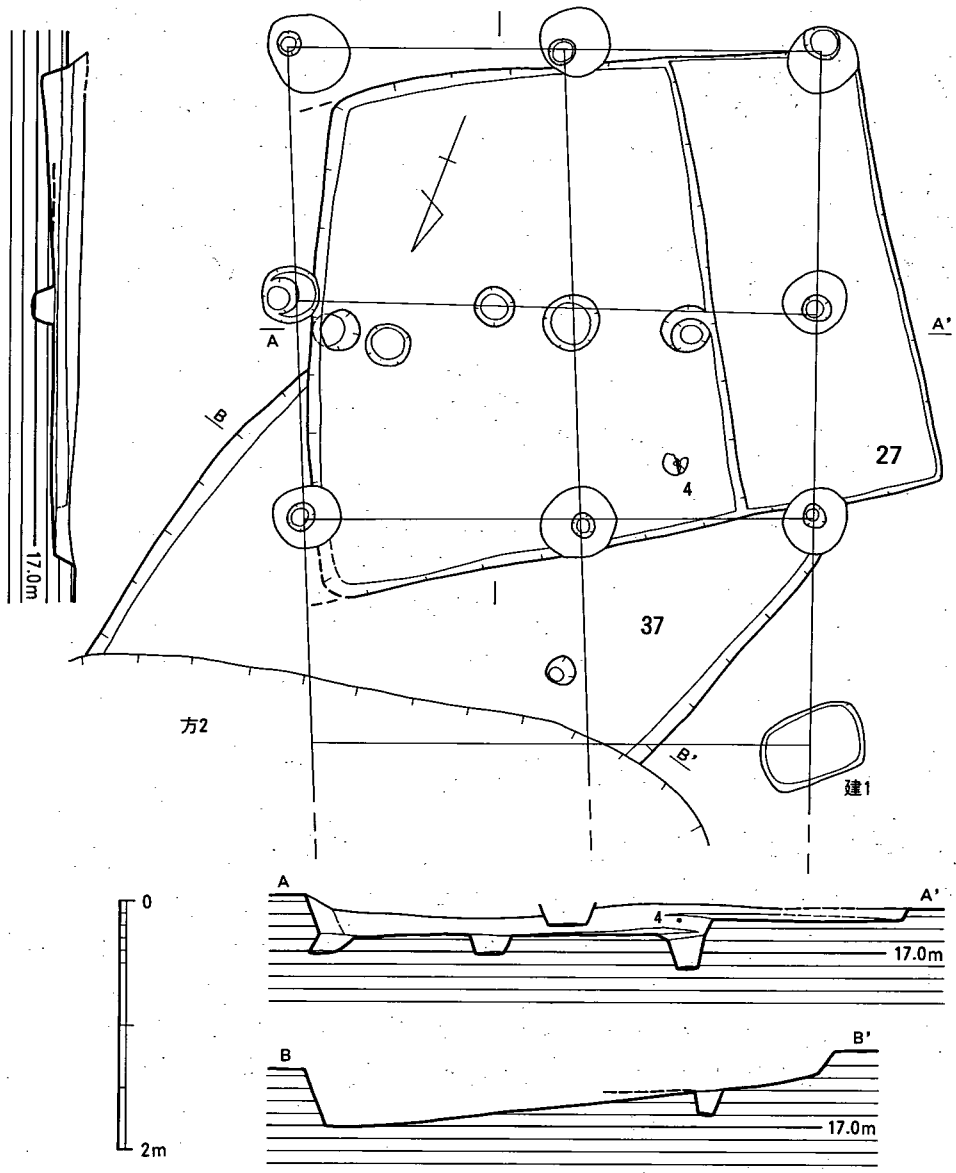
性格を窺うに足る痕跡は得られていない。

出土遺物

これも出土遺物は乏しい。

鉄製品（第14図15）

炉と東辺の屋内土坑の間に位置する柱穴から出土したもので、手鎌の残穴。残存長8.5cm、



第55図　27・37号竪穴式住居跡実測図（1/60）

身幅2.8cm、背の厚さは0.2cmほどである。折返し部の一部を欠いており、錆が進行する。

土器（第54図５～８）

５は二重口縁壺小片。６は高杯脚部で、２段に透孔が配される。外面にも刷毛目が見える。７は甕底部で、粗い叩きが付される。内面には篦削りの痕跡が見える。８は大型の器台。脚端部内面が焼けて赤変する。

石製品（図版77、第54図9・10）

９は床面出土との注記があるが、図示しておらず、出土地点の特定はできない。安山岩製の台石で、器面は全体に滑らかとなる。

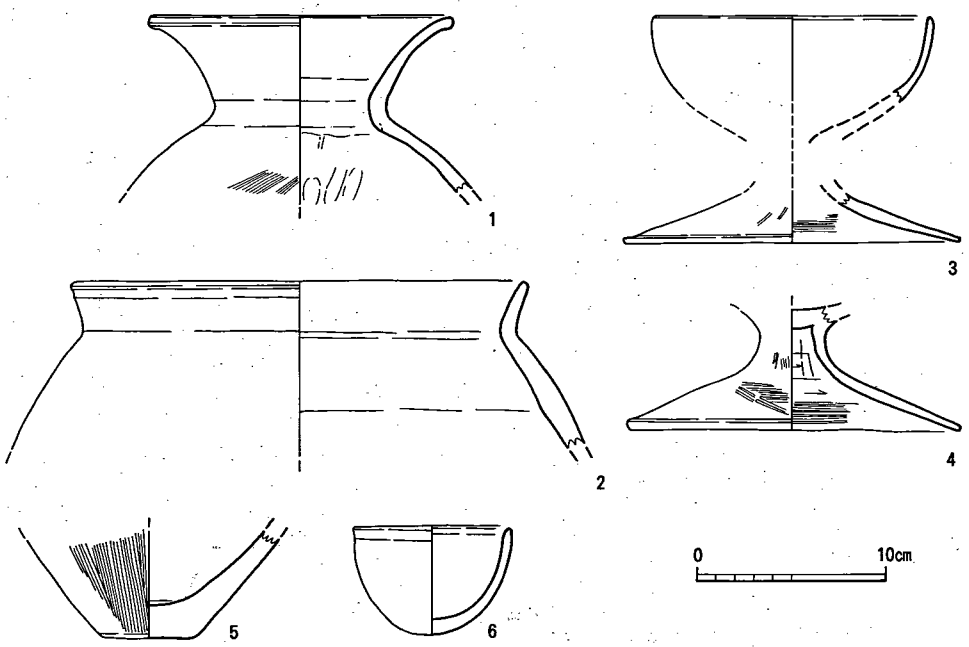
10は灰白色安山岩製の打製石斧で、両端が欠損する。

27号住居跡（図版19、第55図）

27号住居跡は26号住居跡の北に接して位置し、後述する37号住居跡を切り、1号掘立柱建物跡に切られる。この住居跡の付近は石原状の地山となり、遺構の検出が困難であったために不明瞭な部分を残す調査となった。

住居跡の平面形はやや歪んだ長方形となり、南北長約3.9m、東西長5mを測る。ただし、東西長はベッドが対称的に配されたとすれば6.3mに復原される。深さは最大で0.3m強。

西辺には幅1.4～1.6m、高さ0.1mほどのベッドが付設され、それに接して主柱穴が穿たれる。



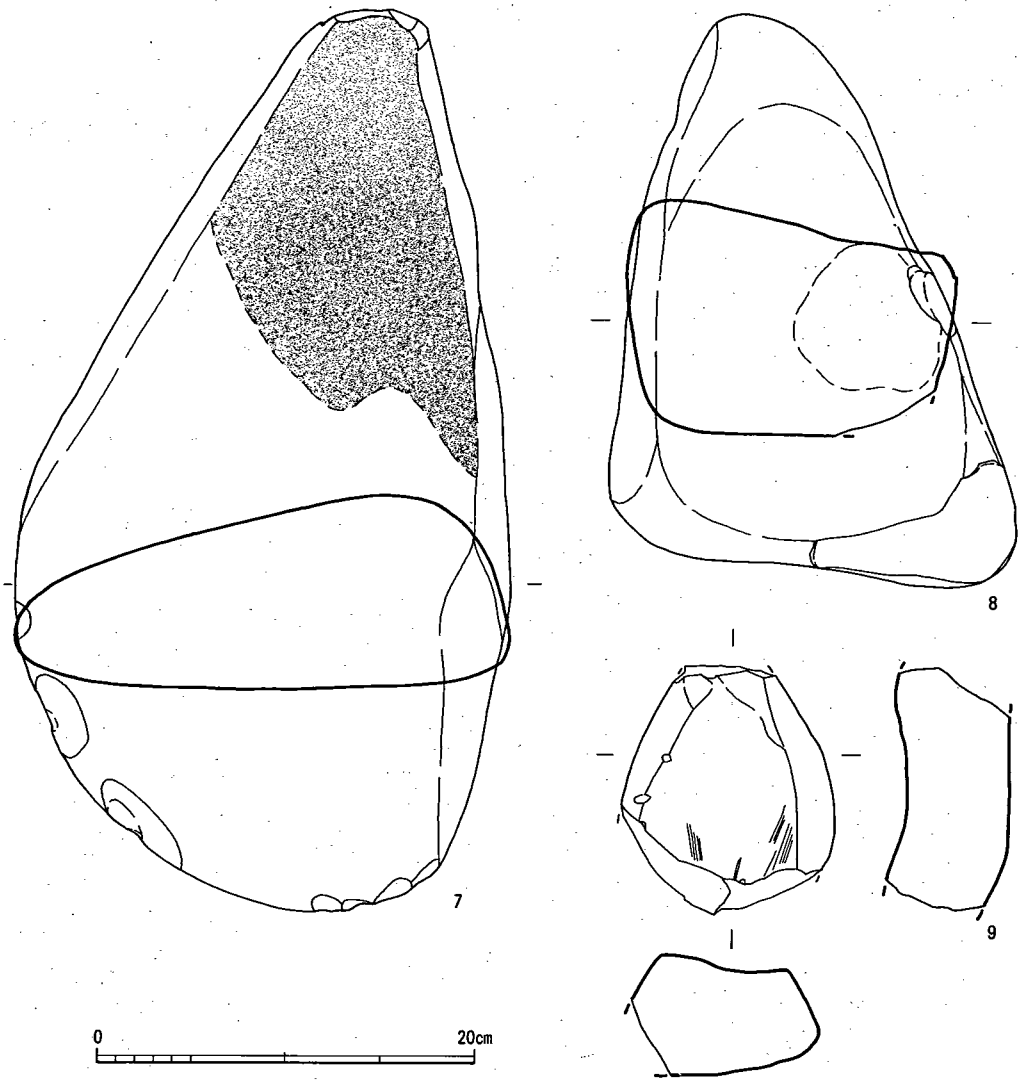
第56図　27号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）

東辺ではベッドを確認できなかったが、主柱穴が壁体に接し、かつかなりの傾斜を有することなどからここにも本来はベッドが存在した可能性が高い。炉跡は中央付近にある直径0.3m、深さ0.1m強の小ピットがそうであろう。

出土遺物

土器（図版77、第56図）

1は口縁部が大きく開く壺で、約半分が残存する。体部外面に細かい刷毛目が残るが、内面ははっきりわからない。2は甕の小片。3は接合しないが同一個体であろう。杯部・脚部ともに小片である。4は図示部分がほぼ完周し、外面には篦磨きが見える。穿孔はない。5は平底



第57図　27号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）

で、外面の約3/4が焼けて赤変し、内面には焦げ付きがある。6は手捏の完形品。口端部は内傾する面となり、手捏ではあるが丁寧につくられる。

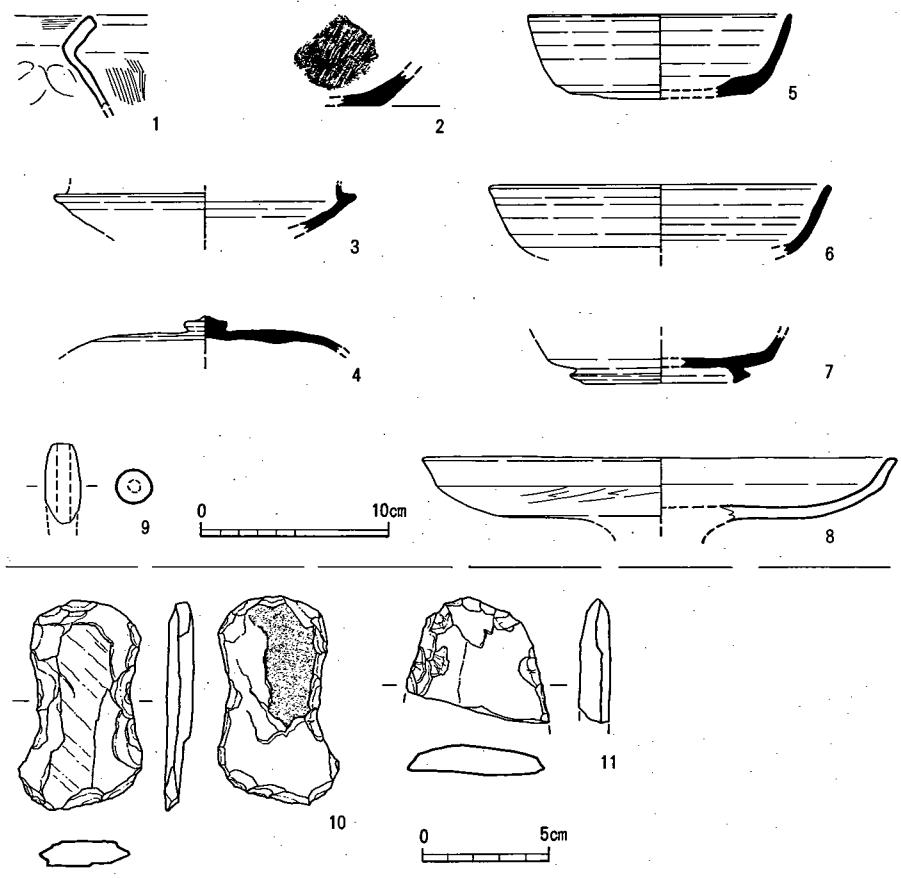
石製品（図版77、第57図）

いずれも安山岩製。7はとくに図上半付近がつるつるとした手触りとなっている。8は石皿であろう。図上面の右に偏した部分が小さく窪み、図下面にも微細な擦痕が観察できる。9もやはり窪み、擦痕が見える。また、図下面中央付近では敲打痕らしき小さな凹凸もある。

28号住居跡（第50図）

23・24・25号の各住居跡に切られ、かつ調査区外へ続くためにその一部を確認したのみである。炉跡・柱穴も判然としない。

推測できる一辺長は約4.5mで、深さは0.2mほどである。この住居跡では中央部を残して外周を0.1mほど掘り下げ、貼床を使用していたようであるが、残念ながら上記したように調査



第58図　28号竪穴式住居跡および周辺出土遺物実測図（1/4,1/3）

部分が狭小なために細部は不明である。

出土遺物

本来住居跡に伴うと思われる土器は小片でかつ量的にも乏しく、後代の土器がかなり入っている。また、土錘・石斧は周辺出土のもので、住居跡内出土ではない。

土器（第58図１～８）

１は小片。体部内面は篦削りで仕上げるようである。

２は陶器摺鉢の小片である。備前焼かと思われるが非常に薄い。

３～７は須恵器。５は外底面に篦切り痕を残し、６は残存部下端付近に篦削りが見える。７では篦削りが残らない。

８は土師器高杯。口縁部は屈曲して端面を有し、屈曲部以下は篦削りで仕上げる。ほかにも赤色顔料を塗布した土師器皿の小片などがある。

土製品（第58図）

住居跡周辺出土の土錘で、土師質である。残存長4.2cm、最大幅２cmの大きさである。

石製品（図版78、第58図）

９は緑泥変岩製、ほかの２点は灰白色安山岩製である。９で網掛けした部分は平滑化しており、研いだものかも知れない。

29号住居跡（図版19、第59図）

25号住居跡の東に接し、これも大部分が調査区外へと続き、かつ撹乱坑があるためにその一部を検出したのみである。深さは0.1mに満たない浅いものである。

内部施設は一切検出できなかった。

図示に堪える出土遺物はない。

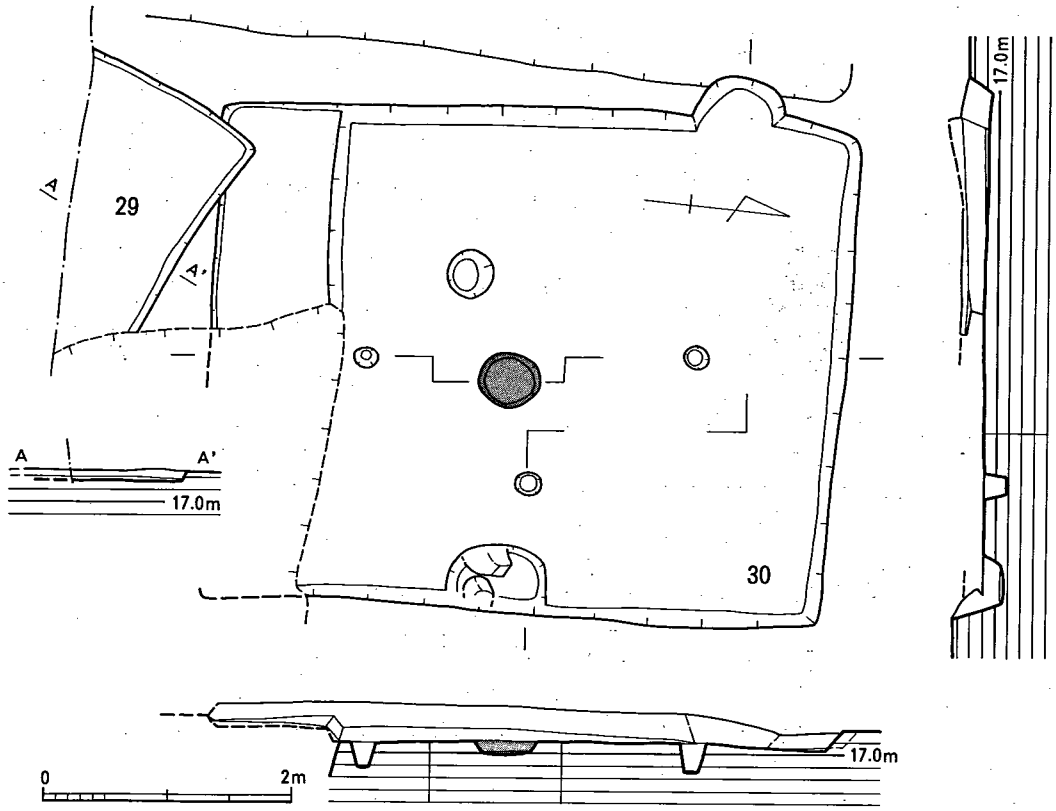
30号住居跡（図版19、第59図）

29号住居跡の北に隣接し、この一部が26号住居跡を切っている。また、撹乱坑が南東隅を破壊するが、全体の様子は充分復原できる。

平面形は4.1×5.1mの長方形プランとなり、深さは最大で0.2mを測る。全体のほぼ中央部分に炭や焼土片を交えた炉跡が位置し、２本の主柱穴は南に近く、北で遠く配置される。これは南辺にのみベッドが付設されたためである。そのベッドは幅0.9m、高さ0.1mの規模である。また、西辺北端付近に小規模な弧状の張り出しがあるが、性格を暗示するような特徴は得られていない。

出土遺物

図示した以外には粗い平行叩きを有する甕や赤色顔料が塗布された皿などがある。



第59図　29・30号竪穴式住居跡実測図（1/60）

鉄製品（図版78、第14図22）

刀子の茎部分。残存長７㎝ほど。これもとくに身の部分で錆が進行しており、細部は判然としない。茎は５㎝ほどの長さで、断面方形となる。

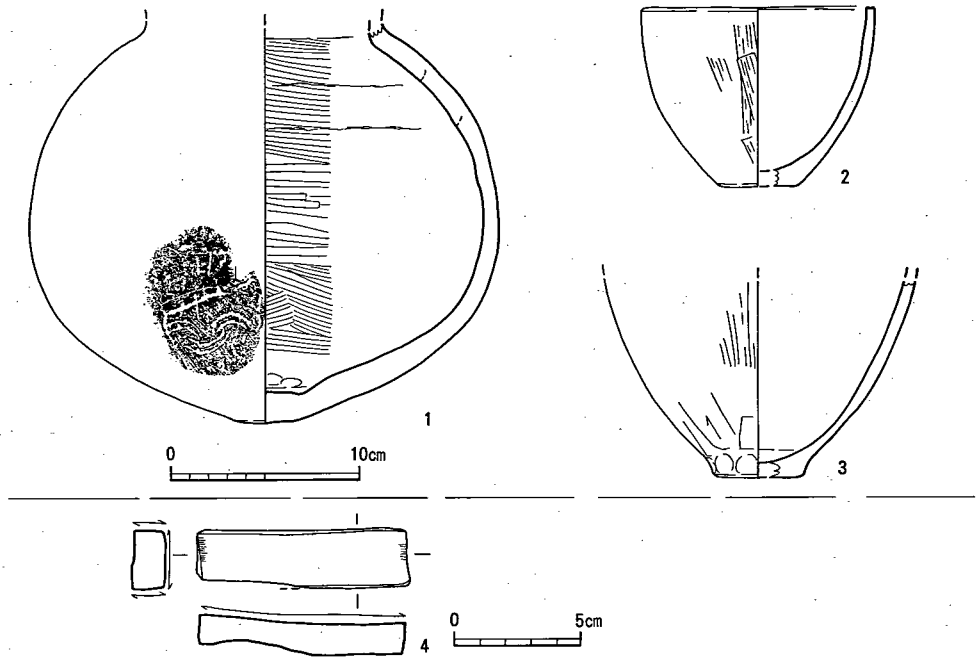
土器（図版78、第60図）

１は口縁部を欠くが体部はほぼ1/2が残存する。全体に粗雑なつくりの土器であるが、底部付近に半截竹管を用いたコンパス文が刻まれる。また、体部最大径付近の外面は篦削りで仕上げるようである。

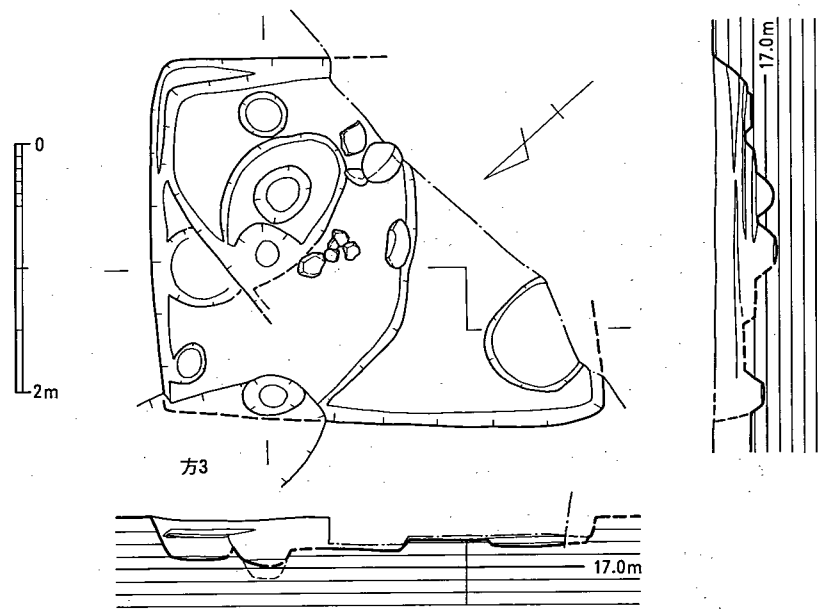
２は1/4が残存する。口端部は水平な面となり、外面を弱い刷毛目で、内面を丁寧な撫でで仕上げる。３は体部下半を篦削りで調整する。

石製品（図版78、第60図4）

暗灰色を呈する粘板岩製で、目が細かい。図下面は剥離するが、図上面・両側面の3面を使用する。



第60図　30号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）



第61図　31号竪穴式住居跡実測図（1/60）

31号住居跡（図版20、第61図）

29号住居跡の東にあって一部が調査区外へ続く。また、3号方形周溝遺構（9号溝状遺構）と切り合っていて、その詳細は不明のままであり、かつ両者の先後関係も確認できなかった。

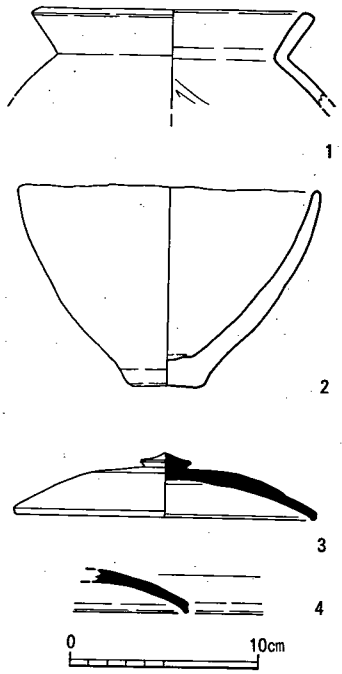
住居跡としての床面の様相も今一つ明らかではない。平面形は2.9×3.5mの長方形プランを有し、深さは0.1mほどが遺存する。北東半の床面に見られる大型の落ち込みは3号方形周溝と一連のものであるのかも知れない。現状の柱穴の状況から2本の主柱穴を想定できる。

2本の主柱穴を想定した場合には、北東辺中央でほぼ半分を検出した土坑は住居跡と無関係の可能性がある。

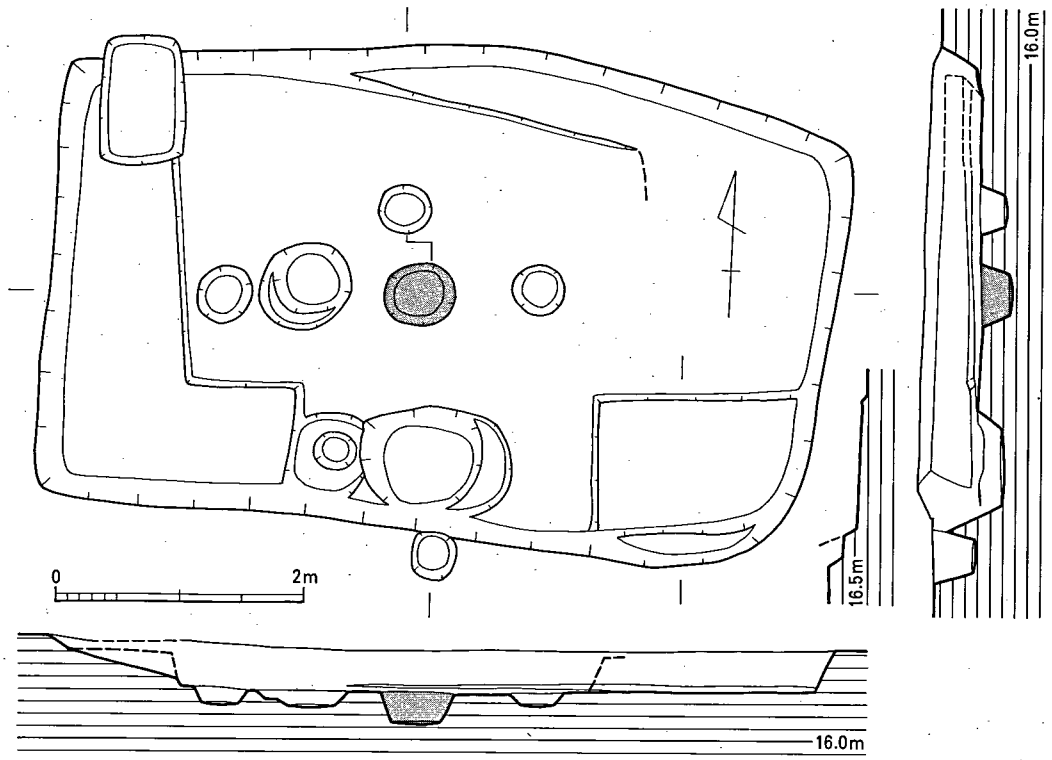
出土遺物

ここからも須恵器や赤色塗彩された杯などが出土している。しかし総量は多くないが主体は他の住居跡と同様である。

土器（図版78、第62図）



第62図　31号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）



第63図　32号竪穴式住居跡実測図（1/60）

1は口縁部がく字形に外折する甕の小片。器表が荒れるが、体部内面には篦削りが使用される。2は口縁部が波打つ鉢。手捏である。この2点は北東辺近くに掘り込まれた大型の落ち込み中から出土した。

3・4は須恵器。埋土中出土で、いずれも小片。天井部のほぼ1/2に篦削りが施される。

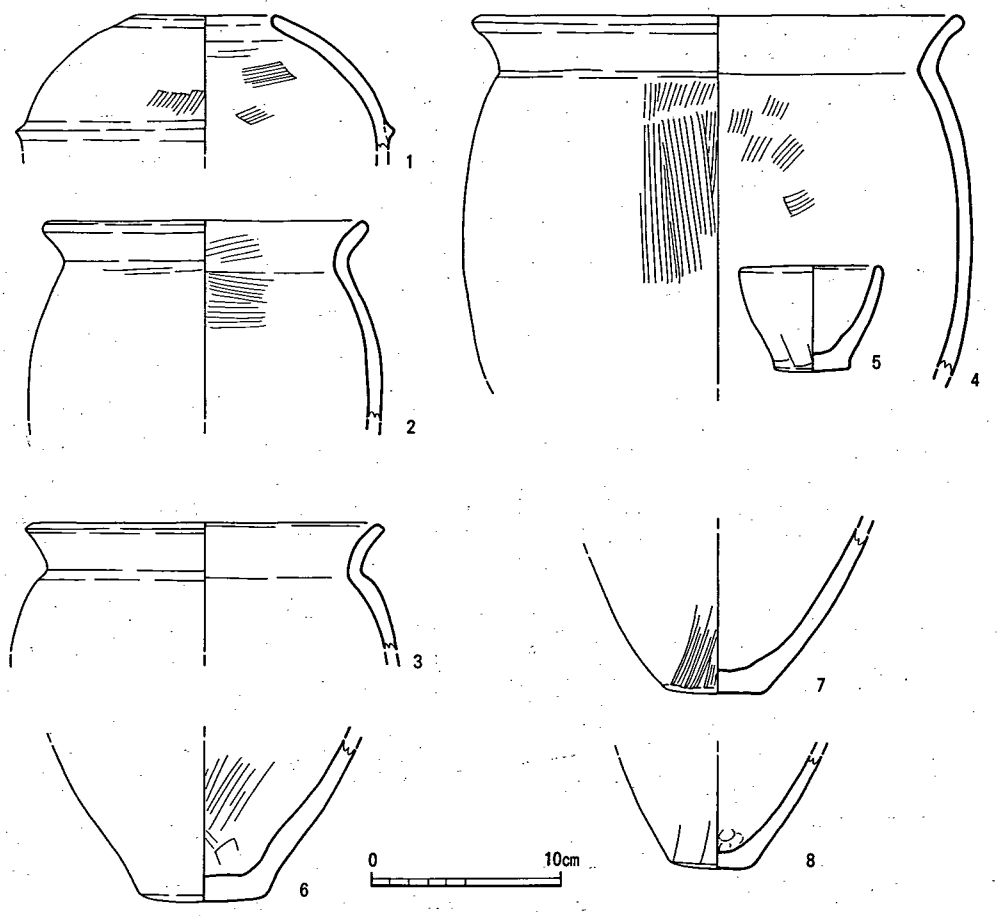
32号住居跡（図版20、第63図）

8～10号住居跡の北、環濠に近い位置に単独で位置する。

検出した平面形は3.7×6.3mの長方形を呈するが、北辺では不明瞭な部分がある。深さは最大で0.3mほどが残存する。

ベッドは西辺がL字形に、東辺では検出を失敗してはっきりしないが、直線的あるいはL字形に配されたものであろう。幅0.8～1m、高さ0.3mほどの規模に復原できる。

主柱穴は2本の浅い柱穴で、その中央やや東に偏した位置で炭・焼土片を交えた埋土を有す



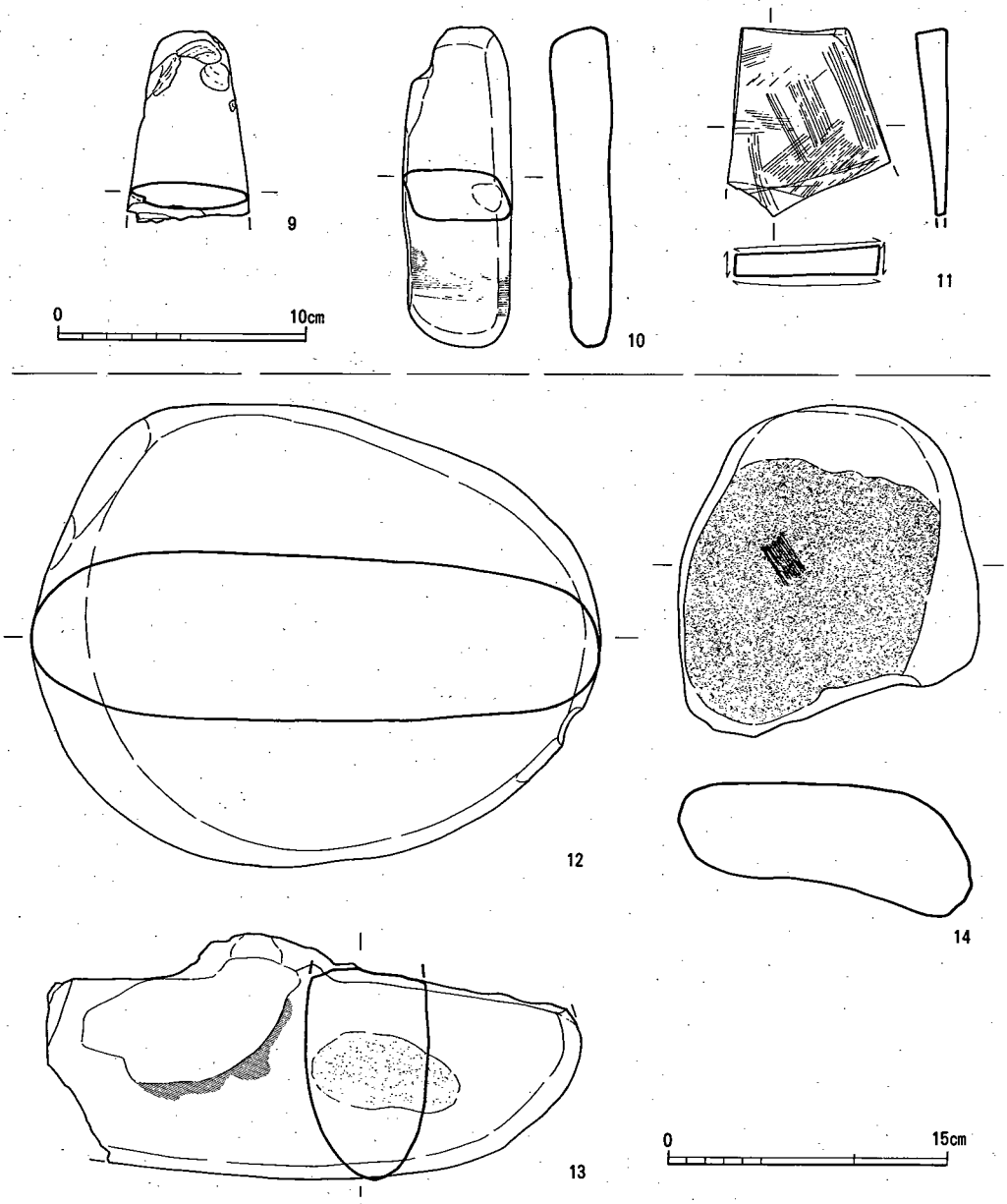
第64図　32号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1/4）

る炉跡が存在する。また、出入口と思われる屋内土坑が南壁に接して配置される。

出土遺物

1・2・4・5が埋土中出土。ほかは住居跡北側の遺構面から出土したものである。

土器（図版79、第64図）



第65図　32号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/3,1/4）

1は無頸壺か。口縁部は丸くおさめられ、体部最大径付近に断面三角突帯を付す。丁寧なつくりの土器である。2～4は相似た形態の甕。口端部は丸みをもって終わる。5は手捏土器であるが丁寧につくられる。

6は内面を刷毛目で調整する。7は外面および底部を刷毛目で仕上げる。8は手捏。

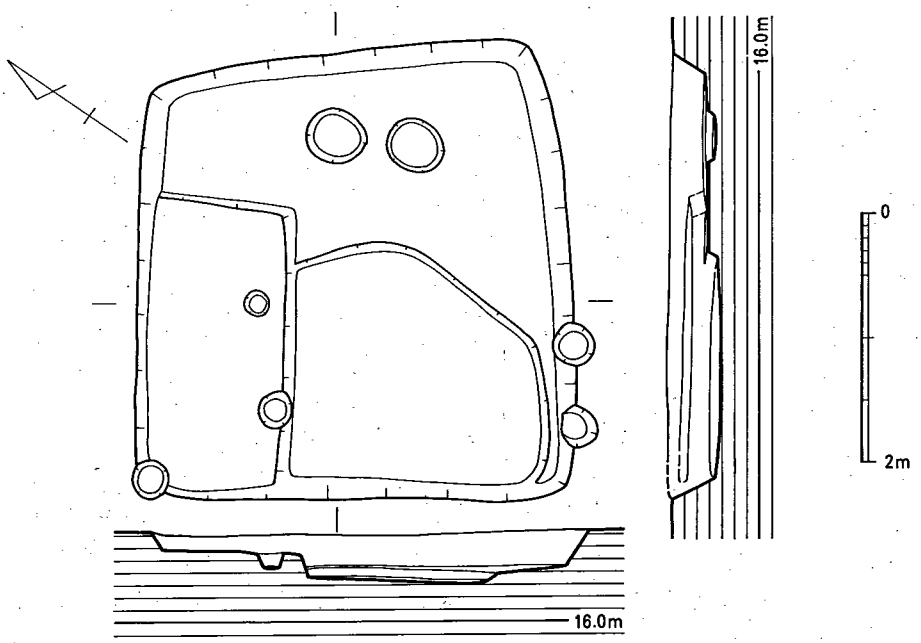
石製品（図版78、第65図9～14）

9は緑泥変岩製の磨製石斧。身は扁平である。10は用途不明であるが、図下端付近に横方向の擦痕あるいは条線が見える。図左の側面には及ばず、また図下面にも及んでいない。周縁に刃部はなくほぼ丸味をもち、器表もつるつるとはしていない。石材は安山岩。11は灰黄色の砥石で凝灰質砂岩製であろう。図下端の欠損部以外は上端の小口面にいたるまで全面が使用される。12は台石であろう。全体が滑らかとなるが、顕著な使用痕といったものは見えない。13は網掛けした部分が熱を受けて黒色に変化し、隣接部が剥離している。これも全体に滑らかな面となるが、特に波線で囲った付近は石杵にみられるような使用面となる。14も図上面の大部分が石杵の使用面と同様の状態となっており、一部に微細な条線が見える。また、図下面の一部も同様である。肉眼では赤色顔料等は見えない。12～14は安山岩で、13・14は「床面出土」と注記がある。

33号住居跡（図版21、第66図）

32号住居跡の北東、これも環濠に近い位置に単独で位置する。

一辺長3.5～3.6mのほぼ正方形に近い平面形を有し、深さは0.3mが残る。北西辺の一部で幅



第66図　33号竪穴式住居跡実測図（1/60）

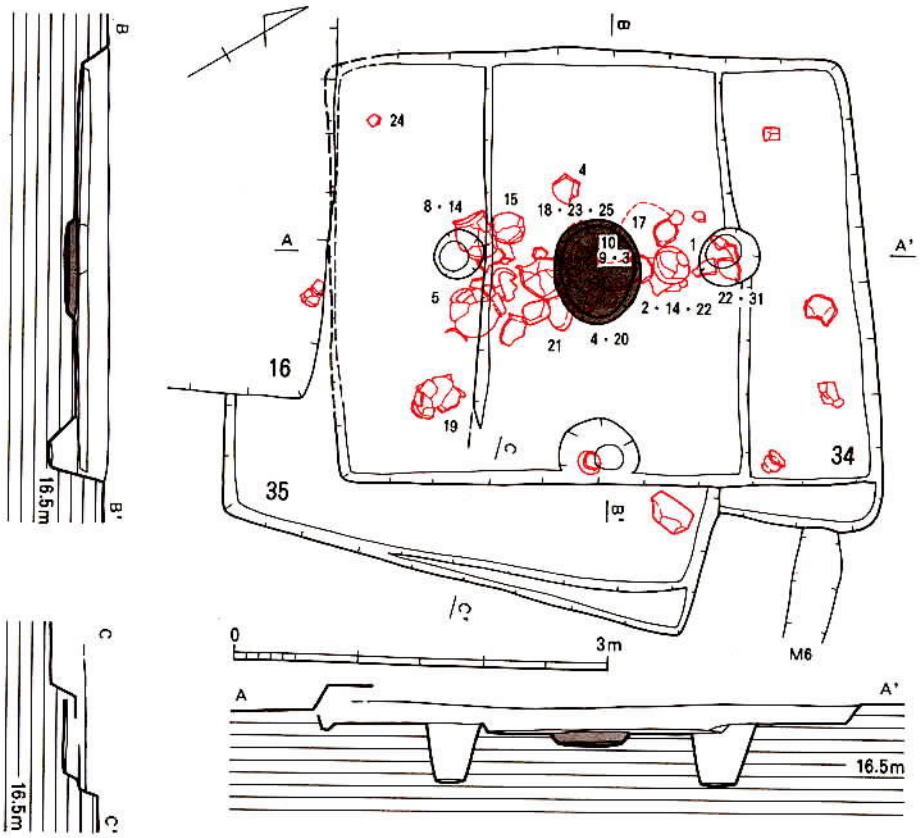
1m強、長さ2.3m、高さ0.1mほどのベッドを検出したものの、主柱穴・炉跡は確認できなかった。しかし、ベッドに接する付近から南東部分の床面には深さ0.1mの大きな浅い掘り込みがある。詳細な埋土の記録を行っていないが、この部分は床を掘削して貼床状にしていたものかも知れない。

出土遺物はほとんどない。

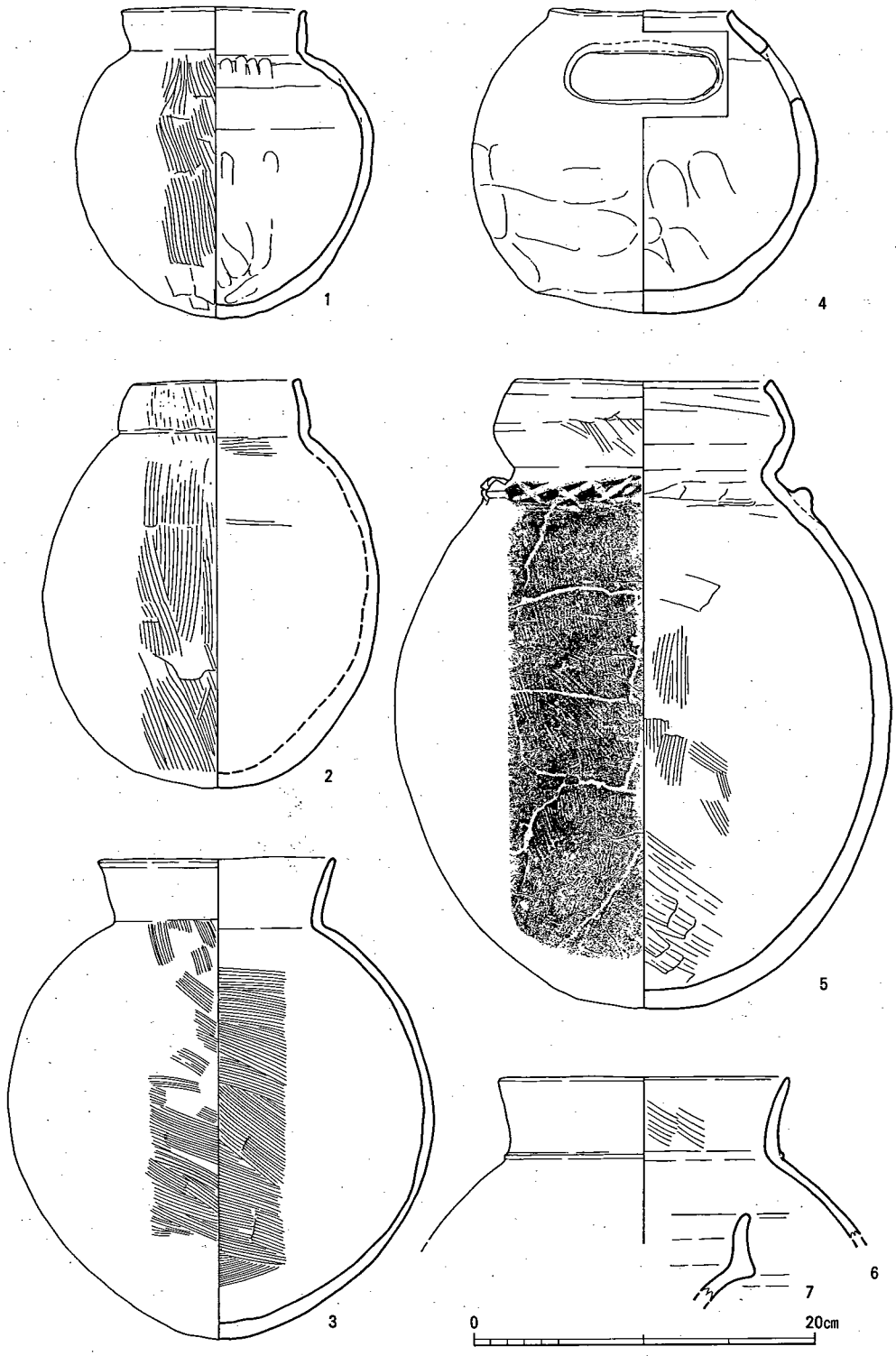
34号住居跡（図版21・22、第67図）

35号住居跡を切り、16号住居跡を切って掘り込まれる。ただ、この住居跡周辺の地山は暗い色をしていて検出は困難であった。

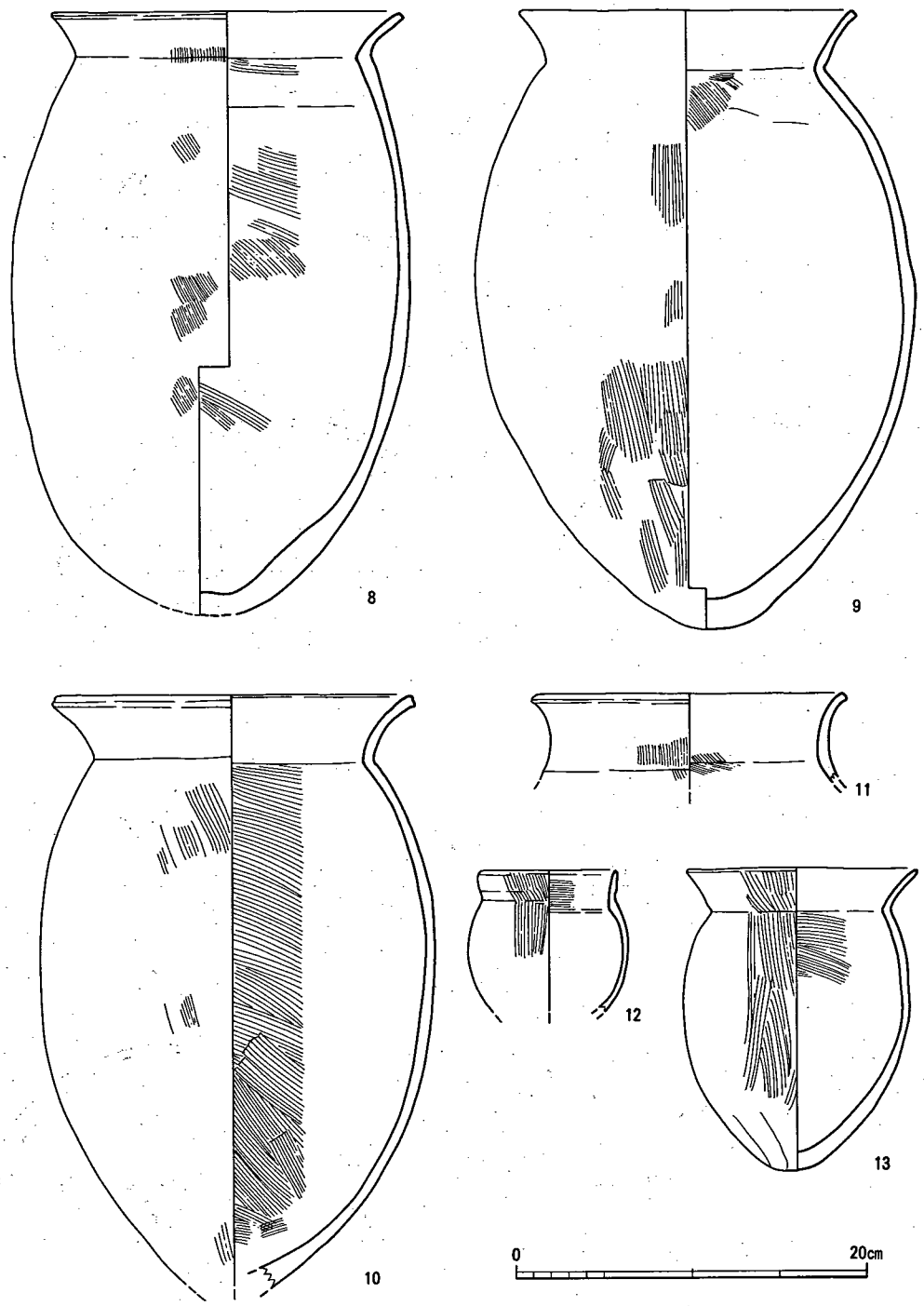
調査時には16号住居跡北東辺に沿って畦を残し、後にそれを撤去して図示したような小溝を検出した。この溝の位置は34号住居跡の壁体に非常に近い位置で、しかもそれとほぼ方向を揃えていたが、これは後述する41号住居跡に伴うものと考えている。したがって、南西辺はコーナーを確認したのみである。それによれば平面形は3.5×4.4mの長方形プランとなり、深さは



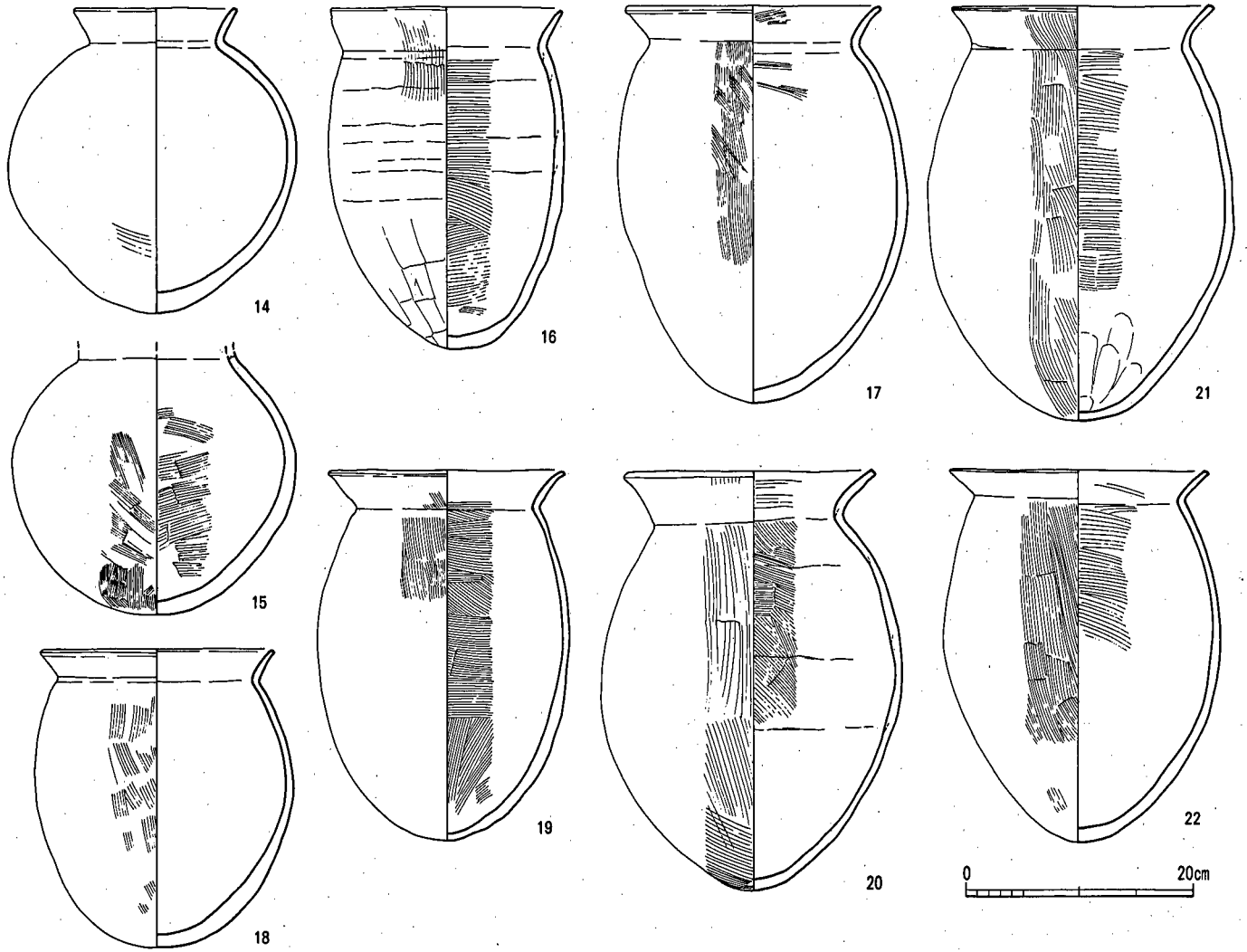
第67図　34・35号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第68図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）



第69図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4）



第70図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図３（1/6）

最大で0.2mほどが残存する。なお、周壁溝はこの南西辺のみである。

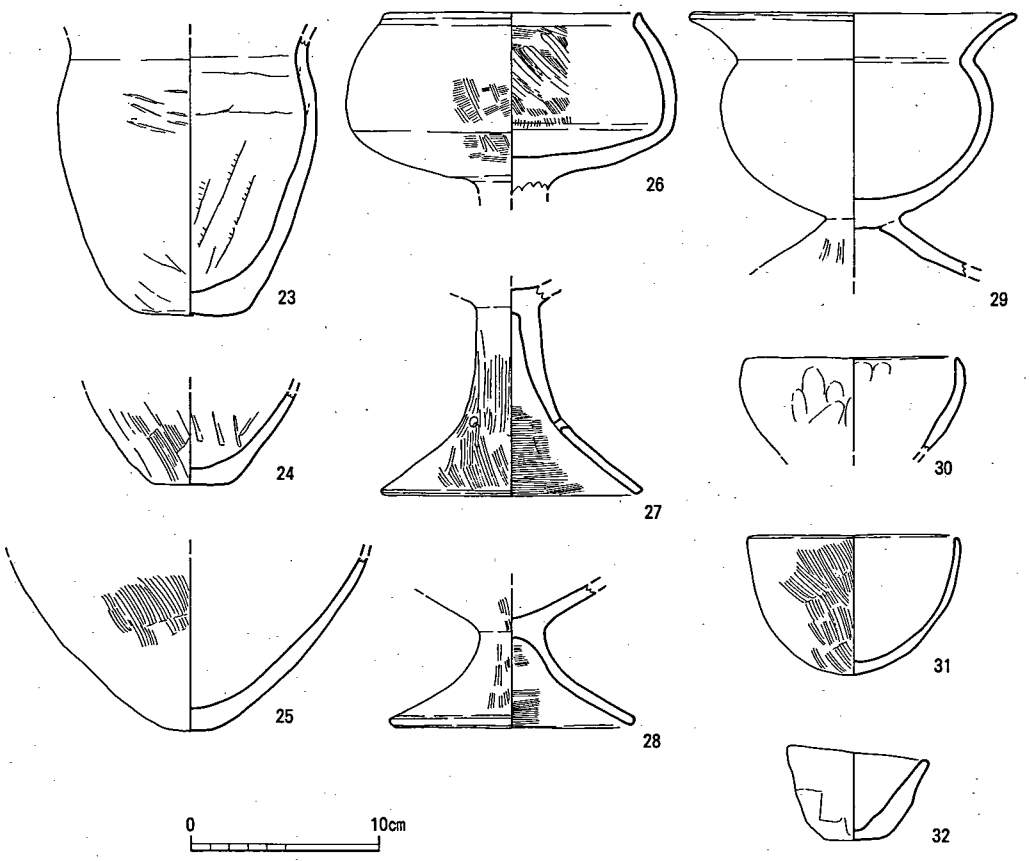
両短辺にベッドを付設するが、その幅は0.9・1.2mと異なっている。高さは0.1m弱である。また、主柱穴は2本であるが、一方は通常のごとくベッドに接するものの、他方はベッド上に位置していた。

出土遺物

図示したような状態で多数の土器が、完形に近い状態で横転し、あるいは正立に近い状態で押し潰されて検出された。

土器（図版79～82、第68～71図）

1は丸底で、外底面付近に指頭痕・篦削りが見える。口縁部は小さくS字状の曲線を描く。体部内面は指撫でが顕著である。2はつくりの雑な土器。口縁部は内傾内彎する。体部内面はやはり指撫でを主体とするようである。3は内外面で刷毛目を多用する。外面底部付近は器表が荒れて調整痕が見えない。4は手焙形の無頸壺。焼成前に大型の孔を開けている。器面は内外面ともに火熱のためにぼろぼろとなる。5は二重口縁壺であるが、粗雑なつくりである。内



第71図　34号竪穴式住居跡出土遺物実測図4（1/4）

外面ともに刷毛目を多用する。6・7はいずれも小片で器表も荒れる。6の頸部には突帯らしきがあるが、工具痕であるかも知れない。14は張りのある体部を有する。これも二次的な火熱を受けて器表が荒れるが、微かに刷毛目の痕跡が見える。15は口縁部を欠くが、体部下半はほぼ完存する。内外面ともに刷毛目で仕上げる。

甕は多くが丸底あるいは尖底に近く、体部内面に篦削りは確認できない。篦削り技法を確認できたものは16に示した土器の体部外面下半のみである。口端部は端面をなすものが多いが丸く終わるものもある。

23は平底であるが頸部の締まりが弱く、鉢といった方がよいのかも知れない。これは体部上半に粗い平行叩きが見える。内面は弱い刷毛目である。24も平底で内面には棒で突いたような痕がある。25も直径2㎝ほどの小さな平底を残す。

26は屋内土坑中から出土した高杯でほぼ3/4が残る。椀形を呈し、口端部は面を有する。脚部はみえない。全体を刷毛目で調整した後に雑な篦磨きを施す。27は3方向に円孔を穿つ。

28・29は脚付の小型壺。口縁部が強く外折する。

30は小片。31・32は丁寧なつくりである。

35号住居跡（図版21、第67図）

16・34号住居跡に大部分を切られるが、後述する41号住居跡を切っている。わずかに検出した南辺が長辺となるようで、長さ3.9mを測る。短辺長は不明で、深さは0.2mが残る。柱穴も不明。残存する部分にベッドは確認できない。

なお、北端部の張り出し状の掘り込みは検出ミスである。

出土遺物

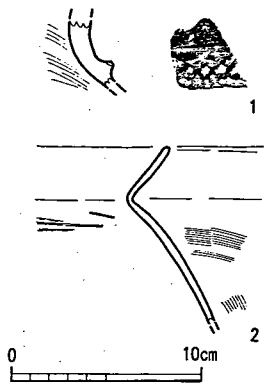
この住居跡も遺物が乏しく、固有の出土土器は図示していない。図示したものは34号住居跡と分離できないものであるがここで紹介する。また、台石と思われる石材が遺構図に図示されている。注記ラベルが明確でないが、第74図に示した石材がよく似ており、この住居跡出土として報告する。

土器（図版83、第72図）

1は刻目突帯を付す壺の小片。2は口縁部が強く外折する甕で、体部外面に細かい刷毛目が残るが、内面は磨滅してわからない。薄く、丁寧につくられた土器である。

石製品（図版83、第74図1）

長軸長37㎝、短軸長23㎝の安山岩製。厚さは最大で10㎝を測る。図上面の3ヶ所に非常につるつるとなった部分があり、一部に細い



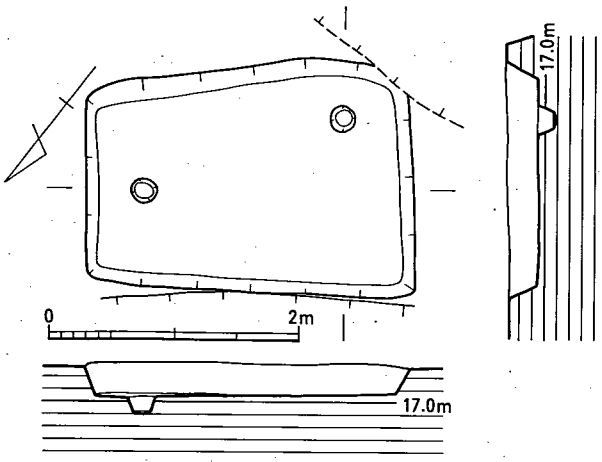
第72図　34・35号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

シャープな条線が刻まれる。下面は安定感があるが、かなりの凹凸がある。

36号住居跡（図版23、第73図）

34・35号住居跡の南に近く位置する。住居跡と称したが、主柱穴・炉跡ともに検出できず、土坑としたほうがよいのかも知れない。

平面プランは短辺長1.6～1.9m、長軸長2.6mの不整長方形プランを呈し、深さは0.3mを測る。床面で小柱穴を検出したが、配列が不規則で、かつ非常に浅いものであった。



第73図　36号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

図示にたえる土器はない。また、35号住居跡出土とした石製品と同様に確実なものではないが、この住居跡とされた石製品があるので紹介しておく。

石製品（図版83、第74図２）

長さ、幅ともに30cmを測る半長円形の石材で、厚さは最大15cmほどであるが、縁辺が薄くなり、断面三角形に近いものとなる。図右の折損は古いものである。器面は全体に滑らかなものとなるが、顕著な使用痕は見えない。

37号住居跡（第55図）

27号住居跡と2号方形周溝の間で検出した。先にも記したようにこの付近は大小の礫が地山に含まれていて遺構検出が困難であり、細部は確認できずに終わった。

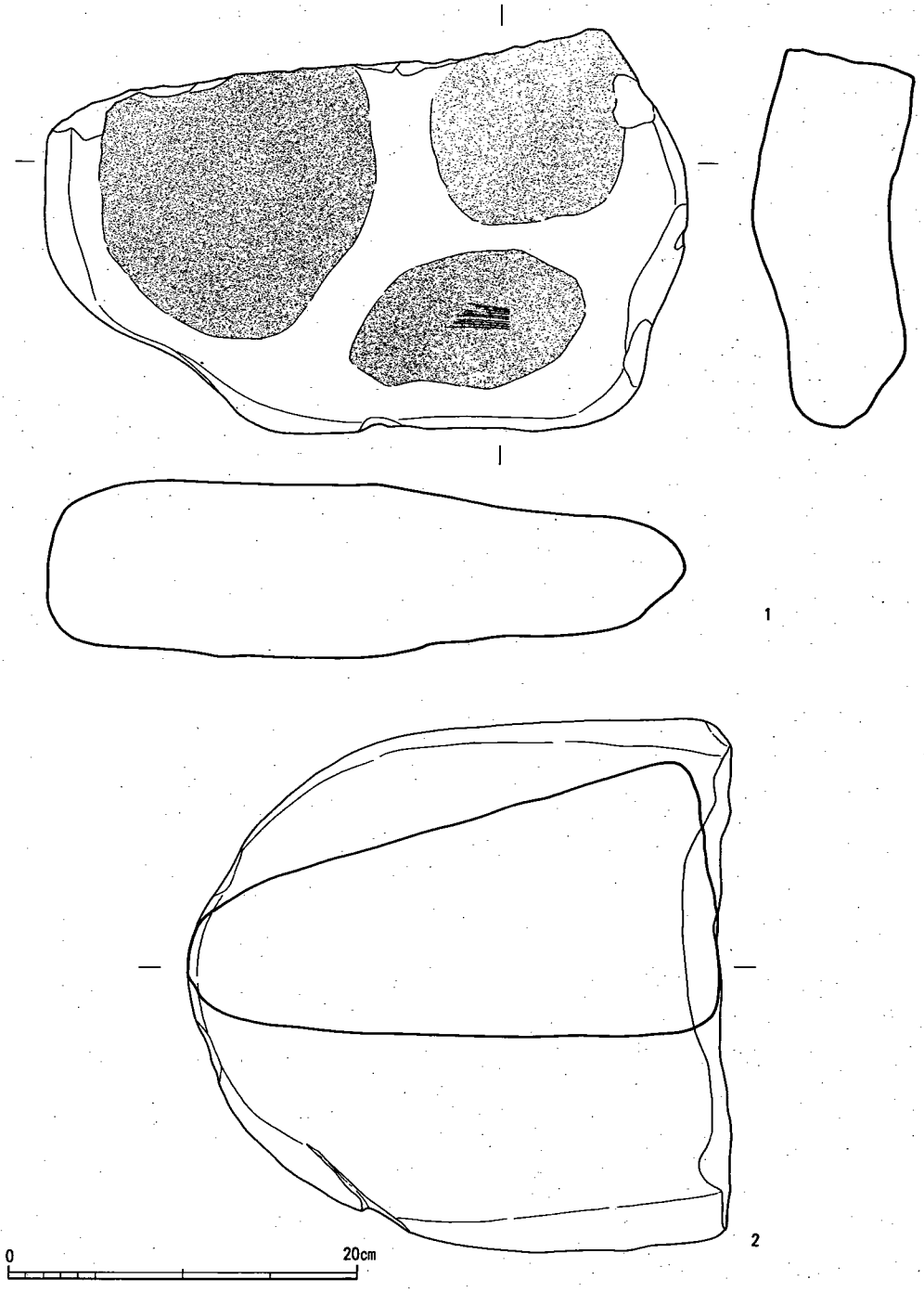
確認できる辺長は4.2mを測り、深さは0.2mほどである。なお、埋土中に多くの焼土や炭を交えていた。

これも図示にたえる出土遺物はない。

38号住居跡（図版23・24、第75図）

２号方形周溝の北、調査区内で最も北東に位置する住居跡で、後世に掘削された11号溝状遺構に切られる。また、17号溝状遺構（5号方形周溝）を切る。

平面形は3.9×4.6mのややいびつな長方形を呈し、深さは最大で0.2mが残る。発掘を失敗し



第74図　36号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図（1/4）

たが、両短辺にベッドを付していたものであろう。その規模は幅１ｍ前後、高さ0.1ｍほどとなる。

主柱穴はベッドに接する位置に配された2本の柱穴で、中央やや東に偏した位置で炉跡を、そして東辺に接して屋内土坑を検出した。

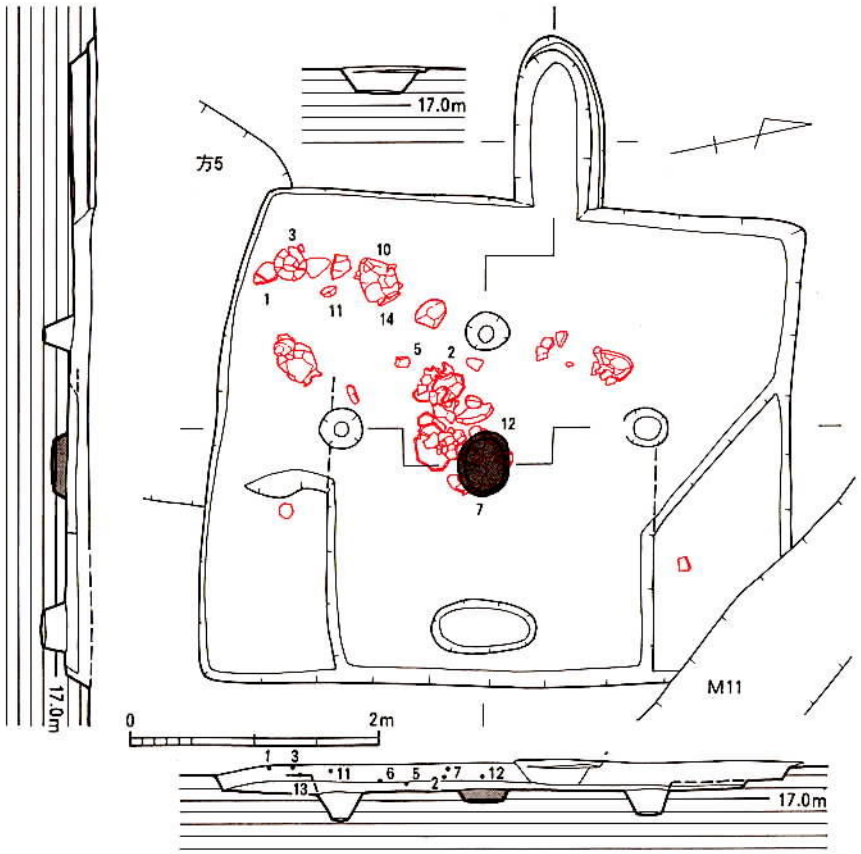
なお、屋内土坑に対峙するような位置で幅0.7m、長さ1.3m、深さは住居跡と同様の舌状の張り出しを検出している。平面的に住居跡との切合関係は確認できず、また、埋土にも特段の変化は看取できなかった。

出土遺物

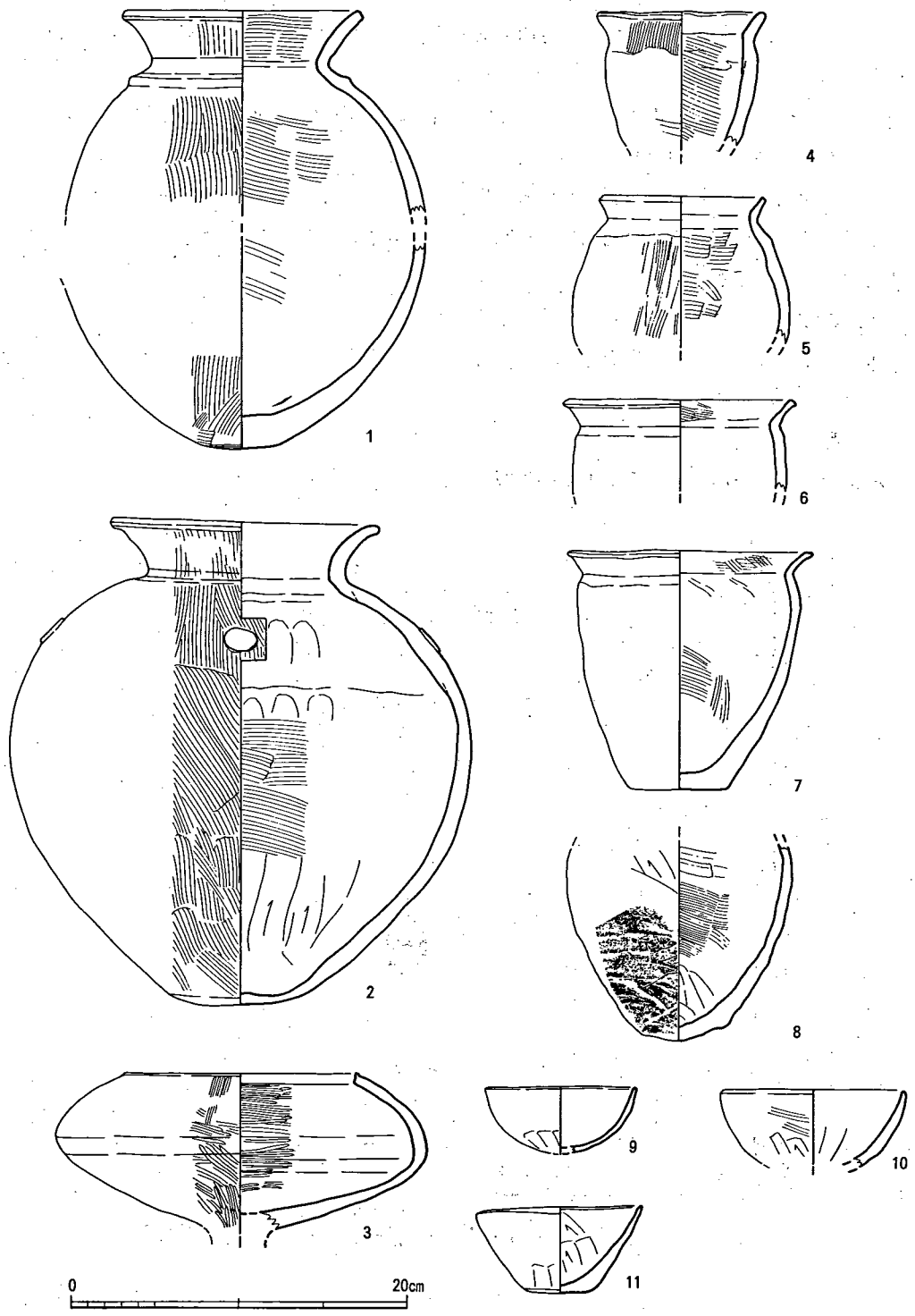
床面上から多くの土器が出土したが、その状態は廃絶後に一括投棄したものではなく、遺棄されたような状況であった。

鉄製品

埋土中から鉄鏃の茎のような形態の鉄製品が出土しているが、錆のために形状がはっきりせ



第75図　38号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第76図　38号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）

ず、図示していない。大きさは長さ3㎝、直径8㎜～9㎜である。

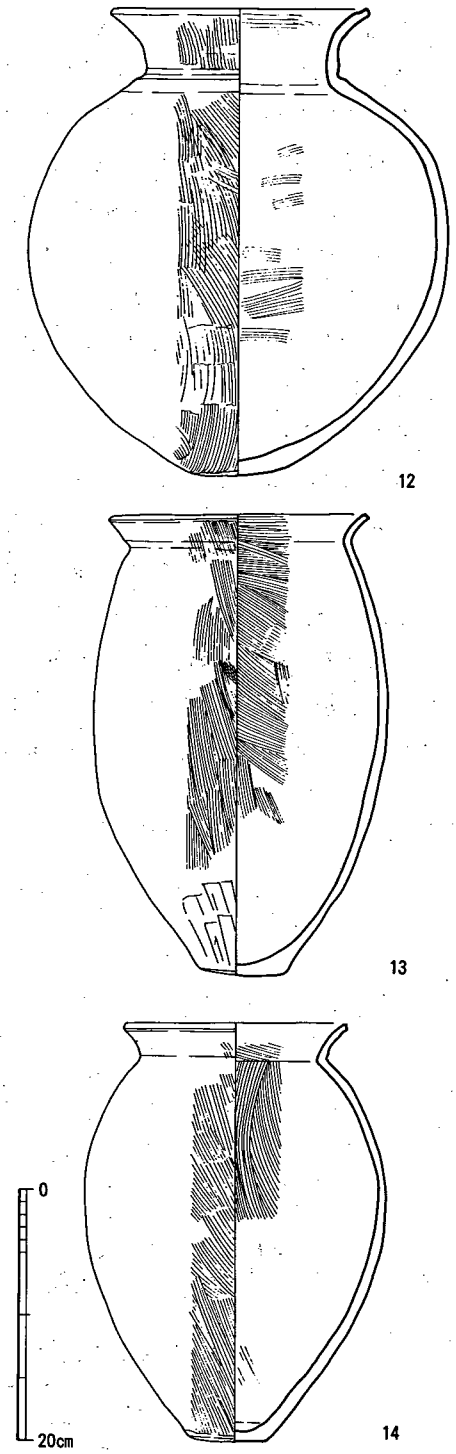
土器（図版83・84、第76・77図）

1は上半部と下半部が接合しえないが同一個体。器肉が厚く、体部の張りが弱い。口端部は丸味を有し、頸部下の突帯は甘く、シャープさを欠く。調整は刷毛目を主体とし、丸味を帯びる底部も刷毛目で仕上げる。内底面には押し出しに使用したような工具痕が刻まれる。2は張りの強い体部を有する。口縁部は肉厚で、端部は丸く終わる。これも外面は底部にいたるまで刷毛目で調整されるが、内面では篦削りや指撫でも併用する。肩部の円形浮文は対称的な位置に2個一対貼付される。12も肩部に甘い突帯を付す。口縁部はC字形に大きく外彎し、端部は断面方形になるとともに内側を匙面状にする。これも全体に刷毛目を多用する。

3は脚部を欠くが杯部はほぼ完存する。椀形の高杯で、口端部はほぼ垂直な面となり、上端が小さくつままれる。

4～6は小片。7は外面に多くのシワが現れている手捏状の小型甕。口端部は面を有する。8は粗雑な甕で、外面に粗い平行叩きが残るが、上半部は篦削りで仕上げる。内底面は指撫でで、外底面は篦削りの後に撫でるようであるが丸底で不整形。13は長胴の甕で、口端部に面をもつ。体部下端を篦削りで、その他の大部分を刷毛目で仕上げる。14も長胴であるが、13に比して体部に張りがある。頸部内面にシャープな稜を見せ、口端部は面を有する。これは外底面から体部全面を刷毛目で調整する。

9～11はいずれも体部下半から底部にかけて篦削りで調整する。内面はいずれも丁寧に仕上げる。



第77図　38号竪穴式住居跡出土遺物
実測図2（1/6）

39号住居跡（図版25、第78図）

38号住居跡の北西に単独で位置し、12号溝状遺構に切られる。発掘に際しては常時地下水が湧き出したこともあって、一部の発掘を失敗し、かつ主柱穴を確認できずに終わった。

平面形は3.5×3.8mのほぼ正方形に近い形態となり、深さは最大で0.2mを測る。ベッドは両短辺に付設され、その規模は幅0.8m、高さ0.05mほどに過ぎない低いものであった。

炉跡は床面中央付近で検出した径1m、深さ0.1mほどの不整円形土坑で、埋土に炭や焼土片を含んでいた。主柱穴は不明。

なお、西南隅の小規模な張り出しについては、不確かな部分がある。

出土遺物

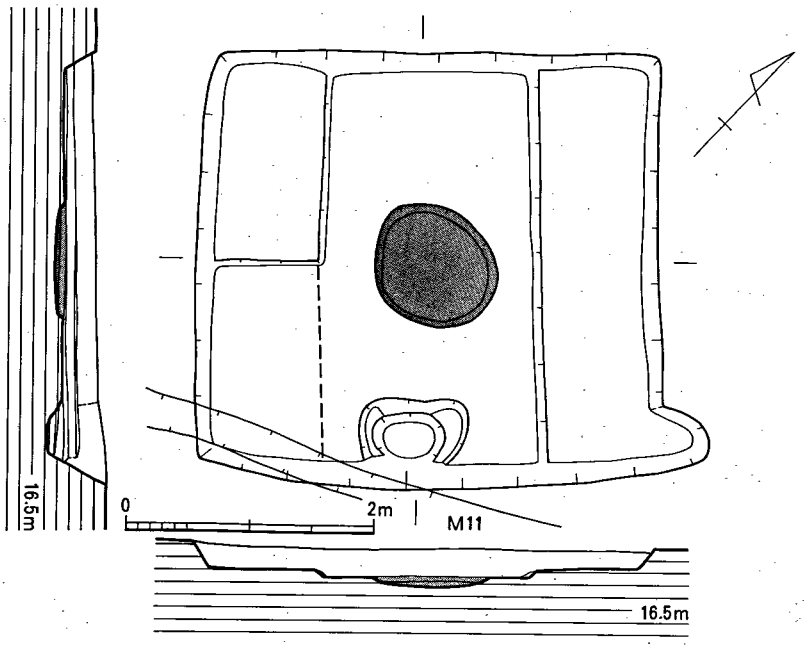
埋土中から若干の土器等が出土している。

鉄製品（図版85、第14図16）

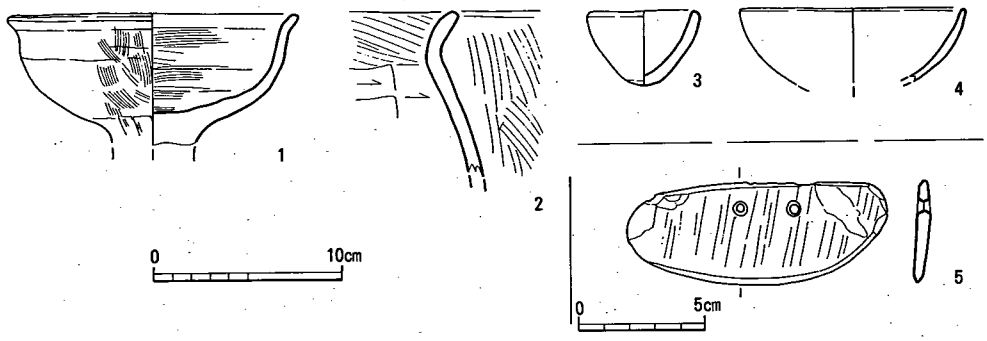
「床面」出土との注記があるが、地点を特定できない。手鎌の残欠で、これも錆びが甚だしい。背の厚さ約２㎝、身幅は2.8㎝が残る。

土器（図版84・85、第78図）

１は高杯で、下半は約1/4が、口縁部付近は一部が残存する。椀形を呈し、口端部が小さく外折するもので、全体を刷毛目で調整する粗雑な土器である。２は甕で一個体分ほどが出土するが、細片化して接合しえない。口縁部は緩く外反し、端部は面をもつ。体部内面は篦削りで



第78図　39号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第79図　39号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

仕上げ、そのために口縁部との境に稜を有する。3はミニチュアの鉢で、器面調整法はわからない。4の鉢は小片で、これも調整痕は不明。

石製品（図版、第79図5）

石庖丁の完形品で、石材はいわゆる「立岩」の輝緑凝灰岩製。穿孔は両面からなされ、刃部も両刃。全面に同一方向の擦痕が見える。

40号住居跡（図版26、第80図）

21号住居跡の北、36号住居跡の東に隣接し、小規模な弧状溝を切って位置する。

平面形は3.1×3.8mの長方形プランとなり、深さは最大で0.3mが残存する。ベッドは付設されてない。

床面中央に炉跡を想定できる土坑があるが、埋土に炭・焼土等は含んでいなかった。主柱穴は炉を挟む2本であるが、この住居跡の床面で検出した遺構にはレベルの記入漏れがあって、深さは不明である。

出土遺物

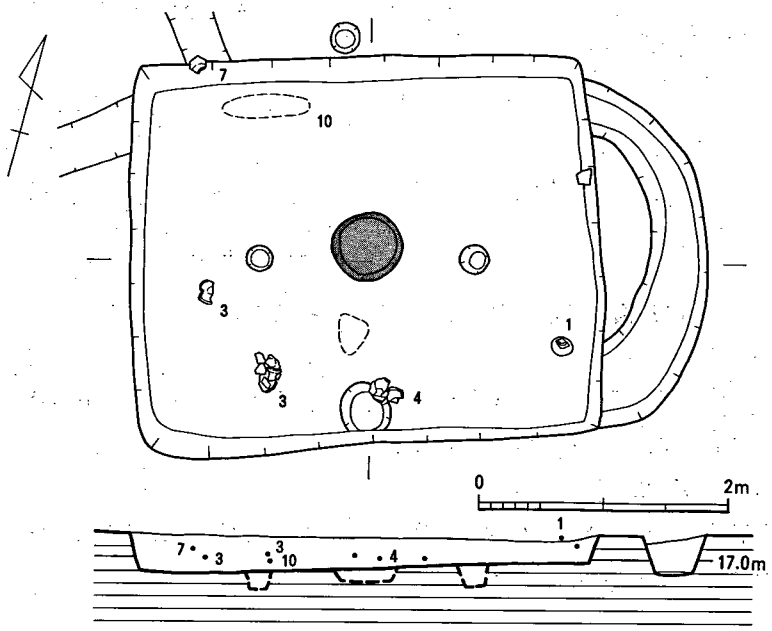
量的には多くないが、図示可能な土器が数点出土した。

鉄製品（第14図21・23・24）

21は鉇の残欠で2点あるが接合しえない。1点は基部のようである。幅0.9cm、厚さ0.2cmほどで、断面形は丸味が強い。23は不明鉄製品。厚さ0.1cmほどの板状を呈する。24も同様であるが、わずかにカーブを描く。いずれにも刃はみえない。

土器（図版85・86、第81図）

1は特異な壺で、体部は完存し、口頸部も2/3が残存する。しかし、出土位置は床からかなり浮いている。口縁部は小さく直立して二重口縁となり、体部は偏球形となる。体部外面は刷



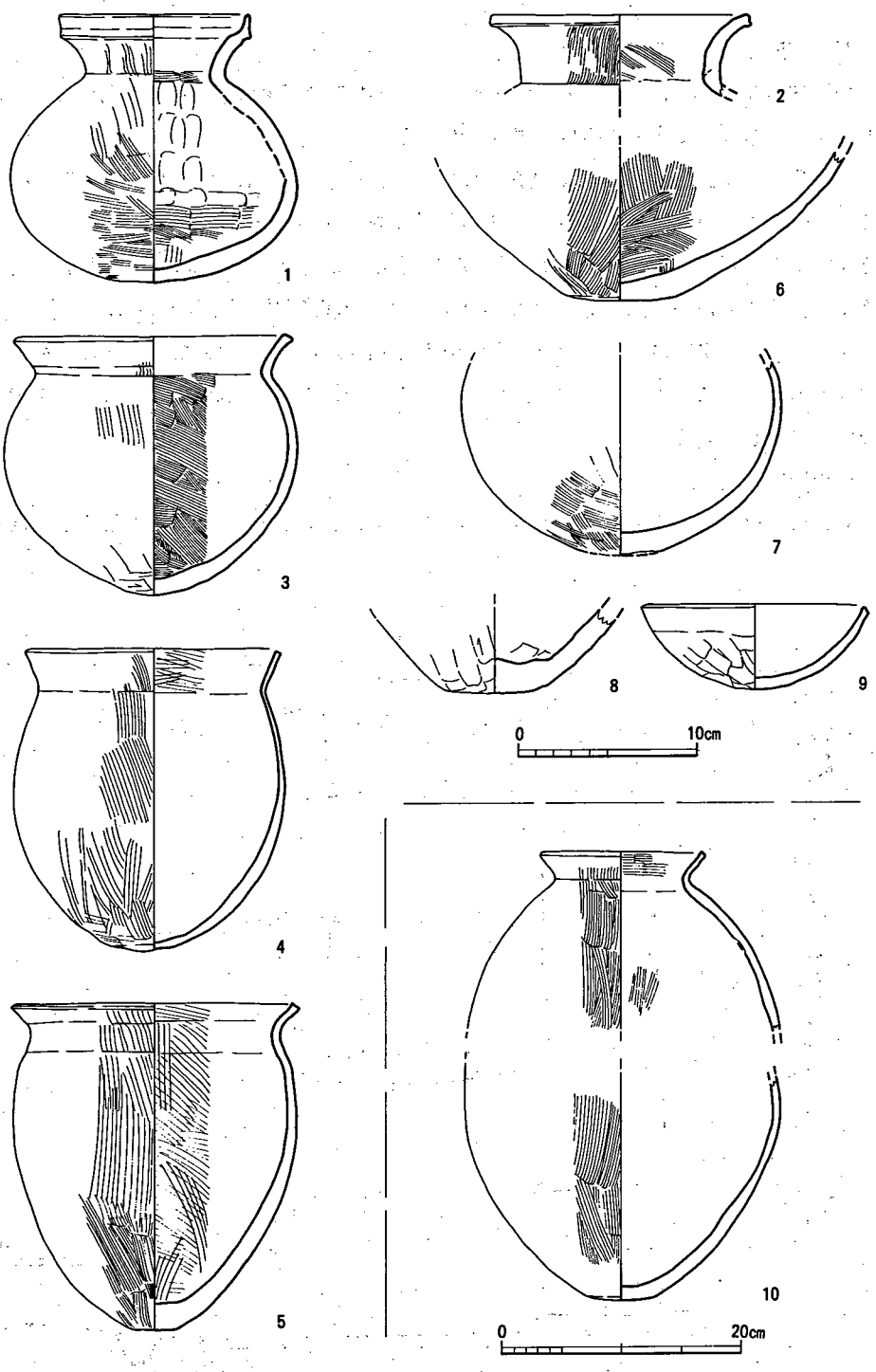
第80図　40号竪穴式住居跡実測図（1/60）

毛目を、内面は刷毛目と指撫でを多用する。肉厚なもの。2・6は同一個体であろう。6は図示部分が完存する。10は上下が接合しえない。口縁部はく字状に外反し、頸部の稜は甘い。体部下半は浅く弱い刷毛目を用いる。

3も体部下半が完存する。口縁部はく字状に強く外折し、端部は面を有する。体部外面は器面が荒れるが、部分的に刷毛目がみえ、底部付近は篦削りで丸底化を図る。同内面は細密な刷毛目で仕上げる。4も下半部はほぼ完存。口縁部から体部上半は器壁が薄くなり、口端部はやはり面をなす。体部中位で刷毛目原体を変え、上半は細密、下半は粗い。同内面の調整痕はよくみえないが、ごく丁寧に仕上げる。5も下半部が完周する。これは4と逆に下半が粗い、上半が細かい刷毛目で調整する。底部は小さな平底となる。

7は球形体部。内面はごく細密な刷毛目が残る。また、外底面は器表が弾けて剥離する。8は平底の底部であるが、立ち上がりとの境は丸味をもつ。

9はほぼ完存の鉢。体部下半は篦削りで、内面はごく丁寧な撫でと思われる技法で仕上げる。口端部はこれも面をなす。



第81図　40号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/6）

41号住居跡（図版27、第82図）

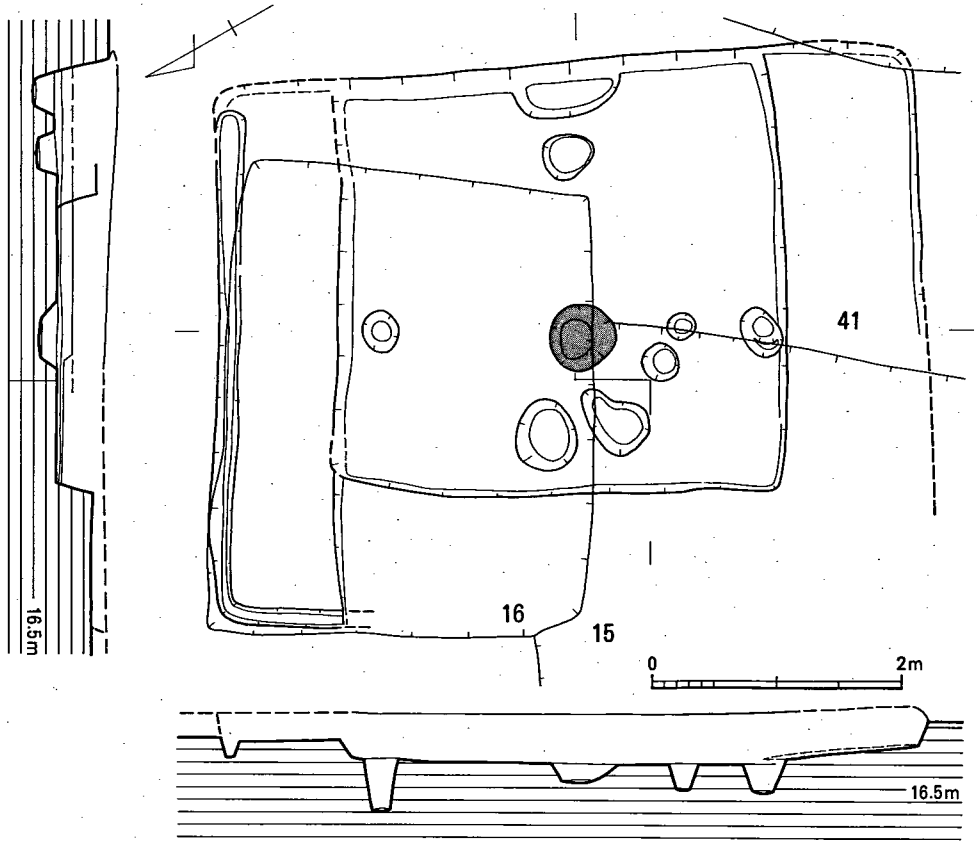
15・16・35号住居跡に大部分が切られ、かつ発掘時の不手際もあって不明に終わった部分もあるが、かろうじて主要な構成要素はつかみえた。

平面形は長軸5.7m、短軸は北隅角の周壁溝を使用して4.4mほどに復原できる。深さは最大で0.4mほどである。後出する住居跡の発掘時に掘り下げすぎたために一連のものとして上手く発掘できなかったが、3辺でベッドを確認している。その規模は幅0.8～1m、高さはよく残る北西辺で0.3mを測る。北東辺のベッドにのみ周壁溝が掘削されている。

床面のほぼ中央部に炭・焼土を埋土に交えた炉跡が位置し、それを挟んでほぼ直線上となるベッドの裾近くに2本の主柱穴が配される。また、屋内土坑は通常のようにベッドの付設されない辺に接している。

出土遺物

複雑に重復しているために所属する住居跡を特定できないものもあると思うが、取り上げ時



第82図　41号竪穴式住居跡実測図（1/60）

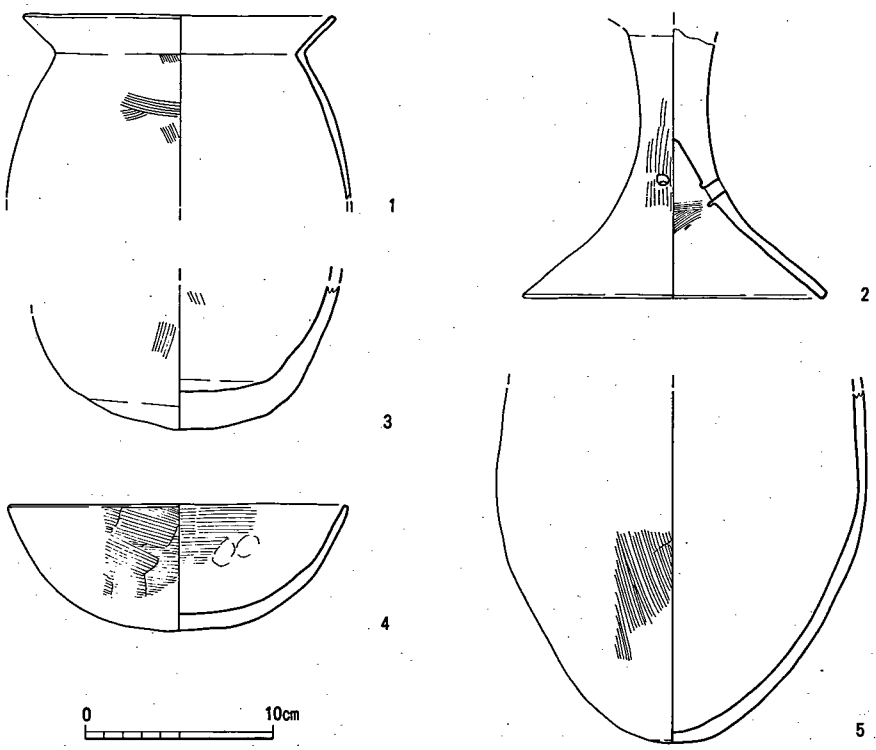
の注記を元に紹介する。ただ、16号住居跡の１に紹介した甕はあるいはこの住居跡に伴うものであるかも知れない。また、住居跡埋土上に埋納？された土器があり、それは別項（232頁）で紹介する。

鉄製品（図版86、第14図７）

鉄鏃のような形態であるが、刃部がはっきり見えない。また、基部は図示した部分で本来的に終わるようである。全長５㎝弱、厚さ0.3㎝ほどである。

土器（図版86、第83図）

１はごく薄手のもので、口頸部はく字状に強く外折し、頸部は明瞭な稜をもつ。口端部は断面方形とする。体部の張りは弱く、器表が磨滅するものの肩部に１単位の横刷毛を刻むようである。内面の調整はみえない。1/2強が残存する。２は柱状部が完存する。中実で、透孔は４方に穿たれる。３は図示部分が完周する粗雑なつくりの底部。ごく肉厚である。４も底部付近はよく残る。外底面は手捏風で、内底面には指押さえか、小さな凹凸がみられる。５は全体に刷毛目で仕上げた長胴の甕。底部は小さいながらも平底を残す。



第83図　41号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

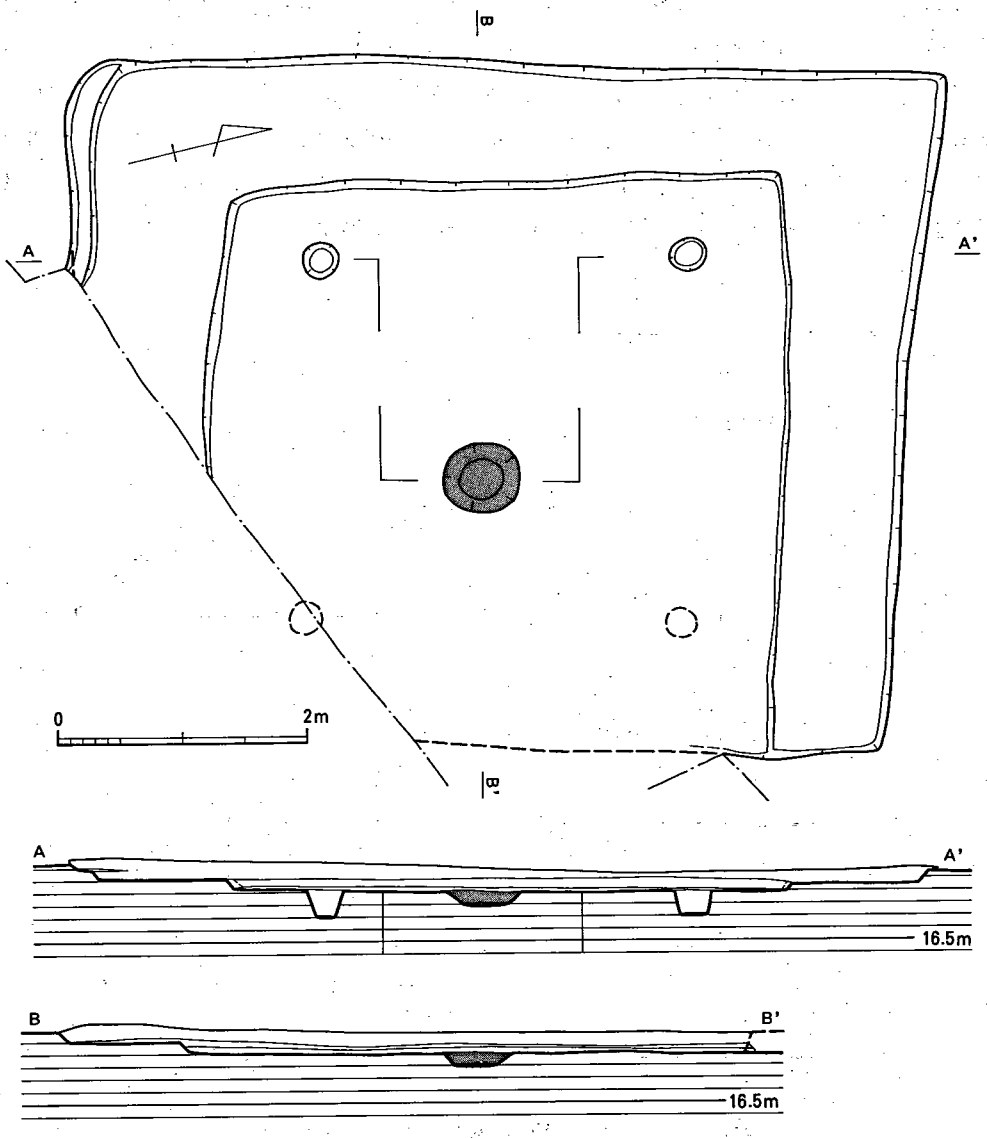
42号住居跡（図版28、第84図）

用水路の西に位置し、一部が水路下に潜っていて調査を行っていない。

平面形は東辺の大部分を検出していないが、およそ辺長5.6×6.7mの大型長方形の住居跡で、深さは最大で0.2mほどに過ぎない。

東辺は一部を確認したのみであるが、ベッドは東辺を除く3辺に付されており、その規模は幅0.8～0.9m、高さは0.1mに満たない低いものであった。

主柱穴は2基の柱穴を確認したのみであるが、その配置状況から4本柱を想定できる。



第84図　42号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

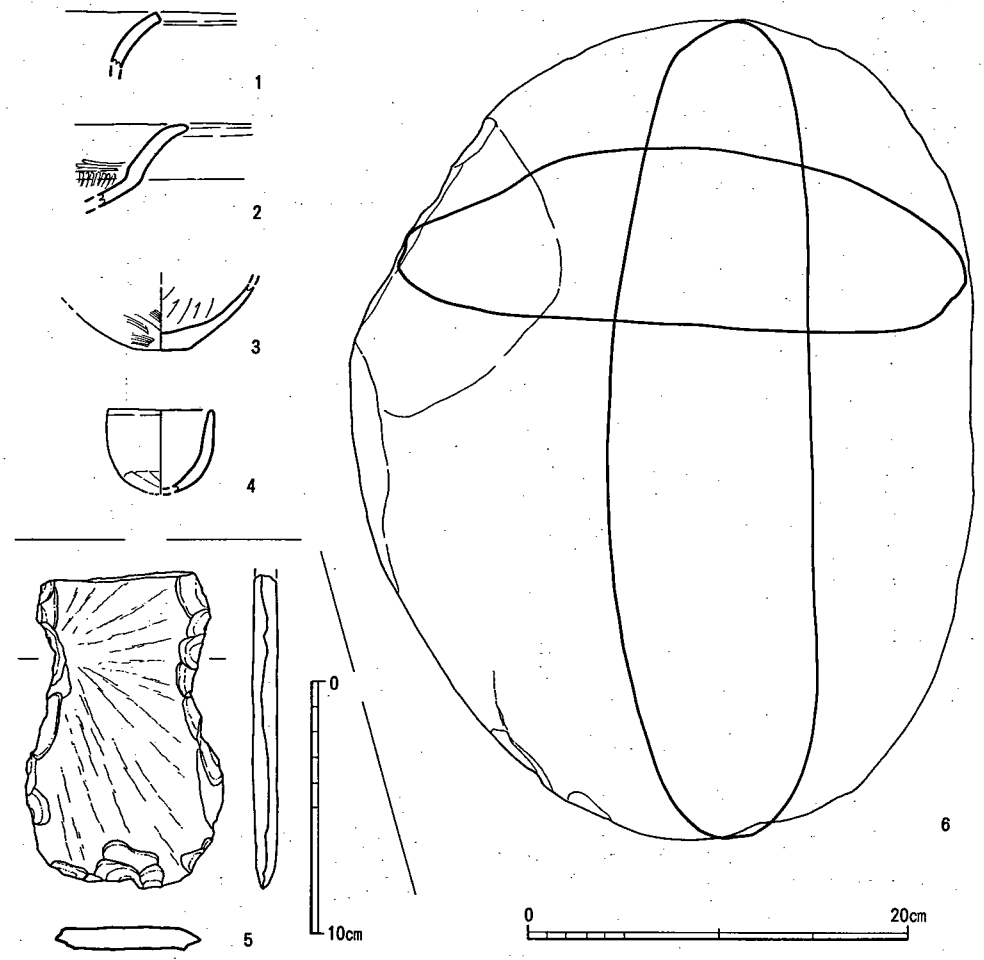
これも出土土器は少なく、小片を紹介する。

土器（図版86、第85図）

1は壺あるいは甕の口縁部小片。口端部に面をもつ。2は高杯小片で、反転部は短く、傾きも小さい。3は甕底部で、図示部分は完存。内面は篦削りで仕上げる。4は鉢小片。内面は丁寧に仕上げる。

石製品（図版86・87、第85図）

5は淡灰色の安山岩製打製石斧で頭部を欠く。縁辺の調整は雑である。これは住居跡内ではなく、東方出土。6は東辺の壁に近い部分で、床面上から出土した台石。長軸長48cm、短軸長32cm、厚さ9cm強の大きさ。全体に滑らかな面となるが、顕著な使用痕はみえない。



第85図　42号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

43号住居跡（図版28、第86図）

42号住居跡の北西に単独で位置する。

平面形は4.6×5.2mの長方形プランを有し、深さは最大で0.3mが残る。両短辺にベッドが付設され、その規模は幅0.8m前後、高さは0.1mほどである。

炉跡は中央やや南に偏して位置する。それに近い位置で2本の主柱穴を確認している。調査時に残余を検出できなかったが、その配置から推して4本柱の可能性がある。

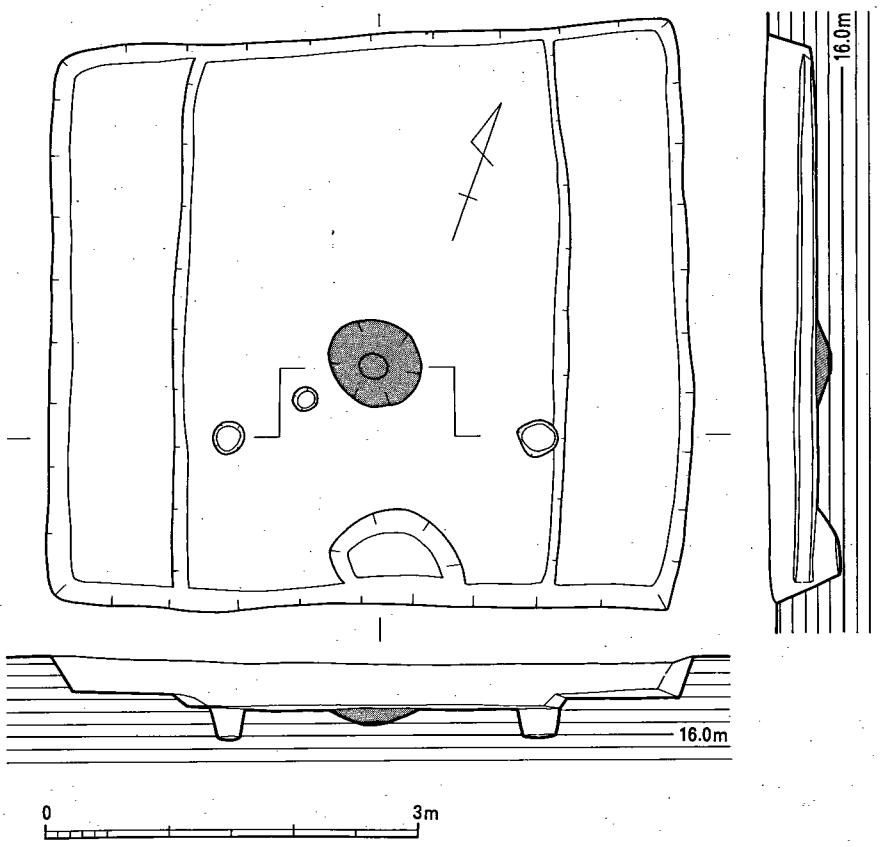
屋内土坑は炉に近い長辺の、これもやや東に偏った位置で検出された。

出土遺物

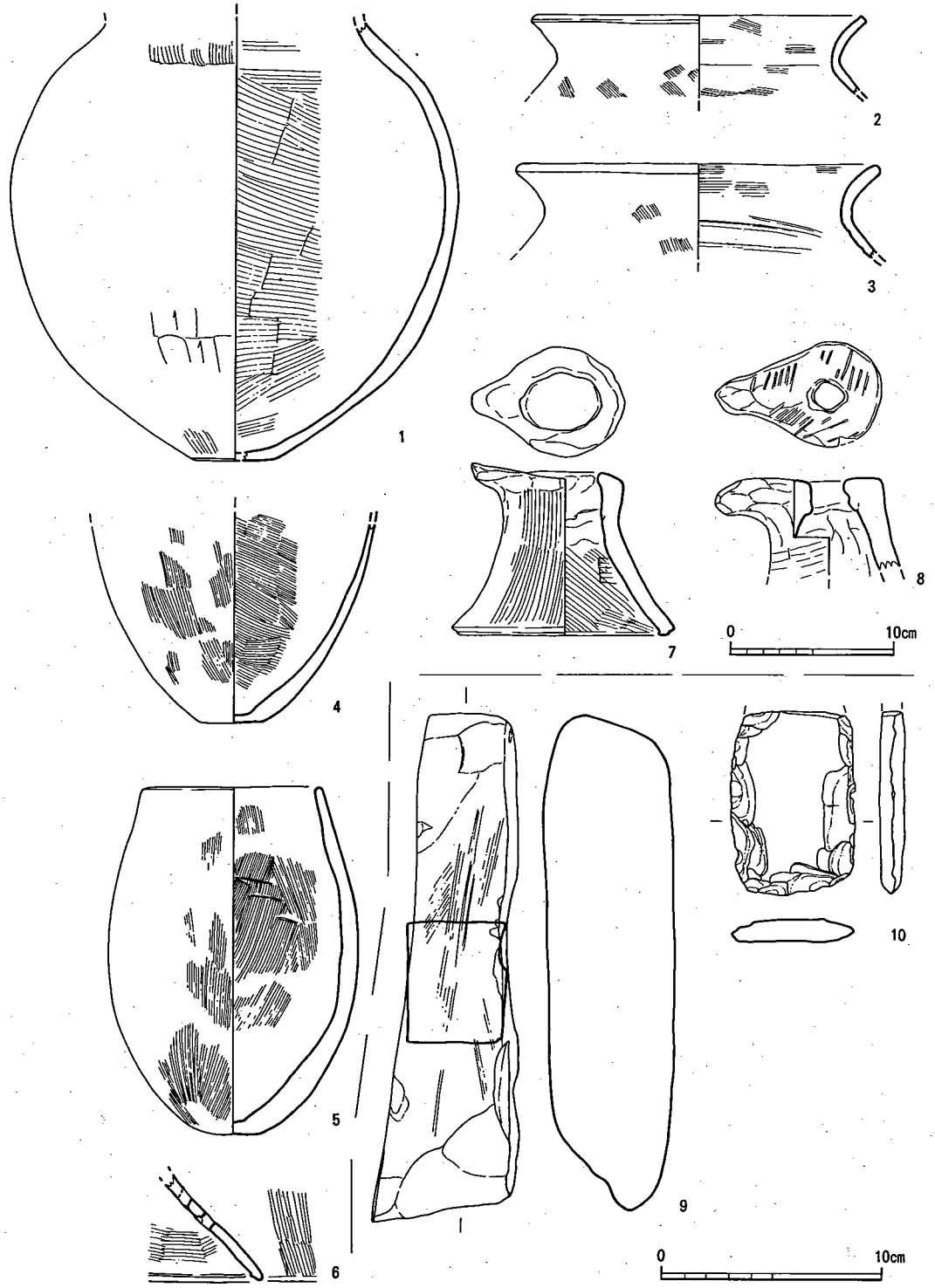
土器（図版87、第87図）

1は1/2弱が残存するが、1/4ほどが残存する底部を元に復原したものであり、復原図には一部の不安がある。底部は小さな平底となり、口頸部を欠く。体部は外面下半に篦削り状の痕跡が窺え、上半は不明。内面は全面に刷毛目を施す。

2・3は小片。3は体部内面に篦削りがみえる。4は平底。5は砲弾形の鉢。体部中位以下



第86図　43号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第87図　43号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

は完存し、上半も1/3が残存する。肉厚な土器で、全体に刷毛目で仕上げる。

6は高杯小片。上下2段に透孔を配するが、全体の単位は不明。

7は全体に刷毛目を多用する器台。全体に赤く焼ける。8は図示部分のみ完存。これも焼けて、器表はぼろぼろとなる。また、これは先の器台に比して頭部の孔の大きさが小さく、全体に粗い平行叩きがみえる。

石製品（図版87、第87図9・10）

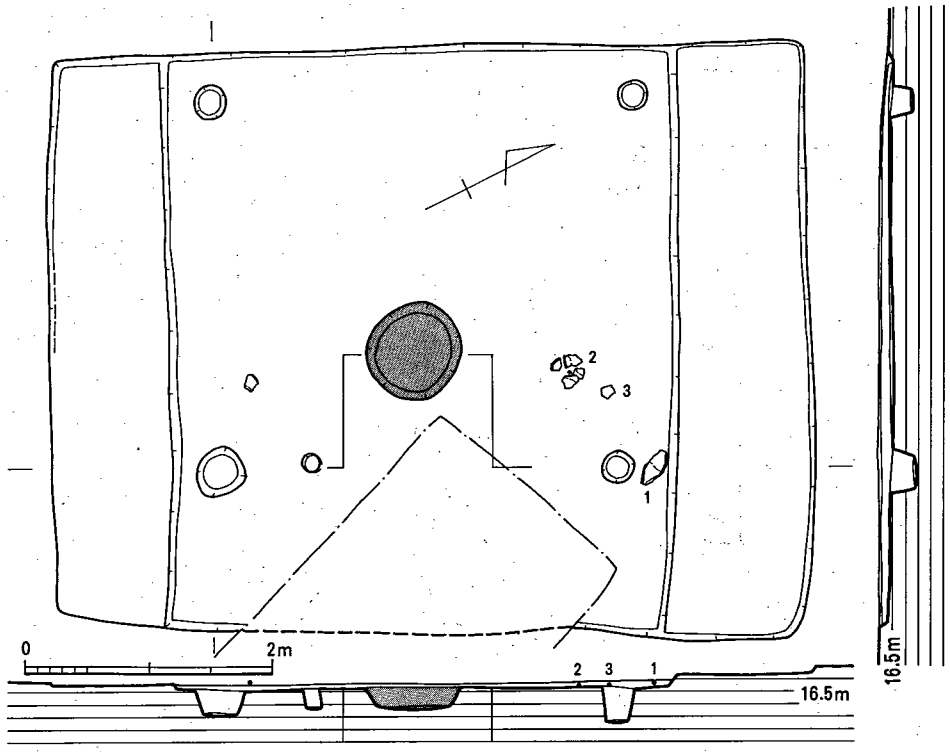
9は埋土中出土のもので、出土地点は特定できない。青灰色の泥岩製で、材質は緻密。図左右両面は破面となっていて、上下両面が使用される。条痕には細線と太線とがある。10は灰白色安山岩製の打製石斧。頭部を欠くが、形状は長方形を呈する。剥離は粗雑である。

44号住居跡（図版29、第88図）

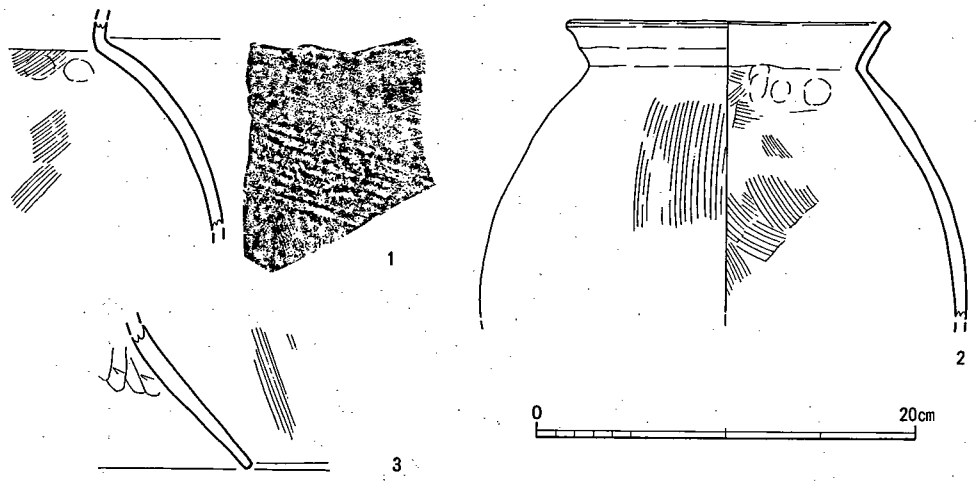
42号住居跡の南西に位置し、一部が電柱の控えを保護するために未発掘となっている。

平面形は4.6×6.1mの長方形プランを有し、残存する深さはごくわずかで、ベッドも一部が硬化した床面が確認できたのみという状態である。そのベッドは幅1m前後の規模で両短辺に付され、高さは最大で0.1mほどである。

中央やや南東に偏して炉跡が配置され、ベッドに近い位置で4本の主柱穴が検出された。屋



第88図　44号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第89図　44号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

内土坑は掘り残した部分に想定できる。

出土遺物

これも出土遺物は乏しい。

土器（図版88、第89図）

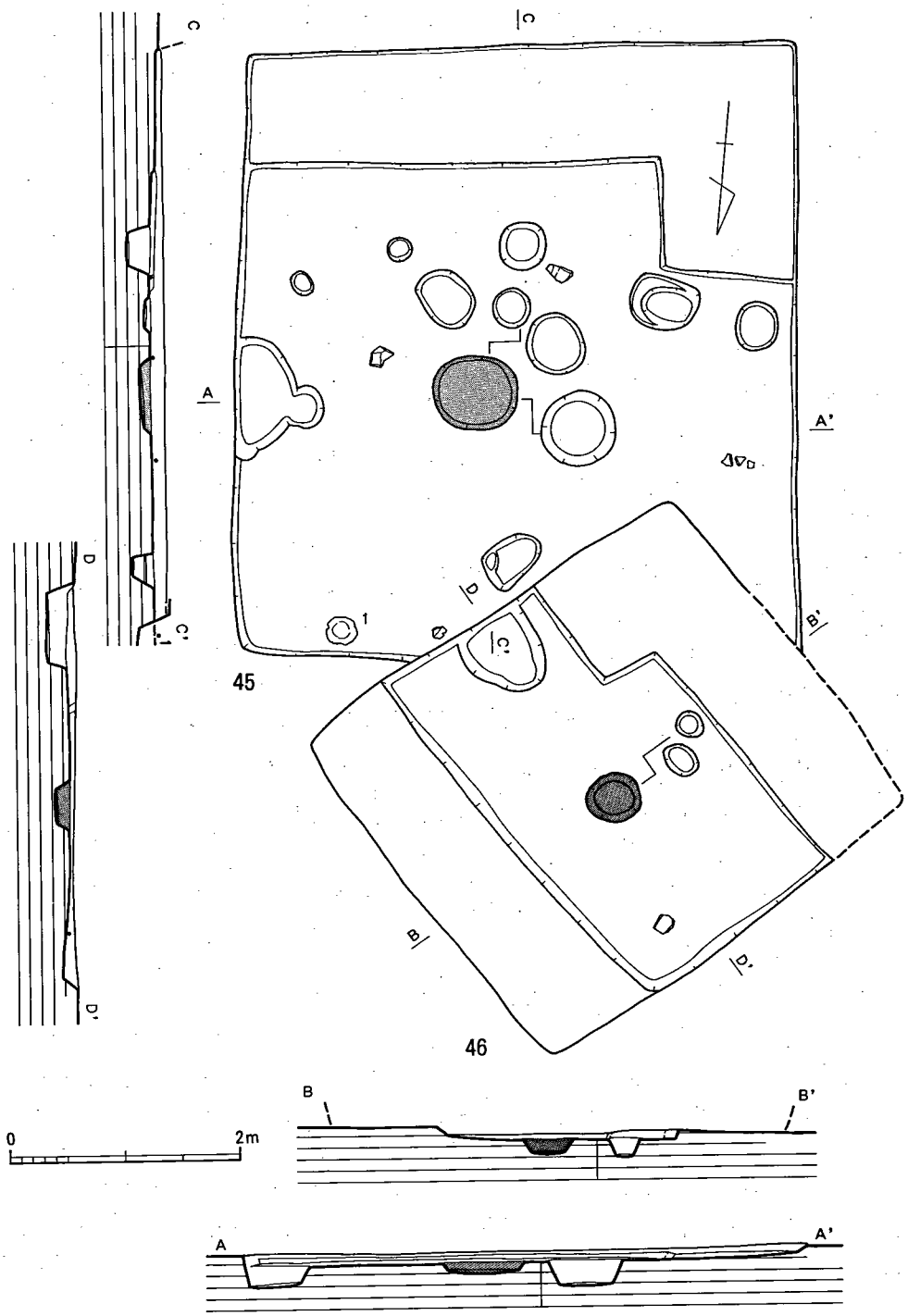
1は壺であろうか。張りのある体部から屈曲の強い頸部へ続くが、小片であり傾きは任意である。体部外面の一部には粗い平行叩きが付され、その上下には細かい刷毛目が付される。内面は細密な刷毛。2は口縁部が微妙な曲線を描き、端部は折面方形となる。体部は下膨れとなる。体部内外面の調整は刷毛を主体とする。3は高杯小片。内面の一部に篦削りがみえる。

45号住居跡（図版29、第90図）

44号住居跡の西に位置し、46号住居跡に一部を切られる。

平面形は4.9×5.4mの長方形プランとなり、深さは最大で0.1mが残存するに過ぎない。ベッドは南短辺にのみL字状に配されるが、その規模は幅1m、高さはわずか数cmが残存するのみである。

床面中央からやや北東に偏して炉跡が、そしてそれを挟むように2本の主柱穴が位置する。しかし、主柱穴の中、北に位置する柱穴は検出した北辺に近く、ここには本来的にベッドが付されていなかったものと思われる。ただ、遺構深度が非常に浅いことや、炉跡を中心として両主柱穴、南辺ベッドの肩・北辺肩までの距離が相近い状況は両短辺にベッドが存在した可能性も残すが、後述する46号住居跡内でも確認できていない。



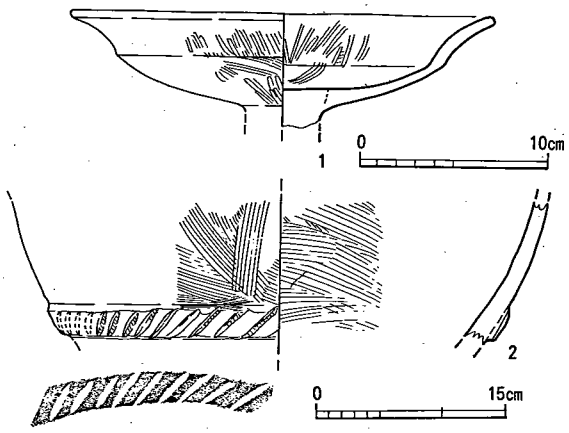
第90図　45・46号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

いずれもほぼ床面から若干の土器が出土しているが、図示できるものは少ない。

土器（図版88、第91図）

1は図示部分が完存。屈曲部以上があまり発達しない形態。2は大型の壺であるが、小片のためもあって傾き、復原径などには自信がない。全体に粗い刷毛目で仕上げ、扁平な突帯を付す。なお、刻みは刷毛目同様の原体を用いる。



第91図　45号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/6）

46号住居跡（図版30、第90図）

45号住居跡の北に位置し、その一部を切る。これも遺構の残りが悪く、ベッドはほとんどがその床面を残すのみである。

平面形は3.5×3.9mのほぼ正方形に近いプランを有し、深さは最大で0.1mほどが残存するに過ぎない。ベッドはやはり両短辺に付設するが、南西辺のそれはL字形に屈曲する。先述したように立ち上がりを残しておらず、床面で確認したのみであるが、その規模は幅1m、床からの高さは最大で0.1mほどである。

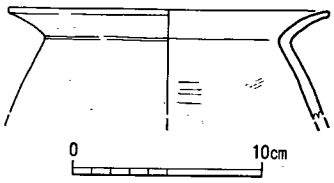
中央からやや北に偏して炉跡が検出されたが、主柱穴は一方を確認したのみである。配置から見て2本柱を想定できる。

出土遺物

これも出土遺物は乏しい。

土器（図版88、第92図）

小片である。口縁部は大きく、浅く開き、端部は面をもつ。体部内面は丁寧な刷毛目で仕上げるが、外面の調整痕はみえない。



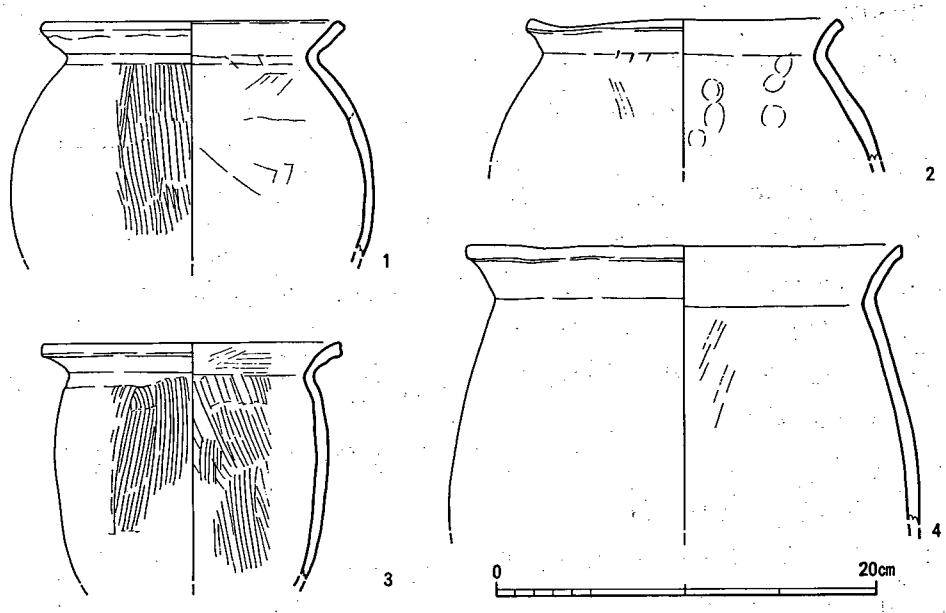
第92図　46号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

47号住居跡（図版30、第94図）

43号住居跡の西に近接して位置し、48号住居跡に一部を切られる。

平面形は4.1×5.4mの長方形プランを有し、深さは最大で0.2mほどが残存する。ベッドは付設されていない。

床面中央付近に炉跡が設置され、その両側に比較的近接して2本の主柱穴が配される。東辺中央付近に屋内土坑が検出されたが、その最深部は炉跡に近い位置にある。



第93図　47号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

出土遺物

これも出土遺物は乏しく、いずれも残存状態も悪い。

土器（図版88、第93図）

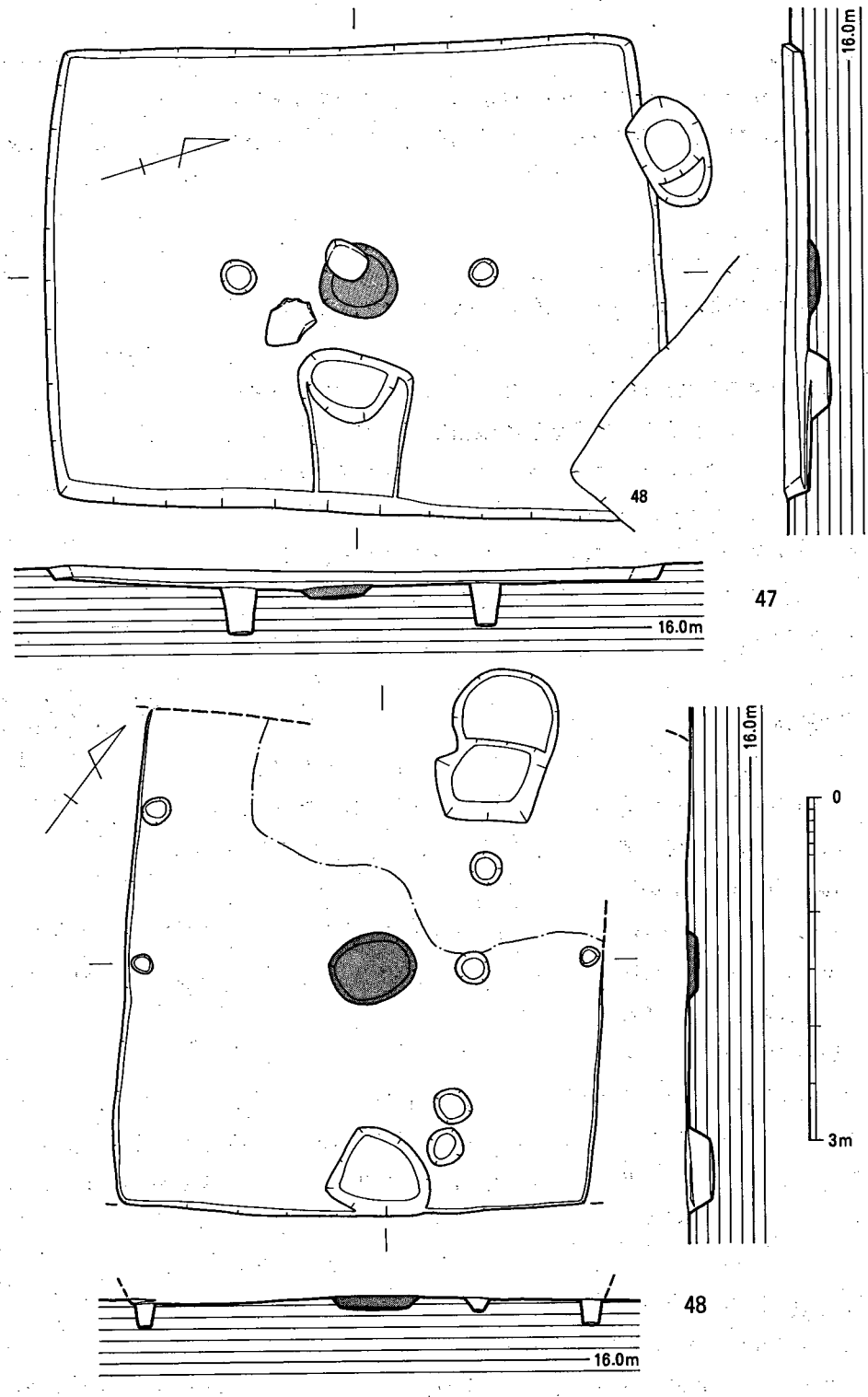
1・2はいずれも体部が張りをもつが、口縁部のつくりが異なる。1では内彎気味にのびて口端部を丸くおさめ、2では外彎気味にのびて口端部を断面方形とする。3・4は長胴の甕。外半の度合いが異なるが、いずれも端面をもつ。以上の内の1～3は小片、4は約1/4が残存。

48号住居跡（図版31、第94図）

47号住居跡の北にあって、その一部を切る。これも遺存状態が非常に悪く、硬化した床面が全く確認できなかった部分もある。

検出した平面形は4.2×4.4mのほぼ正方形の平面プランであったが、主柱穴の位置から見て東西の両辺にはベッドが付されていたようである。深さは数cmに過ぎない。

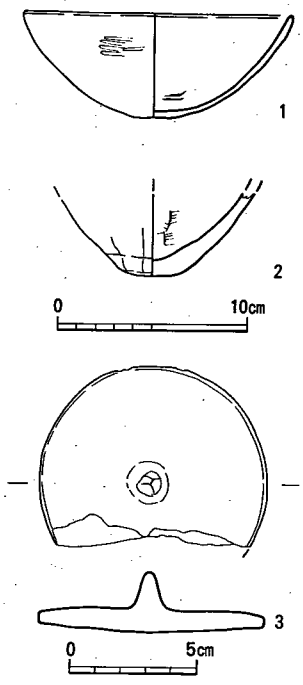
床面のほぼ中央部に炉跡を検出でき、それを挟んで東西両辺に接して位置する小型柱穴を主柱穴に想定できる。主柱穴は通常周壁に接して位置することはなく、往々にしてベッドに接していることからこの両辺にベッドが付されていた証左といえる。



第94図　47・48号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器小片が若干出土するものの、図示していない。特徴を窺えるものでは内外面に刷毛目を残し、口端部を丸くおさめる甕がある。



第95図　49号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

49号住居跡（図版31、第96図）

48号住居跡の北東に近接して位置し、ほぼ半分が調査区外へ続く。

平面規模は短軸長5mが確認できたのみであるが、炉跡が中央付近に位置すると仮定すれば長軸長は5.2mほどに推定できる。ただ、その場合には調査区内に北辺ベッドの痕跡が確認できるはずであるが湧水のためもあって確認できていない。

炉跡は調査区内で確認している。2本柱を想定できる主柱穴については、図の位置でベッドの肩部に刳り込みが見られたことからその付近に想定できるのであるが、それ以上の深度を確認できなかった。

出土遺物

これも出土遺物は乏しい。図示した以外では外面に叩きや刷毛目を、内面に刷毛目を残す体部片、口端部に面を有する口縁部片、小さな刻み目突帯を付す破片や小さな平底となる底部片などである。

土器（図版88、第95図）

1は約1/4が残存する薄手の鉢で、外底面付近には篦削りの痕跡がみえる。内面の器面調整は丁寧。2も小型土器の底部で、図示部分が完存する。底部は篦削りを用いて平底とし、内面には細密な刷毛目が施される。

土製品（図版89、第95図）

土製の模造鏡で出土状態は確認できない。直径約9㎝、最大高2.4㎝の大きさ。ほかの土器と比して特別の相違はなく、しいてあげれば上面（鏡背面）が赤味を有することであろう。ちなみに下面（鏡面）は灰黒色となる。調整は全体に粗い撫でを主とするが、鏡面では一部に篦削りを用いるようである。

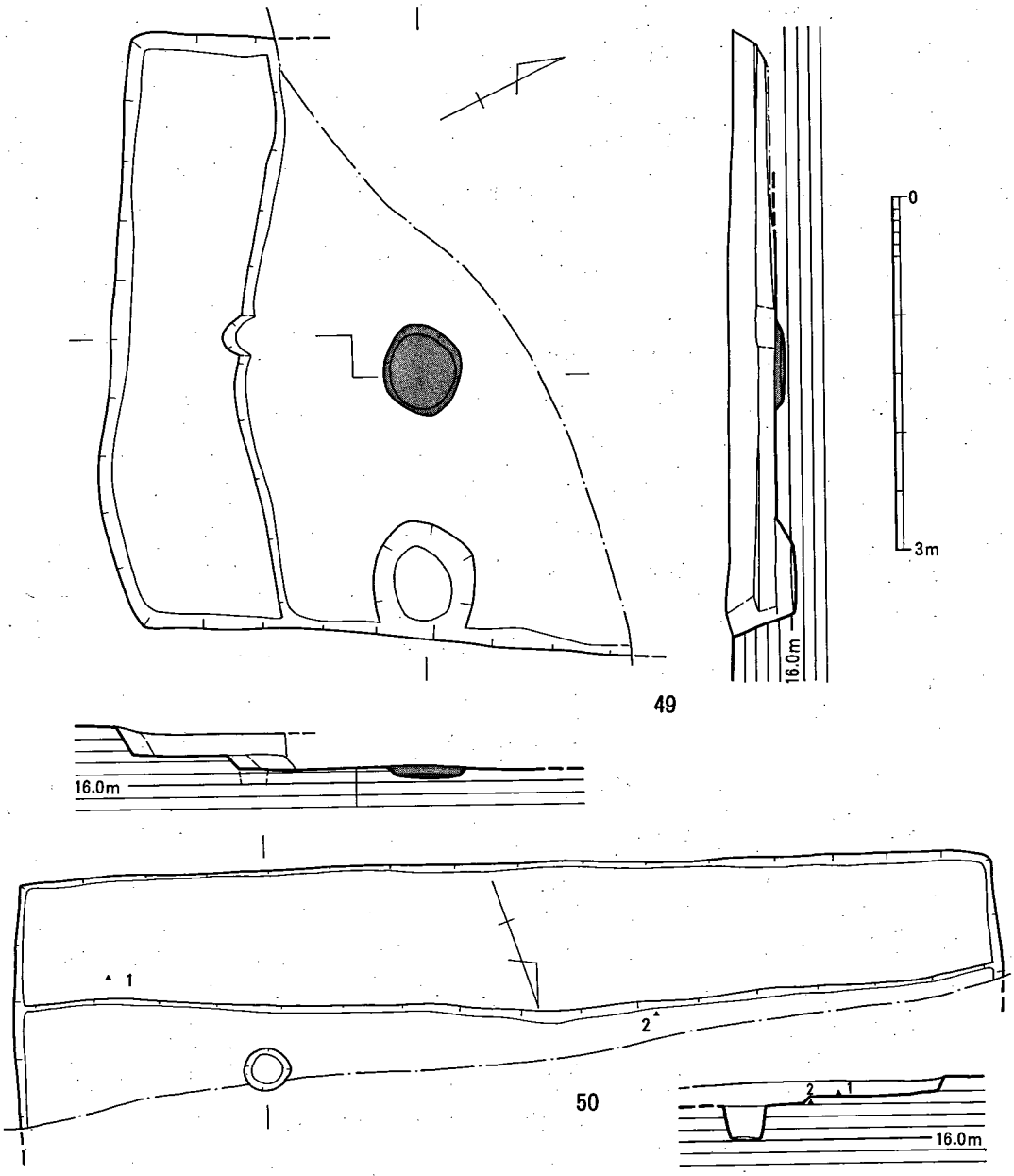
50号住居跡（図版32、第96図）

49号住居跡の西でその一部を検出したが、大部分は調査区外へ延びている。

検出した一辺は長さ8.3mと本遺跡中最大規模であり、かつこの辺にベッドが伴っているこ

とは、他例から見て短辺であることを思わせる。その場合には長辺は10mを優に越えるものと推測される大規模な住居跡である。

検出したベッドは幅1.2m、高さ0.1mほどの規模である。西辺付近の調査範囲が狭小になっているために確信がないが、あるいはコ字形に三方に付設されている可能性もある。



第96図　49・50号竪穴式住居跡実測図（1/60）

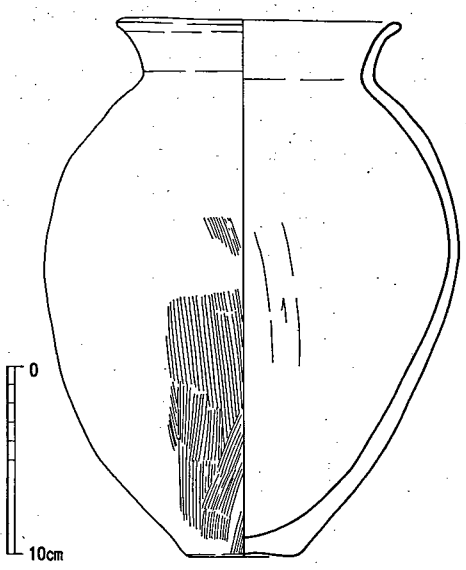
ベッドに近い位置で柱穴を１基確認しているが、東辺に屋内土坑を付設した４本主柱穴を想定すればこれはその中の1基としてよい。

出土遺物

これも発掘面積が小さいこともあって量は少ない。ただ、2点の鉄製品が床面から出土した。

鉄製品（図版89、第14図５・14）

５はベッド上から出土した鉄鏃の完形品。これも錆のために形状は定かでないが、柳葉式あるいは圭頭式のようなものであろう。全長11㎝強で、先端から８㎝弱の部分に関がある。14はベッド直下から出土した鉄鎌で刃部を欠く。残存長７㎝ほどで、最大幅は約４㎝、背の厚さは0.3㎝を測る。刃部は図下側の屈曲部の左1.5㎝ほどから始まる。



第97図　50号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

土器（図版89、第97図）

図示した土器の口縁部はごく一部が残るのみであるが、頸部以下はほとんどが残存する。口縁部の外反は強く端部付近でさらに外折する。端部は丸く終わる。頸部内面の稜線は弱いが、体部は張りをもって平底の底部へ続く。体部外面には刷毛目が、内面の中位付近では篦削りが一部で確認できる。

51号住居跡（図版32、第98図）

調査区南西隅付近で検出したもので、52号住居跡を切っている。というよりも大部分が52号住居跡中に掘り込まれている。この付近も湧水が甚だしく、かつ、住居跡埋土中に掘削されていることも災いして細部が不明のままに終わった。

平面形は3.3×4.5mほどの長方形プランとなり、深さは0.2m強が残存していたが、多くの部分で掘り過ごした。その過程で炉跡・屋内土坑をも飛ばしてしまった。

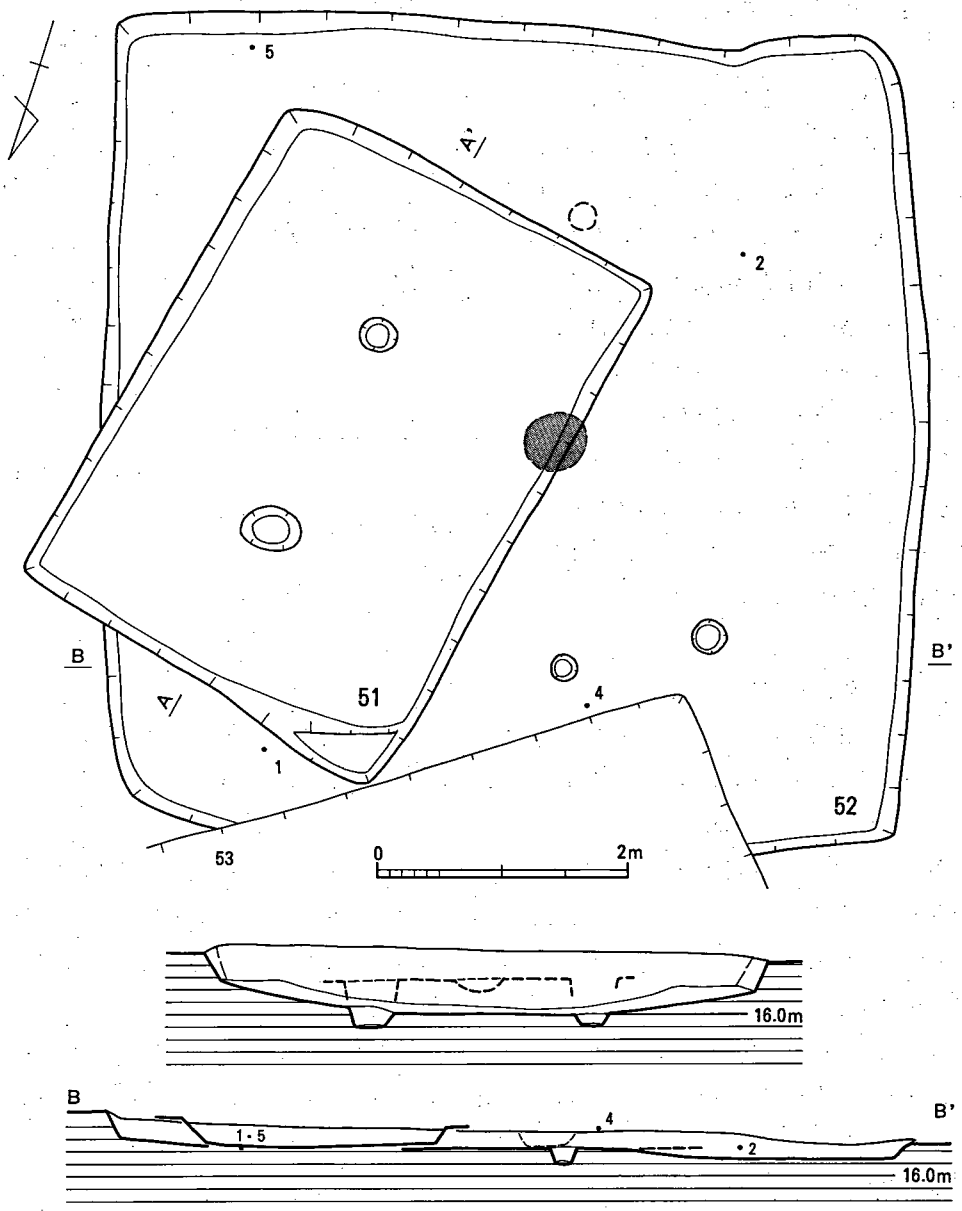
主柱穴はかろうじて確認しえたが、ベッドは痕跡を検出しておらず、本来的に付設されていなかったっものと考えている。

出土遺物

発掘時の悪条件から出土状態などは確認できていない、ただ、後述する52号住居跡の出土遺物と比べれば、ここに図示したものは後出する住居跡に伴うものとしてよかろう。

土器（図版89、第99図）

１は小型丸底壺でほぼ完存する。偏球形の体部に、直行する大きな口縁部が付く。体部外面



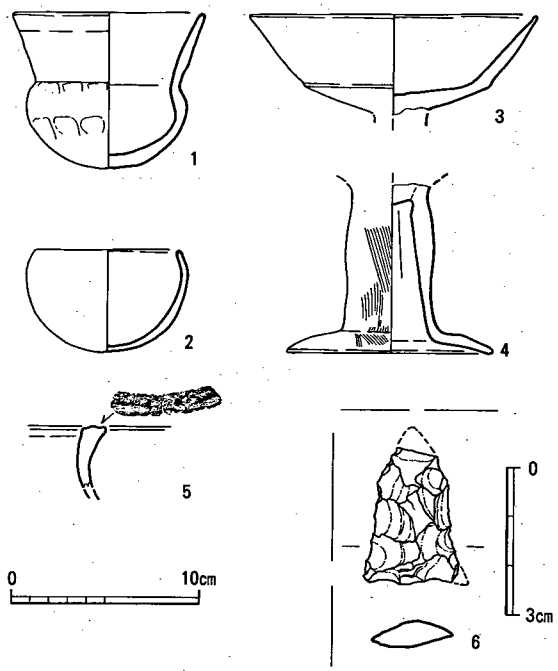
第98図　51・52号竪穴式住居跡実測図（1/60）

は刷毛目あるいは篦削りの後に撫でて仕上げるようである。2は小片の鉢。口縁部は内彎し、体部は球形となる。外底面は篦削りのようで、内面調整は丁寧。

3はほぼ完存する高杯で、薄く終わる口端部を小さくつまみ上げる。器面の全体に焼成時に弾けてできた小規模な剥離がみられる。4は中空の脚部で、3とは別個体のようである。脚裾の形状が特異である。4は口端部を肥厚させて端面に凹線を2条刻む小片。胎土などはほかの多くの土器と同様で、器表も荒れる。

石製品（図版140、第99図6）

灰黒色～暗灰色を呈する安山岩系製の打製石鏃で、切先を欠く。残存長2.8㎝、幅1.8㎝、厚さ0.5㎝、重量は2.3ｇを測る。剥離は大雑把である。



第99図　51号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,2/3）

52号住居跡（図版32、第98図）

51・53号住居跡に切られる。先述したように湧水のため、これも一部不明で終わった。

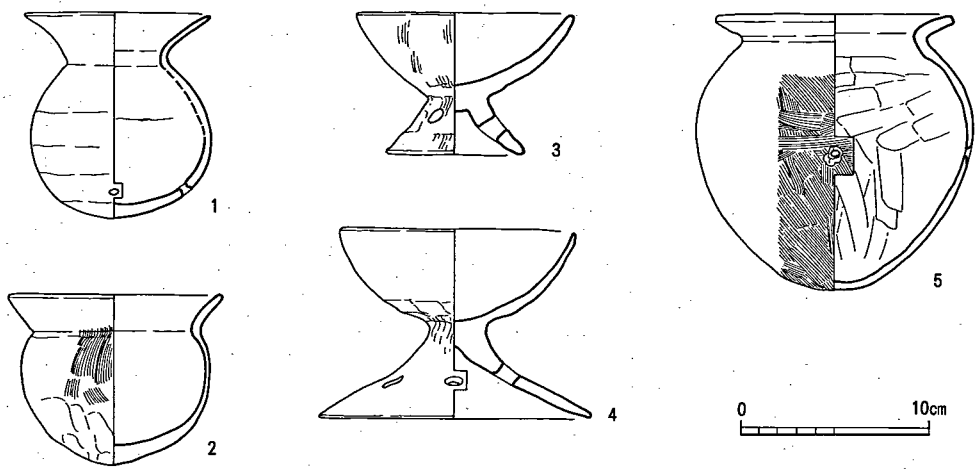
平面形は6.5×6.6ｍのほぼ正方形に近いプランを有し、深さは0.2ｍ弱が残存する。これは炉跡周辺に部分的に硬化面が遺存していたことによって確認できる。

炉跡は先の51号住居跡西辺際で炉床の硬化面を検出したが、この位置が52号住居跡床面のほぼ中央となることから、明瞭な土坑を確認できていないが炉跡としてよかろう。その北1.8ｍで検出した小柱穴は2本主柱穴を想定した場合に相応しい位置となり、図のような位置に対となる柱穴を想定できる。

屋内土坑の位置は他例の多くが東・南辺となっているが、この場合は東辺に推定できる。また、ベッドの有無については、それらしき痕跡を全く確認できなかったことから本来備わっていなかったものと考えている。

出土遺物

量は乏しいが、図示したような小型土器が出土する。うち、2・5はほぼ床直上から、5は検出面近くで出土し、3は位置を記録していない。また、1はレベルの記録が無く、垂直的な位置は写真に拠るしかない。図示していないものでは粗い平行叩きを付した土器が目立つ。



第100図　52号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

土器（図版89・90、第100図）

1は口縁部が大きく開く壺で、底部近くに直径0.5cmほどの穿孔がある。焼成前に開けられたものである。器面は風化が進み、調整痕はよくわからない。2はこれも口縁部が発達し、鉢とすべきであろうか。口端部は内彎し、小さな匙面を有する。これも器表は荒れる。3は短脚の高杯。透孔は3方にある。4は椀形の小型高杯。脚部は膨らみをもって大きく開く。透孔は4方。これも器面が荒れる。5は肩の張る体部に非常に大きく開く口縁部を付す。これも口端部内面が小さな匙面状となる。体部内面は篦削り、外面は細かい刷毛目で仕上げるが、肩部付近の数単位のみが横位に施される。なお、体部最大径のやや下方に小孔が穿たれるが、これは焼成後になされたものである。

53号住居跡（図版33、第101図）

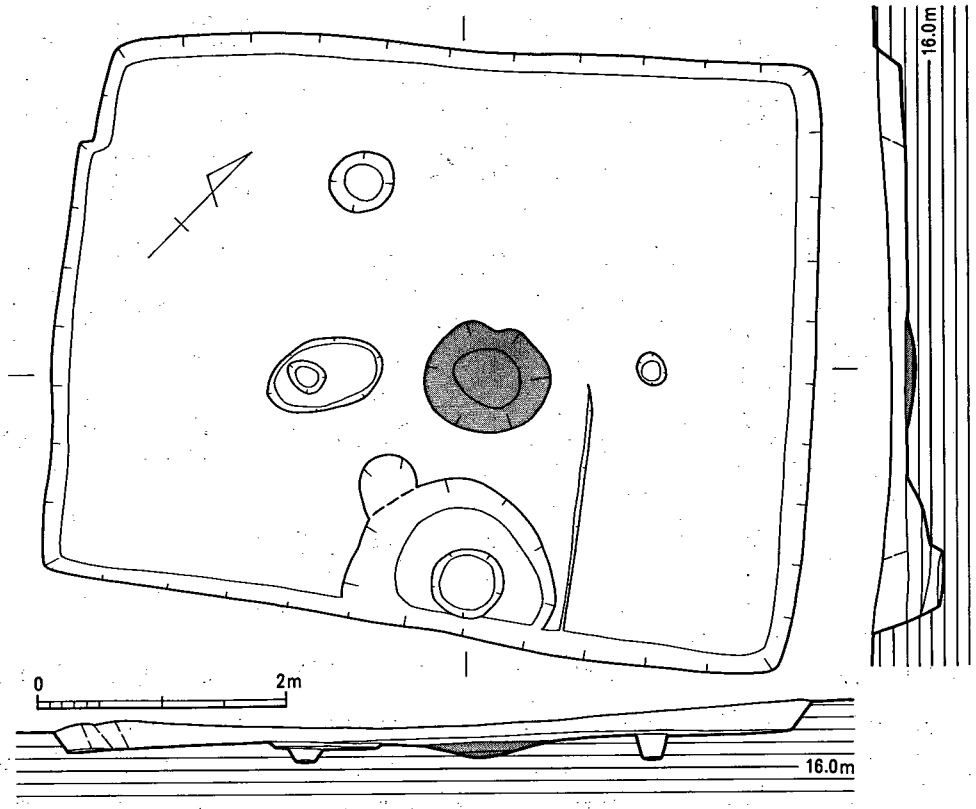
52号住居跡およびプランの不明瞭な57号住居跡を切っている。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は4.5～4.9×6.1m、深さは最大で0.2m強である。南東隅付近で屋内土坑と炉・主柱穴間に数cmの低い段が検出されたが、ベッドとしては主柱穴との位置関係が通常とかなり異なることや、それ以外の部分で全く痕跡を検出していないことから発掘のミスであろうと考えている。

炉跡は中央からかなり南東方向、屋内土坑へ寄った位置にあり、主柱穴はそれを挟む2基である。なお、北隅付近の床面は硬く締まった面となる。

出土遺物

出土状態を記録したものはない。図示したもの以外でも管見したところでは篦削り調整され



第101図　53号竪穴式住居跡実測図（1/60）

たものが目立ち、底部は平底あるいはレンズ底で、尖底はないようである。

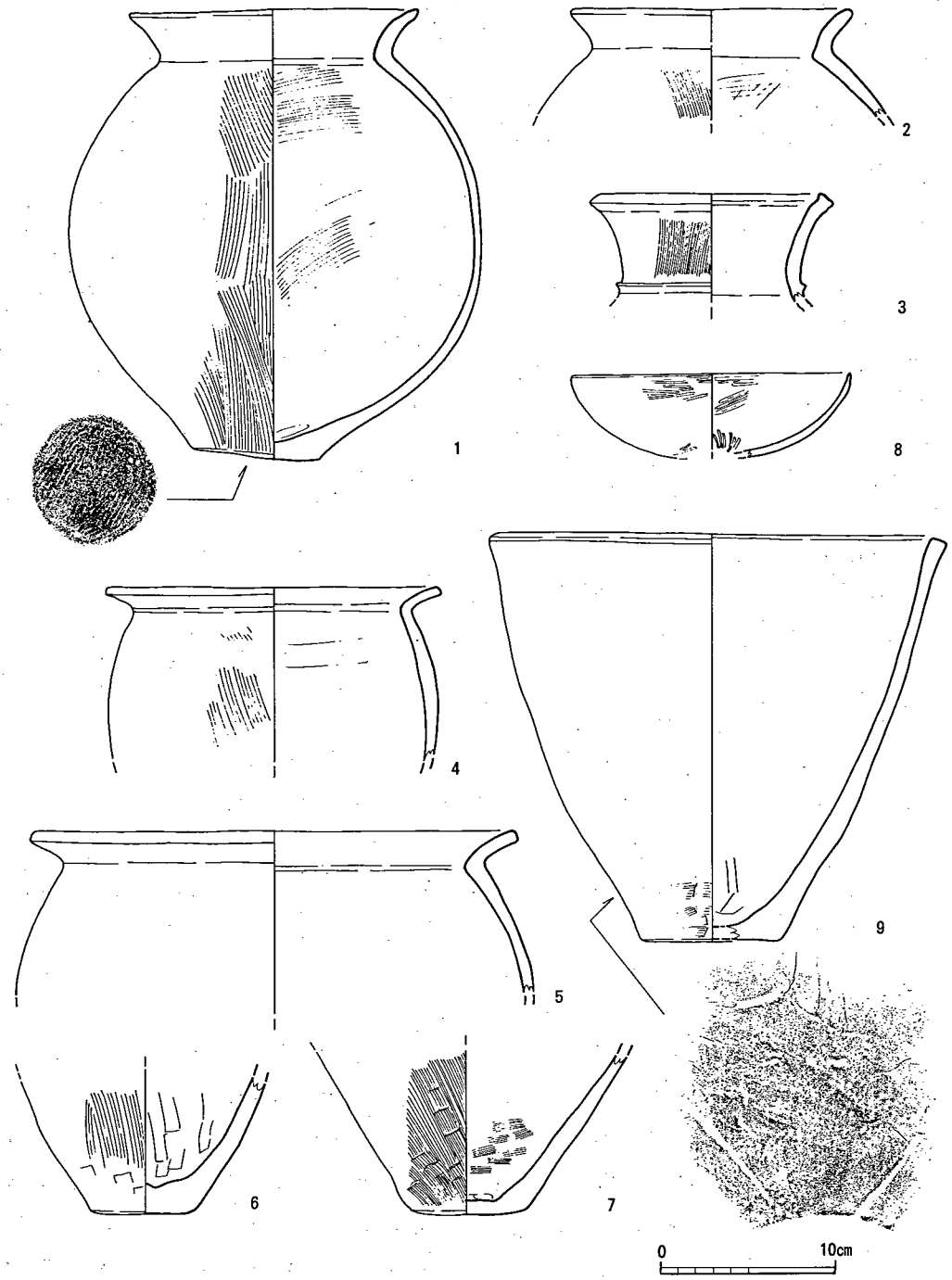
土器（図版90、第102・103図）

1は短い口縁部が強く外反し、端部は薄くなって終わる。体部の張りが強く、底部は刷毛目を用いて平底とする。2も同様の形態の小片。3は口縁部が高くのびるが開きが小さい。口端部は内側へつまみ、突出する。頸部に小さな三角突帯を付す小片。

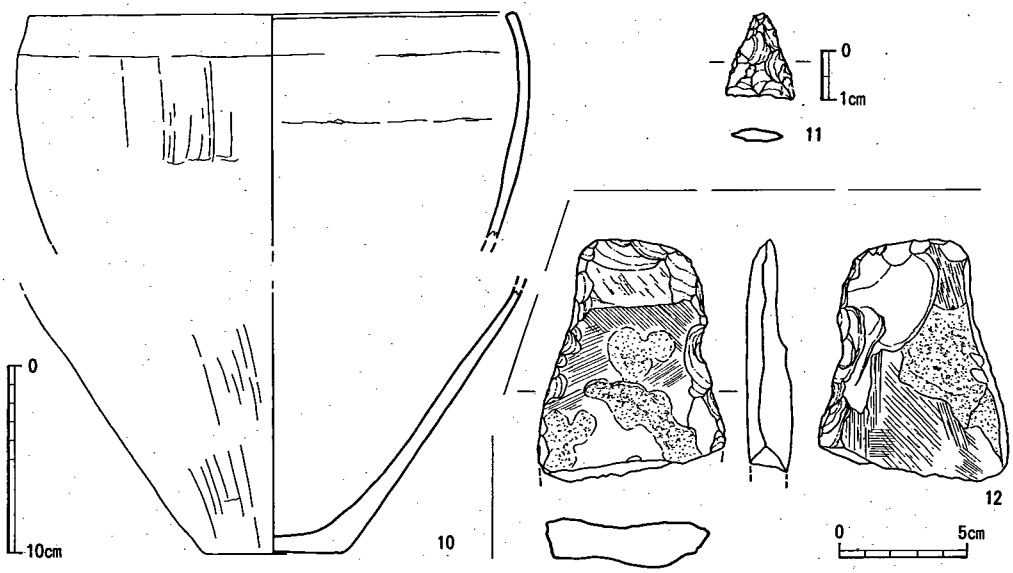
4・5の甕も器形の大小はあるがよく似た形態で、口縁部の外反が強く、端部は丸味をもって終わる。4は体部内面の調整は不明であるが、外面は刷毛目で仕上げる。5は焼けて器表が荒れ、調整痕はみえない。6・7は平底であるが、体部へ移行する屈曲部は丸味をもつ。いずれも確認できる調整痕は刷毛目であり、後者のそれは細密なものである。

8は浅い鉢で、約1/4が残存する。内面の調整は篦磨きを使用するなどごく丁寧で、外面の一部にも篦磨きがみえる。

9は全体のほぼ半分が残存する。焼けて器表が荒れるが、口端部は断面方形につくられるようである。体部は下位部分で小さく膨らみつつ直線的に開くが、口縁部付近で若干外反する。



第102図　53号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）



第103図　53号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1/4,2/3,1/3）

器表の遺存度が悪いために調整痕がはっきりしないが、体部下半では叩きのようにもみえる工具で押し引きしたような痕跡が斜めに走る。底部の穿孔の有無は不明。10は接合しえず、また歪みをもつために図上復原もできなかったが同一個体である。これも二次的な火熱のために器表のとくに内面が荒れ、調整痕は不明。外面には刷毛目がわずかにみえる。

石製品（図版90・140、第103図11・12）

11は51号住居跡出土石鏃と同じ安山岩系石鏃の完形品。長さ1.7㎝、最大幅1.3㎝、厚さ0.3㎝を測る。重量は0.5ｇ。

12は南東辺の屋内土坑から出土した石斧と思われるもの。側縁の一方は破面のままでわずかな小剥離を行うのみで、他方は両面から剥離を行う。表裏とも凹面となった自然面を残すとともに凸部を研磨したようにみえる。安山岩製。

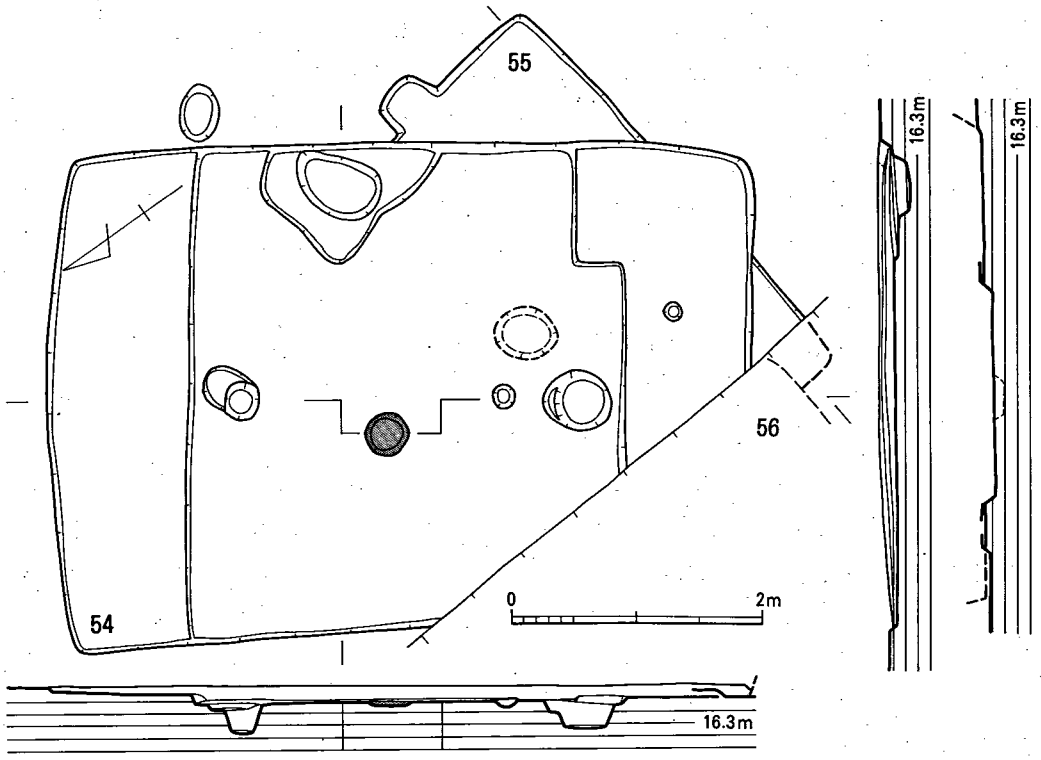
54号住居跡（図版33、第104図）

53号住居跡の北にあって、55号住居跡を切り、56号住居跡に切られるが全体は窺える。

平面形は４×5.6ｍの長方形プランとなり、深さは最大で0.1ｍ強である。両短辺にベッドが付設されるが、南西辺のそれはＬ字形となる。その先端はいま少し屋内土坑へ接近していたのかも知れない。このベッドの規模は幅1ｍ強、高さ0.1ｍほどである。

床面中央のやや北西寄りで検出した浅い小型土坑が炉跡で、ベッドに接するような位置にある両主柱穴を結ぶ線上からずれている。

出土遺物

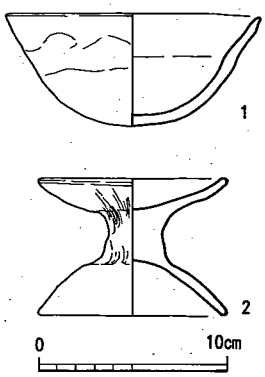


第104図　54・55号竪穴式住居跡実測図（1/60）

小片若干が出土する。甕では内外面を刷毛目調整するものがある。

土器（図版90、第105図）

1はいわゆる小型丸底壺に似る形態をとるが、頸部の締まりがほとんどなく鉢と呼ぶ方が相応しい。口縁部は中位で小さく外方へ膨らむ。小片で、かつ器表は荒れる。2は中実の小型器台で、口縁部の一部を発掘時に欠く。つくりは雑である。



第105図　54号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

55号住居跡（図版33、第104図）

54号住居跡に大部分を破壊された住居跡で、その一部を検出したのみである。

平面形の全体は把握できないが、短辺長は3.8mと確認できている。また、54号住居跡の床面、西側主柱穴の東で検出した小土坑の床面が部分的に赤変していて、これが55号住居跡の炉跡であろうと考えている。この住居跡の主柱穴・屋内土坑等を全く確認

できていないが、他例での屋内土坑の位置、そして本例で検出した南辺・東西辺と炉跡との距離関係から推測して南辺および北辺の両短辺にベッドが付設されていた可能性が高い。多くの例でのベッドの規模が幅１ｍ前後であること、そして炉跡がほぼ中央付近に位置すると仮定すれば、この住居跡の長軸長は５ｍ強ほどに復原できるであろう。

出土遺物

遺存状態が悪く、出土遺物はないようである。

56号住居跡（図版33・34、第106図）

54号住居跡の西にあってそれを切り、58号住居跡に切られる。南に位置する57号住居跡については平面プランが不明瞭なので先後関係は判らない。

検出した平面形は3.3×3.9～4.6mほどのいびつな長方形プランであるが、図から判るように非常に遺存度が悪く、発掘を上手に行えなかった結果である。

南辺に幅1m、高さ0.1mほどのベッドを付設するが、炉跡・屋内土坑・主柱穴などの配置から推して北辺にも同様なベッドが付されていた可能性が高い。その場合は長辺長５ｍ弱の規模に復原される。

東辺際に屋内土坑が掘削され、その西に炭や焼土を出土した炉跡が位置する。また、それを挟んでほぼ南北方向に２基の主柱穴が配される。

出土遺物

少量の土器片が出土するのみで図示していない。内外面ともに刷毛目調整を残す甕や、中位で屈曲する大型高杯の杯部片などがある。

57号住居跡（図版34、第106図）

53・58号住居跡に切られる。また、平面的な把握に失敗し、細部ははっきりしないままであるが、2本の主柱穴をもっていたと想定している。

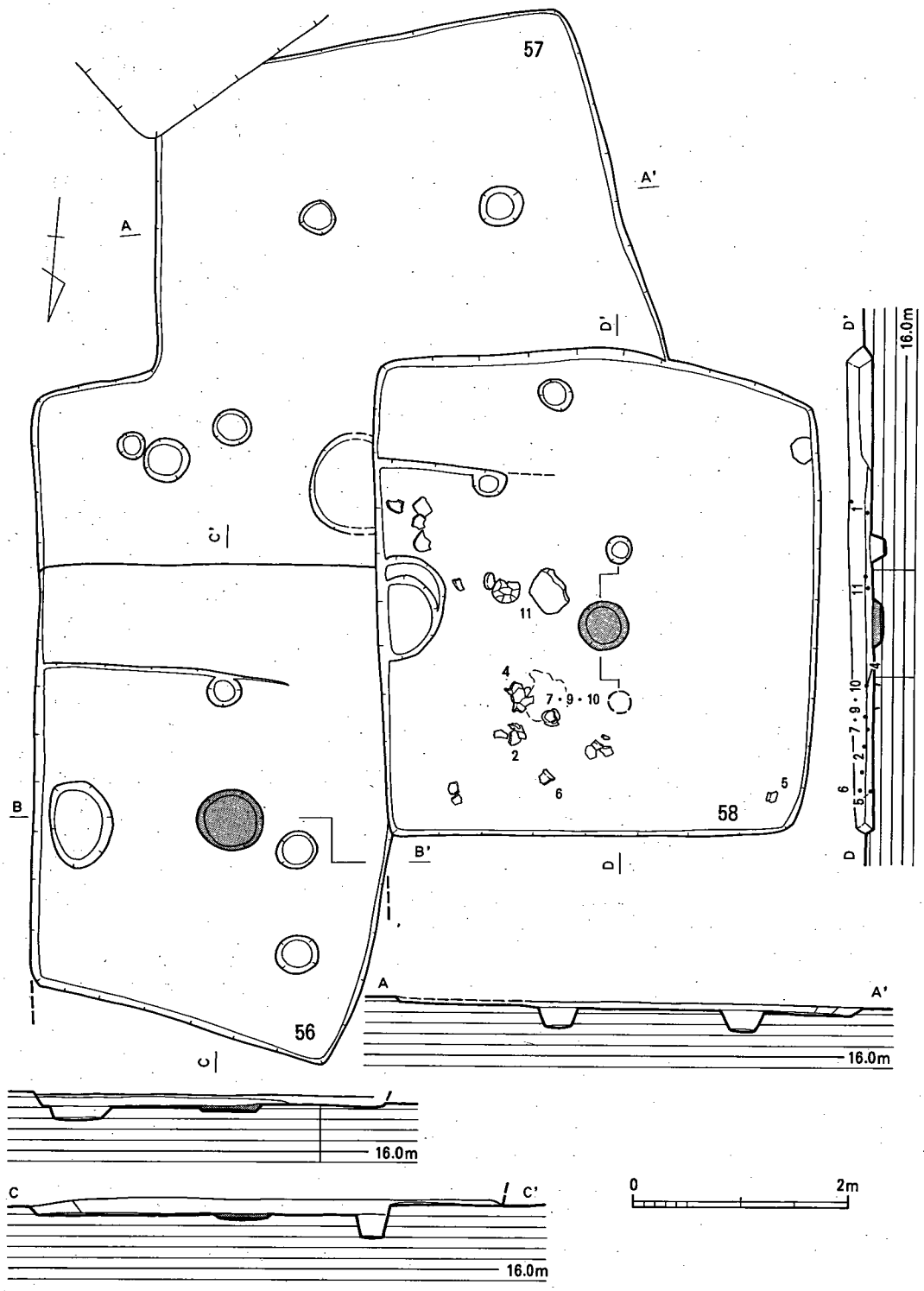
北東部の張り出しは検出ミスと思われ、平面形は東西長４～4.4m、南北長は不明であるが長方形のプランに復原できよう。深さはわずかで0.1mも残っていなかった。そのためもあってか、炉跡や屋内土坑は検出できていない。検出した2本の柱穴が、位置関係から見て主柱穴かと思われる。

出土遺物

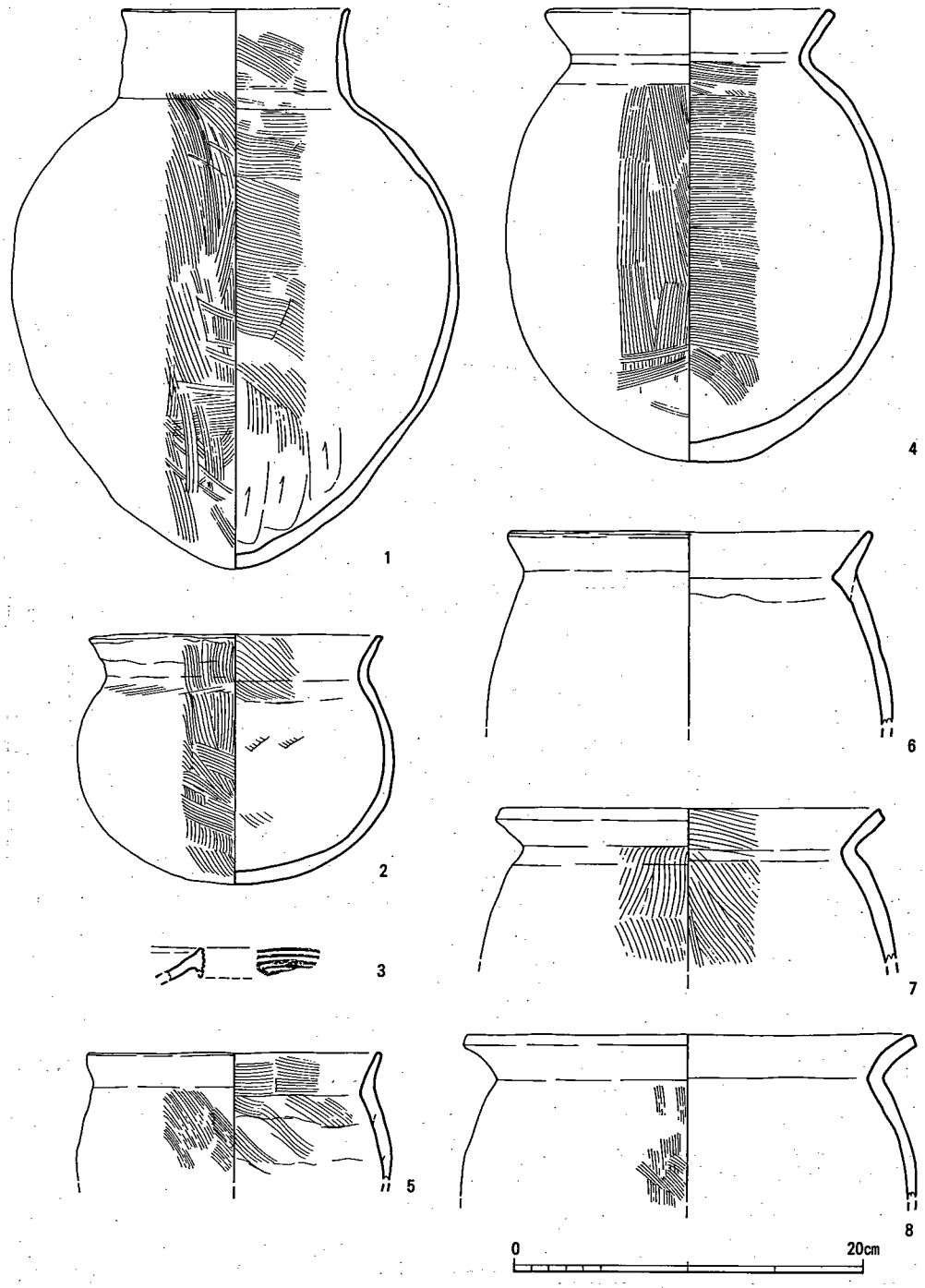
これも小片若干が出土するのみ。内外面に刷毛目を残す甕などがある。

58号住居跡（図版34、第106図）

56・57・69号の各住居跡を切って掘り込まれる。



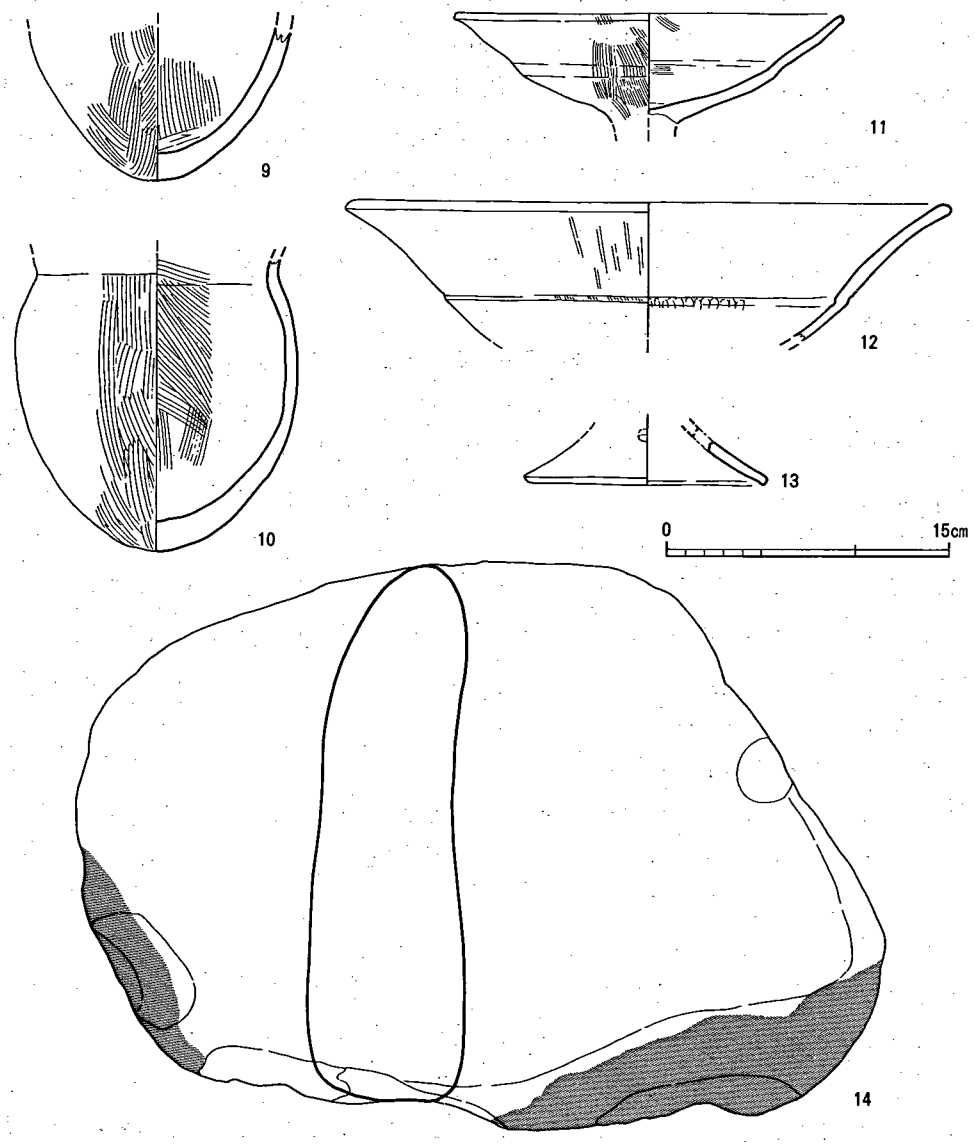
第106図　56～58号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第107図　58号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）

平面形は4.1×4.6mの正方形に近いプランとなり、一部の検出ができなかったものの南北方向に2本の主柱穴を配したものであろう。その柱穴間に炉跡が、そして東辺中央付近に屋内土坑がある。ただし、北側の主柱穴は検出できていない。

また、炉跡南で高さ0.1m弱の段が確認されており、ベッドが付されていた可能性がある。しかし、北半の遺物出土レベルが検出した床面にほぼ接していることから、ベッドが北辺には



第108図　58号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）

付設されていなかったことは確かであろう。

出土遺物

遺構の残りが悪かったにしては床面からかなりの土器などが出土した。

土器（図版90・91、第107・108図）

1は口縁部がほぼ直立し、口端部が小さく外反して丸く終わる。張りのある体部から尖り気味の底部へ続く。調整は全体に刷毛目を多用するが、底部内面付近では篦削りを使用する。2は鉢に近い形態で、体部は偏球形となる。口縁部は端部に面を付すようであるが、不整で粗雑なものである。これも全体に刷毛目を主として用いるが、体部外面では部分的に篦削りを使用するようである。なお、頸部外面の叩き状に図示された痕跡は刷毛目原体の小口痕である。3は壺あるいは器台であろうか。口端部は垂直に近い面をなし、その面に4条の凹線を刻む。胎土は精良であるが、とくに特異なものではない。

4はやや長胴気味の甕でほぼ完存する。口縁部は強く外折し、端部は面をなす。これも調整は全面に刷毛目を主体として用いており、非常に器肉が厚くなっている。なお、外底面はよく焼けて器表が荒れている。5・6は口縁部が短く外反し、頸部内面に明瞭な稜をもつよく似た甕。5は粗雑なつくりで、6では体部内面を篦削りで仕上げる。7・8は口縁部が強く外反し、端部が面をもつもので、口縁部の形状は直線的あるいは外彎してという差異がある。8では体部内面に篦削りを用いているようにもみえる。9・10は尖り気味の底部。これも刷毛目を主として用い、肉厚となる。

11はほぼ完存する高杯杯部で、屈曲部の稜線は甘くつくりは粗雑である。12は大型高杯であるが、小片であり、復原口径にはいささか不安がある。屈曲部は痕跡程度で、段あるいは稜線を沈線で表現する。口端部は肥厚気味であるが丸く、内外面に篦磨きの痕跡が残る。13は高杯脚部の小片であろう。小型品で、透孔が確認できる。

石製品（図版91、第108図）

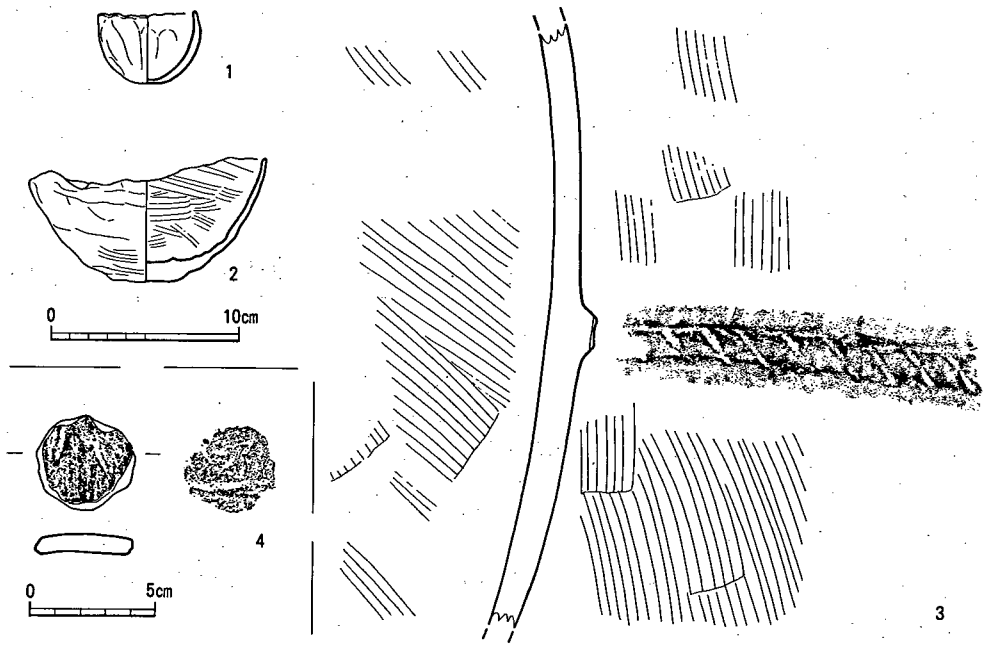
炉跡の脇の床面から出土した台石。安山岩製で、全体に器面が滑らかとり、下面（出土時も下面であった）中央部付近は緩く窪んでいる。図下方の縁辺は黒色に変色する。

59号住居跡（図版36）

56・58号住居跡の北に隣接して土器片が散布していたことから住居跡を想定して精査したが、確認できなかった。したがって、この遺構番号は欠番とするが、出土遺物はこのままで整理している。

完形に近い小型品や大型壺がかなりまとまって出土していることから住居跡あるいは土坑があったのかも知れない。

出土遺物



第109図　59号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

土器（図版91、第109図）

1はほぼ完形の手捏土器。2も口縁部が波打ち、器面も平滑化できていない粗雑な土器で、外面調整は叩き、刷毛目そして篦削りのいずれとも判断できないようなものである。これもほぼ完存する。3は大型壺で、パンケース1箱分があるが接合困難。全体に刷毛目で調整するが、器表が荒れる。

土製品（第109図）

直径3.8～4㎝、厚さ0.7㎝前後の大きさで、重量は12.3ｇ。表面は粗い条痕、裏面は篦削りのようである。

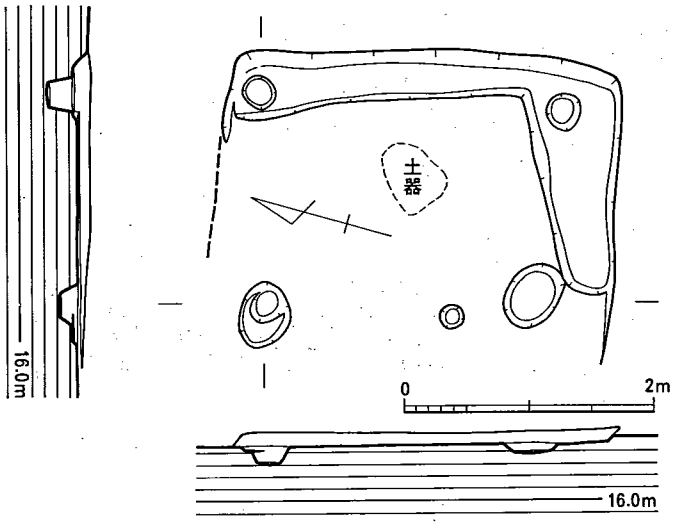
60号住居跡（図版36、第110図）

54・56号住居跡の北に位置し、これも全体を確認できてはいない。

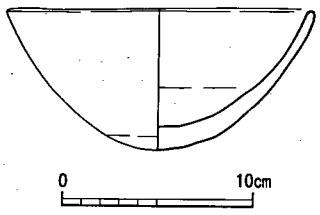
検出した部分は東辺のみで、その長さは3m強である。深さは最大で約0.1m。南辺は2.3mの長さまで確認できたが、本来の規模は不明。

検出した両辺に沿う幅0.4～0.7m、深さ0.1mほどの浅い溝を認めたが、この遺跡中には類例がない。また、先の溝底などでほぼ長方形の配置をとる柱穴群を検出したが、それらが主柱穴を構成するものであるとの確信はない。炉跡も未確認。

出土遺物



第110図　60号竪穴式住居跡
実測図（1/60）



第111図　60号竪穴式住居跡
出土遺物実測図
(1/4)

口端部に面をもつ、体部内外面に刷毛目を残す甕などの小片が若干出土している。

土器（図版91、第111図）

口縁部は一部が残存するのみだが、その他はほぼ残存する。器面は風化し、調整痕はみえない。

61号住居跡（図版37、第112図）

60号住居跡の北に近接し、ほぼ半分が調査区外へ続く。62号住居跡のベッドと切り合うようだが、ベッドが残存しておらず確認できていない。また、4号方形周溝とも切合関係を有するが、平面的に先後関係を確認することができなかった。

検出できた東西長は5.7m。南北長は4.6mを確認しているが、炉跡を中心として反転すれば約5.6mとなり、ほぼ正方形のプランを想定できる。南東隅および南西隅に張り出しがあるが、発掘時に特殊な知見はない。深さは最大で0.2mほどとなる。

ベッドは南・西の2辺で検出しており、おそらく三方に付設されたものであろう。幅1m前後、高さは最大で0.2mほどである。

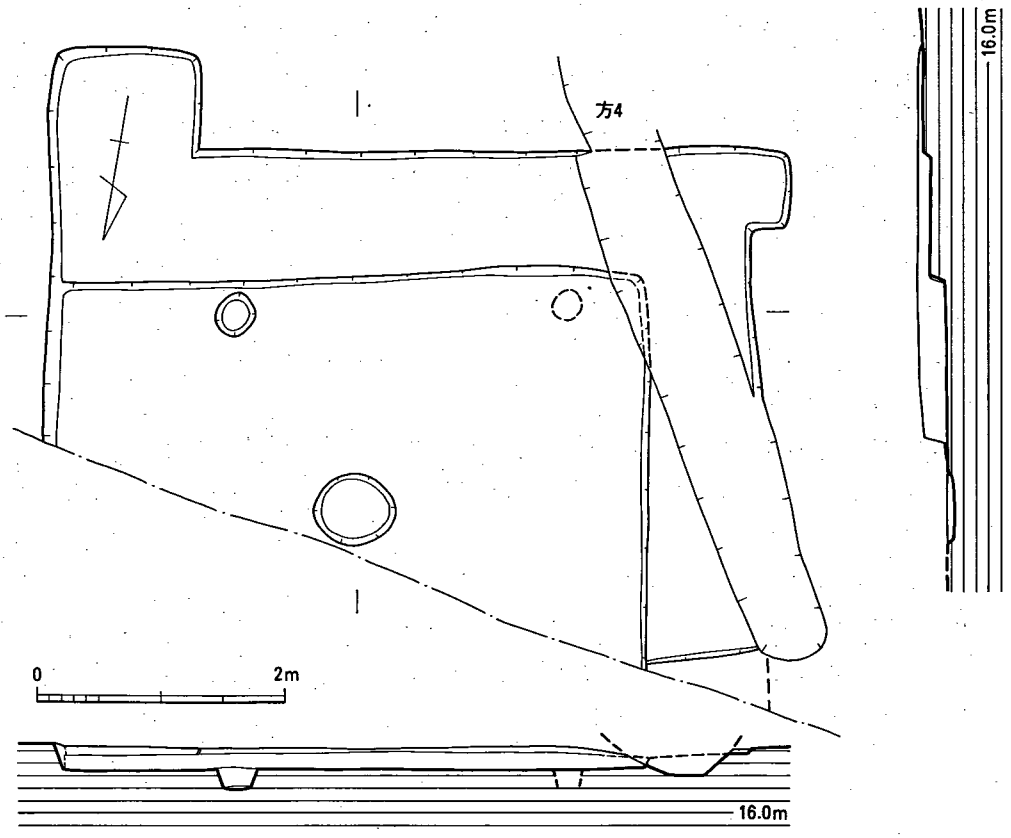
炉跡は調査区壁付近で検出した円形土坑で、主柱穴は南辺ベッドの際で1基を検出している。43号住居跡と同様な配置の2本主柱穴の建物と思われる。

出土遺物

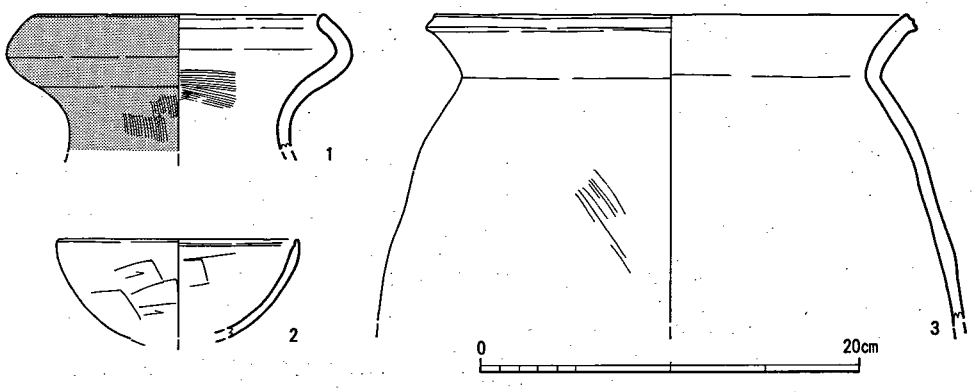
これも出土遺物は乏しい。また、南辺の壁際、ベッド上から鉄製品が出土している。

鉄製品（図版92、第14図4）

圭頭式鉄鏃で、これも錆のために細部の形状ははっきりしない。刃部最大幅は3.3cmほどである。



第112図　61号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第113図　61号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

土器（図版91、第113図）

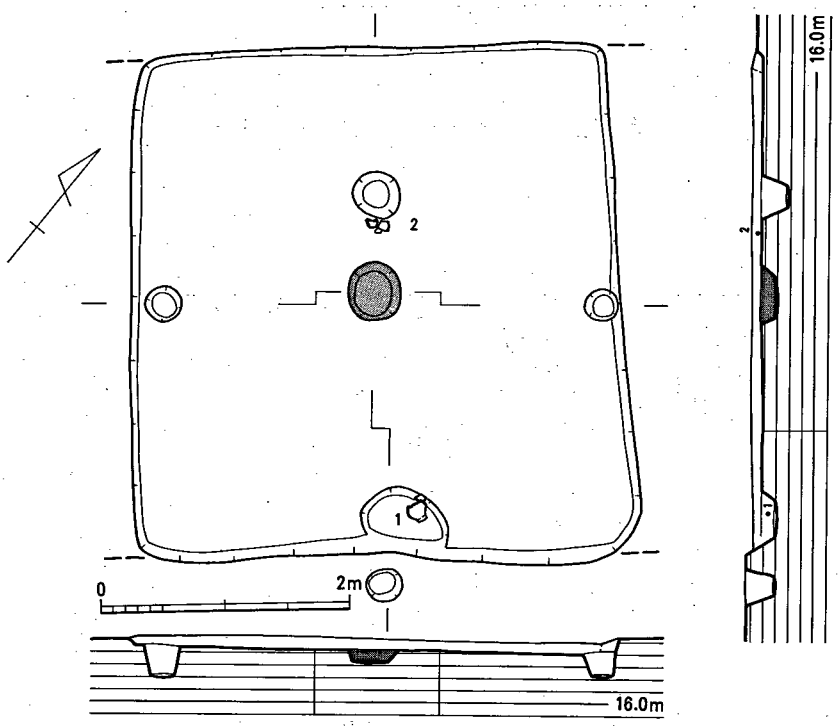
1は袋状口縁壺の小片で、全体に丸味が強い。反転部以上の外面の一部に赤色顔料が残る。2は口端部を小さくつまむ、つくりの丁寧な鉢。外面は箆削りで、内面は撫でで仕上げるようである。3はほぼ1/4が残存する甕で、口縁部は強く外反し、端部は面をもつ。器表が荒れるが、体部外面に刷毛目が観察できる。

62号住居跡（図版37、第114図）

61号住居跡の西に隣接する。後述するように61号住居跡および63号住居跡と切合関係にあると思われるが、先後関係は把握できていない。

検出した平面形は4×4.1mのほぼ正方形となるが、この2辺の壁際に配された主柱穴は、その位置から推してベッドが付設された場合の配置にあることから、本来はベッドが付設されていたものと思われる。その場合は他例からみて幅は6mほどに復原されよう。深さは最大で0.1mほどである。

床面中央付近に炉跡が配され、先述したように南西・北東の両辺のベッド近くに2本の主柱穴を配する。ほかに、炉跡に近接する柱穴、屋内土坑に近接して住居跡外に配された柱穴などが規則的な配列となっていて重要な役割を担っていたものと思われる。



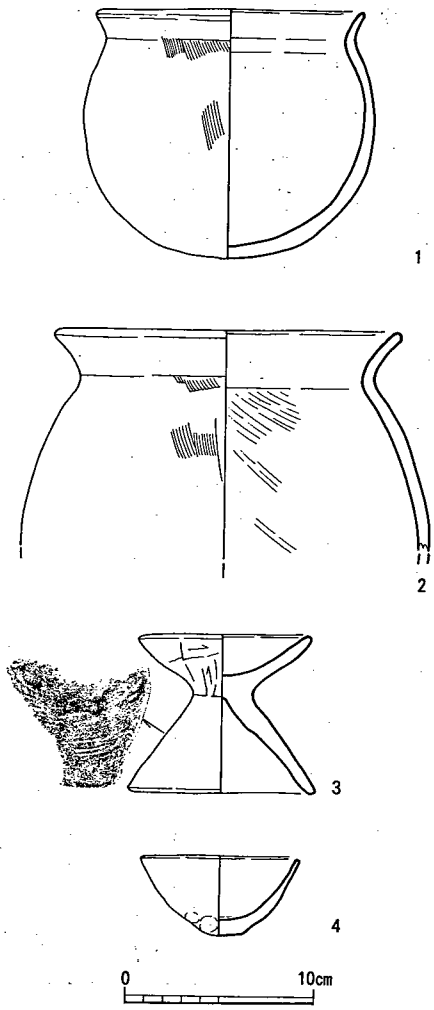
第114図　62号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

これも出土遺物は多くないが、出土状況や遺存度は比較的よい。

土器（図版92、第115図）

1は屋内土坑中から出土し、全体の2/3ほどが残存する。口縁部は短く、反転の度合いも弱いが、端部には面を有する。体部外面は刷毛目、同内面は丁寧に撫でて仕上げる。2も一部が土坑から出土している。これも口縁部の外反は弱く、体部の張りも小さい。口端部は丸味をもつ。3は小型器台で、脚端部付近は多くを欠くがそれ以外は大部分が残存する。受部内外面は篦削りで仕上げるようで、脚部外面には細かい平行叩きが残る。4は平底に近い小型の鉢。内面の調整は丁寧である。



第115図　62号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

63号住居跡（図版38、第116図）

62号住居跡の西に隣接し、これも切合関係にあったものと思われるが直接の痕跡は確認できていない。

検出した平面形は3.5×4.1mの長方形プランとなり、深さは0.1mに満たない、遺存度の悪い遺構である。これも62号住居跡同様、主柱穴配置からみて南北の2辺にベッドが付設されていたとしてよかろう。その場合の規模は4.1×5.5mほどに復原できる。

床面中央付近に浅い大型の土坑が位置し、その内部で炭などを埋土にまじえた炉跡が検出された。主柱穴と目される柱穴は炉跡と直線的には並ばず、北辺のものがややずれる。屋内土坑は通常みられる配置である。

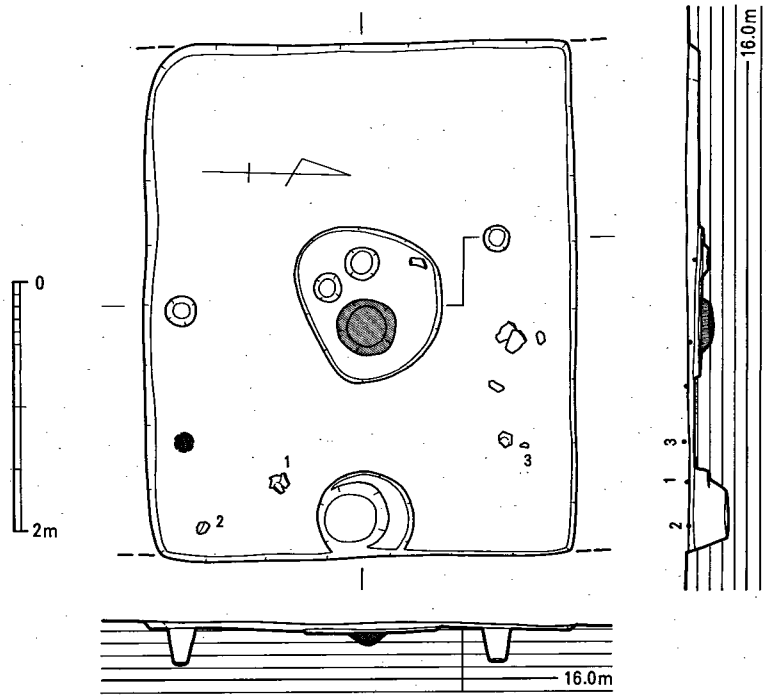
また、この住居跡では南側主柱穴東、ベッド下付近でベンガラが検出されている。その範囲は直径10数cmの円形であった。

出土遺物

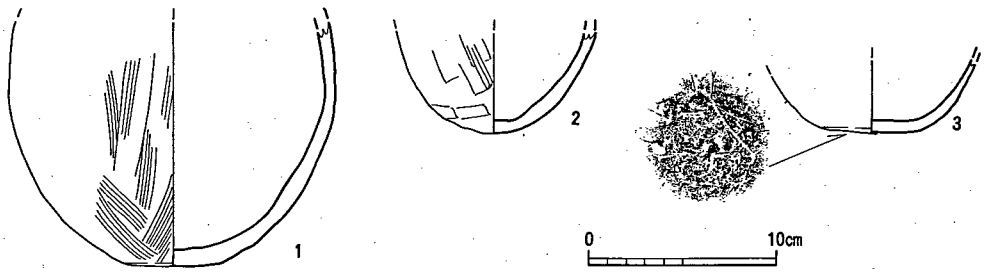
遺構図に示したように数点の土器が出土するが、多くは細片化し、あるいは図示困難な部位であり、結局図示できたのは3点に留まる。

土器（図版92、第117図）

1は球形胴部を持つ土器で、底部は刷毛目を施して平底化する。体部外面は一部に篦削りを使用するようであるが、内外面ともに刷毛目を多用する肉厚の土器。2はやはり底部のみが残存する。これは丸底となり、体部外面は刷毛目のようであるがはっきりしない。内面は撫でで仕上げる。3も平底であるが、体部へ移行する変換点は丸い。内面は丁寧な撫でで、外面は篦削りで仕上げるようである。



第116図　63号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第117図　63号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

64号住居跡（図版38・39、第118図）

63号住居跡の西に隣接し、4号方形周溝を切って掘り込まれる。

平面形は3.6×4.6mの長方形プランとなり、深さは最大で0.2mが残存する。南北両辺にベッドを配し、2本を主柱穴とする典型的なものである。

ベッドは幅1m前後、高さ0.1m弱の規模である。

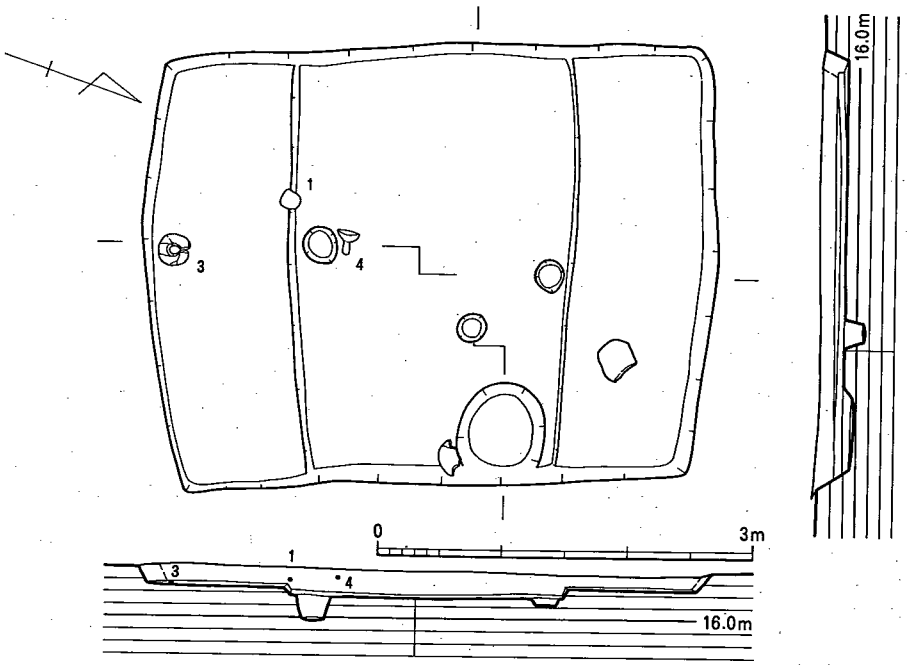
炉跡と思われる遺構は小規模で、床面中央からかなり偏して位置する。しかし、対応する屋内土坑がやはり同じ方向に偏していることからこれを炉跡としてよかろう。主柱穴はベッドに近接して、ほぼ相対する位置にある。

出土遺物

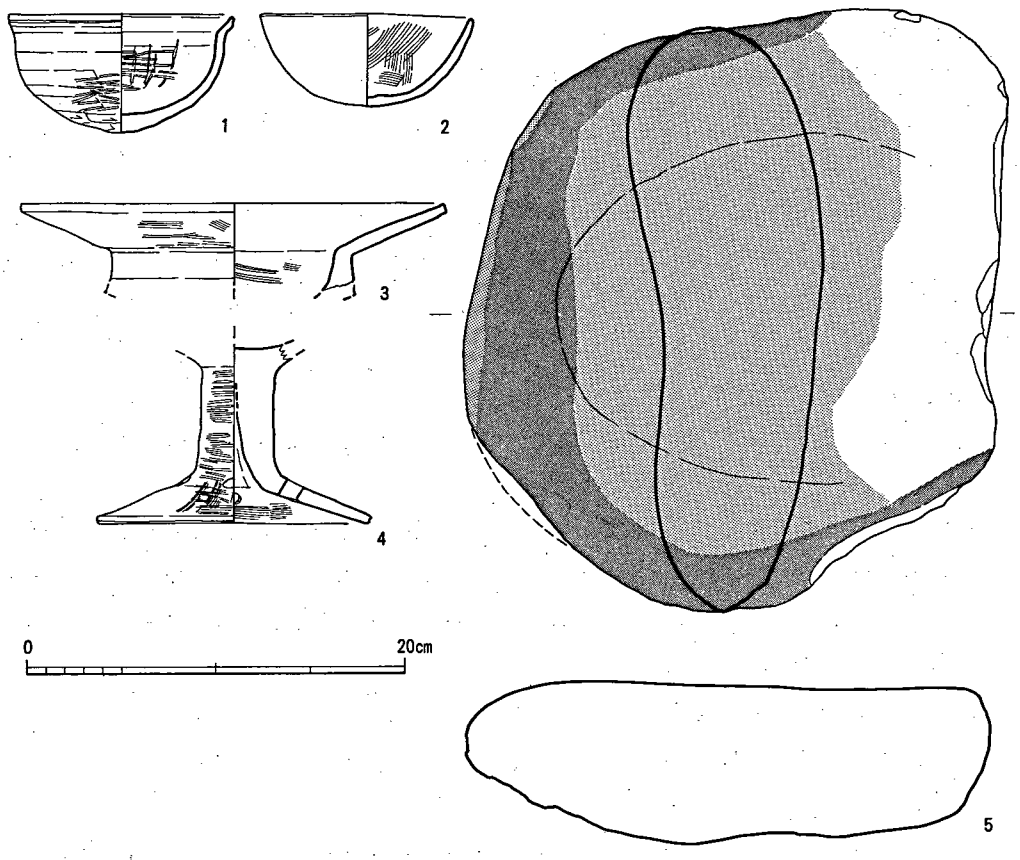
これも出土遺物は多くないが、特徴的な土器を含んでおり廃棄の時期が絞り込める。

土器（図版92、第119図）

2を除く3点は遺構図に図示してある。1はほぼ完形の小型の鉢で、口縁部は短く外折する。口端部は強く横撫でして直立するように成形し、意識したものか判然としないような沈線を刻む。体部外面には多くのシワがみえ、手捏に近い様を思わせるが、下半では篦削りを施すようである。約1/2が残存する。3は図示部分が完周する。杯部が屈曲する高杯で、器表が荒れるが一部で微細な刷毛目が観察できる。4も大部分が残存する。円孔を4カ所に配する高杯脚部で、3と同一個体かもしれない。



第118図　64号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第119図　64号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

石製品（図版93、第119図）

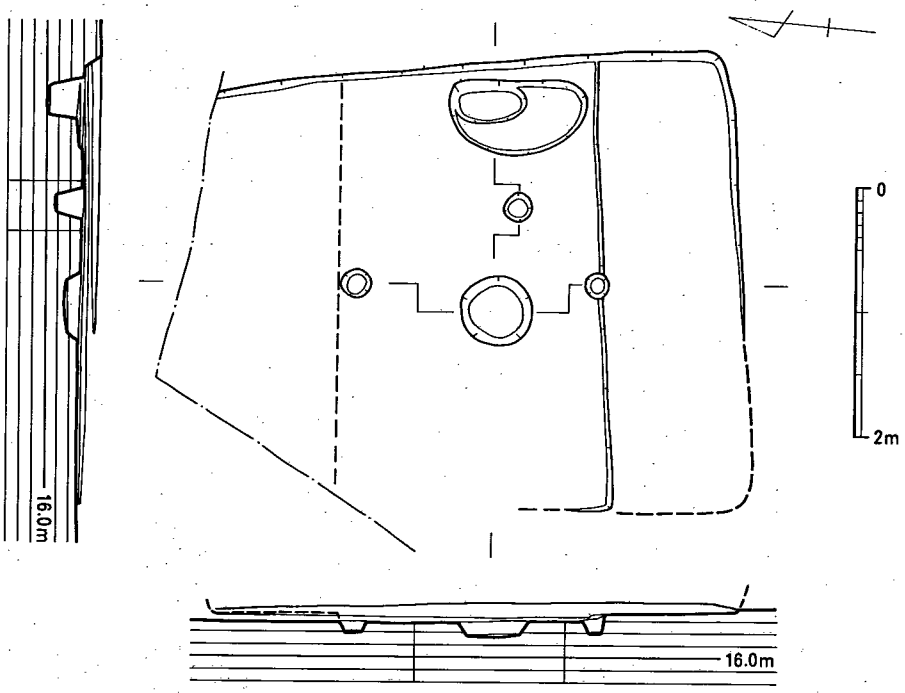
北辺ベッド上にあった石材で、全体に滑らかとなる。図示した状態は出土時と同様であり、上面が緩くくぼみ、焼けて灰黒色ないし赤色に変色した部分がある。安山岩製。

65号住居跡（図版39・40、第120図）

64号住居跡の北に位置し、一部が調査区外へ続く。住居跡は全体を把握できなかったが、およそその復原は可能である。主柱穴・炉跡との位置関係から南北両辺にベッドを付設したものと思われ、その場合には3.6×4.2mの長方形プランを想定できる。深さは最大で0.1m強が残る。

ベッドは南辺で検出し、幅1.1m、高さ0.1m弱が確認できたが、本来はより高いものであったと思われる。

炉跡は南方へ偏して位置し、併せて屋内土坑も同様である。これは偏する方向こそ異なるが、先の64号住居跡のあり方に似る。



第120図　65号竪穴式住居跡実測図（1/60）

主柱穴は炉を挟みベッドの際にあって、かつ直線的に配された２本である。炉跡・屋内土坑の間に位置する柱穴も重要な意味があるのだろう。

出土遺物

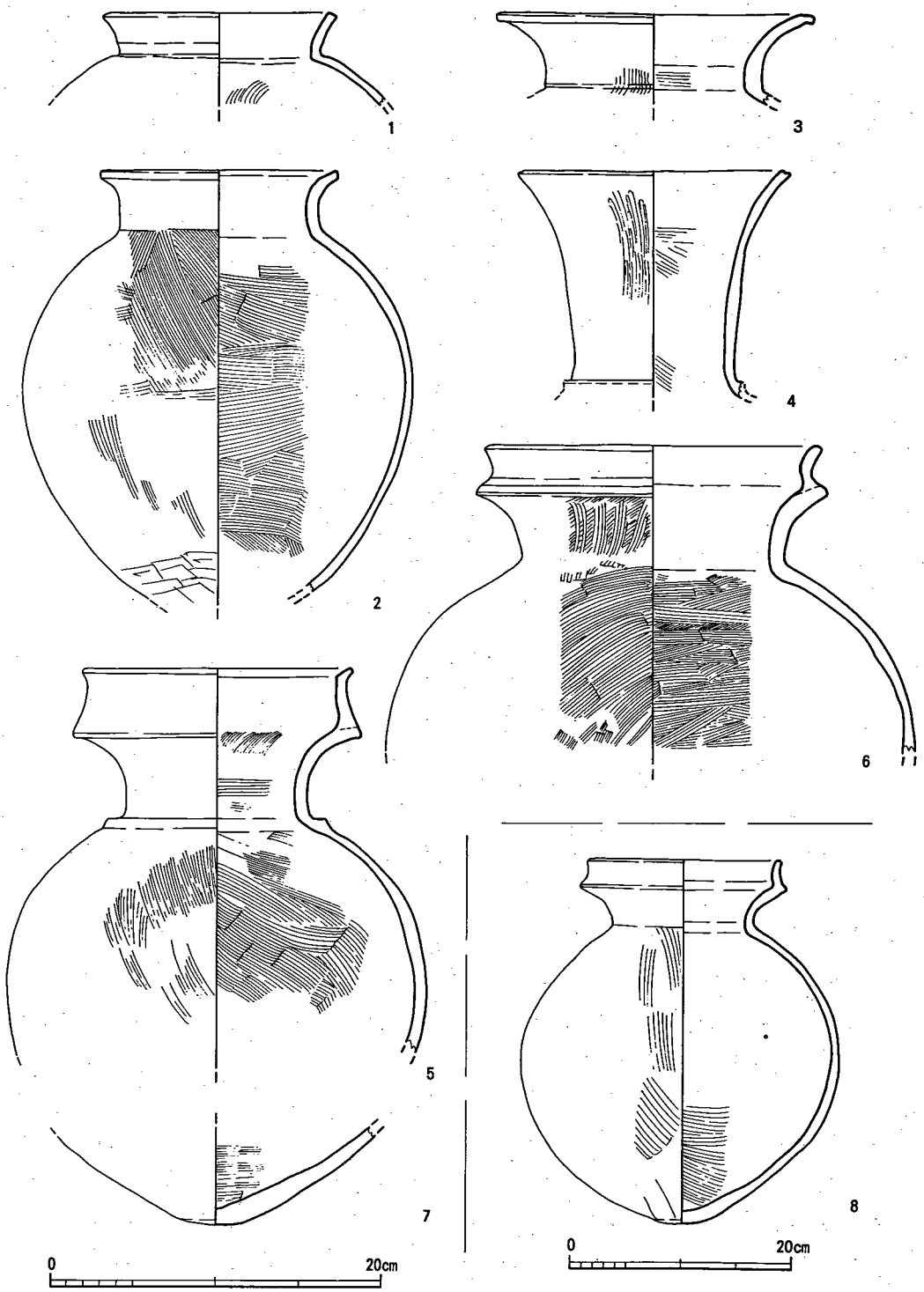
検出面といっても遺構深度が浅いために床面といって差し支えない状況で大量の破砕されたような土器が出土している。

鉄製品（図版94、第14図19）

遺構図に図示していないが、「床面」出土との注記がある。全長12.5㎝、身は一辺長0.7㎝ほどの方形断面を呈する。頭部は蒲鉾状の形態のようで、刃部は片刃に見える。鑿であろう。

土器（図版93・94、第121～122図）

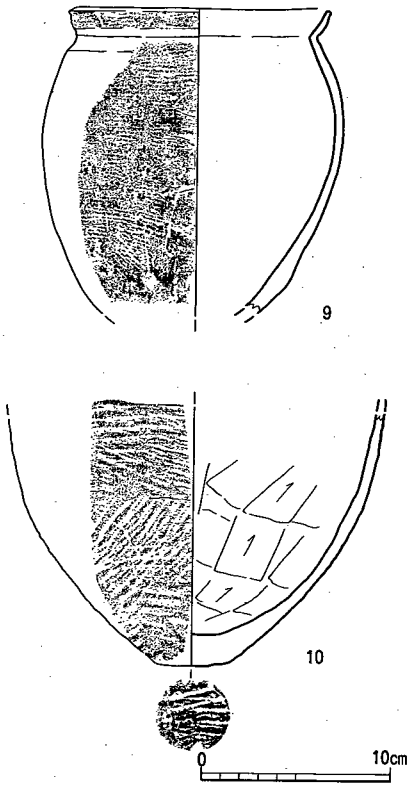
１は小片。口縁部が強く外折して頸部内面に稜をもち、口端部は面をなす。２は底部を欠くがそれ以外は完存に近い。口縁部の外反は弱いが、口端部に垂直に近い面を有するとともに、強く横撫でされて上面にも凹面を持つ。体部の調整はは全体に刷毛目を主として用いるが、底部付近の外面では篦削りを使用する。３は大きく浅く開く壺の小片。口端部で屈折し、端部は丸みを持つ。頸部内面の稜はシャープ。４は3/4が残存する長頸壺で、口端部は凹面となる。肩部に小さな断面三角突帯を付し、器表が荒れるが全体に刷毛目が観察できる。



第121図　65号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4,1/6）

5は屈曲部以上が高く内傾し、端部に面をもつ二重口縁壺で、口縁部の1/4が残存する。器表が荒れるが全体に弱い細かな刷毛目が観察できる。6は屈曲部が突出し、以上が強く外彎する。7は外彎の度合いが異なるが6に似る。図上復原したもので、底部付近とそれ以上は接合し得ない。体部の張りは強く、底部はレンズ底となる。これも器面が荒れるが、内外面ともに刷毛目が観察できる。

9は図示部分がほぼ完周する。口縁部は強く外折し、内面にシャープな稜を有するとともに口端部にも面を有する。外面では口縁部から体部下半にいたるまで細かい平行叩きが残り、底部付近では篦削りが観察できる。体部内面は丁寧に撫でるようである。10は体部下位で叩きの方向を違えるもので、底部にも叩きを付して平底化する。叩きは粗く、方向を違えた以上は刷毛目を後に施す。内面は篦削り。



第122図　65号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）

66号住居跡（図版40、第123図）

63・64号住居跡の南に位置し、4号方形周溝の南西隅と重複する。調査時の所見では方形周溝が後出するようであったが、住居跡の遺存状態が非常に悪いこともあって確信がもてなかったが、出土土器からみると住居跡が後出するのであろう。

平面形は5×5.2mの略正方形に近い平面プランを有するが、北西隅がくびれる。これは誤認の可能性もある。深さは最大で0.2mほどを発掘したが、後述するように炉跡の硬化面のレベルから考えるとほとんど深さを存していなかったとみる方が妥当であろう。

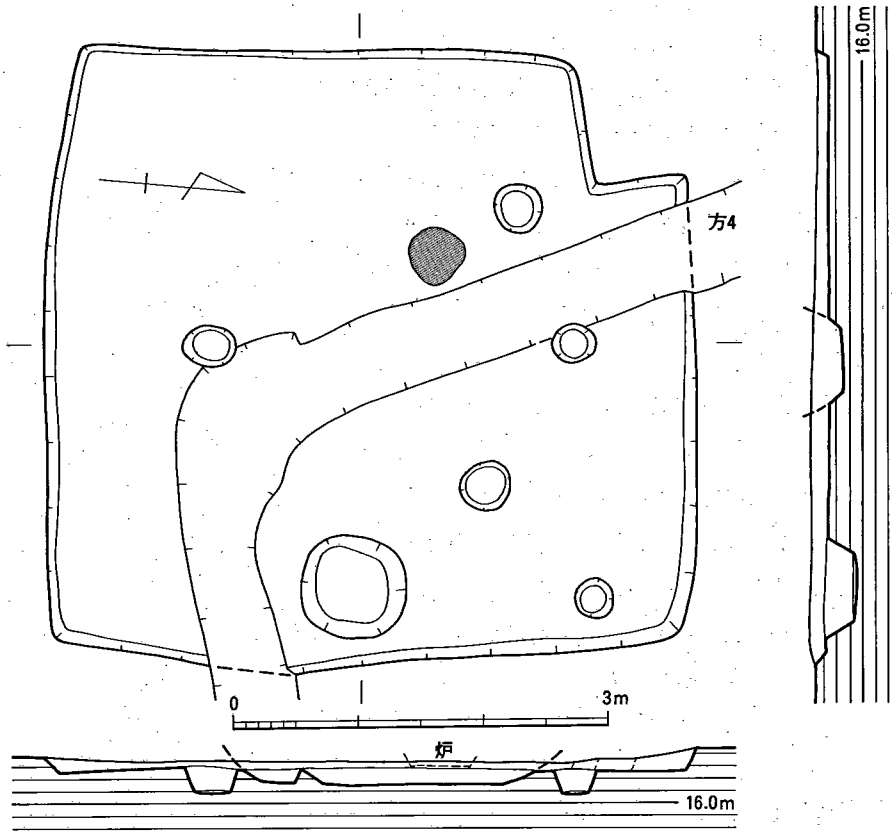
主要な遺構としては炉跡床面を示す赤変した硬化面を北西に偏して検出した。また、東辺中央部で屋内土坑を検出していることから、断面軸に示した南北2基の柱穴が主柱穴であったと思われる。

また、主柱穴の配置からみてベッドは付設されていなかったとしてよかろう。

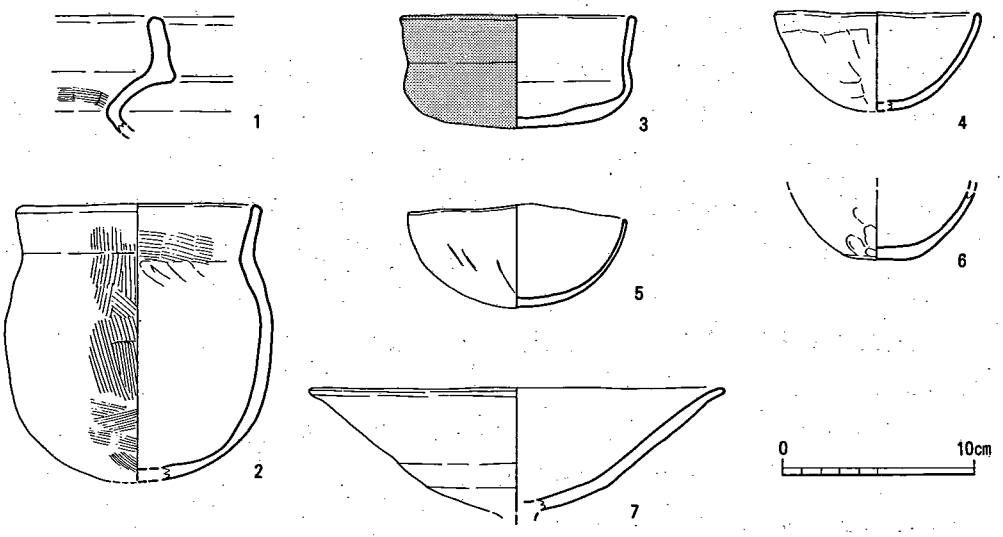
出土遺物

これも小片が多い。図示した以外では椀形の小型高杯などがある。また、図示したうち、2・3・4は屋内土坑から、ほかは埋土中出土である。

土器（図版94、第124図）



第123図　66号竪穴式住居跡実測図（1/60）



第124図　66号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

1は二重口縁壺の小片。2は約1/2弱が残存する小型甕。口縁部の外反は小さく、端部は丸みをもつ。底部は丸底となり、体部外面は刷毛目、同内面は篦削りで仕上げるようである。3は小型の壺で、これも約1/2が残存する。体部はごく浅く、締まりのない頸部から長い口縁部へ続く。脚部は付かないようで、外面は全体に赤色顔料を付していたようである。4・5は鉢で、5の器壁は非常に薄い。6は平底を有する底部だが、体部との境は丸くなる。7は高杯小片。屈曲部は下位に下がり、甘い稜となる。口縁部は直線的に大きく開くが、その先端部でさらに外折する。

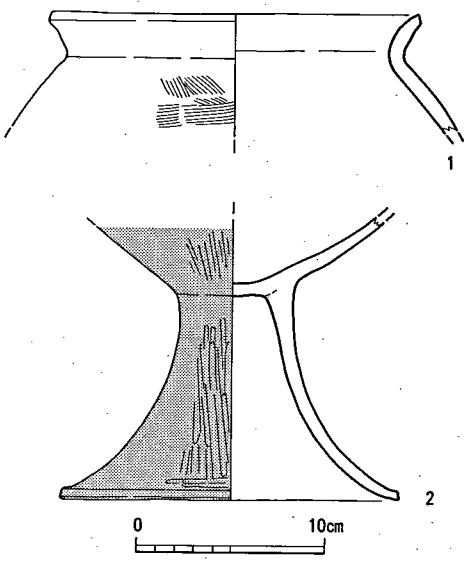
67号住居跡（図版41）

66号住居跡の西の遺構検出面で比較的大型の土器を確認したことから住居跡の存在を想定して遺構番号を付したが、明確な掘り込みを確認できなかった。

出土遺物

土器（図版94、第125図）

1は小片。頸部内面が丸味をもって外彎し、口端部は面をなす。体部内面は篦削りで仕上げるようである。2は図示部分がほぼ完周する。脚柱部が非常に太く、短い。外面全面に赤色顔料が付され、脚柱上の内底面にも部分的に赤色顔料が付着することから上半は壺形になるものと思われる。



第125図　67号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4）

68号住居跡（図版34、第126図）

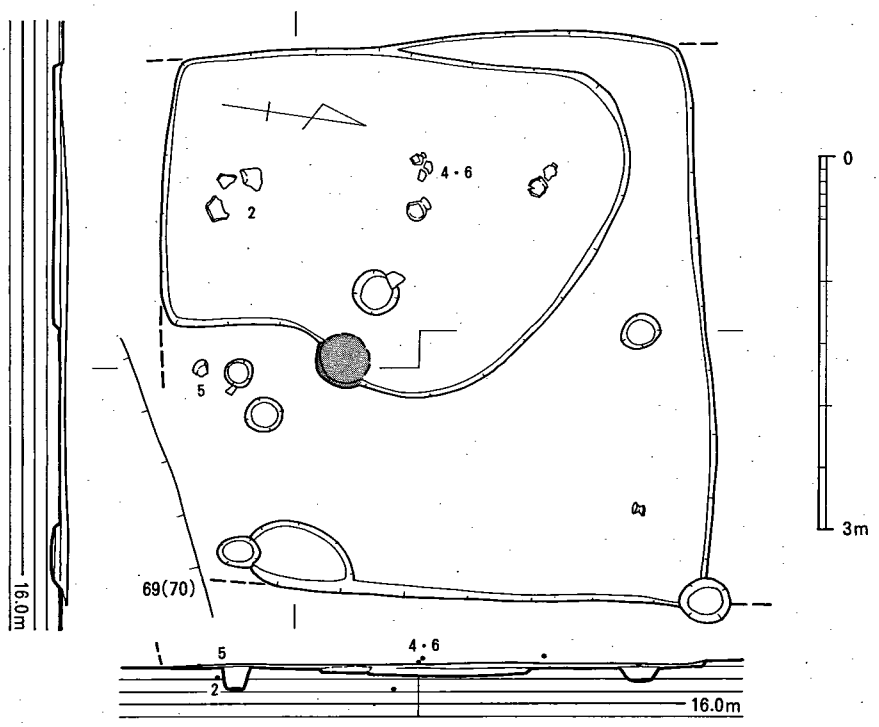
66号住居跡の南で検出したもので、69号住居跡に切られる。

検出した規模は4.2×4.5mほどの略正方形であるが、深さが数cmと非常に残りが悪い。しかし、炉跡や屋内土坑・主柱穴といった主要な遺構が確定でき、その配置からは南北両辺にベッドが付設されていたことが推測される。その場合の規模は4.5×6m強となろう。

床面中央から南東に偏した位置で赤変した炉跡床面を検出しており、それに対応して東辺の屋内土坑も南へ偏する。

主柱穴は断面軸に示した2基であろう。それらは検出した壁に非常に近接しており、そこにベッドが存在したことを窺わせる。

なお、南西部で検出した大型の浅い落ち込みは性格を推測する材料を欠く。



第126図　68号竪穴式住居跡実測図（1/60）

出土遺物

遺構の遺存が悪かったものの、良好な土器群が出土した。ただ、遺構図に良好な形で図示された中にも細片化して復原できなかったものもある。なお、1に図示した土器の体部片は遺構内ではなく、周辺から出土したものであるがここに示した。

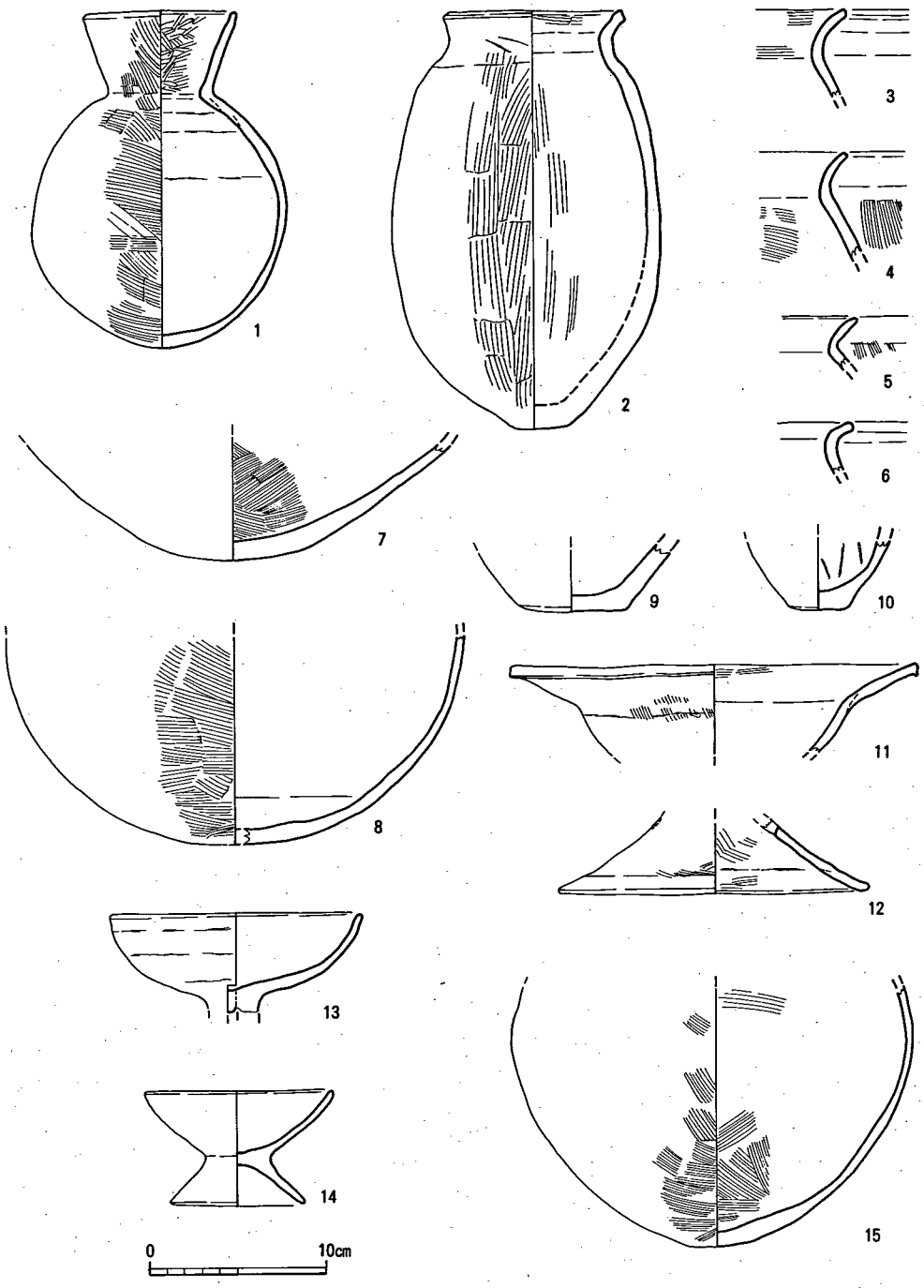
土器（図版94・95、第127図）

1は体部の1/3ほどを欠くが、これは表土掘削時の欠損のようでほかの部位は完存する。体部に比して口縁部が大きく、端部は丸く終わる。器表が荒れるが、全体に刷毛目を用いて仕上げる。

2は完存。口縁部は小さく外彎外反して端部に面をもつ。体部は張りの弱い長胴となり、底部付近で不自然に接合している。底部は明瞭な平底で、これも全体に弱い刷毛目で仕上げる。

3～6は甕の小片。外反の弱いものや強いものがある。底部片はレンズ底、丸底そして平底のものなどがある。

11は口縁部が大きく開き、端部が面をなす。外面は刷毛目を主体として、内面を篦削りで調整するようである。12は11の脚部であろうかと思われる。下半部が若干肥厚し、端部が反り気



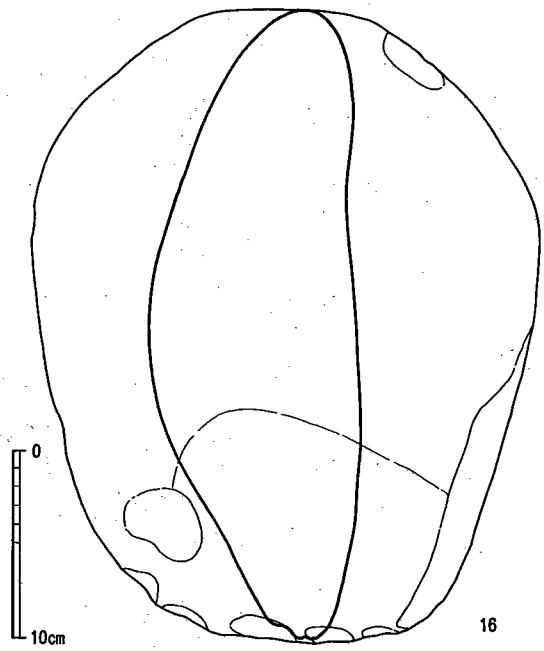
第127図　68号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1/4）

味となる。なお、円孔は4方に配されたようである。これらにはほかの土器に普通に含まれる角閃石が混入しておらず、特徴的である。13は約1/2が残存する椀形高杯で、粗雑な土器である。外面では一部に篦削りが使用されたようである。14は小型高杯で、ほぼ1/3が残存。杯部は内彎気味に大きく開き、脚部は短く直線的となる。

15は「68号住居跡周辺包含層」と注記された残片。丸底で、内外面を刷毛目を用いて調整する。

石製品（図版95、第128図7）

北東隅の床面上で、平坦面を接地して出土した。これも全体に滑らかとなるが、顕著な使用痕はみえない。安山岩を使用する。



第128図　68号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1/4）

69号住居跡（図版34、第129図）

調査区西端の中程にあって、58号住居跡に切られ、68号住居跡を切る。

当初は2基の住居跡が重複しているものとみて69・70号住居跡と呼称していたが、発掘の結果炉跡・主柱穴などの遺構を1軒分確認できたのみであり、70号を欠番とした。

平面形は上記の理由ではっきりとしないが、4.4×5mほどの長方形プランに復原できるものと思われる。深さは最大で0.2mほどが残る。

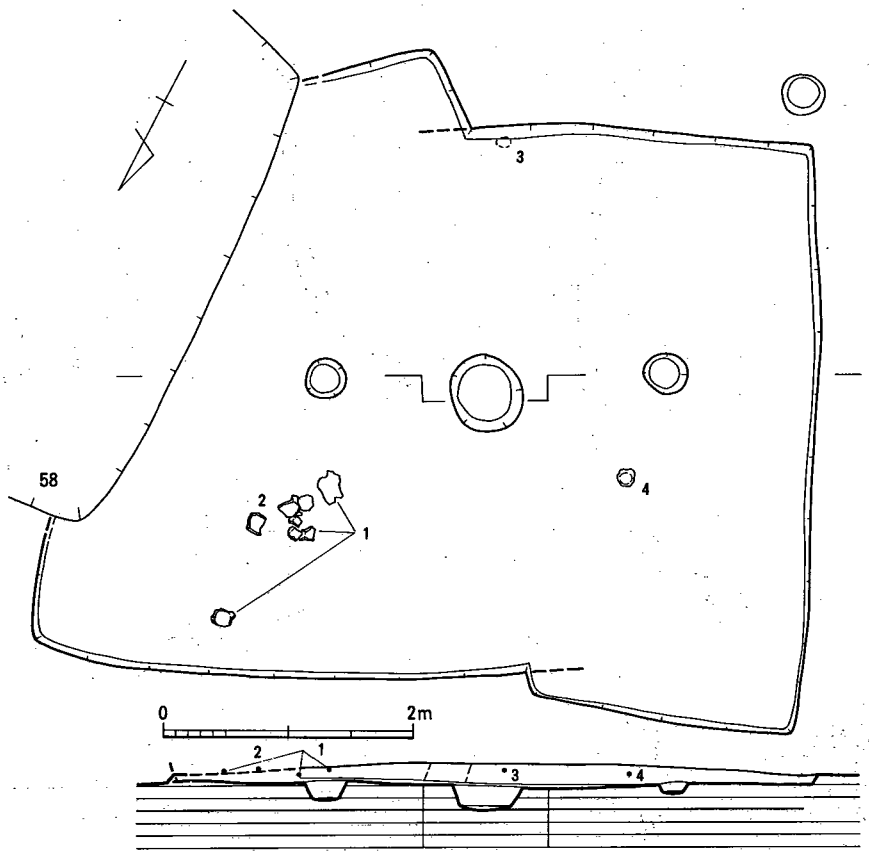
床面のほぼ中央に炉跡を検出し、それを挟む2本の主柱穴も確認できたが、屋内土坑は未確認である。また、ベッドが存在したとすれば多くの場合主柱穴に近接することから、この住居跡のように柱穴から離れて壁の立ち上がりを確認できるものにはベッドは付設されていなかったと考えてよかろう。

出土遺物

これも深度があまりなかったわりに良好な土器が数点出土した。また、石製品は58号住居跡下層の本住居中から出土したものである。

土器（図版95、第130図1～4）

1は分散して出土し、体部中位以下はほぼ完存する。口縁部は頸部内面に明瞭な稜を残して直線的に外折し、口端部は面をつくる。底部付近はよく焼けて赤変し、器表も非常に荒れる。



第129図　69号竪穴式住居跡実測図（1/60）

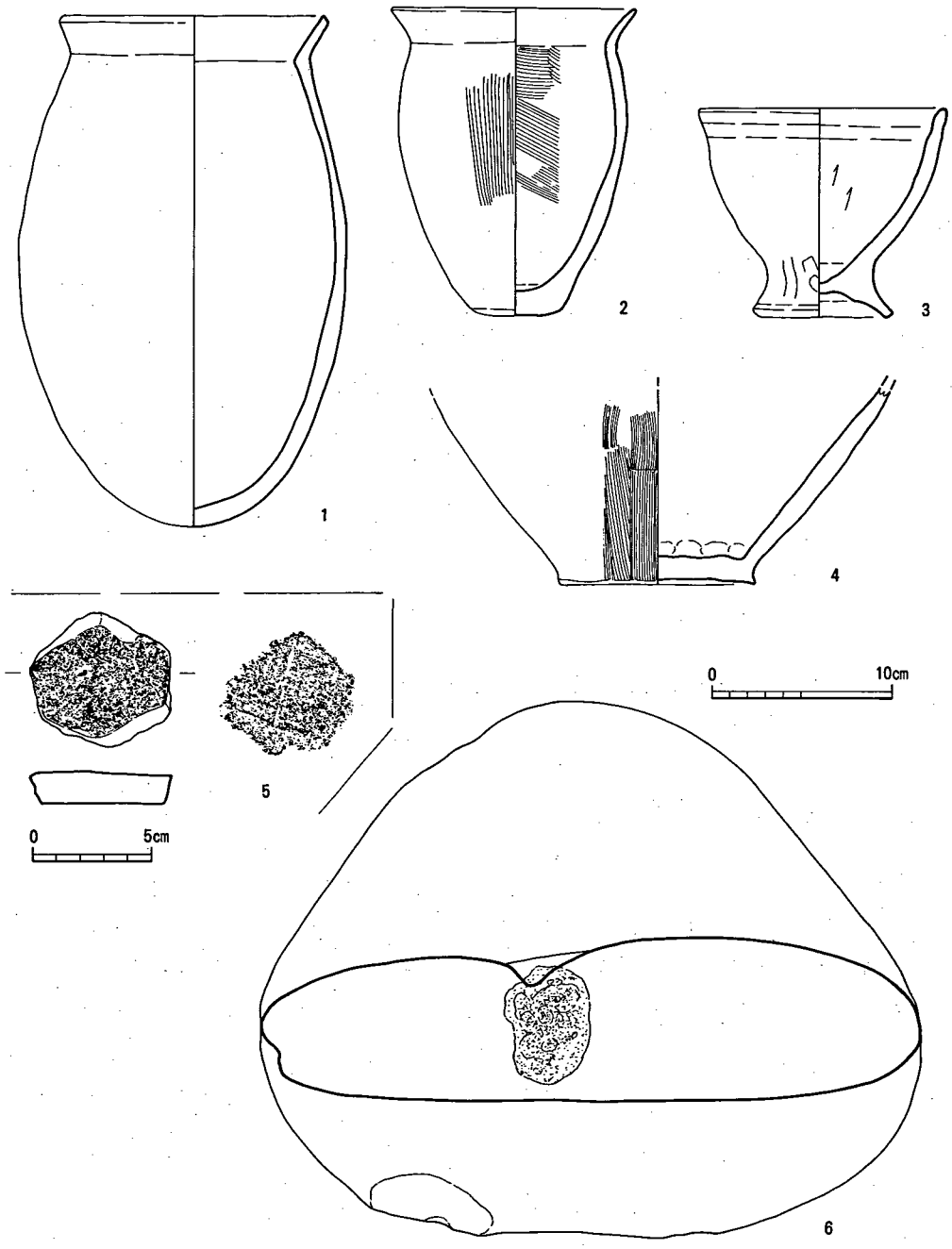
2は底部が完周し、頸部付近はほぼ1/2が残存する。底部は平底で、体部へは丸く移行するが、体部の張りは小さく、頸部の反転もシャープさを欠く。口端部は丸く終わる。調整は内底面付近を篦削りで、それ以外の大部分を刷毛目で仕上げる。3は脚付鉢で、口縁部付近の半分を欠く以外はほぼ完存する。体部は内彎気味に高く開き、口端部付近を強く横撫でして変化をつけるが、端部は丸く終わる。器表が荒れるが、体部内面は全面に篦削りの痕跡がみえる。4は図示部分がほぼ完周する底部で、二次的な火熱を受けてよく焼ける。内底面付近には指頭痕が顕著で、体部外面は細密な刷毛目で調整する。

土製品（第130図5）

底部かと思われる部位を使用した円板。直径6㎝弱、厚さ1.2～1.4㎝、重量51.8ｇを測る。図上面は右上から左下の弱い条痕、下面はそれと直角方向のやはり弱い条痕がみえる。

石製品（図版96、第130図6）

長軸37㎝、短軸30㎝、厚さ9㎝ほどの三角形に近い平面形を呈する安山岩。図上面に深い凹



第130図　69号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/4,1/3）

部が存する。それ以外の部分は器面が滑らかとなっており、下面は平坦面である。

70号住居跡

69号住居跡の項に記したように欠番としている。

71号住居跡（図版41、第131図）

調査区西南端に位置し、調査区外へ続く。この付近は地山が軟質となり、かつ湧水が甚だしかったために充分な調査ができていない。

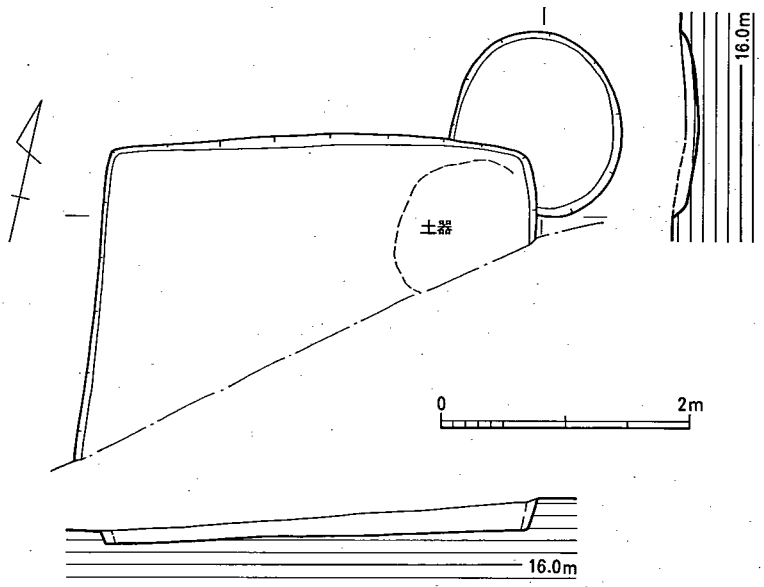
平面形は3.5×2.5m以上の規模となり、床面では全く遺構を確認できなかった。ただ、図版に示したように東北隅で土器が集中出土している。

出土遺物

北東隅に接する土坑出土遺物との間で混乱している。、注記で住居跡出土となっているのは6に示した甕のみで、ほかはすべて「71号住居跡横土坑」出土となっているが、写真で見る限り土坑出土土器は4個体ほどである。この土坑出土品にはこの周辺では珍しく須恵器片が混入していて、土坑自体は新しいものと思われる。したがって、土坑掘削時に住居跡内の土器を撹乱したものと判断して、これらを一括品として以下を続ける。

土器（図版96・97、第132～133図）

1は器高55cmほどの大型壺で多くが残存する。口縁部は外彎しつつ強く反転し、端部は内側が小さく匙面状になって端面をもつ。体部は張りの弱い長胴で、頸部と中位やや下方に篦状工

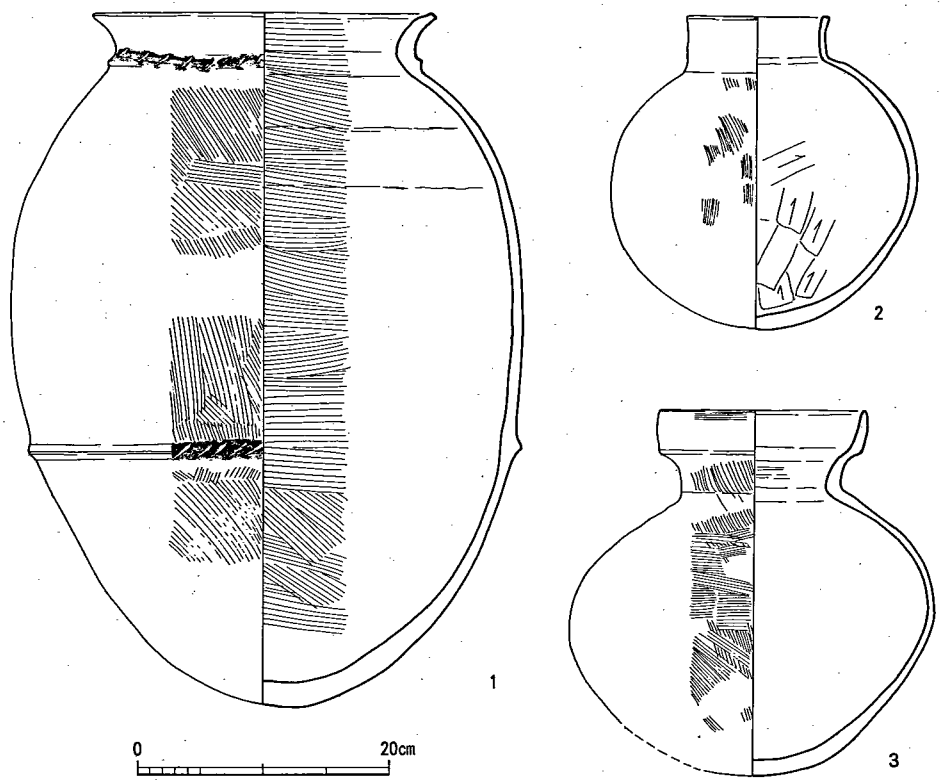


第131図　71号竪穴式住居跡実測図（1/60）

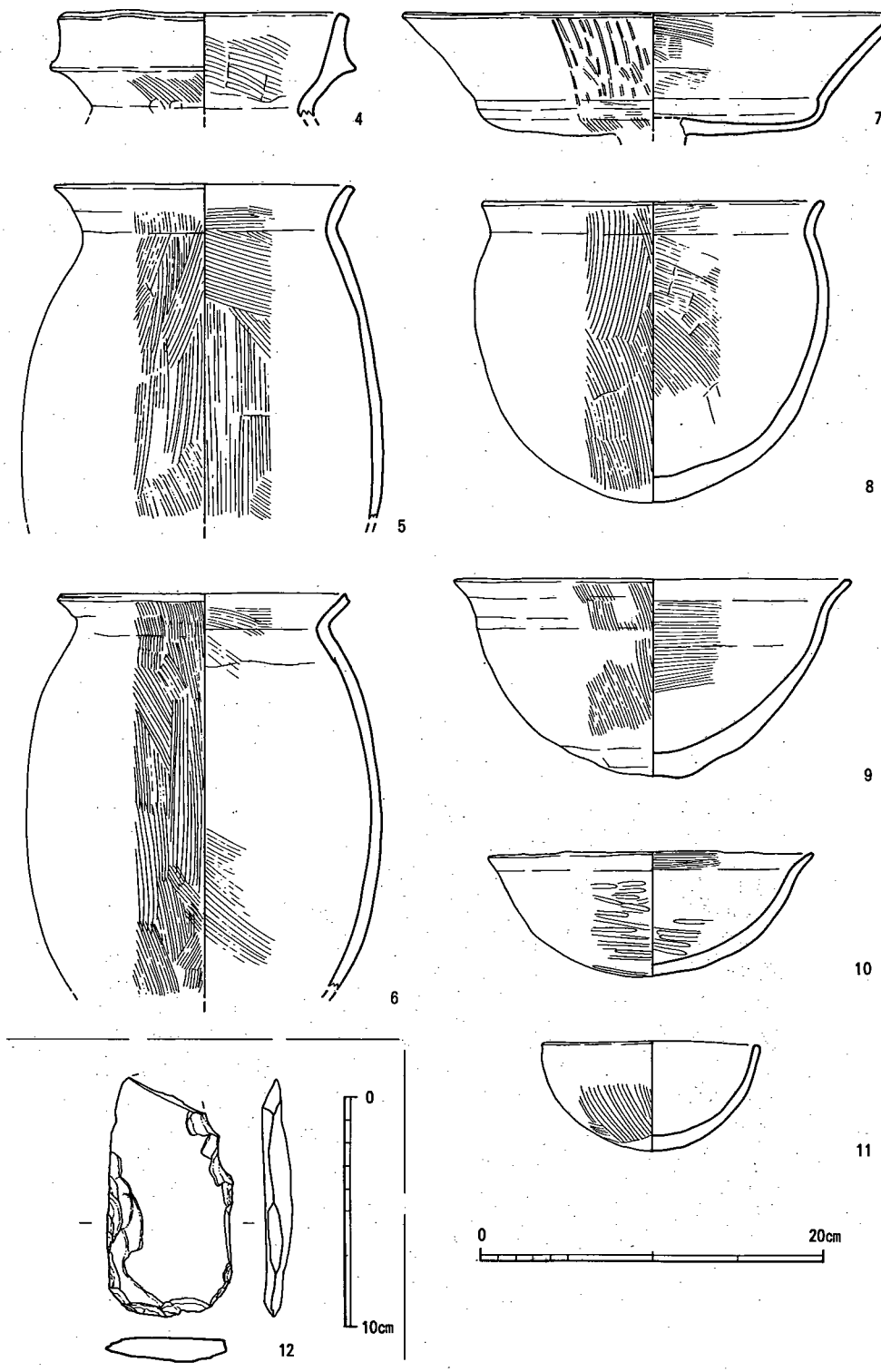
具による刻みを付した断面三角形の突帯を付すが整ったものではない。調整痕は全体に刷毛目が観察できるが、体部内面では疎密を併用する。また、肩部付近の内面では幅5～6㎝の粘土紐を巻き上げた痕跡がみえる。2は体部の大部分が残存するものの、口縁部は多くを欠く。端部が小さく肥厚しつつ外反する、直立する口縁部を有し、体部はほぼ球形となる。体部内面は篦削りで仕上げる。また、体部下半がよく焼けて赤変する。3も体部のほとんどと口縁部のほぼ1/3が残存する。口縁部は内彎しつつ直立に近く立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部は張りの強い偏球形を呈し、底部はレンズ状となる。体部内面は撫でで仕上げるようである。4は二重口縁壺の小片。肉厚で、口縁部は外彎しつつ小さく外傾する。端部は面をもつ。

5・6は長胴の甕であるが、口縁部形態はやや異なる。4ではほぼ直線的に外反して端部を外方へ小さくつまむ。頸部内面の稜は弱い。6は頸部内面に明瞭な稜線を残して強く外折し、端部は強く横撫でされて小さな凹面となる。いずれも刷毛目を主として使用し、図示した部分の多くが残存する。

7は高杯の杯部で、ほぼ1/4が残存。下半部は膨らみをもつが非常に浅く、上半部が直線的に大きく開く。



第132図　71号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図1（1/6）



第133図　71号竪穴式住居跡ほか出土遺物実測図２（1/4,1/3）

8は約1/3が残存。口縁部は短く、外半の度合いも弱い。内底面付近は篦削りを使用するようであるが、器肉は厚い。9はほぼ1/2が残存する。つくりは粗雑で、器面も荒れる。平底。10も粗雑なつくりであるが、内面は丁寧に仕上げられている。11は完存する。

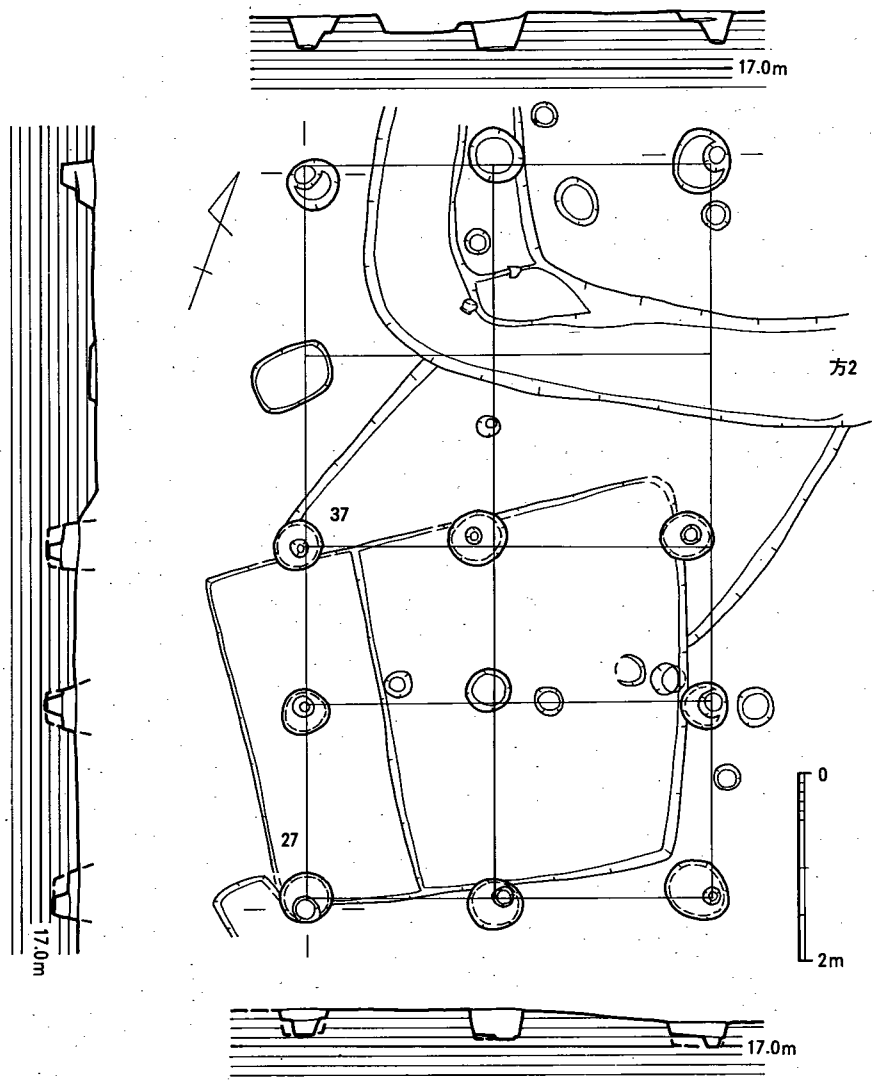
石製品（図版97、第133図12）

緑泥変岩製の打製石斧で頭部を欠損する。剥離は雑。

トンボでの清掃

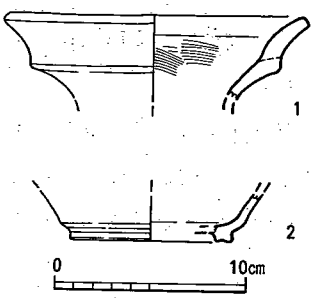
2．掘立柱建物跡（図版19、第134図）

調査区東端に近い位置で1棟のみを確認した。27・37号住居跡を切っているが、2号方形周溝との先後関係ははっきりしない。また、当初は2×2間の総柱建物を想定していたこともあって、同周溝と重複する柱穴は確認できていない。



第134図　掘立柱建物跡実測図（1/80）

2号方形周溝内外にほぼ東西に並ぶ柱穴が存在することから最終的に2×4間の総柱建物を想定した。主軸は南北方向に近いが15°ほど西へ振れる。図に示した柱筋で計測する規模は、梁行長4.2（2+2.2）m、桁行長7.8（2+2+1.7+2.1）mとなり、ほぼ2mの柱間をもって設計されたものと思われる。



第135図　掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/4）

出土遺物

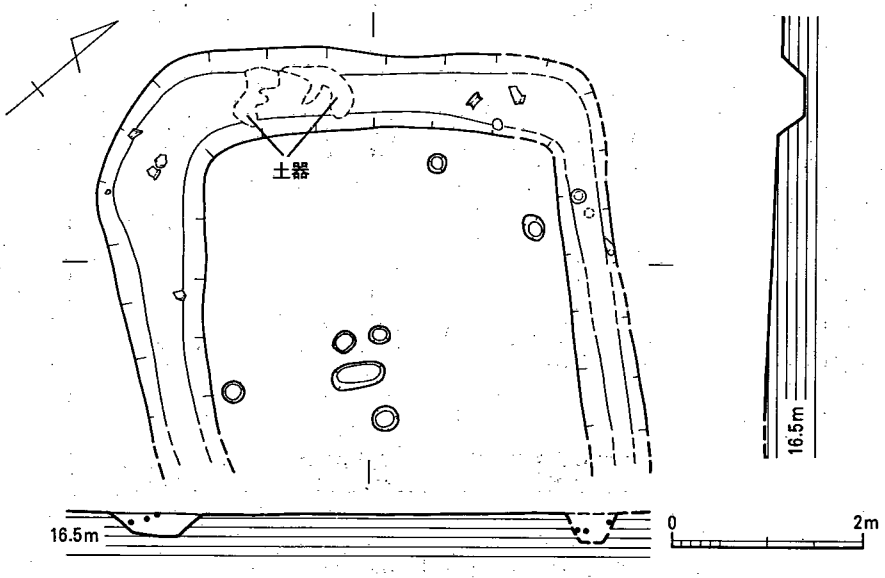
いくつかの柱穴から若干の土器が出土するが、小片で特徴的なものは乏しい。なかで、南西隅の柱穴出土遺物を2点図示した。

土器（第135図）

1は二重口縁壺片で、約1/4が残存する。口縁部は大きく開き、端部は丸く終わる。器表が荒れるが内面に横刷毛が見える。2は須恵器の器形に似た酸化炎焼成の土師器。畳付が凹面となる高台はしっかりしたもので、体部下端付近は強く横撫でされて稜線を刻む。

3．方（円）形周溝

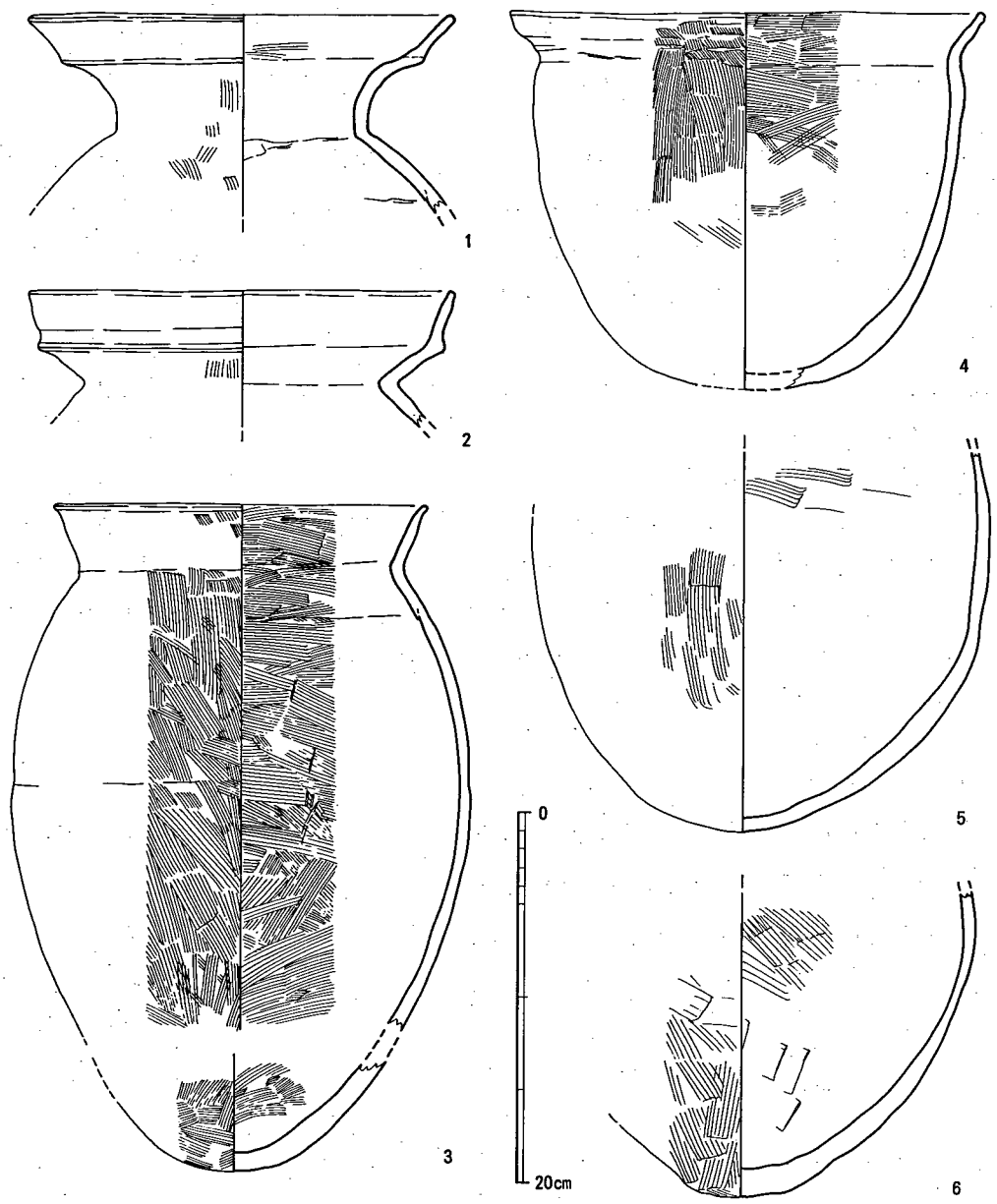
確実には4基の方形周溝と1基の円形周溝を確認している。それら以外にも類似する遺構と思われるものが若干あり、確信を持てないでいるが一部を併せて紹介する。



第136図　1号方形周溝実測図（1/80）

1号方形周溝（図版44・45、第136図）

1号住居跡の南東に近接し、環濠と推定する2号溝と重複し、それに一部を切られる。2号溝は表土掘削段階では非常に見極めにくい土質であり、土器片を多くかんでいるものの線引き



第137図　1号方形周溝出土遺物実測図1（1/4）

が困難な遺構であった。反面、1号方形周溝の場合は2号溝と重複しない部分では容易に遺構を確認できていることからも先後関係は間違いないと考えている。

溝は幅0.6～0.9m、深さ0.2～0.3mの規模で、検出した3辺の溝底レベルはほぼ水平である。また、平面的には隅丸のやや平行四辺形に近い形状となり、内法で4×4m弱の規模をもって巡る。溝で囲まれた内部では若干の柱穴を検出したが、規則的な配列は看取できず、また溝との強い関連性を思わせる状況ではなかった。

出土遺物

遺構図に示したように各辺から万遍なく乱雑な状態で多くの土器などが出土したが、大部分は細片化し、かつ中層以上からの出土であった。この状況はあるいは内側に盛土が存在し、そこから転落した様を思わせるものであるが、盛土は確認できていない。最も転落したにしては細片化・欠損部が多い理由は上手く説明できない。

また、取り上げ時には番号を付していたが、整理の過程で混乱したらしく、それぞれの出土地点は特定できない。第13図に図示した鉄製品は検出面近くで出土したようで、調査時にはまったく気付いていなかった。

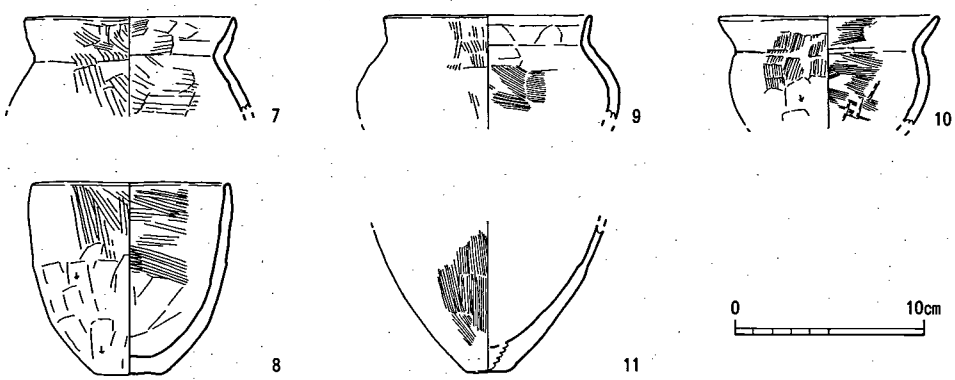
鉄製品（図版98、第14図27）

出土地点を特定できないが、「東辺」との注記がある。破損は新しそうである。厚さはほぼ一様で0.3cm。図下端は本来の面を残すようで、中央部が小さく突出する。また、左右両側面は左側面の破損が大きいが、図のように対称的な形となるようである。一見、鉄鋌の様な形状を示すが、気付くのが余りに遅く、分析等の手だてを採れなかった。

土器（図版97・98、第137～138図）

1・2は1/4が残存する。1は口縁部が浅く開く二重口縁壺で、内外面ともに器表が荒れる。2は頸部からすぐに口縁部へ移行する二重口縁壺。口縁部外面が膨らみをもつ。

3は上半部のほぼ1/3が残存し、底部とは接合しえない。口縁部は微妙な曲線を描いて緩く外反し、端部がつままれ、底部は丸底となる。全体に細密な刷毛目で調整する。



第138図　1号方形周溝出土遺物実測図2（1/4）

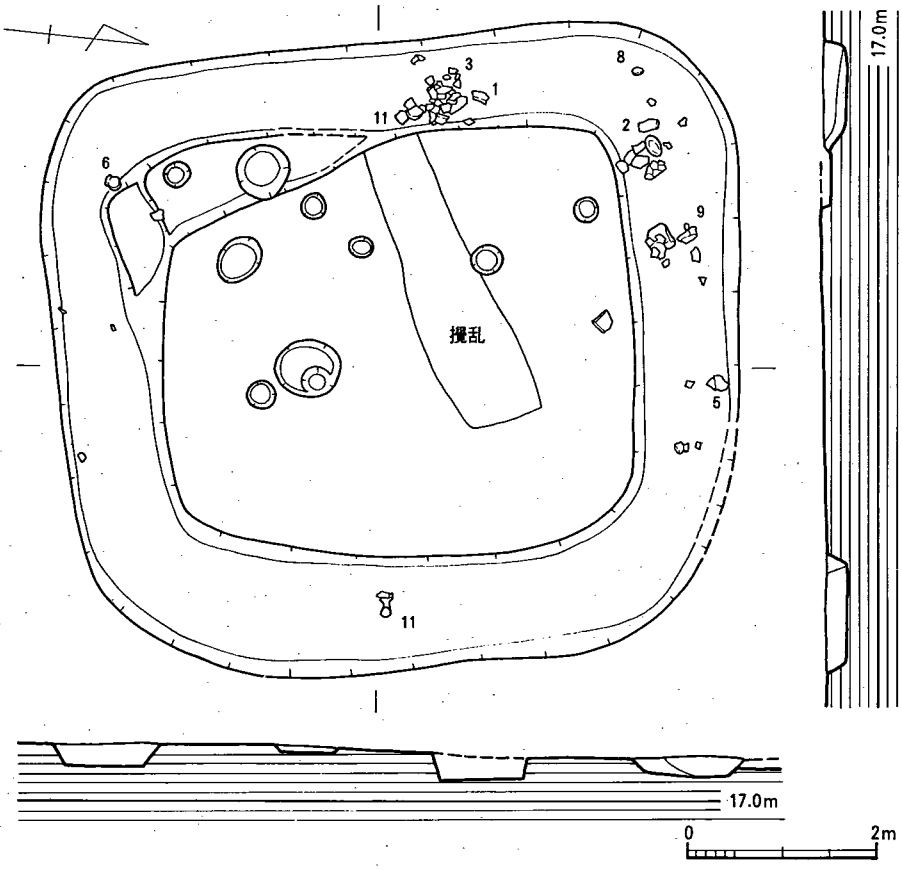
4は1/2ほどが残存する鉢で底部を欠く。口縁部は不整形で波打ち、外方へ膨らむ。全体に細かい刷毛目で調整し、下半が非常に焼けている。

5は丸底の底部で、約1/2が残る。内外面ともに器表が非常に荒れる。6は1/3の残片。レンズ底で、外面上部に篦削りが見える。

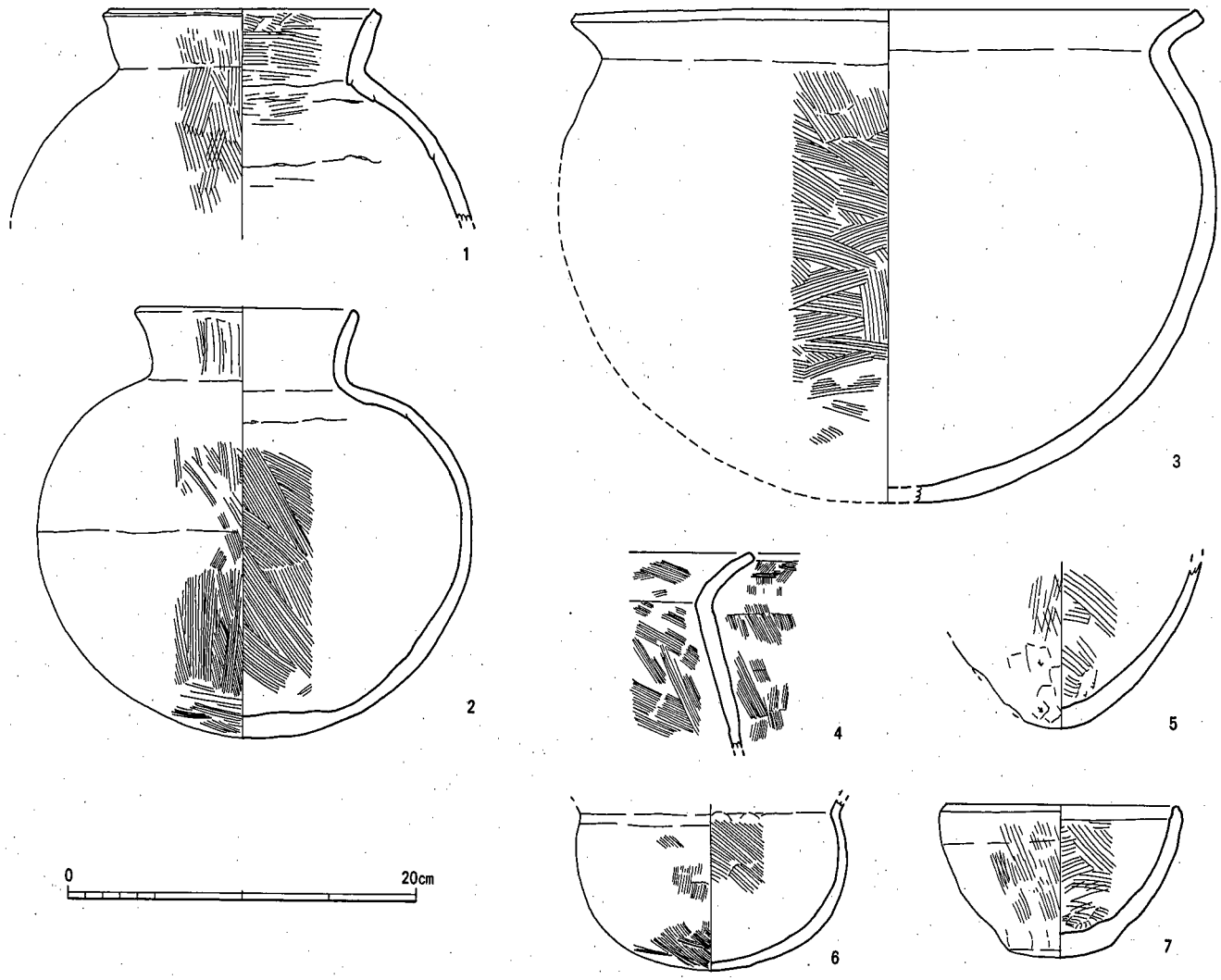
7は1/4ほどが残存する。口縁部は内彎して立ち上がり、端部は薄くなって終わる。8は底部の1/2ほどが残り、口縁部はあるいは欠損しているものかも知れない。外面を丁寧な篦削りと刷毛目で、内面を撫でと刷毛目で仕上げる。9・10は小片。9の口縁部は不整形で波打つ。10は傾きに不安があるが、体部外面に篦削りが見える。11も底部の1/2が残存する。非常に丁寧につくられた土器で、外面は細かい刷毛目、内面は撫でで調整される。

2号方形周溝（図版46・47、第139図）

調査区東端付近、27・37住居跡の北にあって後者を切り、掘立柱建物跡に切られる。また、その北にある5号方形周溝を切る。



第139図　2号方形周溝遺構実測図（1/80）



第140図　2号方形周溝出土遺物実測図1（1/4）

溝の規模は幅１～1.4m、深さ0.2mほどで、溝底のレベルは西・北辺がやや低くなる。また、溝で囲む範囲は4.4×5mのほぼ正方形で、やはり内部に若干の柱穴が存在するが、直接溝との関係を思わせるものではない。

遺構図に土層を示したように、ここでは内側に盛土が存在したような状況が窺える。

出土遺物

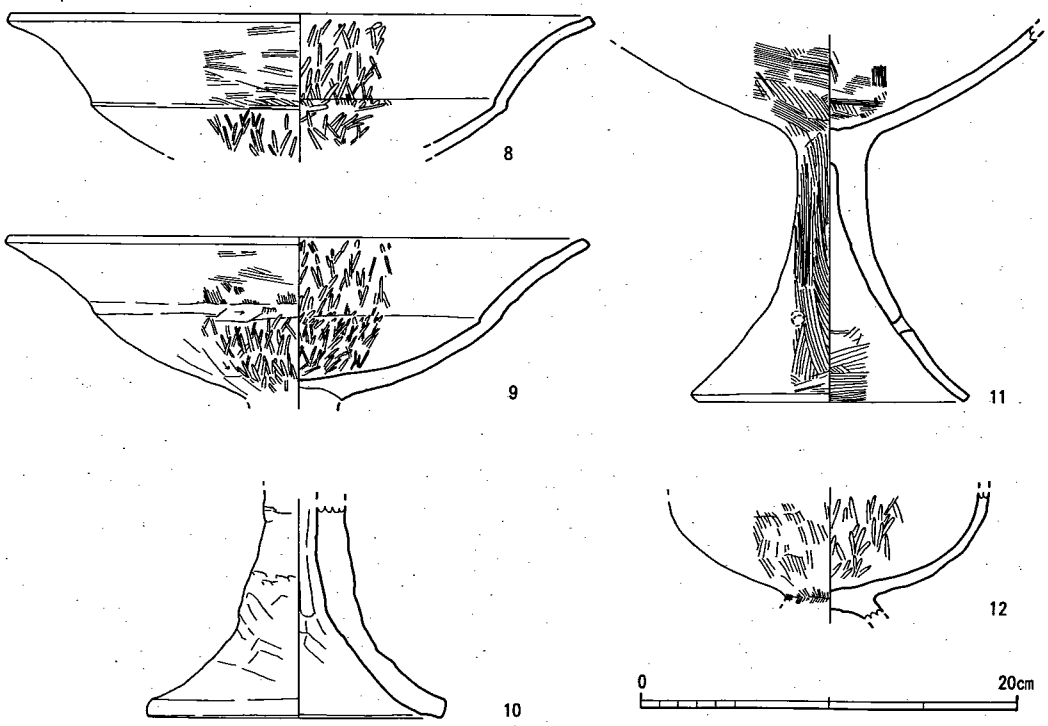
図示したように北西部分で多くの土器が出土したが破砕した状況であった。南辺および東辺でも若干の土器が出土しているがこれらも破砕し、かつ欠失部が存する。これらもやはり床面から浮いた状態で出土した。また、７に示した土器は「周辺」出土と注記されており、この遺構に伴うものではないかも知れない。

土器（図版98・99、第140・141図）

１は図示した部分の1/2が残存する。口縁部は微妙な曲線を描き、端面をもつ。器肉が厚く、雑なつくりである。２は体部はよく残るが口縁部のほとんどを欠く。口縁部は外彎しつつ小さく外傾する。体部は張りが強く、丸底の底部へ続く。これも全体に刷毛目で調整するが、外面のそれはとくに細かい。また肉厚である。

３は口頸部は完周するが体部は多くを失う。また、残存部は全体によく焼けている。外面は全体を刷毛目で、内面は撫でで仕上げるようである。全体につくりが丁寧。

４は小片。端部に面をもつ口縁部の反転は弱いが、頸部内面に鋭い稜をもつ。調整は細密な刷毛目で行う。５は外底面を篦削りする底部。６は図示部分が完存するが、意図的なものか口



第141図　２号方形周溝遺構出土遺物実測図２（1/4）

縁部のすべてを欠く。これも全体がよく焼ける。

7は遺構に伴うと確認できない土器。底部が完周し、口縁部もほぼ1/2が残存する。口縁部は上方につままれて内外に面をつくり、底部は肉厚のレンズ底となる。ほぼ1/2が焼ける。

8は焼けた小片。9はほぼ完周し、大部分が北辺出土であるが口縁部の小片が南辺から出土している。屈曲部は中位にあって稜は甘い。これも全体に焼けて赤変する。10は完存する脚部で非常に肉厚である。外面の一部に縦方向の刷毛目の痕跡が見えるが大部分は手捏のようである。内面は指撫で。11は杯部の屈曲部以上をすべて欠き、脚部裾もほぼ1/2を欠く。三方に透孔を穿ち、裾の開きが小さい。

12は脚付鉢か。図示部は完周する。

3号方形周溝（図版46・48、第142図）

2号方形周溝の南東にあって、一部が調査区外へ続くが全体は窺える。11号溝状遺構に切られるが、31号住居跡との先後関係は確認できていない。

溝は幅0.8～1.4m、深さ0.4mほどの規模で、5.2×6m以上の長方形の区画を形成するが、南西辺はその南端で途切れていて外部と続く部分があったようである。また、溝底は数cmの差があるに過ぎず、ほぼ水平である。一部で観察した溝の堆積状況はやはり内側に盛土が存在したことを思わせる。

出土遺物

遺構図に網掛けした部分の長さ3mにわたって、溝床から検出面にいたるまでびっしりと土器が詰まっていた。ここの場合、細片化したそれではなく、意図的に詰め込んだような状況であり、かつ土器の間には多量の炭などもかんでいた。土器もほとんどが焼けて変色する。

土器（図版99～102、第143～147図）

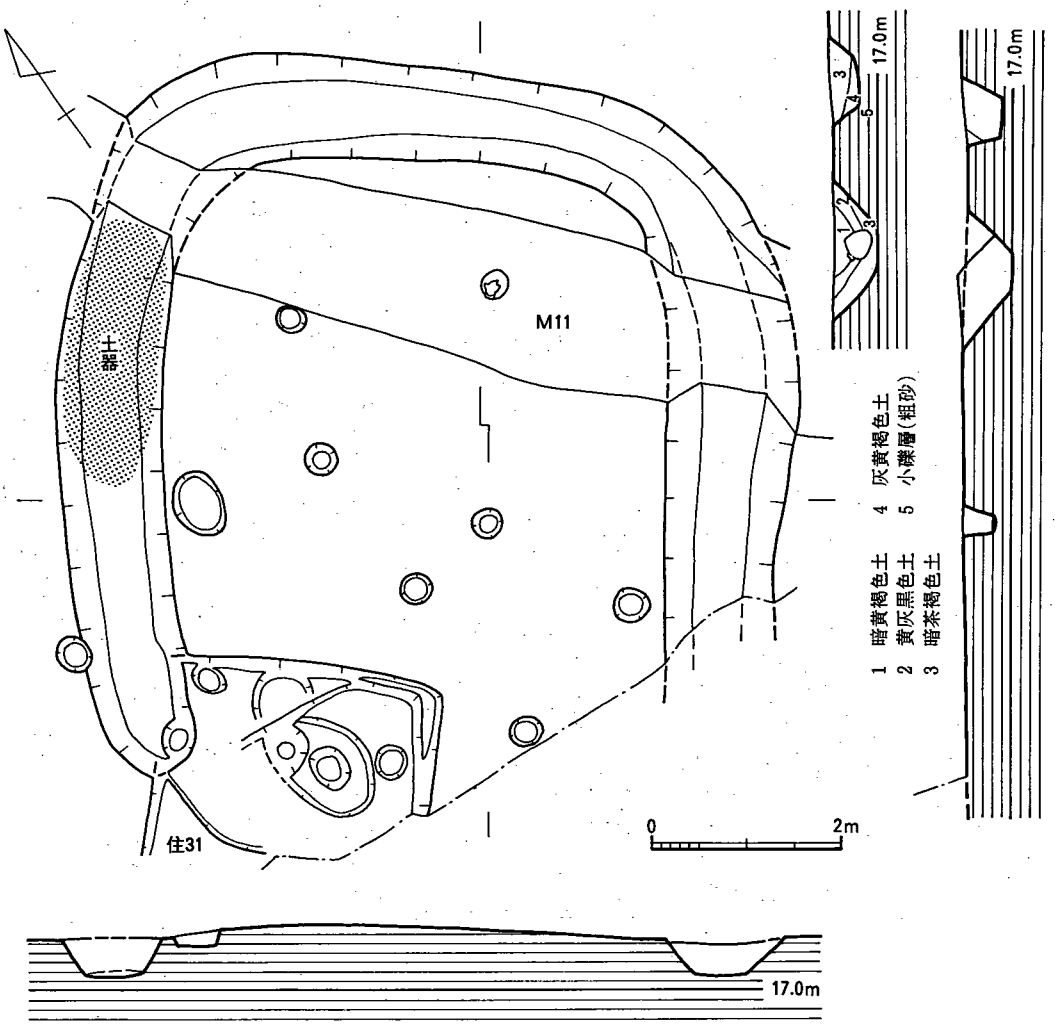
1はほぼ3/4が残る。不整で波打つ口縁部は小さく外傾し、端部は丸い。底部はレンズ状。体部内面は弱い刷毛目で調整するようである。22は肉厚の土器で、これも口縁部の形状は1に似る。体部内面は篦削りか。3は体部中位以上がほぼ完周する。口縁部は強く外折し、端面をもつ。全体に刷毛目を主体として調整する、全体に焼けた、粗雑なつくりの土器である。4は口縁部が強く外折し、端面をもつ。体部の張りも強く、底部は平底となる。ほぼ1/4が残存し、全体に焼けている。5も4に似るが、口縁部が長く、端面をもつ。ほぼ1/2が残存。7～9は口頸部が小振りな相似た土器で、いずれも完存するものではない。全体を主として刷毛目で調整する。10は図示部分がほぼ完周し、全体が非常によく焼けて赤変する。肩部の突帯は篦状工具による刺突を刻む。11も図示部分はほぼ完存。中位下方に断面長方形の突帯をめぐらせるが、形状・位置ともに不整である。これも縦方向の半分ほどが真赤に変色する。

12は長胴の甕で、口縁部は強く外折し、端面をもつ。13は3/4が残存し、底部を欠く。これ

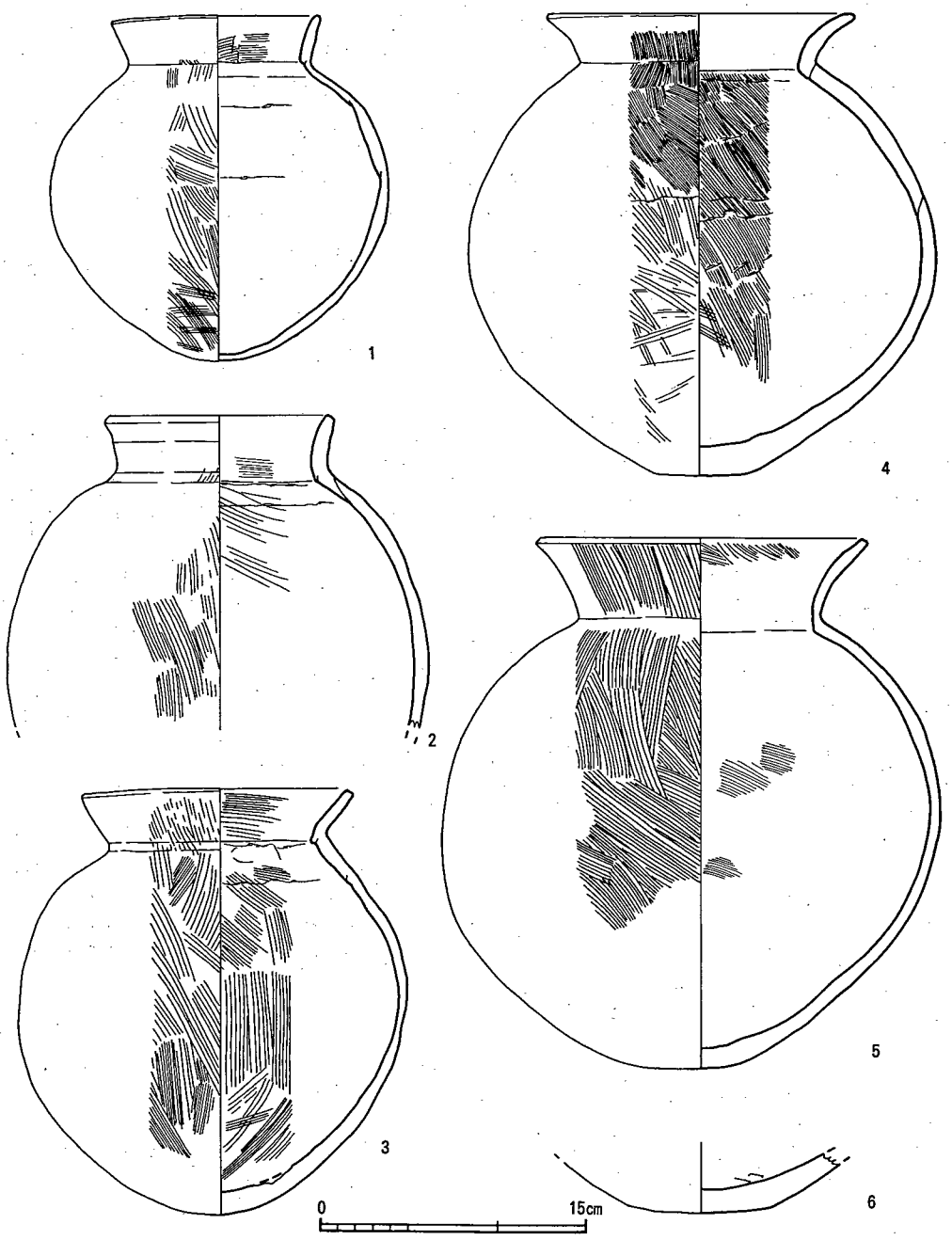
も全体が焼けている。14～15は頸部外面が湾曲し、内面に稜をもつもの。14は小片。15は1/4ほどが残るが、真赤に焼ける。16は口縁部が外彎し、端部は丸く終わる。これもよく焼けている。17は口縁部が矮小化し、波打つ。約1/2が残存。21は底部が特徴的な土器。外底面には粗い篦磨きが施されるが、全体には粗雑なつくりで、口縁部は波打つ。ほぼ3/4が残る。22も口縁部が不整であるが、体部のつくりは丁寧。よく焼ける。23は頸部外面は湾曲するが、内面には鋭い稜をもち、口端部は面をなす。ほぼ1/2が残存し、これも全体がよく焼ける。24は頸部が緩く外彎し、端部に面をもつ。ほぼ1/3が残存。

25は図示部分がほぼ完存する。屈曲部は中位にあって、稜は甘い。器壁が薄く、器表は荒れる。26は器表の非常に残りがよい。透孔は3方にある。27は小片。

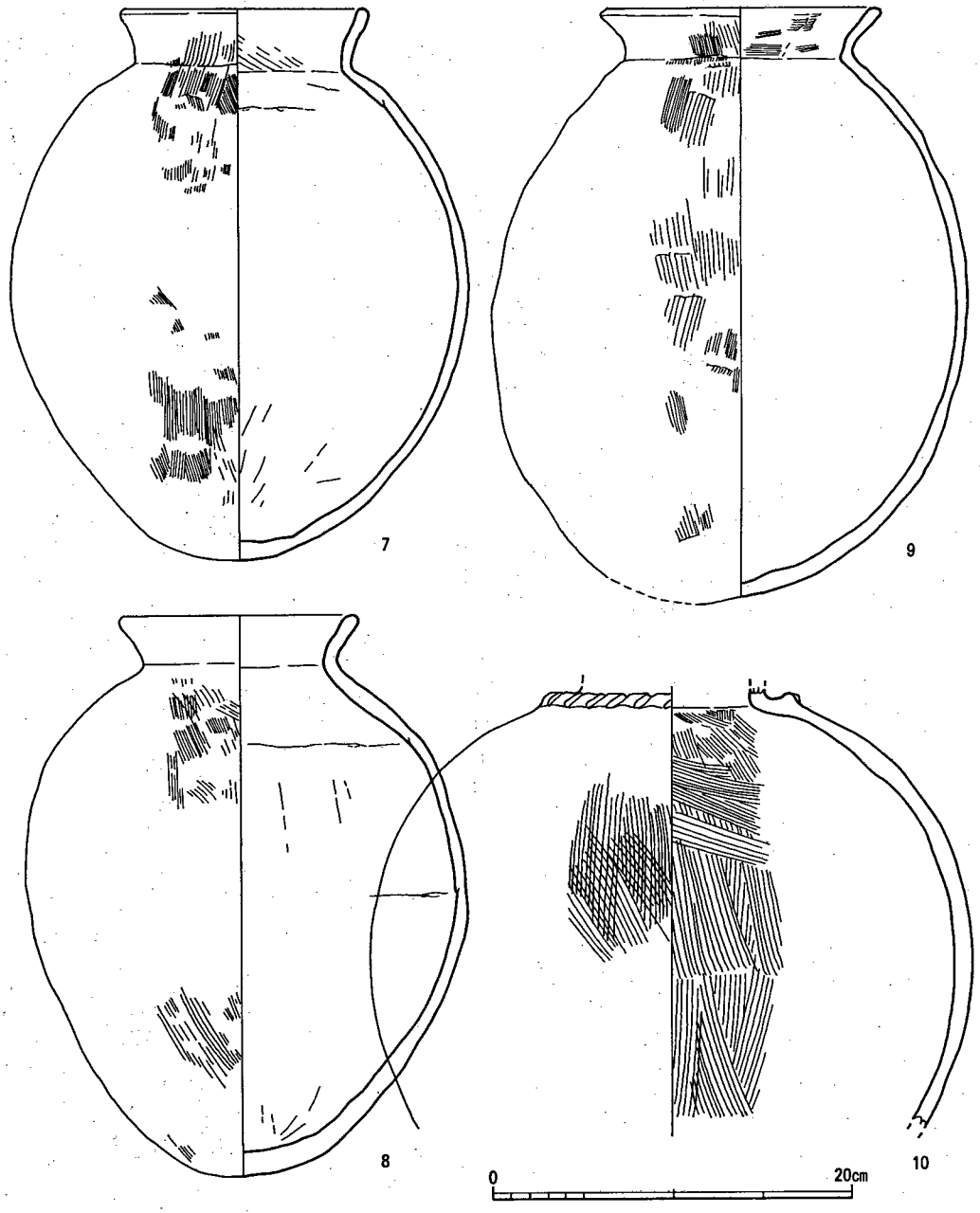
28は手捏の小片。29の外面は篦削りで調整される。30は丁寧なつくりで、ほぼ1/2が残存。



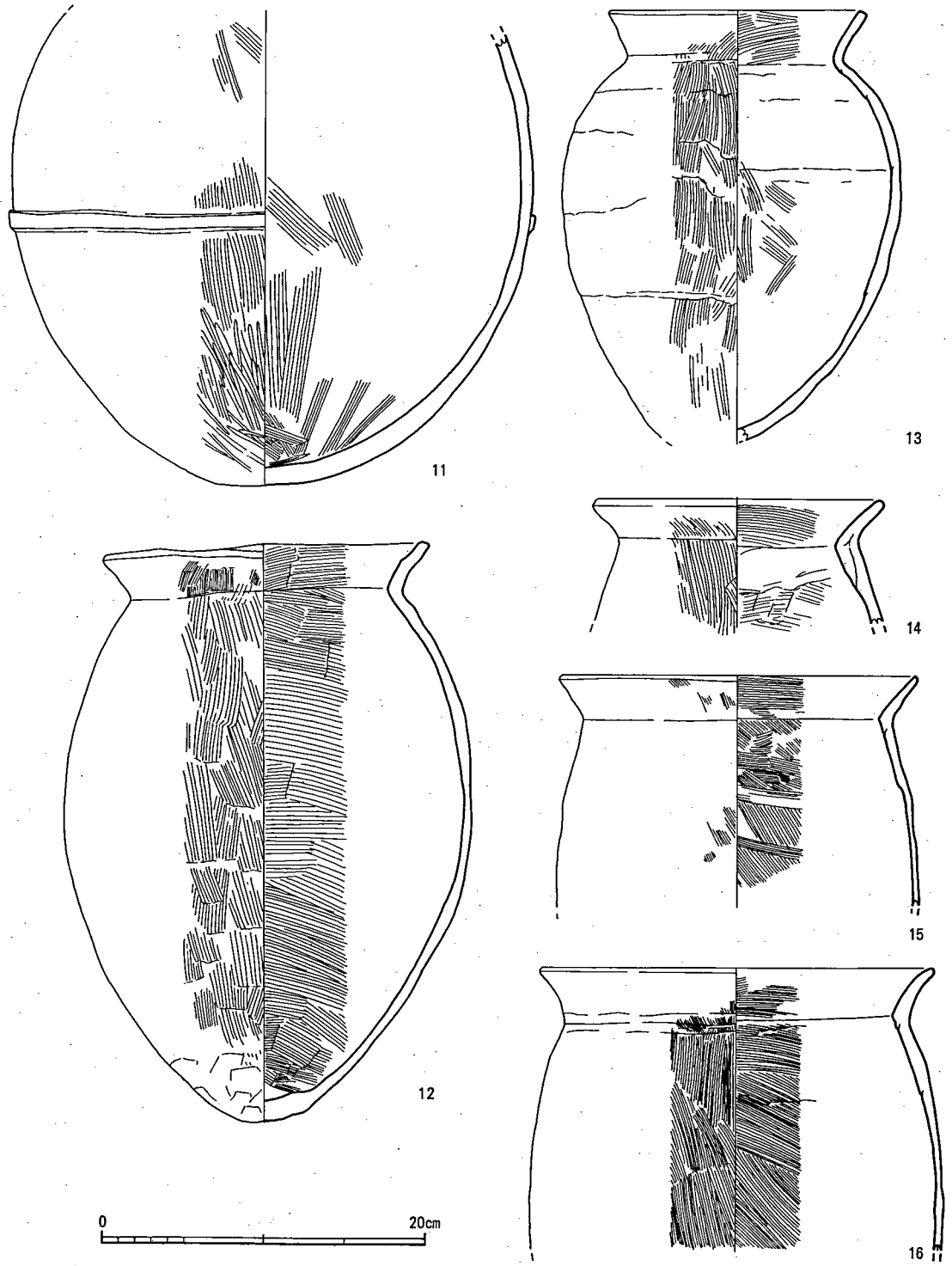
第142図　3号方形周溝実測図（1/80）



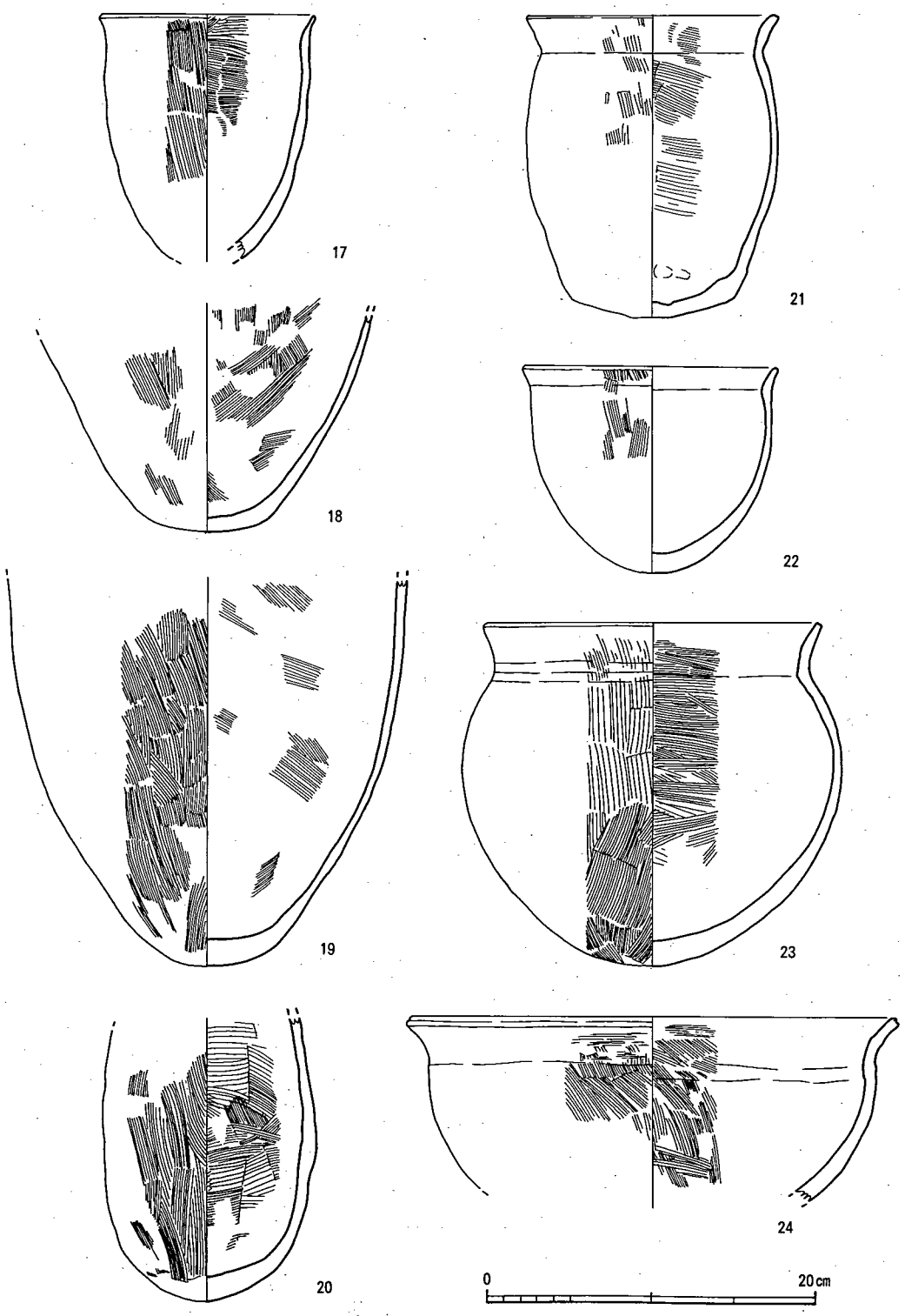
第143図　3号方形周溝出土遺物実測図1（1/4）



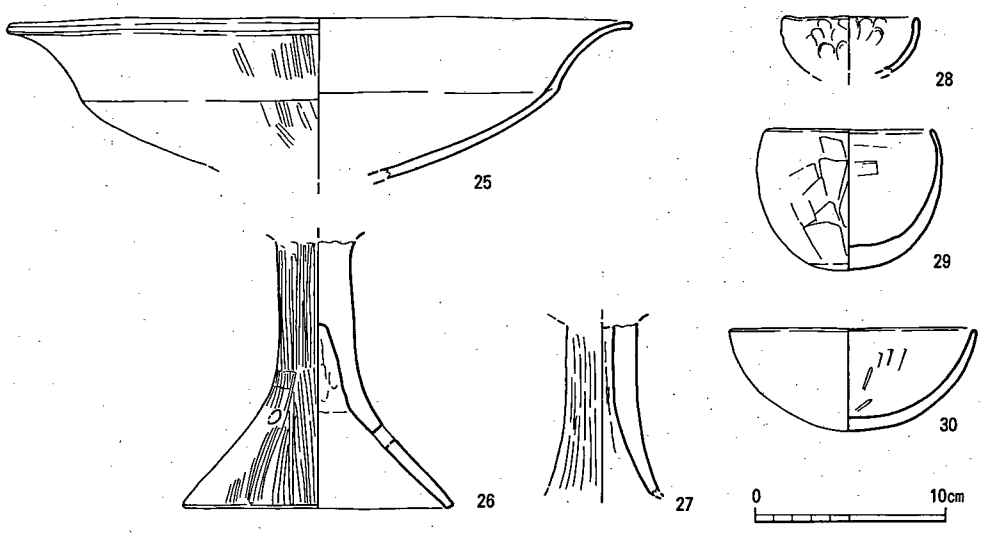
第144図　3号方形周溝出土遺物実測図2（1/4）



第145図　3号方形周溝出土遺物実測図3（1/4）



第146図　3号方形周溝出土遺物実測図4（1/4）



第147図　3号方形周溝出土遺物実測図5（1/4）

4号方形周溝（図版48～50、第148図）

調査区西北隅付近で検出したもので、一部が調査区外へ続く。また、この遺構は3軒の竪穴式住居跡と切合関係にあるが、平面的には必ずしもすべての先後関係を確認しえていない。ただ、64号住居跡には切られる。

溝の規模は幅0.8m前後、深さ0.2mほどで、その内法は東西12m強、南北11m強となる。東辺は北端および南端で西に屈曲して2m弱の部分で途切れ、西辺は南端で東へ屈曲して4mほどで切れる。つまり、南辺では7m弱の幅で陸橋部が存在することになる。

これも一部の観察に過ぎないが、溝の堆積状況は内側に盛土が存したことを思わせた。

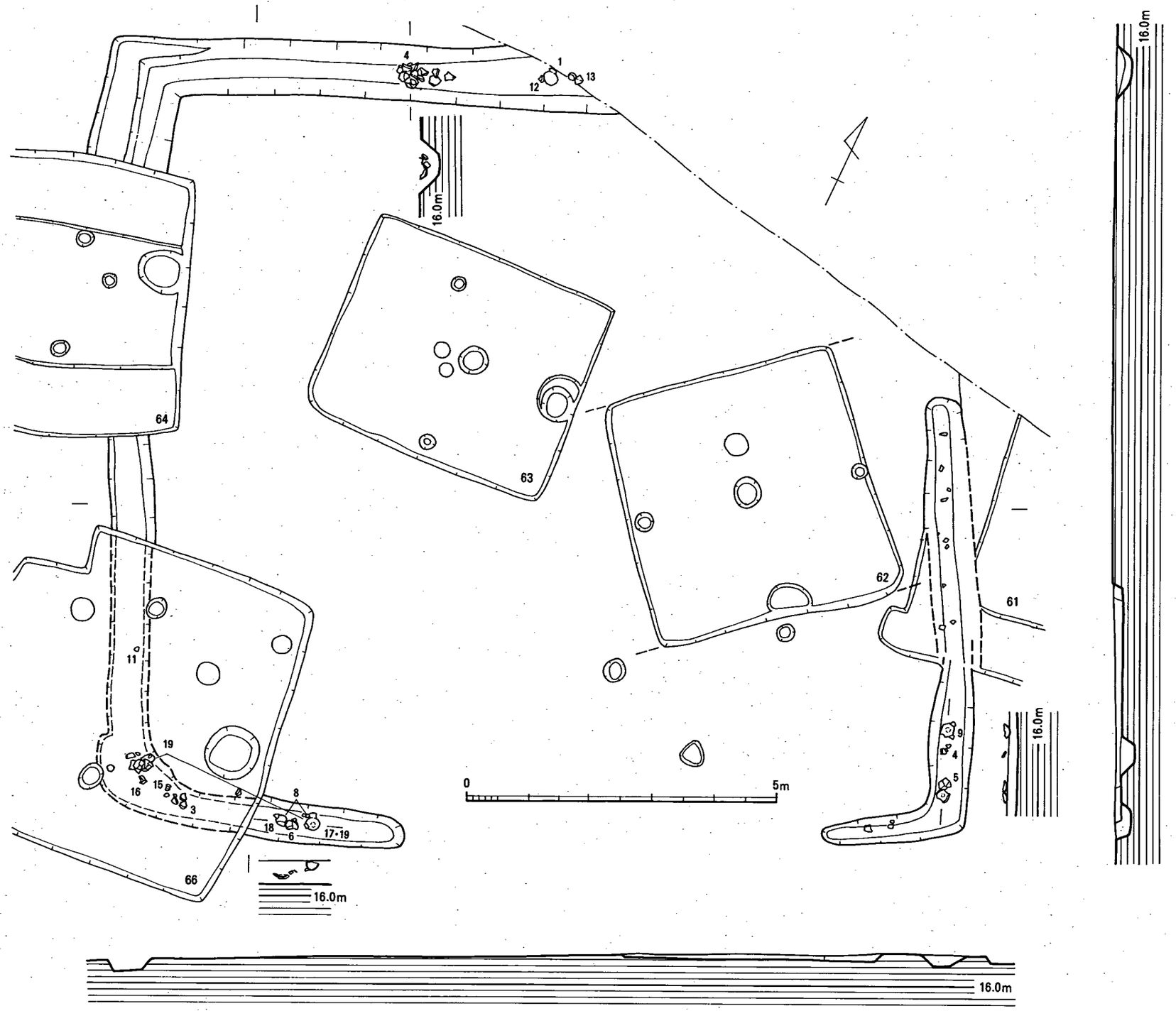
出土遺物

ここでも各辺で土器が検出された。多くは破砕した状況であるが、北辺では完形の壺・鉢などが出土している。しかし、いずれも溝底からは浮いていた。

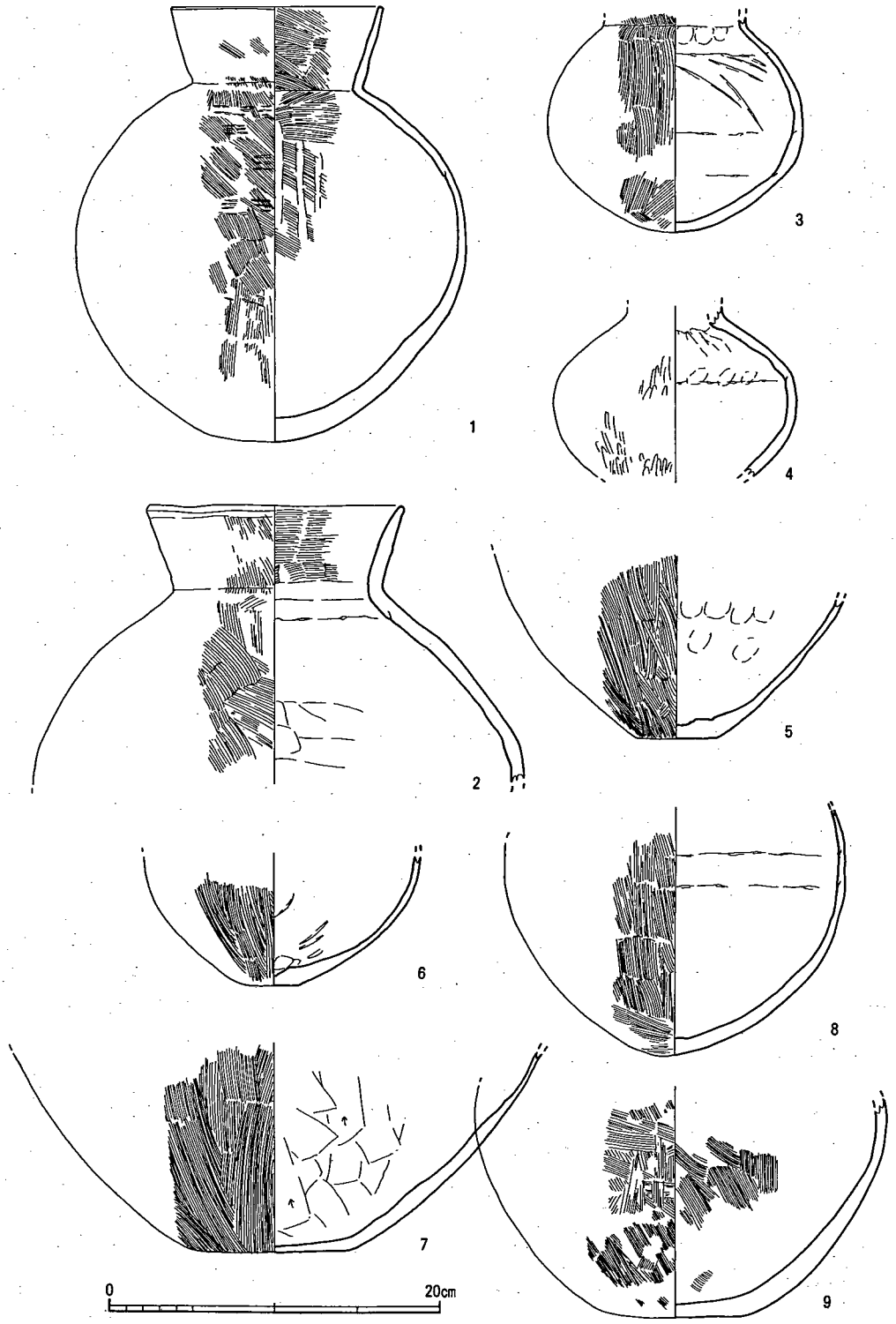
土器（図版102～104、第149・150図）

1は出土時から完形であった。口縁部は内彎気味に小さく外傾し、端部は水平な、小さな面をなす。体部は張りの強い球形となる。調整は外面上半に粗い平行叩きの痕跡を残すが、全体に丁寧な刷毛目で仕上げる。内面は撫でを主体として仕上げるようである。2は1と好対照の粗雑な土器で頸部以上は完周する。体部内面は撫でで仕上げるようである。3は1/2が残存する。体部内面には工具で引っかいたような痕跡が残り、焼けて真赤となる。4も全体に焼けて器表が荒れる。これは3/4ほど残存。

5は平底で、内面は非常に荒れる。6はレンズ状の底部のみ完存する。丁寧なつくりの土器



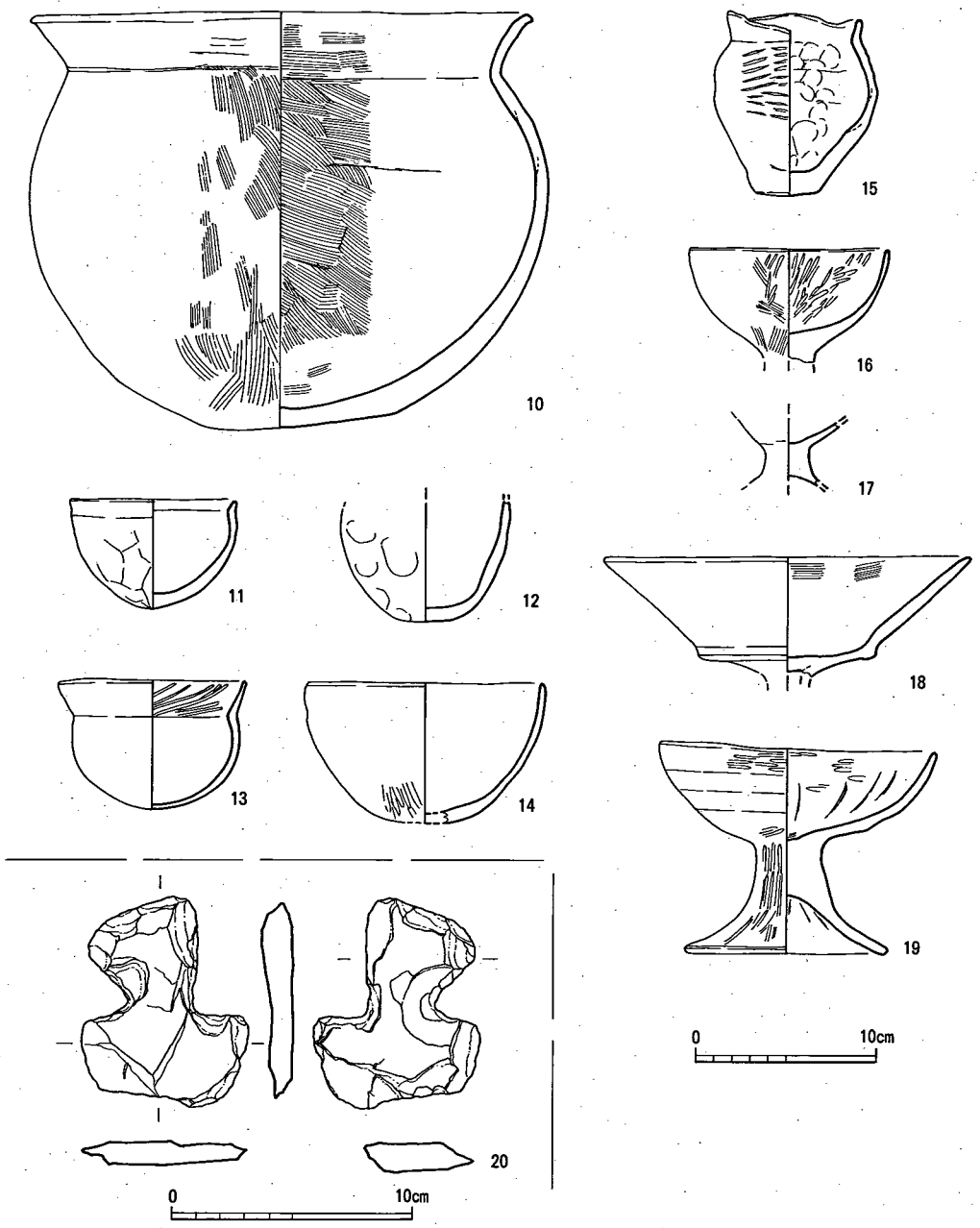
第148図　4号方形周溝実測図（1/80）



第149図　4号方形周溝出土遺物実測図①（1/4）

で、内面は撫で調整のようである。7も図示部はほぼ完存する。大きな平底で、外面を細密な刷毛目、内面を篦削りで仕上げるが、いずれも丁寧。8は0.6m離れた破片が接合したもの。全体に焼けており、外面は煤ける。9はレンズ底となり、内外面を細密な刷毛目で仕上げる。

10はほぼ完存する。口縁部は強く外半、端部に面をもち、小さくつままれる。底部はまだ平坦面を有しており、底部周辺の外面を粗い刷毛目で、その他の部位を細かな刷毛目で調整する。



第150図　4号方形周溝出土遺物実測図②（1/4,1/3）

これも全体に煤ける。

11は口縁部の多くを欠くが、以下はほぼ完存する。外面には部分的に篦削りの痕跡が見える。12は手捏で、器表が荒れる。13は完存。器表が荒れるが、内底面に黒色の付着物がある。また、口縁部内面の暗文風の篦磨き部分も黒変している。14は薄手の土器で、仕上げも丁寧になされる。これは小片。

15はミニチュアの甕で、口縁部は不整形で波打ち、本来的なものかどうかはっきりしない。体部は完存。粗い平行叩きが外面に残り、内面は指撫でで仕上げる。

16は小型の高杯であろう。丁寧につくられた土器で、ほぼ1/2が残存する。17は器表が非常に荒れており、天地も判然としない。18は杯部が直線的に大きく開く外来系の高杯。3/4が残るが器表は非常に荒れる。19は丁寧なつくりの椀形の高杯で、杯部の一部が3m離れて出土。杯部外面には一部に篦削りが施される。また、口縁部付近が部分的に焼けて赤変する。

石製品（図版104、第150図）

「4号方形周溝西側」との注記があってこの遺構から出土したものとは確認できない。緑泥変岩製の十字形石器で一部を欠損するようである。剥離は粗雑なものである。

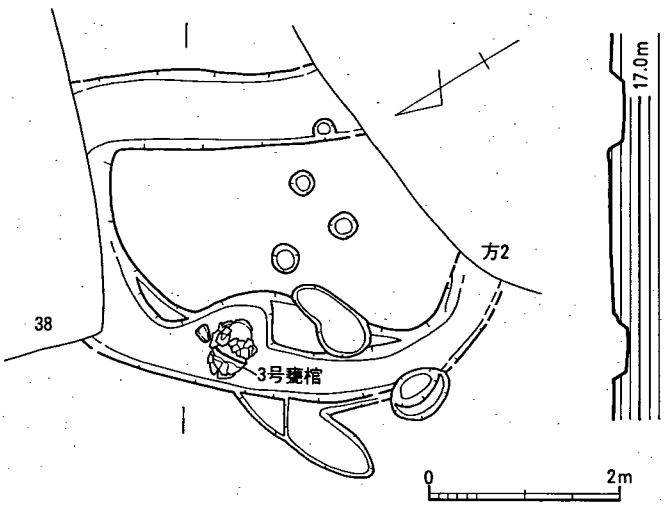
5号方形周溝（第152図）

2号方形周溝の北にあってそれに切られ、また38号住居跡にも切られる。さらに、西辺中で2号甕棺墓を検出したが、先後関係は確認できていない。

周溝は幅0.6～0.8m、深さ0.2mの規模で、内法2～3.5m強の範囲を不整長方形に巡る。

出土遺物

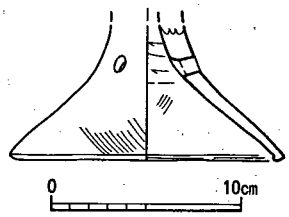
土器片が数点出土するが、そのうちの1点を図示した。それ以外では器台や小型長頸壺などの小片がある。



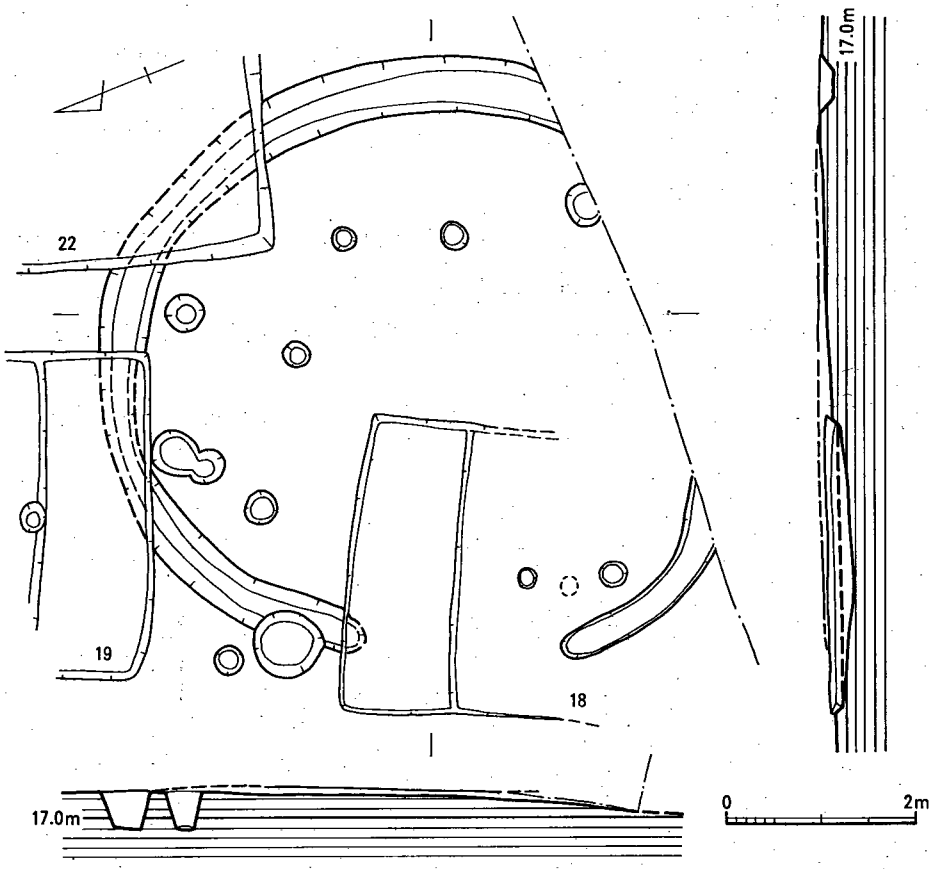
第151図　5号方形周溝実測図（1/80）

土器（第152図）

高杯脚部の残片で、図示部分の1/4が残存する。脚裾が外彎気味に膨らみをもって広がり、端部がつままれて踏ん張る。円孔は3方向に穿たれる。



第152図　5号方形周溝出土遺物実測図(1/4)



第153図　円形周溝実測図（1/80）

円形周溝（図版50、第153図）

18・19・22号住居跡に切られ、一部が調査区外へ続くが全体は窺える。

溝の規模は幅0.5～0.6m、深さは最大で0.4mを測る。囲繞する範囲は直径5.4～6mの正円に近い形状を呈し、西側で約２mの間途切れる。

溝で区画された内部で柱穴を検出しているが、この周溝に伴うものとの確信はない。

これも土器小片が若干出土するのみで、顕著な遺物はない。

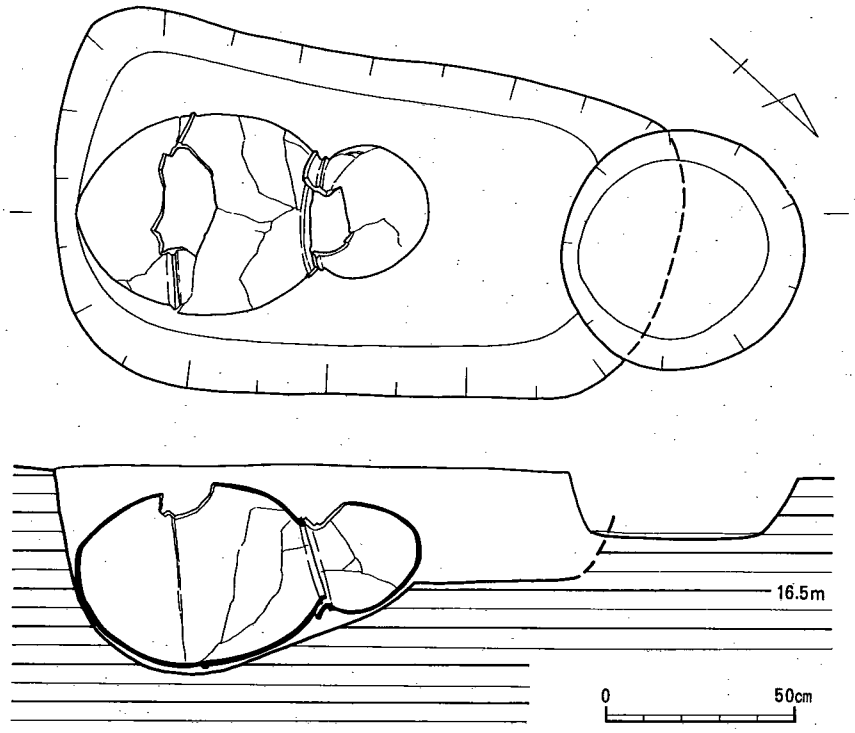
４．甕棺墓

調査区東半で３基の甕棺を発掘した。いずれも小児棺と思われるもので、散在している。

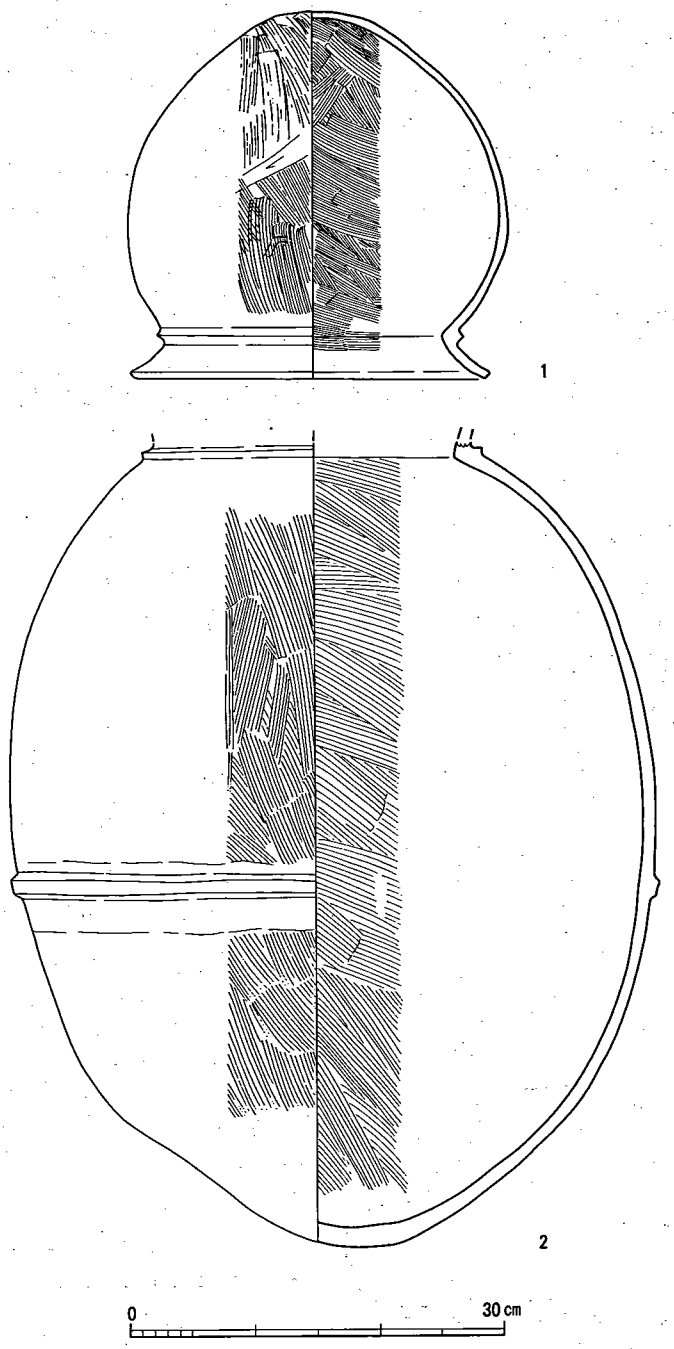
１号甕棺墓（図版42、第154図）

33号住居跡の東に近接して位置し、周辺に他の住居跡は存在しない。検出時にはまったく墓壙に気付かなかったが、作業員が踏み割って漸く発見したものである。

墓壙は3.3×2mの不整隅丸長方形で閉塞部位により空間を保つ。埋土は地山によく似た土で、若干黒みが強いといった程度のものである。



第154図　１号甕棺墓実測図（1/20）



第155図　1号甕棺実測図（1/6）

埋置は大型の甕を水平に近い傾斜で納め、大型の鉢で塞いでいる。

出土遺物

上甕（図版104、第155図１）

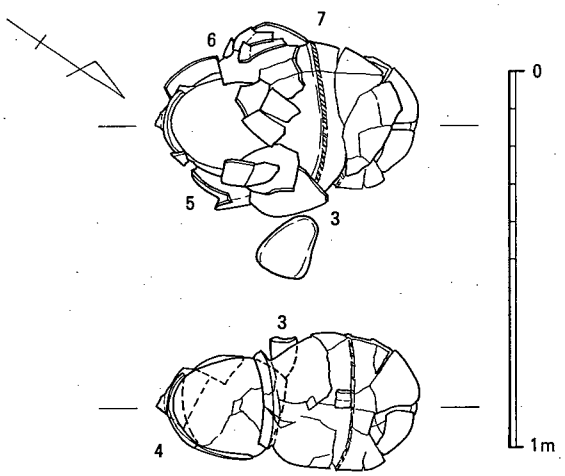
口径28cm、器高30cmほどの鉢を用いる。底部は尖り気味の丸底となり、体部は張りをもつ。頸部に断面三角突帯をめぐらせるが、これは形状が整っている。口縁部は強く外半し、端部に面を有する。調整は全体に刷毛目を主体として用いるが、体部中位付近の外面では部分的に篦削りが行われる。全体に丁寧につくられた土器で、色調も赤味が強く、意識的に赤く焼かれたものと思われる。

下甕（図版104、第155図２）

口頸部を丁寧に打ち欠いた長胴の壺を用いる。残存高は65cm弱、最大形は56cmを測る。丸底の底部から張りの弱い、長胴の体部へと移行するが、体部中位のやや下方に断面台形の突帯を付す。また、頸部にも断面三角形の突帯を付すがいずれも整美なものではない。また、頸部内面の稜は鋭い。

器表の残りがよく、調整は全体に細かい刷毛目が主体として使用されるが、外底面付近では篦削りのような効果を見せている。また、内面では突帯付近の下位では縦方向の、それ以上では横方向の刷毛目を施す。

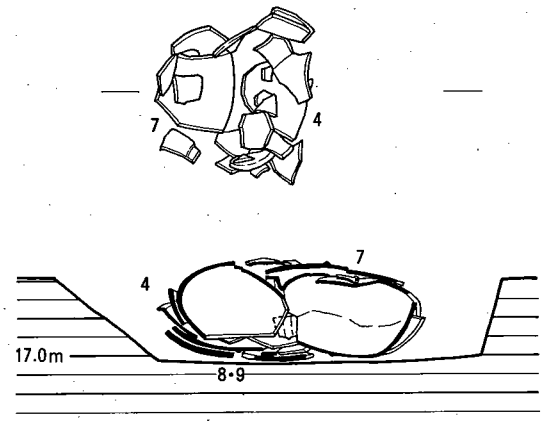
出土時の下側にのみ赤色顔料が付着する。



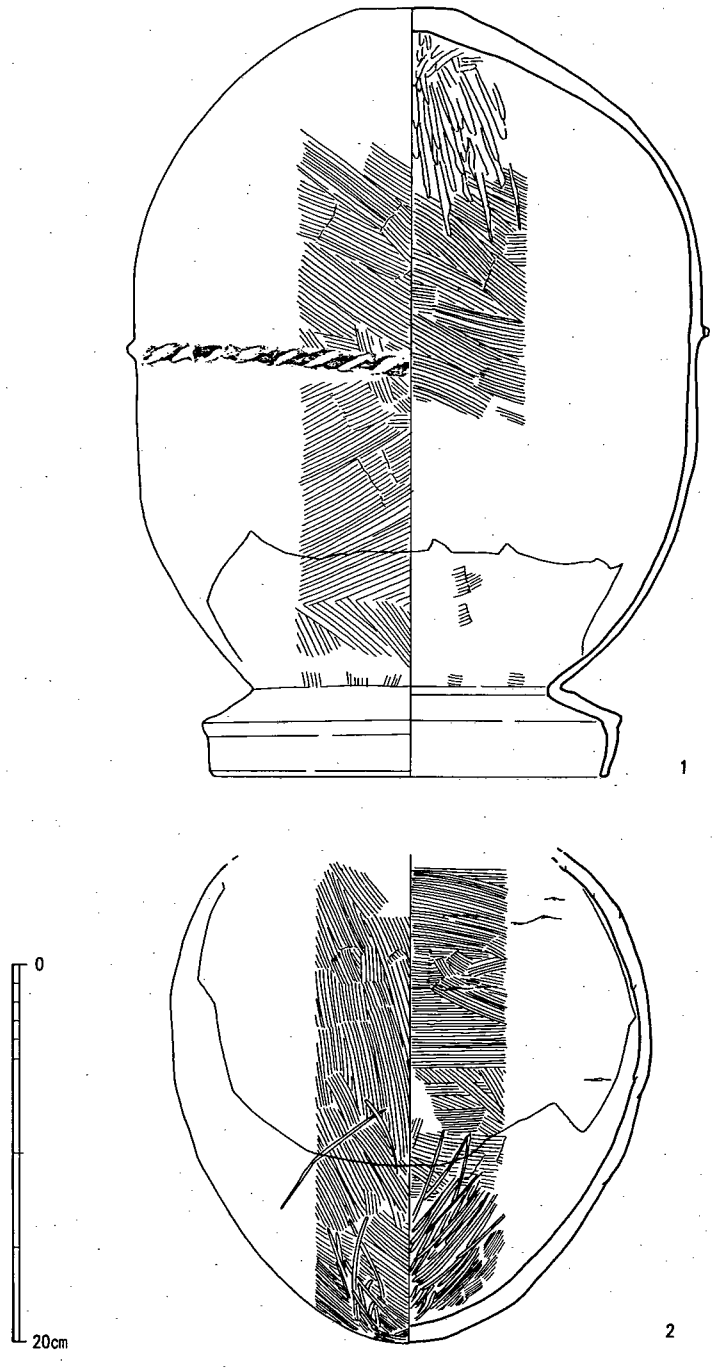
2号甕棺墓（図版43、第156図）

５号方形周溝の西辺中にある。ここは石原に位置することも災いして周溝との先後関係は確認できていないが、状況からみて甕棺墓が後出するのであろう。卑近に38号住居跡がある。

上記の理由から掘形ははっきりしない。が、甕棺は非常に複雑な構成となる。まず、打ち欠いた甕破片を合口部分から下甕の置かれる部分に敷く。次いで口縁部



第156図　２号甕棺墓実測図（1/20）



第157図　2号甕棺実測図1（1/4）

と体部の一部を打ち欠いた甕を下甕として伏せ置く。その開口部を口縁部と体部上半を打ち欠いた上甕で塞ぐ。さらに合口部分を中心に別個の打ち割った土器で覆うという3段階の所作がなされる丁重な埋葬法である。

脇に置かれた小礫は最終段階の被覆土器と同レベルであり、標石の任を果たしていたものかも知れない。

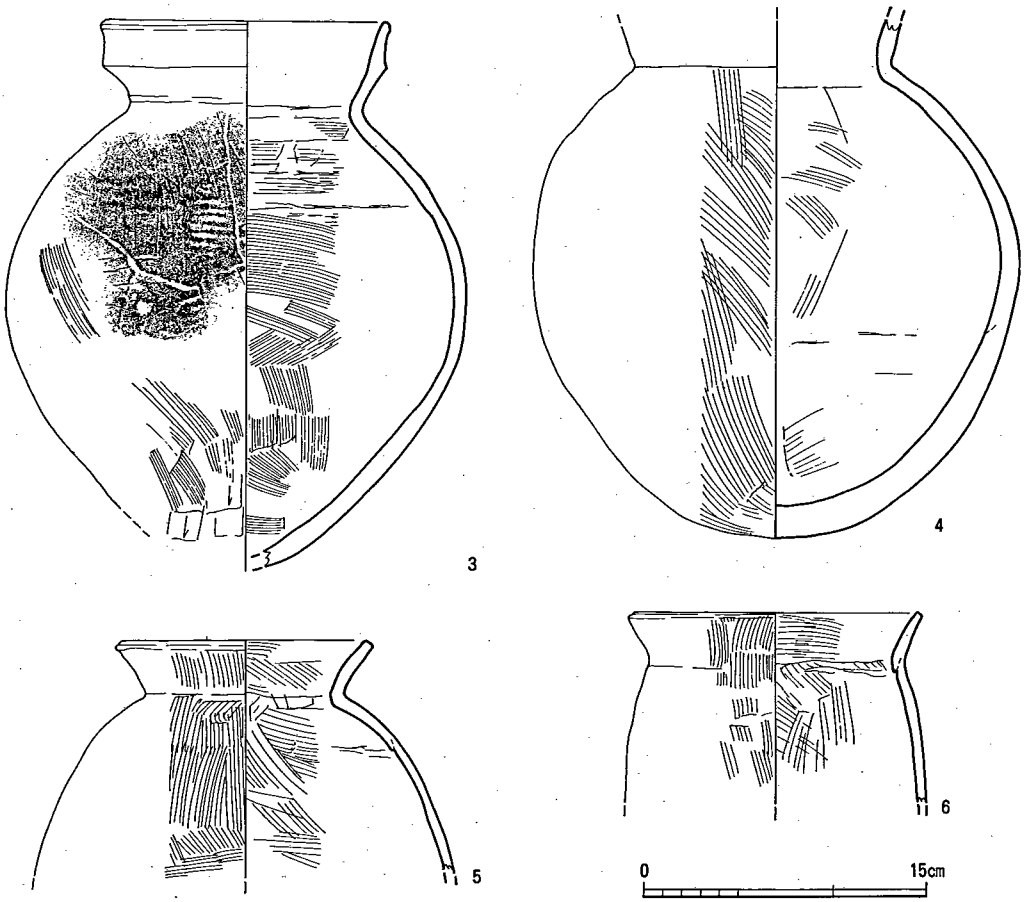
出土遺物

上甕（図版45、第157図1）

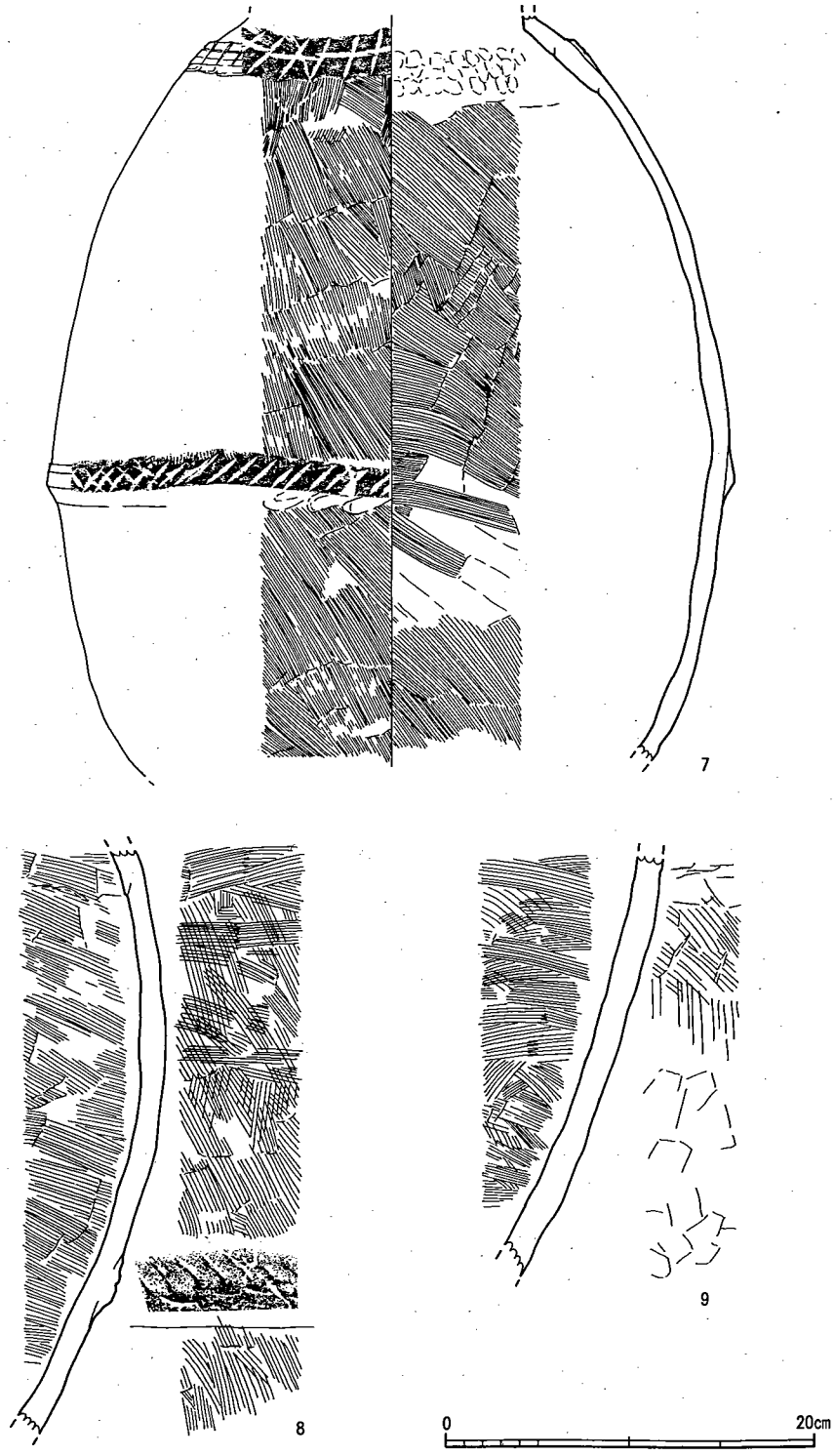
肩部以上のほぼ1/3を打ち欠いたもの。打ち欠いた部位と反対側は口縁部から底部付近まで焼けて赤変する。埋葬行為と関係があるのかもしれない。

口縁部は外彎内傾する二重口縁となるが、内傾の度合いは小さい。頸部の反転は強いものの、内面の稜は弱い。体部は長胴で張りが弱く、中位に断面台形の突帯をめぐらせ、刷毛目原体の小口を使用して深い刻みを付す。底部は小さな平底となり、体部下半の立ち上がりが大きい。

これも全体に刷毛目を主として使用するが、内底面では雑な篦磨きが使用される。また、外



第158図　2号甕棺実測図2（1/4）



第159図　2号甕棺実測図3（1/4）

面では突帯を境にして刷毛目の方向が異なっている。

下甕（図版105、第157図２）

壺と思われる土器の頸部以上のすべておよび×印の記号上端付近以上のほぼ1/3を打ち欠いたものを使用する。調整は全体に刷毛目を使用するが、底部付近の内外面では大雑把な篦磨きが施される。また、篦記号状の×印は鋭い線刻で焼成前になされる。

その他の土器（図版105・106、第158図３～第159図９）

甕棺を被覆あるいは下に敷かれた土器である。

３は合わせ部の東側に被さっていた土器で、口縁部は西端部にも置かれていた。口頸部はほぼ2/3、体部上半はほぼ完周するが、下半はほとんどを欠く。二重口縁壺であるが、頸部の反転が弱いもの。体部は張りを有し、残存しないが底部は尖り気味となるようである。体部内面は刷毛目、外面は上半が粗い平行叩きを残すものの丁寧な刷毛目で、下半では刷毛目とも篦削りともつかないような調整痕を残す。

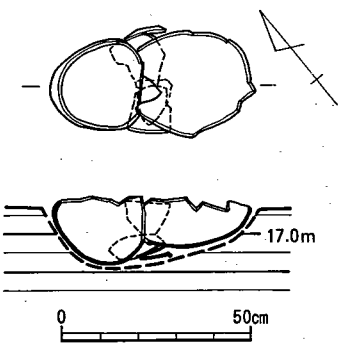
４は破砕されて合わせ部の下位に敷かれていたもので底部付近はほぼ完存し、上半は1/2を、口縁部はすべてを欠く。非常に肉厚な土器であるが内外面ともに赤く、意図的に焼き上げたもののようである。調整は全体に刷毛目を使用するが、内面のそれは非常に弱い。

５は３と同じく合わせ部の東側に添えられたもので、口縁部の1/3が残存。頸部が強く反転し、端部に面をもつとともに内面が匙面状に小さく窪む。調整は全体に刷毛目を使用する。

６は合わせ部の西側面に添えられた土器で、これもほぼ1/3が残存。体部が張りをもたない甕で、口縁部の外反も弱い。これも端部に面をもつ。

７は下段突帯上部以上が最上面を覆い、下段突帯付近から下位は上甕とした土器の床面に使用されていた。体部のみの残片であり、復原径には不安がある。不整形の突帯を二条めぐらせたもので、全体に刷毛目で調整する。肩部の突帯には横方向と縦方向の刻みが付されるが、いずれも刷毛原体の小口を使用したもので、横位のそれは不連続である。体部中位の突帯では斜位の刻みとともに×形の刻みもある。これらの刻みはいずれも鋭い。

８・９は最下層に敷かれたもので、大型土器の小片である。傾きは任意。８に付された突帯は指撫でで押し潰したような雑なものである。９の外面に残る調整痕は篦削りではなく、弱い刷毛目のようである。



第160図　３号甕棺墓実測図（1/20）

３号甕棺墓（図版44、第160図）

１号甕棺墓の東に近接し、最も近い34号住居跡まで５ｍほどの距離を測る。

上半部を表土掘削時に飛ばしたようで、下半のみを検出した。これも土器の口頸部を打ち欠いて合わせたもので、

合わせた部位に別個の土器片を敷いている。

掘形は判然としない。

出土遺物

上甕（図版106、第161図１）

長胴の甕を用いたもの。器表が非常に荒れていて再利用されたものであろう。調整痕はかすかに刷毛目が見える。

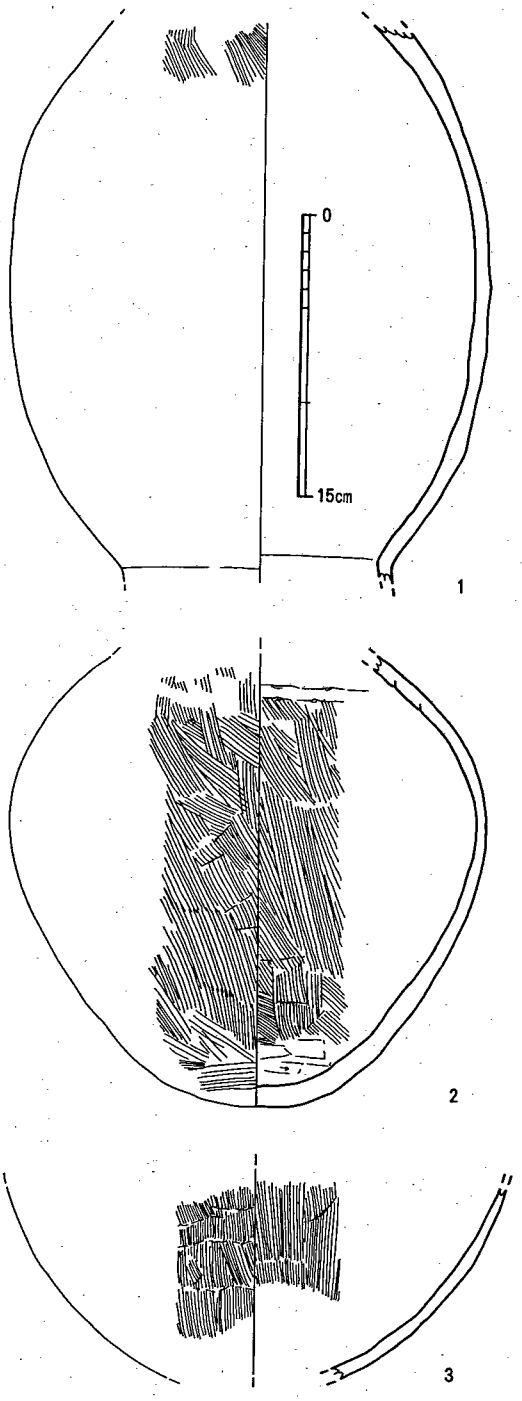
下甕（図版106、第図２）

残存部上半の1/3ほどを欠くが、これは表土掘削時のものであろう。張りの強い土器を用い、底部は丸底となる。調整は全体に刷毛目を多用するが、底部内面には篦削りが一部で使用される。また、同外面にも砂粒の移動が見えるが、刷毛目の結果のようである。

その他の土器（図版106、第図３）

合わせ口部の下に敷かれた土器で、割って使用されていた。また、土器自体脆く、細片化している。図示したように体部下半の残片のため、傾きには自信がない。

外面に煤が付着しており、日常土器を使用したものである。



第161図　３号甕棺実測図（1/20）

5．溝状遺構

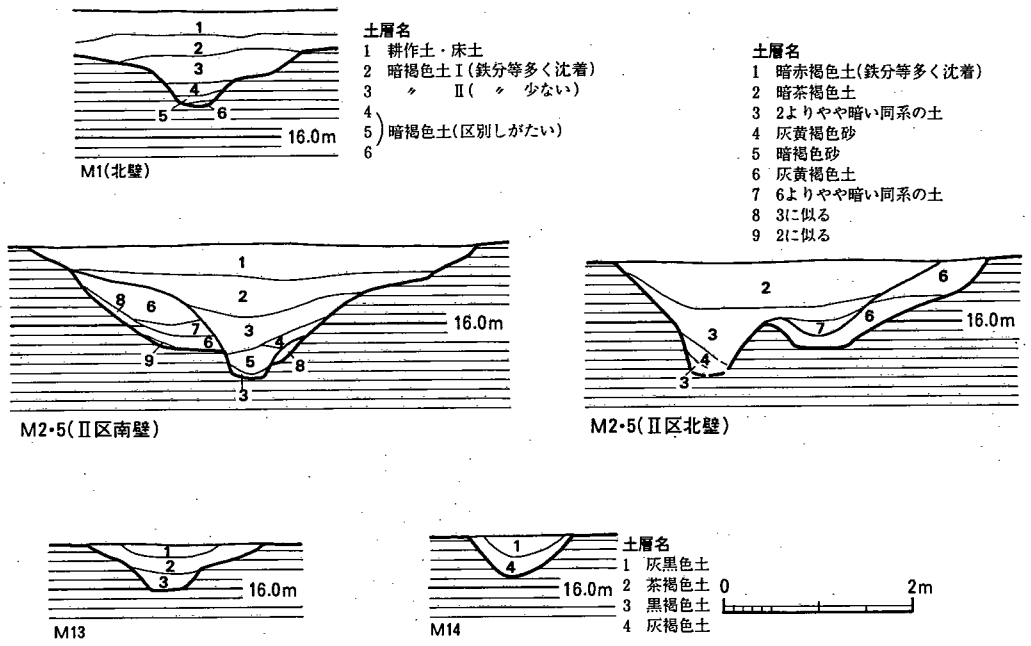
調査区内で数条の溝状遺構を検出している。最も大規模なものは2号溝状遺構で、これは環濠と考えている。また、調査区東端の段落ちとなる肩部では段と平行に走る溝状遺構が4条集中していた。その他、浅いあるいは部分的に弧状に検出したものなどもあるが、遺構との確信がもてないものなどもあり、略する。

1号溝状遺構（図版51、第162図）

未掘で残した用水路の南、1号住居跡の西南部で検出したほぼ南北方向に走る遺構である。

未掘で終わった用水路南壁で観察した結果では上端幅1.9m、下端幅0.3m、深さ0.6mの規模で、床面は標高16.3mほどで検出範囲ではほぼ同レベルである。用水路北で検出できなかったが、その付近の掘削レベルが16.6mほどであることから、溝低レベルがそれ以上あったものと思われる。平面的には上半を重機で飛ばしてしまい、0.3mほどの深さを検出したのみで小規模なものとなっている。

埋土は一応3層に分層したが、実際には判別しがたいような暗褐色土が堆積していた。



第162図　溝状遺構土層図（1/80）

出土遺物

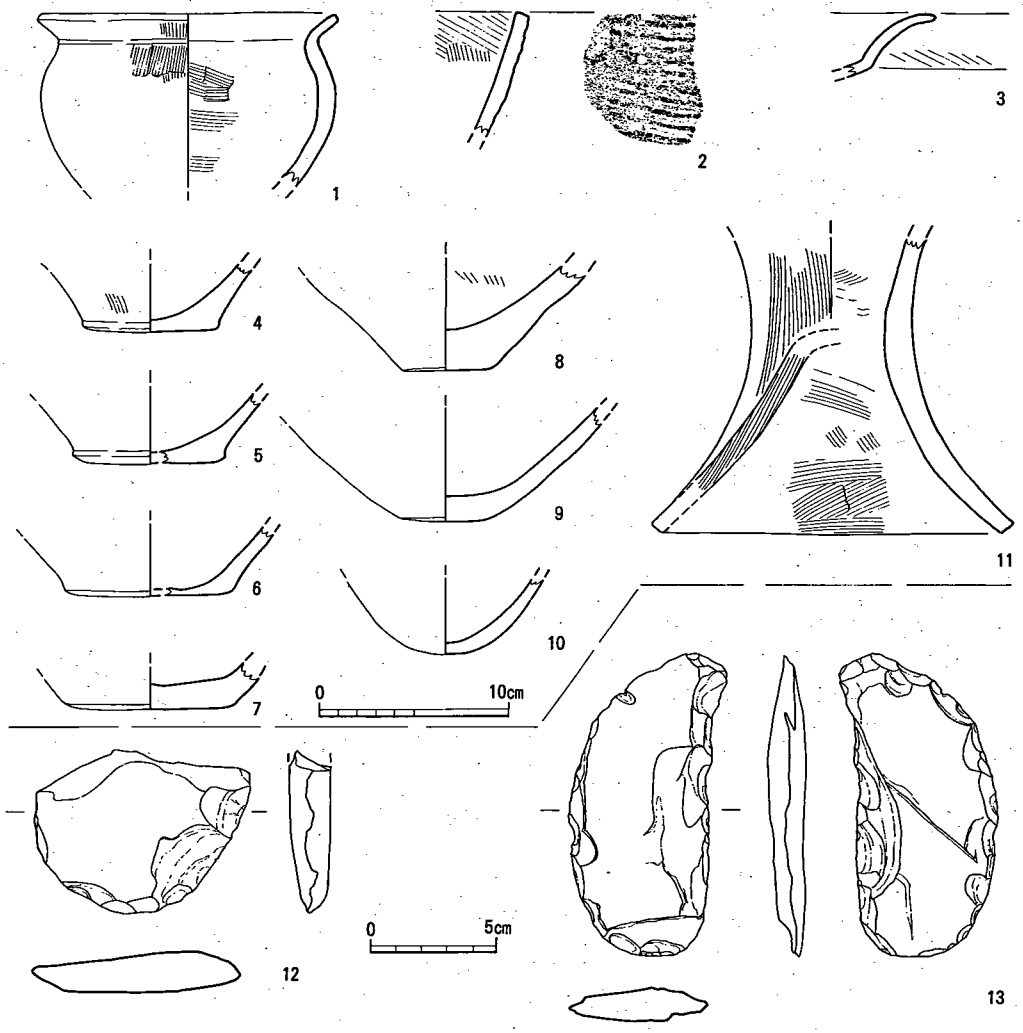
かなりの点数の土器が出土するが、内容は住居跡などと同様である。

土器（第163図１～11）

１は口縁部が小さく外反し、端部は丸く終わる。体部はよく焼けて赤変する。２は粗い平行叩きを残す小片で、口端部は面をなす。３は高杯の小片。４～10は底部で、平底から丸底までの形態が揃う。11は抉り入りの器台片。図下端の外面が赤変、内面が褐色に変色する。

石製品（第163図12）

安山岩製の打製石斧片。剥離は大きく雑である。



第163図　１・４号溝状遺構出土遺物実測図（1/4,1/3）

2号溝状遺構（図版52～57、第162図）

1号溝状遺構の東にあってそれと交わる位置関係にあるが、切合部分は調査区外となり確認できていない。遺構検出作業中は多くの土器が覗いていて大きな遺構が存在するとはわかったものの明瞭な肩を確認できず、数cmづつ掘り下げていったため、平面図上では若干大きくなっている。

2ヶ所で作製した土層図を図示した。そこでは上端幅が3.9～4.7mを測る。埋没状況はいずれも下位付近で外側から投棄されたような状態となっていて、廃したときに外側に築いていた土塁を取り壊して埋めたものと思われる。また、この土層観察によって再掘削がなされたことがわかった（初期の遺構を5号溝状遺構とする）が、発掘時は湧水が甚だしく、遺物を弁別して取り上げることはできなかった。

2号溝状遺構の深さは1.2～1.4mを測るが、隣接する1号溝状遺構が表土から0.7m下位にあることを考えれば本来の深さは2m前後であったものと思われる。また、断面形は上半で緩やか、下半で急角度となり、床面は幅0.4mの平らな面となる。

長さは50m強まで確認した。緩やかな曲線を描き弧状となる。路線内では先にも記したように本調査区から上唐原遺跡までの間は石原状の凹地形となっていて、これに対応する溝の存在は考え難く、北側は11～15号溝状遺構に対応する付近で途切れるものと思われる。また、南ではやはり調査区から60mほどの所に谷が入り込んでおり、この間の扇形をした範囲を囲うものと考えている。そう仮定した場合の囲繞面積は約14,000㎡、環濠の総延長は約200m弱ほどと推定される。

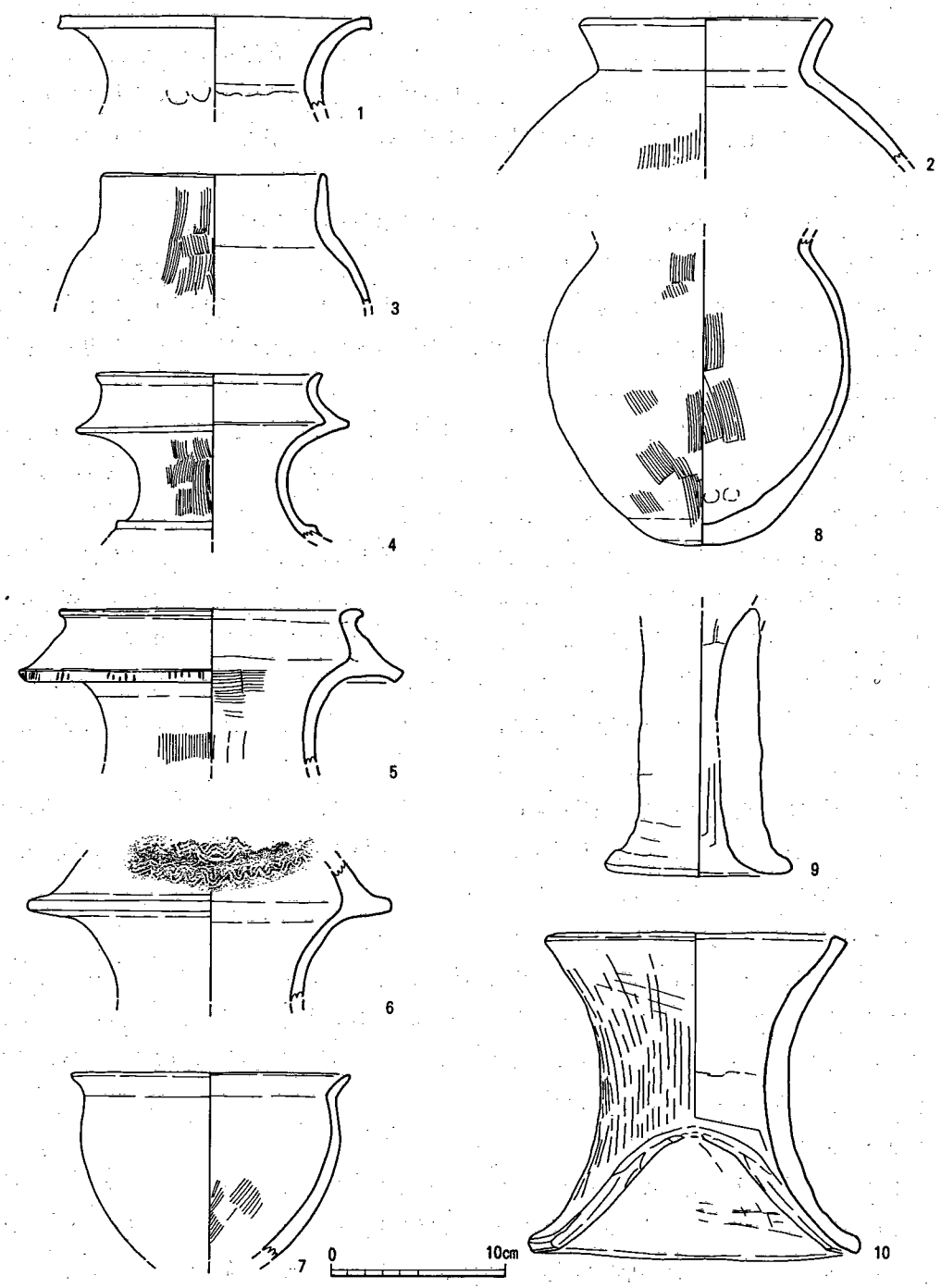
埋土の堆積は大雑把なもので、下層（砂層）と上層の区別は容易だが、それぞれの土質はよく似たものであった。また、自然堆積層でよくみられる黒色土が貫入していないことは、この埋没が一気に人為的になされたことを思わせる。

出土遺物

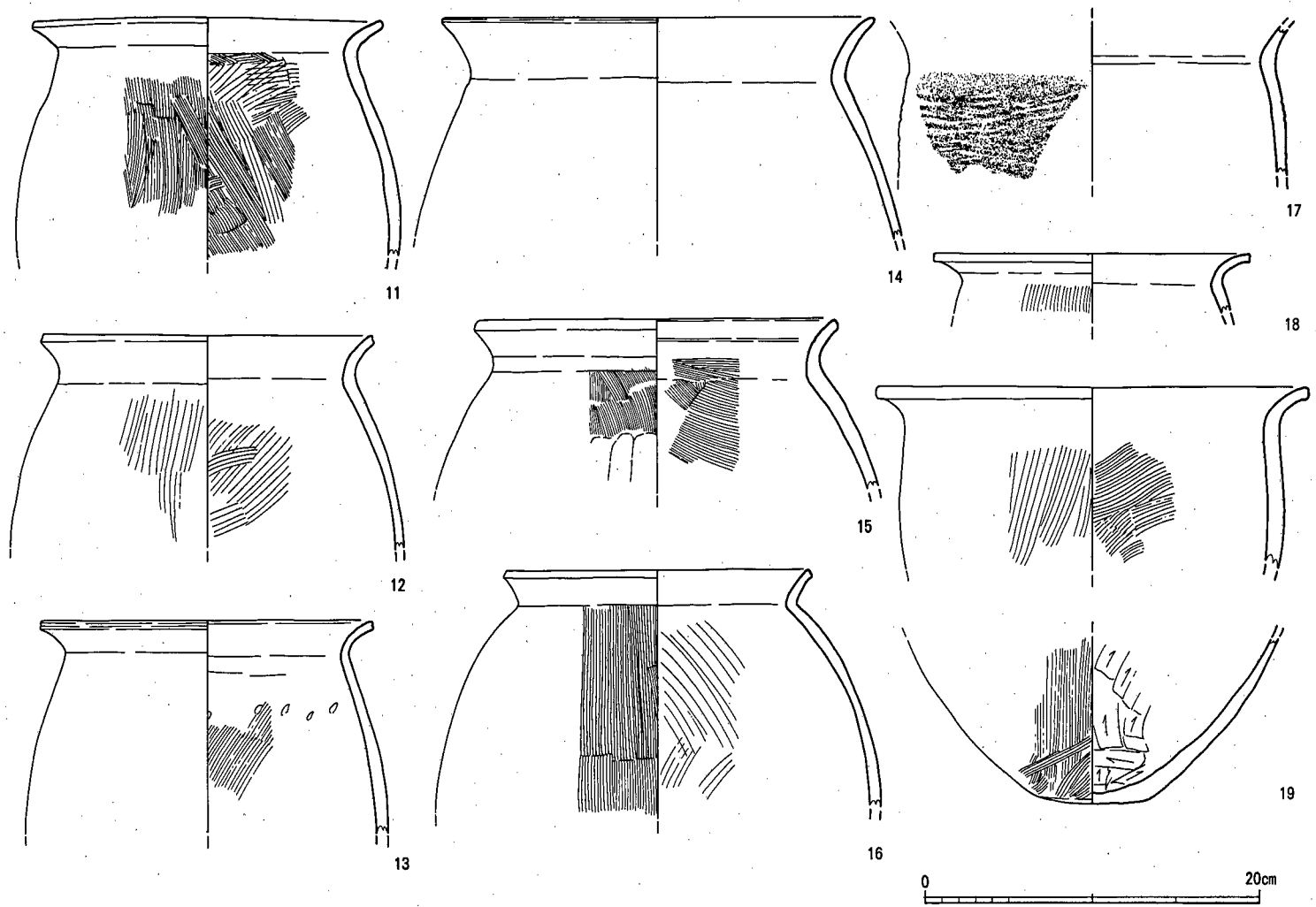
大量の土器が石材とともに出土した。南から便宜的にⅠ～Ⅴ区、さらに上層・中層・下層と分けて取り上げたが、便宜的なもので土層に対応したものではない。また、Ⅳ・Ⅴ区では調査可能範囲が狭く、最下層まで完掘しておらず、加えて大部分が湧水状態の中で取り上げたこともあって新旧の溝も分離できていない。

ガラス製品（図版107、第198図1）

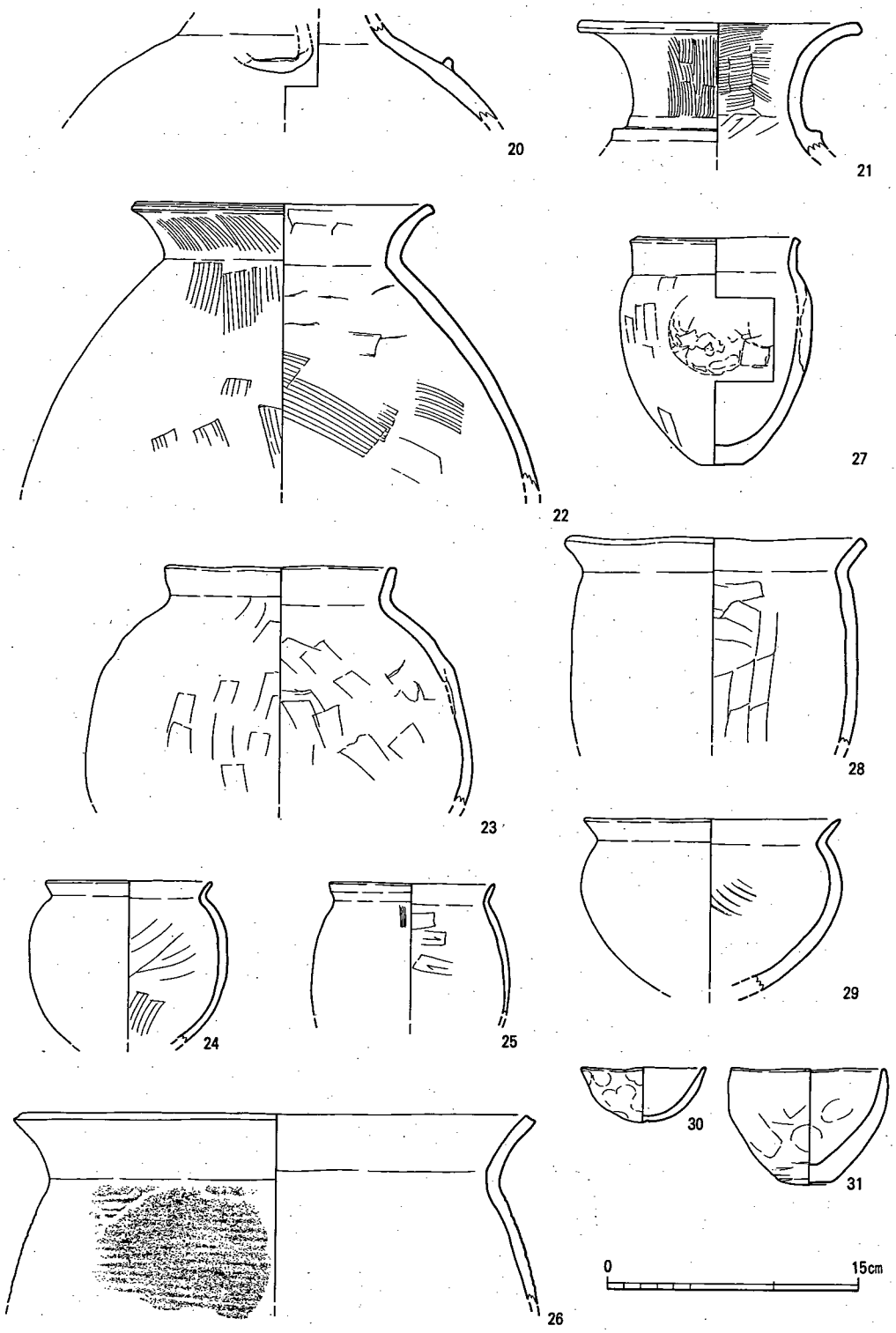
Ⅰ区上層から出土した。残存長1cm、最大幅0.6cm、厚さ0.3cmほどの小さなもので、部分的に淡緑色に発色するが概ね濃緑色を呈する、一見硬玉を思わせるものである。横断面形は弧状を呈し、図で梨地とした部分以外は非常に磨滅して丸くなり、光沢を放っている。また、上端の欠損部は発掘時のもので、本来は小孔をもっていたと思われ、垂飾として利用されていたようである。管玉の再利用であろう。



第164図　2号溝状遺構出土遺物実測図1（Ⅰ区上層1）(1/4)



第165図　2号溝状遺構出土遺物実測図2（Ⅰ区上層2）(1/4)



第166図　2号溝状遺構出土遺物実測図3（Ⅰ区中層）(1/4)

鉄製品（図版107、第14図１・３・26）

いずれもＩ区中層とした地点から出土したものである。１は錆のために膨らんで形状がはっきりしないが、圭頭式の鉄鏃と思われるもの。残存長5.5cm、最大幅２cmを測る。３は切先を欠く鉄鏃。これも錆のために膨らみ、あるいは剥落欠損していて断面形状を図示していない。26も破損の甚だしい鉄製品で、錆びて膨らみ、剥落する。鉄鏃であろうか。

土器（図版107～130、第164図～第191図）

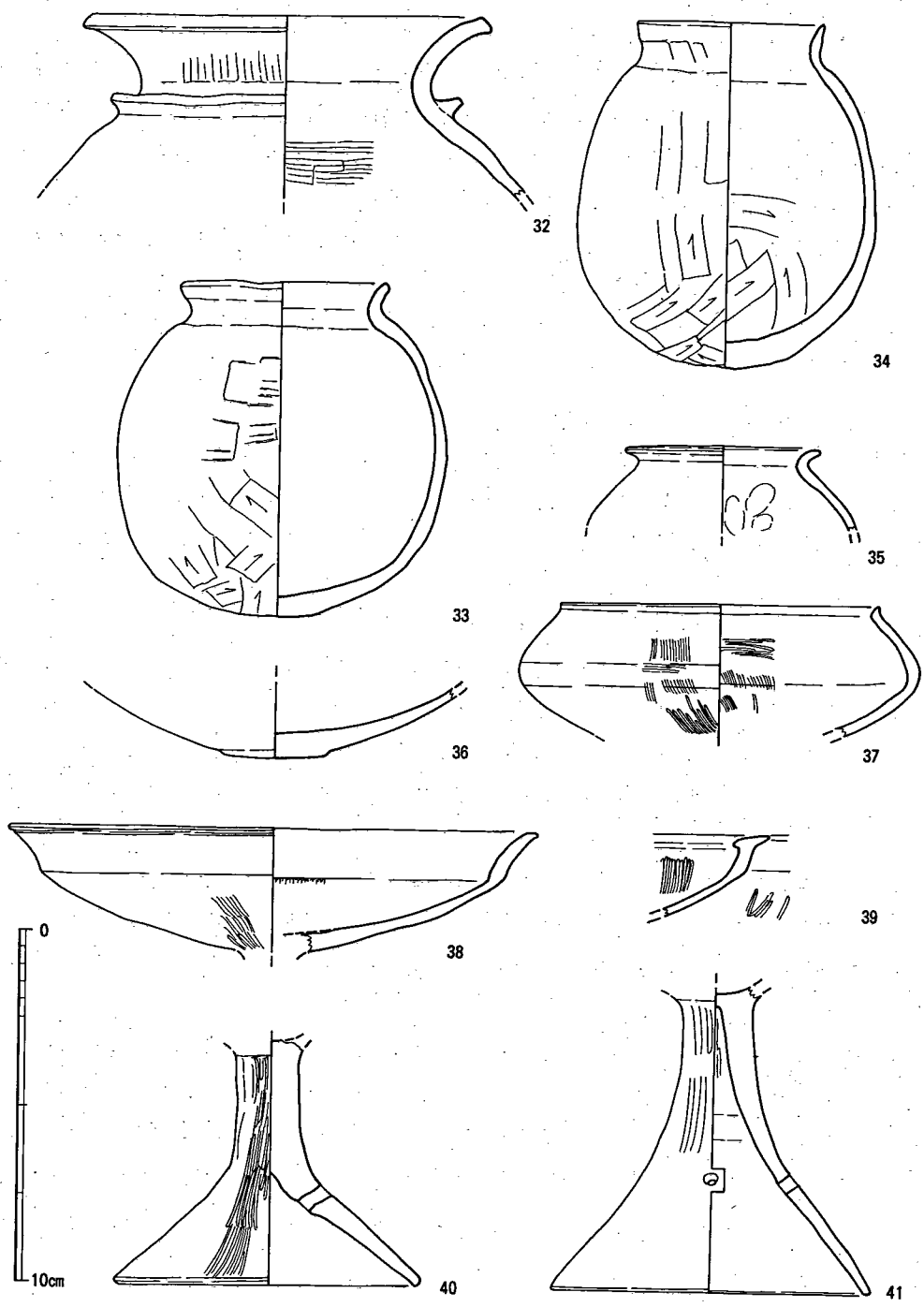
大量の土器が出土しており、到底すべての紹介はできないので、遺存状態のよいものを無作為に抽出している。器種的に偏りがある点は了解されたい。以下ではＩ区上層というように取り上げ時の注記にそって紹介する。一部、大型の土器などは割付の都合からまとめて図示していない。

Ｉ区上層（図版107・108、第164図1～第165図18）

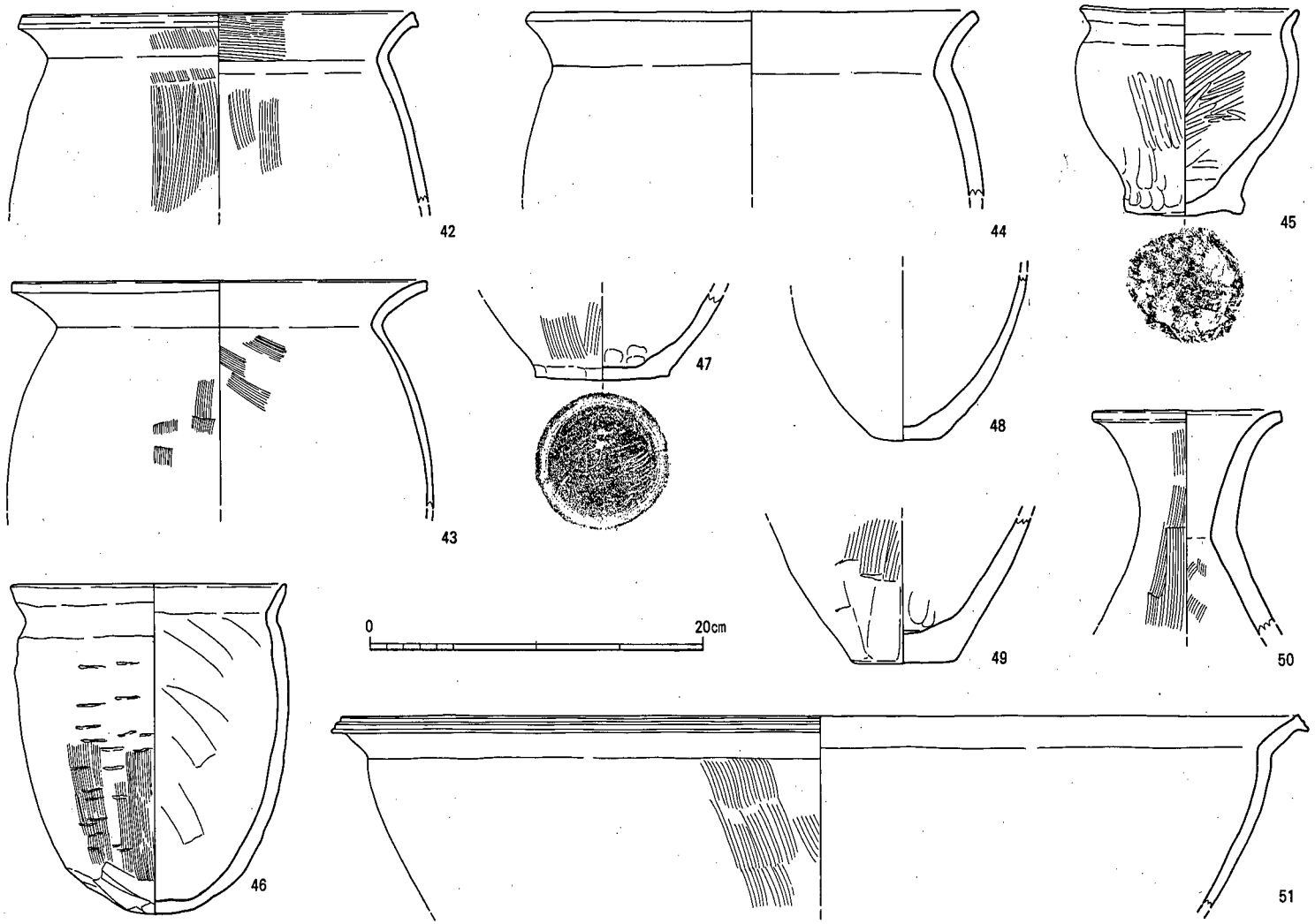
１は口縁部が浅く大きく開く小片。２は口縁部が短く外反するもので、ほぼ1/2が残存。よく焼ける。３も小片。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部の張りが弱い。４～６は二重口縁壺。４は図示部が完周する。口端部は強く外反して内傾する面を有し、屈曲部は大きく突出するが端部は丸い。５は1/2が残存。これも口端部を外方へ強くつまむ点は4に似る。屈曲部の突出が著しく、断面方形のタガ状となりその端面に浅い刻みを付す。なお、この刻みは完周していないようで、残存部の両端では観察できないことから全周のほぼ1/4に付されたもののようである。６は口端部を欠くが、屈曲部が水平に突出してタガ状となるもの。口縁部へは内彎しつつ移行するようである。その外面に２単位の櫛描波状文を刻むが、雑なものである。７は小片。８は図示部はほぼ全体が残存するが、口縁部をすべて欠く。肉厚のレンズ底となる。

９は筒形の器台で縦に半截したような状況で残る。これも肉厚で、手捏といった方がよい。10は抉りの入った器台で、ほぼ半分が残る。これは篦磨きあるいはごく幅広の浅い刷毛目で丁寧に調整される。外面は抉りの部分に対応するように図上端まで赤く焼けるが、内面は全体に赤変する。

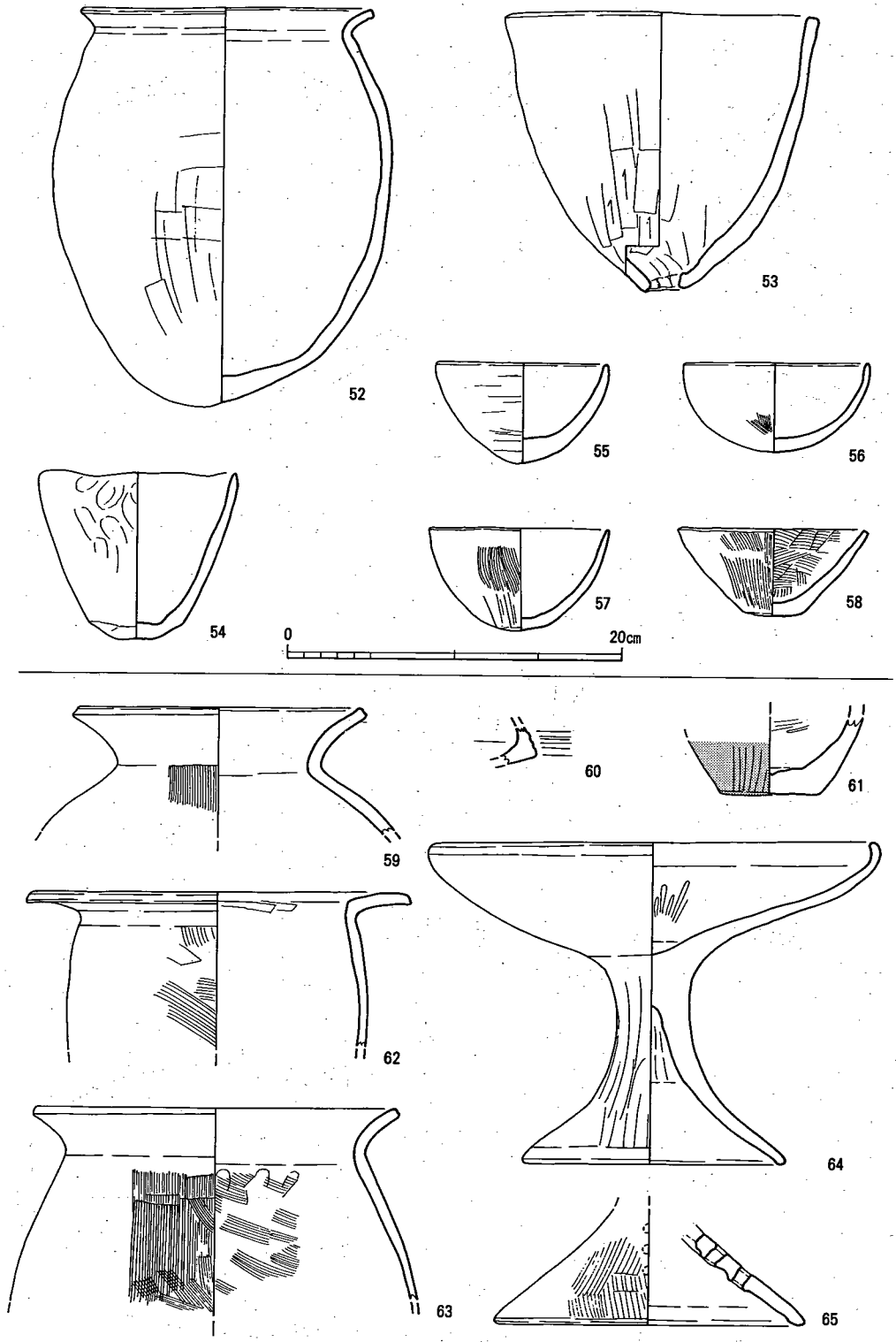
甕には口縁部が緩く外彎するもの、強く外彎するもの、外折して直線的にのびるものなどがあるが、いずれも体部の張りは弱い。また、口端部に明瞭な面を有するもの、丸く終わるものがそれぞれに存する。15では外面下部に篦削りが用いられ、17では粗い平行叩きが刻されている。19は「上中下層」の注記があるがここに図示しておく。上半部と底部が接合しえないが、同一個体と思われるもので、口端部が小さく垂下する特徴をもつ。底部内面では篦削りが顕著である。



第167図　2号溝状遺構出土遺物実測図4（Ⅰ区下層1）(1/4)



第168図　2号溝状遺構出土遺物実測図5（Ⅰ区下層2）(1/4)



第169図　2号溝状遺構出土遺物実測図6（Ⅰ区下層3、Ⅱ区上層）(1/4)

Ⅰ区中層（図版108・109、第166図20～第171図31）

20は器表が非常に荒れる小片で、傾きには自信がない。肩部に浮文を付すものであるが、形状は釣針のような形状になりそうである。21は口縁部が大きく開き、上端がほぼ水平となる。肩部の断面三角突帯はシャープに造作され、全体に丁寧につくられている、器面が赤褐色を呈することも意識的になされたものかも知れない。22はほぼ1/2が残存する。23は1/4が残る。短く直立する口縁部は不整なもので、体部は内外面を篦削りで調整する。24は頸部の1/4が残存するが、口縁部はほとんどを欠失しており、図示した部分が本来の形状を示すものかはっきりしない。体部内面は篦削りで仕上げるようである。25は小片。

26は口頸部が緩く外彎し、端部が面をもつもの。粗い平行叩きが残る。27は体部の張り、頸部の締まりが小さく、口縁部が直立するもので全体の3/4が残存する。体部外面の篦削りなども含めて丁寧につくられるが、体部中位が大きく剥離する。28は器表が荒れるが、体部内面は篦削り調整のようである。29は焼きの甘い土器で灰白色を呈し、器表が荒れるものの、造作は丁寧。体部外面は篦削りのようである。

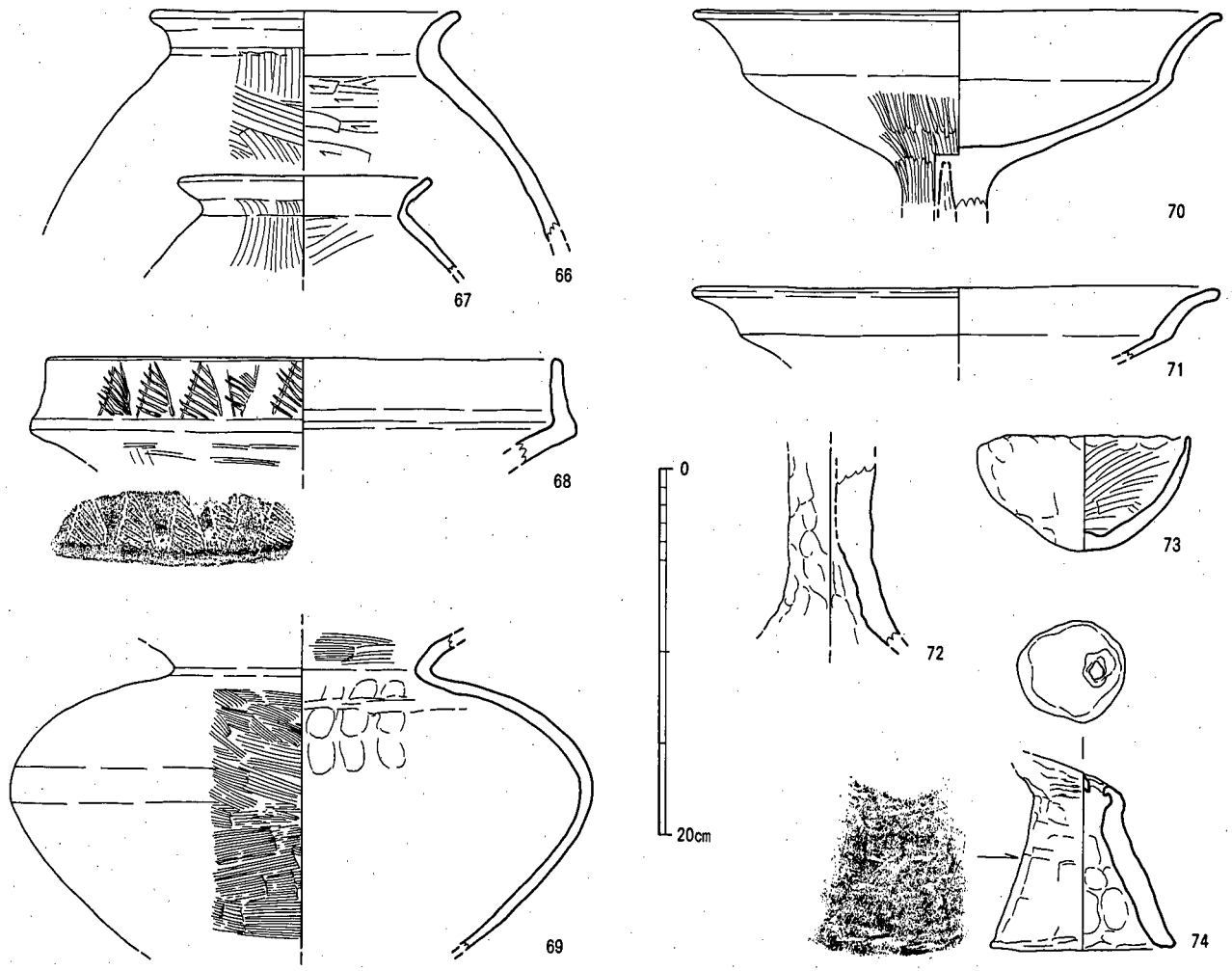
30はほぼ完存する手捏土器で、内面は丁寧に撫でて仕上げられる。口端部内外面の全周と外底面付近が薄く赤変しており、あるいは顔料が塗布されているのかも知れない。31は肉厚の土器で、外面に工具痕が残るが、刷毛目・篦削りともに痕跡は見えない。

Ⅰ区下層（図版109～111、第167図32～第169図58）

32は口縁部が大きく外彎し、肩部に断面台形の突帯をめぐらせるものであるが、この土器には本遺跡で通有な角閃石が見えず、逆に一般的でない雲母が多く含まれるなど、他所から持ち込まれたものである可能性が高い。33・34は球形に近い体部に外彎する短い口縁部が付くもので、いずれも雑なつくりである。33では体部外面を叩きの後に篦削りで、内面を撫でで仕上げる。34では叩きは見えないが、体部の内外面に篦削りを使用する。35は胎土・調整手法とも非常に丁寧。器表が磨滅するが、外面は縦方向の篦磨きで仕上げるようである。36は円板を貼り付けたような底部。これも残存部は丁寧に仕上げる。

37は椀形の杯部をもつ高杯で、口端部がつままれて内傾する面をもつ。最大径部の1/4が残存。38は屈曲部以上が短く外彎するもので、口端部が小さく水平な面をなす。屈曲部の稜線は比較的シャープ。39は小片であるが、口端部が小さな鋤先状となるもので、本遺跡では珍しい。40は非常に器肉の厚いもので、透孔は4方。脚端部は丸くなる。41は丈の高い中空脚部で、形状は40に似るが脚端部は面となって接地する。

42～44は径部内面に明瞭な稜を有するもので、いずれも端部に面をもつ。45は削り忘れたような底部を付すほぼ完形品。体部内面は篦磨き、外面は刷毛目とも篦削りともつかないような調整を行う。底部付近は指撫でが顕著に残る。46はほぼ1/2が残存。体部内面は弱い刷毛目で、外面は粗い叩きの後を刷毛目で仕上げるが、底部付近では指撫でが顕著に残る。



第170図　2号溝状遺構出土遺物実測図7（Ⅱ区中層1）(1/4)

47は外周を横撫でして整形した底部に刷毛目を付して平底とする。48は焼けて器表が荒れるが、外面は篦削りで調整するよう。

50は上半部がほぼ完周する。口端部が小さく外折する器台。

51は大型の鉢。口端部を肥厚して外傾する面をつくり、そこにシャープな凹線を2条刻む。胎土はほかの多くと変わらないが、調整は丁寧である。

52は1/2以上が残存する。口縁部は強く外反するが、短く端部も丸い。体部外面下半は平行叩きの後を削って仕上げ、上半では叩きの後で撫で消す。内面には部分的に篦削りが使用されるが主体は撫でのようである。

53は底部に焼成前の穿孔を行っている。口縁部は体部から連続して端面をもち、外面を篦削りで、内面では篦削りの後撫でるようである。

54は小片であり復原形状に不安がある。外面は手捏で整形するが、底部は篦削りを行う。55～57は丁寧につくられた小型土器。55では外面に工具痕が顕著に刻まれる。58は口縁部が波打つが、端部は断面方形とする。

Ⅱ区上層（図版111・112・128、第169図59～65・第197図243）

59は口端部を上方へ小さくつまむ。60は口縁部外面に2条の凹線文が残る小片である。61は外面に赤色塗採した平底の底部。外面は刷毛目調整。243は大型品で、口縁部の1/3ほどを欠く以外は図示部がほぼ完存する。口縁部はC字形に大きく開き、端部内面が上方へつままれる。体部の張りは弱く、肩部に粗雑な刻み目突帯をめぐらせる。調整は全体に刷毛目を使用している。

62は口縁部が水平に大きく開く変わった土器で、小片である。これも胎土に雲母を含み、搬入された可能性が強い。63は細かい刷毛目を多用する。

64は口縁部が内側へ巻き込む高杯で、口縁部の1/3が残存する。内彎の度合いは弱く、脚部は内彎気味に踏ん張る。65は3段に透孔を配する小片。

Ⅱ区中層（図版112、第170図66～第171図77）

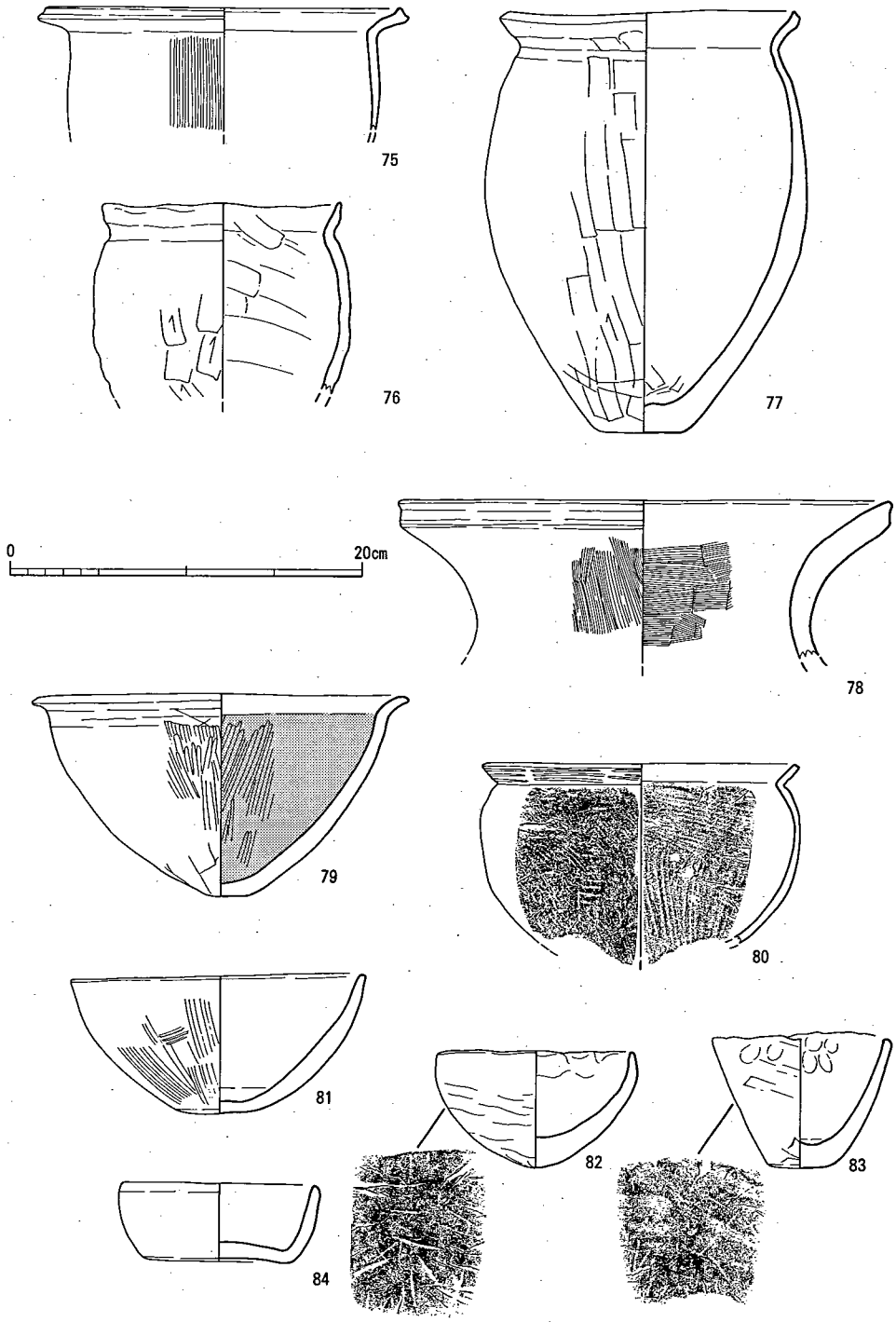
66・67は器形が似るが、器肉の厚さが随分異なる。66は体部内面を篦削りする。68は複線鋸歯文を線刻する二重口縁壺小片。意味が不明であるが、1単位のみ向きが異なる。69は非常に張りの強い体部片で、最大径部の1/2ほどが残る。

70は屈曲部が中位にあって、口縁部が高く外彎し、端部に水平な面をもつ。稜は甘い。71は口縁部が肉厚となって、端部が丸く終わるもの。屈曲部が上位に位置するようである。

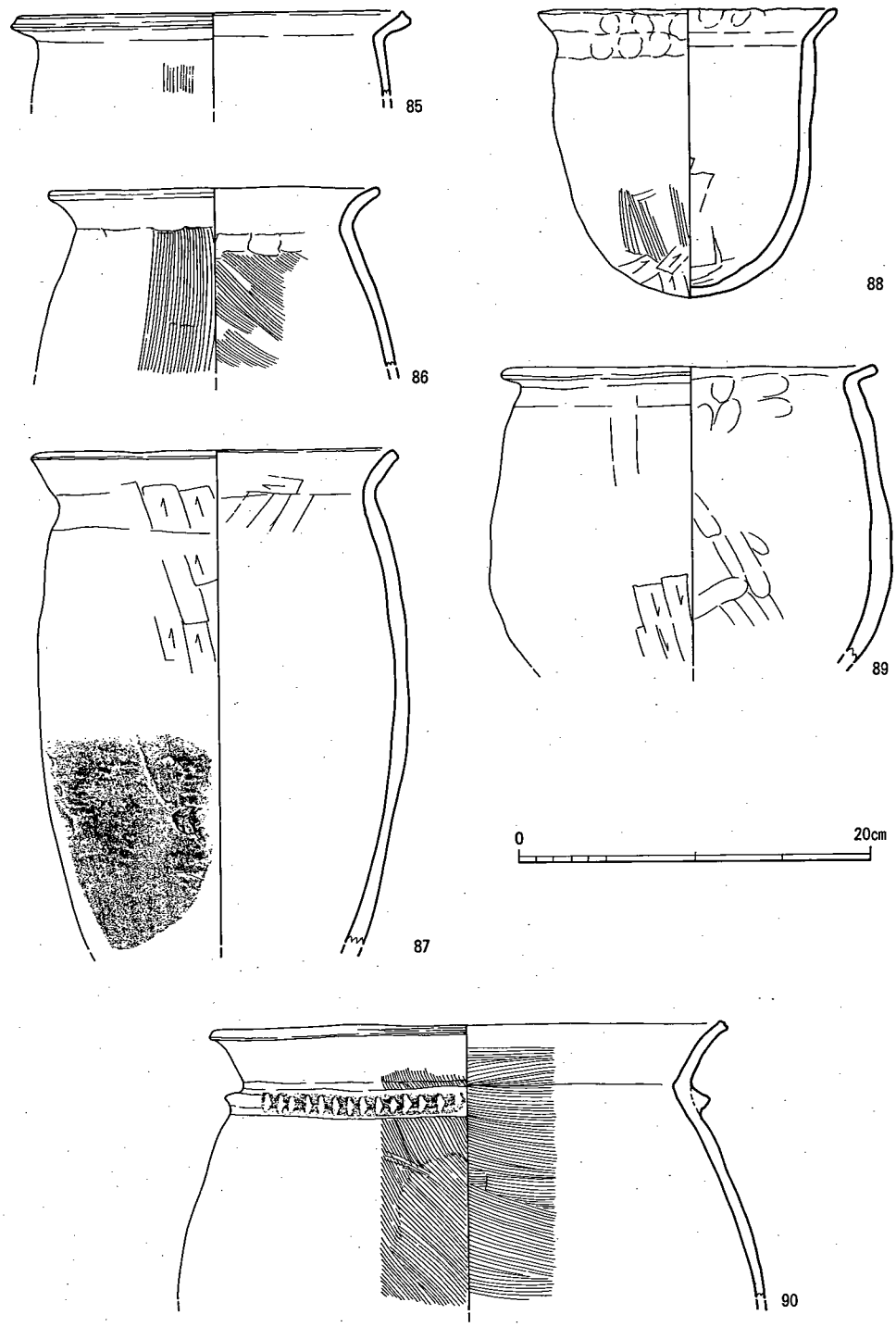
73は手捏の鉢で、3/4が残存。

72は手捏で、径が小さいが大部分が煤けることからみて器台であろう。74は外面に叩きが残り、突起部下方が焼けて赤くなる。

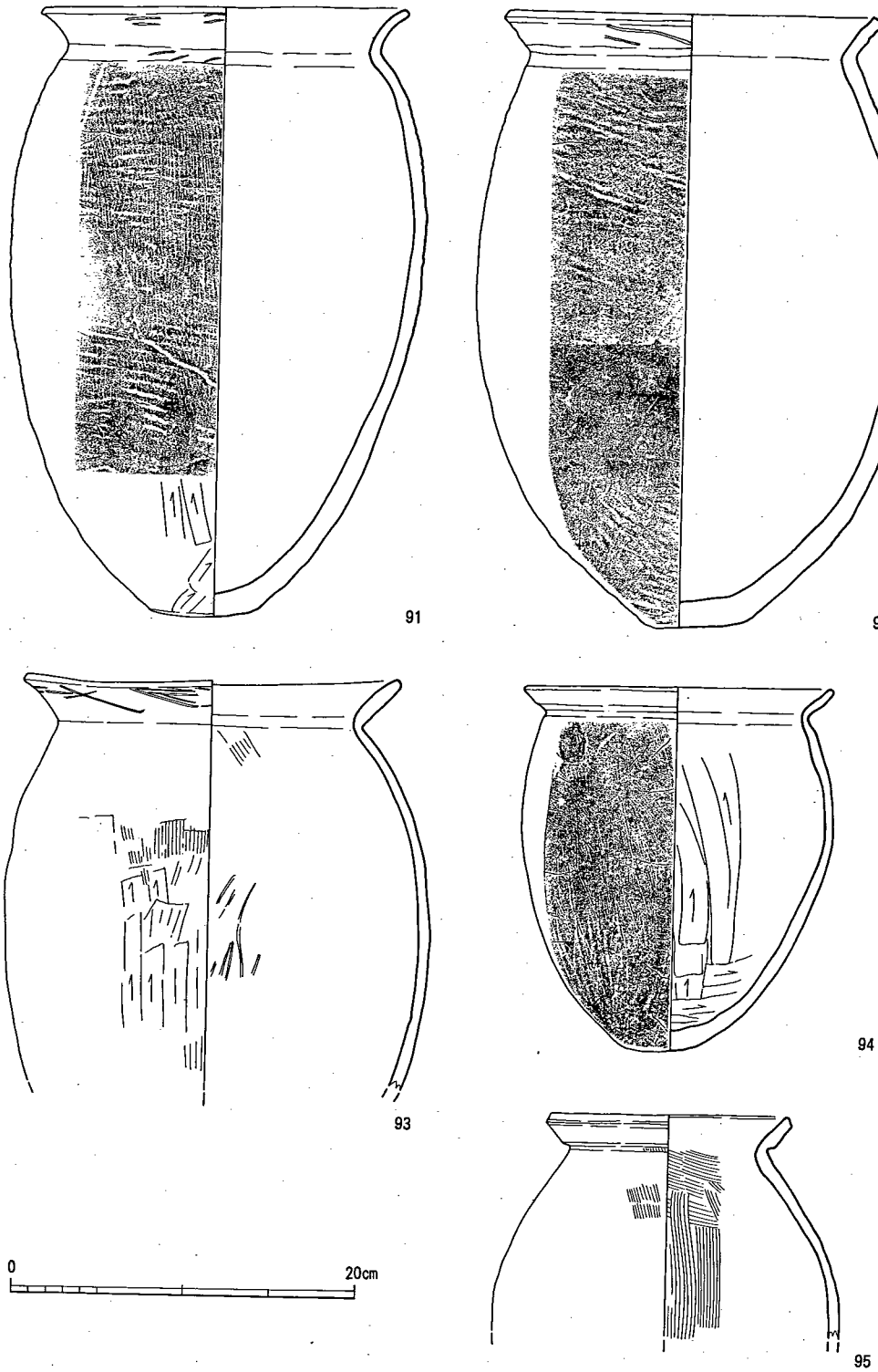
75はいわゆる跳ね上げ口縁の甕。口縁部は非常にシャープにつくられ、調整も丁寧である。



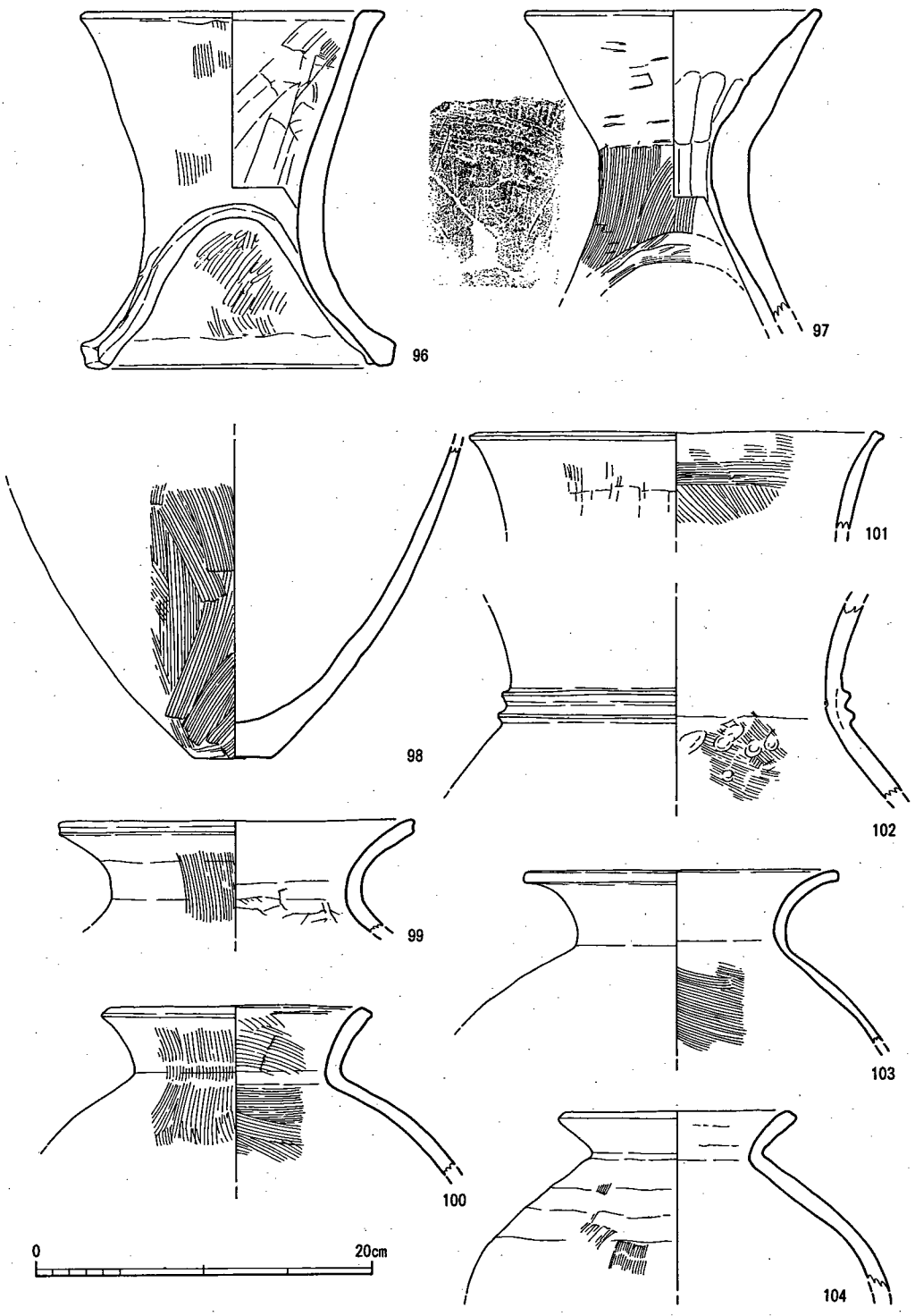
第171図　2号溝状遺構出土遺物実測図8（Ⅱ区中層2・下層1）(1/4)



第172図　2号溝状遺構出土遺物実測図9（Ⅱ区下層2）(1/4)



第173図　2号溝状遺構出土遺物実測図10（Ⅱ区下層3）(1/4)



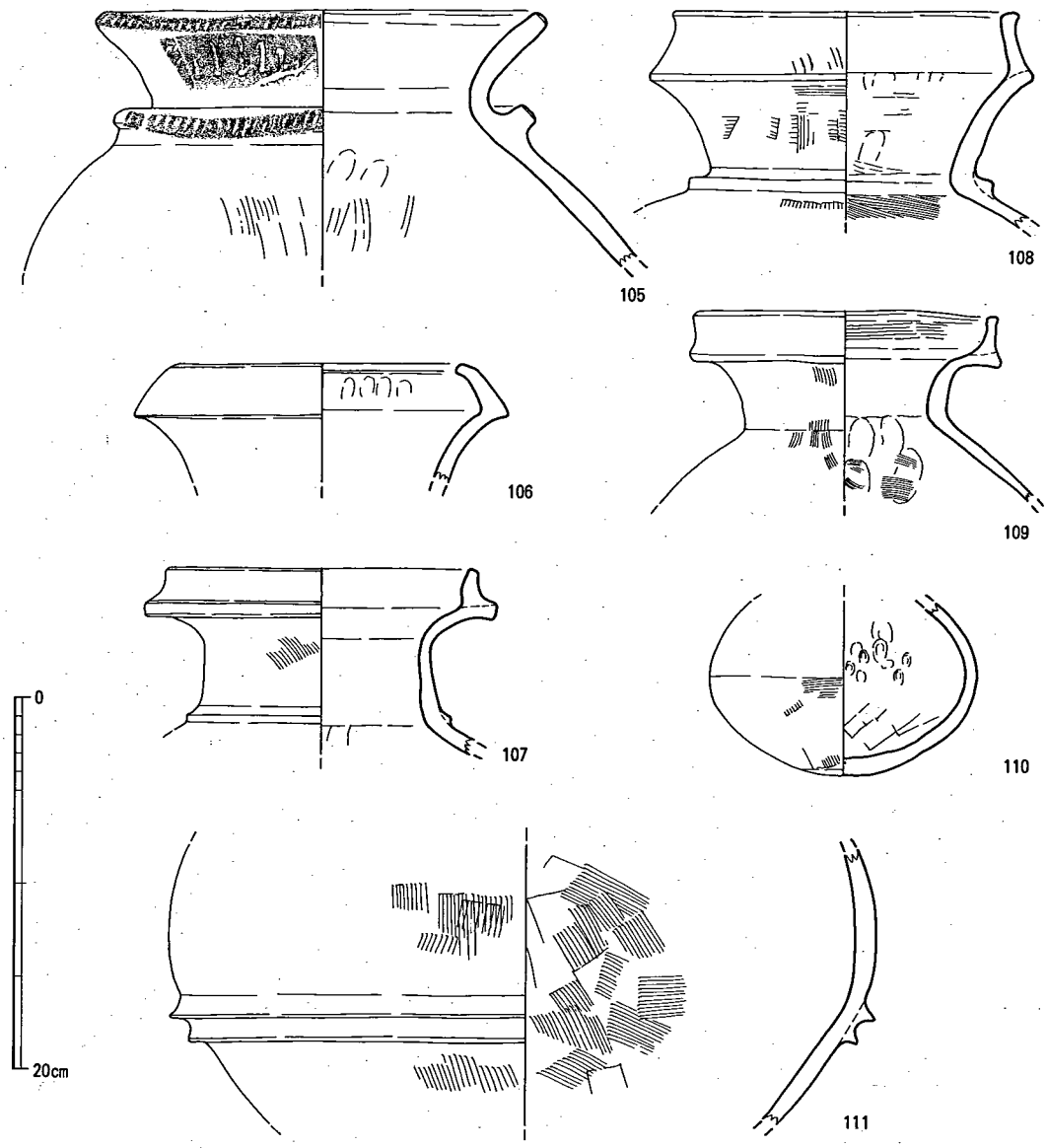
第174図　2号溝状遺構出土遺物実測図11（Ⅱ区下層4、Ⅲ区上層1）(1/4)

約1/4が残存。76は雑なつくりの土器で、内外面を篦削りで仕上げる。ほぼ1/3が残る。77は口端部が肥厚し、跳ね上げ気味となるが肉厚でやはり雑なつくりである。体部外面には弱い刷毛目が全面に残る。

Ⅱ区下層（図版112～114・128、第171図78～第173図98・第194図242）

78は小片。口端部を小さくつまむ。

79は完形。口縁部が緩く外彎し、底部は小さな平底となる。調整は全体に篦磨きを多用する。



第175図　2号溝状遺構出土遺物実測図12（Ⅲ区上層2）(1/4)

頸部下に×印が篦で刻されるが、非常に繊細な描線である。なお、内面全面に赤色顔料が付着しており、それについては本田光子氏の別稿を参照されたい。80は口縁部が小さく外折し、端部にシャープな面をもつ。口端部にいたる全体を叩きで調整した後に刷毛目で仕上げる。内面は刷毛目調整である。81は口縁部が直線的に丸く終わる。体部外面には叩きが観察できる。内面は丁寧に撫でる。82・83は手捏で、いずれも外面には工具痕を残す。肉厚で、口縁部が波打つ雑なもの。84は皿形の変わった土器で内底面には刷毛目が残る。

242は器高35cm、口径44cmほどの大型品でほぼ完存する。頸部に断面三角突帯を付し、口縁部は外彎して端面をもつ。底部はレンズ底。赤く焼かれた丁寧な土器である。

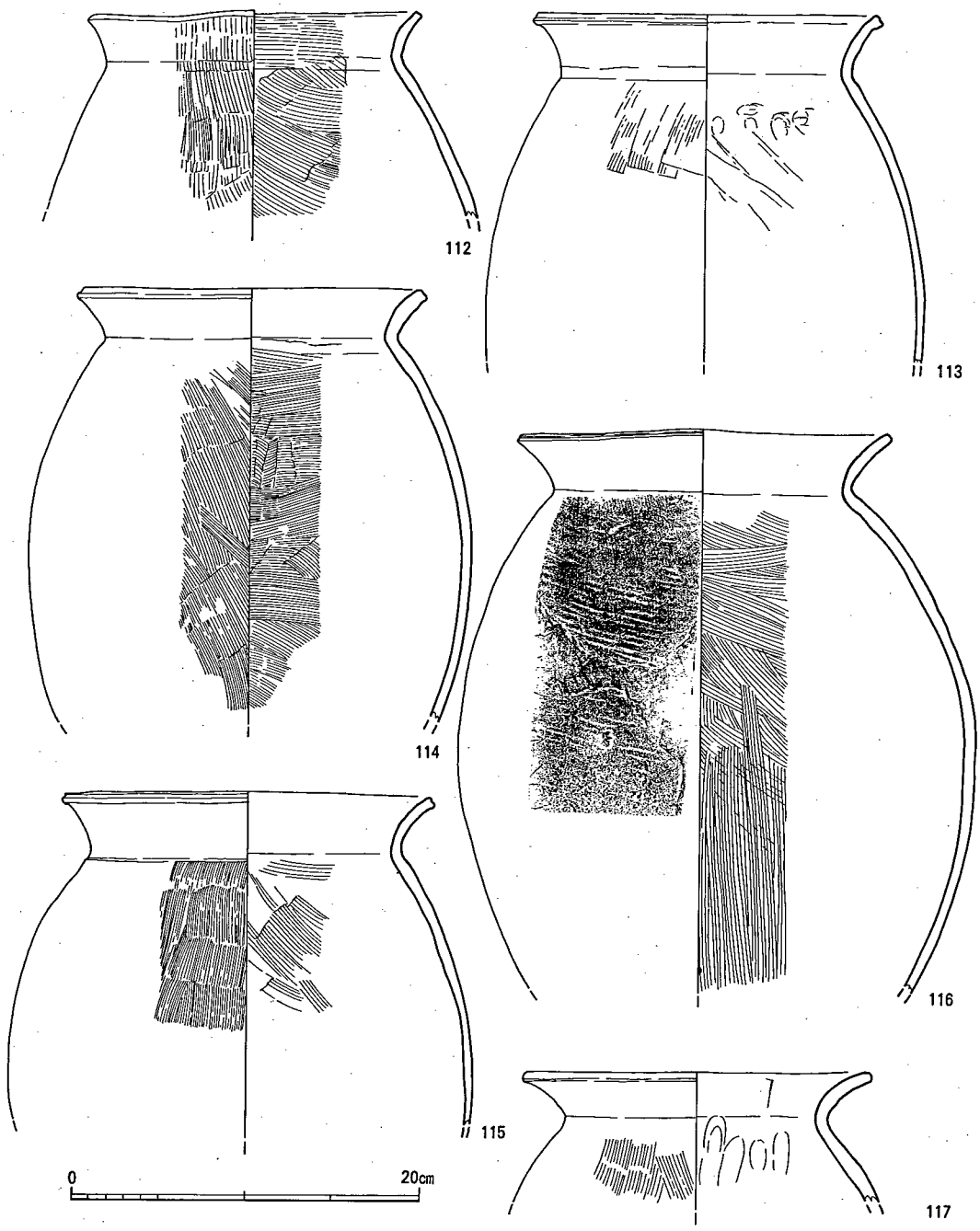
85は跳ね上げ口縁の小片。87は図の上半がほぼ完周する。口縁部は緩く反転し、端面をもつ。張りの弱い長胴となり、外面は雑な篦削りで仕上げるが、内面は丁寧に撫でるよう。88は口頸部を手捏で、体部外面は比較的細かい叩きを付した後に刷毛目を施して仕上げるが、底部付近のみは篦削りを使用する。内面の調整はよくわからない。89は口縁部が矮小化したもので、外面調整は下半を篦削りで、上半を撫でで行う。90は口端面、突帯、頸部内面の稜など細部のつくりがシャープである。突帯上に刻みを付すが、その断面が丸くなっている。91は外面を粗い叩きで調整し、底部付近は篦削りを、以上では刷毛目を重ねる。内面は弱い刷毛目のようである。92は底部付近と肩部付近に叩きを残し、その間を篦削りする。底部も叩いて平底化している。93・94も篦削りを使用する。93は口縁部外面などに工具で引っかいたような痕跡が残る。94は細かい叩きの上を下半は篦削りで、上半は刷毛目で覆う。外底面も削って平底化し、内面も丁寧に篦削りを施す。95は1/2が残存。

96は抉り部の端面およびその上方が赤変し、内面はあまり焼けていないようである。97も抉り部の上方が赤くなる。今回の報告にあたっては通例と異なって抉り部を下方に置いて掲載したが、使用に際してはこのような場合が多かったことを示す事例である。

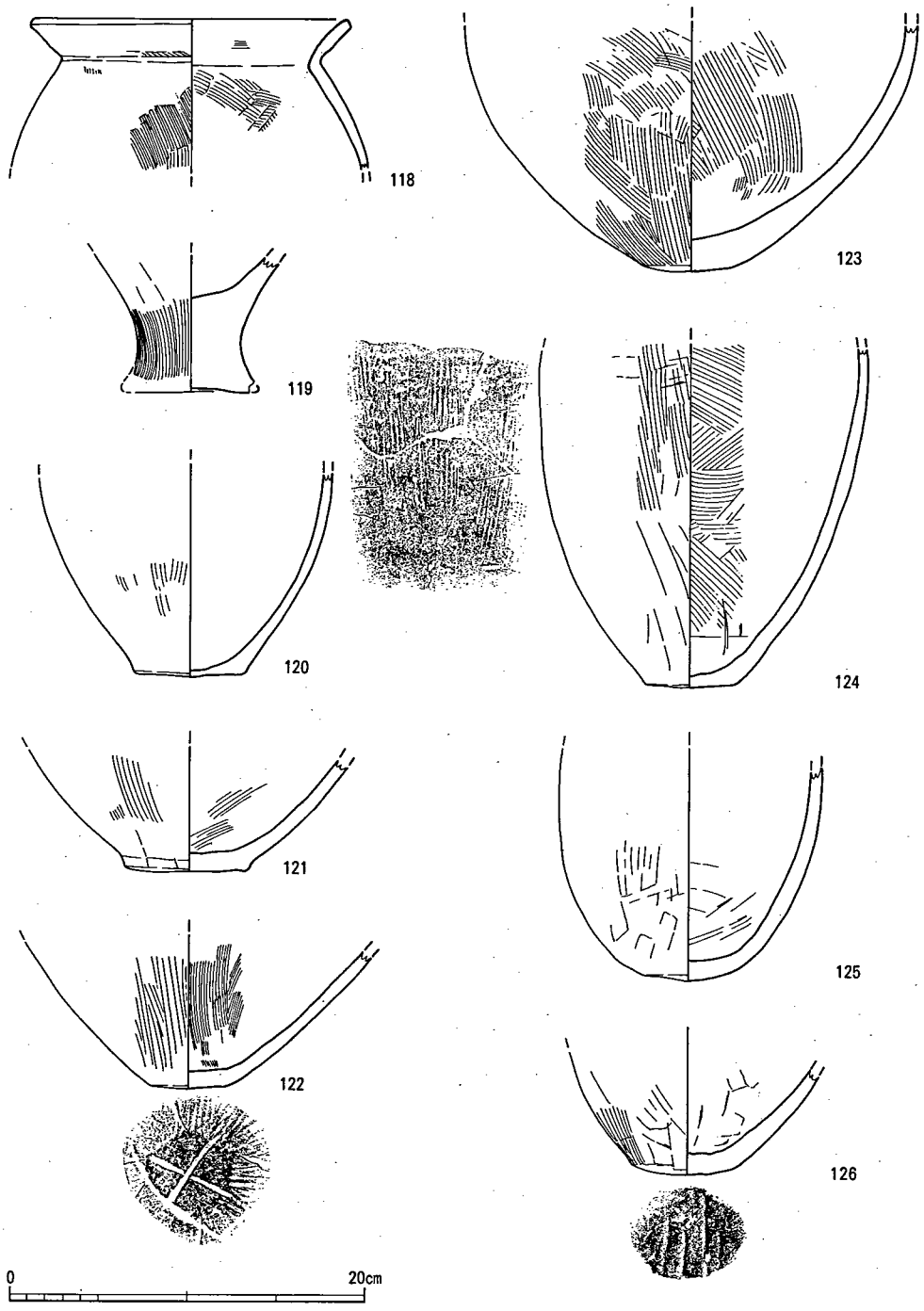
Ⅲ区上層（図版114～118・127・128、第174図99～第178図141・第192図234・第193図238・第195図245）

99は頸部がC字形に外彎するもので、前期末頃にも同様の器形があるが、これについてはつくりが雑であり、それとは違うようである。100は口端部に面をもち、3/4が残存する。101は小片で、一見脚部かとも思えたが傾きが小さいので口縁部としておく。自信がない。102は頸部に2条の断面三角突帯を付す小片。傾きも概ねこれくらいであろう。103は口縁部が強く外彎外反して端面をもつもの。器表が荒れる。104は小片。105は口縁部がほぼ完周する。頸部に断面方形となる甘い突帯を付し、口端面と突帯上に浅い刻みを付す。頸部外面に波状文を付すが完周せず、図示した範囲で終わる。原体は幅広く、篦磨きに使用するものと同じであろう。

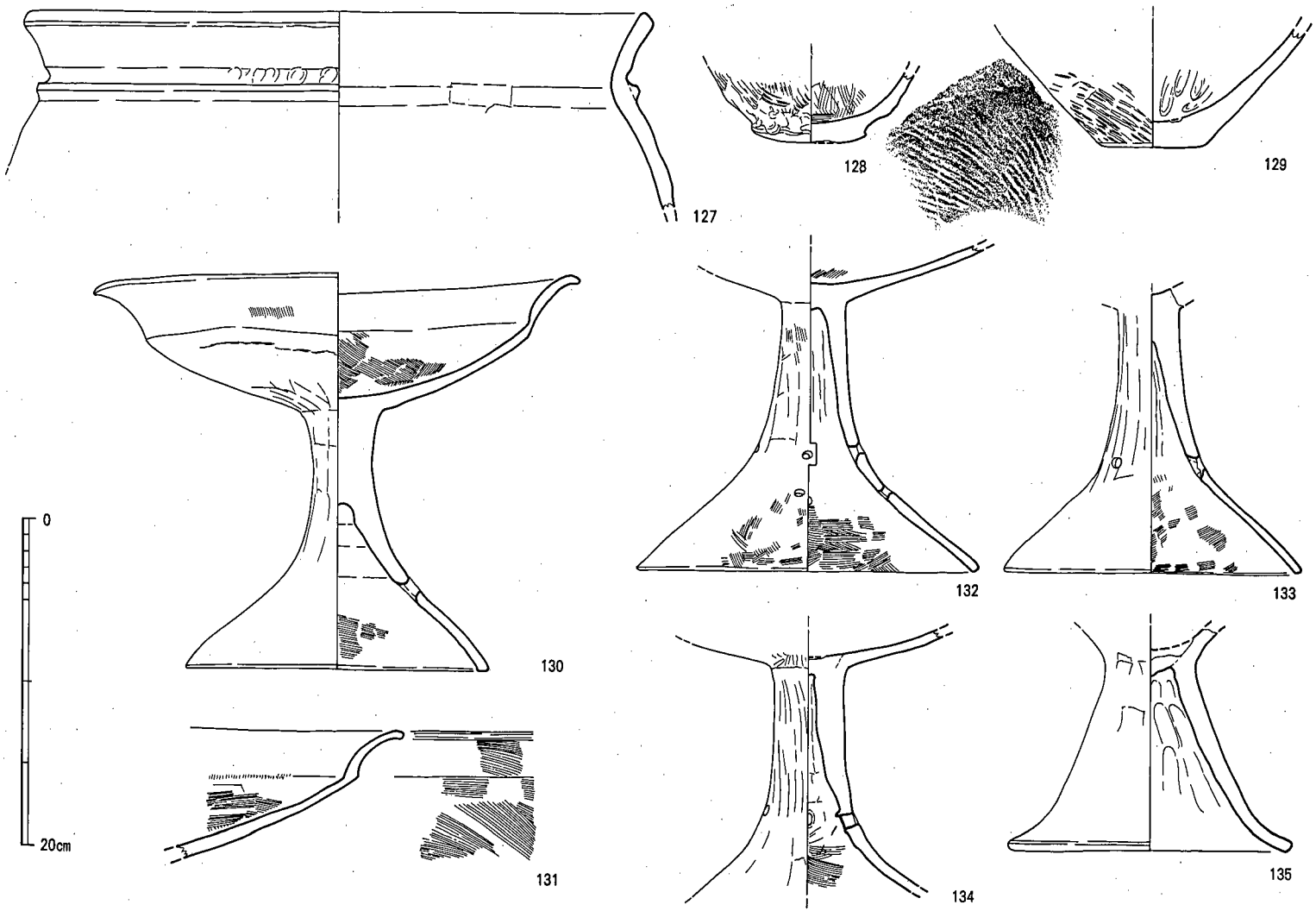
234は器高50cm弱の大型品で、多くの部分が残っている。口縁部は2段に外反するような形態となり端面をもつ。2条の断面台形の突帯は低く、形状も不整。調整は刷毛目を多用するが、



第176図　2号溝状遺構出土遺物実測図13（Ⅲ区上層3）(1/4)



第177図　2号溝状遺構出土遺物実測図14（Ⅲ区上層4）(1/4)



第178図　2号溝状遺構出土遺物実測図15（Ⅲ区上層５）(1/4)

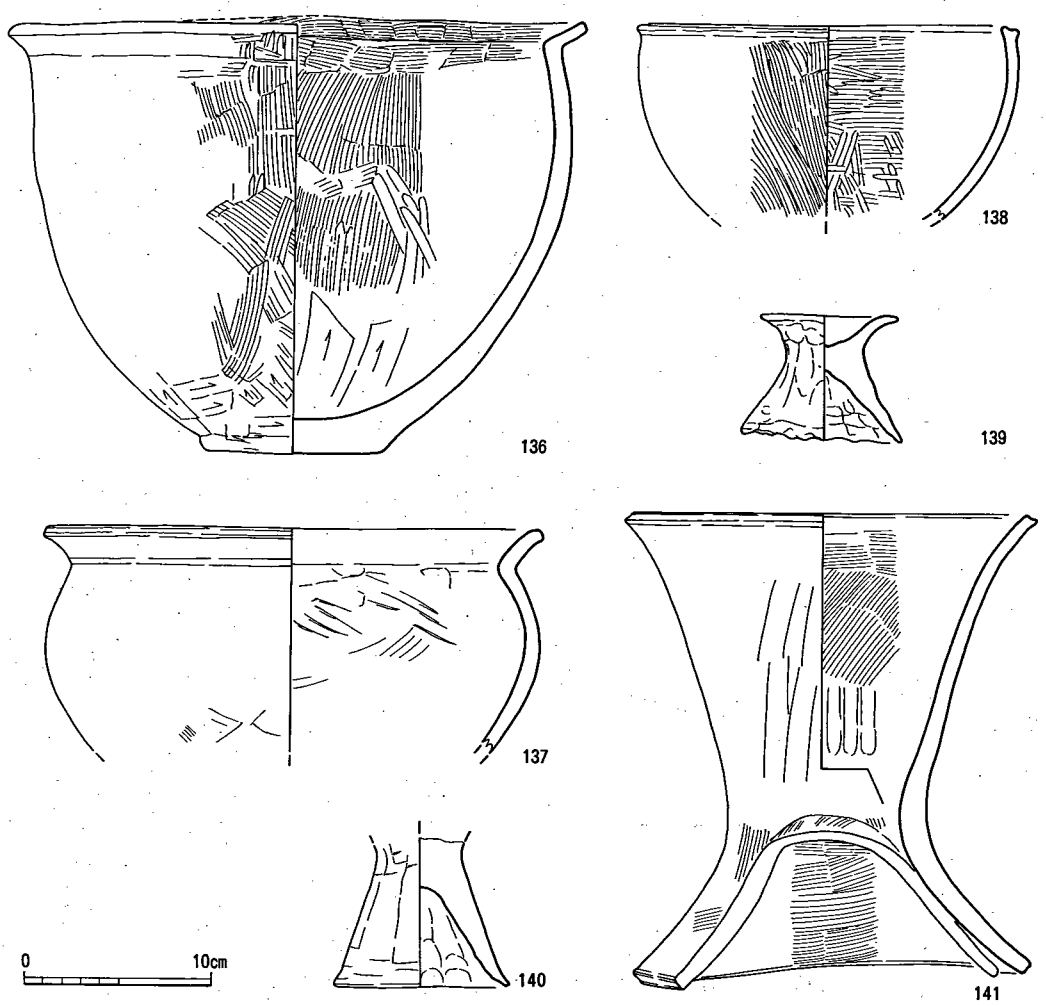
体部下端付近では篦削りを用いる。

106～109は四様の二重口縁壺。106は上半部が膨らみ、端部に内傾する面をもつ。107は屈曲部がタガ状に突出し、頸部にシャープな断面三角突帯を付すもの。108は上半が内彎して立ち上がり、端面をもつ。これも頸部に突帯を付す。109は上半部が短く直立するもの。胎土はいずれも同様の特徴をもち、特異なものではない。110はごく丁寧なつくりの小型壺。111は高く突出する突帯を2条付したもの。

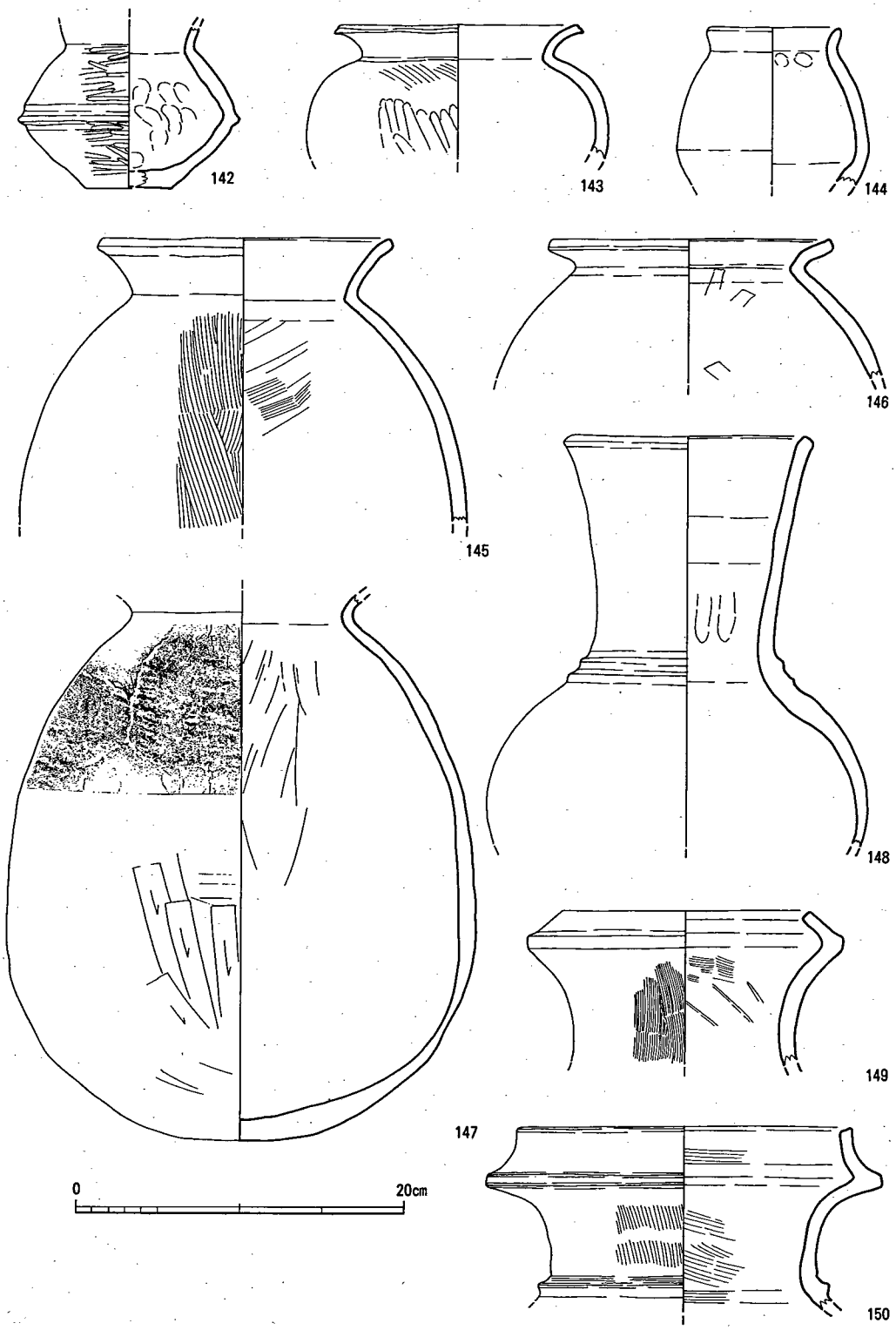
245も図示部分は完存する。壺の下半部で、突帯は波打つ雑なもの。欠損部は打ち欠いたものかも知れない。内面では突帯付近以下に全面に煤が付着する。

112～116は長胴の甕で、114を除いて頸部の屈折は弱い。112～115は端面を刻む。116の外面下半は叩きを刷毛目で消している。118は張りの強いものとなるようで、口縁部は強く外折し、外面が膨らみをもつ。刷毛目はごく細かい原体を使用、1/4が残存する。127は小片。

119～126、128・129の底部は図示部が完存する。119は中期初頭頃の肉厚の底部。122では外



第179図　2号溝状遺構出土遺物実測図16（Ⅲ区上層6）(1/4)



第180図　2号溝状遺構出土遺物実測図17（Ⅲ区中層１）(1/4)

底面に篦描の×印がある。124の外面は叩きを施した後に下半を篦削りで、以上を刷毛目で仕上げる。125・126も外底面周辺は篦削り調整。126では外底面に板状の圧痕が残る。128は叩きを残すいびつな底部。129も叩きを残すものだが、これには外底面まで叩きが施される丁寧につくられた土器である。238は残存器高50cmほどの大型品で、底部を欠失する以外は完存に近い。口縁部は鋭く外反し、外側へ膨らみをもって直行、端部が丸く終わる。頸部直下と体部中位に刻み目突帯を付すが、この形状は不整で、刻みも雑である。外面は口端部から底部付近まで粗い平行叩きをそのまま残し、底部付近では篦削りを行う。

130は口縁部がほぼ完存する。屈曲部が中位上方にり、口縁部が強く高く外彎して端部に水平に近い面をもつ。脚部も外彎気味に踏ん張り、やはり端面をもつ。透孔は3方。131も同様な器形だが、上半部が薄い。132・133は外彎気味に踏ん張る点では同様だが、中実・中空ということのほかに端部の形状が傾斜する面をもつあるいは丸くおさめるといった差がある。透孔は上下2段4方と3方である。135は柱状部が締まらないもので、脚部の形態も随分異なる。

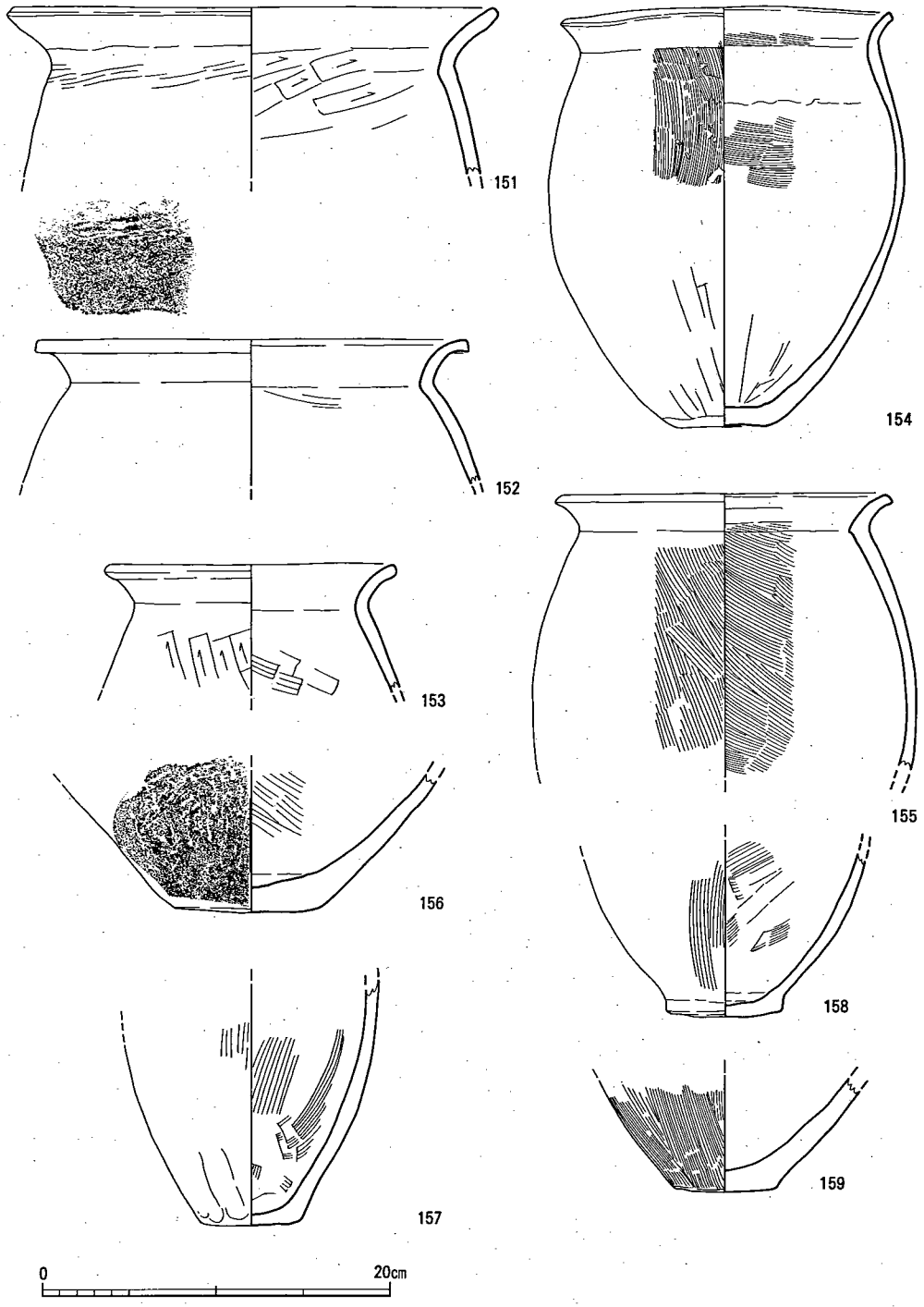
136は口縁部が強く外折するもので、肉厚の平底となる。体部下端および内定面付近は篦削りで仕上げる。137は体部の張る小片。138は口縁部が体部と連続するもので、端面をもつ。ほぼ1/3が残存し、内面は全体に篦磨きで、外面は丁寧な刷毛目で調整し、部分的に篦磨きを加えるようである。丁寧な土器。139は手捏の非常に雑な土器で、口縁部の遺存もはっきりしない。小型器台を模したもののようである。140は図示部が完存するが、本来の形状はわからない。手捏様の雑なもので、全体によく焼けている。

141は抉りの入る器台で、図上端以外はほぼ完存する。図上端の部分が若干焼けて変色する以外はほとんど火熱を受けてないようである。

Ⅲ区中層（図版118～120、第180図142～第182図166）

142は須玖式の小型壺で体部の1/3が残存。最大径部に断面三角形に近い突帯を付すもので、器表の遺存も良好。143は口縁部が強く外彎するもので、端部にシャープな面をもつ。体部外面下半は篦削りで仕上げるようである。1/2が残存。144は小片。145は口縁部がく字形に大きく外反し、頸部内面に稜線をもつもの。口端部は面となる。146も口縁部の外反が強い小片で、体部内面は篦削りで仕上げるようである。147は体部上半に叩きを残すもので、下半は篦削り調整。内面では砂粒の移動は見えない。148は肩部に2条の甘い断面三角突帯を付し、口頸部が直線的に高くのびて、外傾する端面をもつ。口頸部に比して体部は小さい。149は上半部が短く内傾し、端面をもつ。

151は頸部付近に叩きが残り、内面は篦削りで仕上げる。頸部内面の稜は甘い。152は口端部がさらに外彎するもので、丁寧につくられた小片。154は図上復原したもの。口縁部の外反は弱いが端面をもつ。体部内外面ともに上半は微細な刷毛目で、下半は篦削りで調整された丁寧なつくりの土器。155は152に似て、口縁部がさらに屈曲するもの。



第181図　2号溝状遺構出土遺物実測図18（Ⅲ区中層2）(1/4)

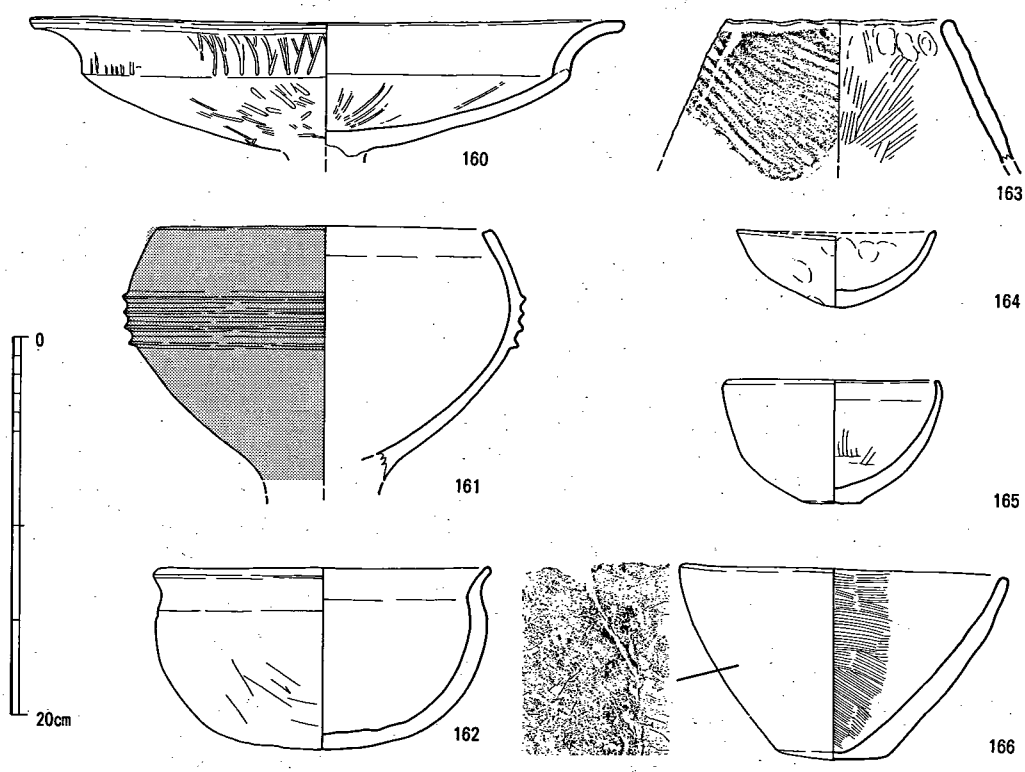
156～159の底部はほぼ完存する。156は叩きがはっきり見えないが、外面を篦削り調整する肉厚の底部。158では外底面に刷毛目を施して整形する。

160は1/3が残る。屈曲部は中位やや上方にあって上半部が強く外彎し、端部近くの上面が小さく窪む。161は脚部を欠損するが、体部のほぼ1/3が残存する赤色塗彩の土器。体部は内彎してそのまま口縁部となり、端部に内傾する面をもつ。最大径部にシャープな断面三角突帯を4条付す。顔料は濁ったような濃い赤色に発色する。162はほぼ完存する。口縁部が小さく外彎し、底部は丸底。底部付近の内外面が非常に荒れている。164は平面形が楕円形に近いが、1/4を残すだけなので通常に復原している。手捏。165は非常に丁寧につくられた土器。166は体部がほぼ直行する鉢で、端部は面をなす。外面はシワが多く手捏状であるが、内面は丁寧に刷毛目調整する。底部は篦削りで平滑化を図る。

Ⅲ区下層（図版120・121、第183図167～172）

167は丁寧につくられた土器で、胎土に雲母を含むことから搬入されたものと思われる。屈曲部は鋭く、口端部の面もシャープ。

168はほぼ完形の甕。口縁部は強く外彎外傾し、端面をもつ。体部内外面を丁寧に刷毛目調



第182図　2号溝状遺構出土遺物実測図19（Ⅲ区中層3）（1/4）

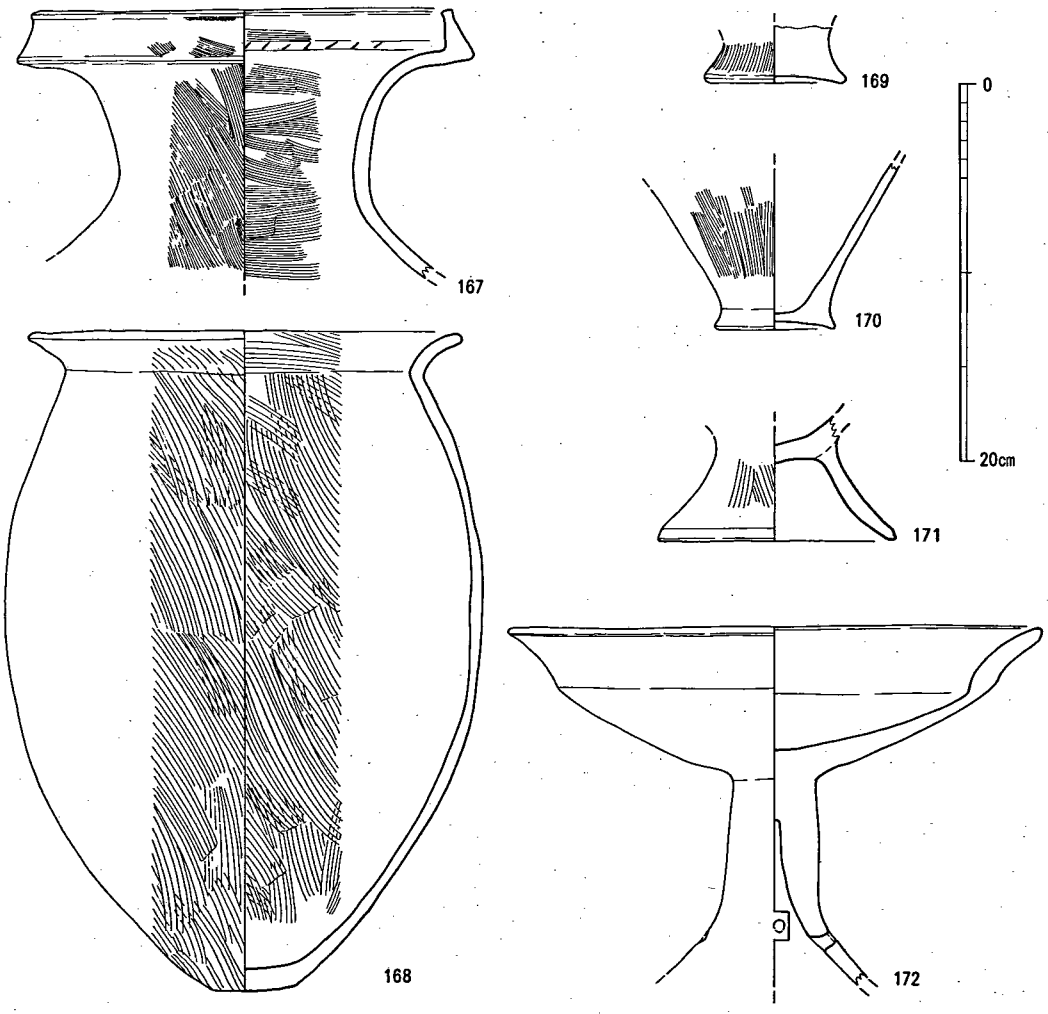
整するが、外面下半では叩きが観察できる。169は肉厚の、170は薄手となる底部片であるが、非常に丁寧につくられた土器で中期以前に属するものである。

171は脚部で、2/3ほどが残存する。火熱を受けて変色している。

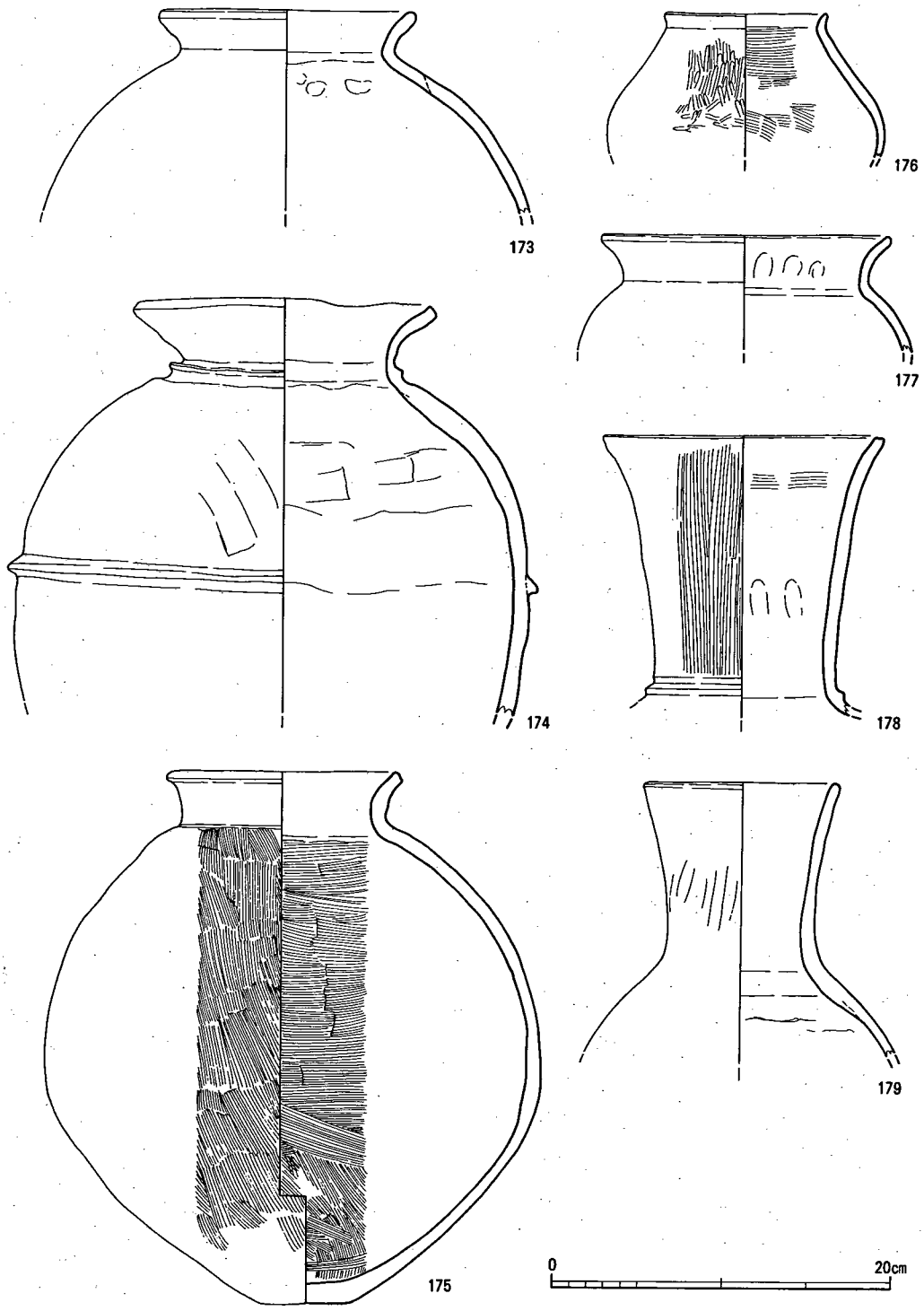
172の口縁部は完存に近いが脚裾を欠く。屈曲部は中位やや上方にあって弱い稜をもち、口縁部は非常に肉厚となり、丸く終わる。透孔は4方。

Ⅳ区上層（図版121～125・126、第184図173～第189図218・第193図237）

173は口縁部が短く強く外反するもの。器表が荒れるが、1/3ほどが残存する。174は肩部以上がほぼ残存する。口端部は内側へ小さくつまみ出され、頸部および最大径部に断面台形の突帯をめぐらせるが、形状は整ったものではない。体部外面では弱い篦削り状の痕跡が窺えるが

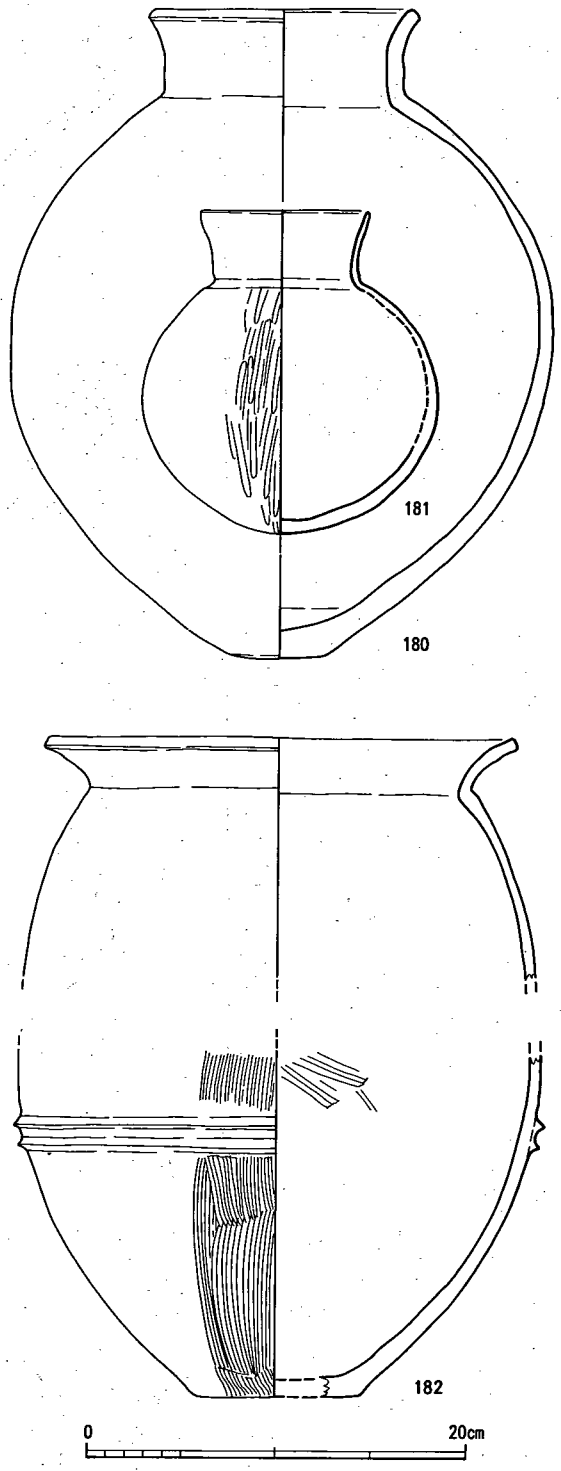


第183図　2号溝状遺構出土遺物実測図20（Ⅲ区下層）（1/4）

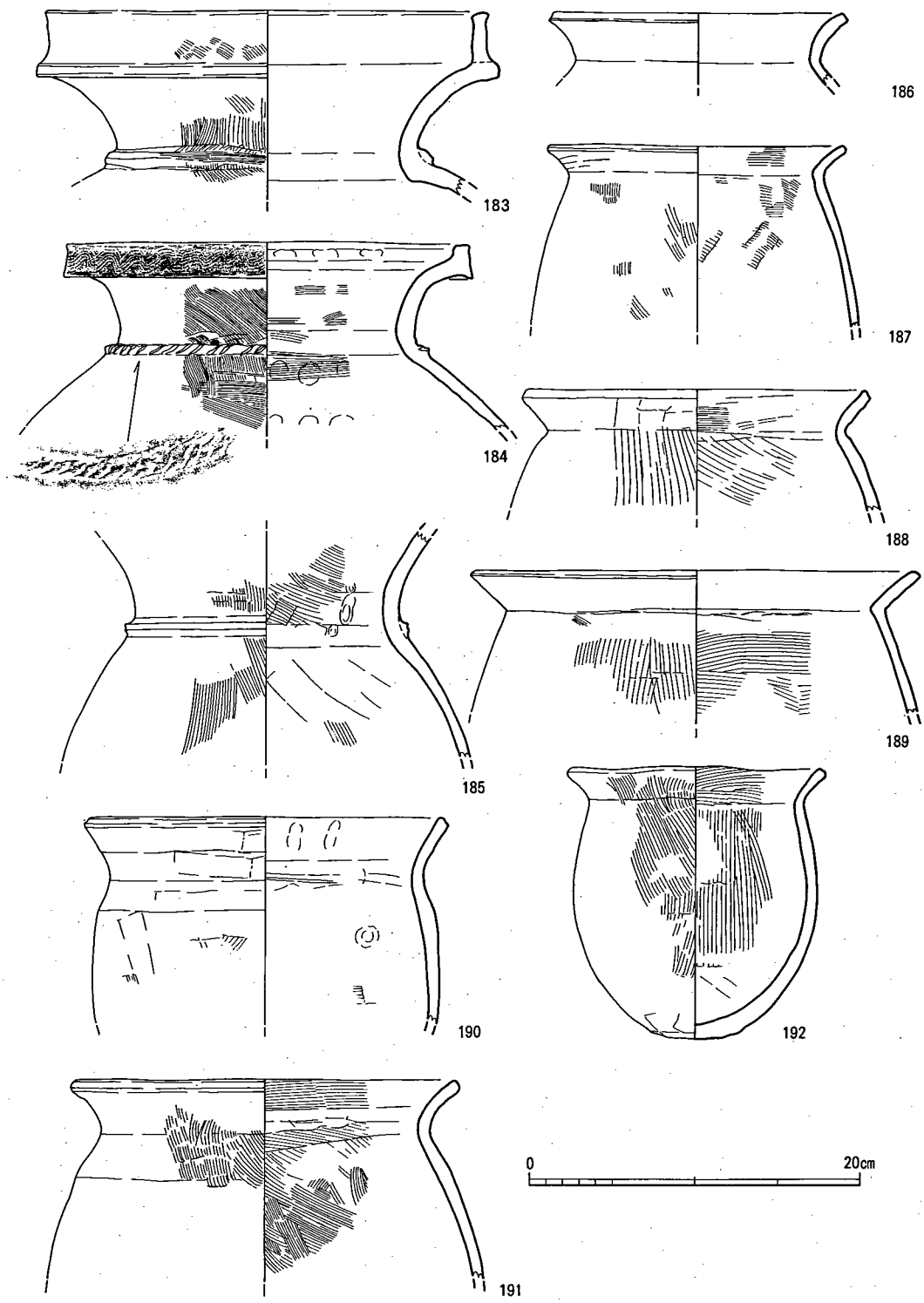


第184図　2号溝状遺構出土遺物実測図21（Ⅳ区上層1）(1/4)

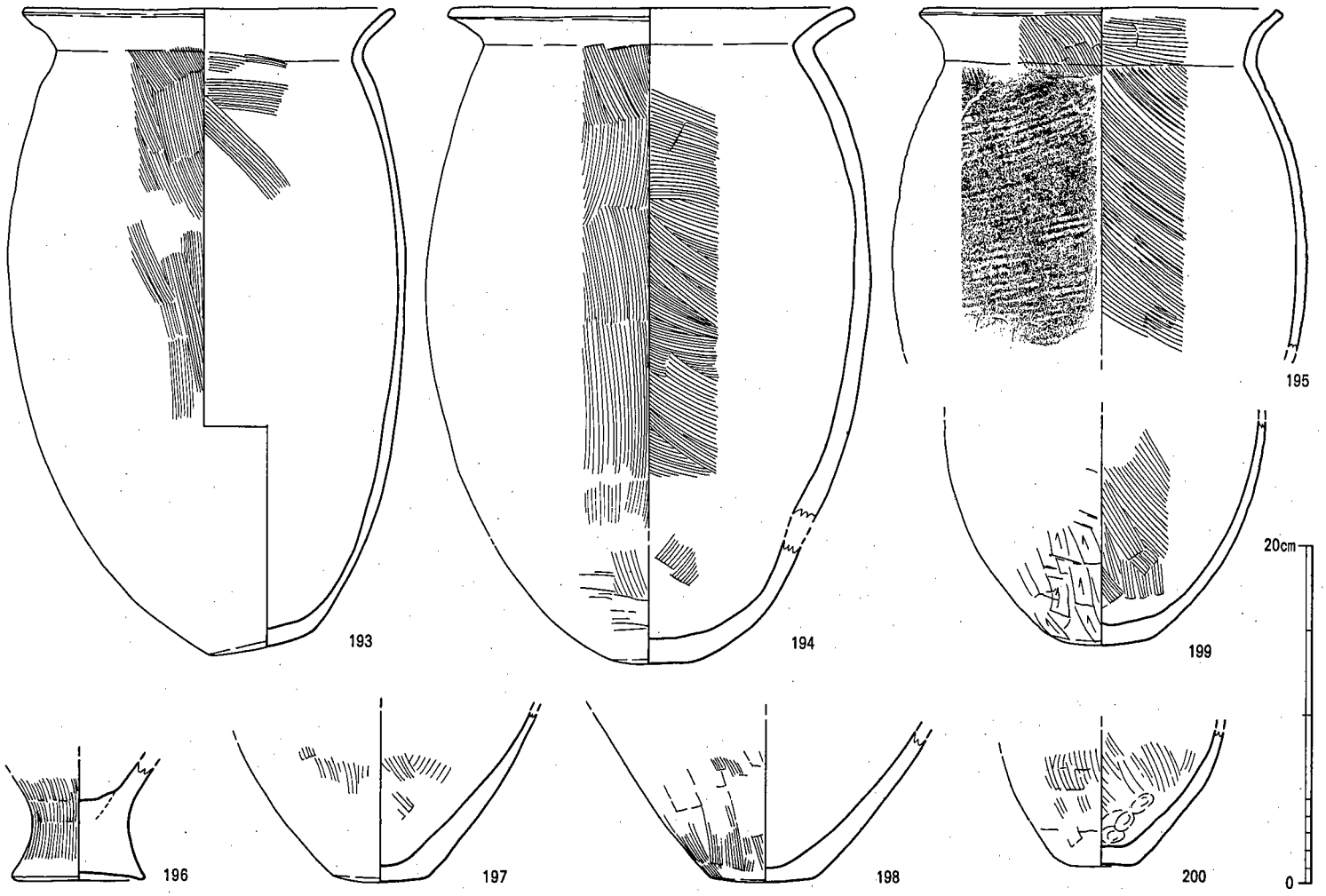
はっきりしない。器肉が厚く、調整も非常に粗雑である。175も肩部以上は完存し、以下も大部分が残存する。口縁部が不整となるが、器面調整には細密な刷毛目を使用する。176は1/2強が残存する特異な土器で、非常につくりがよい。口縁部は小さく外折し、張りのある体部へ続く。外面は全体に篦磨きで、内面は刷毛目で調整する。胎土には雲母・角閃石をともに含む。177も器表が荒れるが丁寧につくられた土器。178は突帯付近が完周する。口端部が小さく外反し、内側が匙面状に窪む。突帯はシャープ。179は1/2が残存。これは器表が荒れる。180は口縁部が直立して上端が小さく外反するもので、器表が荒れる。最大径部付近を境に上下が接合しえないものを図上復原した。口縁部は強く外彎外傾し、端部に面をもつ。刷毛目で調整するようである。181は体部が完存する。球形体部に直立に近い口縁部を付すもので、丁寧につくられた土器。183は口縁部が完存。口端部に面をもち、突帯は甘い。184は屈曲部以上が短く直立するもので、外面に整った櫛描波状文を加飾する。頸部突帯に刻まれた刻みも篦描で鋭い。185は頸部の1/4が残存するが、傾きには不安がある。突帯は断面台形でシャープにつくられ、体部内面は篦削りで調整される。237は器高67cmほどの大型品で、大部分が残存する。口縁部は外彎外反し、端部が上方へつまみ出される。肩部に断面三角形、体部中位付近に同台形の突帯を付すが、細部は甘い。底部は



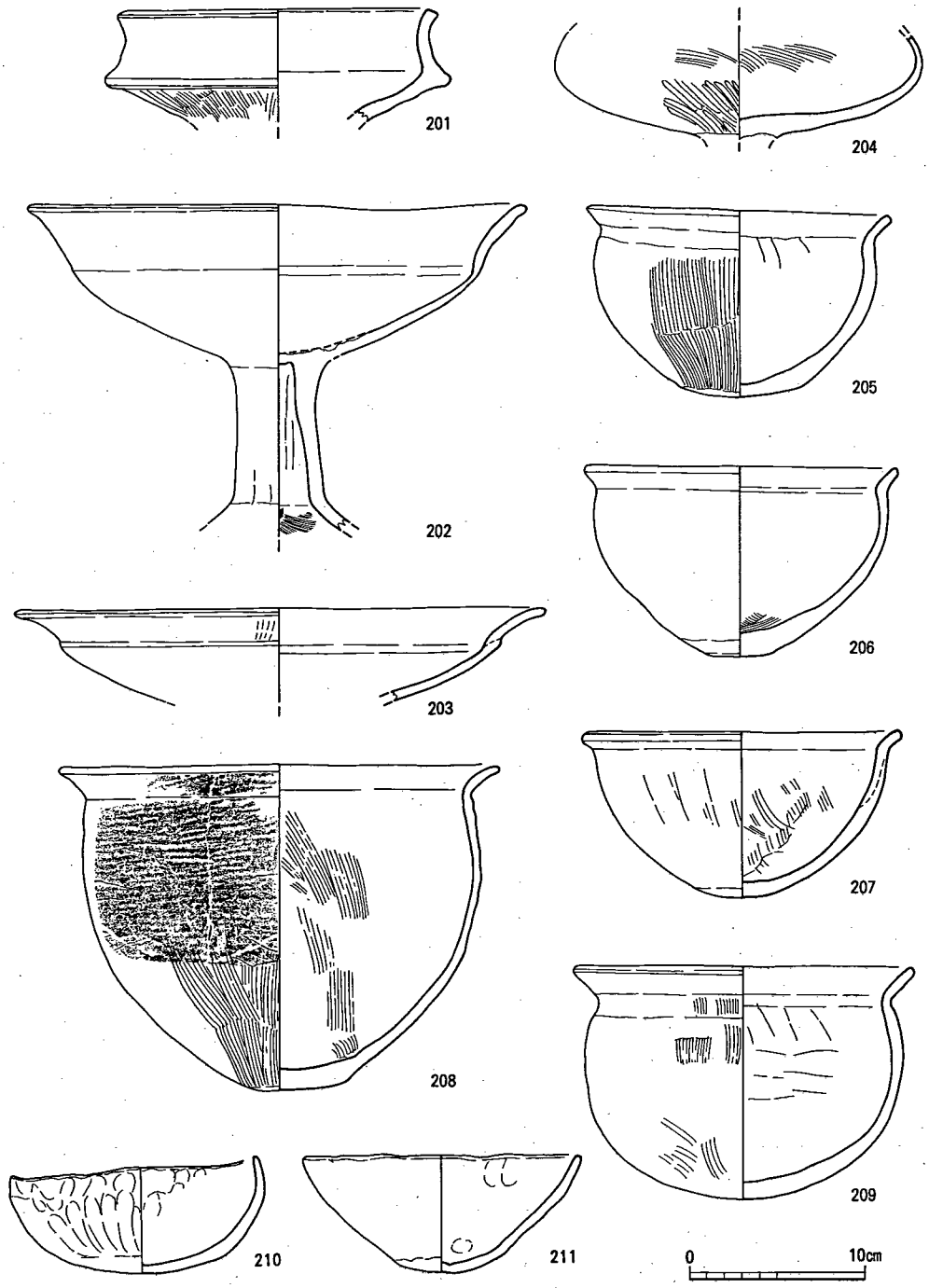
第185図　2号溝状遺構出土遺物実測図22
（Ⅳ区上層2）（1/4）



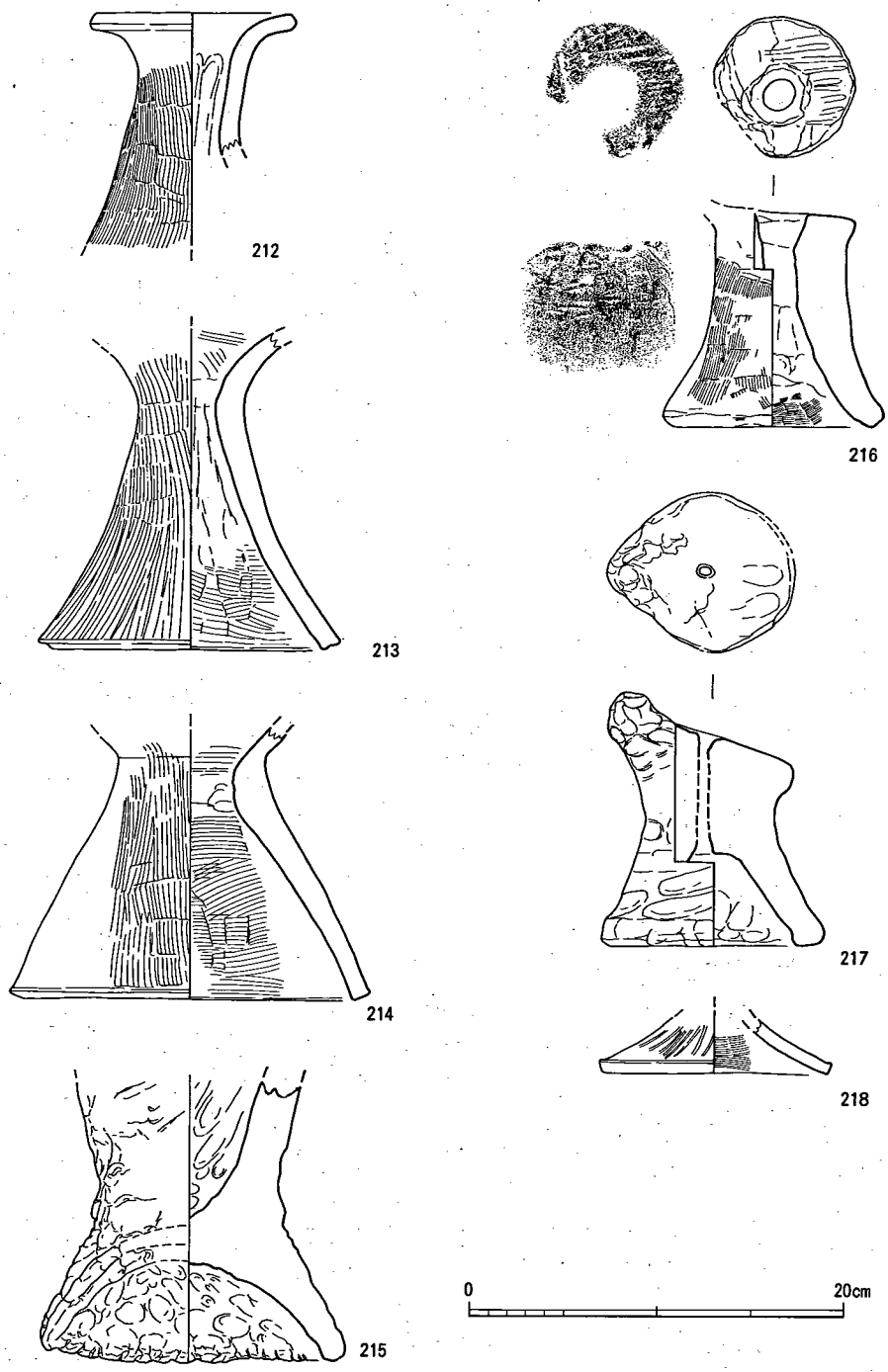
第186図　2号溝状遺構出土遺物実測図23（Ⅳ区上層３）(1/4)



第187図　2号溝状遺構出土遺物実測図24（Ⅳ区上層４）(1/4)



第188図　2号溝状遺構出土遺物実測図25（Ⅳ区上層５）(1/4)



第189図　2号溝状遺構出土遺物実測図26（Ⅳ区上層6）(1/4)

レンズ状となる。

182も図上復原した。突帯はシャープで、つくりは丁寧。186～189は口縁部が外折するもので、とくに189は頸部内面に鋭い稜をもつ。190～192は口縁部の外反が弱いもの。190は頸部に締まりがない。体部は内外面を篦削りで仕上げる。192は小片であるが全体は窺える。口縁部は波打ち、つくりが雑な土器である。内底面付近には篦削りが見える。

193～195は長胴の甕で、口縁形態は微妙に異なる。193は全体に細かい刷毛目で調整するが、外底面付近には叩きらしき痕跡がある。194も外底面に叩きあるいは工具で引っかいたような何ともいえない痕跡が残る。195は外面に粗い平行叩きと部分的な刷毛目がよく残る。196は中期の底部。199では外面に叩きとその後に施された篦削りが顕著な土器。

201は下端が締まることから高杯を想定したが、あるいは壺になるかも知れない。202は杯部の1/2が残る。屈曲部は中位やや上方にあって、上半が高く強く外反する。図下端に円孔の上端が見える。203は器表が荒れる小片。屈曲部はシャープ。204は椀形の杯部で、図示部の1/2が残る。これも雲母が多く混入し、角閃石を欠く異質な土器である。

205～207はよく似た形態の鉢。205は非常によく焼けていて内面が荒れる。206はつくりの丁寧な土器で、細密な刷毛目を施す。207は外面を篦削りで仕上げるようである。これもよく焼けており、内底面付近は灰白色、以上は赤色に変色する。208は口縁部まで叩きを施したもので、下半は丁寧に刷毛目調整する。209は体部内面は篦削りで丁寧に調整する。全体に整美な土器。210は口縁部が波打ち、外面は手捏、内面は丁寧に撫でる。211は器壁が薄く、器面が荒れる。

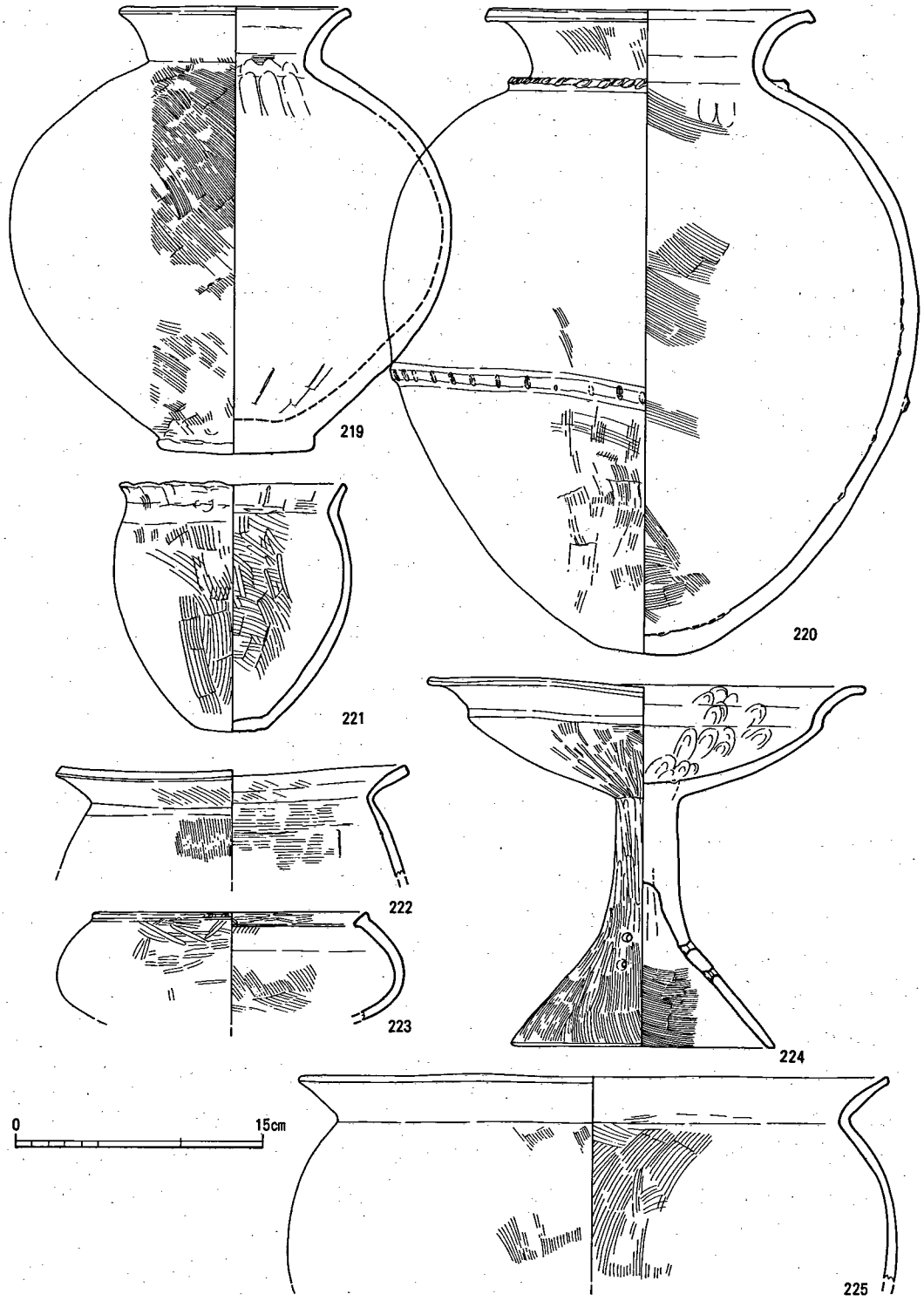
212・213は上位で強くくびれる器台。口縁部は強く外反し、上面は水平に近くなる。214は抉りを有するものであろう。調整は丁寧。215は手捏でつくられた抉り入りの器台。全面に指頭痕や指撫で痕が付される。これも図下半の内面および抉り上方の外面が煤ける。216・217は沓形の器台。216は頂部に叩きが観察でき、側面にも刷毛原体の当たりが無数にみられる丁寧なもの。217は全体に指撫でで調整する雑なもの。突起部側が煤け、反対側が灰黄色となる。

218は小型の脚部。丁寧なつくりである。

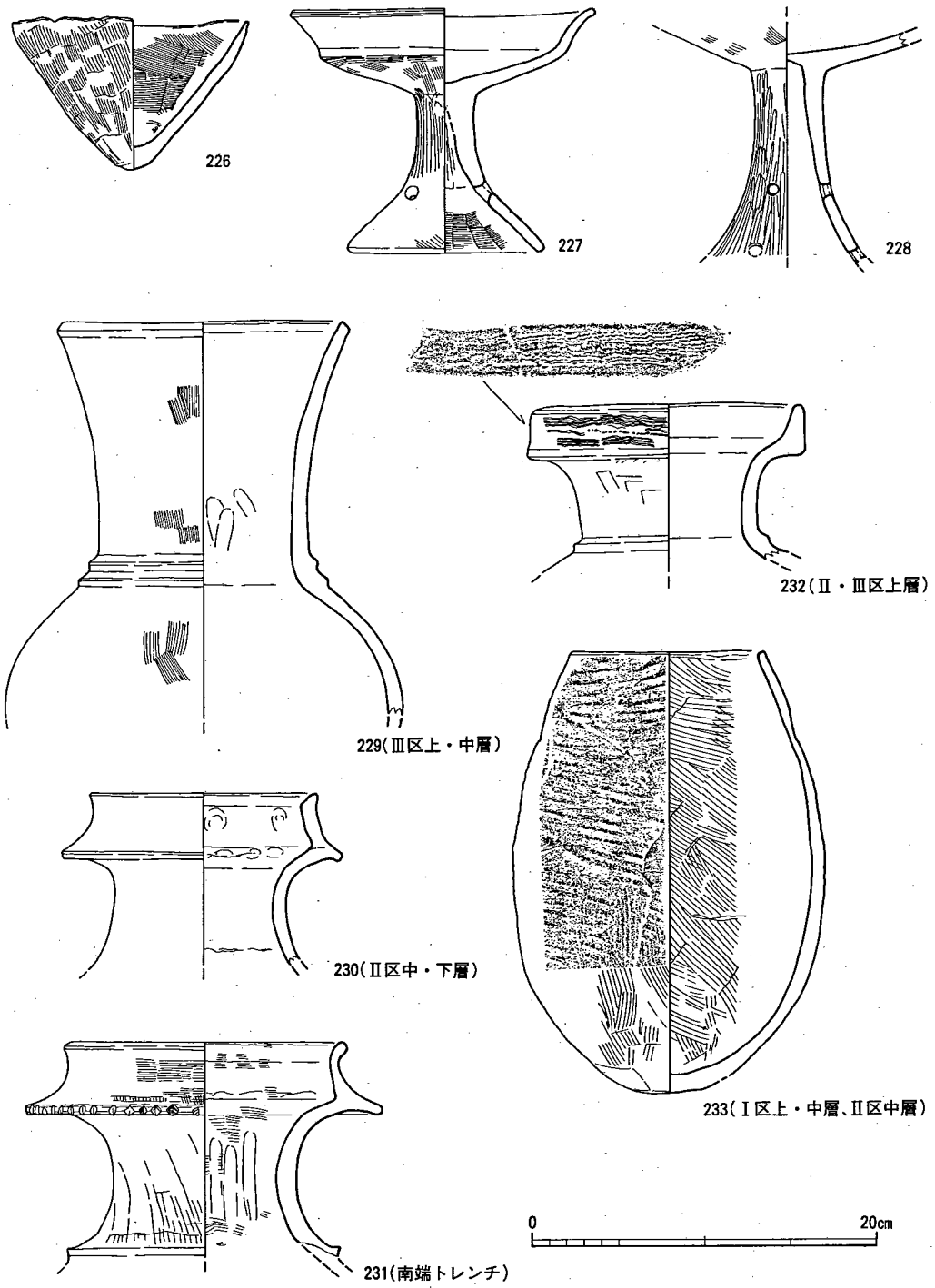
Ⅳ区中層　（図版125・126、第190図219～第191図227）

219は体部の一部を欠くが全体に良好に遺存する。口縁部は短く外反し、張りのある体部から肉厚の底部へ続く。底部は最終整形を忘れたかのような形状となる。調整は全体に細密な刷毛目を使用する。220も比較的良好に残るもので、つくりが丁寧である。口縁部は強く外彎し、端部が小さく垂下する。肩部と体部最大径部下方に断面台形の突帯を付すが、いずれも不整で磨滅する。刻みは刷毛目原体を使用する。

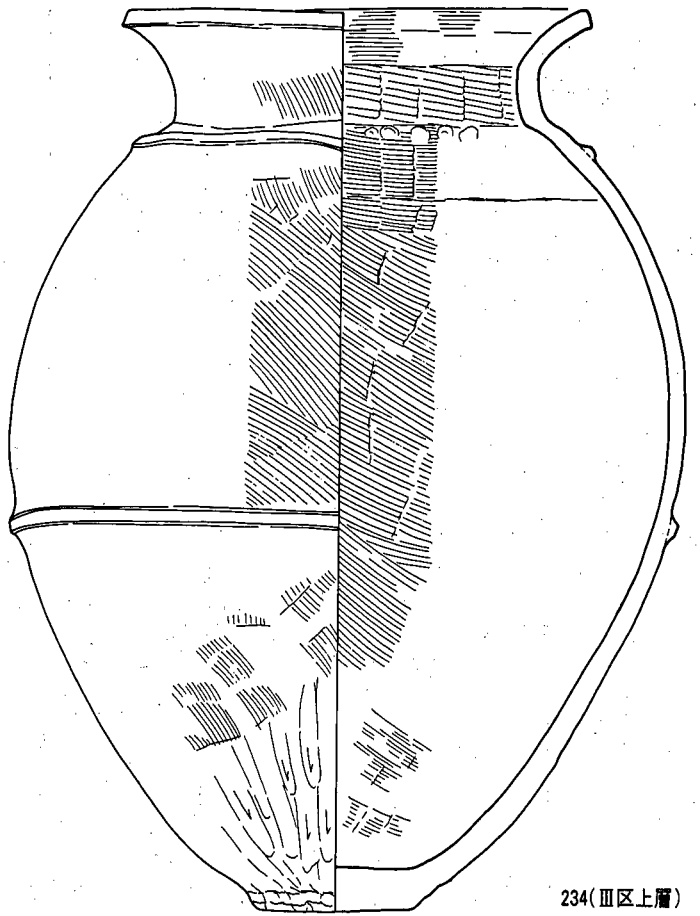
221は口縁部が波打つものの丁寧につくられた土器。体部内面には篦磨きも使用される。222は口縁部がシャープに外折し、端面を有するものでこれもつくりは丁寧。全体に焼けて赤変す



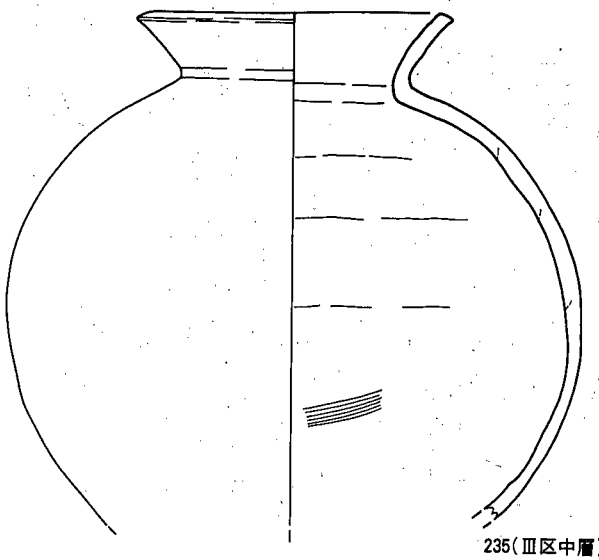
第190図　2号溝状遺構出土遺物実測図27（Ⅳ区中層１）(1/4)



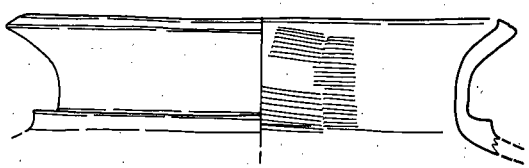
第191図　2号溝状遺構出土遺物実測図28（Ⅳ区中層2・Ⅴ区上層・その他の土器1）(1/4)



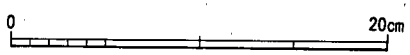
234(Ⅲ区上層)



235(Ⅲ区中層)



236(Ⅲ区)



第192図　2号溝状遺構出土遺物実測図29（その他の土器2）(1/4)

る。223は椀形高杯の小片。この胎土はほかと同様である。

224は口縁部と脚端部を半分以上欠くがほかは良好に残る。杯部の屈曲部は中位やや上方にあって、口縁部が強く外彎し、水平な面をつくる。屈曲部の稜はシャープ。透孔は2段3方に穿孔され、直線的にのびる脚端部が水平な面となる。227は小型品で完存する。杯部は中位で屈曲し、口縁部は高く強く外彎する。杯部底面には無数の小さな剥離がみられるが、調整は丁寧な篦磨きのようである。脚部は膨らみ気味に広がり、端面をもつ。透孔は3方。

225も丁寧につくられる。226は尖底をもつ小型品で、口縁部は直線的にのびて薄く終わる。口縁部は不整であるが、刷毛目調整は丁寧。

Ⅴ区上層（図版126、第191図228）

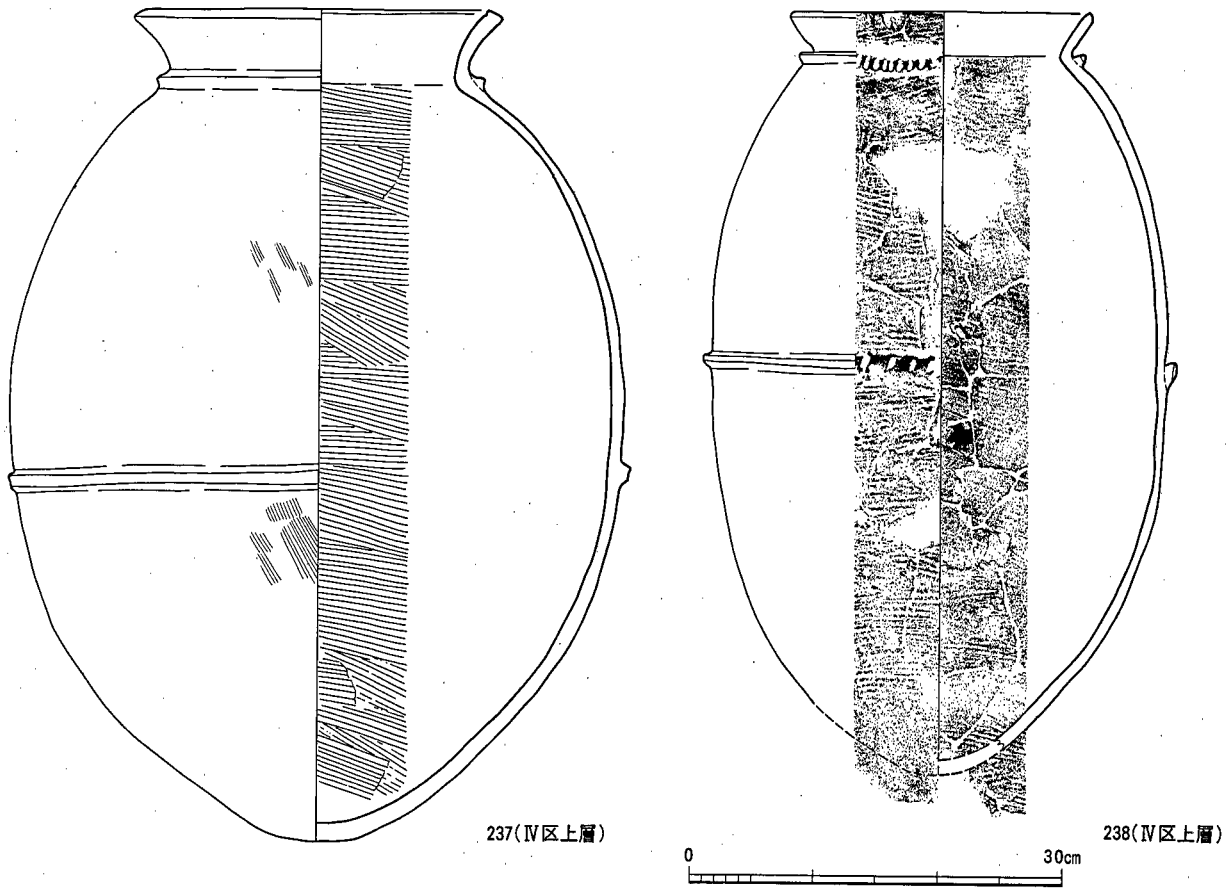
図示部がほぼ完周する高杯。中空で、透孔は2段3方に穿たれる。

その他の土器（図版126・127、第191～197図）

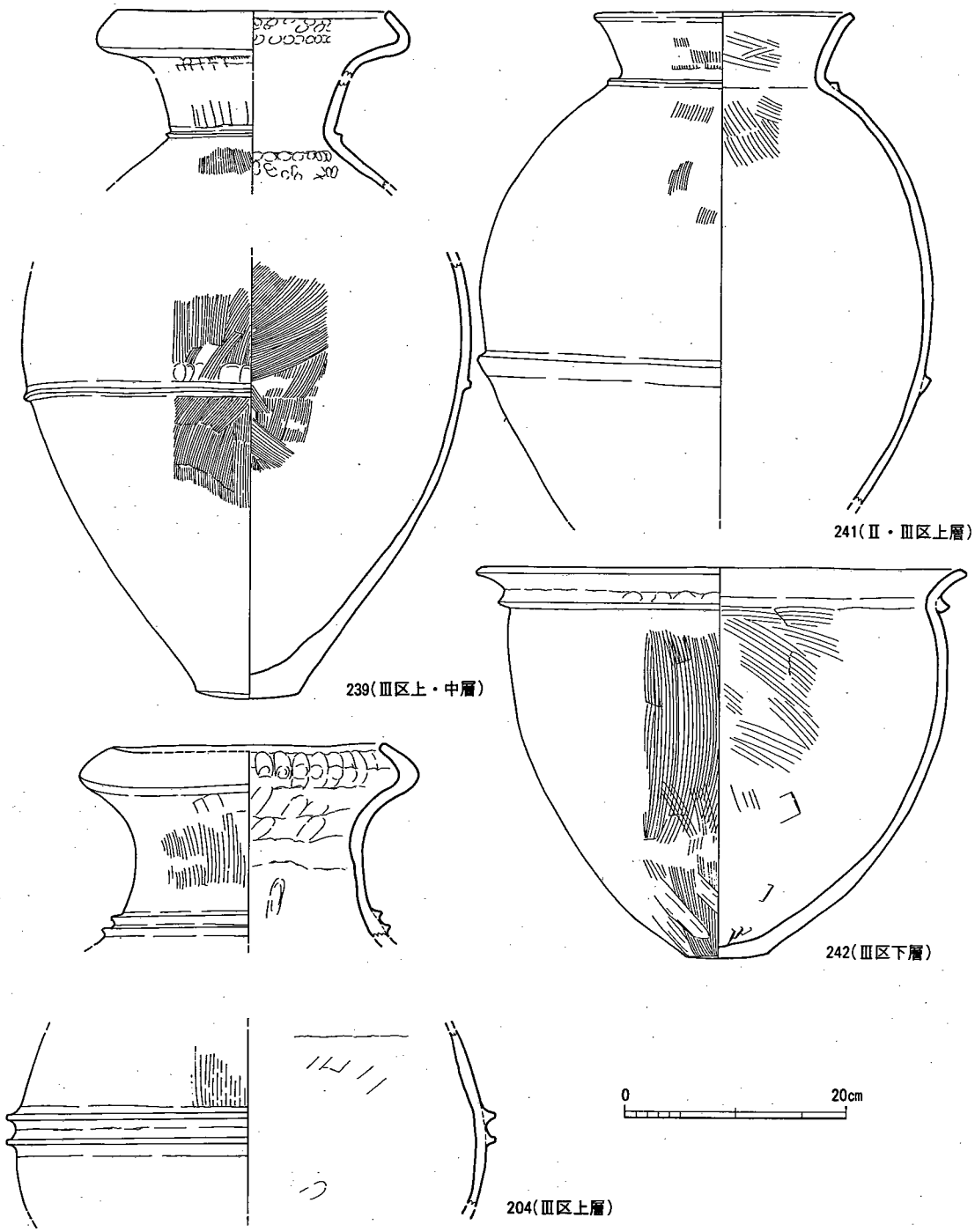
229の口頸部は外彎しつつ高くのびて端面を有し、頸部に甘い三角突帯を2条付す。体部は張りが弱い撫で肩となる。体部外面は微細な刷毛目で調整される。230は器表が荒れるが完周する。屈曲部は突出して小さなタガ状となり、口端部には内傾する面を付す。231は南端トレンチ出土。屈曲部はタガ状に高く突出して弱い刻みを付し、口端部は反転気味に丸く終わる。肩部の突帯はシャープ。232は直立する二重口縁壺で、口縁部外面に雑な櫛描波状文を刻む。これも肩部突帯はシャープで、胎土はほかと同様である。235は1/2強が残存する。口縁部が外彎して短くのび、端面をもつ。体部はほぼ球形となるが、器表が荒れる。236は層位の注記がない。これも口縁部が一旦垂直に立ち上がり、さらに外反するもので、端部を内側上方へつまむ。肩部の突帯はシャープ。

239は図上復原した頸部が完周する大型壺で、器表が荒れる。口縁部は丸く内彎する扁平な袋状となり、端部は丸く終わる。体部は張りが強く、腰の高い形状となる。底部は肉厚のレンズ底。最大頸部の下位に断面台形の突帯を付すが、形状不整で波打つ。調整は非常に細かな刷毛目で行う。240はこれも接合しえない大型の壺。口縁部はやはり扁平な袋状口縁となり、端部は丸く終わる。頸部はほぼ直に立ち上がるが、下端に断面三角突帯を2条付す。この体部は張りが弱いようで、断面台形突帯をやはり2条付す。器表が荒れる。241も器高50cmを越えるようで、口端部の内外面に面を付す。これも突帯は不整。器表が荒れるが、全体に粗い刷毛目で調整するようである。244は大型壺の下半部で、これも図示部分はほぼ完存する。残存高54cm、最大径56cmを測る。突帯は断面台形で突出するが、細部の仕上げはやはり雑なものである。調整は全体に粗い刷毛目で仕上げるが、体部下端では砂粒が動いており、篦削りが使用されているかも知れない。

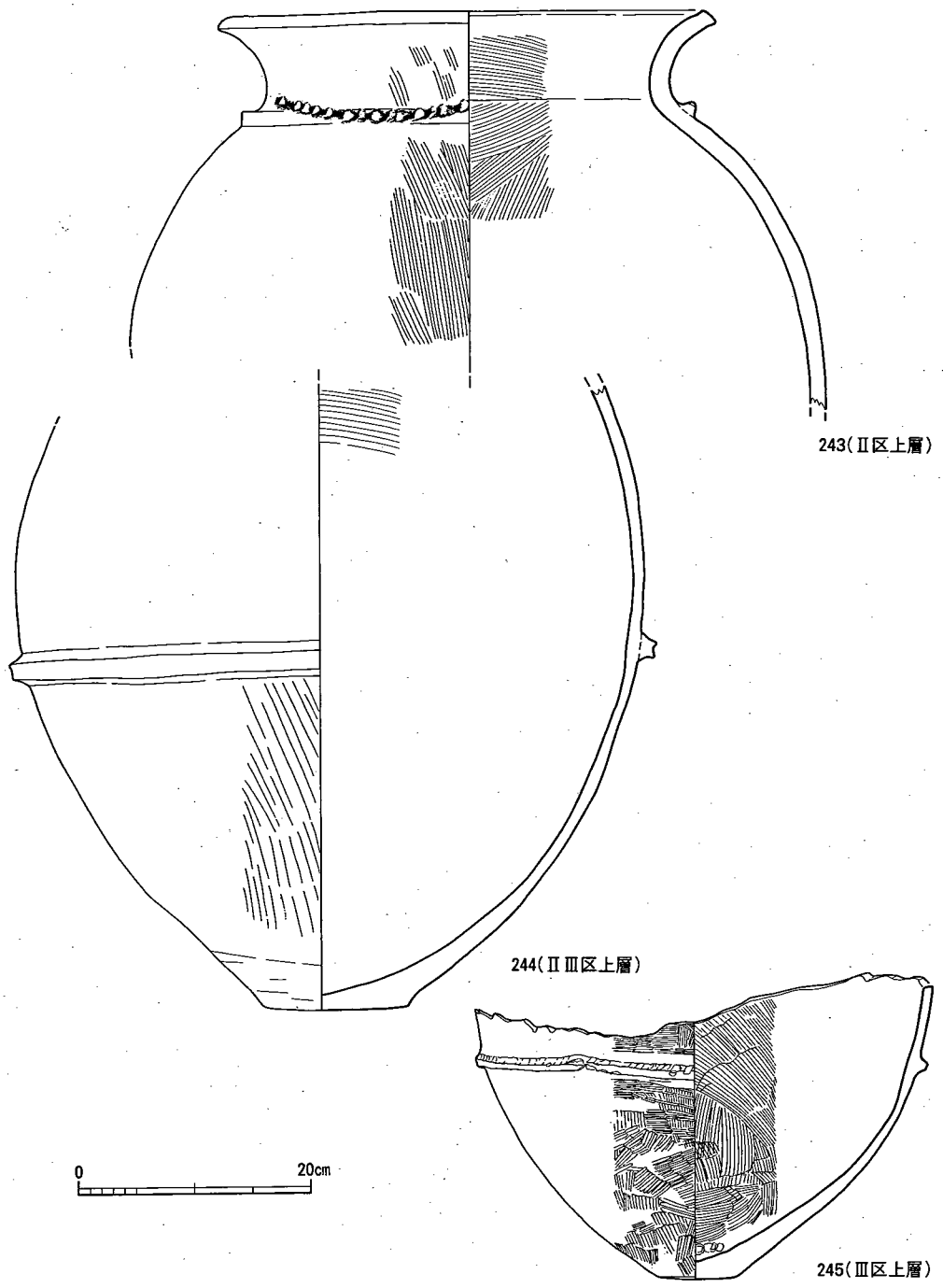
233は砲弾形の土器。面をもつ口縁部はほぼ1/2が、底部付近は良好に残存する。全体に粗い平行叩きで調整され、底部付近は刷毛目でそれを消す。



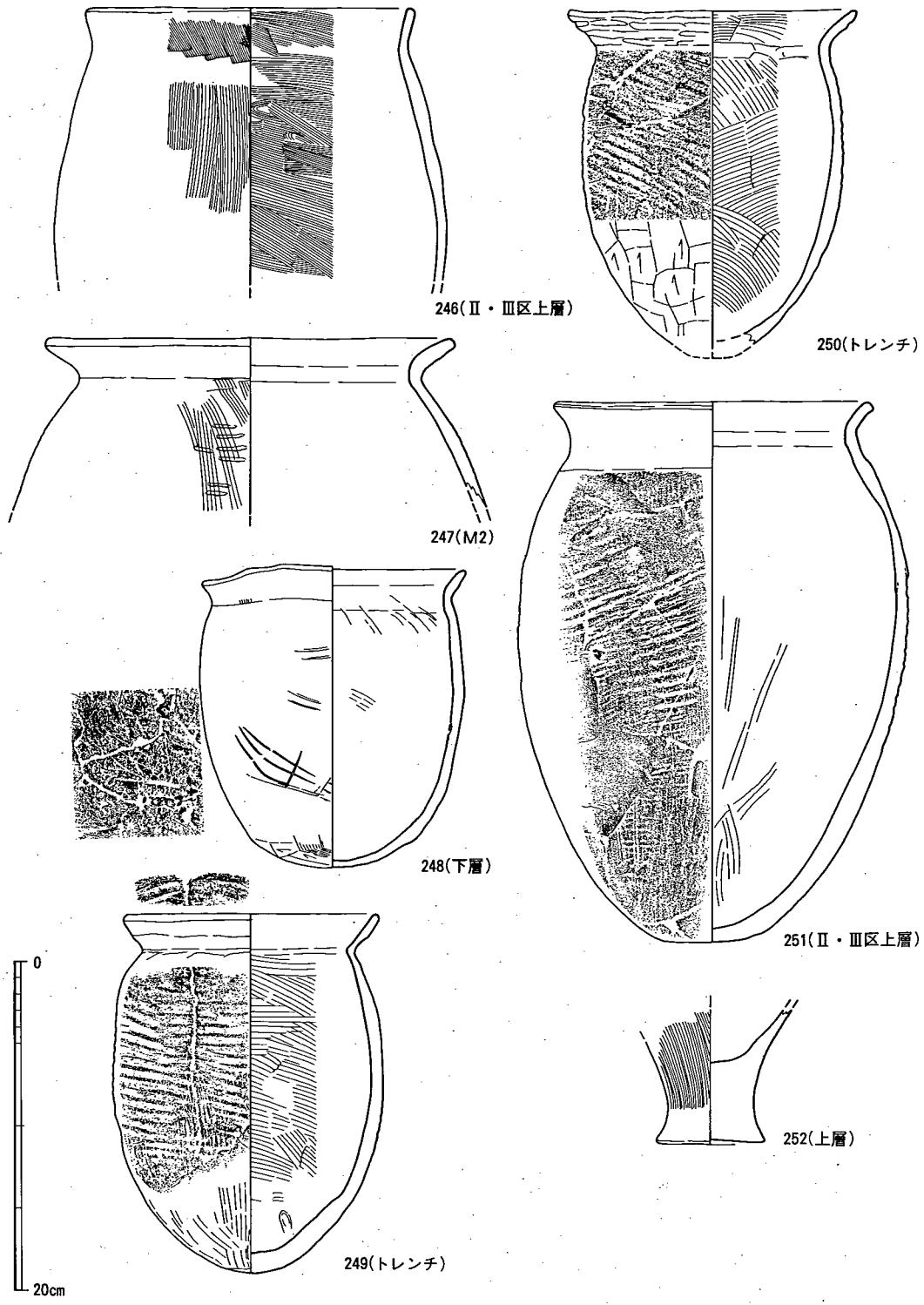
第193図　2号溝状遺構出土遺物実測図30（その他の土器３）(1/6)



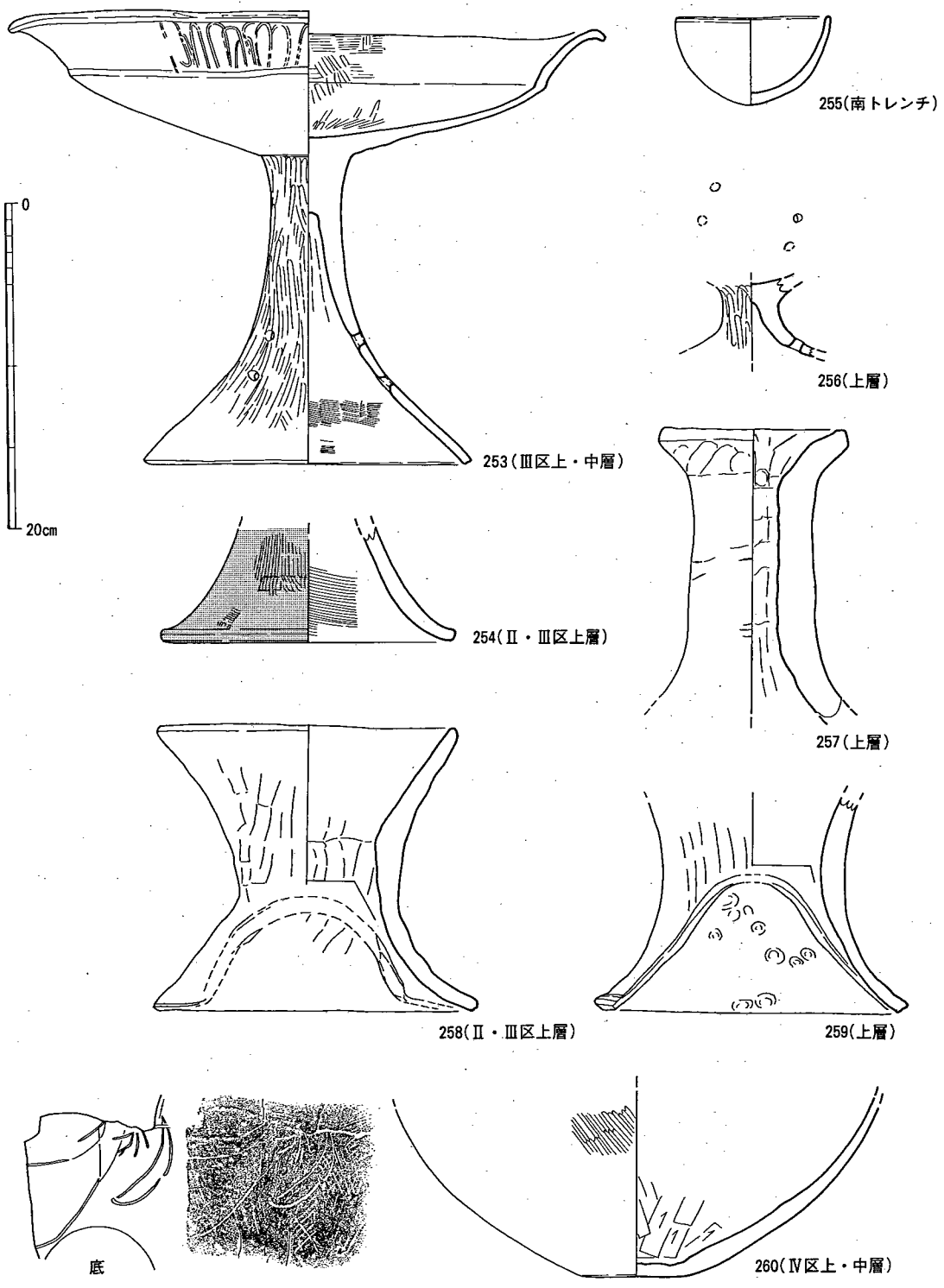
第194図　2号溝状遺構出土遺物実測図31（その他の土器4）(1/6)



第195図　2号溝状遺構出土遺物実測図32（その他の土器5）(1/6)



第196図　2号溝状遺構出土遺物実測図33（その他の土器6）(1/4)



第197図　2号溝状遺構出土遺物実測図34（その他の土器７）(1/4)

246は口縁部の反転が弱く、全体に細かい刷毛目で調整するがつくりは雑。247は外面に叩きを残す。248は張りのない体部を有し、口縁部も不整。体部外面は叩きの後に弱い刷毛目で、内面は丁寧に撫でて仕上げる。外底部付近は篦削りを用いるが非常に粗雑な形状となる。外見は非常に粗雑な土器であるが、体部下位に図示したような繊細な線刻がある。平行線に近い3条の線を直角方向に一条の線が横切る。記号であろうか。249は口縁部の1/2強、体部の3/4ほどが残存する。これも張りの弱い土器で、底部は尖り気味となる。口縁部は強く外折するが、外方へ膨らむ。体部外面に粗い平行叩きを明瞭に残し、下半では刷毛目がそれを覆う。250も相似た土器だが、これでは口端部まで叩きが及ぶ。また、下半では篦削りで叩きを消している。251はほぼ完存する。頸部内面は丸く移行し、口端部が外方へ垂下する傾向がある。これも叩きをよく残すが、中位付近で原体を替えるようである。下半では叩きをこれも疎の刷毛目で消し、内面は篦削りで仕上げるようである。252は中期前半の底部。

253はほぼ完存する。屈曲部はほぼ中位にあって、口縁部の反転が強く、部分的には垂下するような形となる。口縁部外面には暗文を付す。脚部は内彎気味にのび、端部は内傾する面をもつ。透孔は2段3方向である。254は外面に赤色顔料を塗布した脚部で、つくりは雑である。約1/4が残存。255は丁寧なつくりの鉢。256は小型高杯あるいは器台の残片。赤く焼かれた丁寧なつくりの土器で、孔が2孔一対に穿たれる。

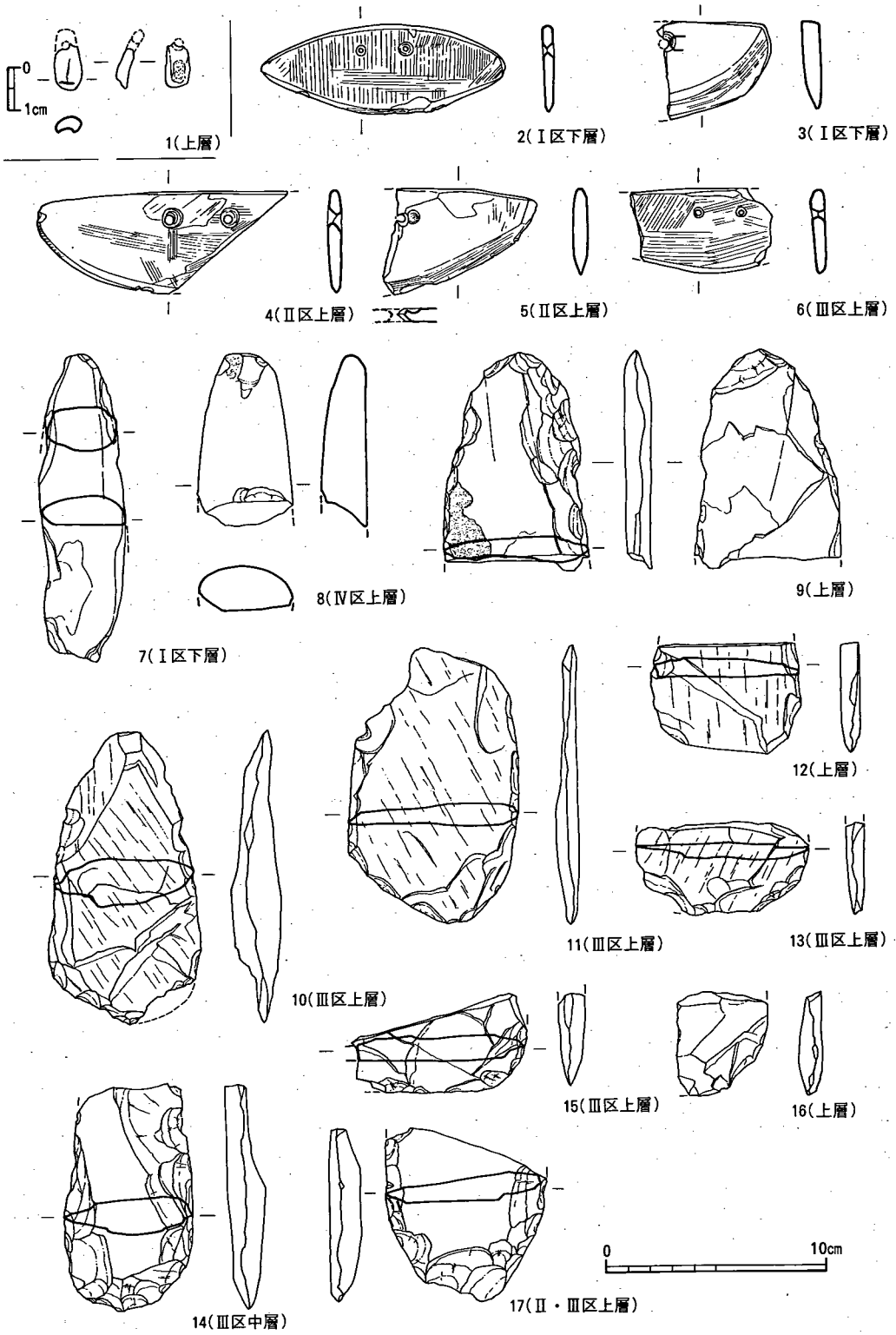
257は縦方向にほぼ1/2に割れる。肉厚で、手捏に近い。258は抉り部の上方を欠く。図下半の内面および上半の外面が赤く焼ける。259では全体に焼けているが、とくに下半内面の器表が荒れる。

260は底部の半分強が残存する。外面は雑な刷毛目で調整し、部分的に篦磨きを施す。内面は篦削りで調整する。その底部に接する位置に図のような篦描の線刻がある。描線は2種があり、単線で表現した線刻は細く弱いものである。当初、右端の三日月形を中央の4本の短線が角であるとして動物かと考えていたが、そう解釈すれば足がない。したがって左側の大きな三日月形が船を表し、その舳先あるいは艫に付された飾りを想定している。ただ、その場合も船体部が同じ線で収束せず、細線の表現に変わっていて確信がもてない。

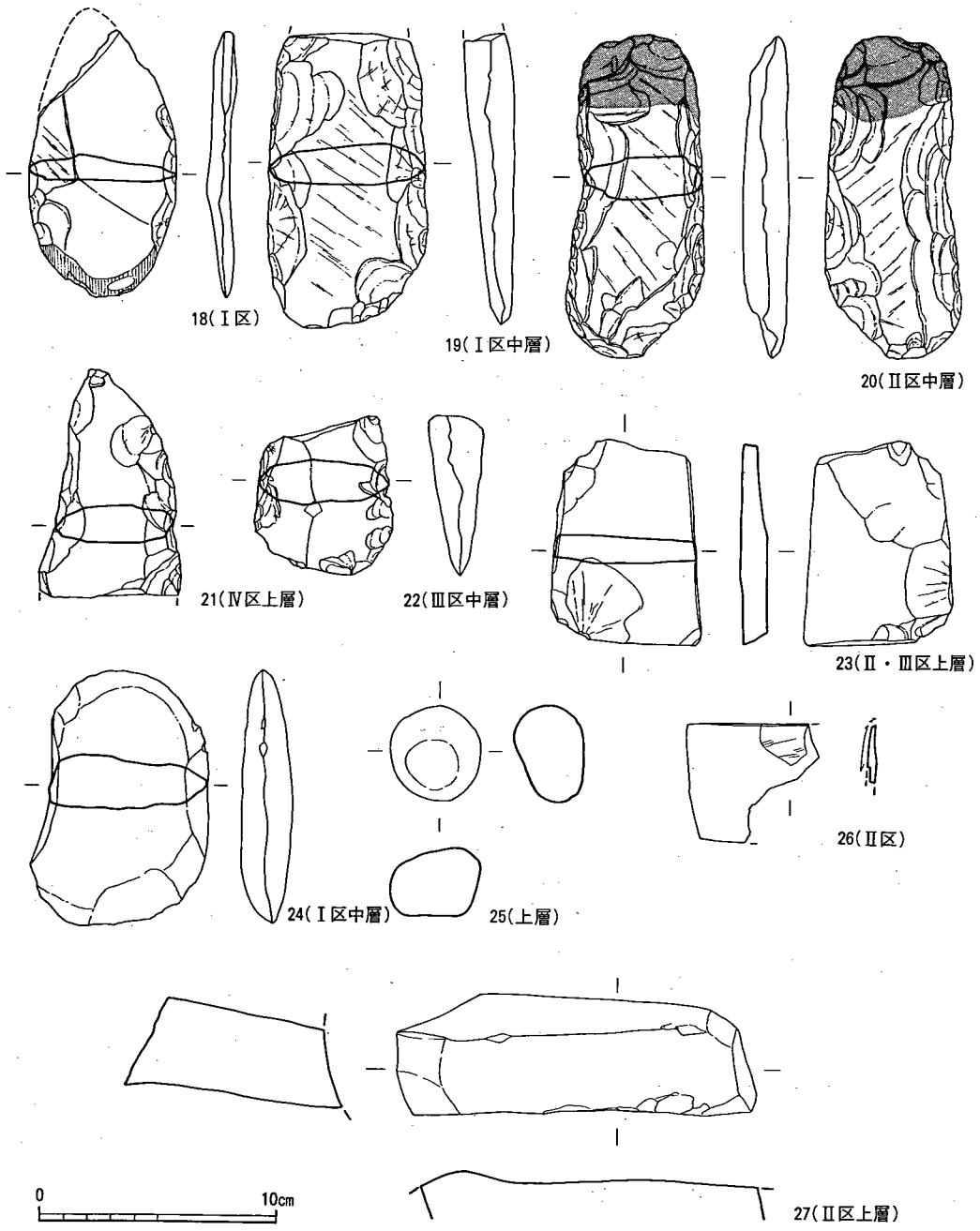
石製品（図版130～136、第198図2～第208図68）

石庖丁や石斧、凹石などの明らかな石製品や焼けた石材、そして河原石のような大小の石材が多数出土した。出土時に石製品と判断できたものを採集して持ち帰ったつもりだが、遺漏も多いと思っている。また、反面、「石製品」とはいえない普通の河原石も混ざっていることだろう。しかし、2号溝状遺構は溝底にいたるまで砂層に掘り込まれた遺構であり、その目的は不明であるとしても人為的に持ち込まれたことは明らかである。したがって、徒労であるかも知れないが、多くの出土品を掲載する。

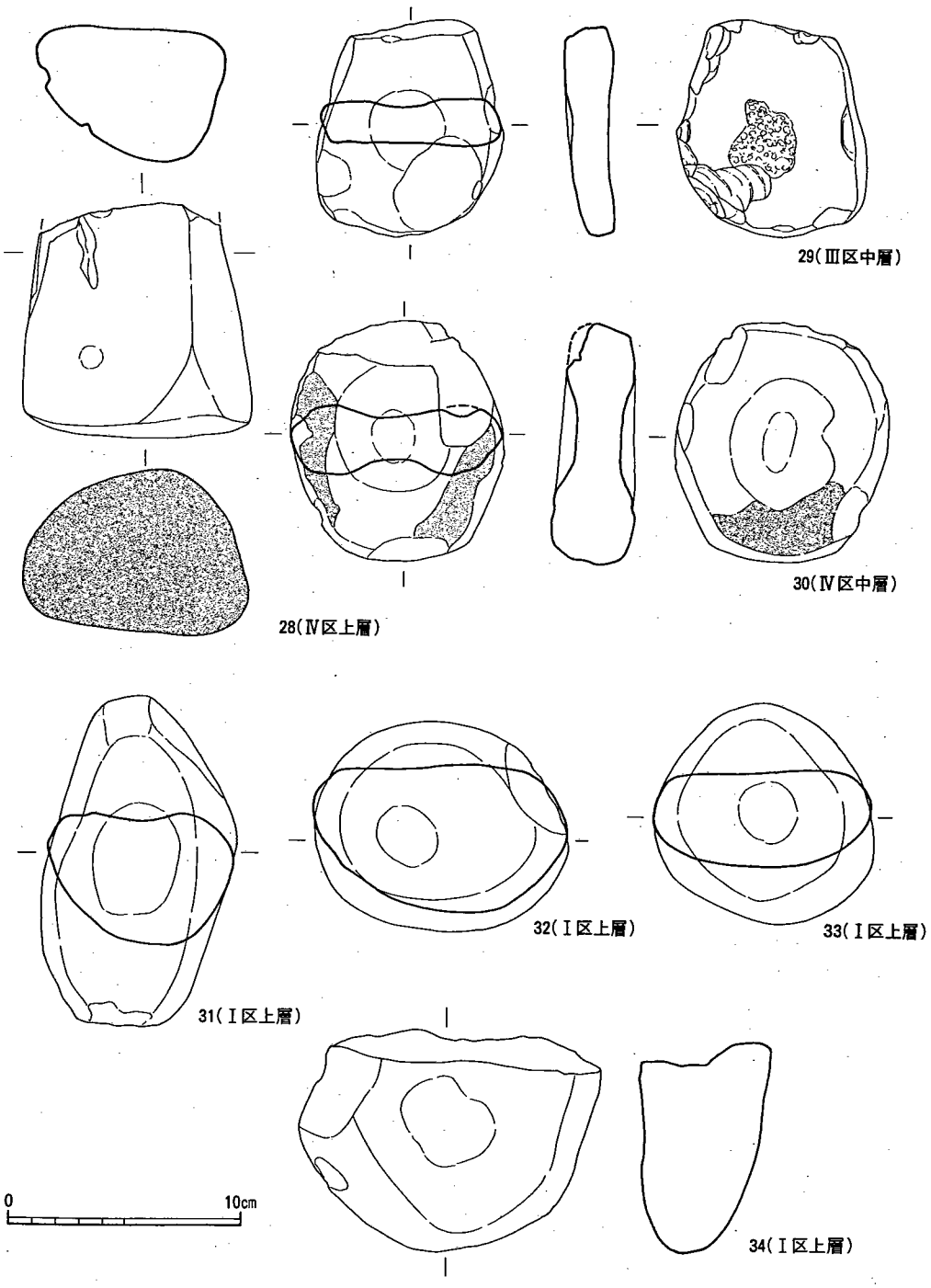
2～6は石庖丁。2は小豆色をする、いわゆる立岩産輝緑凝灰岩で完存する。穿孔は両面か



第198図　2号溝状遺構出土遺物実測図35（ガラス製品・石製品1）（2/3、1/3）



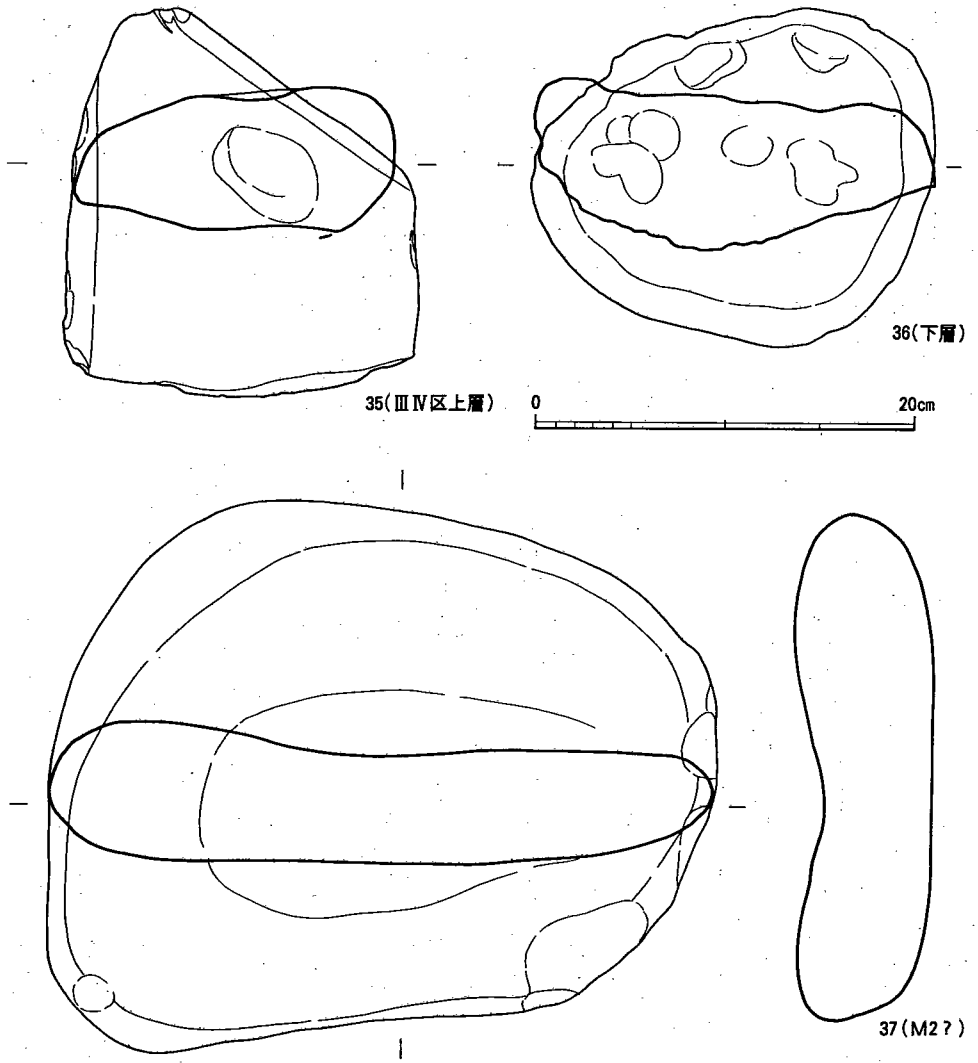
第199図　2号溝状遺構出土遺物実測図36（石製品2）(1/3)



第200図　2号溝状遺構出土遺物実測図37（石製品３）(1/3)

ら行い、図示したような各方向の使用痕が残る。長さ約11cm、高さ約４cm、背の厚さは0.5cmである。３は灰黄色多孔質の砂岩を用いる。材質の関係で使用痕は刃部以外でははっきりしない。穿孔は両面から行い、刃部は片刃である。４は淡灰～青灰色色を呈する輝緑凝灰岩製。横方向に走る条痕は非常に細く、これも穿孔は両面から行う。５は暗灰色を呈する輝緑凝灰岩製。図右端と刃部のみに使用痕がみえ、研ぎ直したものであろう。孔に接して貫通しない窪みがある。６も暗灰色を呈する輝緑凝灰岩製。横方向の条痕は非常に細密で、斜位のそれは粗い。片刃で両面穿孔。

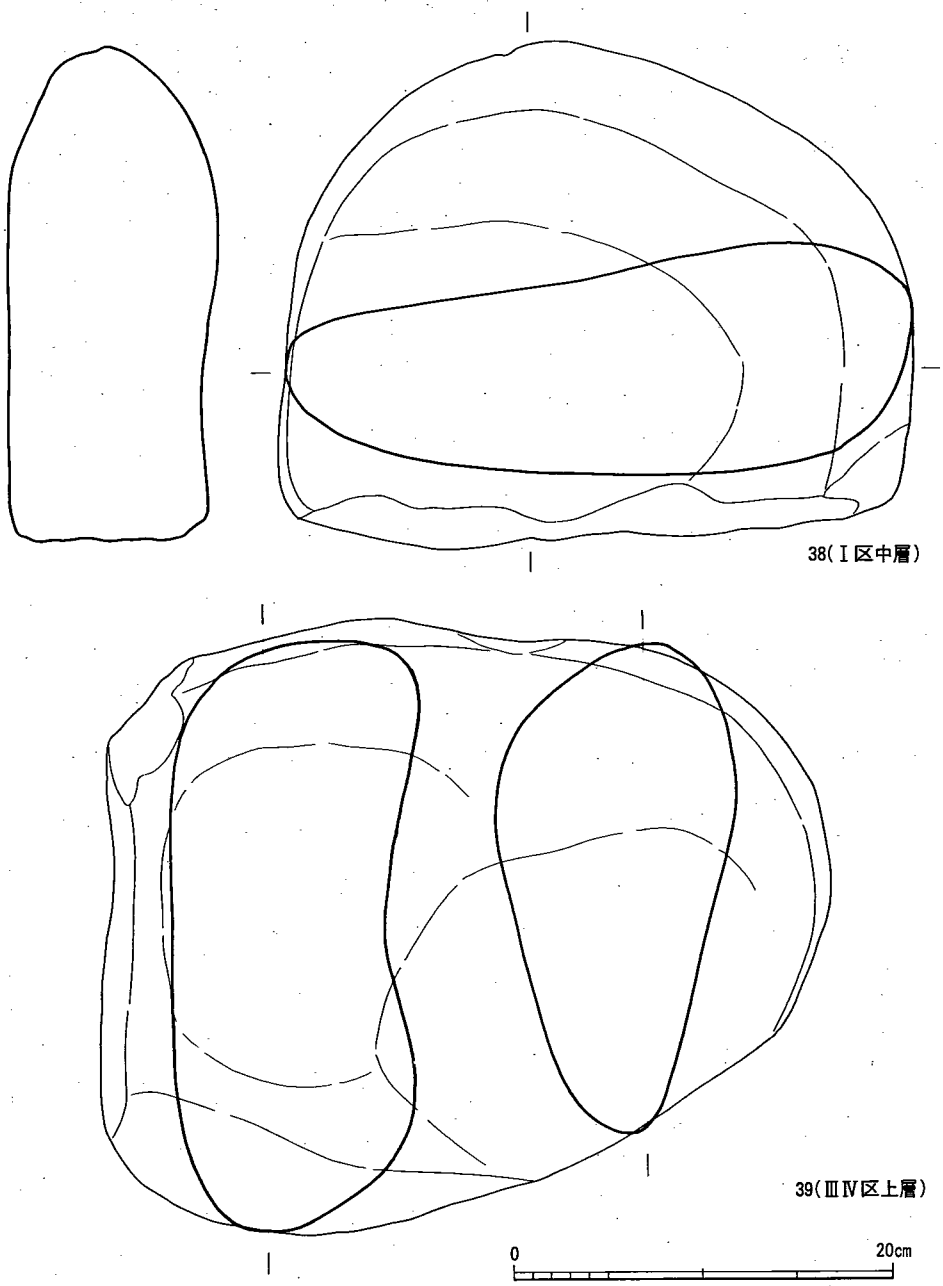
７は蛇文岩製磨製石斧。表裏に2分割していて破損がひどく、全体が窺えるのは頭部付近の



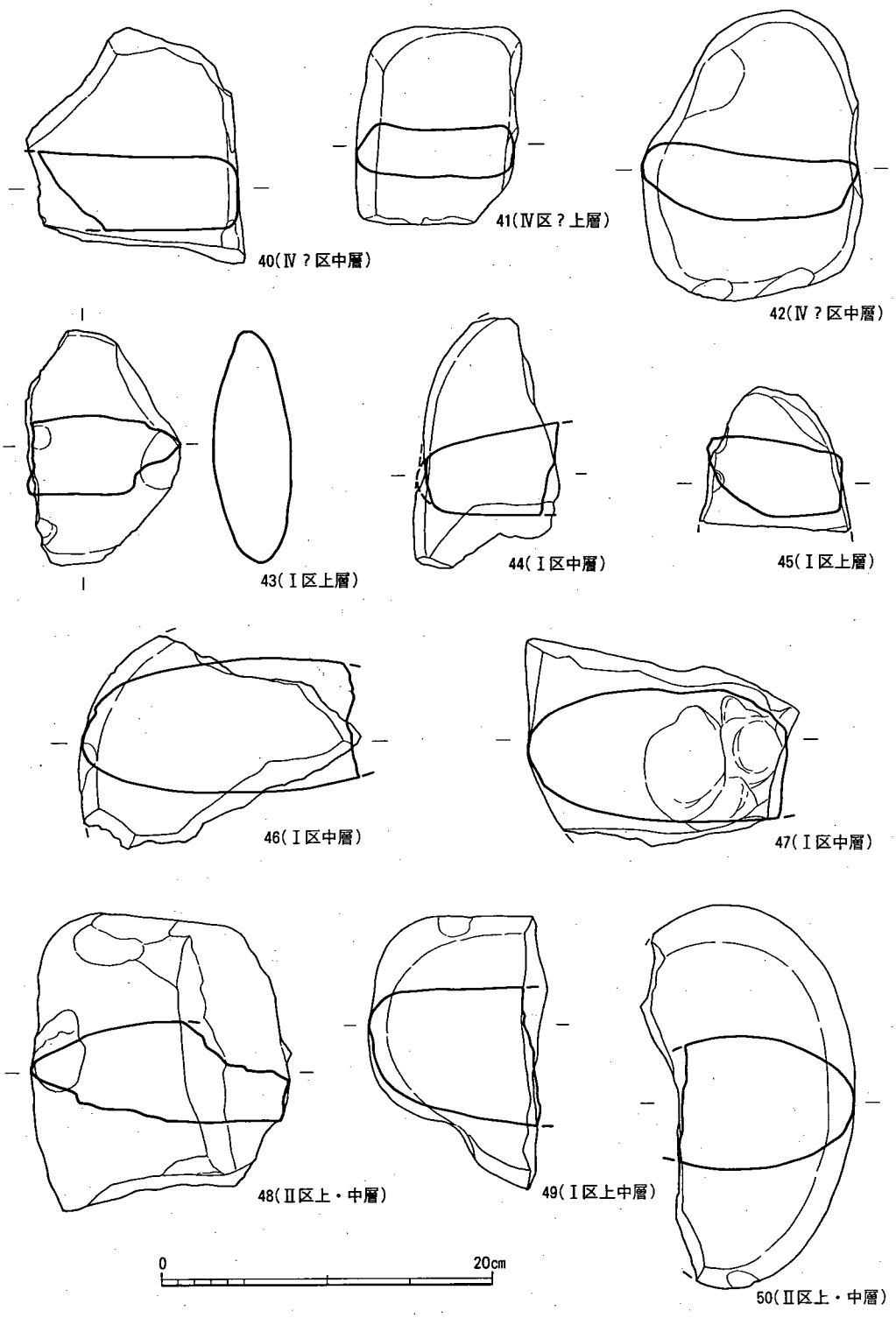
第201図　２号溝状遺構出土遺物実測図38（石製品４）(1/4)

みである。残存長約14cm。8は太型蛤刃石斧の頭部片で、これも図背面が剥離する。安山岩系の石材を使用し、器表が粗れる。

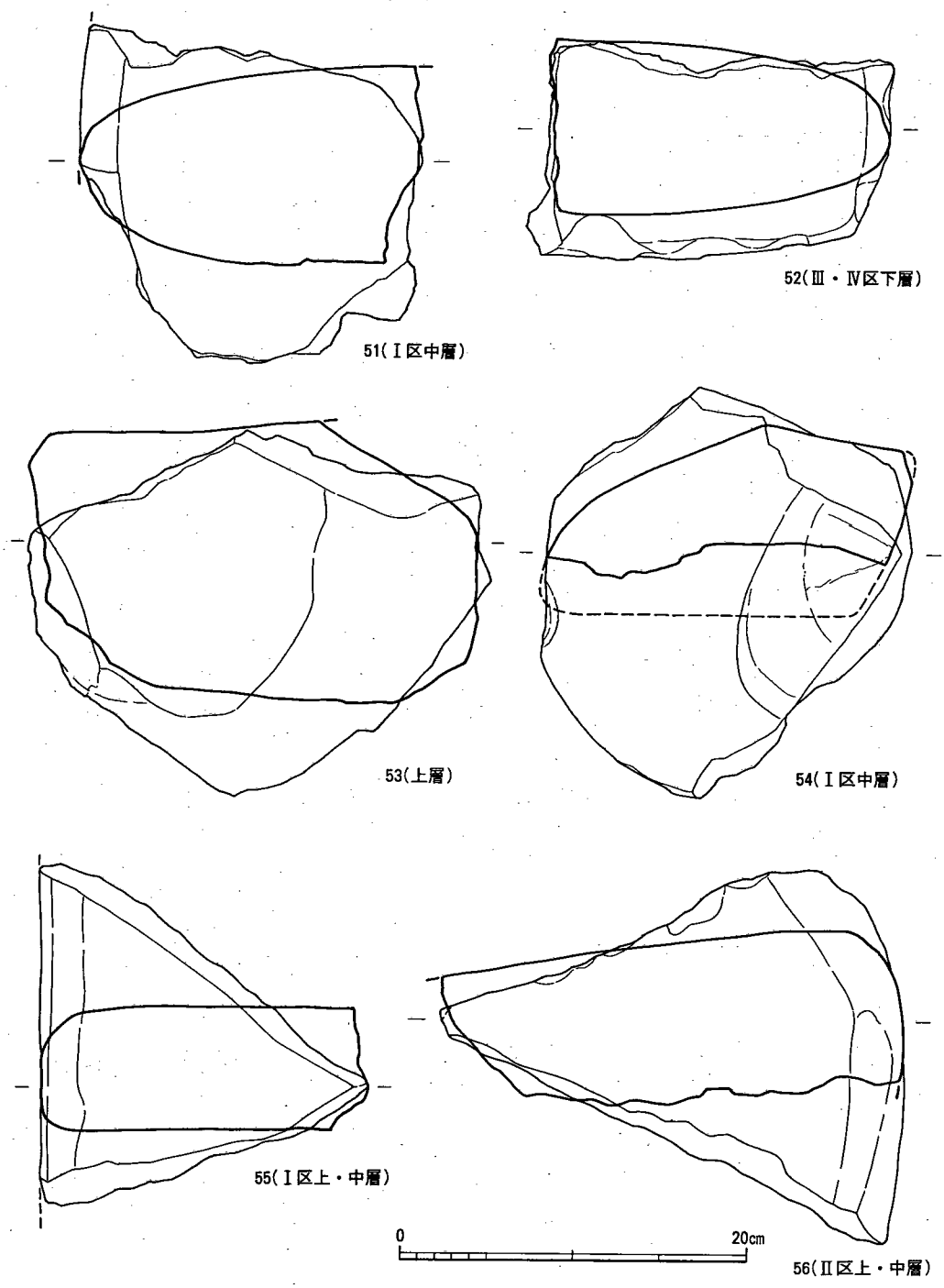
9～13は緑泥変岩製の打製石斧。9では両面に研磨したような部分がある（網掛け部）。概



第202図　2号溝状遺構出土遺物実測図39（石製品5）(1/4)



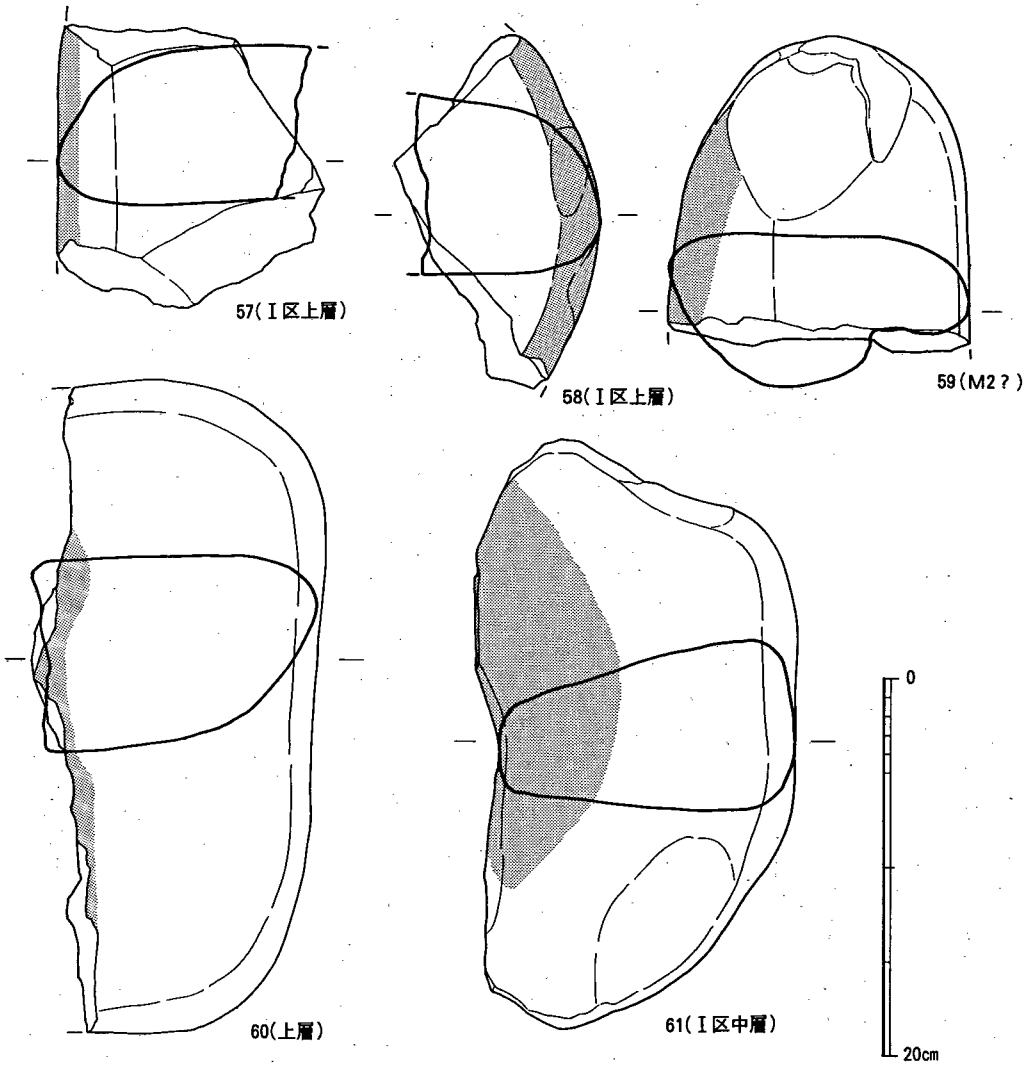
第203図　2号溝状遺構出土遺物実測図40（石製品6）(1/4)



第204図　2号溝状遺構出土遺物実測図41（石製品７）(1/4)

して細部調整が雑である。19～22は安山岩製の打製石斧で、緑泥変岩製に比して厚みがある。21はほぼ全体が窺える資料であるが、頭部の3㎝ほどの部分が黒みを帯びて変色する。

23も安山岩で、表裏に剥離した痕跡がみられるが、いずれも中途で放棄したようである。刃部は作り出されていない。24は図左片を除いて一応は刃部状の形態となるが、非常に鈍いものである。また、細部の剥離調整は見えない。25は直径4㎝前後、厚さ3㎝ほどのの不整円礫で、西方の段丘に含まれる風化安山岩である。図の上下面に小規模な凹面がみられるが、明瞭なものでない。

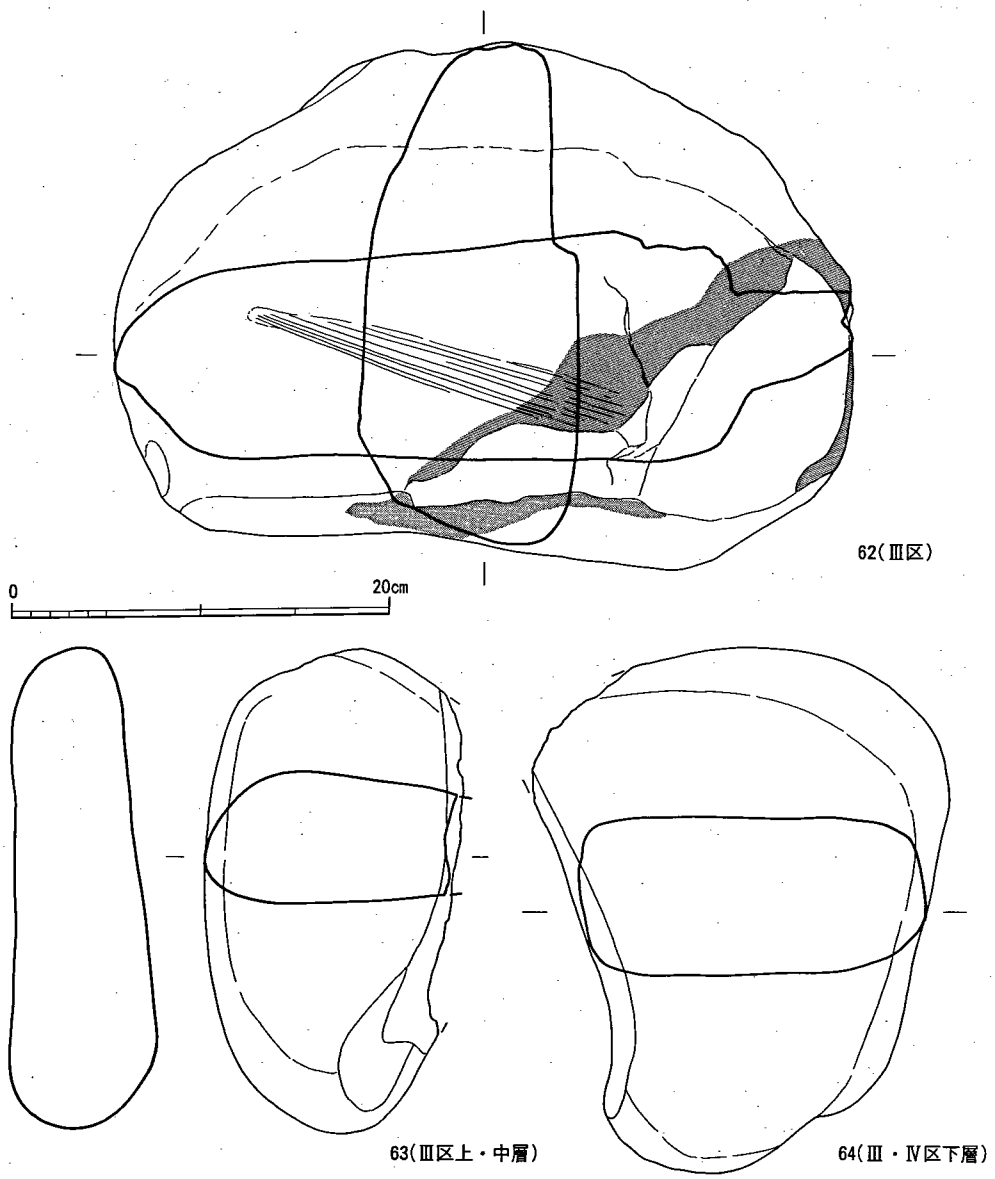


第205図　2号溝状遺構出土遺物実測図42（石製品8）(1/4)

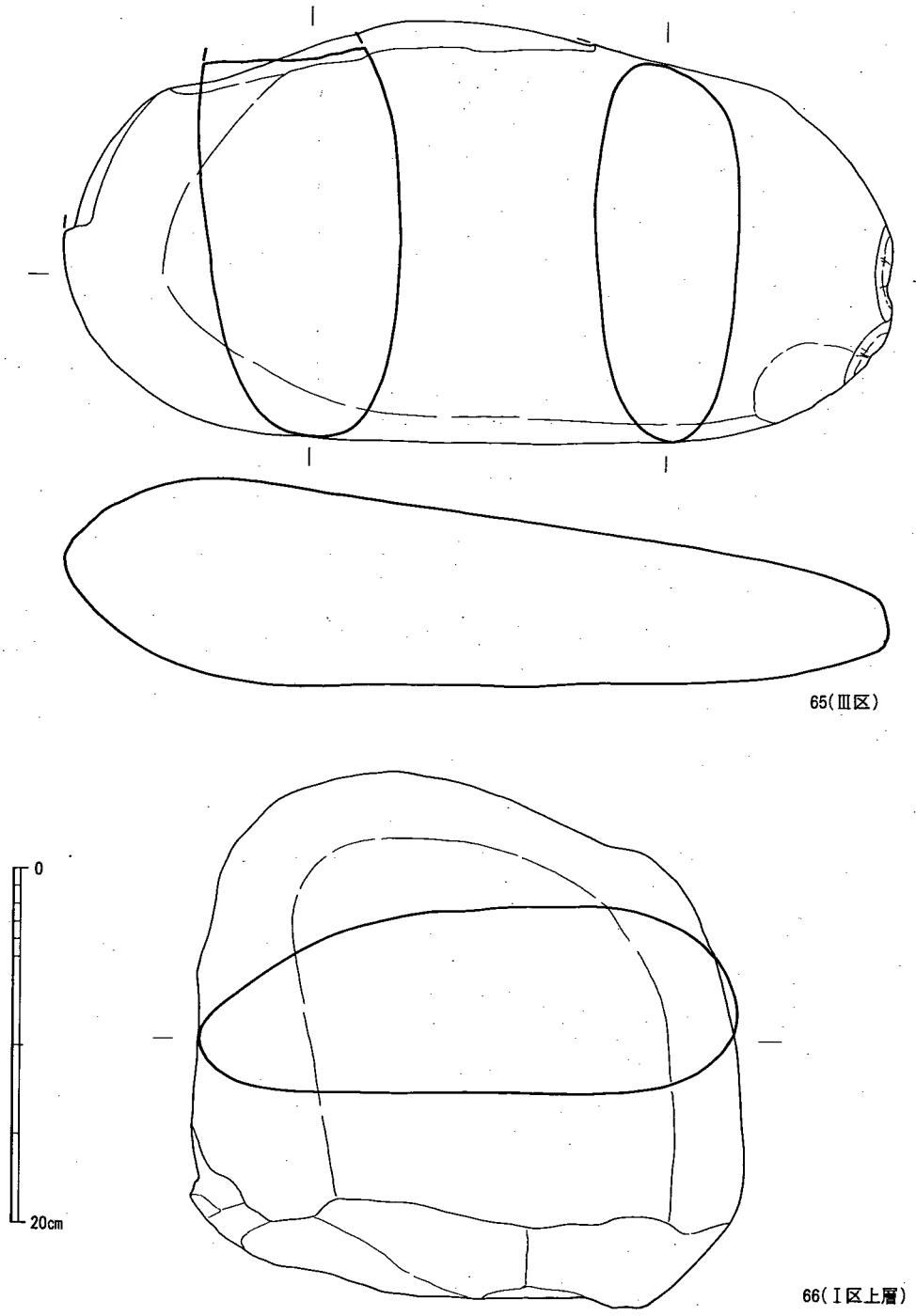
26は砥石。灰黄褐色色を呈する砂岩。図背面はすべて、上面も大部分が剥離する。

27は緻密な安山岩。大部分を欠くようであるが、図上面は非常に平滑化して凹面となる。といっても後述する石杵のようなものではない。

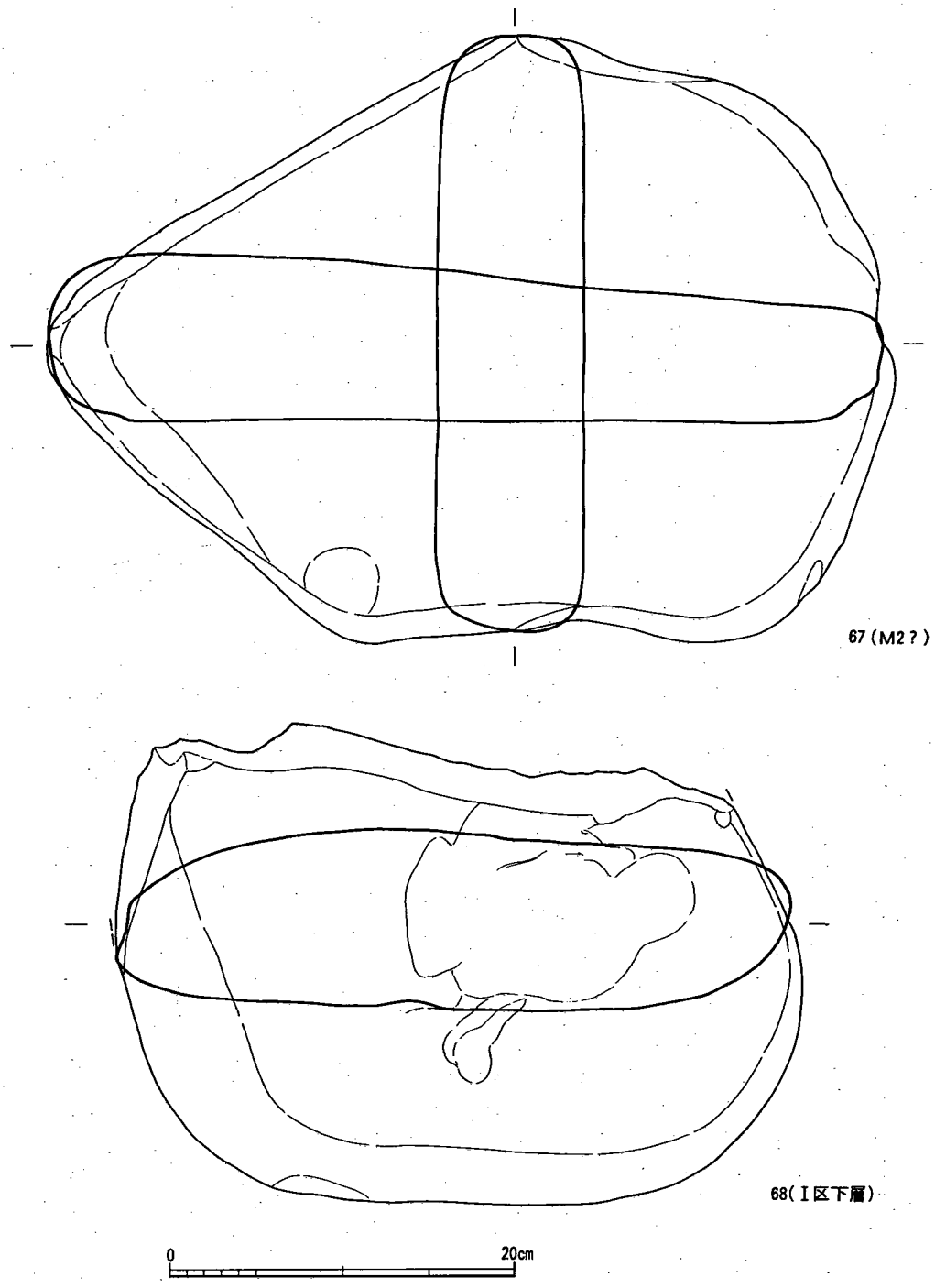
28は石杵で、頭部を欠く。断面形はほぼ三角形に近い形状をみせ、側面は滑らかとなる。使用面はすり減って、石材本来の風化しない面が現れれ、非常に滑らかな曲面となる。本田光子氏に観察していただいた結果、使用面にごく微量の赤色顔料が残存しており、辰砂をすり潰す



第206図　2号溝状遺構出土遺物実測図43（石製品９）(1/4)



第207図　2号溝状遺構出土遺物実測図44（石製品10）（1/4）



第208図　2号溝状遺構出土遺物実測図45（石製品11）(1/4)

のに使用されたことが確認された。安山岩製。

29以下もすべて安山岩。29～34は比較的小型の石製品で、片面あるいは両面が窪んでいる。29は図左に示した面に2ヶ所の小さな凹面があり、全体に滑らかではあるが擦ったような痕跡は見えない。反対側の面では中央付近に無数の敲打したような痕がある。30は両面にはっきりと窪んだ部分がある。また、その外周では部分的に研磨したように滑らかな部分がある。31～34は一見ただの河原石であるが、これらにも浅く弱い凹面がある。31・32のように扁平でない、丸味の強い石材も使用される。

35・36は長軸20cm前後、厚さ8cm前後の石材。36では小規模な凹部が沢山ある。35の下面は平らではなく、36のそれは剥離して現状では安定できるものではない。

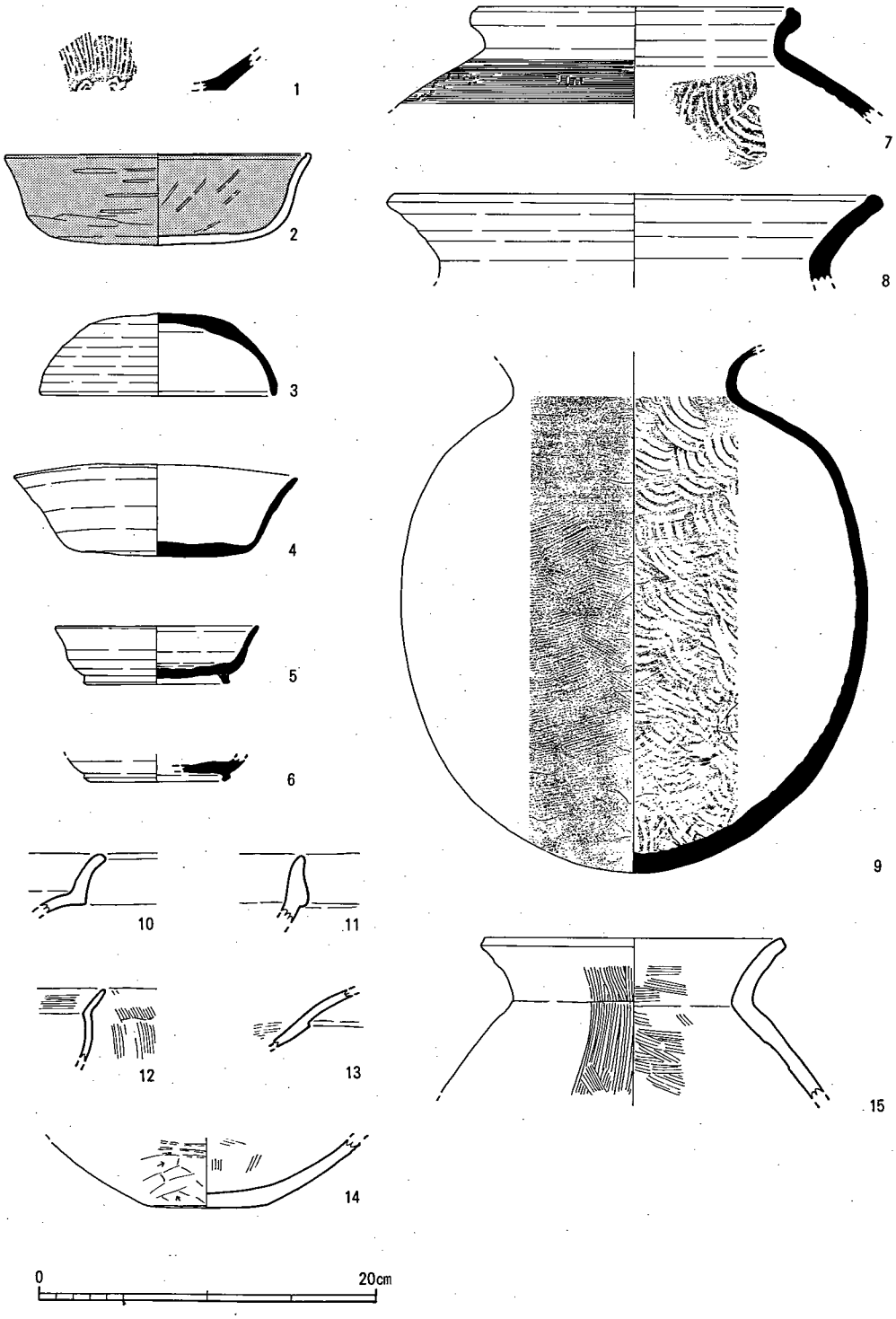
37は長軸約36cm、短軸約28cm、厚さ7cm前後の扁平な石材で、中央部が大きく窪むが、図右側では変換点がわからなくなる。38はやはり長軸30cmを越え、最大の厚さは12cmを測る。これも図右側でははっきりと窪んでいることがわかるが、左へ行くにつれて不明瞭となる。39は40×32cmの三角形に近い形状であるが、厚さは最大で13cmを測る。図左側では明らかな凹面が見えるが、図右側では片流れとなって凹面は不明瞭となる。平面的には2段になるようにみえる。これらにはいずれも擦痕などは見えない。

40～42は扁平な不定形小型石製品で、局部的な凹面は見えないが全体が匙面状となるもの。これらも顕著な使用痕は見えない。

43～56は先の石材のような凹面はみられないが、多くは意図的に割られたものと思われる。河原石を使用すれば当然ではあるが、いずれも表面は滑らかとなる。大きさや厚みは様々で、55のようにそれ自体石皿として使用できそうなものもある。

57～62は熱を受けたもの。57～61は側縁あるいは破面付近が赤く変色する。62ではやはり剥離面周縁が黒変する。併せてこの石材では図示したような条痕が一部で観察できる。

63～68も明らかな使用痕は不明であるが、全体に平滑化したもの。とくに67に図示したものは厚さが均一であり、整形痕はないが選択的に採集されたものであろう。



第209図　11号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

3・4号溝状遺構

この2条の溝は幅1m弱の小規模なもので、3軒の住居跡を切る。遺構配置図でみるように、それらの南端は三角形状に削平されて凹地となるが、その一角に連続している。

埋土の記録を怠るが、調査時の所見でも新しい溝との印象があり、地境に沿うことからみても開墾以降の排水溝であると思われる。

出土遺物

3号溝状遺構からは住居跡と同様の土器が数点、4号溝状遺構からは奈良時代頃の須恵器片などが出土しているが図示していない.

石製品（図版136、第163図13）

緑泥変岩製の打製石斧であろう。平面形は三日月形に近く、縁辺の調整は疎である。

5号溝状遺構（図版53、第162図）

2号溝状遺構の項で記したように、平面的にはまったく気付かず、土層観察で発見したものである。この遺構を平面的に確認できたのはⅡ区とした部分での約10mの長さの溝底にすぎない。その中でも北東部では明らかに2号溝状遺構とは異なっていたものの、南西へ向かうにつれて両者は接近、不明瞭となり、Ⅰ区ではまったく区別できなかった。また、Ⅲ～Ⅴ区では湧水がひどく、かつⅣ・Ⅴ区では完掘できなかったので確認できていないが、平面的に屈曲部などは見えないことからほぼ重複していると考えてよかろう。したがって5号溝状遺構が埋没しきる前に2号溝状遺構の掘削が行われたものと思われる。

5号溝状遺構の掘削時期については後章で考えてみたい。

6号溝状遺構

15・16号住居跡の南東にあって、それらの辺に沿って走るが、北端でほぼ直角に曲がる。調査時には41号住居跡を切り、40号住居跡に切られるものと認識している。

幅0.4m前後、深さは0.1m弱、20mほど続く。

出土遺物

レンズ底の底部が1点あるが図示していない。

11号溝状遺構（図版58、第142図）

石原に近い地山を掘り込む溝で、竪穴式住居跡および3号方形周溝を切って走る。後述する13・14号溝状遺構とほぼ平行に走り、開削時期は別にしても意識したものと思われる。ただ、これのみが北でほぼ直角に曲がり、急激に規模を減じる。

規模は南端付近で幅1.6m、深さ0.5m、方向を変える付近で幅0.5m前後、深さ0.2mを測り、

全長は60mほどとなる。溝底レベルはいずれも標高17mほどで、流路とした場合には方向を決めがたい範囲内の数値である。

南端付近で確認したところでは、土層は西側から流入した状況で堆積してU字形の層をつくっており、埋土に特徴的なものはない。

出土遺物

かなりの土器が出土する。多くは住居跡群と同様の土器であるが、須恵器も多く出土していて遺跡周辺の状況を反映しているものと思われる。

石製品のうち、18・19に示した石斧は周辺の溝状遺構出土遺物と混在してしまい、出土遺構を特定できなくなったもの。

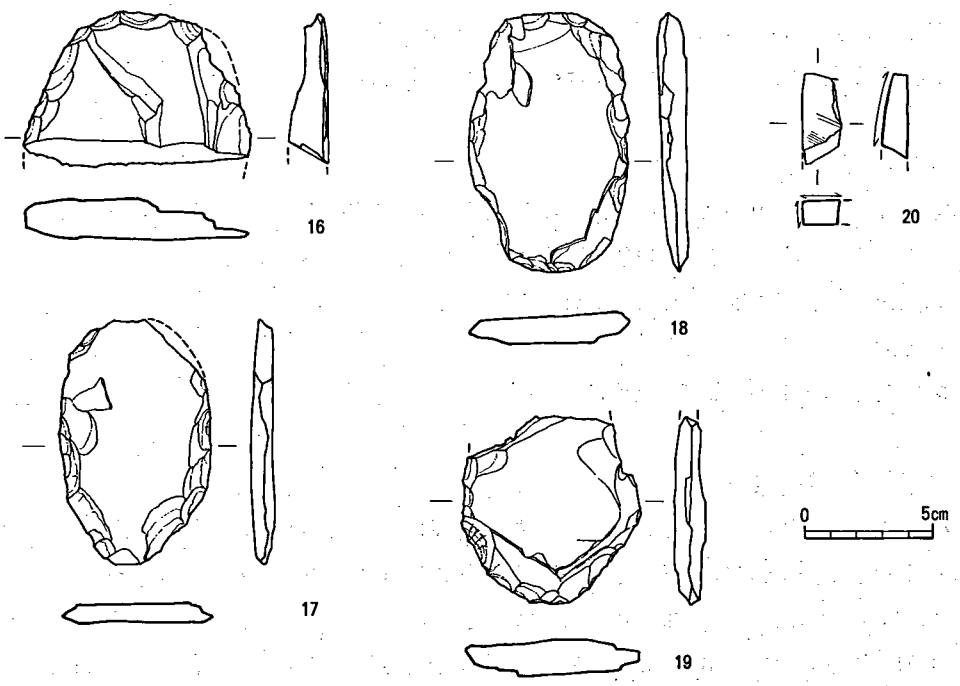
鉄製品（第14図11）

中央付近で出土した鉄鏃で、これも切先を欠く。圭頭式あるいは斧箭・雁股式のような形状が想定される。

土器（図版136、第209図）

1は瓦質の摺鉢小片。外面は篦削りで調整する。

2は体部が外彎して立ち上がり、端部を内側へ小さく折り曲げる。体部下端付近から底部にかけては手持ちの篦削りで丁寧に仕上げ、全体に赤色塗彩される。また、見込みに螺旋文とX字状の浅い沈線が、体部では屈曲部付近とそれ以上の部分の二段にわたる暗文が施される。器



第210図　11号溝状遺構ほか出土遺物実測図（1/3）

肉は灰黄色の土師質で、ほぼ1/4が残存する。これと同様の特徴をもつ土器片はこの遺構周辺の住居跡などにも数点が小片で混入している。

3～9は須恵器。3の天井部は平坦に近い。4は焼け歪みの大きな杯で、外底面は回転篦削りで調整される。5・6は華奢な高台を付した杯。いずれも外底面は篦切りのままである。8は口縁部を加飾しないもの。焼きが甘い小片。9はほぼ正置した状態で出土し、口縁部をすべて欠くが体部は完存する。祭祀行為に供されたものであろう。肩部付近以上は丁寧に横撫でし、以下は刷毛目と見まがうような細密な平行叩きを綾杉状に配する凝ったつくりの土器。

10・11は二重口縁壺の小片。13は高杯の屈曲部小片。14はレンズ底で、底部近くは篦削り、それ以上には粗い平行叩きが見える。内面は刷毛目で調整する。15は1/3が残存する。肉厚の土器で、全体に刷毛目を主体として仕上げる。

石製品（図版137、第210図16～20）

16は緑泥変岩製で大きく欠損する。17は灰黄色安山岩製の完形に近いもの。全長10cm弱、幅6cm、厚さ1cmに満たない小型品で、剥離は雑である。

18・19は11・13・14・15号溝状遺構のどこから出土したものか特定できない。18は安山岩製のほぼ完形品で、全長10cm強、幅6cm強、厚さ約1cm。19は緑泥変岩製の残片。

20は灰色～灰黄色を呈する砂岩製砥石の小片。軟質で目が粗い。

13号溝状遺構（図58版、第162図）

11号溝状遺構の東に隣接する。これも石原に掘り込んでいるために平面形状は不整形となっているが、最大幅1.8m前後、深さ約0.5m、長さ44mほどを発掘した。この溝底レベルは北端で標高17m、南端では17.2mほどとなって若干の比高差がある。

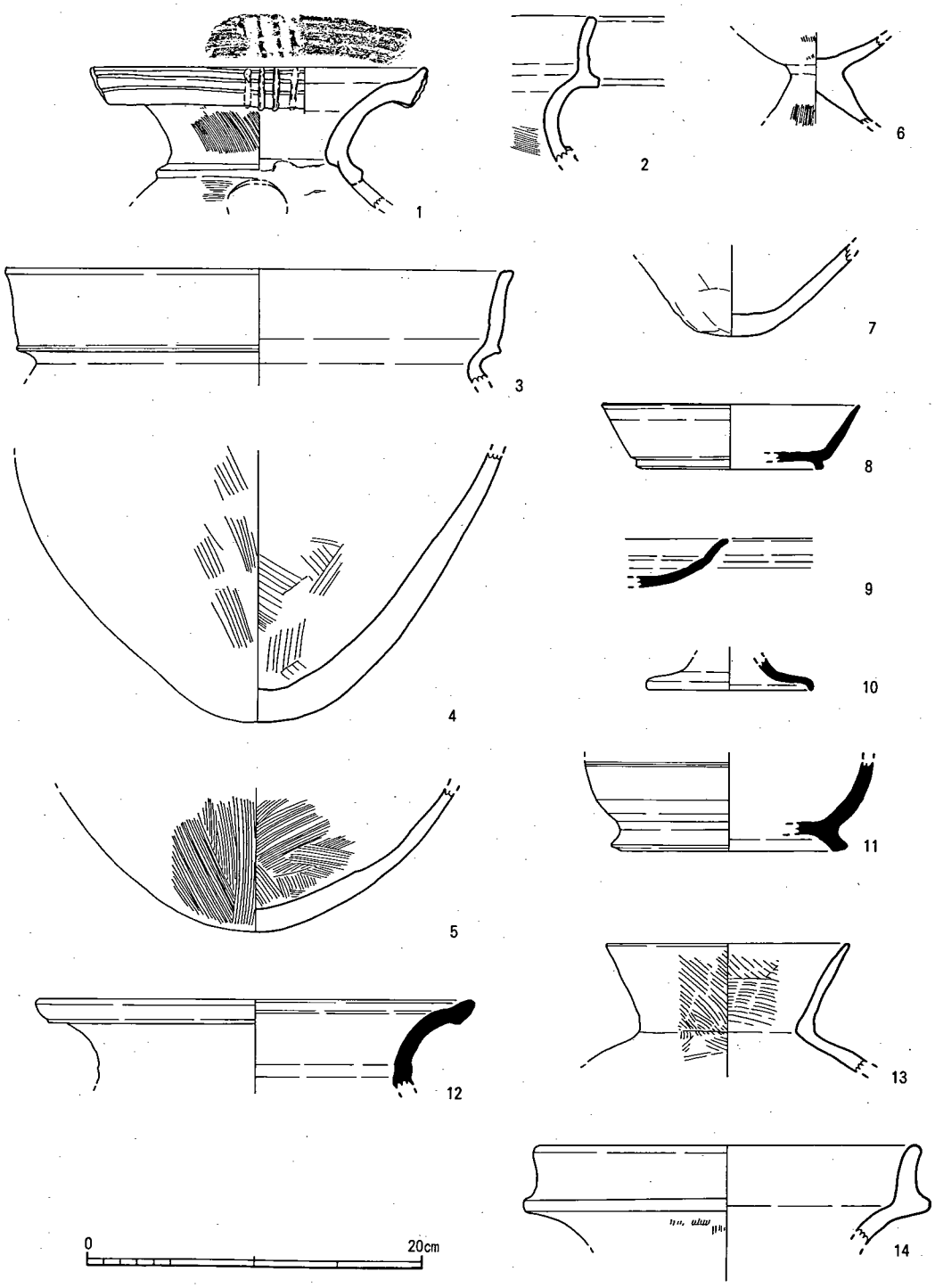
埋土は黒色系を主体とする。

出土遺物

パンケース2箱ほどの土器が出土し、数点の須恵器が含まれる。

土器（図版137、第211図1～12）

1は外来土器であろう。この遺跡出土の多くの土器に含まれる角閃石が胎土に見られないこともその可能性を高める。口縁部は肥厚して端面を拡張、そこに2条の甘い擬凹線を刻むとともに4条一単位の浮線文を4ヶ所に配する。頸部には甘い断面三角突帯をめぐらせ、その直下に残存直径4cm弱の円孔を焼成前に穿っている。色調は灰黄褐色を呈し、つくりは粗雑の感がある。尾張系であろうか。2は二重口縁壺で、口縁部は外彎気味に直立し、屈曲部はタガ状に突出する。3は口縁部が長く、頸部の短い二重口縁で、山陰系の土器であろう。これも角閃石が含まれていない。屈曲部が小さく突出し、口端部に面をもつ。4は尖り気味の底部で図示部分は完周する。よく焼けている。6は小型の高杯であろうか。器表が荒れる。



第211図　13・14号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

8～12は須恵器。8は華奢な高台をもち、体部が直線的にのびる。9は口縁部が緩く反転する小片。10も小片である。この2点はいずれも丁寧に造作されており、同一個体と思われる。11は脚杯壺の底部。高台はほぼ1/4が残存する。12は口縁部外面が暗茶褐色となる小片。

14号溝状遺構（図版58、第162図）

13号溝状遺構の東にあって、やはり石原中にある。規模は最大幅1.6m、深さ0.5mほどであるが、土層図を見る限りかなりの部分を削平あるいは表土掘削時に飛ばしたようである。、長さは調査区を斜めに横切る47mほどを検出したが、やはり北端は収束傾向にある。この溝底レベルも南北両端とも17.1m前後であり、一方的に通水するような比高差ではない。

出土遺物

1箱ほどの土器が出土するが、ここには須恵器が含まれていない。

土器（図版138、第211図13・14）

13は図示部の2/3が残存する。口縁部は直角に近く外折して直線的に立ち上がり、端部は丸くなって終わる。体部内面には工具痕が見えるが、砂粒の移動はないようである。14は肉厚の二重口縁壺小片。これも屈曲部が突出する。

15号溝状遺構（図版58）

14号溝状遺構の東にあって、本遺跡最東端の遺構である。これも平面形状は不整形で、幅1m弱、深さ約0.2mの規模を有する。約30mの規模まで発掘したが、これは先の溝状遺構と異なって南で収束する。溝底レベルをみると石原中にあるために0.2m程度の範囲で凹凸があるが、北端で16.9m、南端も同程度の数値である。

出土遺物

住居跡と同様の土器片が若干出土する。

6．その他の遺構と遺物

41号住居跡埋土中埋納土器（図版27、第212図）

検出時は2点があるように思われたが、うちの1点は土器片が偶然集まったものと判断されたので1点のみをとりあげる。

検出状態の実測図でみるように、住居跡埋土に掘り込んで据えられたものであるが、とくに焼けているというものでもない。ただ、器表が非常に荒れ、口縁部の多くを欠くことから一時的には露出していたものかと思われる。また、底部が見あたらない。

土器（第213図1）

細片化して復原しえなかった。また、口縁部が体部と接合しえない。

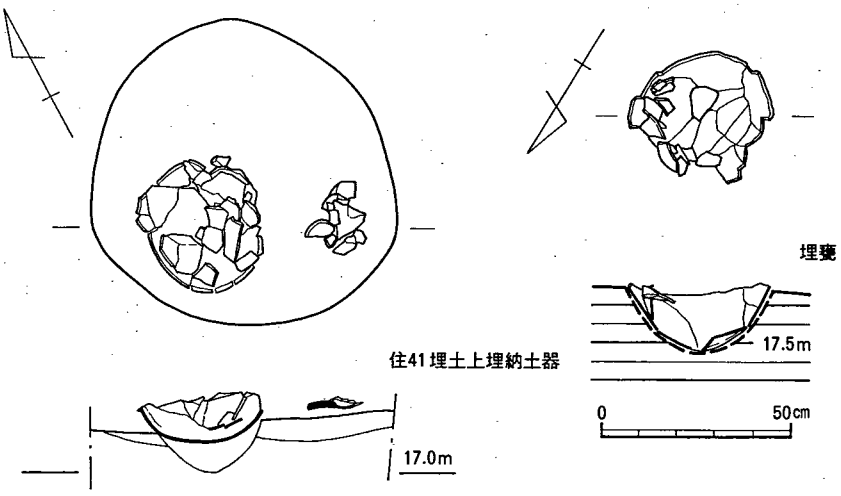
口縁部は小片がわずかに残るのみであるが傾きはほぼ正しいと思われる。端部に面をもつもの。体部はほぼ1/2ほどが残存するが、先述したように接合しえない。また、球形胴をもつために傾きには自信がない。内外面に刷毛目の痕跡があるが、非常に荒れる。

埋甕（図版38･59、第212図）

調査区西北端付近、64号住居跡の北西隅付近で単独で発見されたものである。掘形ははっきり確認できなかったが、深鉢の体部下半を埋め込んだもので、検出時も底部は確認できていない。口縁部の一部が内部に落ち込んでいた。

土器（図版139、第213図2・3）

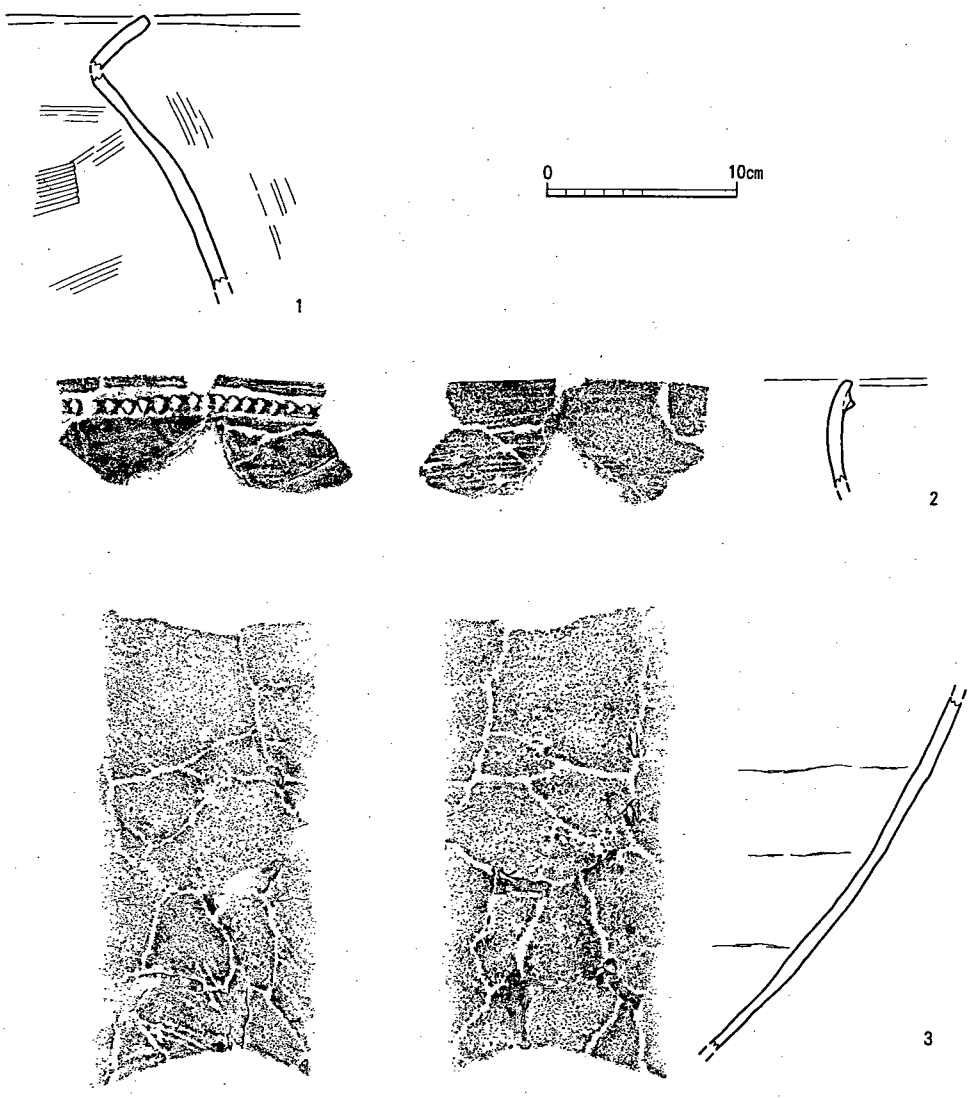
2は口縁部小片。口端部直下に刻み目突帯を付すが、その接合は雑である。また、刻みは条



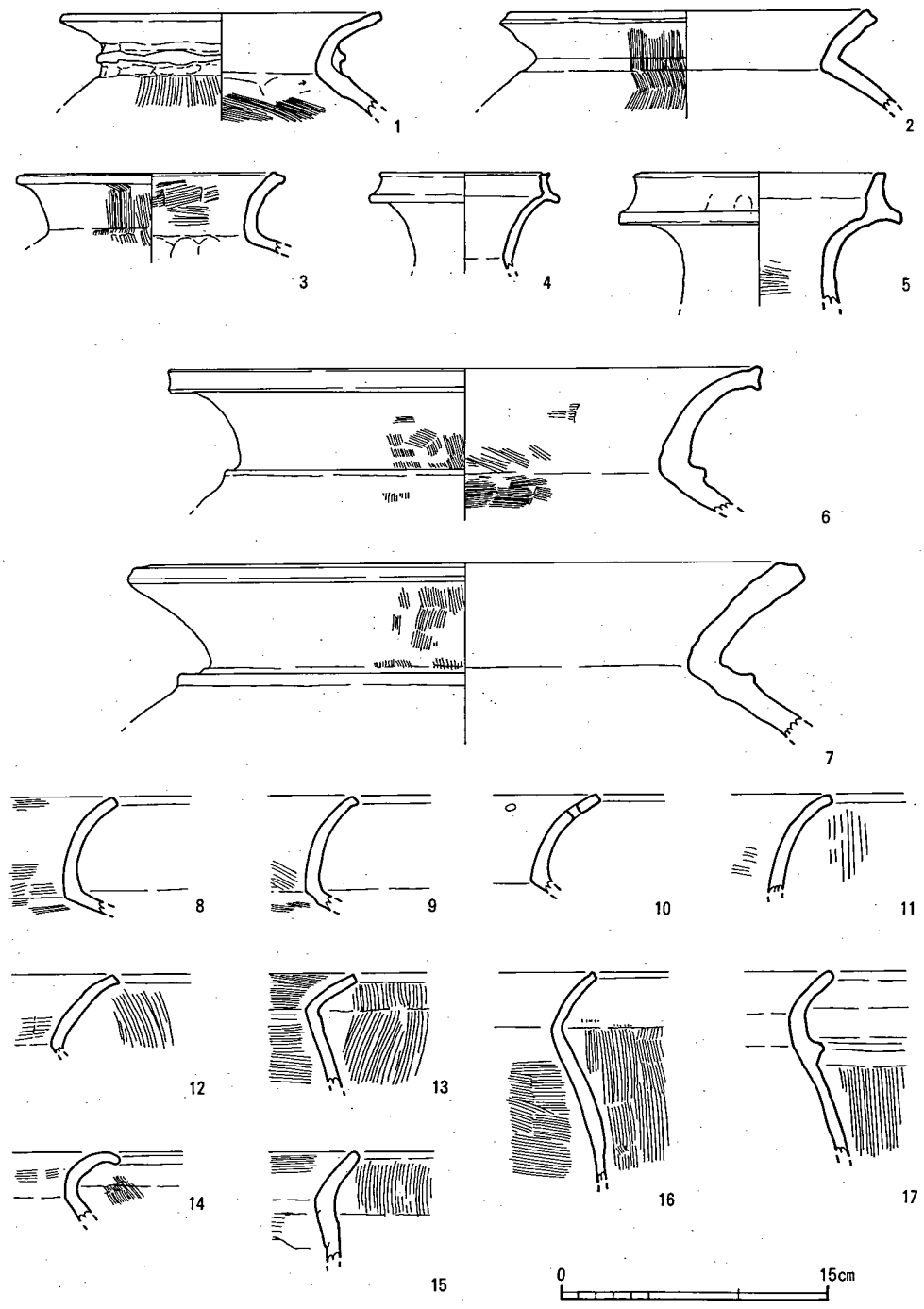
第212図　埋甕等検出状態実測図（1/20）

痕の原体で付す。

3は細片化して接合しえなかったために残存部の全体は復原していない。傾きも自信がないものである。内面は二段にわたって黒色の付着物（煤か）があり、その間は灰黄褐色に変色する。対応するように上段の黒色付着物のある付近から下位の外面は赤変する。本来の色調は灰褐色である。



第213図　埋甕等実測図（1/4）



第214図　土器溜状遺構出土遺物実測図１（1/4）

土器溜状遺構（図版59）

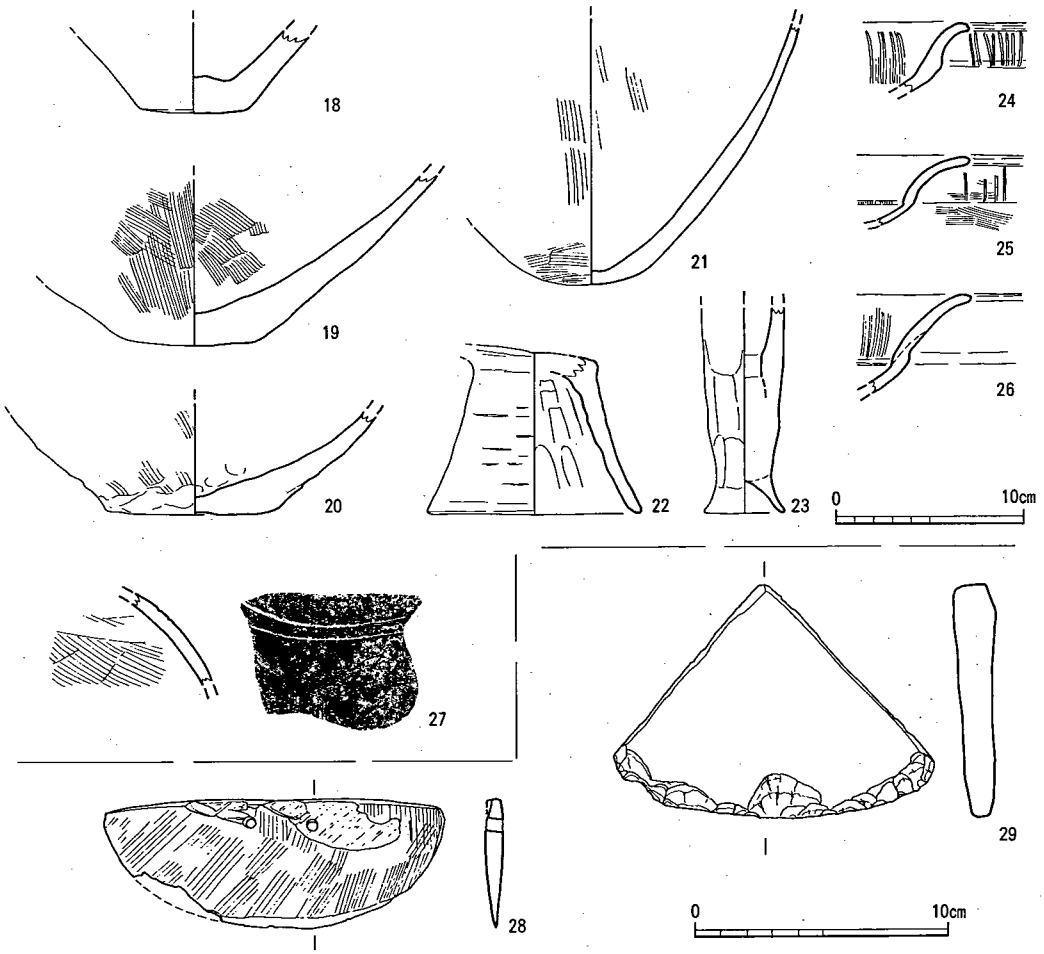
用水路西側調査区の東北隅付近で表土掘削時に検出した。したがって、検出面はほかの住居跡などより若干高く、土器群のみを残して周辺を掘り下げたために遺構の有無は不明のままで終わった。それにもまして、この周辺は湧水が甚だしく遺構検出作業自体がほとんどできなかったという理由もある。ただ、細片化したものや器表の荒れた土器が多いことは住居跡や土坑内の一括物ではないことを思わせる。

出土遺物

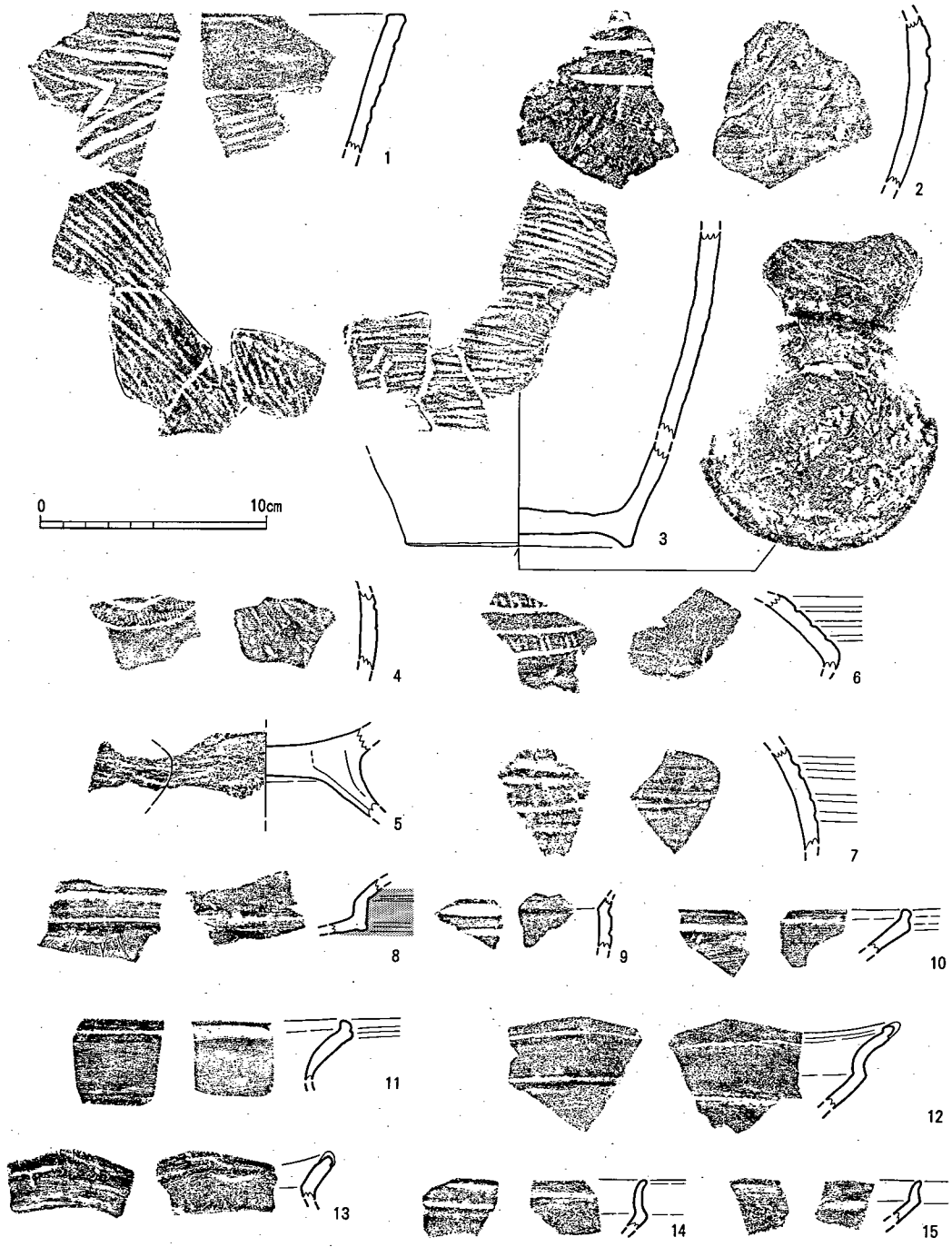
多くが細片化して出土した。また、石庖丁なども含まれている。

土器（図版138、第214・215図）

1は口縁部が強く外反し、頸部に突帯を付す。突帯は上下から指で強く挟んで変化を加えている。2も口縁部が強く外反し、端面が窪む。体部内面は篦削りで調整するようである。3は



第215図　土器溜状遺構出土遺物実測図2（1/4,1/3）



第216図　縄文土器実測図１（1/3）

口縁部の開きが小さく、これも端面に変化を加える。4・5は大小の違いがあるが器形の似た二重口縁壺。口端部は内傾あるいは水平な面を有し、屈曲部は発達してタガ状に突出する。いずれも器表が荒れる。6は口端部を上下に小さく肥厚させる。頸部の突帯はやはり不整である。7も口端部を肥厚させて変化を加えたもの。8～11は口縁部が高く外彎外傾するもので、いずれも端面をもつ。10では焼成前に穿たれた円孔がある。12も相似た口縁部。

14は口縁部が強く外彎し、端部が巻き込むような形態となる。15～17は屈曲の弱い甕。

22は支脚で、外面には叩きが微かに見える。23は手捏。小さな脚部を有し、体部は非常に深い。24～6は高杯で、三様である。

27は絵画土器。壺の肩部と思われる残片で、2条の篦描沈線がほぼ並行して走るが、左側がわずかに幅広となる。船であろうか。

石製品（図版138、第215図28・29）

28は暗灰色の輝緑凝灰岩岩製の石庖丁。孔は直に穿孔される。全面に粗い擦痕があり、刃部は研ぎ直しがなされるようである。29は灰色安山岩製品。1辺にのみ両面から細部調整がなされるが、刃部とはなりえていない。

縄文土器（図版139、第216～218図）

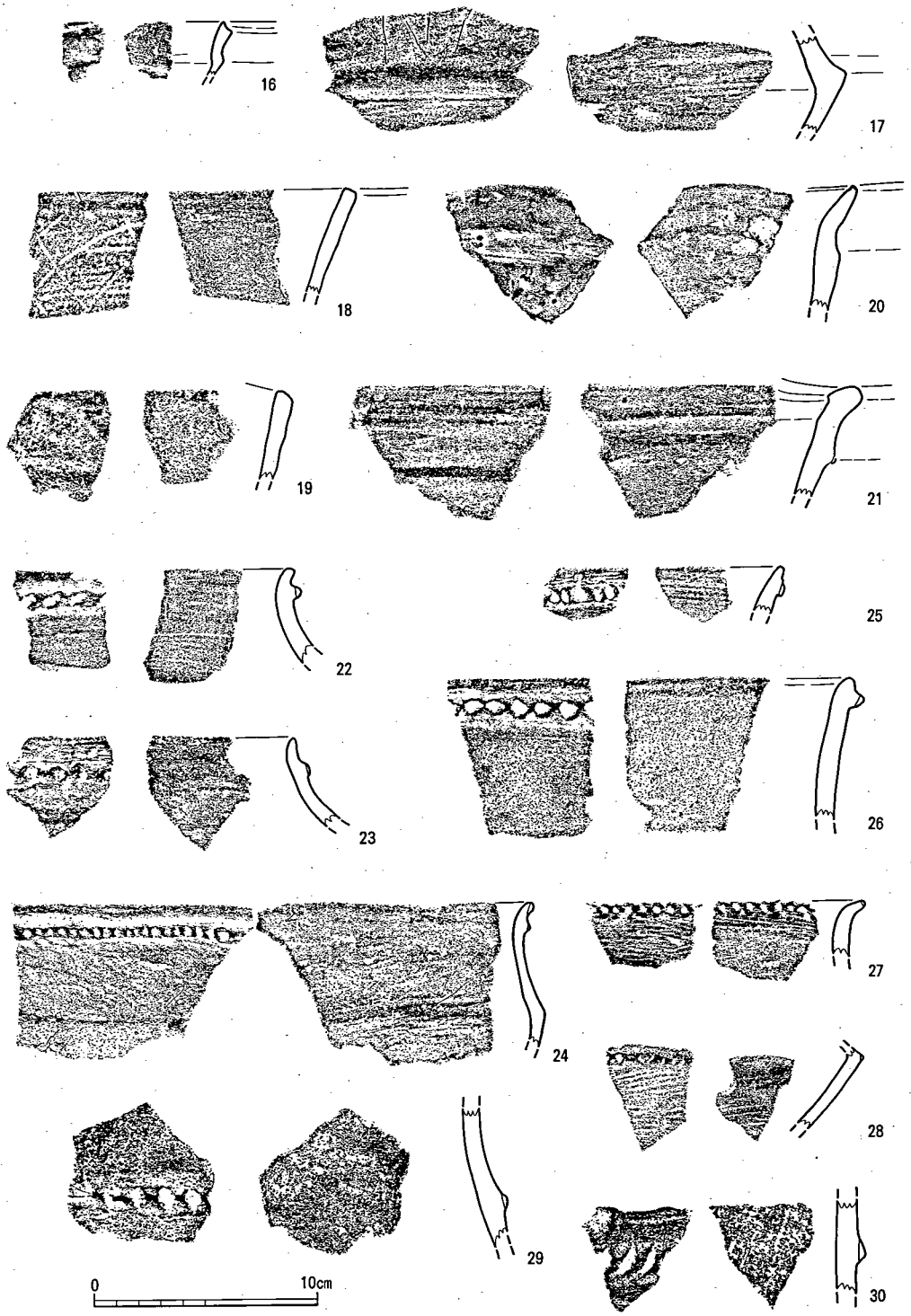
調査区内のほぼ全域から縄文土器片が出土している。先に行われた上唐原遺跡の調査では遺物が集中する付近の砂層（地山）中で住居跡を検出したということで、この調査でも34号住居跡の北、3号甕棺付近で遺構検出作業中に縄文土器片をかなり認めることができたために10数cm掘り下げたが、遺構らしきものは見えず、また遺物も途絶えたために中断した。

ここで報告する遺物は、該期の遺構に伴うというものではなく、住居跡や溝状遺構の埋土中に混入したものや、遺構検出作業中に採集したものである。

1・3は同一個体。口縁部は外反直行して端面を有するが、小片のために傾きは正確さを欠く。口縁部下に甘い凹線を主体として幾何学文を刻むが、単位は不明。底部は上げ底となり、周縁から体部下半はよく焼けて赤く変色する。内面は二枚貝腹縁を原体と直角方向に引いた条痕、外面ではそれに比して凹部が深く、角度を変えて調整するようである。後期前半頃に属するものと思われる。

2は弥生時代以降に属するとは考えがたいものであるが、内面に籾圧痕が付されていて帰属に苦慮する土器である。外面に直線的な単線を2条、その上位にも沈線が施文されるが内容は不明である。胎土は微砂粒が多く概ね精良といいうるものであり、外面は暗褐色～灰黒色、内面は灰褐色～灰黒色を呈する。

4は弧線間に巻き貝を使用した疑似縄文を刻むもので、その他の部位は丁寧に篦磨きが施さ



第217図　縄文土器実測図２（1/3）

れる。内外面ともに灰黄色を呈し、雲母を含む異質な土器である。5は脚部片で、この2点は北久根山式に属するものであろう。

6は磨消縄文風に沈線間に疑似縄文を付すもので、器表が荒れる。7は外面に雑な沈線を4条刻む、器面調整も雑な土器。外面は灰褐色、内面は灰黒色を呈する。これらは西平式に相当するものであろう。

8は三万田式に属する小片で、屈曲部以上の外面に赤色顔料が塗布されたようである。全体に篦磨きで調整され、屈曲部・沈線などの造作はシャープである。9も全体に篦磨きで調整される。外面上方には断面U字形の、下方にはV字形の沈線が刻まれ、内面にはシャープな稜線が見える。内外ともに灰褐色を呈する丁寧につくられた土器。

10は口縁部が直立外彎し、外面が灰褐色、内面は黒色を呈する。11はやはり口縁部が直立するものであるが、外面に華奢な沈線を刻む。これも内面が黒色、外面が暗灰色を呈する。両者ともに全面を篦磨きで仕上げるようである。

12は波状口縁を有するもので器表が荒れる。口縁部を内側へ肥厚させてシャープな段をつけ、外面では口縁部下・屈曲部直上に沈線を刻む。また、波頂部下は内側へ押し出して甘い凹点を付す。全体に黒褐色を呈する。13は灰赤色を呈する波状口縁小片。口端部は全体に丸味を帯び、口縁部外面に沈線が刻まれるようであるが、甘く不連続である。

14・15は口縁部が屈曲して短く直立外彎するもの。口縁部の長さが異なる。16は同様の器形となるが口端部が薄くならず、内側上方につままれる。

17は外面が灰黄色～灰赤色、内面が灰黒色を呈するもので、器表が荒れる。

18・19は口縁部が外反直行するもの。18は口端部が面をなし、外面に斜格子を刻む灰褐色の土器で、外面には粗い条痕が全面に見えるが、内面は丁寧な調整がなされる。19は器表が荒れるせいか口端部が丸く、全体にシャープさを欠くなる。

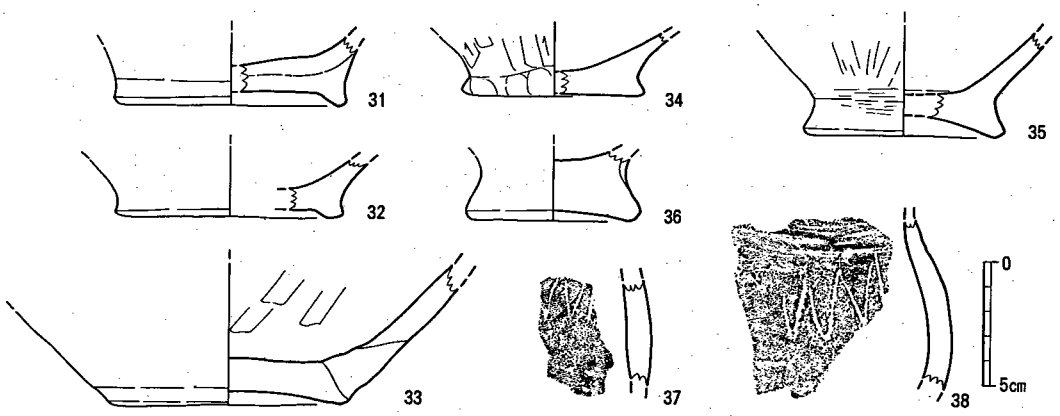
20は低く幅広の波頂部をもつ土器で、外面は灰黄褐色、内面は黒色～灰黒色を呈する。器表が荒れるが、頸部外面に巻き貝によるものと思われる条痕がはっきり残る。21も波状口縁の残片だが、形状は先の20と異なる。口縁部は内側に肥厚して甘い稜を形成し、外面では下方に突帯を付す。これも器表が荒れるが、外面は巻き貝条痕、内面は篦削りのように見える。

22・23は内彎内傾して端部まで反転して終わるもの。22は灰黄色～灰褐色を呈し、高い突帯に半截竹管状の原体を用いて斜位に刻みを付す。23は黒色を呈し、低い突帯に下から上へ向けて甘い刻みを付す。というより押捺したように見える。24は唯一反転復原可能で、復原口径は約22cm。口縁部は外側へ折り返したように肥厚し、直下に刻み目突帯を付す。刻みは小さいが、鋭利なものではなく鈍い。器表が荒れて調整痕ははっきりしないが、全体に黄白色を呈する。26は口縁部が外反するようである。口端部は内面に弱い面をもち、外面直下に高く突出する突帯を付す。刻みは大きく、連続する。器表は磨滅し、外面は明黄褐色、内面は灰色を呈する。

27は小片であるが、口縁部が直立して端部が短く外反するようである。端部に小振りの刻みを付す。残存部はほぼ灰黒色を呈するが、外面下端は灰黄褐色となる。19は反転屈曲部に弱い刻みを付すもの。内面は灰黒色、外面は灰黒色～灰黄褐色となる。29・30は大振りの刻みを付す、非常に器表の荒れる残片で、天地も判然としない。いずれも突帯は高く、29の刻みは幅広く、30のそれはシャープである。31・32は高台状となる底部で、体部の立ち上がり角度が異なるが、高台状の突出部などは相似た形状を呈する。31は約1/3が残存し、灰白色を呈する。32は1/4に満たない小片。33は上げ底となるもので、底部の1/3が残存する。

34・35は上げ底となって側縁が強くくびれる底部片で、これもよく似た形である。いずれも1/4ほどが残存する。34はくびれ部の形状が不整で、角閃石を多く含む在地の土器である。外面は灰赤褐色、内面は灰黒色を呈する。35は角閃石をまったく含まないもので、搬入されたものであろう。外面が肌色に近い明るい色、内面が淡灰黒色となる。36は鈍重な感のある肉厚の底部。上げ底・底部側縁がくびれる点などは先の2点に似る。

37は細線による鋸歯文を刻む小片。施文原体の先端は鋭利ではあるが部分的に先割れとなっている。胎土にとくに特徴的な点はないが、調整方法が比較的雑で、弥生前期のものとは思えない部分がある。色調は外面が灰褐色、内面も同様である。38もよく似た土器である。文様は37と同様の原体を使用した鋸歯文で、左下ー右上に描かれた線は鋭利、他方は浅く先割れとなる。この残片では鋸歯文上端に横方向の原体のあたりがよく残っている。ただ、その条痕は判然としない。また、内面では縦方向の粗く浅い刷毛目とも条痕ともいえないような擦過痕が残る。これも弥生土器と断じるには不安な土器で、色調も先の37に似る。



第218図　縄文土器実測図3（1/3）

その他の遺物（図版140、第219図）

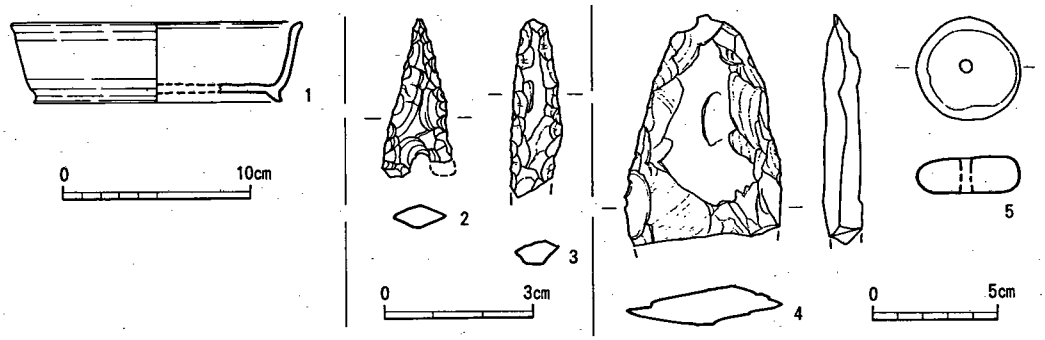
表採等の遺物を図示した。

1は掘立柱建物跡の南西、遺構検出面で採集した土器で、高台部の1/3が残存する。体部は垂直に近く立ち上がり、口縁部は強く横撫でされて外反する。高台は断面三角形となる。底部外面を回転篦削りで仕上げ、体部内外面は横撫で調整する。成形は轆轤を使用するが、焼成は酸化炎焼成で、暗赤色に発色する丁寧なつくりの土器である。

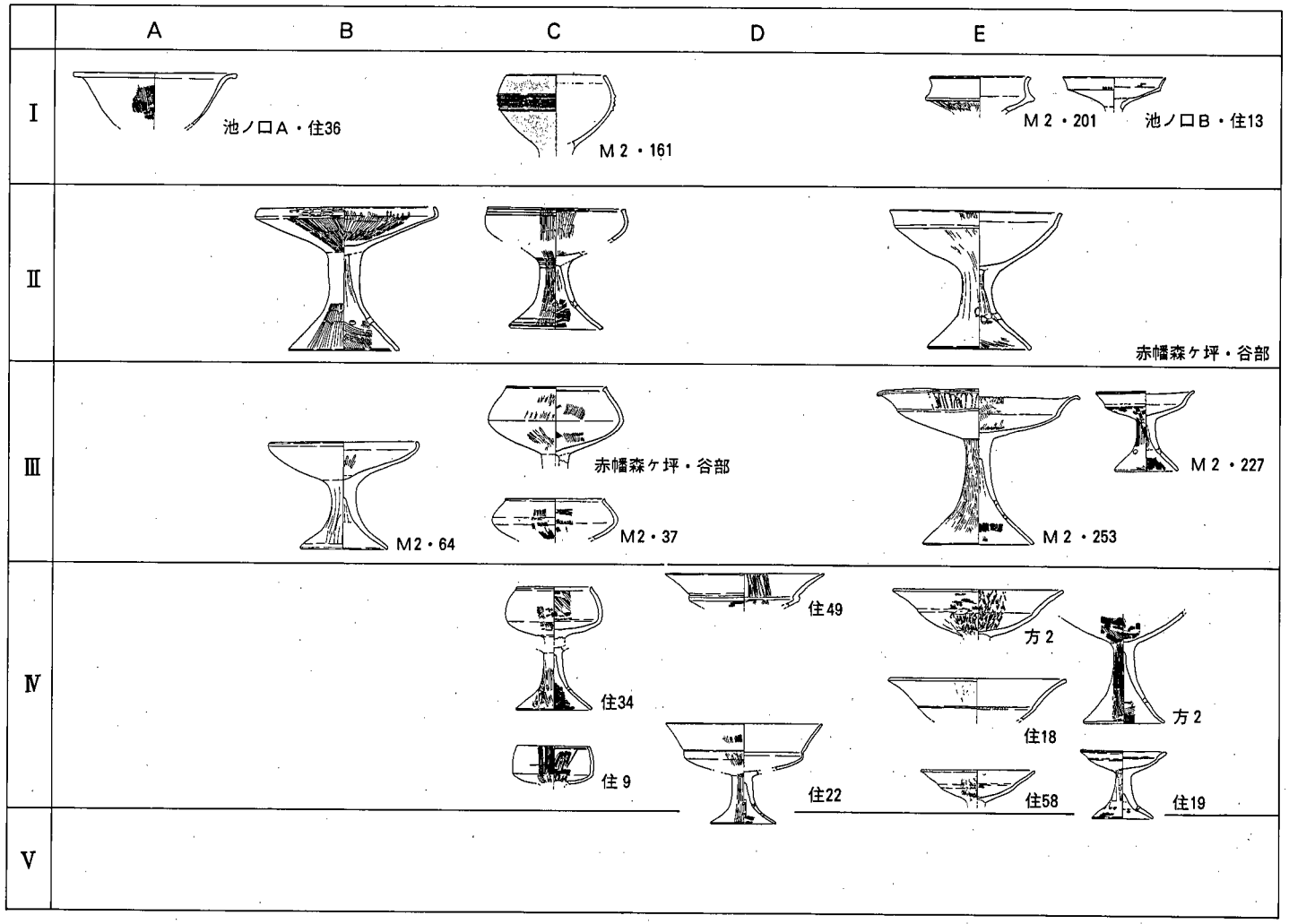
2・3は表採品でともに採集地点は記録していない。2は切先が鋭利で一方の逆刺と図右側縁の一部を欠損する。細部調整は丁寧で、形状もよく整っている。乳白色を呈する姫島産黒曜石でつくられる。残存重量は1.1ｇ。3はサヌカイト製の錐状の製品で、図下端で折損する。これも細部の剥離は丁寧であるが、身の断面形状は不整となる。

4は42号住居跡東南角に近い小柱穴から出土した灰白色安山岩製の打製石斧。上半が残存するのみであるが、剥離の痕跡などは非常にシャープに残っている。

5は厚みのある土製紡錘車。灰褐色を呈し、角が丸くなるために一見石製と見まがうほどである。穿孔は上下両端が丸味をもち、内部は直線的にみえ、焼成後に穿たれたもののようにみえる。重量は30.0ｇを測る。出土地を特定できない表採品。



第219図　表採その他の出土遺物（1/4,2/3,1/3）



第220図　高杯変遷図１（1/12）

Ⅳ　おわりに

この郷ヶ原遺跡では多くの遺構・遺物が出土した。検出した遺構は弥生時代後期後半～古式土師器にいたる時期の住居跡を中心とし、奈良時代の土器、中世の溝なども検出された。また、全域から縄文時代後期・晩期の遺物も採集されている。

この唐原地域は正倉院に残る大宝2年戸籍に記された「塔里」の故地に比定されるが、今回の調査では8世紀代の土器を検出したもののその故地の確認はできなかった。

以下では弥生末～古墳初期にかかる遺構・遺物を中心にまとめてみたい。

1．出土土器について

弥生後期には須玖式土器の変容・衰退とともに土器文化圏が大きく変わり、この地域ではとくに地域性が顕著である。近年、「北部九州」を対象にした後期（とくに後半）～古式土師器にいたる編年案がいくつか提出されている[註1]が、個別土器の位置付けや画期等の細部はともかく、大きな流れは同一のように見える。中でも高杯は変化を捉えやすく、広範な地域の比較が可能である。したがってまずこの地域の高杯を概観してみたい。その後にそれを基準として土器の変遷をみてみる。なお、なるべく近隣の遺跡を取り扱うようにした。

1)　高杯の変遷（第220・221図）

後期の高杯にはいくつかの形態があり、消長がある。これも先学の業績を参考にして弥生後期～古墳時代前期（いわゆる布留式）にいたる変遷をみてみる。

A：中期以来の鋤先状口縁を有するもの。この地域周辺ではまだ非常に乏しく、現段階では築上郡新吉富村池ノ口遺跡[註2]36・37号住居跡出土資料がほとんど唯一の資料である。また、築城町赤幡森ヶ坪遺跡[註3]谷部出土例もこの時期が相応しいと思われる。

B；杯部が直線的に浅く大きく開いて、先端を内側へ丸めるもの。これも系譜は不明だが、小型化する傾向があるようである。Ⅱ期で図示したものは赤幡森ヶ坪遺跡谷部出土のもので、そこでは口縁部を大きく折り曲げる例が多い。この郷ヶ原遺跡では折り曲げ部が小振りとなっていて後出的な要素であろう。これはⅣ期以降はほとんどみられない。

C；杯部が深く、体部が内彎するもので、中期の椀形杯部をもつものの系譜を引くと思われるもの。Ⅰ期としたものは椀形杯部で口縁部の内彎が小さく、体部が丸い。多くが突帯を付し、彩色する。2号溝状遺構Ⅱ区上・中層出土遺物をⅠ期に示した。それに連続するものか、何らかの外的要因を受けたものか、系譜関係がまだはっきりしていないが、口縁部が内側を向くものが以降も引き続いて製作される。Ⅱ期に示したものは赤幡森ヶ坪遺跡谷部出土例で凹線を多

用する。新しくなると小型化するとともに最大径部が下がり、体部の丸味が角張って行くようである。しかし、Ⅳ期には非常に少なくなる。

D；杯部が段をもって屈曲するもので、形態的にはC・Eの折衷的なものとなる。これも変化の方向は杯部上半の発達化へと向かうようである。

E；杯部が途中で屈曲外反するもので、これは北部九州のみならず瀬戸内地方を含めた広範な地域で共通する形態となる。口縁部（反転部以上）が長くなる方向へ変化する。

Ⅰ期では本遺跡2号溝状遺構Ⅳ区上層出土例、そして池ノ口遺跡B13号住居跡出土の瀬戸内系の搬入品と思われるものを示した。Ⅱ期では赤幡森ヶ坪遺跡谷部出土例を示したが、屈曲部がまだ上位にあって、反転が小さい。Ⅲ期に示したものは本遺跡2号溝状遺構Ⅲ区上・中層出土品であるが、屈曲部が中位にあって、強く反転する。同172・202のような杯部が深く、反転の弱いものは若干先出的と考える。これはやがて屈曲部以上がより発達し、外面の稜線が次第に痕跡化するとともに内面の段が明瞭となる。この形態もⅤ期遺構はほとんど見られないが、初期の墳墓出土例が知られる。なお、本遺跡では小型品も出土している。

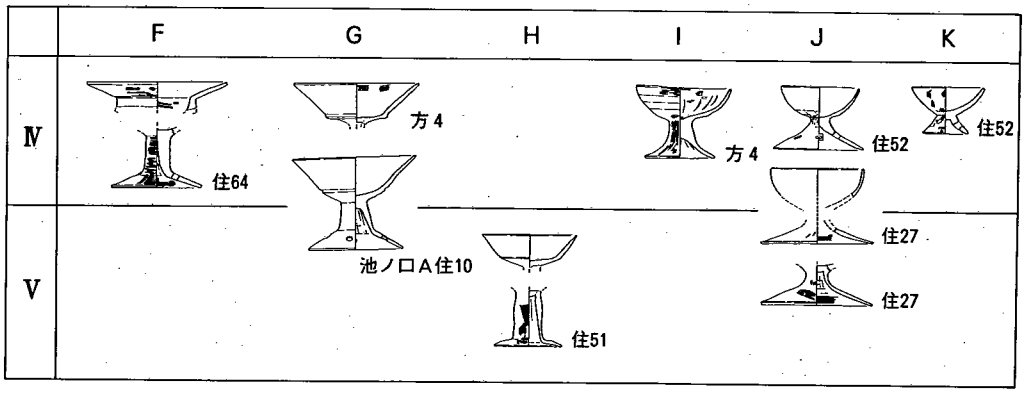
F；杯部の屈曲が段となり、垂直に近い面をもつもので、外来系。本遺跡のシャープな作風をもつものを一例図示したが、隣接する上唐原遺跡[註4]では後出的なものが多く出土している。

G；杯部下半が水平に近く、強く屈曲して直線的に長くのびる。畿内系のもので、以後長く高杯の主流の形態となる。

H；Gに似るが、杯部・脚部ともに萎縮したような形態となる。

I；椀形長脚のもの。なお、39号住居跡から口縁部を外反させた椀形の杯部が出土するが、本例と併せて稀少な例である。

J；椀形の杯部をもち、すぐに大きく開く脚部へと連続するもの。いわゆる畿内の庄内系の小型高杯である。



第221図　高杯変遷図2（1/12）

K；Jに似るが、杯部がやや丸味を欠き、脚部が短く直線的に立ち上がる。

いくつかの点を付記しておく。

この中でA～Cは在地系高杯で、とくにB・Cは往々にして「豊前系（型）」と呼称される。Dも京都郡豊津町川ノ上遺跡[註5]V号墳墓群出土土器中にも類品があってそのように理解できるものであろう。

Eは先にも記したように広範な地域で同系のものがつくられる。変化の方向はすでに諸氏の中でも杯部上半の発達化という方向で共通認識ができている。ここでは、後期になって模倣が始まったとされるこの種の高杯がまったく在地化し、B～Eの脚部と同じように変化するという、しごく当然のことを確認しておきたい。本遺跡ではⅢ・Ⅳ期に比定する例がほとんどでそれを遡る例を示しえないが、他遺跡を参考にすれば、Ⅱ・Ⅲ期の脚部は内彎気味に大きく開いて端部に面をもつ。Ⅳ期としたものでは内彎傾向が消えて直線的ないしは外彎気味にのびて萎縮したようなものとなる。Bのうちでは期に示した例はその中間的な形態を見せ、Ⅲ期の中でも時期的に後出するものであろう。

F～Kは畿内系。畿内系の高杯はⅣ期に出現し、やがて在地系土器を駆逐して行く。甕・壺といった器種がまだ在地色を払拭できないうちに高杯や小型土器（壺・鉢・器台等）は先行して汎西日本的な斉一化の方向へ動く。

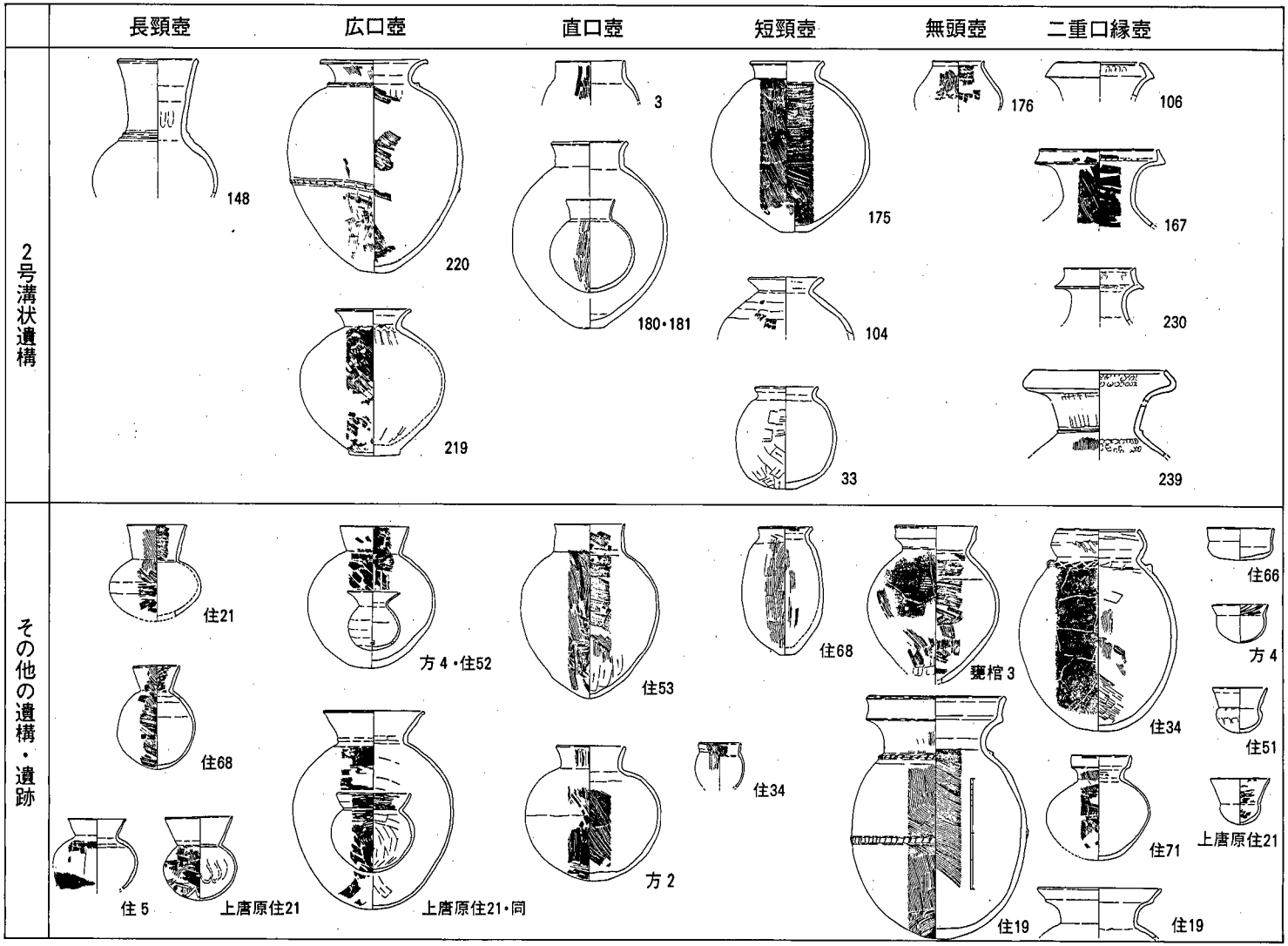
以上から本遺跡出土の高杯を位置づければ、2号溝状遺構・67号住居跡（遺構は検出できず）などから出土した数点が後期前葉に比定できるほかはいずれも後葉以降のものである。とくに、2号溝状遺構出土高杯のほとんどがDと分類した中でも、屈曲部が中位にあって短く強く外彎外反するⅢ期としたもので占められていることからその埋没時期を絞り込むことができる。

2)　2号溝状遺構出土土器について

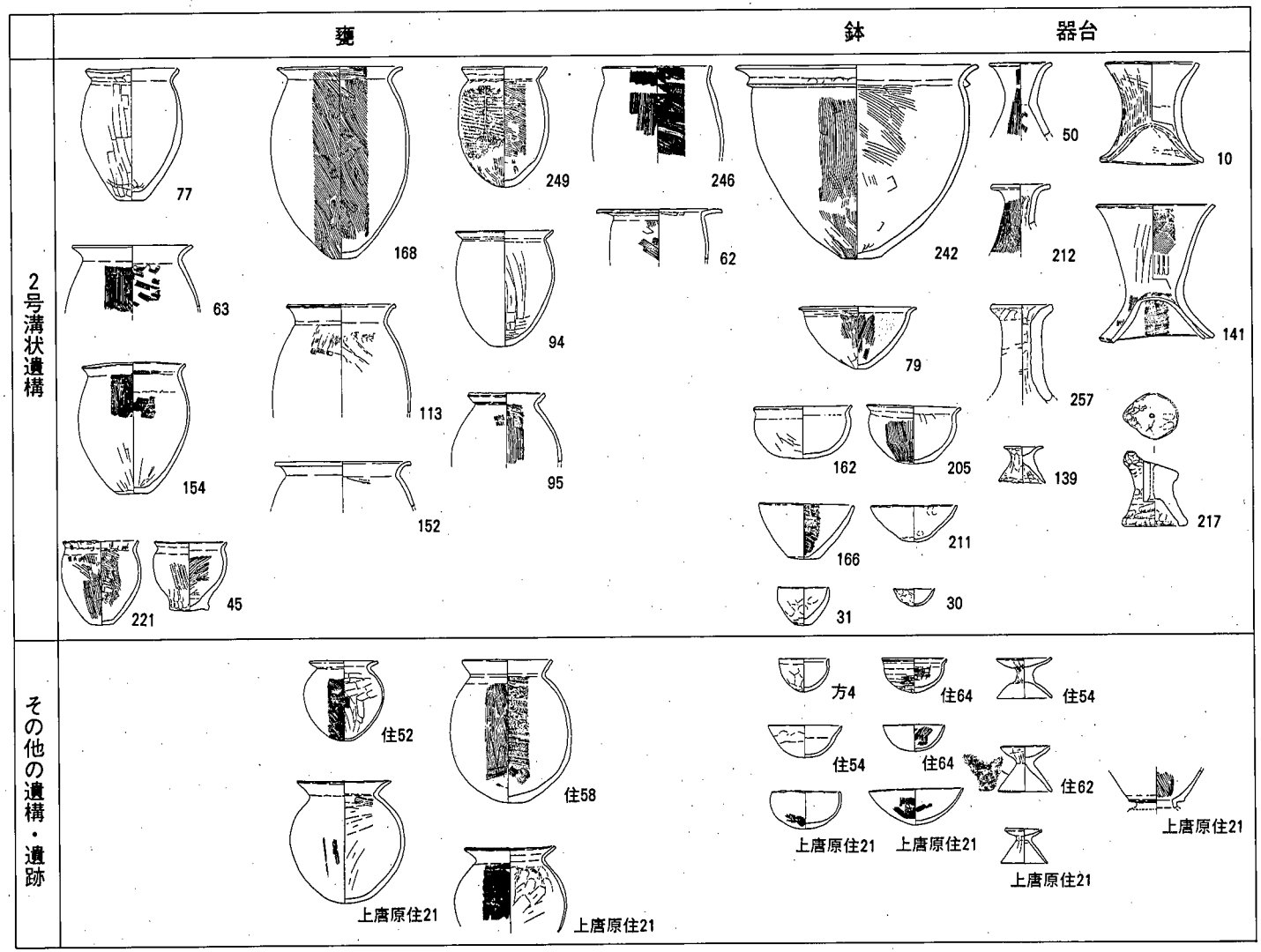
この溝状遺構からは多くの土器が石製品あるいは河原石と混在して出土した。先にも記したように、遺構は平面的には捉えがたい埋土をもち、土層図にもみるように自然堆積を思わせる層位もなく人為的に短期間で埋められたと推測させる状況であった。そうであれば、ここから出土した土器群はほぼ同時期に使用されていたものと見なすことができる。ただ、この溝状遺構には掘直しがされており、大部分で重複するが一部では溝底がずれて再掘削されることから、当初の溝状遺構に埋没したと思われる土器群が少量含まれる筈である。そこで、第222・223図にこの溝状遺構（以下、単に溝と略す）および各遺構・近隣の遺跡出土の主要な土器を示した。ただし、明らかに中期に遡る土器は除外している。また、紙幅の都合から、すべての器種・型式を網羅したものではない。

壺

長頸壺；溝から出土したこの種の土器は小さく外傾して直線的に長くのびる口頸部を有し、



第222図　2号溝状遺構出土その他の土器1（1/12）



第223図　2号溝状遺構出土その他の土器2（1/12）

頸部直下に１～２条の断面三角突帯を付す、肩の張りが弱いものである。これは在地系のもので、先行するものでは赤幡森ヶ坪遺跡谷部出土例のように口頸部が内彎して開き、体部が強く張る。中期に豊前地方で盛行する口縁部直下に突帯を付す長頸壺の系譜にのるものであろうと思われるが、瀬戸内以東の影響も無視できないかも知れない。

広口壺；頸部がＣ字形に外彎するものと、そこが屈折するものがあり、口縁部はいずれも外彎外反する。前者では肩部に突帯をめぐらせるものが多い。

直口壺；口縁部が短く直行し、肩部が撫で肩となるもの、直立して口縁部付近が小さく外反するもの、そして小さく外傾して直行する小型品が出土する。

短頸壺；口縁部が短く外反するもので、これも広口壺と同様、頸部の屈曲に強弱がある。

無頸壺；無花果形と呼ぶような形態の精製された土器。先行する赤幡森ヶ坪遺跡例では体部の張りがまだ小さく、最大径部が下位にある。

二重口縁壺；屈曲部以上が内彎内傾するもの、ほぼ直立するもの、外彎内傾して端部を外方へつまむものなどがある。押し潰されたような扁平な袋状口縁をとなるものもここへ分類しておく。

以上は大雑把な分類であるが、多用な形態が存在することは容易にわかる。一方、畿内系の高杯が流入して以降は二重口縁壺・大小の（広口）直口壺に収斂されて行く。二重口縁壺も口縁部が外傾するものが主流となり、内傾・直行するものは大型品に限定される。

甕

口頸部の違いで大きく3種類とその他の類例の乏しいものに分類して図示した。すなわち、頸部が緩く外彎して丸味をもつもの、頸部が屈折して内面に稜を有し、口縁部が外彎外傾するもの、そして同じく頸部内面に稜をもって口縁部が直線的ないし内彎してのびるものである。概ね体部は長胴傾向が強く、口端部はそれぞれに丸く終わるもの、面をもつ、あるいは端部が垂下するものなどがあり、底部も平底・レンズ状底・丸底などバラエテイがある。ただ、口端部を内側上方へつまむものはない。調整技法も篦削り・平行叩き・刷毛目が混在する。溝に後出するものとしては、58号住居跡のように口縁部が直角に近く外折して直線的にのび、体部が丸味をもってくるもの、52号住居跡出土のように口縁部が強く外反して体部が張りをもって短胴化するものが挙げられる。

鉢

大中小があり、大型品は口縁部がく字形に外折し、頸部に突帯を付す。中型品は短い口縁部をもち、体部が張りをもつもの、内彎してそのまま底部へ続くものがある。底部はこれも様々である。また、口縁部に変化を加えず、体部から直行するものも多い。小型品の多くは手捏で、体部に深浅がある。上唐原遺跡などでは浅いものが主体となる。

器台・支脚

前代以来のものは細身で端部が開き、つくりに精粗がある。抉り入り器台については赤幡森ヶ坪遺跡例では上下が対称形になる傾向があり、下方がくびれるものが後出的なものと思われる。本文中でも幾度か記したように、焼け方や破損状況から見て抉りのある方を接地させて使用させたものと思われる。また、出土例が少ないが沓形器台もある。

これらのうち、とくに筒形の器台は外来系土器の流入とともに姿を消すが、これは在地系の長胴甕では効果を発揮できても、短胴丸底の器形では安定を欠き、安定を確保すれば土器が大型化し、非効率的となるからであろう。以降、器台と称すべきものは畿内系の小型品あるいは山陰系の鼓形のものとなり、煮沸に使用するものは沓形のみとなる。

以上見てきたように、2号溝状遺構出土遺物中にはいわゆる畿内系の遺物はない。ただ、222に図示した甕や小型丸底の直口壺などはその影響を少なからず受けたものと思われるが、住居跡などに見られる小型土器のように形態の酷似した土器はない。このことは先にみた高杯のあり方と同様であり、この溝状遺構が弥生後期後葉でも終末期といわれる時期に埋没したことがわかる。ここで弥生終末と呼ぶ時期は庄内式土器の細かな編年は別にしてもそれらがこの地に流入する以前として解している。

2．2(5)号溝状遺構について

1)　2号溝状遺構と住居跡

幾度か記したようにこの遺構は人為的に埋没せられた状況を呈していた。その時期は畿内系土器が流入する以前、いわゆる庄内式期の範疇に位置づけられるが、詳細は典型的な甕が出土しないことから絞り込めない。ただ、ここでⅢ期としたものは柳田氏の「後期5式古段階」に、Ⅳ期としたものは同「新段階」に相当するようである。氏は「5式の段階」で福岡平野などの一部地域に庄内式土器が流入し、糸島・福岡平野などでは「5式新相」に古墳が成立するとしている。一方、井上氏の編年案に照らせば、同じようにⅢ期は「後期後葉1～2式」、Ⅳ期は同「3式」に比定できるものと考えている。氏は3式段階で庄内系甕が流入し、古墳（前方後円墳）の出現を続く古墳前期1式の中で位置づけている。氏の「後期後葉3式」は奈良県纒向遺跡で設定された纒向2式に対応するとする。

以上の両氏の論考は北部九州という広い視点でなされたものであるが、やはりこの溝は畿内系土器が流入する直前段階の様相を示していることがいえる。溝内出土土器群の様相が流入直前であるということは流入して直後に廃絶したと言い換えることもできる。また、掘削の時期については、1号方形周溝とした遺構がこの溝に切られていて考える資料になる。そこから出土した土器は溝出土土器に似るが、二重口縁壺を見るとむしろ後出的でさえある。切合関係の判断に間違いはないと思っているが、それを疑うような土器の内容であり、時期差はほとんど

ないのであろう。再掘削から廃絶が非常に短期間のうちに行われたといえる。

第224図には2号溝の埋没時期を基準として各住居跡出土土器を新古に分けてみた。

すべての住居跡から良好な状態で各器種の土器が出土していないので、中には判断できないものも当然存在する。とくに問題としたいのは溝が機能している間、すなわち埋没以前に西側（外側）に住居跡が存在するか否かである。出土土器のうちで溝埋没以前と断定できるものは67号住居跡としたものが唯一であり、65号住居跡は溝と同じ内容をもつ。ほかに判断しかねる遺構が43・50・53・61号住居跡である。このうち、43・61住居跡については積極的に溝以前とするに足る材料を欠く。また、50・53号住居跡出土品のように口縁部中程で外折する形態の土器は21・22号住居跡などからも出土していて、それらは溝埋没後に比定できるものである。したがって、確実に溝以前といえる遺物は先の65・67号住居跡出土品だけである。加えて、65号住居跡の土器群は到底良好なものではなく、細片化した土器溜まりのような状態で出土し、住居跡そのものを出土土器で時期判断するのに躊躇を覚える。また、唯一後期前半に属すると考えている67号住居跡としたものは遺構を確認できなかったものである。いささか乱暴な操作ではあるが、以上のことから溝埋没以前、その外側には1号方形周溝を除き住居跡などの主要な遺構が存在しなかったものと思われる。

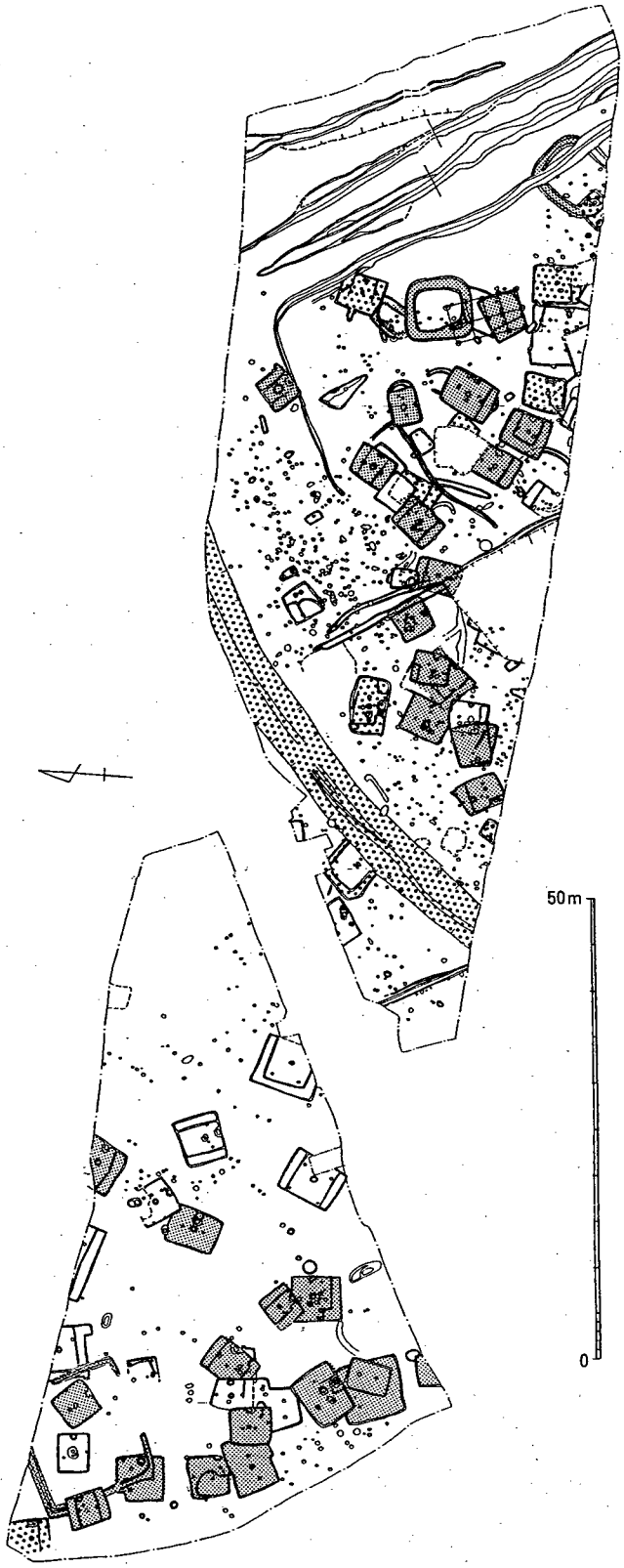
住居跡をはじめとする主要遺構からは対外的な緊張関係を思わせる出土遺物は決して多くない。しかし、溝埋没以降に居住域が拡大したことは間違いない。また、この遺跡からの出土土器には盛期の布留式土器（3種の小型精製土器や壺・甕）を含まず、継続期間は庄内式のある段階から布留式の初期という比較的短期間に想定されるものであるが、住居跡の数は40軒余と、それ以前に比して爆発的ともいえる増加を示す。こうした現象はとりもなおさず生産力の増加、生活の安定化といった理由が考えられるが、それらは戦のない平和な社会状況に裏打ちされるものであろう。したがって、状況的な面から先の2号溝状遺構は対外的な緊張関係の中での防御的な性格を有していたと考えている。

2)　5号溝状遺構

この遺構は2号溝状遺構の下層で検出されたもので、平面的には一部でその溝底を確認しえたのみである。上記したように出土遺物を弁別して取り上げることができなかったことから、その時期は確定できていない。

2号溝状遺構出土品とする中には大量の後期の遺物に少量の縄文土器・中期前半・後期前半の遺物が混入している。縄文土器はともかく、中期前半の土器についても該期の遺構はまったく検出しておらず、この溝との関連は無視してよいと思っている。そこで後期前半の土器に注目したい。

該期の遺跡例自体、周辺地域のみならず豊前地域に広く当てはまることであるがまだ乏しい。



第224図
2号溝状遺構を中心とした
遺構の先後関係(1/800)

実際に遺跡が存在しないのか、あるいは土器編年上の問題であるのか筆者には判断しかねるところであるが、それまで稠密に生活痕を残した人々が突如激減するような状況は想定しがたい。それはさておき、溝出土土器の中で61の赤色塗彩の壺底部、161のやはり赤色塗彩の高杯は後期前半に位置づけられるものである。ほかの多くの器種については判断が困難である。一方、住居跡を見ると、わずかではあるが4・32号住居跡そして先の67号住居跡出土とした土器が該期に比定できるものである。2・5号溝状遺構のような大規模な遺構の掘削・埋没・再掘削が終末期の短期間でなされたと考えることが非現実的なことである以上、5号溝状遺構の掘削時期はこの後期前半という時期に求めざるをえない。確かに該期の遺構は調査範囲内ではわずかに2軒ほどの住居跡に過ぎず、根拠が弱いものではあるが、周辺に広がる未調査区に更なる遺構が包蔵されていると予想して将来に期したい。

3．方（円）形周溝遺構について

今回は5基の方形周溝、1基の円形周溝そして住居跡などと切り合うためにそれと確認できず、説明を略した小型円形のそれらしきものが数基ある。また、5号方形周溝としたものは形状が不整であり、必ずしも確信をもったものではない。以下に規模の一覧を記す。

	内法規模（m）	周溝規模（幅×深；m）	備　考
1号方形周溝	4×4	0.6～0.9×0.2～0.3	2号溝に切られる
2号方形周溝	4.4×5	1～1.4×0.2	
3号方形周溝	5.2×6	0.8～1.4×0.4	
4号方形周溝	12×11	0.8×0.2	住61・66を切り、住64に切られる
5号方形周溝	2×3.5	0.6～0.8×0.2	不整形。2号甕棺墓が溝中にある
1号円形周溝	5.4～6	0.5～0.6×0.4	住18・19・22に切られる

以上のうち、1号方形周溝は2号溝状遺構に切られることや出土土器から、溝埋没直前に位置づけられる。先行する5号溝状遺構との関係は溝の規模がわからないことからはっきりしない。ただ、先に2号溝状遺構の外側には廃絶以前の遺構が存在しないと考えたところであり、この遺構は問題である。2～3号方形周溝は体部が球形となる甕や高杯の形態から溝埋没直後頃と判断した。4号方形周溝は畿内系土器を数点含む。

これらは内側に盛土が存在したような状況で溝が埋没しており、土器は四辺に無秩序な状態で散布していたことから転落したとも想定されるが、4号方形周溝のように大小の土器が無傷で出土した例もあり、一概には判断できない。そうした中で3号方形周溝での土器の出土状態は特異なものである。そこでは北辺の長さ3mほどの範囲に30点ほどの大小の多様な器種の土

器が炭などとともに詰め込まれたような状況で出土し、その多くが二次的に焼かれた状況を呈していた。それはそこで使用されたものを投棄したことを思わせ、使用の内容が火を伴うものであったことを示している。出土土器が各器種におよぶ点から見ても決して特異な祭祀ではなく、例えば予祝・収穫祭のような年中行事的なものであったと思われる。何よりも集落の内部に位置し、住居跡と切合関係があることからみても恒常的・禁忌的なものではなく一過性の性格を有していたのであろう。まして墓地と考えることはできない。

この種の遺構はまだ豊前地方ではほとんど例が知られていない。わずかに先の池ノ口遺跡で円形周溝が1基検出されている。内法長が5～6mの不整円形となり、溝は幅0.6～0.8m、深さ0.2mの規模で、時期比定に足る遺物はないという。これも庄内式～布留式の古い段階の集落の中にあって周囲に住居跡が近接する。

4．遺跡の変遷

この遺跡の第一の特徴は弧状に掘削されたと推測される2号溝状遺構とその内外に展開する集落である。集落の全容は知るすべもないが、調査区面積が約6,500㎡、環濠内面積は推定14,000㎡、そして遺跡範囲は旧河道で区切られる範囲としてほぼ100,000㎡近い規模が想定される。最後にまとめとして遺跡の変遷に触れたい。

縄文時代後期～晩期

今回調査を行ったこの郷ヶ原遺跡で最も遡る遺構・遺物はもちろん縄文後期に属する土器群である。後期全般にわたる遺物が採集されているが明らかな遺構は確認できなかった。東に近接する上唐原遺跡でも後期鐘崎Ⅲ式～北久根山式の住居跡などが調査されている。また、山国川を挟んだ三光村佐知遺跡[註6]でも後期の住居跡が数軒調査されている。

縄文晩期の遺物は調査区全域に散布していて、調査区西端で埋甕も検出された。これも晩期初頭から刻み目突帯文を有するものまで長期間の遺物が出土している。この時期の遺物はすでに下唐原川下遺跡[註7]で採集され紹介されており、やはり周辺に一定規模の集落の存在を思わせるものである。

視点を移して西側の段丘上、金居塚遺跡[註8]では旧石器時代から縄文時代の石器群が出土し、所属時期不明の大小の落とし穴状の土坑が検出されている。土坑の帰属時期がはっきりしないうらみがあるものの、この地域に古くから祖先が生活していたことを如実に示す。

弥生時代中期以前

2号溝状遺構中から厚底の底部が数点出土しており、中期初頭頃に比定できるものである。該期の遺構は検出できず、どの様な経過を経てこの溝状遺構に埋没したかは不明である。しか

し土器群の遺存状態は良好であり、これも近くに集落が存在したことを思わせる。

調査例としては下唐原宮園遺跡[註9]や上唐原の山国川河川改修で調査された上唐原稲本屋敷遺跡[註10]などがある。そこでは前期に遡って遺跡が開始されており、唐原小学校（上唐原）では中期の集落を調査[註11]、下唐原宮園遺跡に近接する川の上遺跡[註12]では中期の甕棺・石棺墓群が存在したといい、該期も広範な地域に集落が営まれていたことを示している。ちなみにこの郷ヶ原遺跡は、今年度報告の弥生中期の墳丘墓を検出した大平村大塚本遺跡[註13]まで1.4km、その拠点集落と目される牛頭天王遺跡[註14]までは2kmの距離を測る。前記2遺跡は中期に属するもので、後期以降に営まれた郷ヶ原遺跡であるが、関係無しとはしないであろう。

弥生時代後期～古墳時代前半

この遺跡では後期前半にすでに環濠集落が営まれたことが推測された。その後終末頃に再掘削がなされるがまもなく人為的に埋められ、その後には集落が一層の展開をみる。布留式期の前半で廃絶するが、東に隣接する上唐原遺跡では郷ヶ原遺跡の集落が廃絶する前後に開始される20軒近い住居跡や土坑からなる集落が検出された。第226図に一部を示したように、この遺跡周辺では試掘調査で更なる範囲に遺跡が広がることが確認されており、全容は到底窺い知れないものの、大集落が存在したことはほぼ間違いない。また、この遺跡と同じ頃に営まれたものと推定される穴ヶ葉山遺跡の石棺墓群は郷ヶ原遺跡の西1.5kmの丘陵上に位置する。100基を優に越えると推定される石蓋土壙墓を主体とする墓地群で、舶載内行花文鏡片や素環頭などの豊富な鉄製品を伴う、ベンガラを多用した厚葬墓群であった。それ以外にも方形に配列された20基ほどの土壙墓・石蓋土壙墓群などからなる金居塚遺跡など、郷ヶ原遺跡西方の段丘・丘陵上の切り通しなどには弥生終末頃と思われる多くの石蓋土壙墓が露見していて、それらの調査が進展すれば対応する集落やその実像が一層明らかとなるであろう。

また、同じく郷ヶ原遺跡西の段丘肩には能満寺[註16]・西方[註17]といった古式の前方後円墳が存在する。西方古墳は遺跡から500m、能満寺古墳は1kmの距離にあって、ともに地域の盟主に違いない。能満寺古墳群では前方後円墳に前後する小型墳から布留式前半期に属する土器が出土しており、郷ヶ原遺跡が廃絶し、上唐原遺跡などへ拡散する前後に営まれたと考えられる。両古墳の本貫地は当然この地域に求められ、近い時期に居館の様相も判明するかも知れない。

それはともかく、集落の消長と弥生的墳墓・初期の前方後円墳などが小地域の中で比較的明らかになったことの意義は大きく、「古墳文化を受け入れた社会」を考える上で格好の研究材料が得られた。

古墳時代～中世

古墳時代後期の土器小片が若干出土するが、遺構は確認できない。上唐原遺跡では竪穴式住

居など該期の遺構が検出されており、周辺からの流れ込みであろう。

遺跡東端付近の住居跡や溝状遺構から8世紀を中心とする時期の土器がかなり出土するが、該期の遺構としては柱穴から須恵器小片を出土した総柱建物跡が唯一想定されるものである。先にも記したようにこの唐原地域は正倉院に残る戸籍断片の「塔里」、『倭名抄』の「多布郷」に比定された地域である。過去の周辺地域の調査ではまだ数基の火葬蔵骨器[註18]以外にそうした古代・中世の顕著な遺構を検出していないが、今回は溝状遺構などを検出できた。それらは溝底のレベルがほぼ一定であり、かつ石原状の地山に掘り込んでいることから耕作に伴う水利用とは思えない節がある。掘立柱建物が溝状遺構と近い方位をもって近接することからあるいは集落を区画するものかも知れない。

註1　武末　純一「福岡県東部の弥生後期土器」(『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料、1990)
柳田　康雄「九州地方の弥生土器　高三潴式と西新町式土器」(『弥生文化の研究』　4　弥生土器Ⅱ、1987)
柳田　康雄「土師器の編年　九州」(『古墳時代の研究』　6　土師器と須恵器、1991)
井上　裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」(『児島隆人先生喜寿記年論集古文化論叢』、1991)
前田　義人「高島式土器の終焉」(『北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室　研究紀要』2、1988)
梅崎　恵司「各地域における弥生時代後期土器の様相　東北部九州ー北豊前」(『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会資料、1996)
田崎　博之「各地域における弥生時代後期土器の様相　東北部九州ー南豊前」(『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会資料、1996)
註2　福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集、1996)
註3　福岡県教育委員会「賽ノ神遺跡　赤幡森ヶ坪遺跡」(『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(8) 上巻、1992)
註4　福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1995)
福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅱ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996)
註5　福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1996)
註6　大分県教育委員会「佐知遺跡」(『大分県文化財調査報告書』第81輯、1989)
註7　宮本　工・村上　久和・城戸　誠「山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡」(『九州考古学』59、1984)
註8　福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1995)
福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅱ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1996)
註9　福岡県教育委員会「下唐原宮園遺跡」(『一級河川山国川築堤関係関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1998)
註10　福岡県教育委員会「上唐原稲本屋敷遺跡」(『一級河川山国川築堤関係関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1997)
註11　唐原小学校講堂改築工事に伴って大平村教育委員会が調査。
註12　『福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)』1976に登録。筆者も現地で中期土器を採集したことがある。
註13　福岡県教育委員会「大塚本」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998)
註14　新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集、1978)
註15　大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第8集、1993)
註16　大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
註17　前出「金居塚遺跡Ⅰ」に紹介。
註18　前出穴ヶ葉山遺跡・中桑野遺跡で出土。その他の採集品については以下の文献で紹介がある。
上野　精志「火葬墳墓の研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』xx、1977)

V　自然科学的分析

－豊前バイパス郷ケ原遺跡・金居塚遺跡出土赤色顔料分析－

別府大学助教授　本田光子

1．はじめに

郷ケ原遺跡出土の土器、石器に付着している赤色物、および金居塚遺跡の弥生時代終末の石蓋土坑墓７基、土坑墓４基からの出土赤色物15点について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察および蛍光Ｘ線分析を行った。

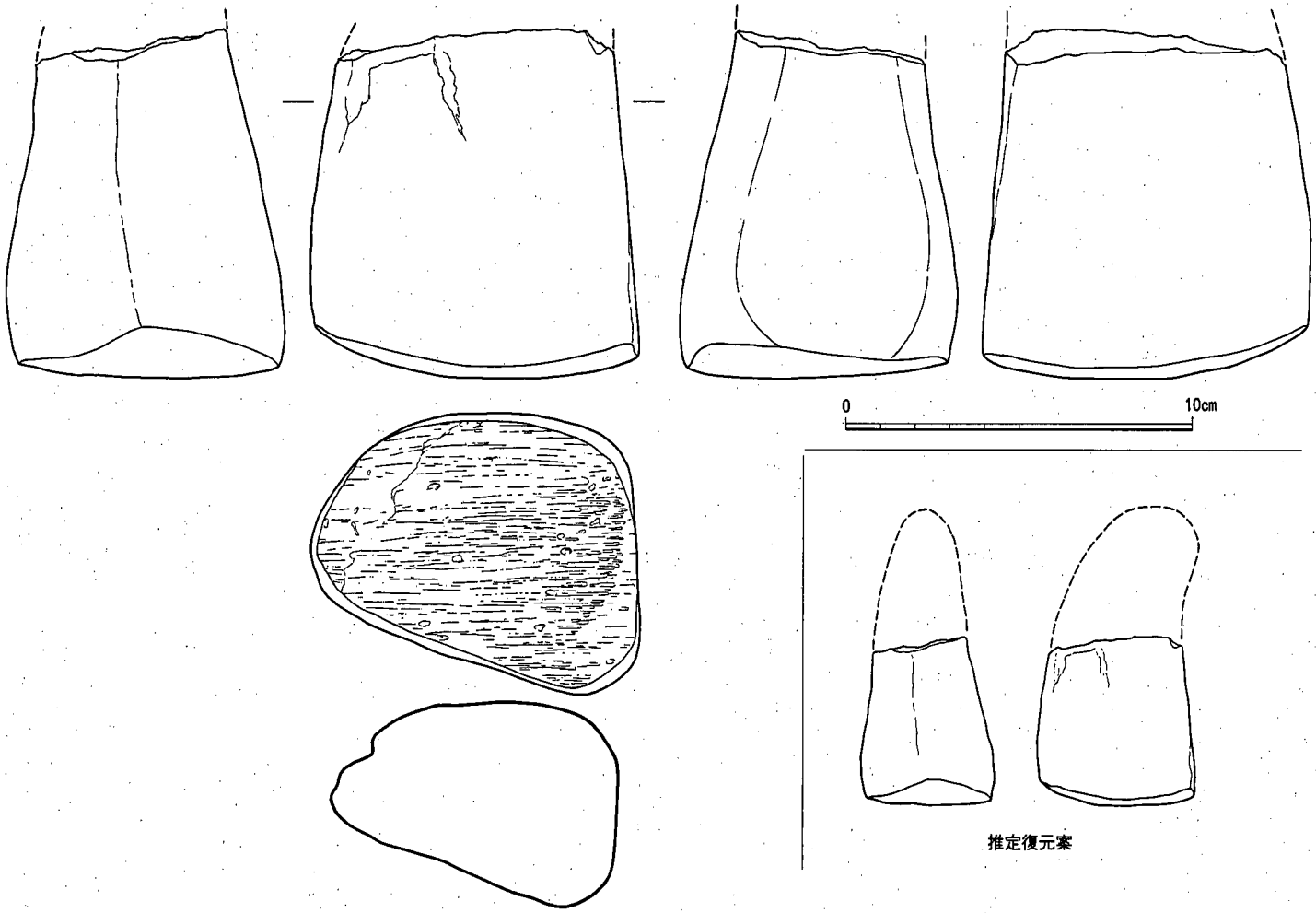
出土土器や石器に付着した赤色顔料や墳墓出土例に関する現在までの知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

今回の資料のうち、土器は赤色物の付着状態や外観等から朱専用の内面朱付着土器と考えられる。土器のうち、石杵については、肉眼観察ではほとんど赤色物を認めることはできないが、その形状から見て朱専用のＬ字状石杵と考えられる。これら付着している赤色物は赤色顔料の朱である可能性が高いが、砥石については特定の赤色顔料が付着している可能性はない。

2．試料

依頼を受けた試料について、実体顕微鏡下で観察を行った。

郷ケ原遺跡出土土器（第171図79）は、内面全体に、赤色物が粉状ではなく擦り込まれたように密着して付着し、ヒビ割れなどに深く染み込んでいる。赤色物は肉眼でも赤色顔料の朱であると思われ、内面朱付着土器の特徴を備えている。蛍光Ｘ線分析では赤色物の付着した口縁部をそのままで測定した。石杵（第200図28、257頁に別途掲載）は、肉眼観察ではほとんど赤色物を認めることはできない。磨面の擦痕の窪みには赤色物の残存は認められないが、磨面の側面端部と握り部側（背）面の窪みに僅かに残存していることが実体顕微鏡下で観察された。検鏡用に針先につく程度の量の赤色物を採取した。蛍光Ｘ線分析には石杵の赤色物が付着している部分について、そのままで測定を行ったが、赤色物の量が僅かでしかも表面に付着していないことから、良好な結果を得ることができなかった。そこで、スコッチメンディングテープを約径１㎝の面積に強く押し当てて窪み奥の赤色物を採取し、そのテープを試料として測定した。砥石（第199図27）は、検鏡用に針先に付く程度の量の赤色物を採取し、蛍光Ｘ線分析には赤色物が付着した部分をそのまま測定した。



郷ヶ原遺跡２号溝状遺構Ⅳ区上層出土石杵実測図（別府大学院生　志賀智史氏測）(1/2)

金居塚遺跡出土赤色物については、実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を検鏡用に採り、残りを研和して蛍光X線分析に供した。X線分析試料には土砂がかなり含まれている。

3．顕微鏡調査

顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、管（パイプ）状、塊状、棒状、板（偏平）状、球状、不定形等様々な外観を持つ。

今回の試料には、郷ケ原遺跡出土の土器、石杵について赤色顔料としては朱粒子を認めた。それ以外の試料にはベンガラ粒子のみを見い出し、朱粒子は認められなかった。出土ベンガラは管状粒子を持つ物と持たない物に大きく分けられるが、本試料のベンガラには、いわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。

4．蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。別府大学設置の㈱堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESA500を使用し、15kV－440μA；50秒、15kV－20μA；50秒、真空の条件により測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来すると考えられるので表中では省略した。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

5．結果と考察

調査結果は表に示した通りであり、赤色物はNo.1・2が赤色顔料朱で、No.3～15がベンガラであった。

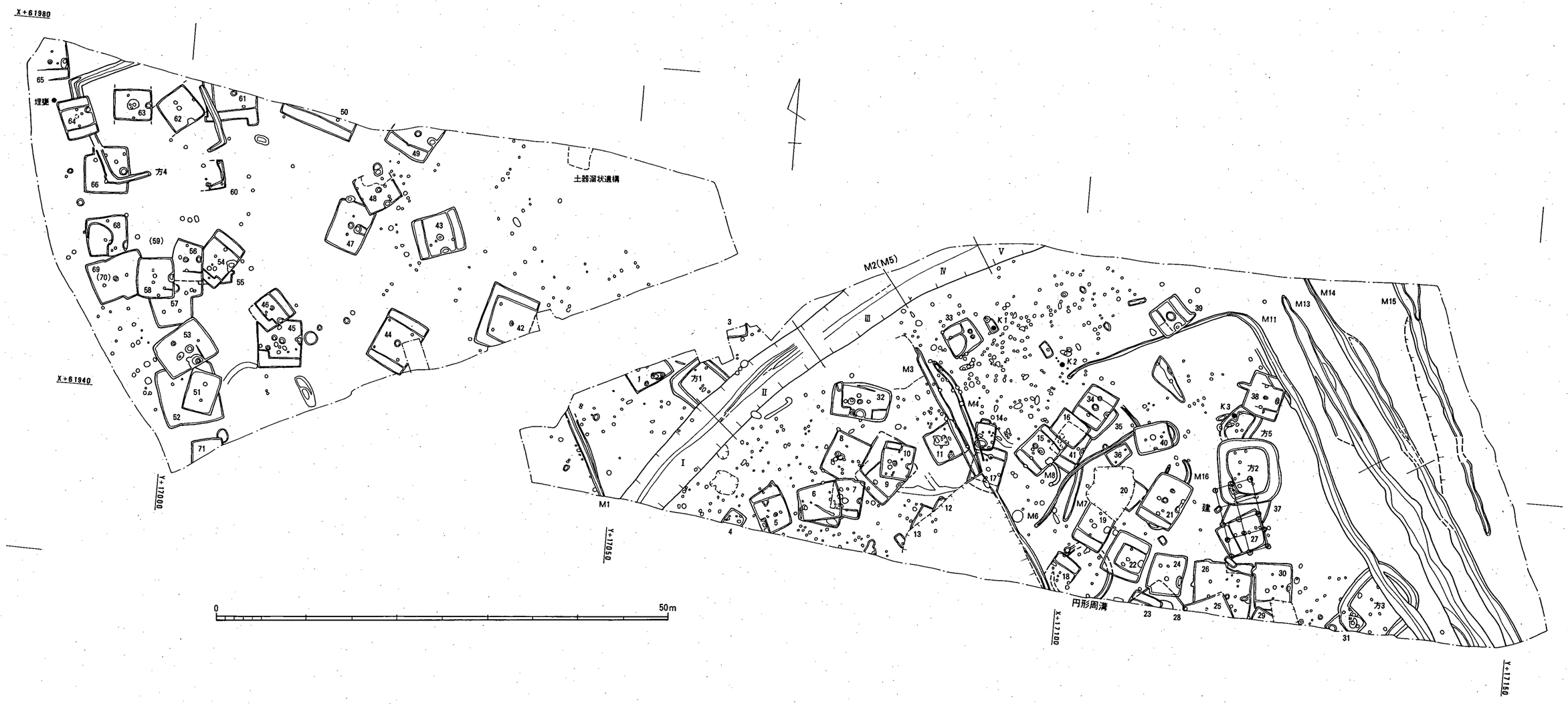
内面朱付着土器や石杵は、近畿地方の弥生時代中期末以降期から古墳時代初頭まで、瀬戸内、北九州地方で近年認められるようになったもので、「仙薬製造」用土器および朱専用擦り石と推定されているものである。内面朱付着土器は甕や鉢が多いが、特殊な専用土器である広片口

分析試料一覧と分析結果

No	試料 出土遺跡・遺構	顕微鏡観察	蛍光X線分析 鉄	蛍光X線分析 水銀	赤色顔料の種類
1	郷ヶ原遺跡　内面朱付着土器	朱	＋	＋	朱
2	郷ヶ原遺跡　L字状石杵	朱	＋	＋	朱
3	郷ヶ原遺跡　砥石	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
4	金居塚遺跡　11号土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
5	金居塚遺跡　12号土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
6	金居塚遺跡　14号土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
7	金居塚遺跡　17号土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
8	金居塚遺跡　11号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
9	金居塚遺跡　13号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
10	金居塚遺跡　14号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
11	金居塚遺跡　15号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
12	金居塚遺跡　16号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
13	金居塚遺跡　17号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
14	金居塚遺跡　18号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
15	金居塚遺跡　20号石蓋土坑墓	ベンガラ	＋	－	ベンガラ

皿が、岡山県百間川遺跡、徳島県名東遺跡、香川県上天神遺跡、福岡県辻垣長通遺跡、須玖永田遺跡等で出土している。この内面朱付着土器にはL字状石杵が共伴する場合が多いが、広片口皿が多く出土した上天神遺跡や辻垣長通遺跡では石杵は出土していない。山陰地方では形状は異なるものの同じように赤色顔料用の擦り石が墳墓から出土している。L字状石杵については滋賀県五村遺跡例が墳墓出土であるが、それ以外はすべて（二十数例）、本試料同様集落の住居あるいは溝出土である。朱関連遺物については集落内祭祀や葬送儀礼の観点から近年特に注目されている。本例は良好な試料であり、今後も検討を続けたい。

弥生時代後期から古墳時代の墳墓では「赤色顔料朱とベンガラの使い分け」が行われる場合が多いが、金居塚遺跡の今回の試料では認められなかった。弥生時代の集団墓出土赤色顔料についての調査例はまだ少ないが、a類「遺骸に朱だけを使う」、b類「遺骸には朱、埋葬施設内面にはベンガラを使い分ける」、c類「埋葬施設（内面・床面）にベンガラだけが使われる」場合が認められる。時代は、a類は山陰、山陽、近畿地方において認められ、b、c類は北九州地方以外では認められないが、古墳時代にはc類が最もオーソドックスな使い方として全国的に行われる。北九州市高津尾遺跡ではa、b、c類が認められ、川の上遺跡ではa類は認められなかった。a類の存在は朱だけを多用する地域との交流等が想定される可能性が高い。本例はc類のみから構成されるわけだが、極めて在地的ともいえるであろう。



第225図　郷ヶ原遺跡遺構配置図（1/400）

第226図　郷ヶ原遺跡・上唐原遺跡周辺地形図（1/2,000）

図　　版

豊前バイパス周辺航空写真

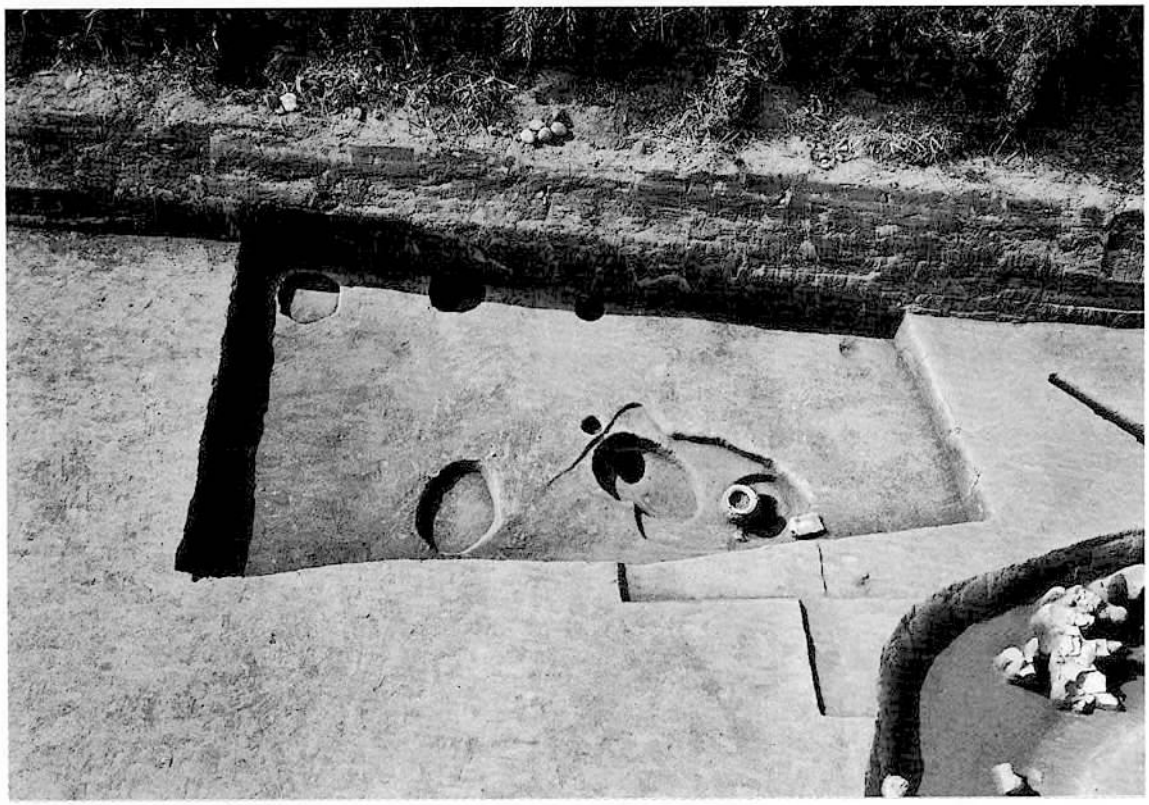
調査区全景（南東上空から）

調査区全景（東上空から）

調査区東半（東上空から）

調査区西半（東上空から）

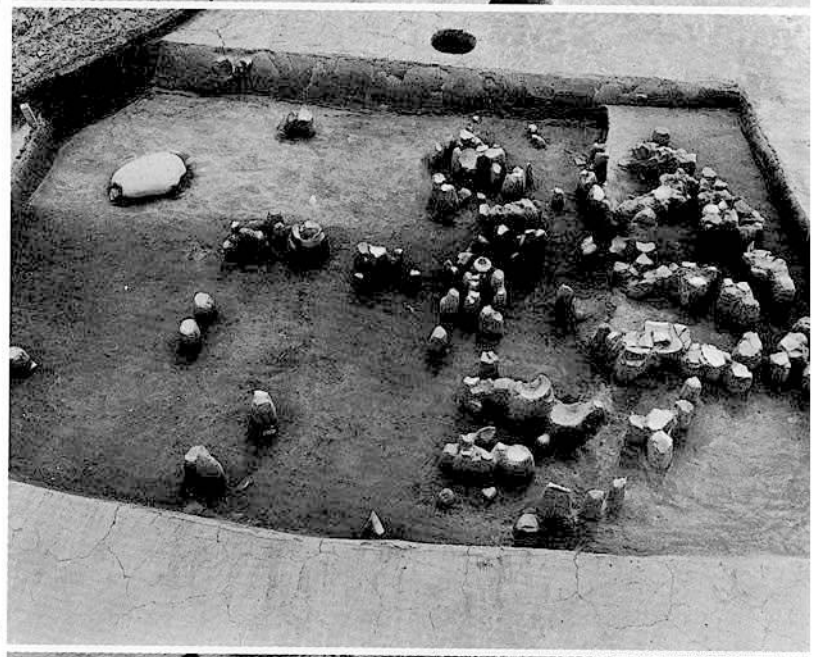
図版 4



1号竪穴式住居跡（南東から）

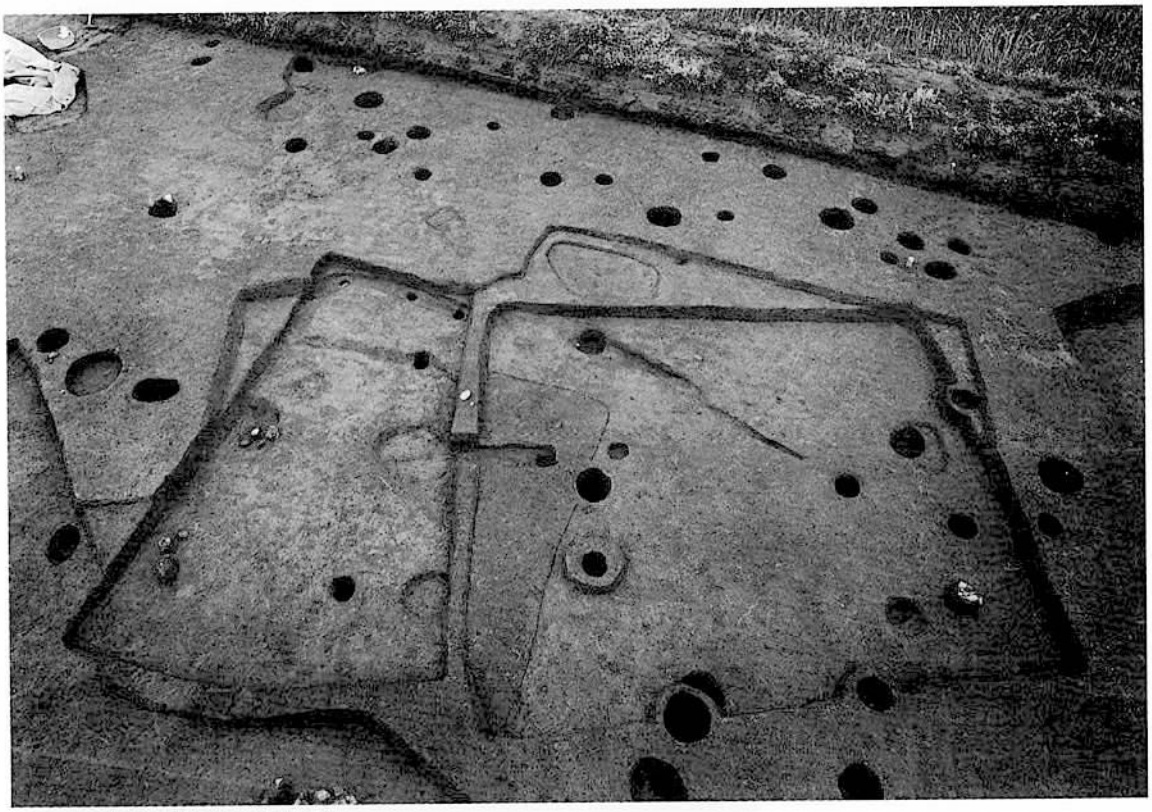
3号竪穴式住居跡（南から）

4号竪穴式住居（北東から）

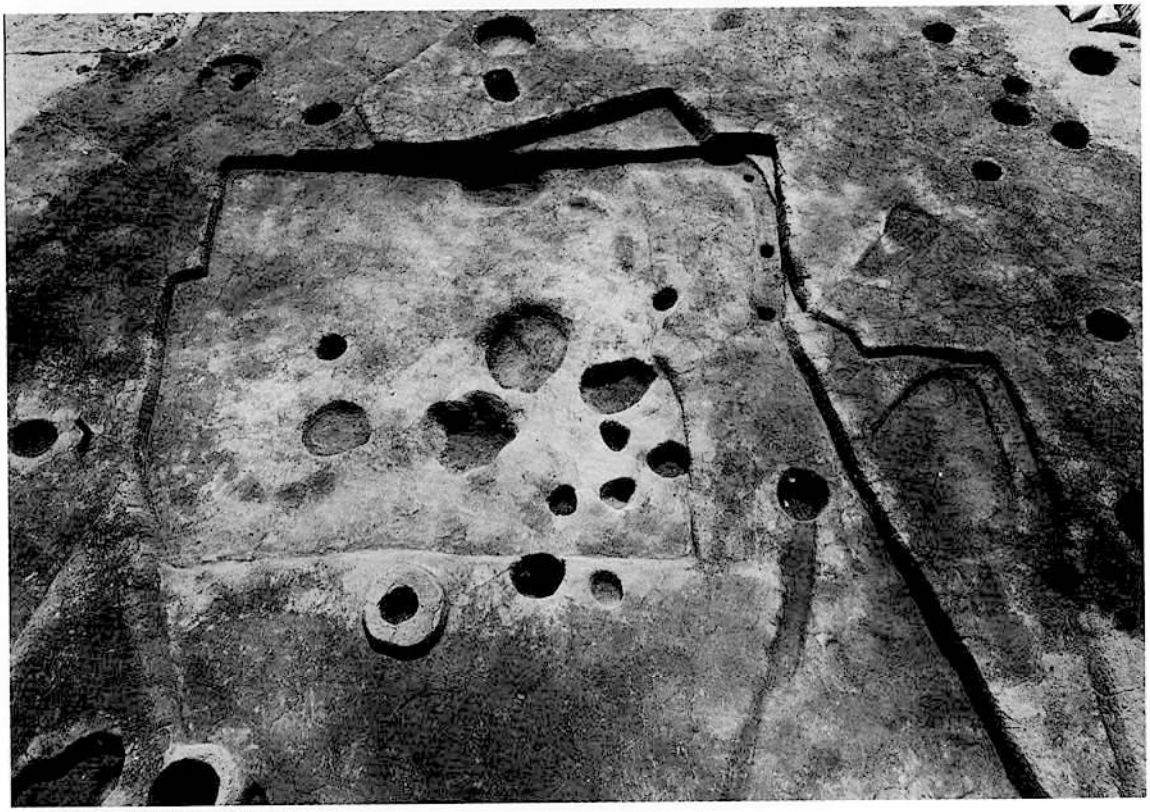


5号竪穴式住居遺物出土状態（北東から）

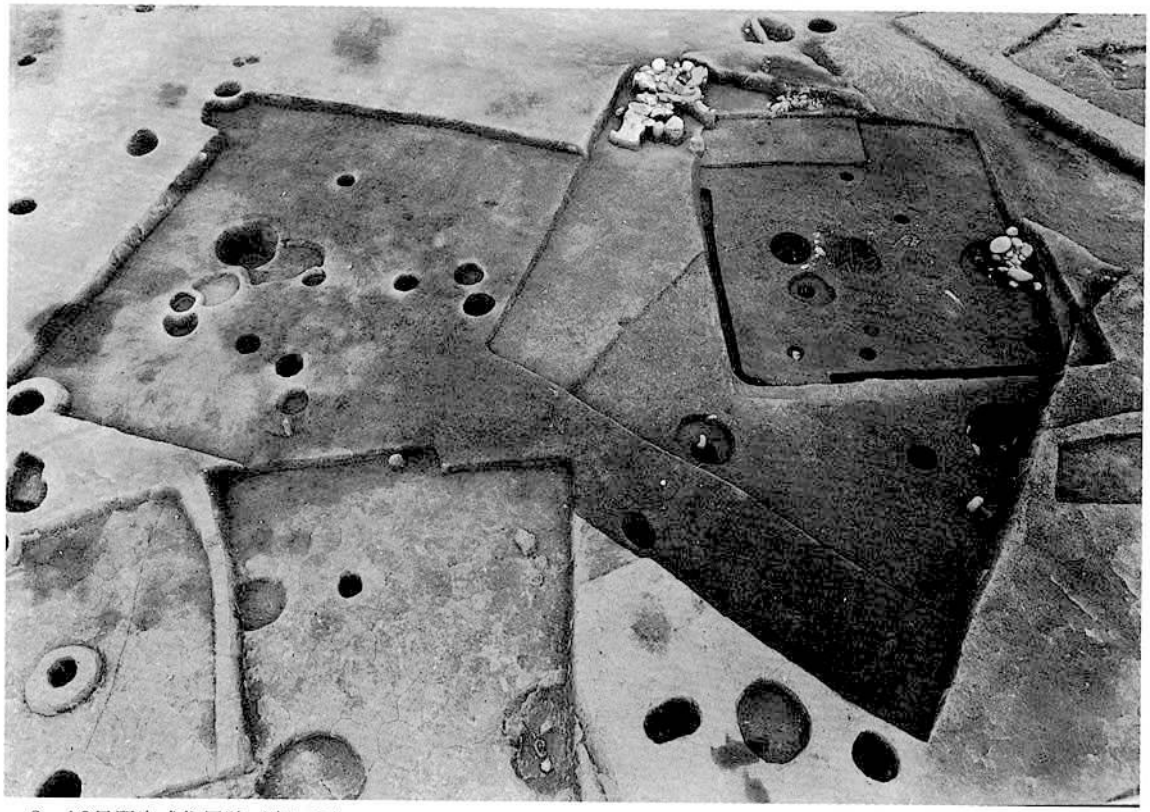
5号竪穴式住居跡（北西から）



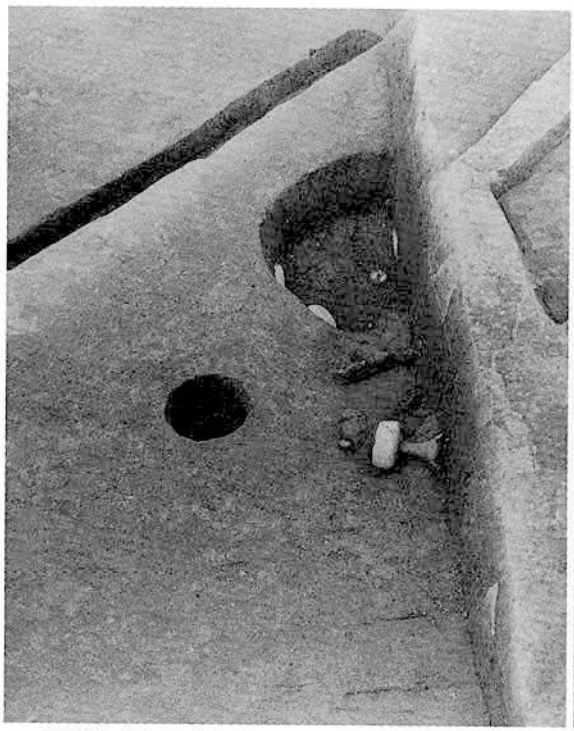
6・7号竪穴式住居跡（北から）



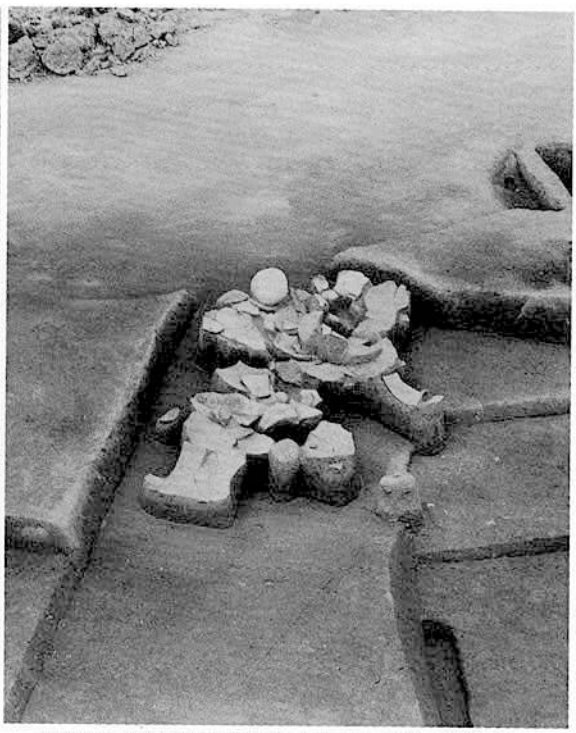
7号竪穴式住居跡（西から）



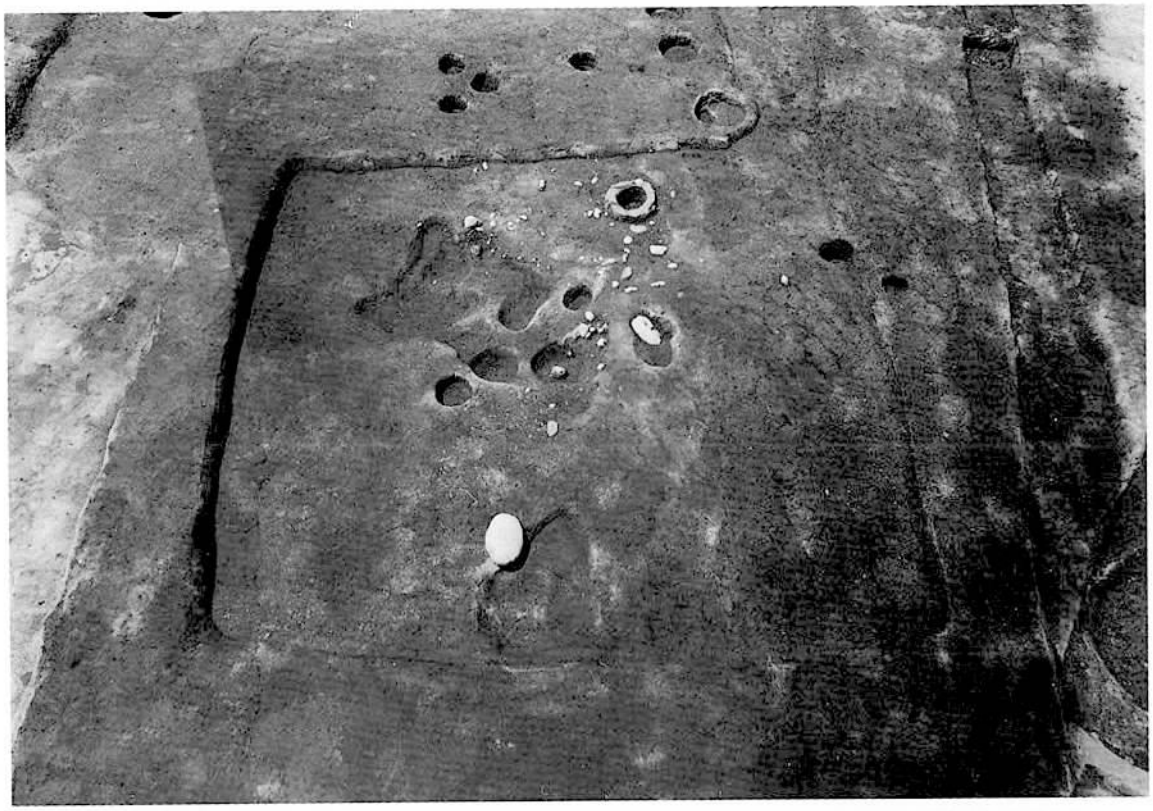
6～10号竪穴式住居跡（南から）



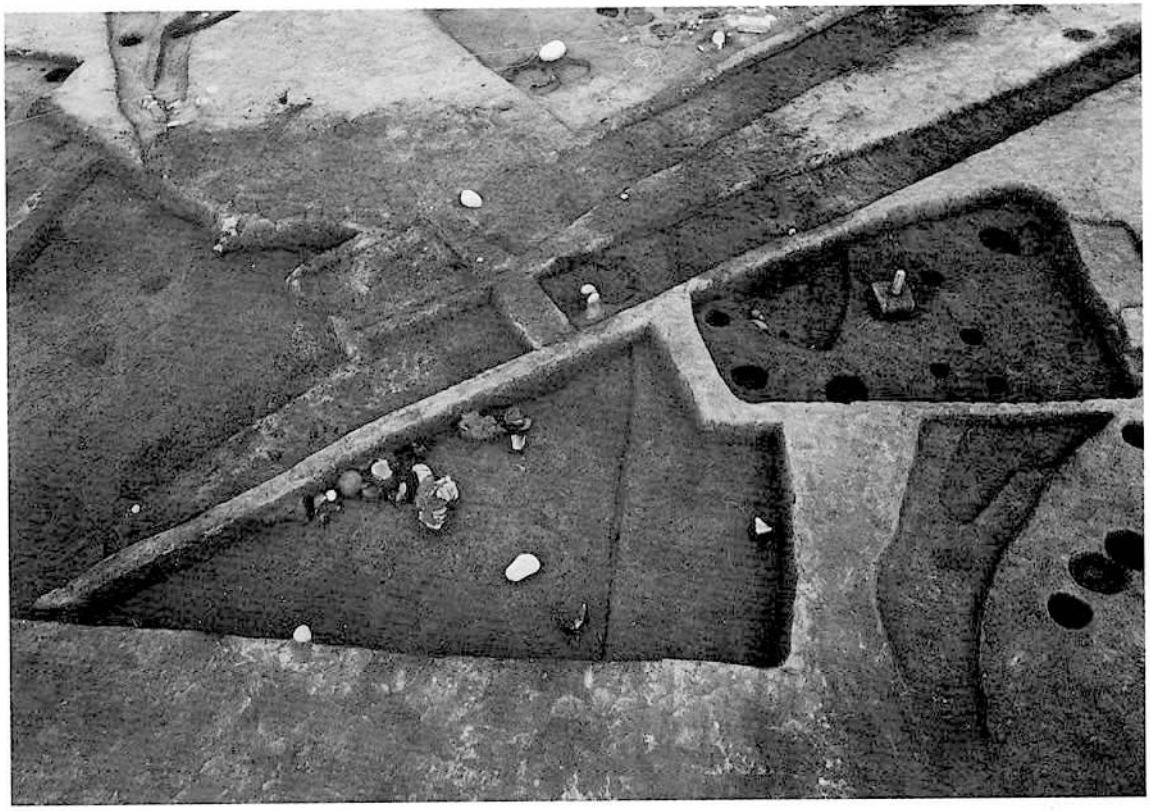
9号竪穴式住居跡土坑付近（南西から）



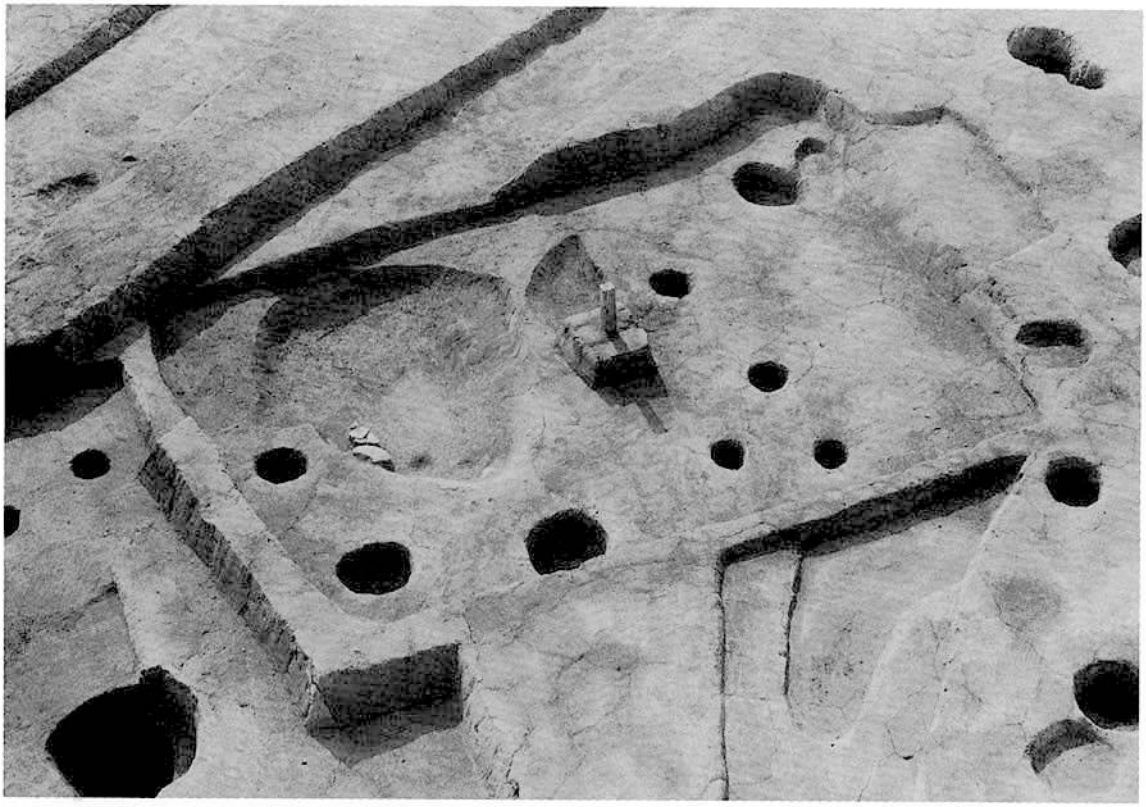
9号竪穴式住居跡北隅付近土器出土状態（南から）



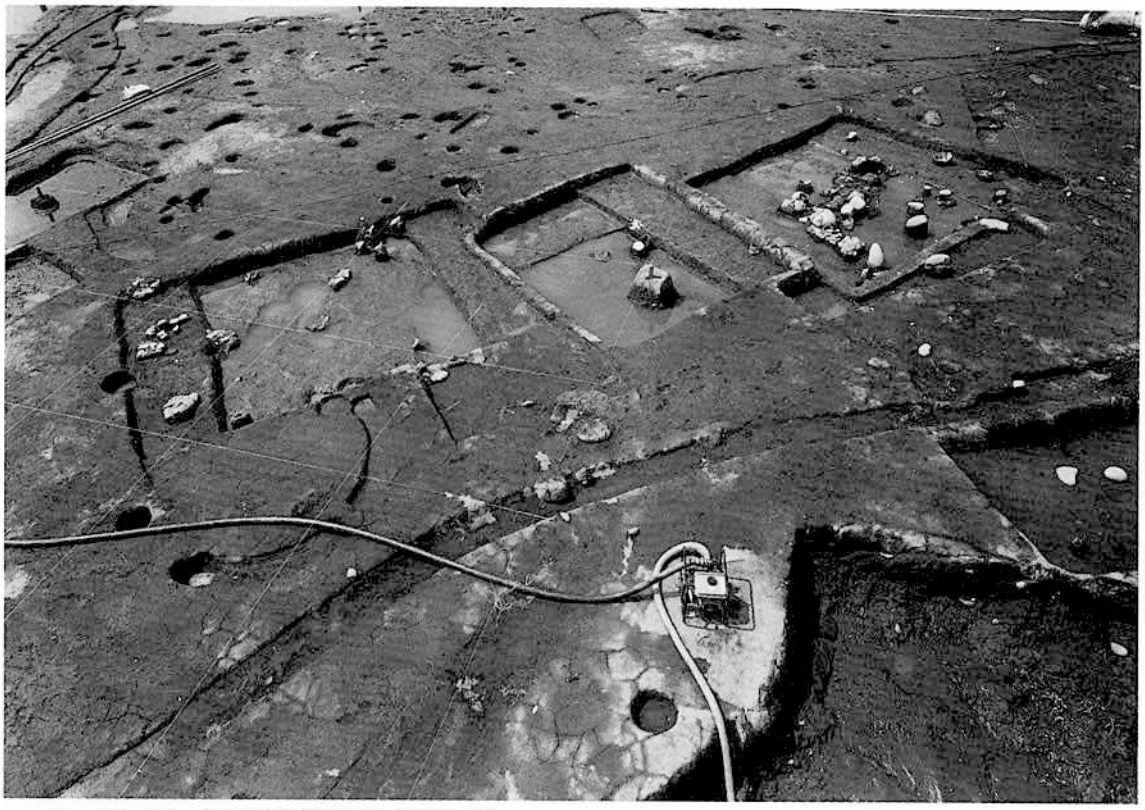
11号竪穴式住居跡（南東から）



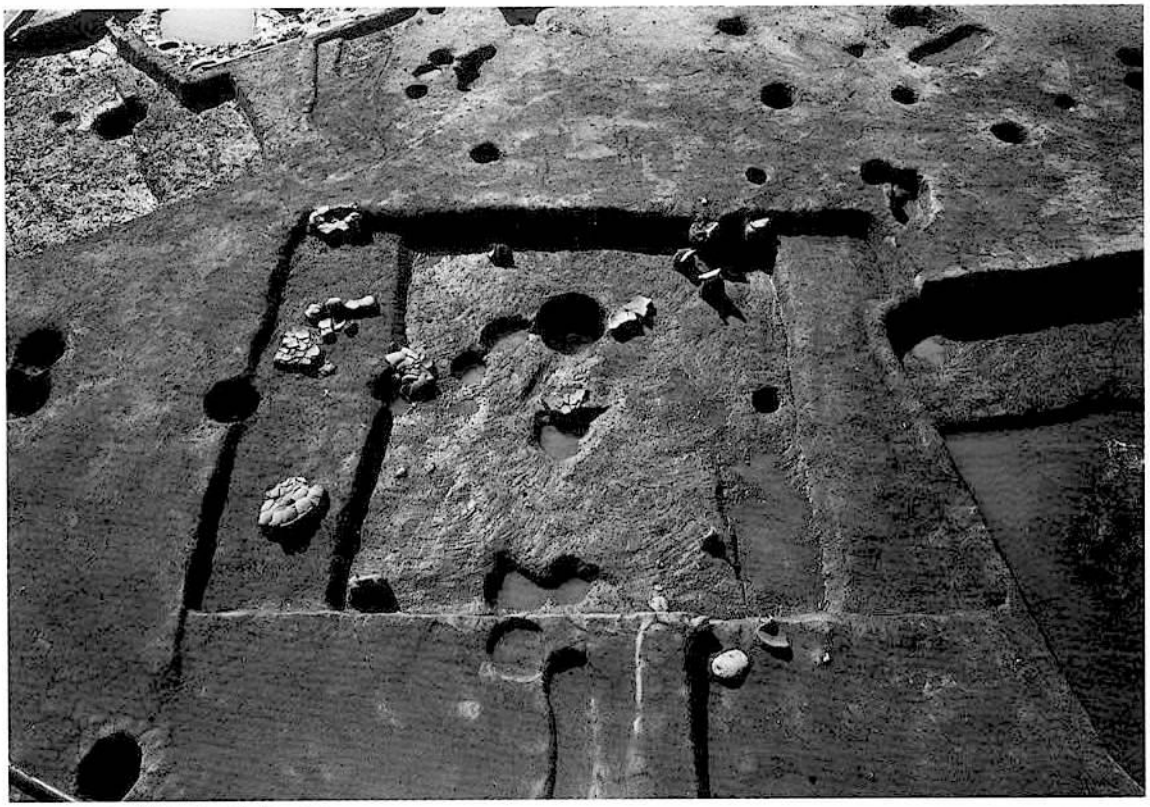
14・17号竪穴式住居跡（東から）



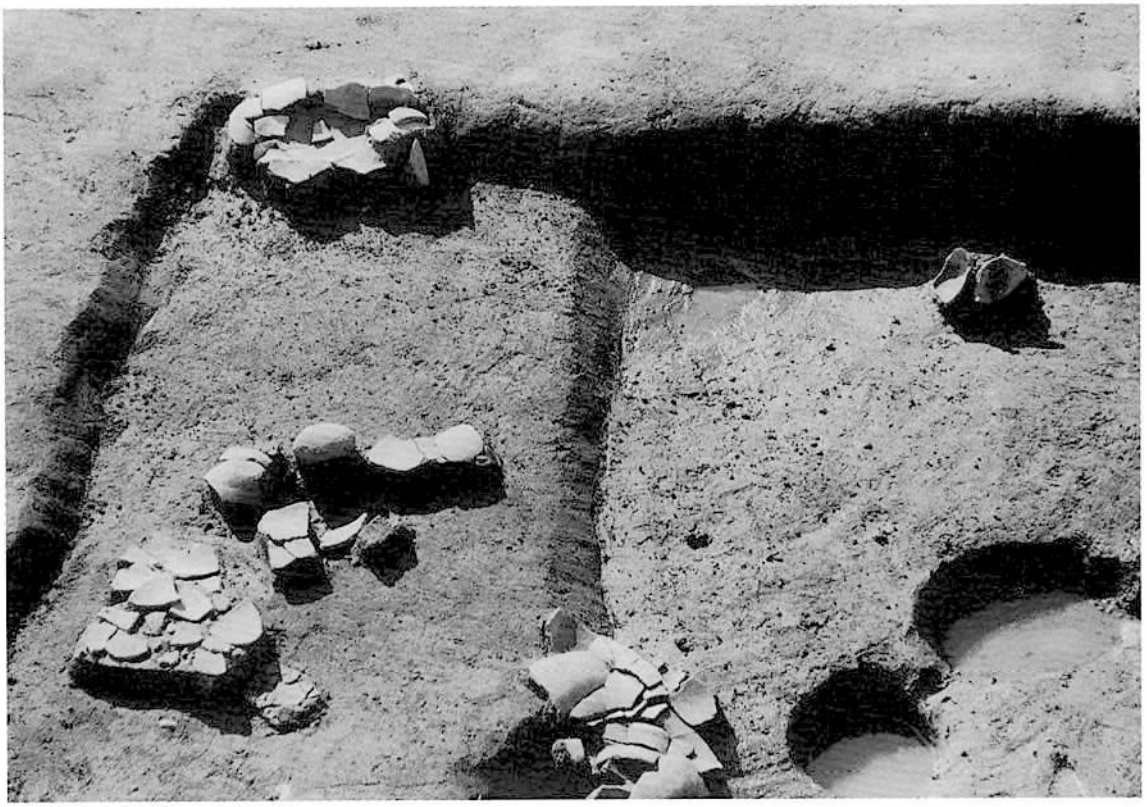
14号竪穴式住居跡（東から）



15・16・34・35号竪穴式住居跡（南東から）



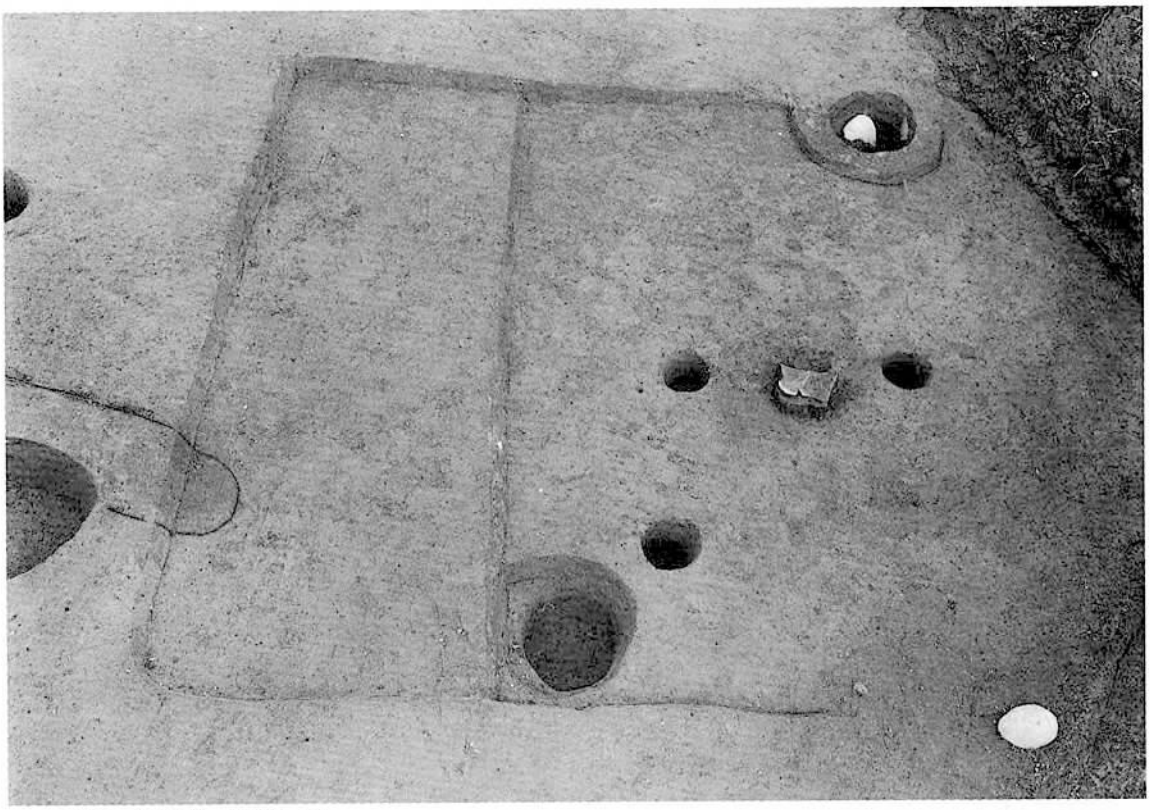
15号竪穴式住居跡（南東から）



同遺物出土状態（南東から）

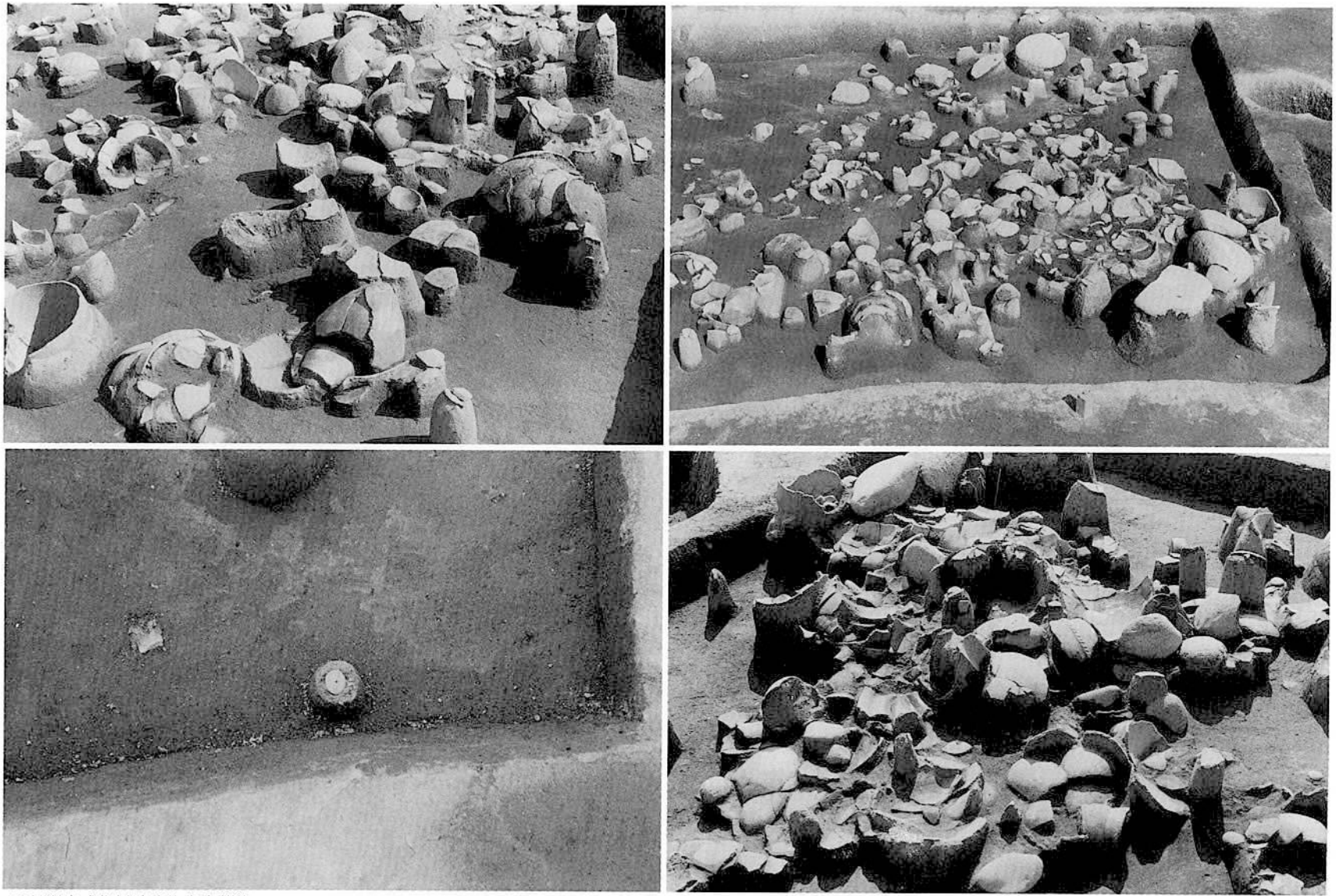
16号竪穴式住居跡（南東から）

17号竪穴式住居跡（南東から）



18号竪穴式住居跡（北西から）

19号竪穴式住居跡（北西から）



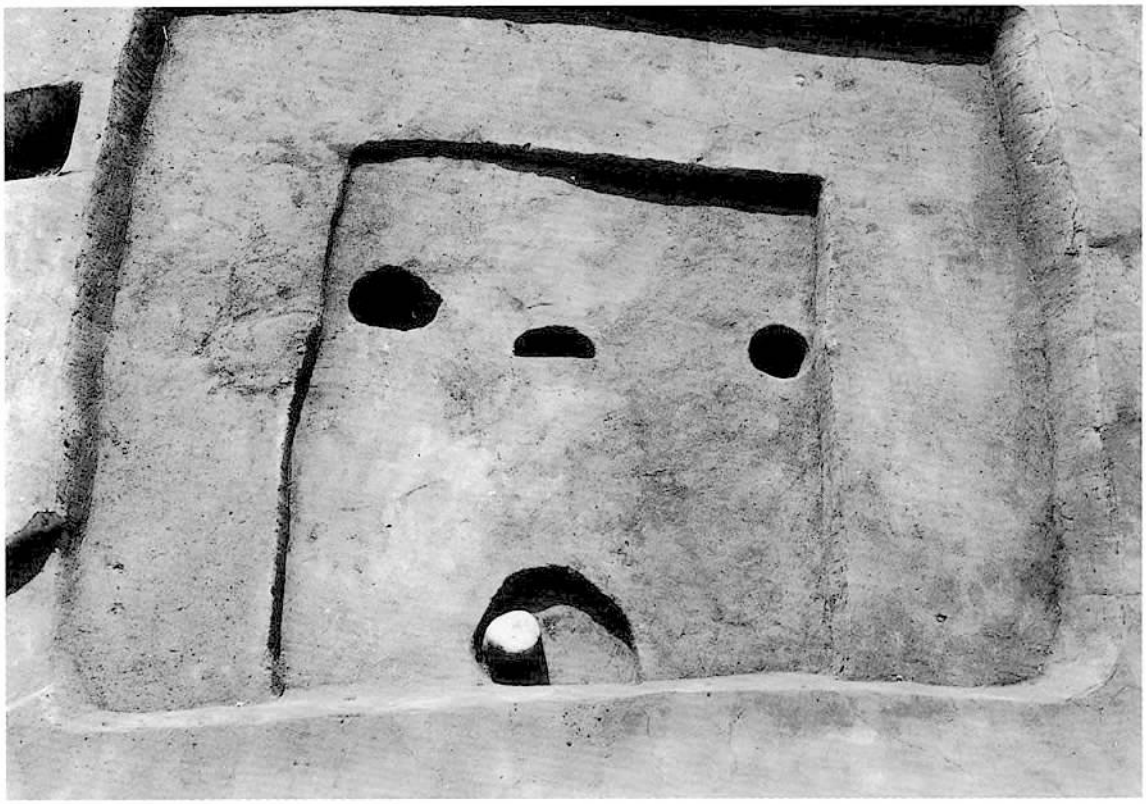
19号竪穴式住居跡遺物出土状態

20号竪穴式住居跡（南東から）

同遺物出土状態（南から）

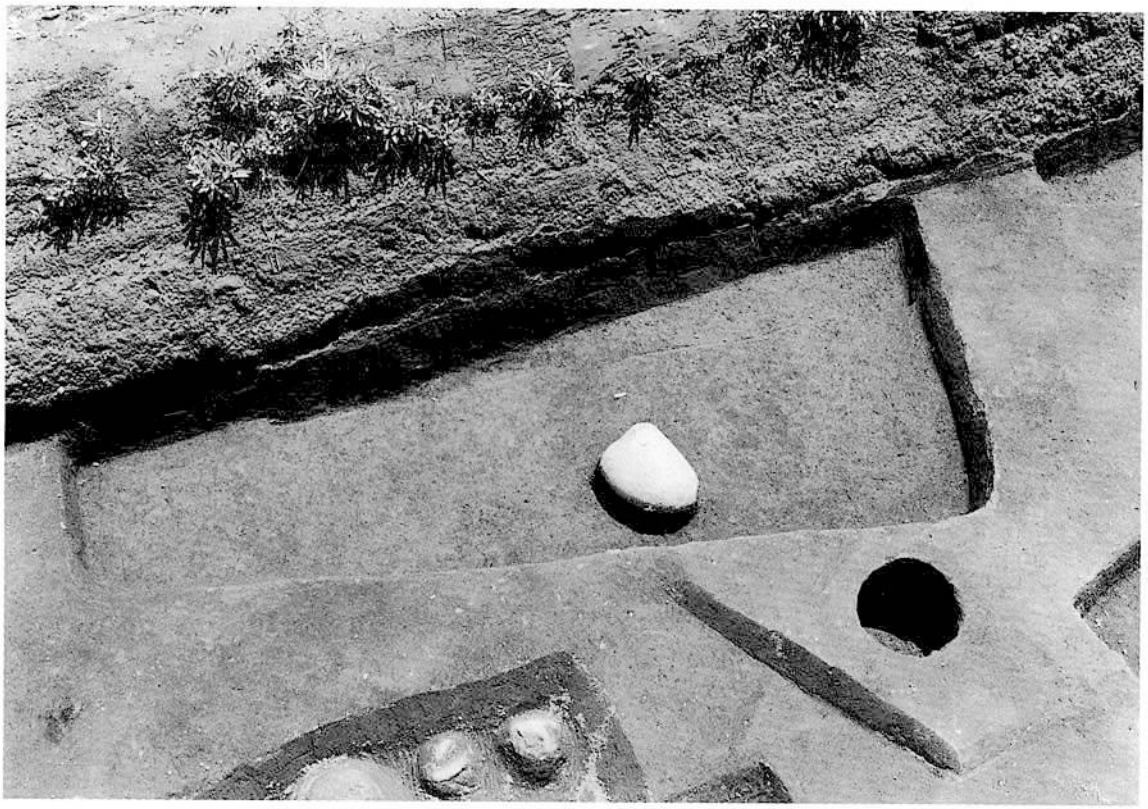
21号竪穴式住居跡（南東から）

同遺物出土状態（北から）

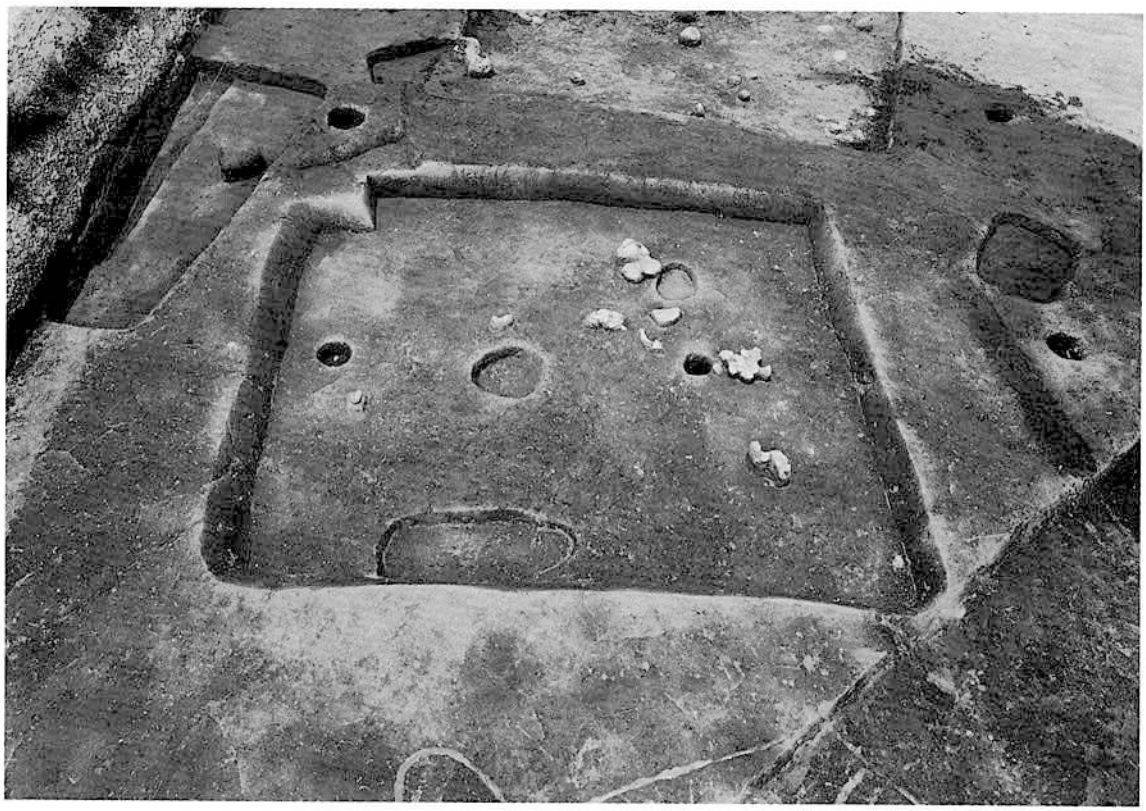


22号竪穴式住居跡（南東から）

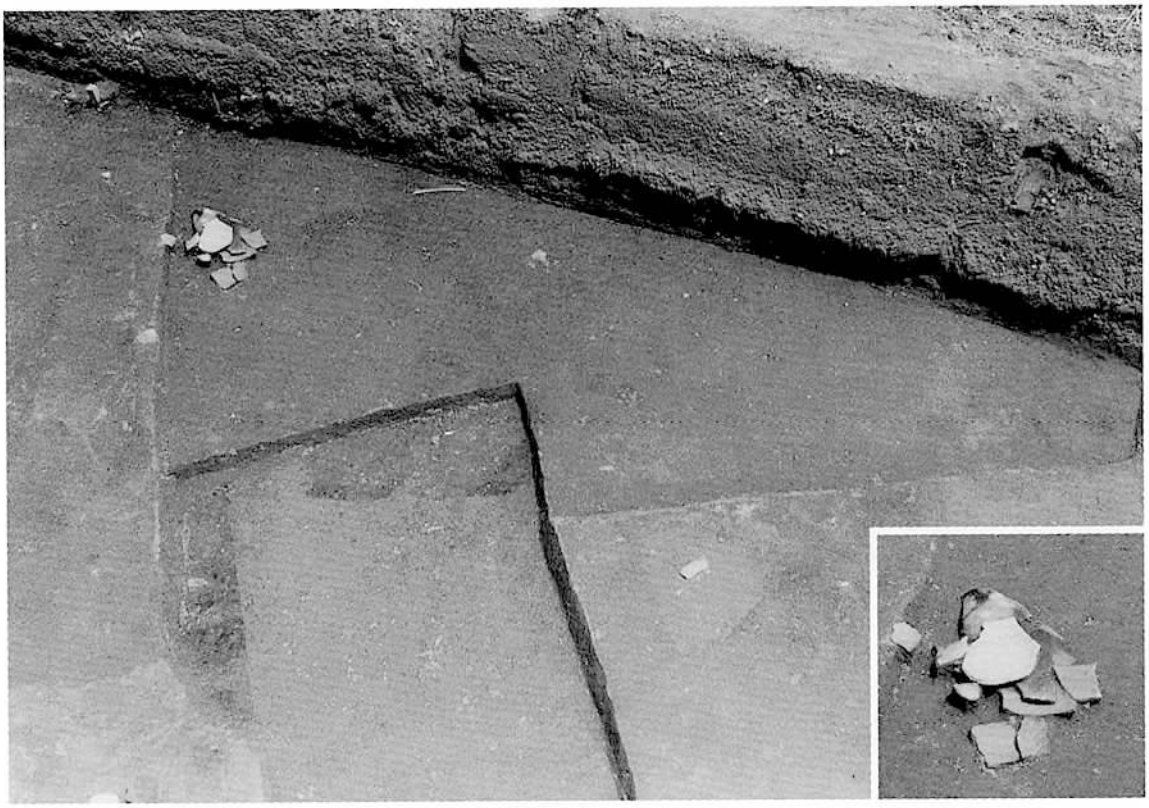
同遺物出土状態（北西から）



23号竪穴式住居跡（北東から）



24号竪穴式住居跡（東から）

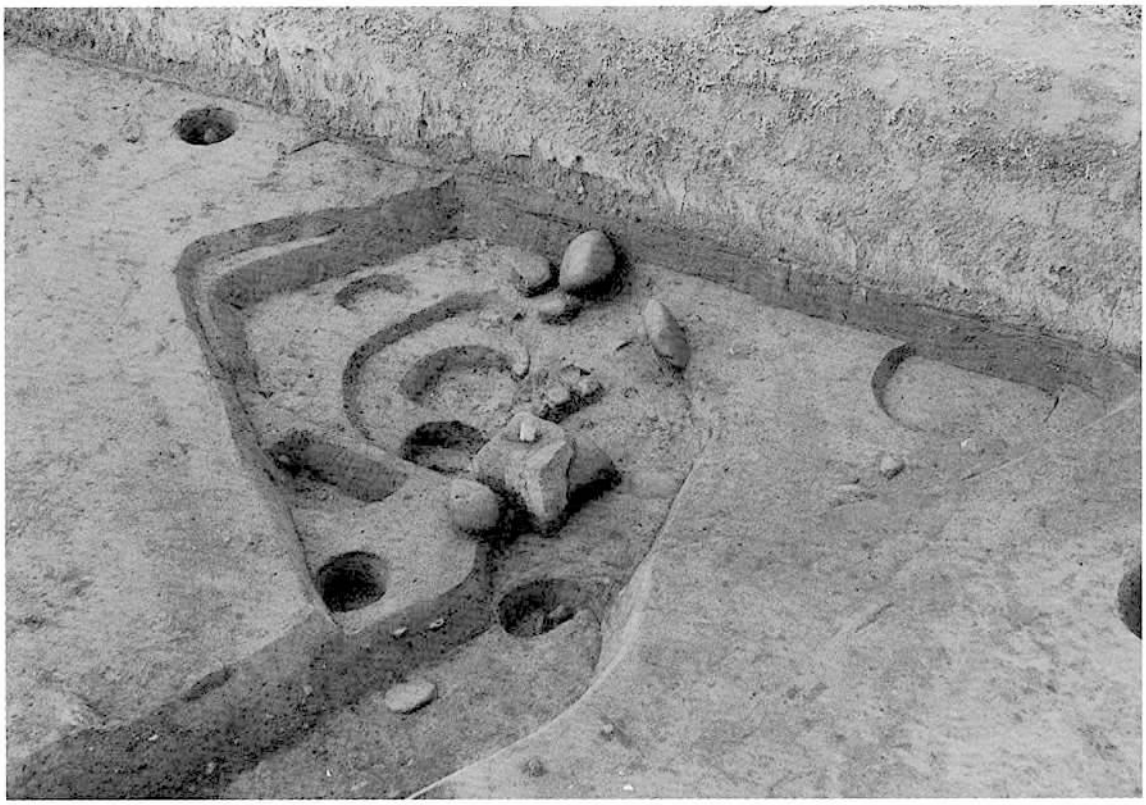


25号竪穴式住居跡（北から）・同遺物出土状態（同）

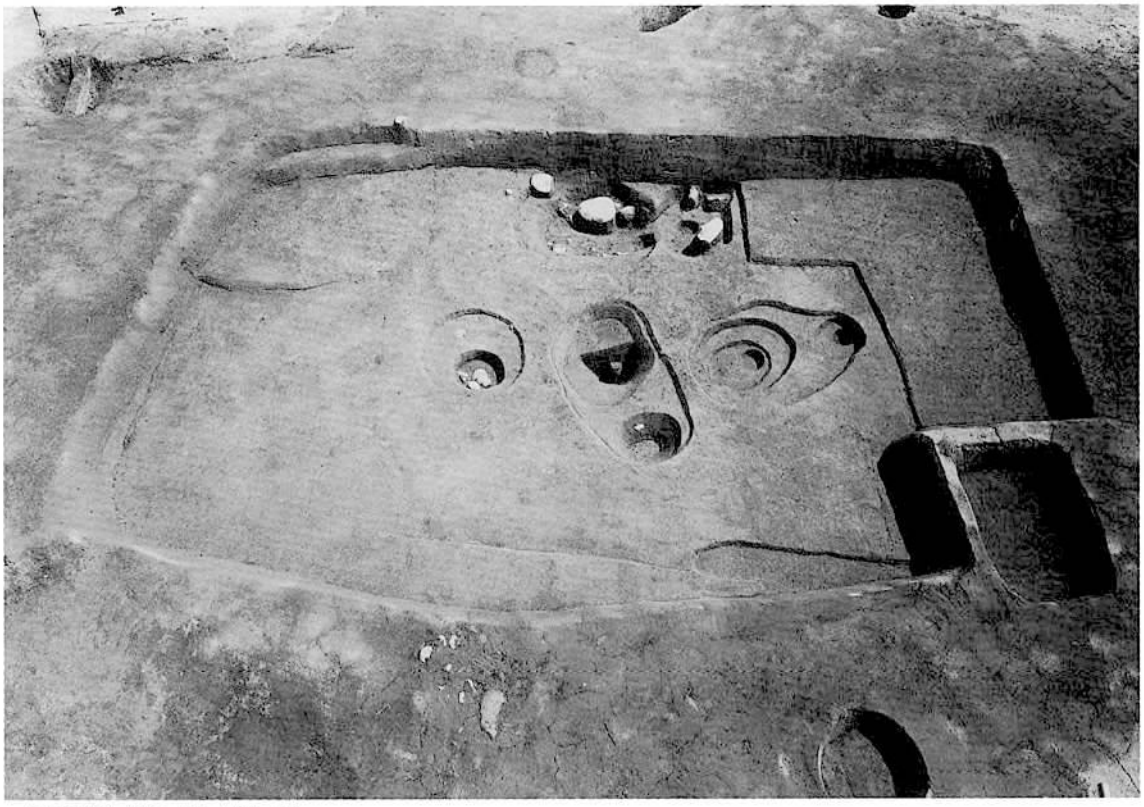
26号竪穴式住居跡（西から）

27号竪穴式住居跡（北東から）

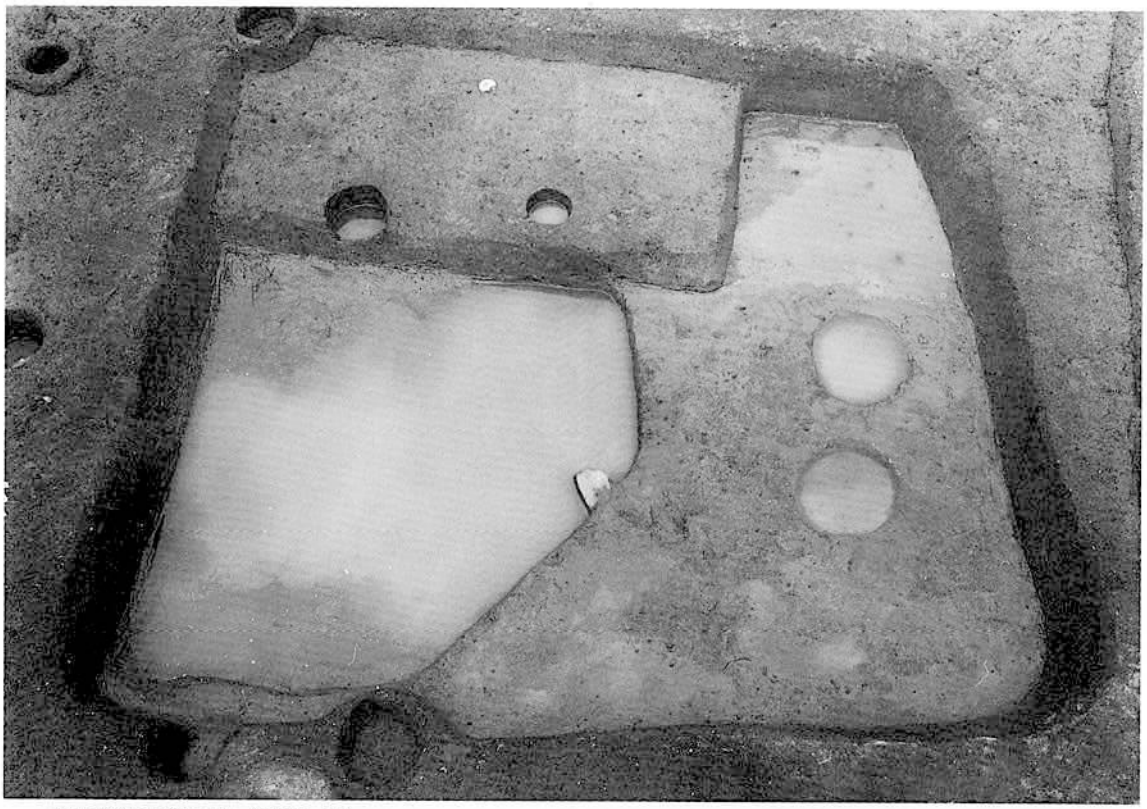
29・30号竪穴式住居跡（東から）



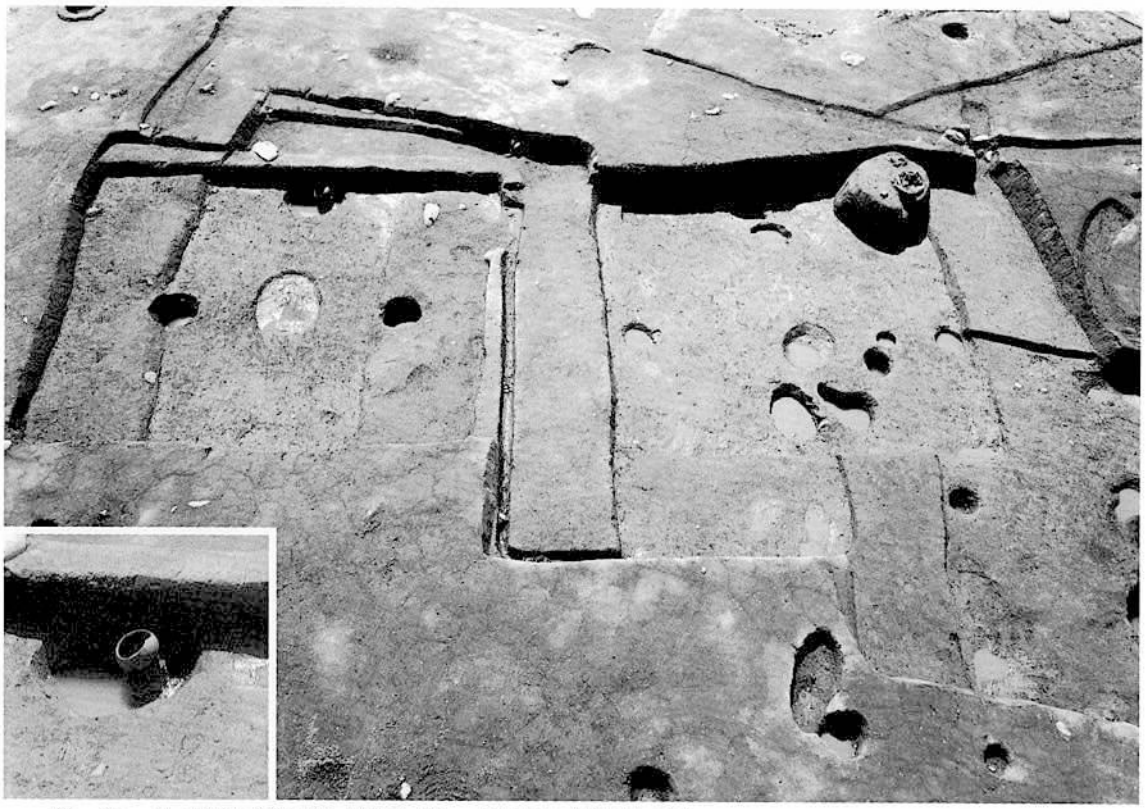
31号竪穴式住居跡（北西から）



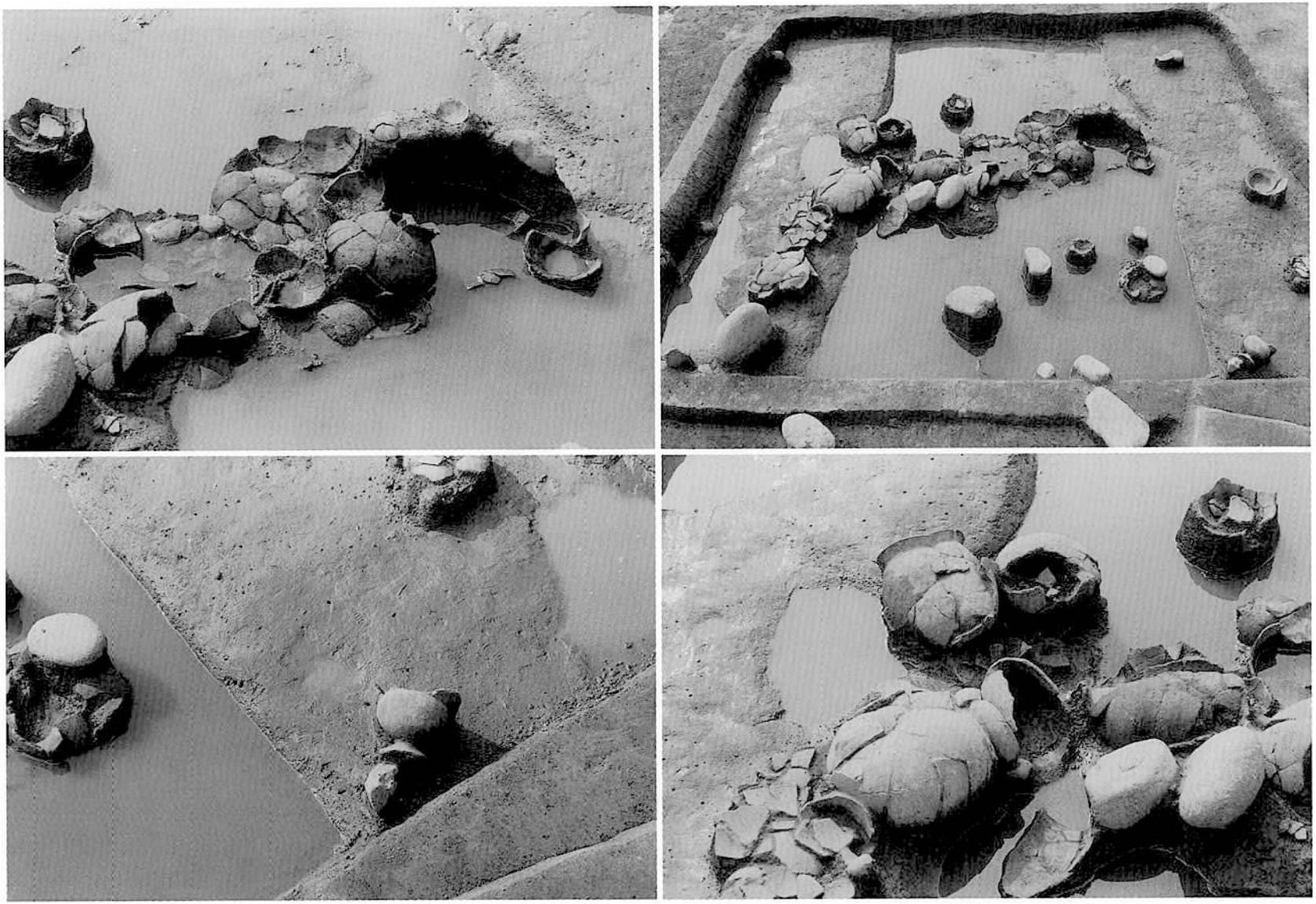
32号竪穴式住居跡（北から）



33号竪穴式住居跡（南東から）

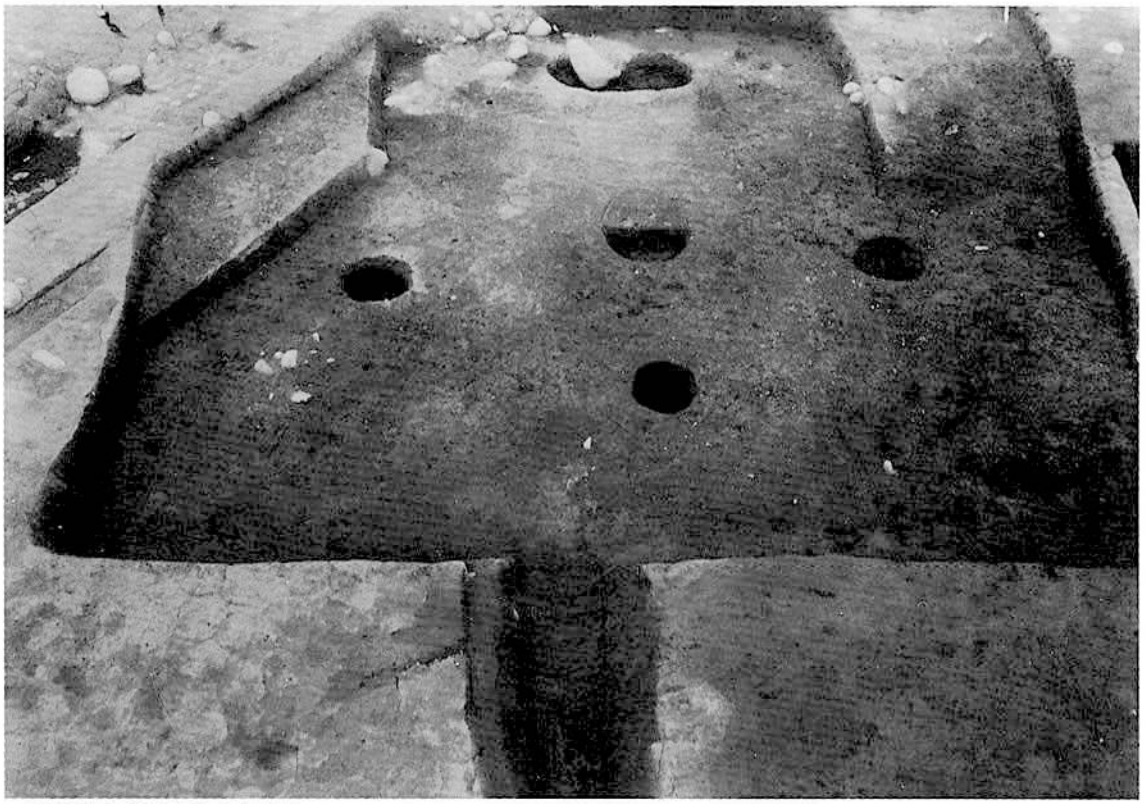


34・35・41号竪穴式住居跡（北西から）・34号住居跡土坑（同）



34号住居跡遺物出土状態

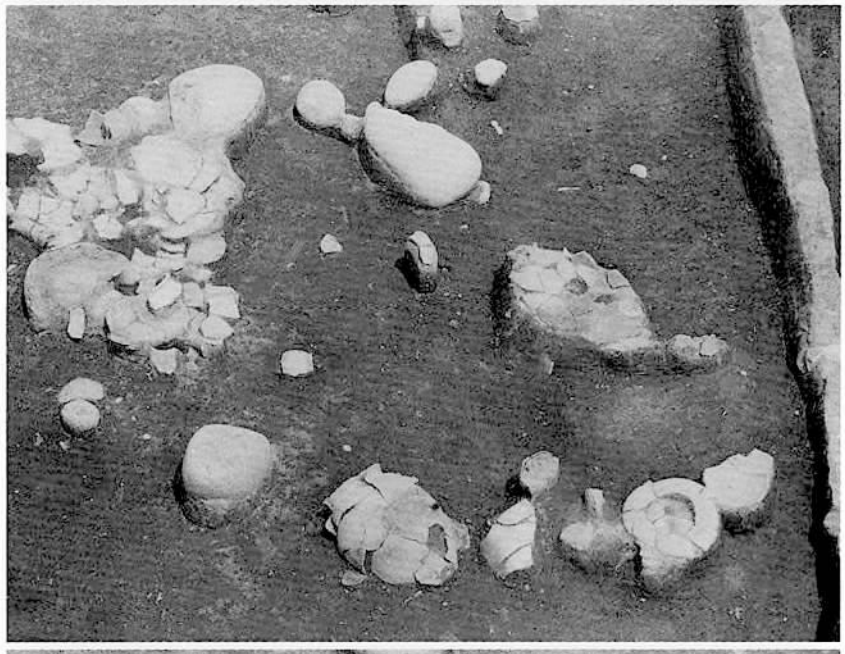
36号竪穴式住居跡（北西から）



38号竪穴式住居跡（西から）

図版 24

38号竪穴式住居E遺物出土状態
（北東から）

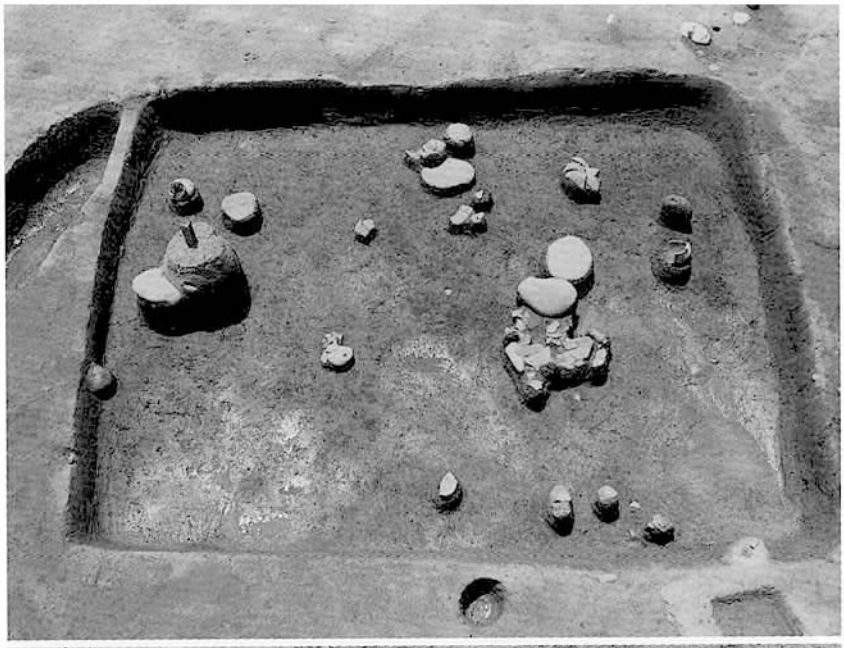


同（同）

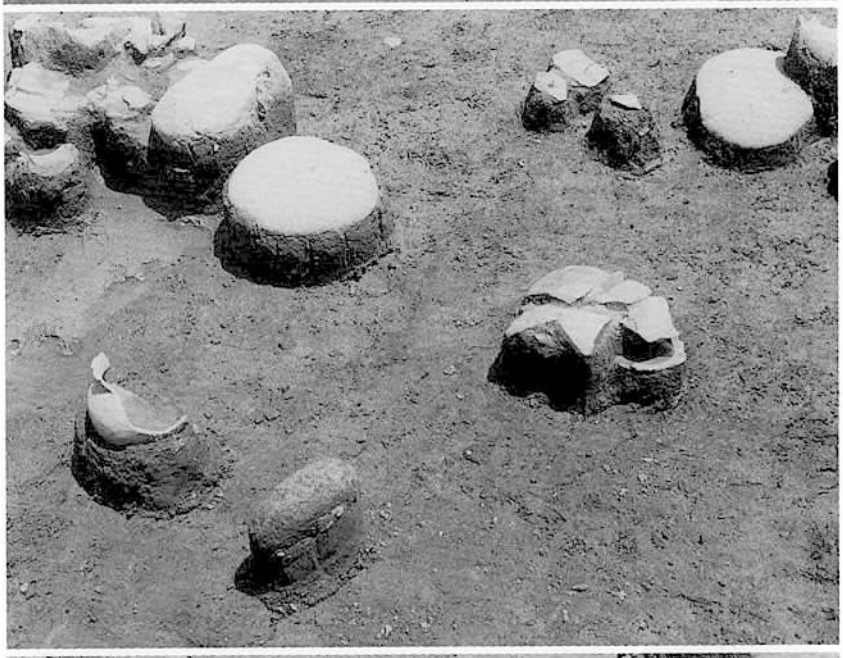
同（同）

39号竪穴式住居跡（南東から）

40号竪穴式住居跡（南東から）



40号竪穴式住居遺物出土状態
（北西から）



同（南から）

同（南東から）

41号竪穴式住居跡（南東から）

同上層埋甕（北西から）

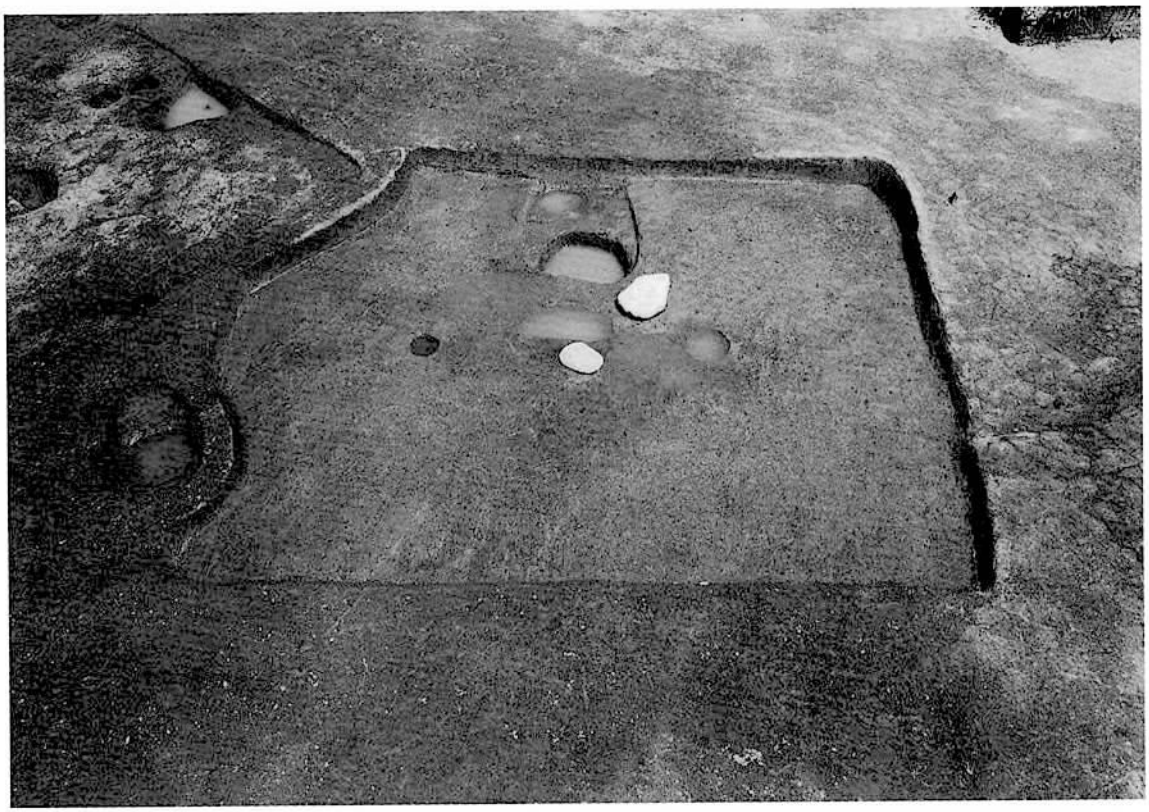
42号竪穴式住居跡（北東から）

43号竪穴式住居跡（北西から）

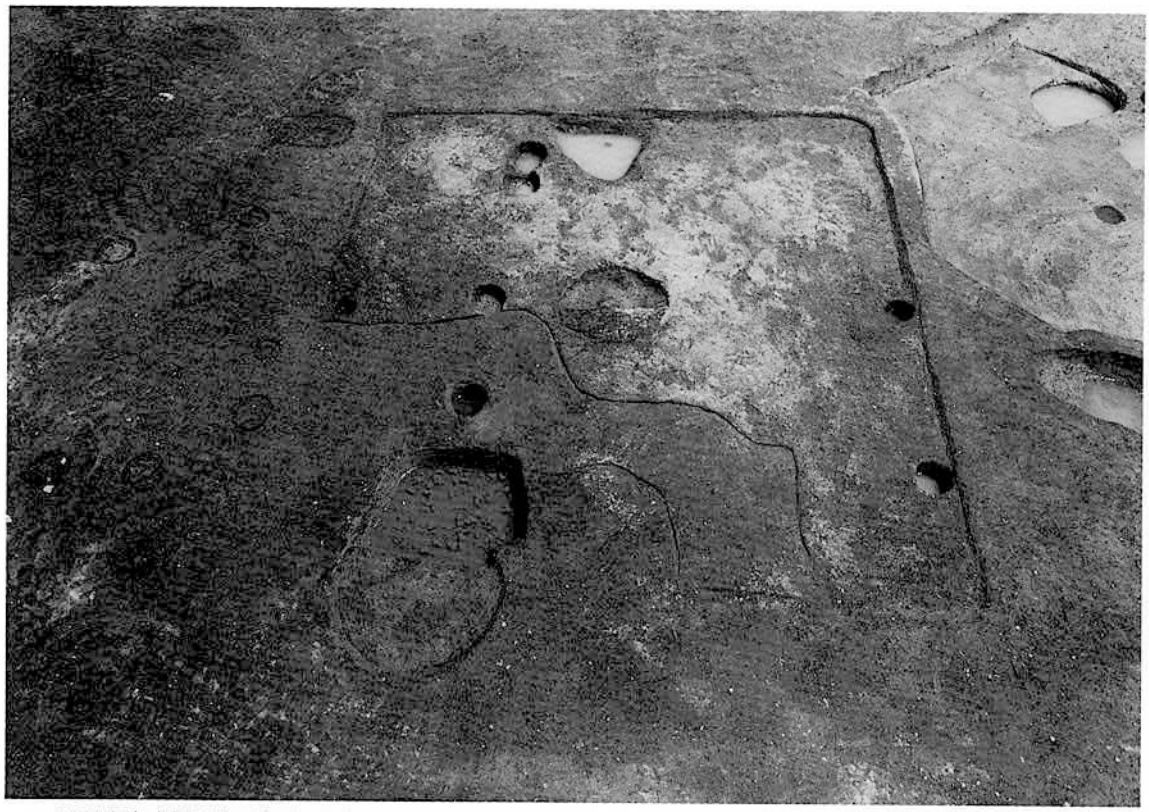
44号竪穴式住居跡（北西から）

45号竪穴式住居跡（西から）

46号竪穴式住居跡（北西から）



47号竪穴式住居跡（北西から）



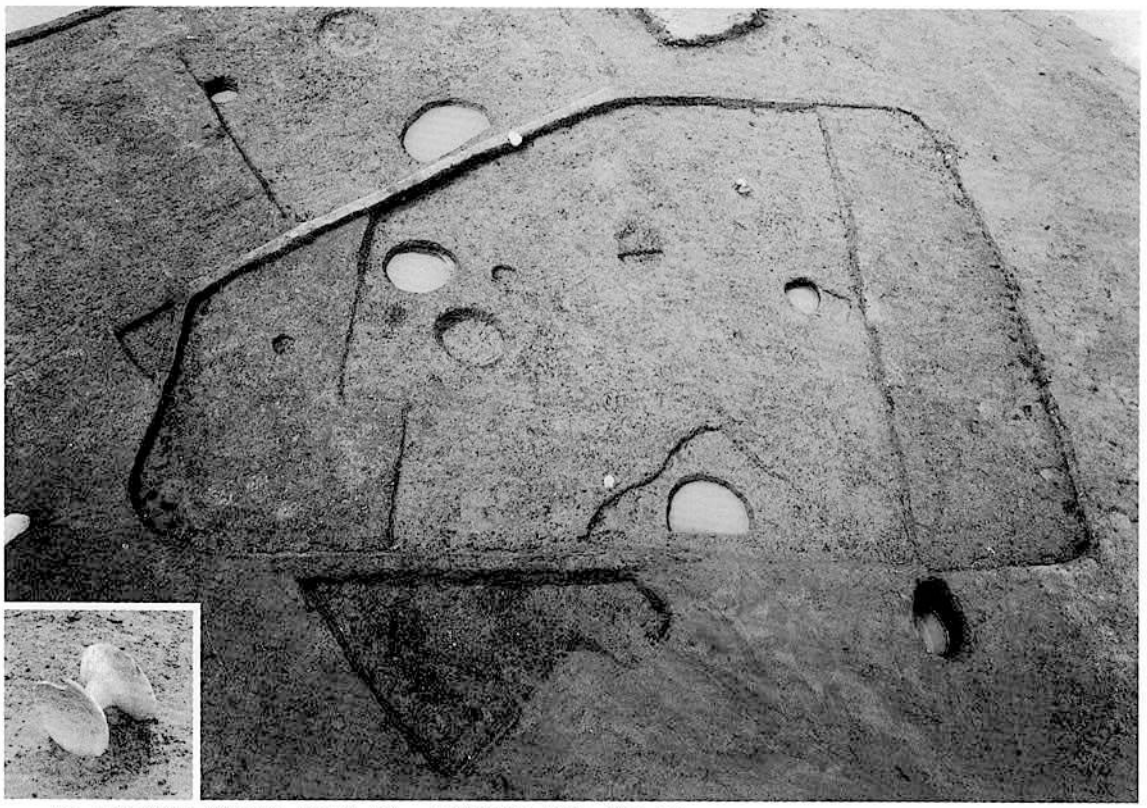
48号竪穴式住居跡（北西から）

49号竪穴式住居跡（南西から）

50号竪穴式住居跡（南西から）

51・52号竪穴式住居跡（北西から）

53号竪穴式住居跡（北西から）

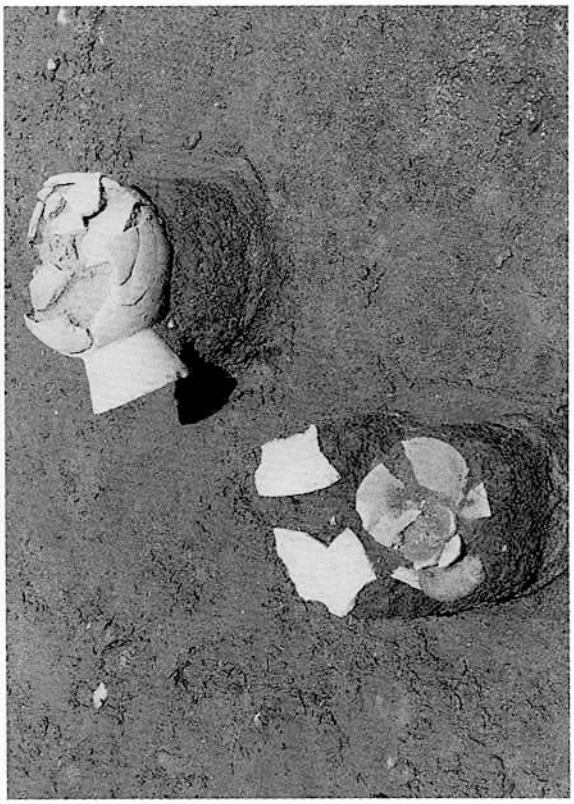


54～56号竪穴式住居跡（南東から）・同遺物出土状態（東から）

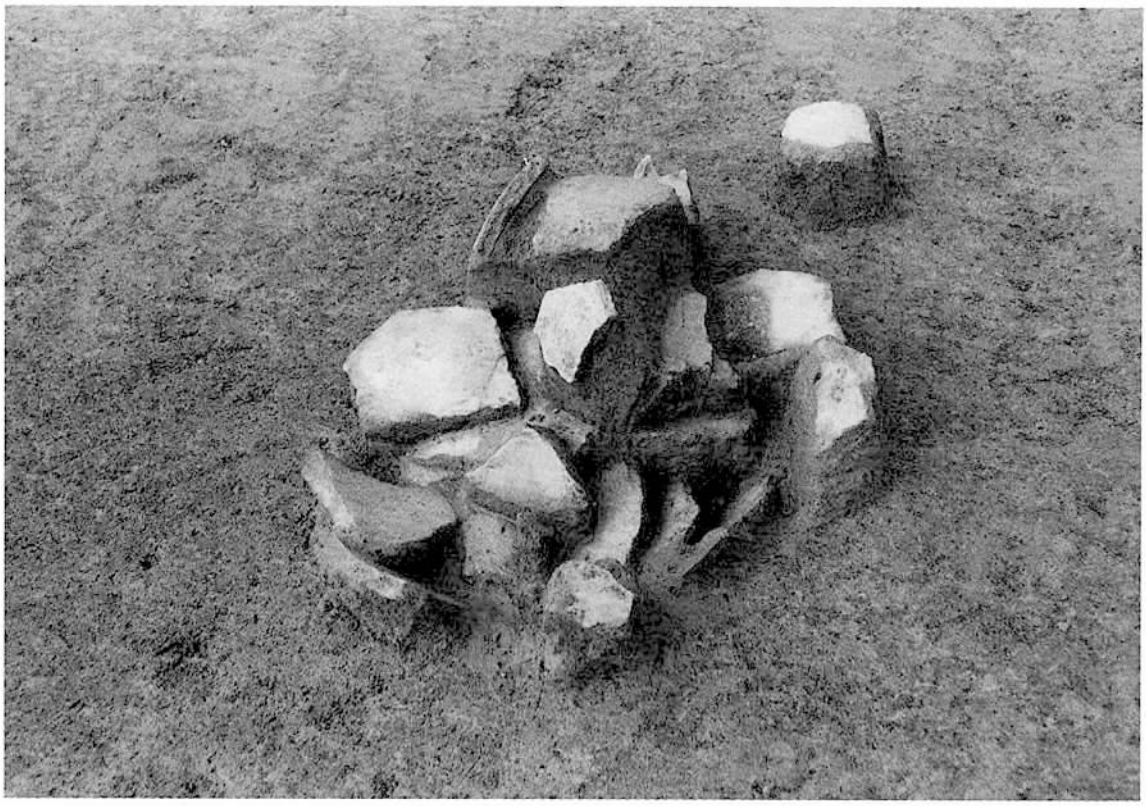
56～59・68・69号竪穴式住居跡（西から）

58号竪穴式住居跡（西から）

58号住居跡遺物出土状態（東から）



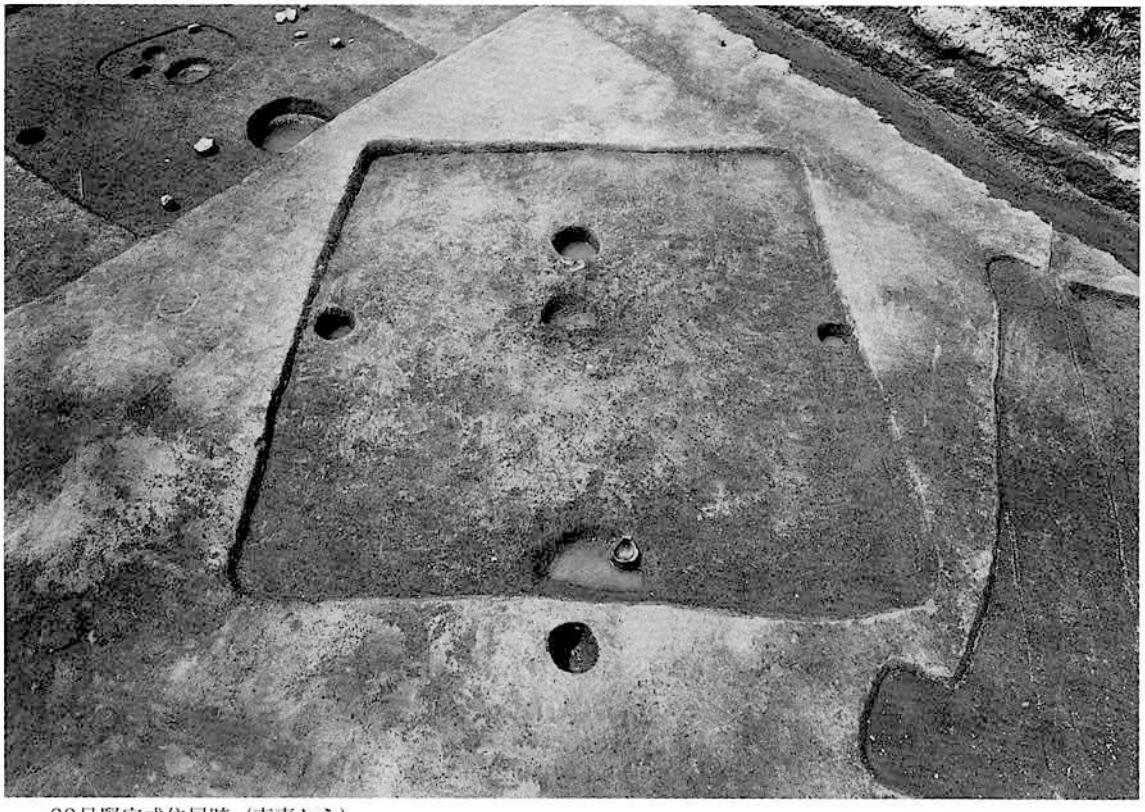
68号竪穴住居跡遺物出土状態（西から）



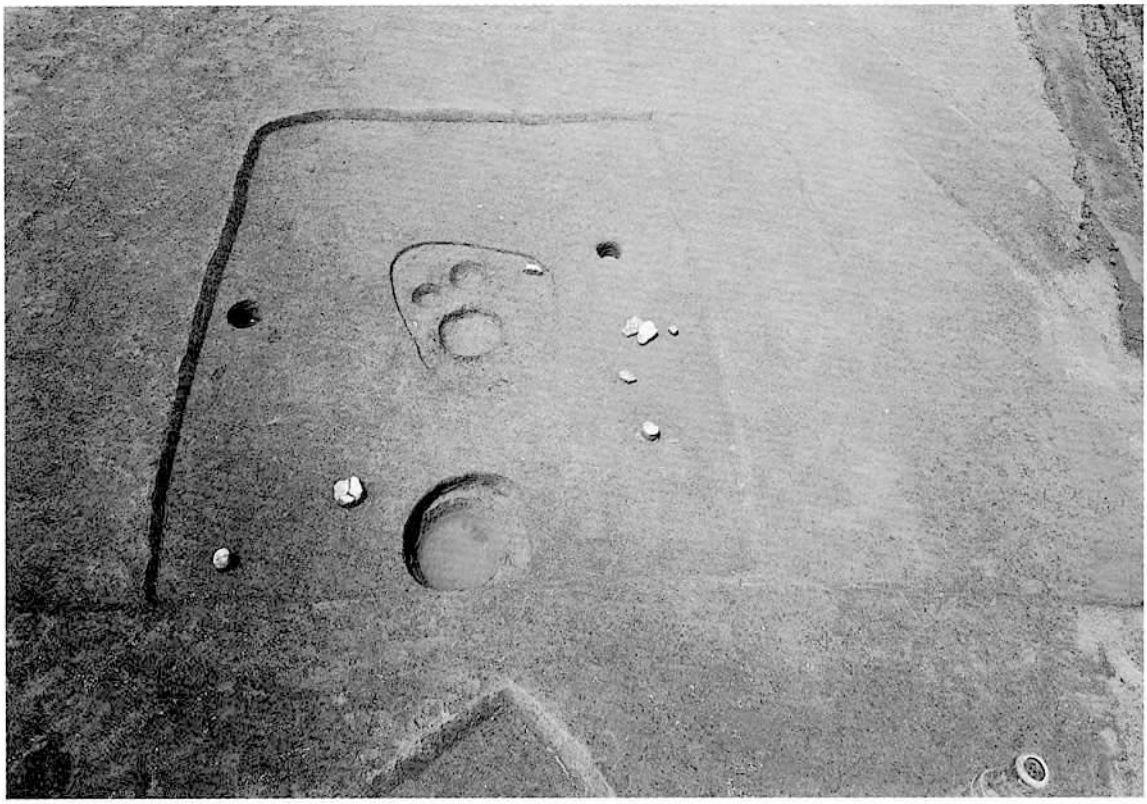
旧59号住居跡遺物出土状態（北から）

60号竪穴式住居跡（西から）

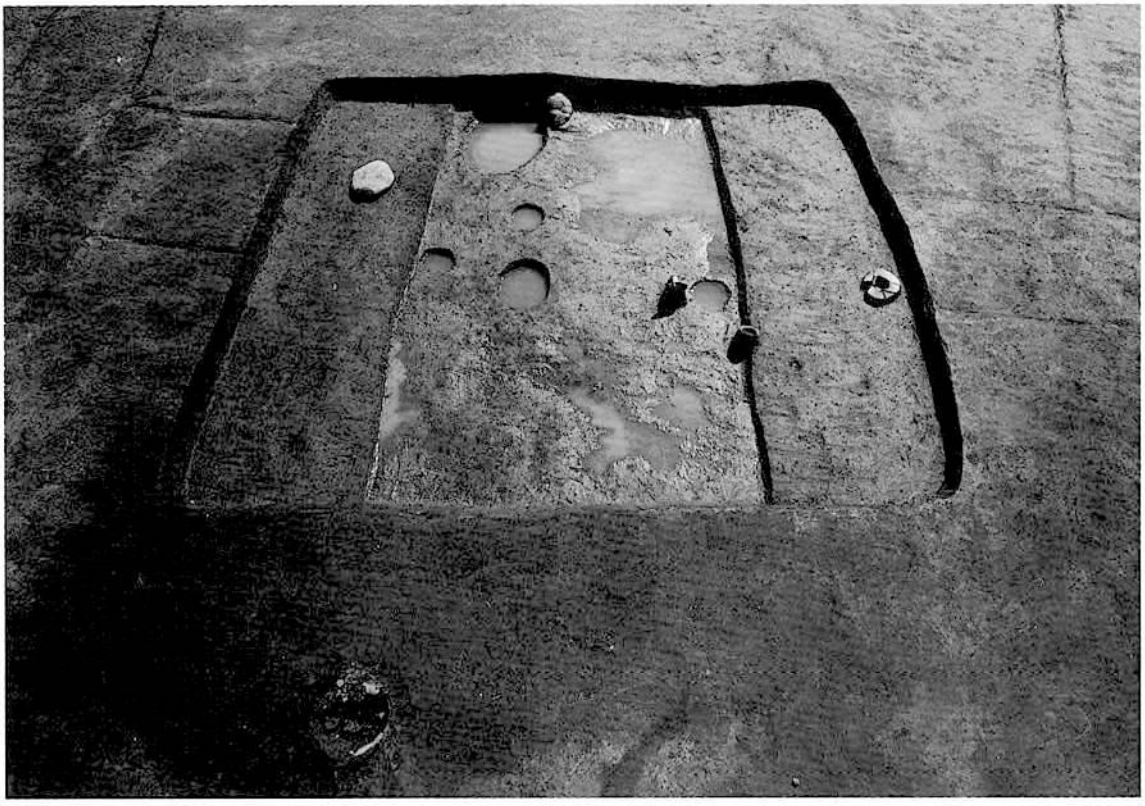
61号竪穴式住居跡（西から）



62号竪穴式住居跡（南東から）



63号竪穴式住居跡（東から）



64号竪穴式住居跡・埋甕（西から）

64号竪穴式住居跡遺物出土状態（東から）

65号竪穴式住居跡（東から）

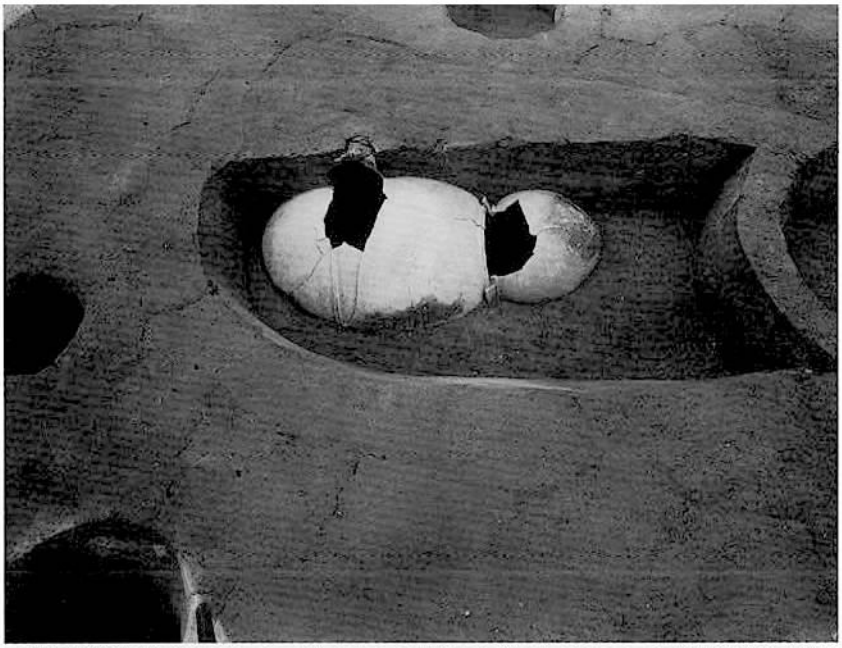
65号竪穴式住居跡遺物出土状態（東から）

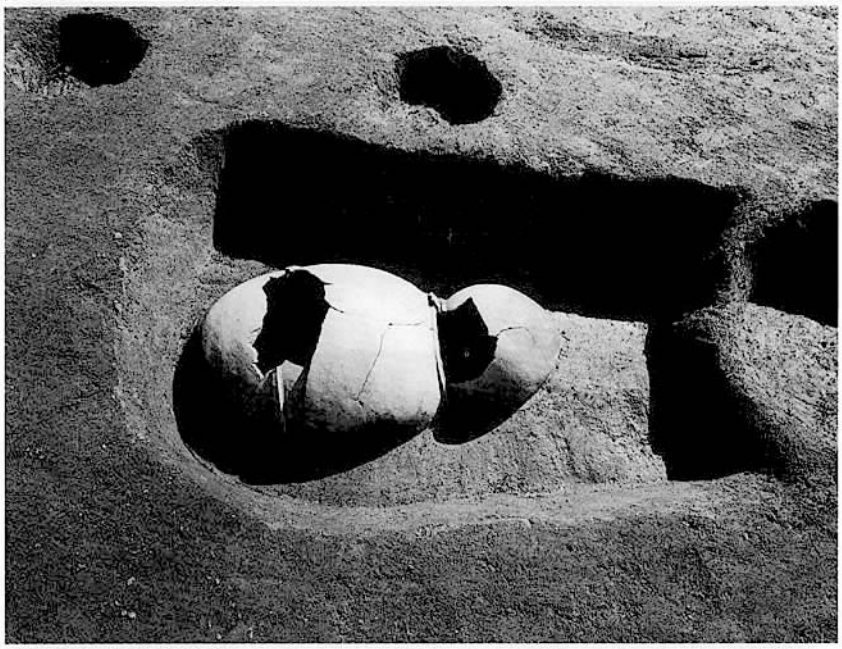
66号竪穴式住居跡（南から）

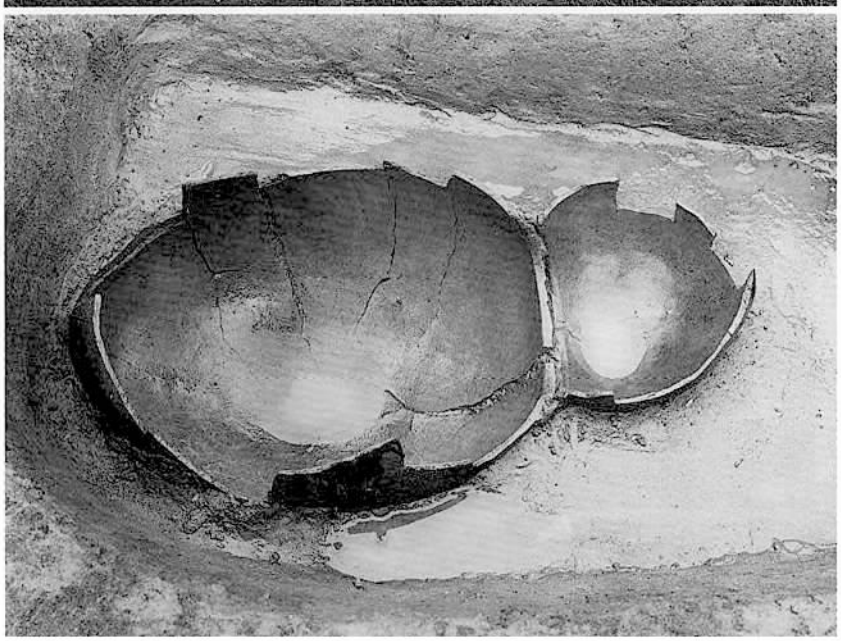
旧67号竪穴式住居跡遺物出土状態

71号竪穴式住居跡北東土坑（北から）

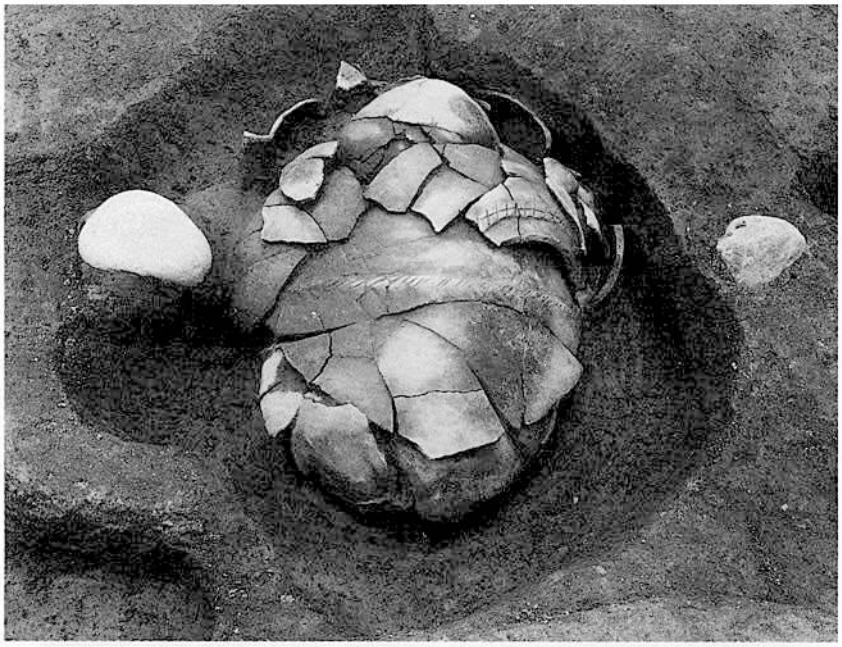
図版 42



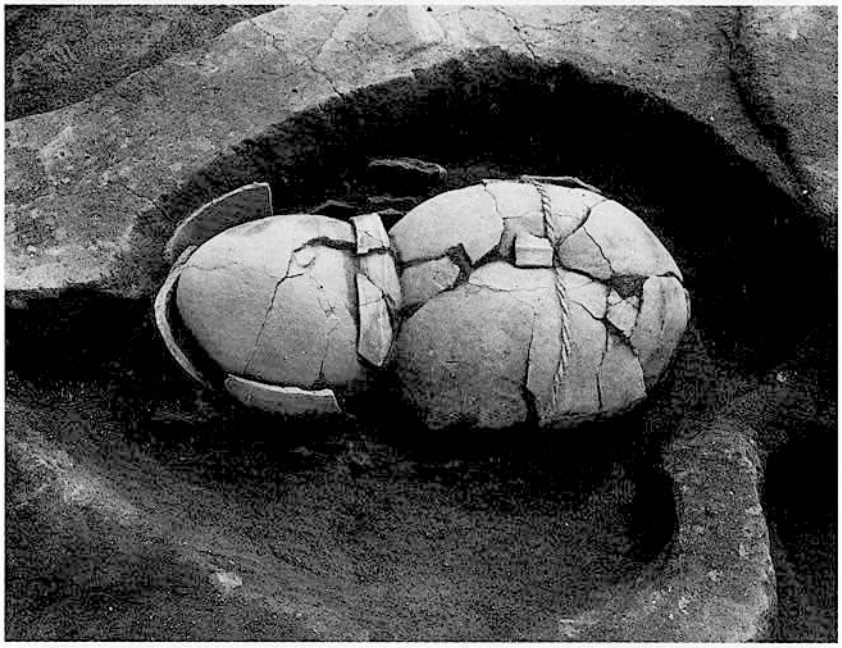




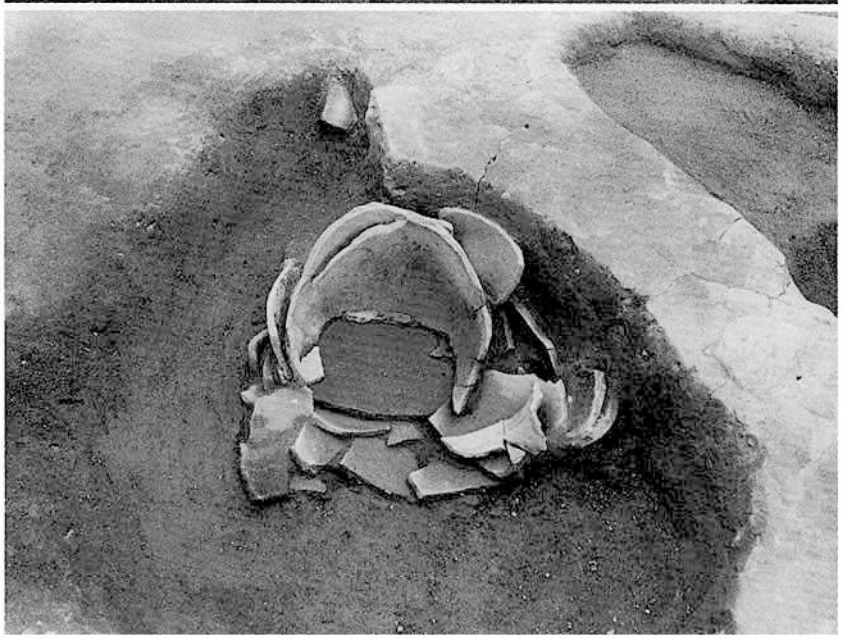
1号甕棺墓（北東から）



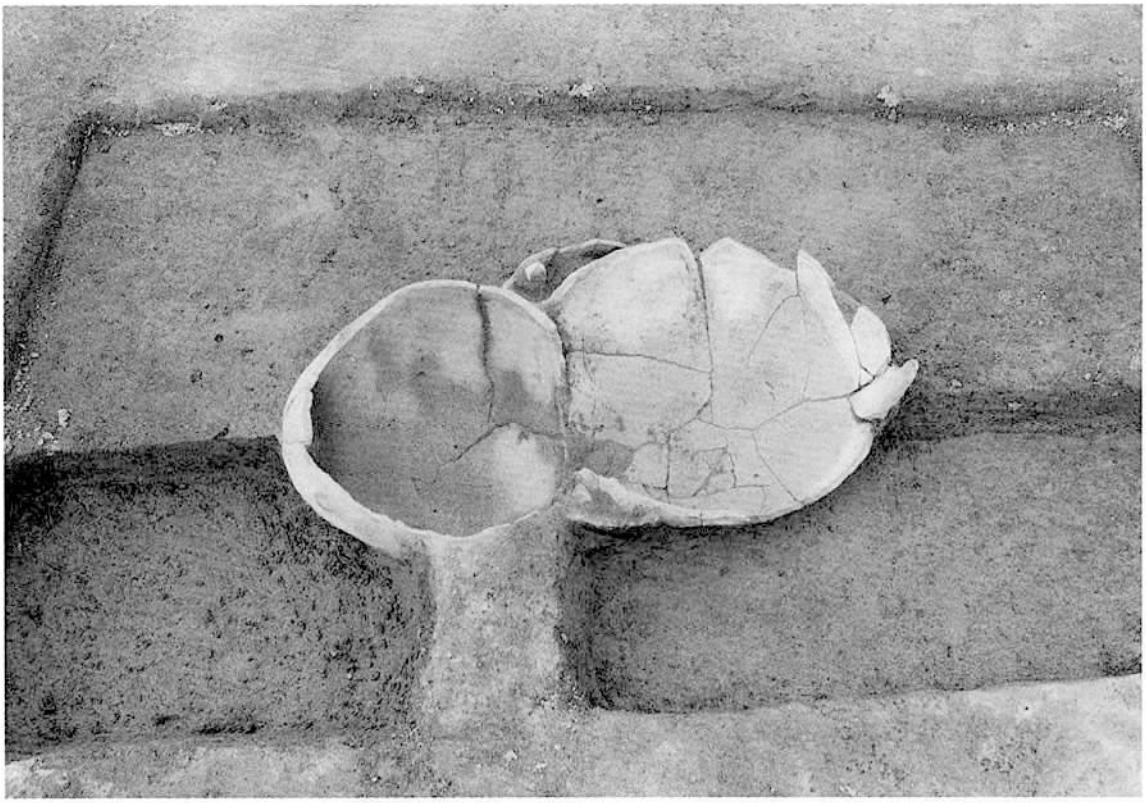
2号甕棺墓（北西から）



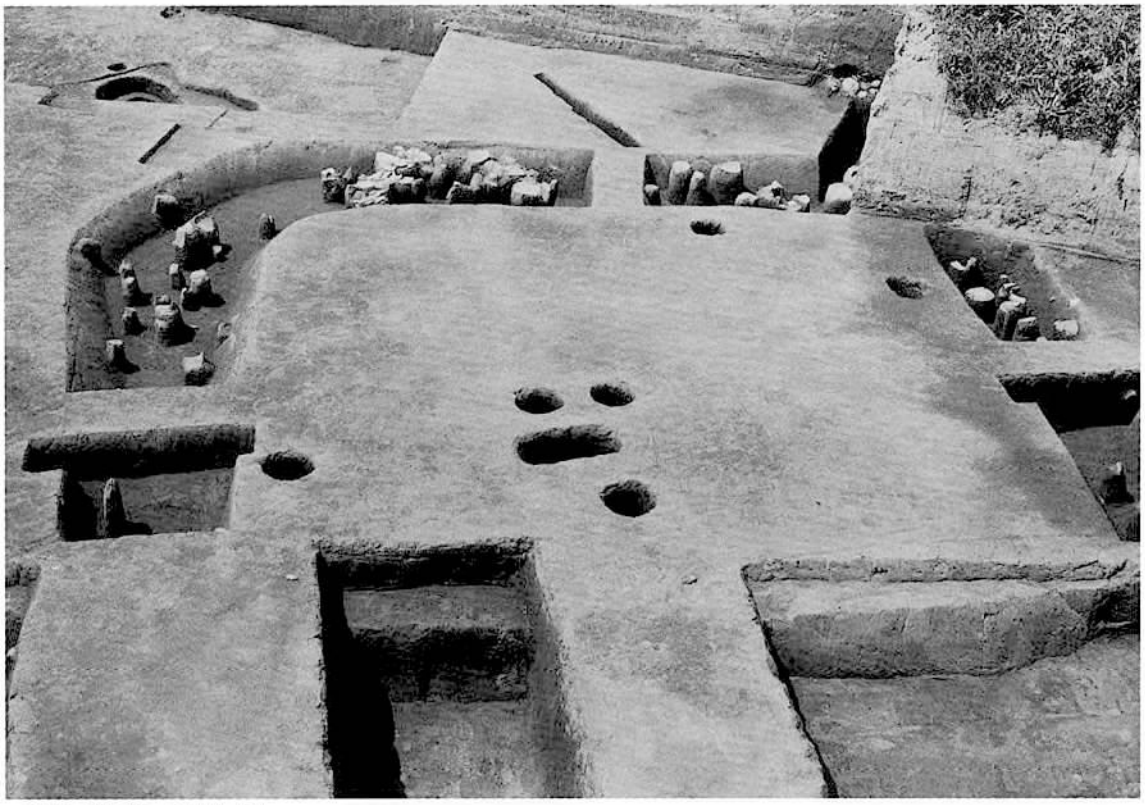
同（北東から）



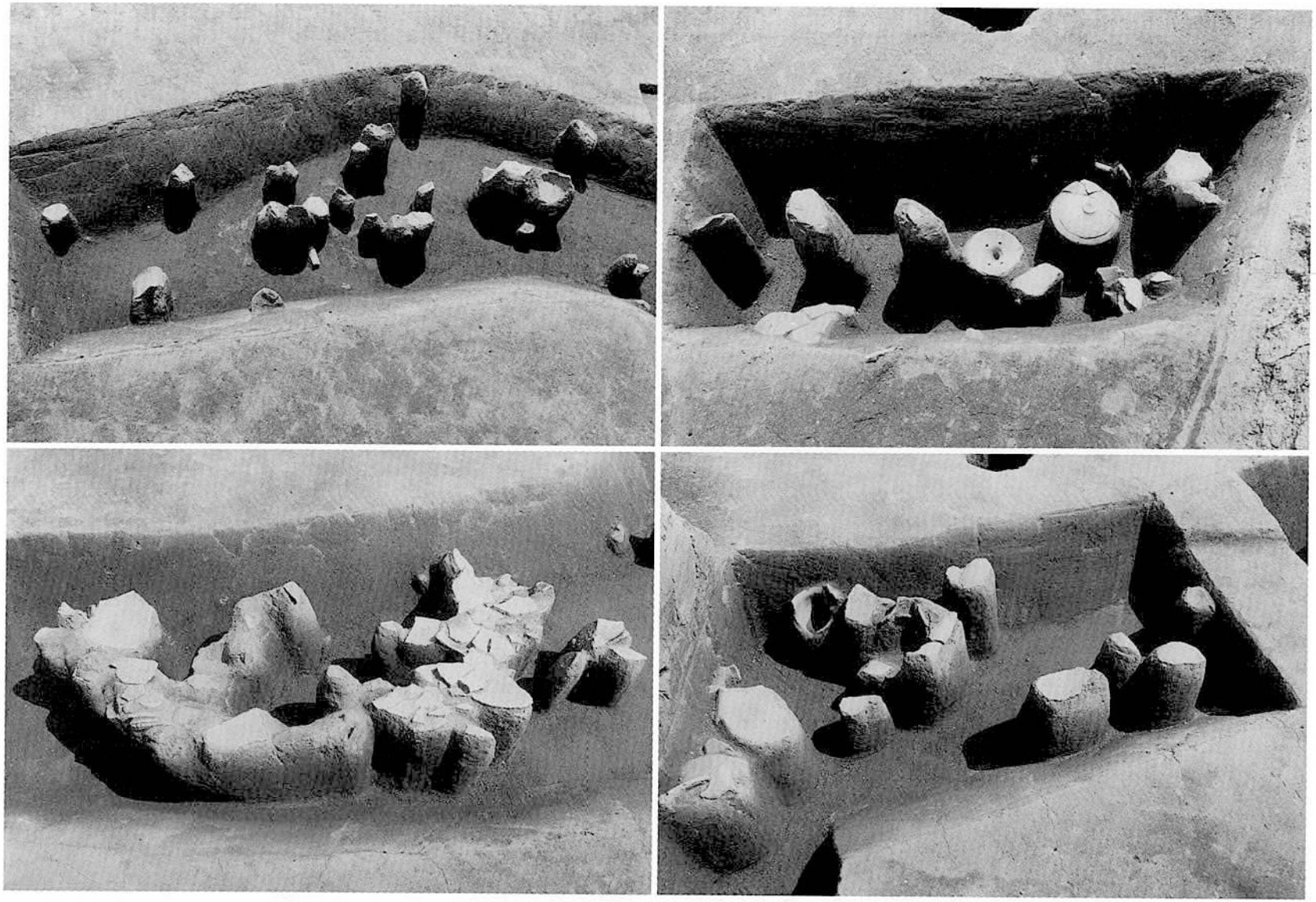
同（北西から）



3号甕棺墓（南西から）



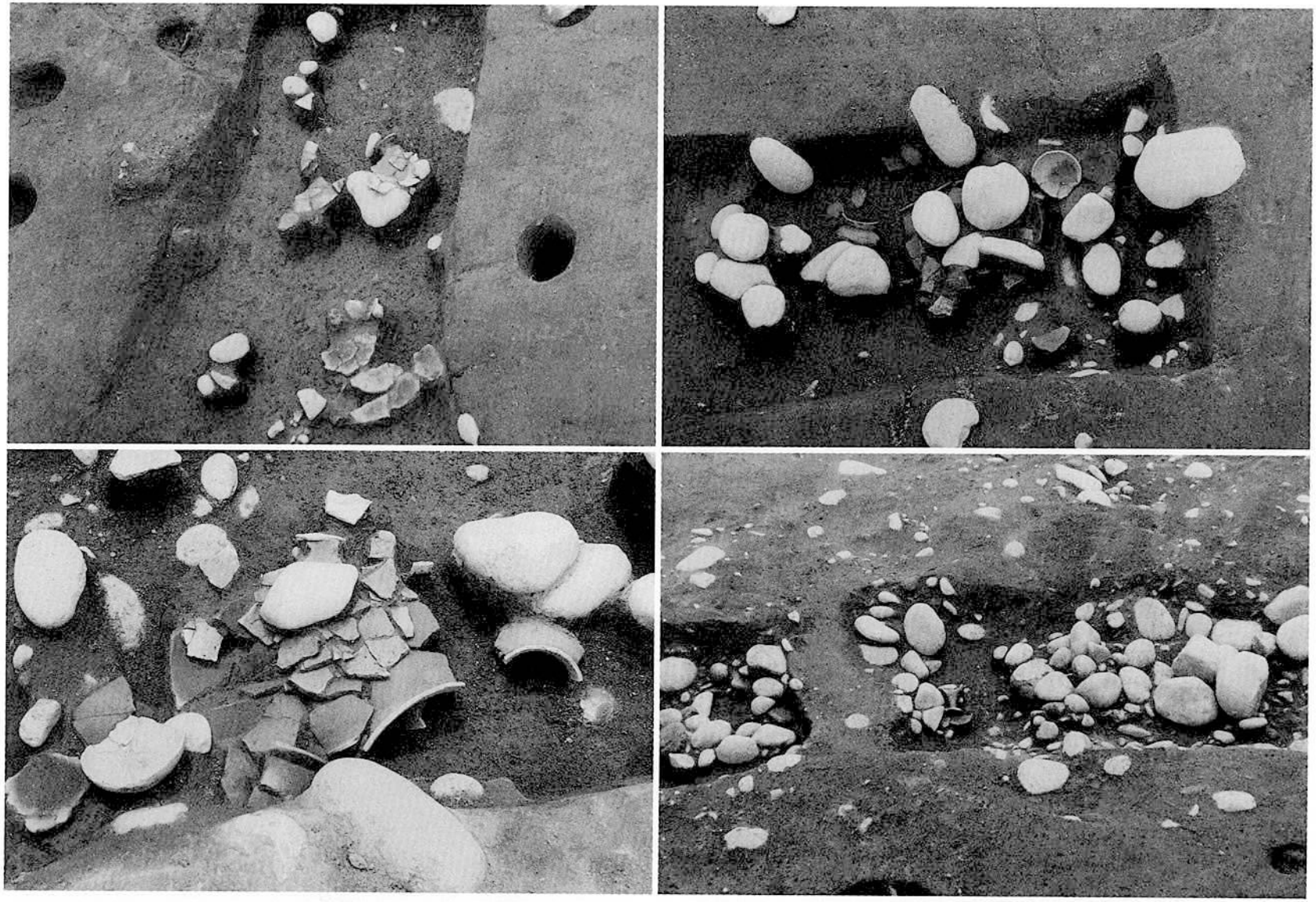
1号方形周溝（南東から）



1号方形周溝遺物出土状態（右上；東辺北、右下；北辺東、左上；西辺北、左下；北辺西）

2号方形周溝（西から）

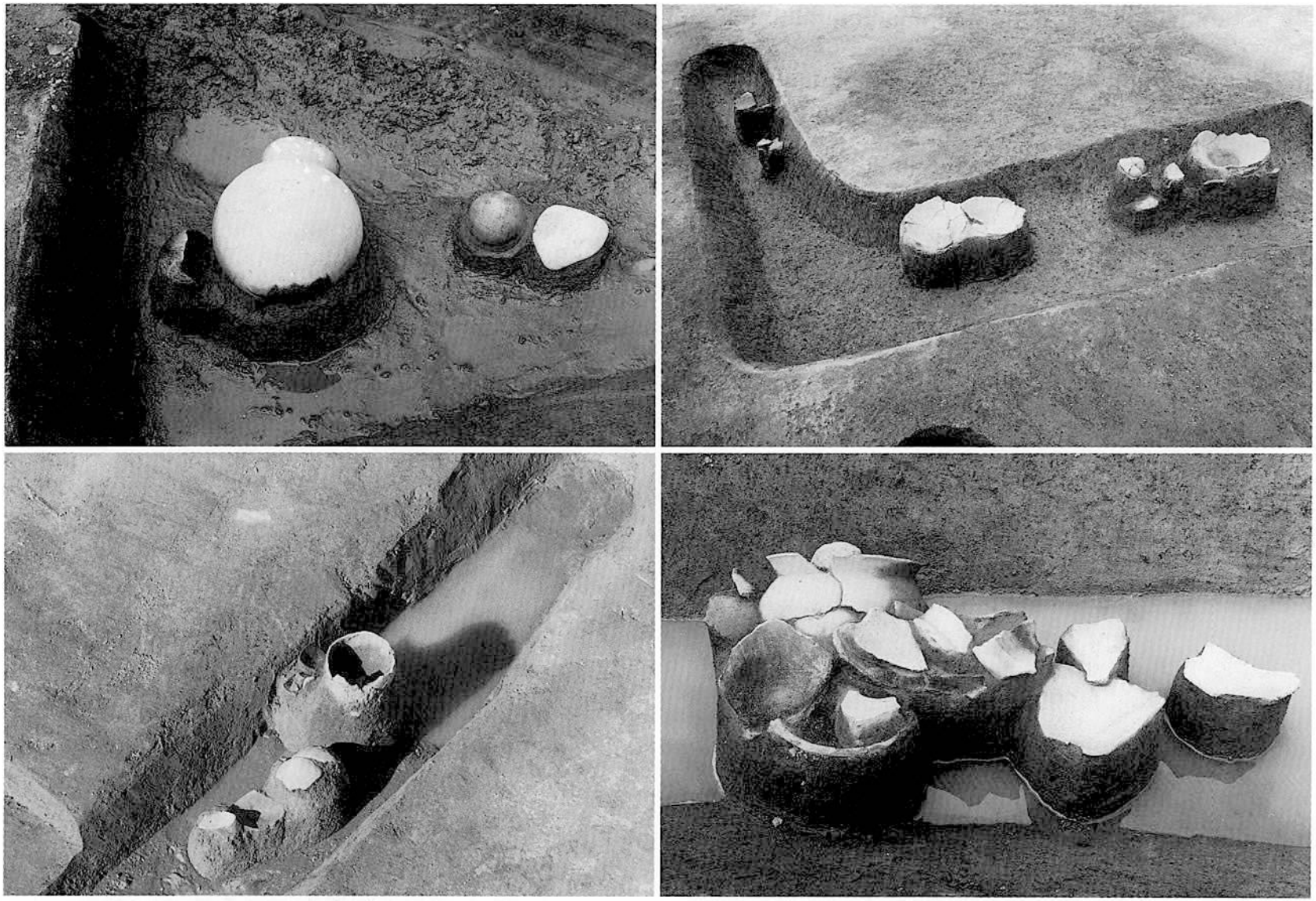
3号方形周溝（北西から）



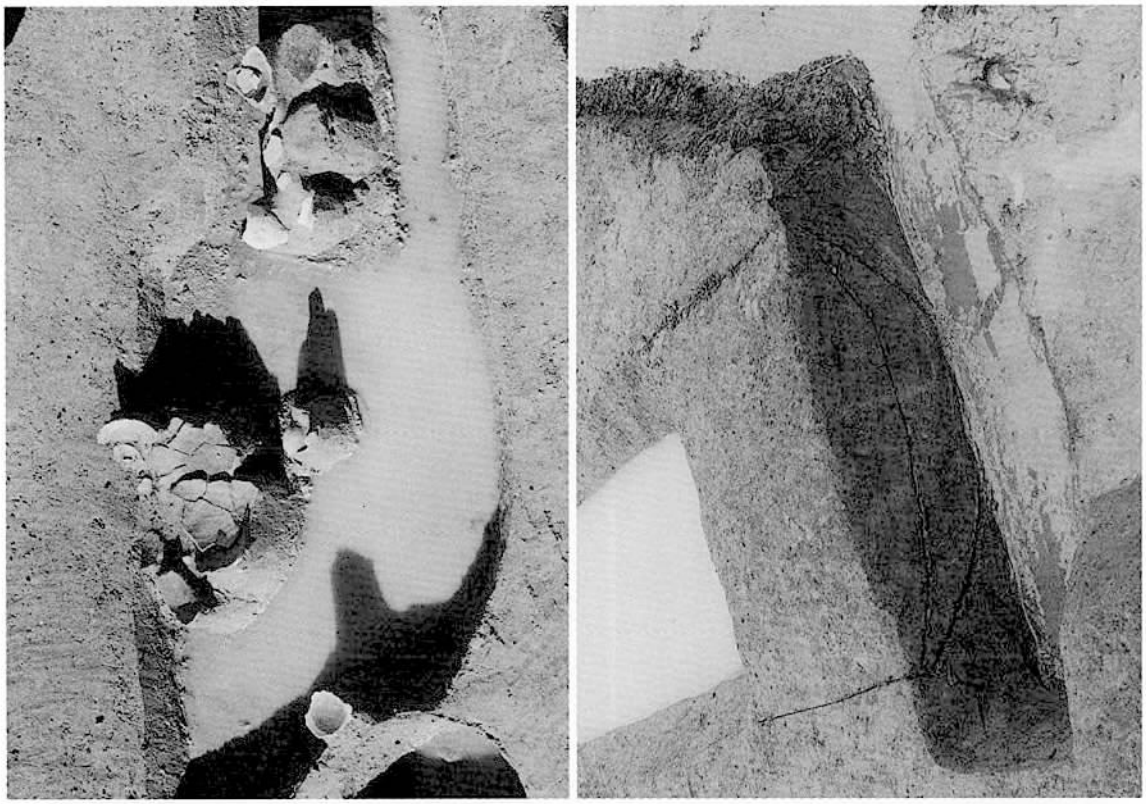
2号方形周溝遺物出土状態（右上；西辺中央、右下；東辺中央、左上；北辺中央、左下；西辺中央）

3号方形周溝遺物出土状態（北西から）

4号方形周溝（西から）



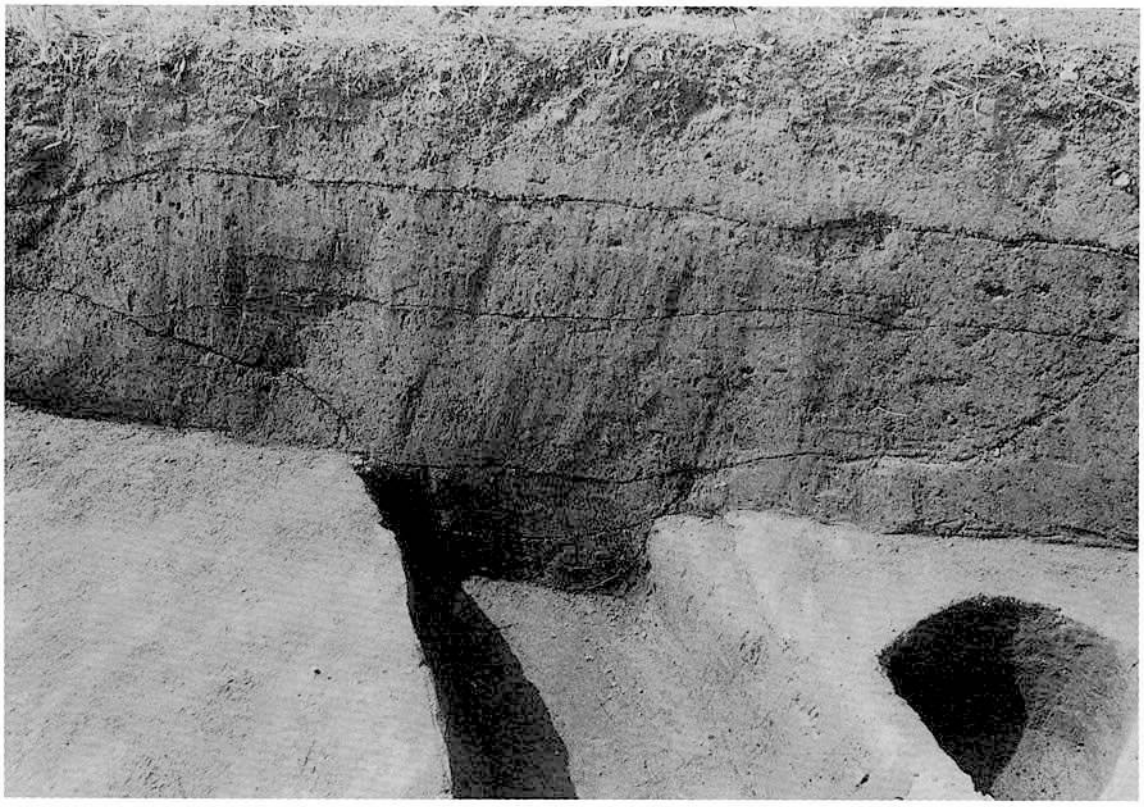
4号方形周溝遺物出土状態（右上：東辺南、右下：北辺西、左上：北辺東、左下：南辺西）



4号方形周溝遺物出土状態（左;南西隅、右;北辺土層）

円形周溝（北から）

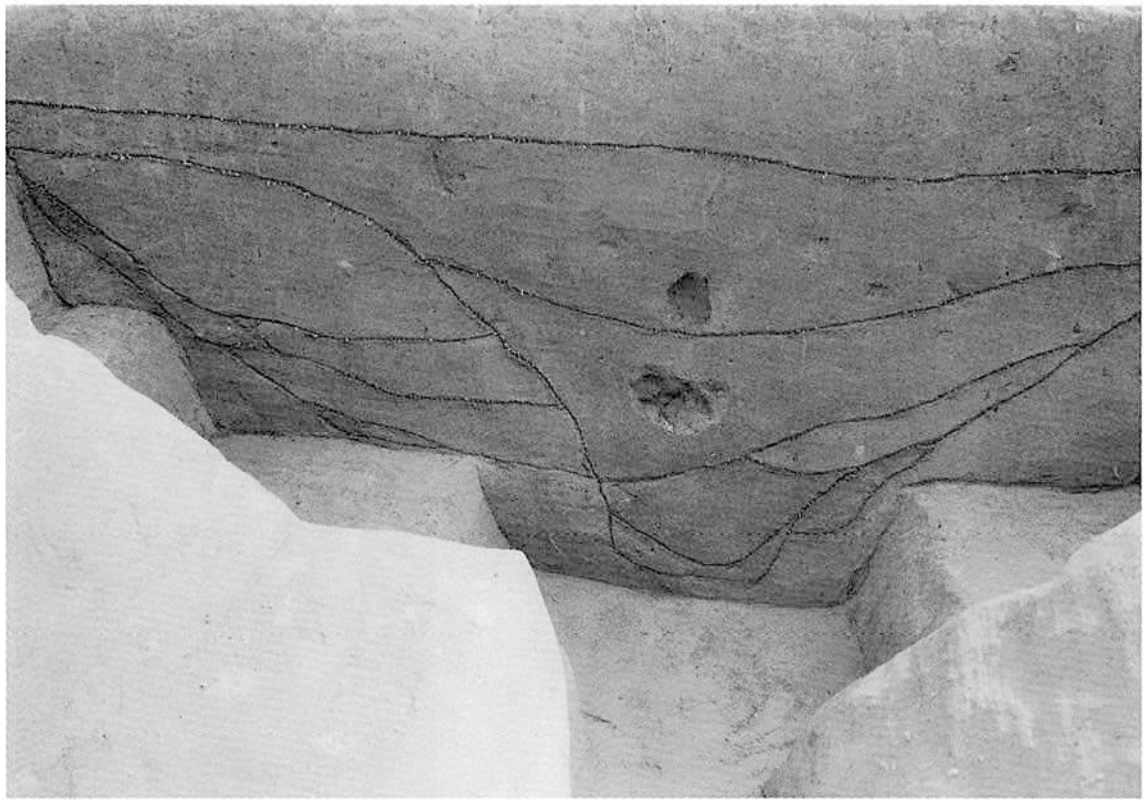
1号溝状遺構（北西から）



同土層（北東から）

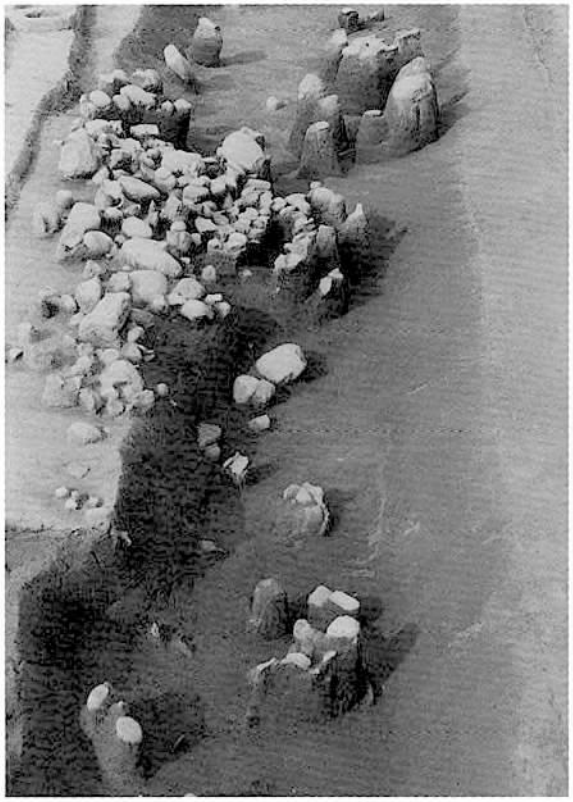
2号溝状遺構（南西から）

同（西から）



2号溝状遺構Ⅰ区北畦土層（南から）

2号溝状遺構Ⅱ区北畦土層（南西から）



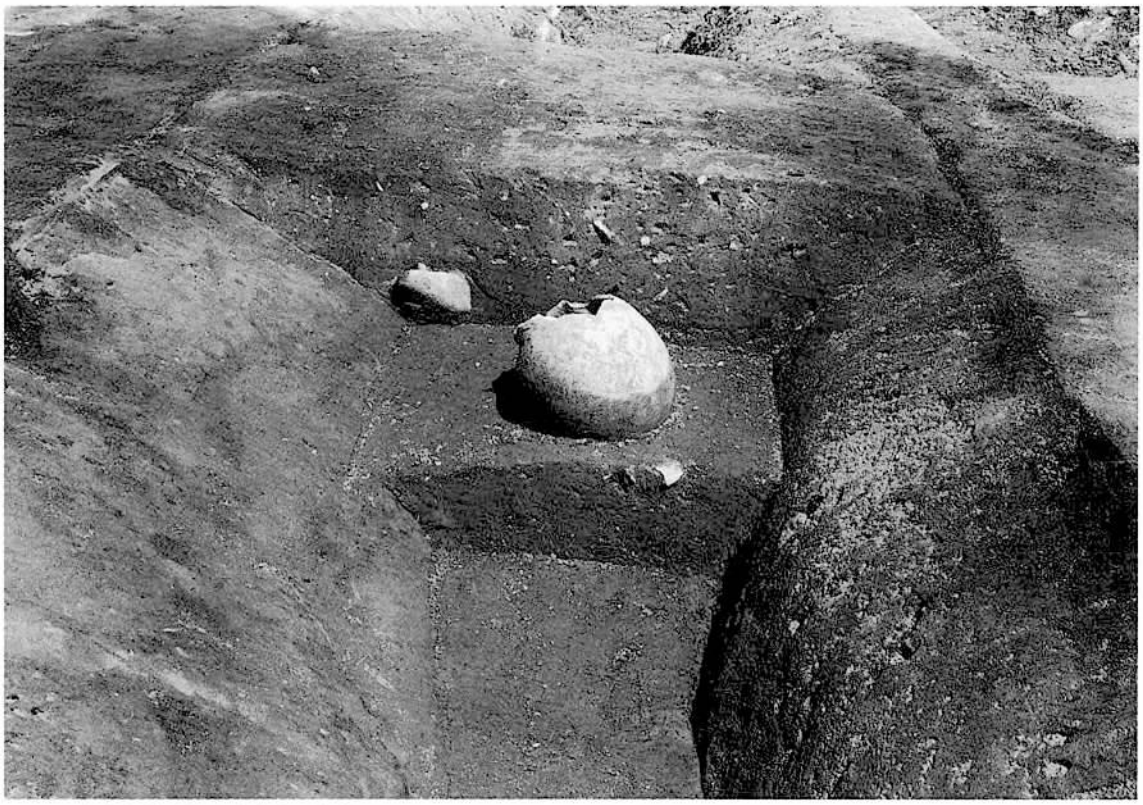
2号溝状遺構遺物出土状態

2号溝状遺構遺物出土状態

2号溝状遺構遺物出土状態

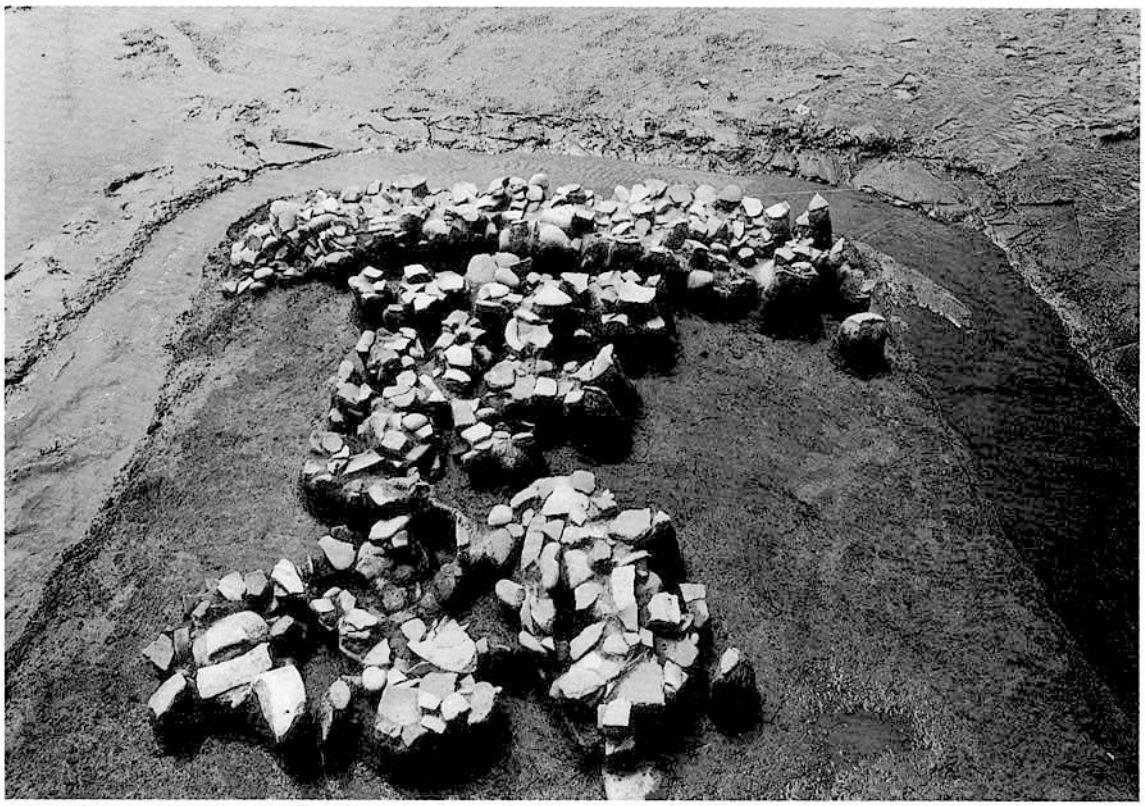
2号溝状遺構遺物出土状態

調査区東端溝状遺構群（南東から）



11号溝状遺構遺物出土状態（南東から）

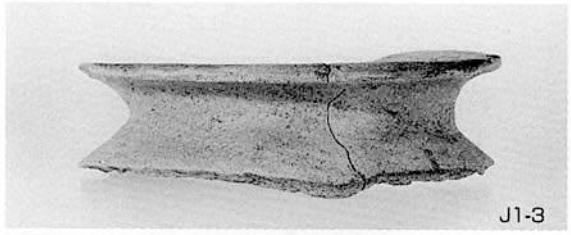
縄文時代埋甕（北西から）

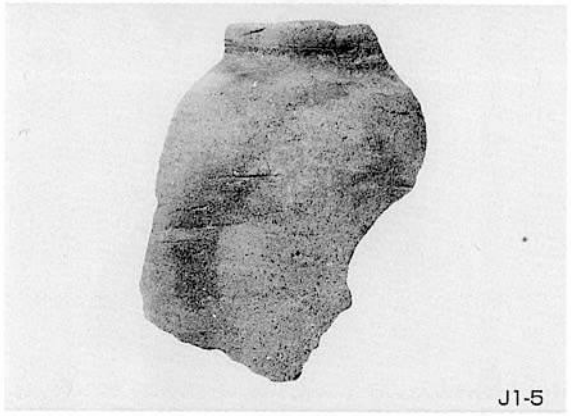


42号竪穴式住居跡北方土器溜（北から）

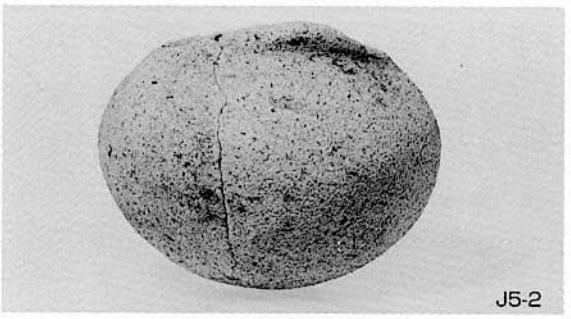
調査区西半全景（東から）

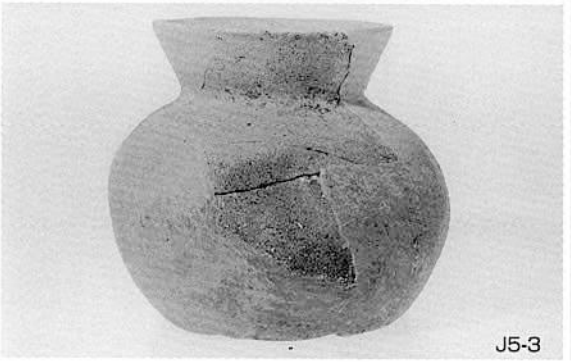
調査区西半全景（西から）

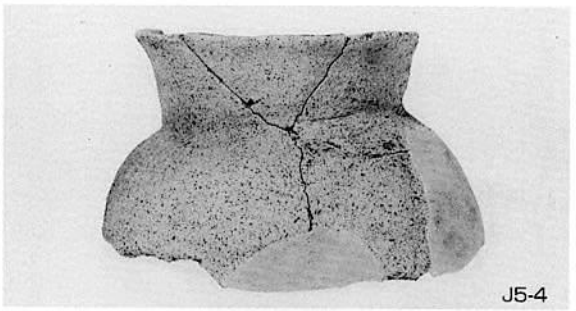

J1-3


J1-5

J5-1


J5-2

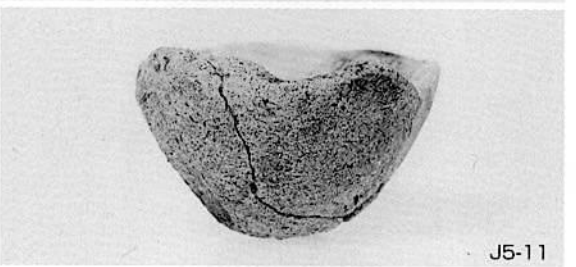

J5-3


J5-4

J5-5

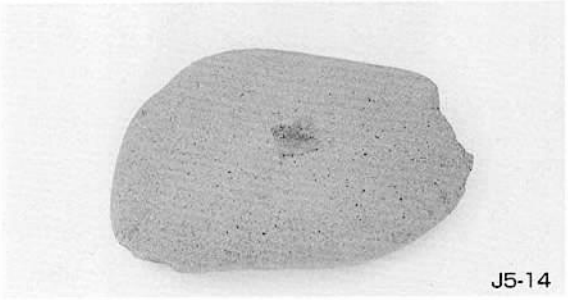
J5-8

J5-9

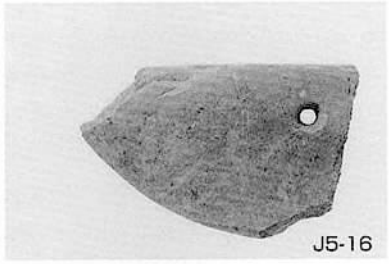

J5-11

出土遺物1（住1・5）

J5-12

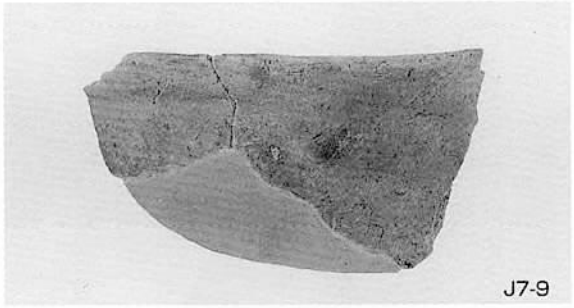

J5-14

J5-15


J5-16

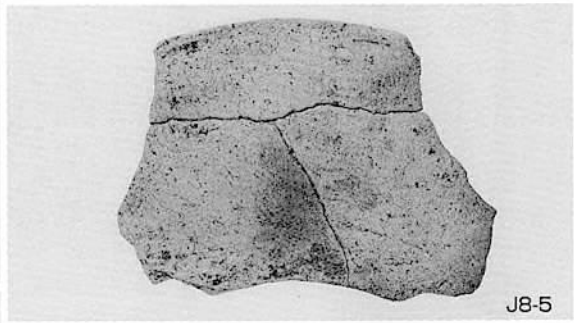
J7-6

J7-8


J7-9

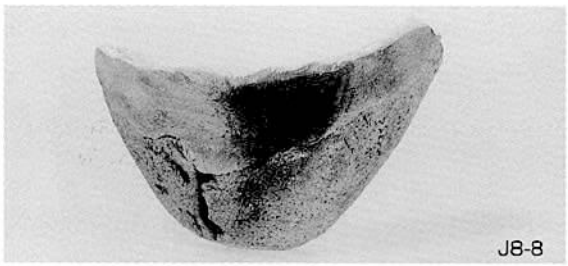
J8-1

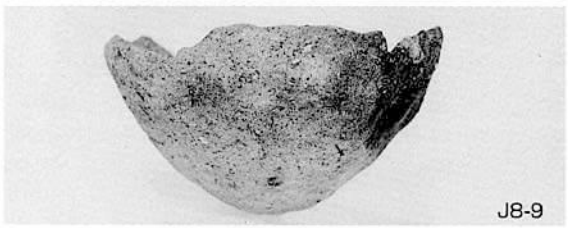
J8-3

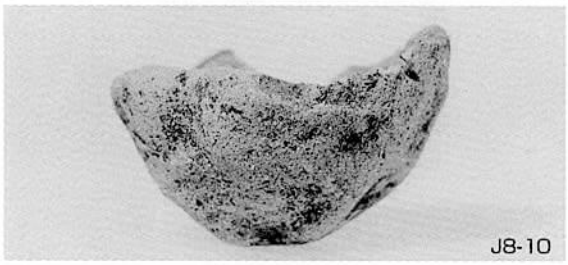

J8-5

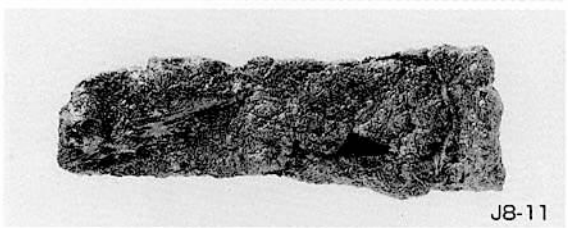
J8-6

出土遺物2（住5・7・8）


J8-8

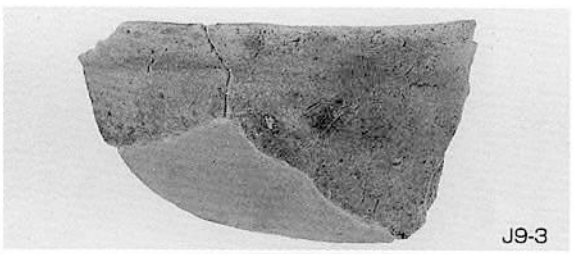

J8-9


J8-10


J8-11

J9-1

J9-2

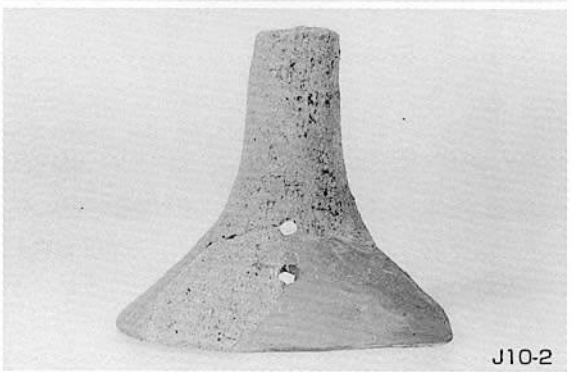

J9-3

J9-4

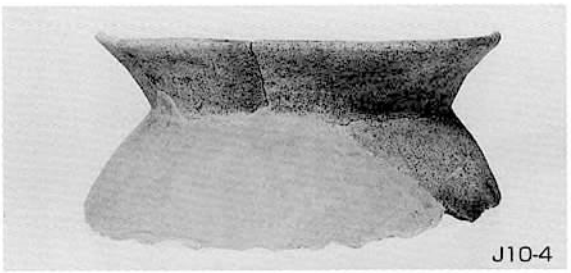
J9-5

J9-6

J10-1


J10-2

出土遺物3（住8・9・10）


J10-4

J10-5

J10-6

J10-7

J10-8

J10-9

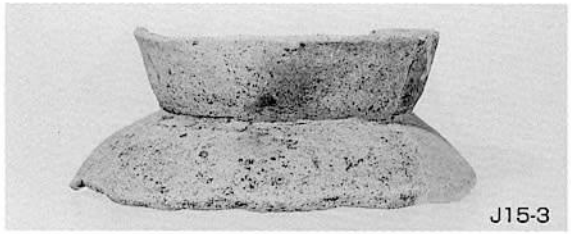
J11-1

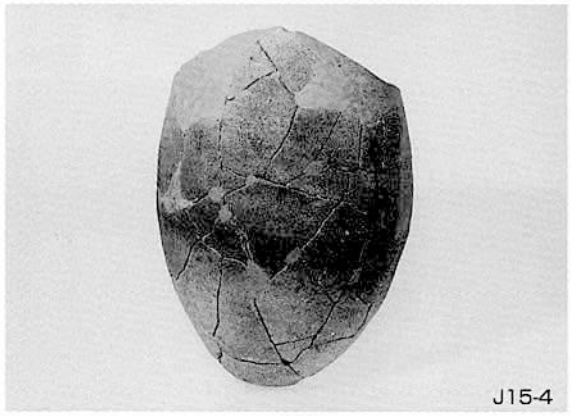
J11-2

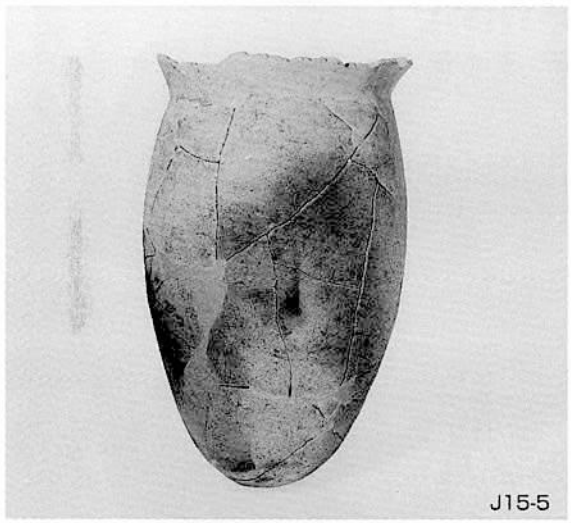
J11-3

J11-5

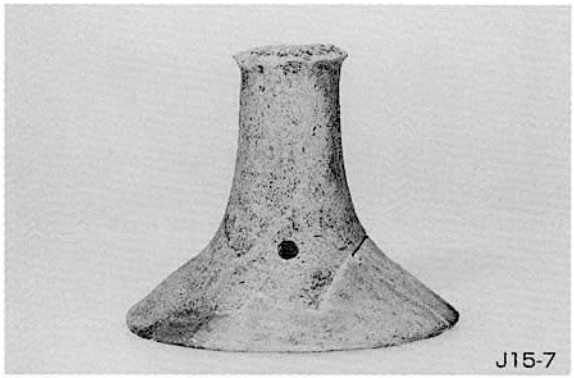
出土遺物4（住10・11）

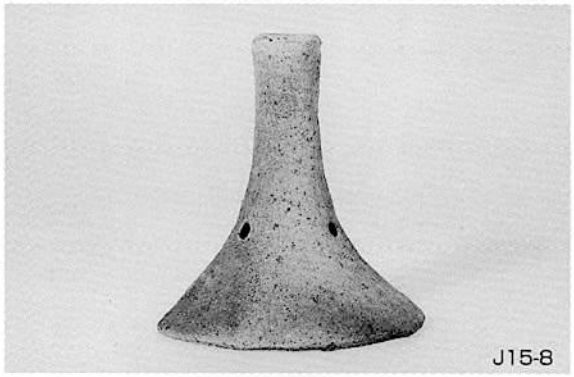

J15-3


J15-4

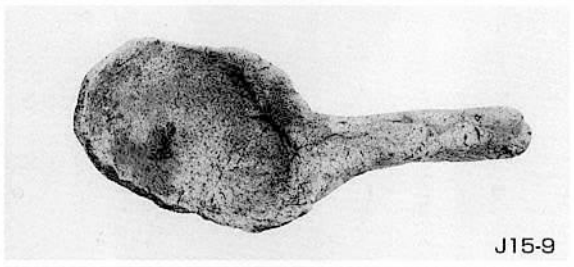

J15-5

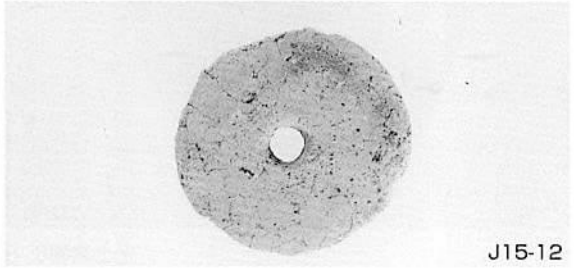
J15-6


J15-7


J15-8

J15-10


J15-9


J15-12

出土遺物5（住15）

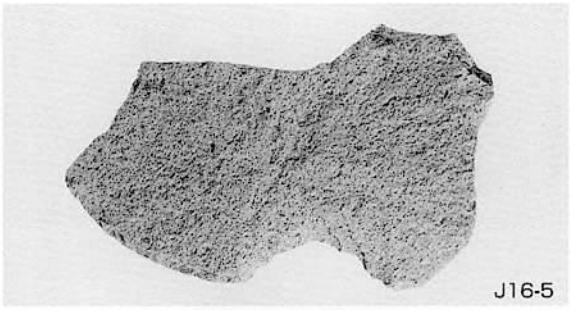
J15-13

J16-1

J16-2

J16-3

J16-4


J16-5

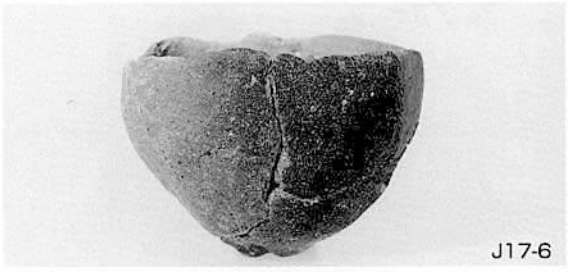
J17-1

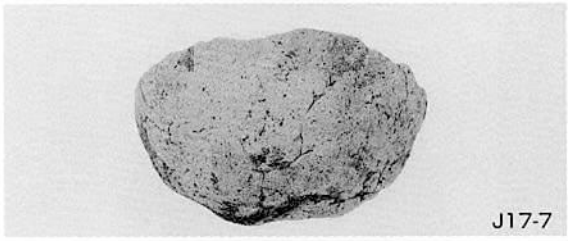
J17-3

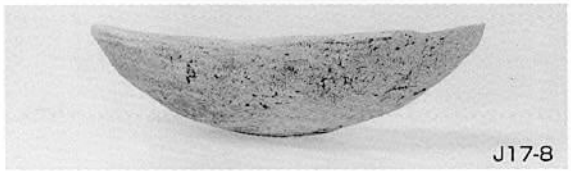
J17-4

J17-5

出土遺物6（住15・16・17）

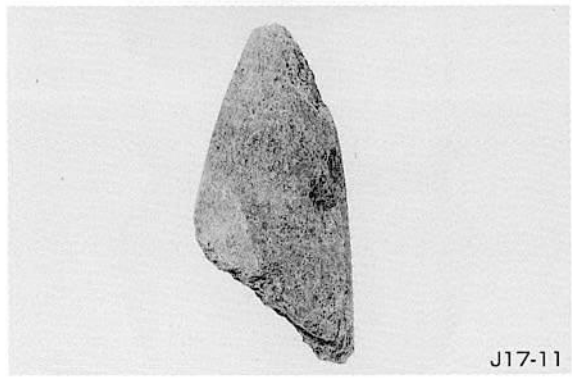

J17-6


J17-7

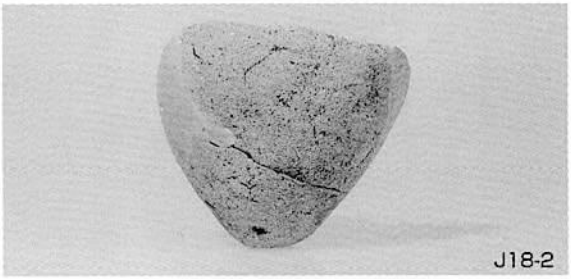

J17-8

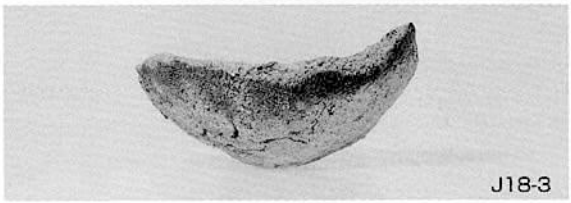
J17-9

J17-10


J17-11

J18-1


J18-2


J18-3

J19-1

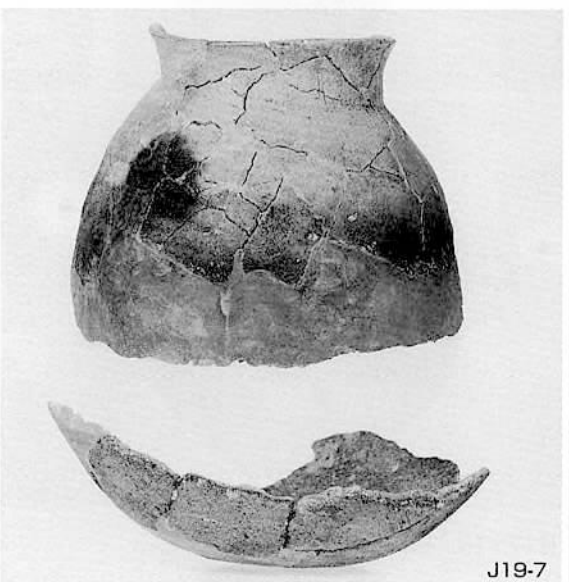
J19-2

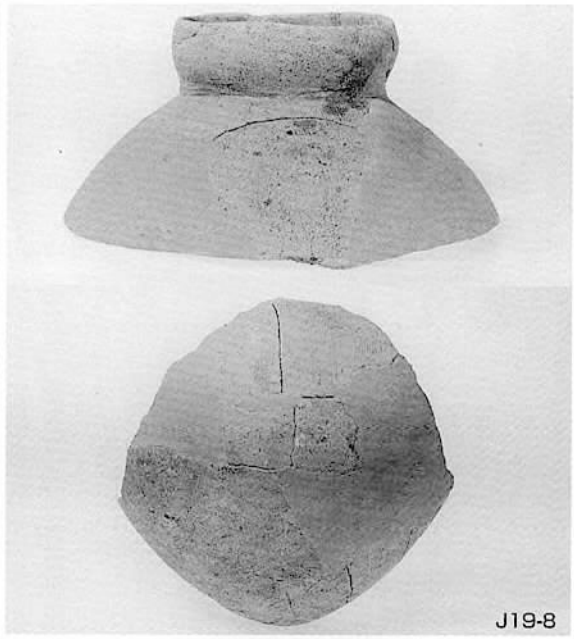
出土遺物7（住17・18・19）

J19-3

J19-4

J19-5


J19-7

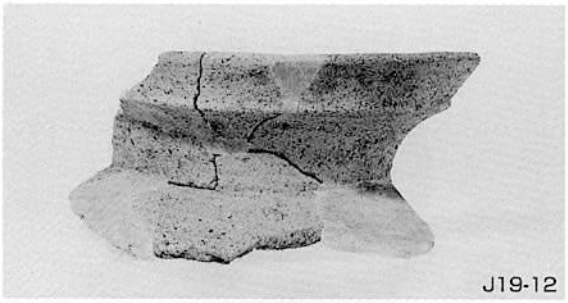

J19-8

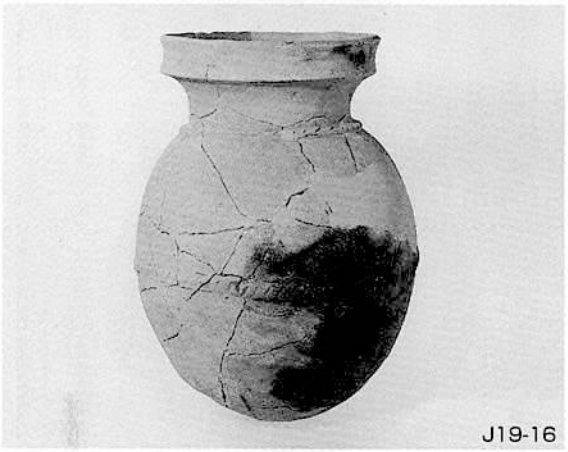
J19-9

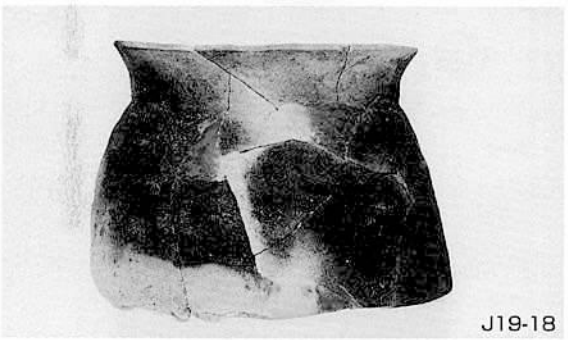
J19-10

J19-11

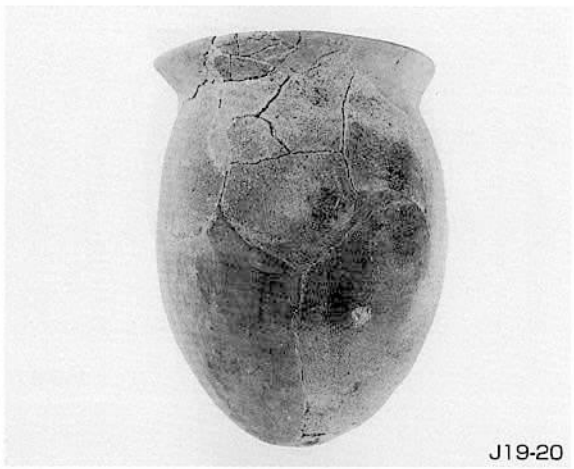
出土遺物8（住19）

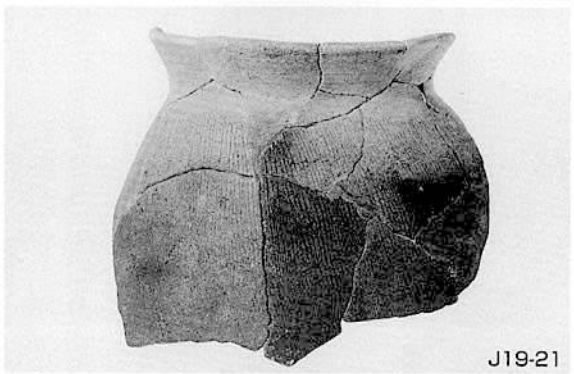

J19-12


J19-16


J19-18

J19-19

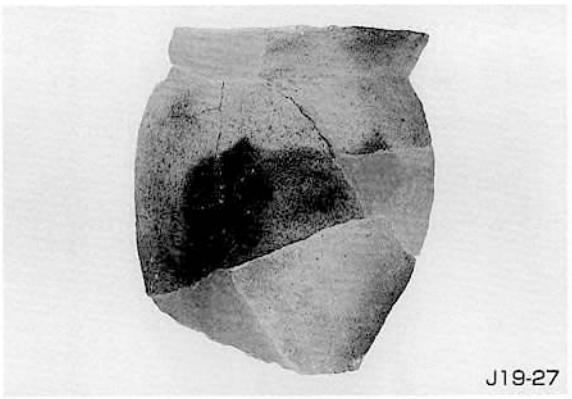

J19-20


J19-21

J19-24

J19-25

出土遺物9（住19）


J19-27

J19-31

J19-28

J19-32

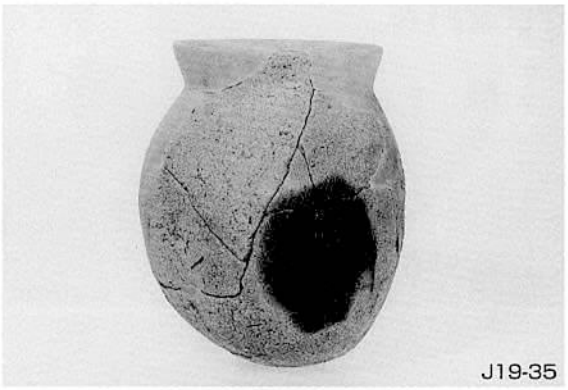
J19-29

J19-33

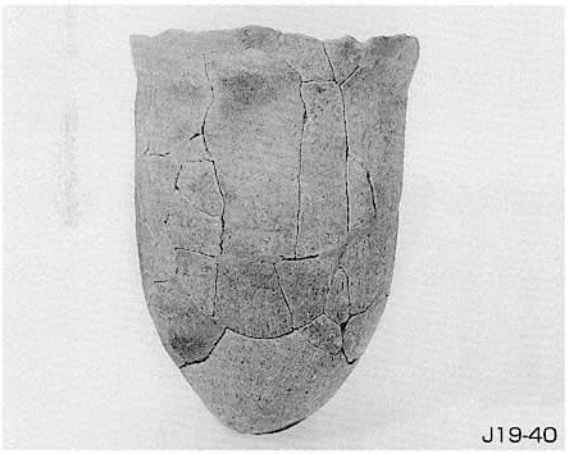
J19-30

J19-34

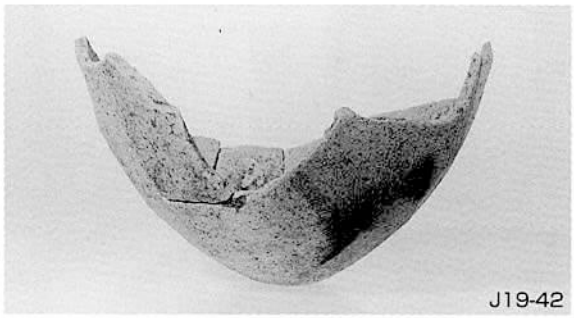
出土遺物10（住19）


J19-35

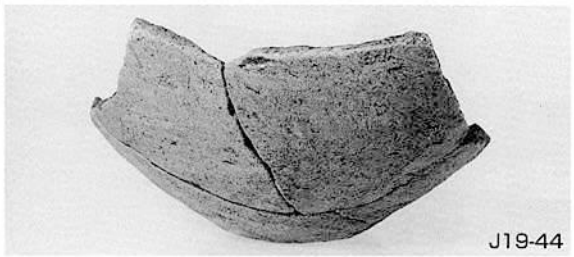
J19-36


J19-40

J19-41


J19-42

J19-43


J19-44

J19-46

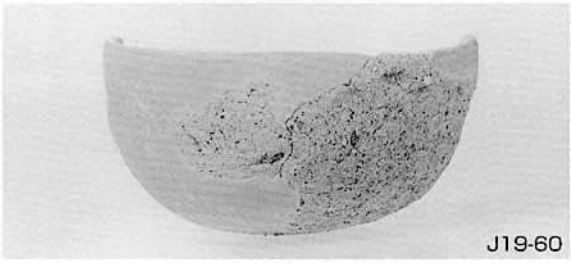
J19-47

出土遺物9（住19）

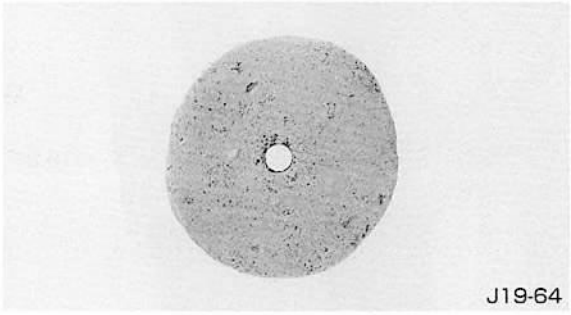
J19-48

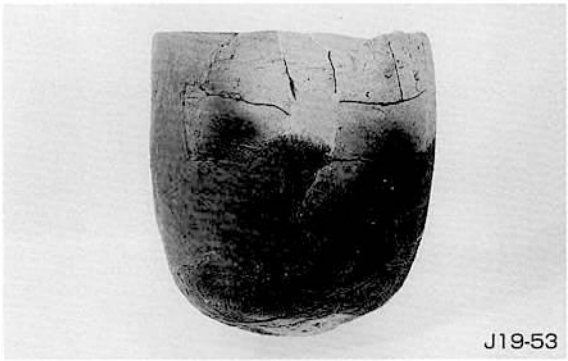
J19-58

J19-51


J19-60

J19-52


J19-64

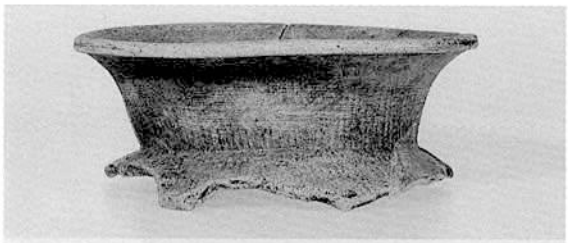

J19-53

J19

J19-55

J20-2

出土遺物12（住19・20）



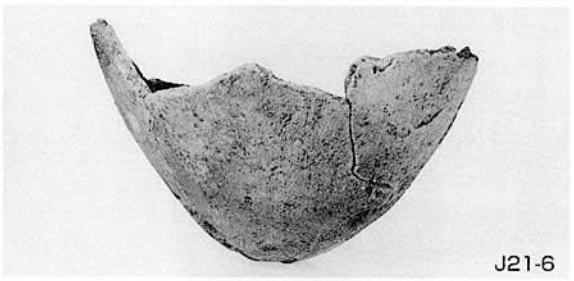
J20-1

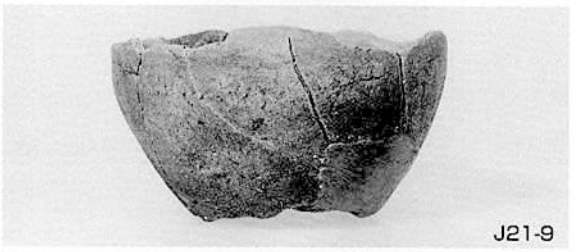
J20-3

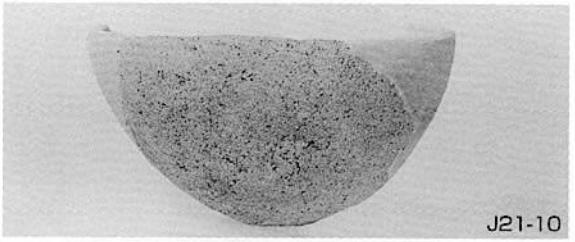
J21-1

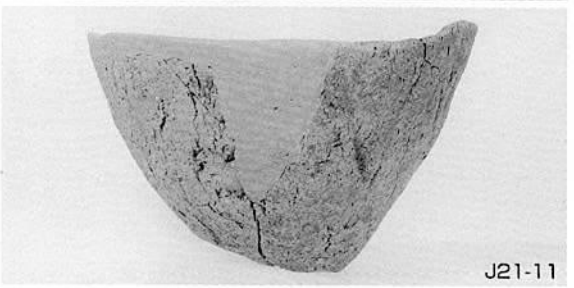
J21-2

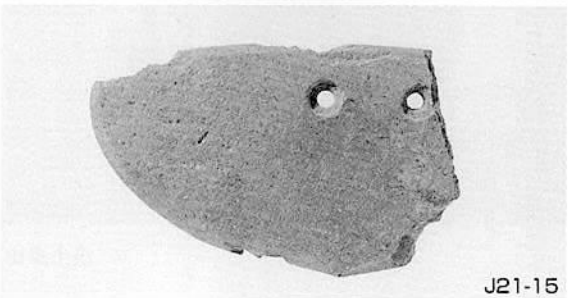
J21-3


J21-6


J21-9


J21-10

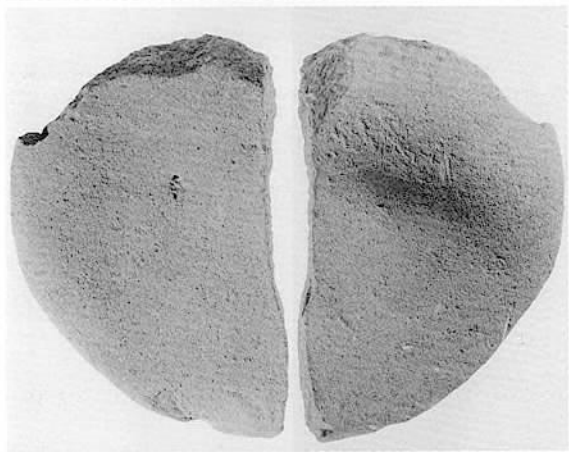

J21-11


J21-15

出土遺物13（住20・21）

J21-12

J21-13


J22-1

J22-2

J22-4

J22-5

J22-7

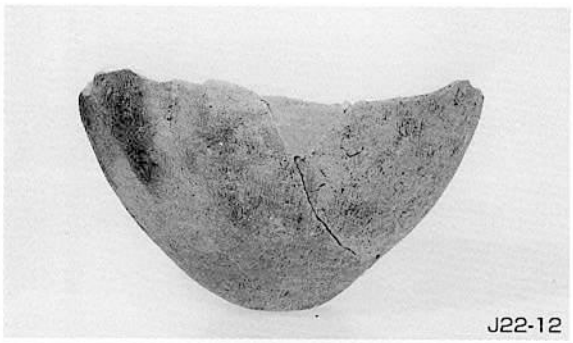
出土遺物14（住21・22）

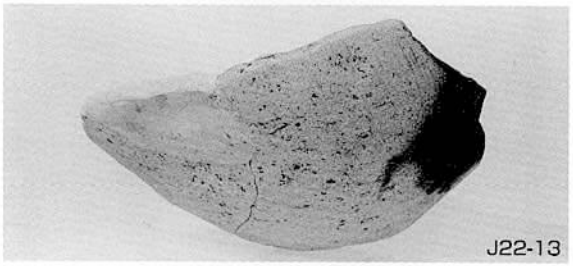
J22-8

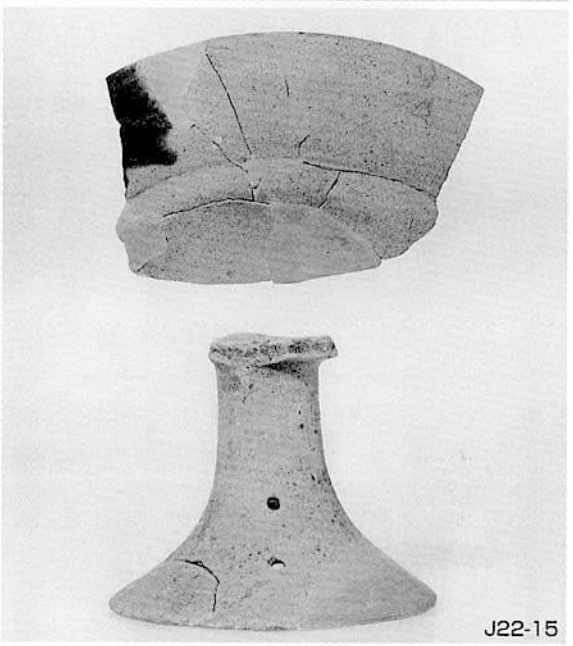
J22-9

J22-10

J22-11

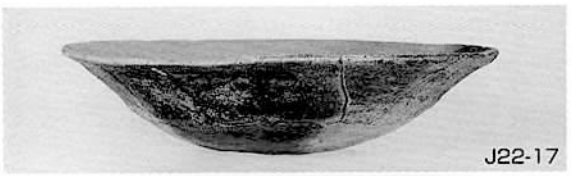

J22-12

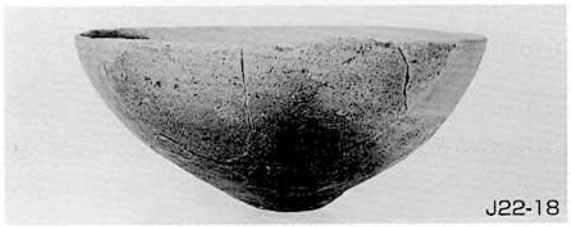

J22-13


J22-15

J22-16

出土遺物15（住22）


J22-17

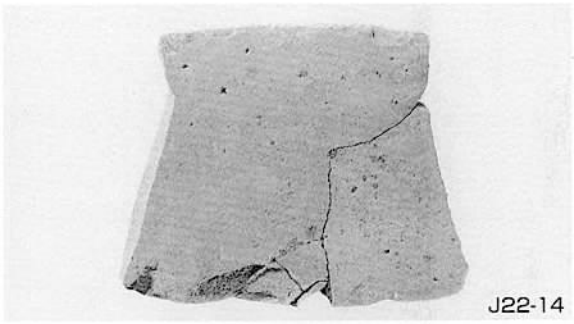

J22-18

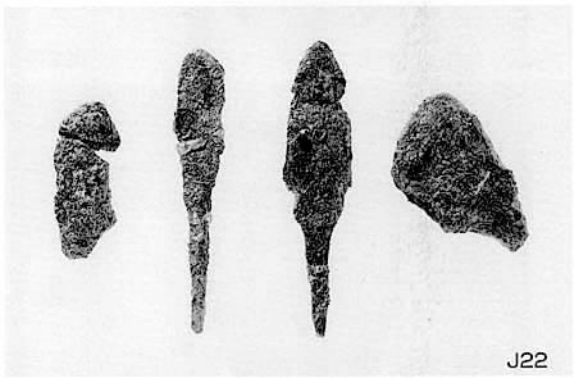
J22-19

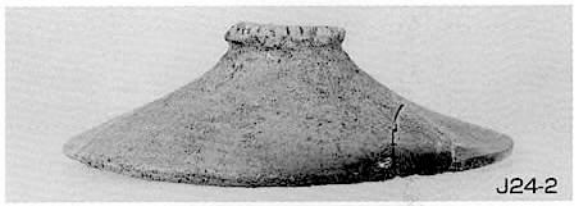
J22-20

J22-21

J22-22


J22-14


J22

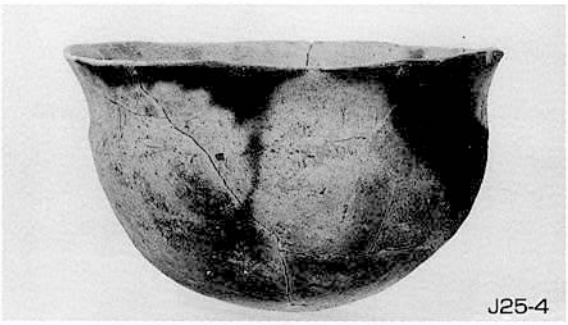

J24-2

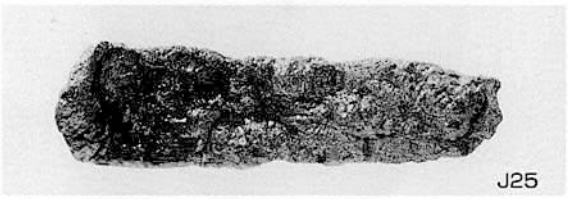
J24-3

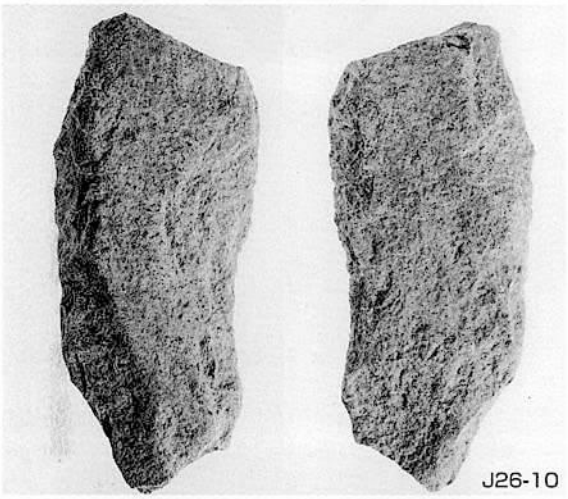
J24-4

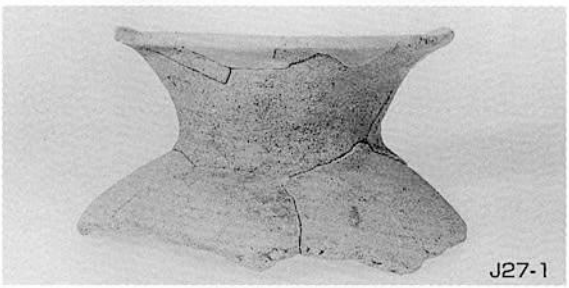
J24-5

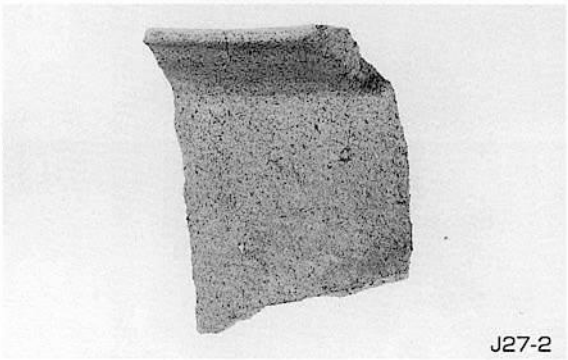
出土遺物16（住22・24）

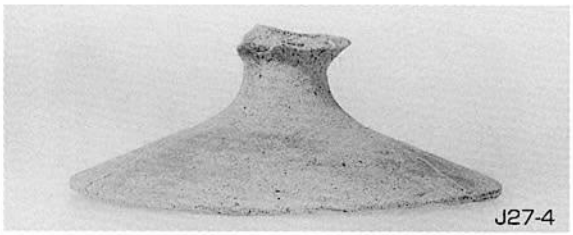

J25-4


J25


J26-10

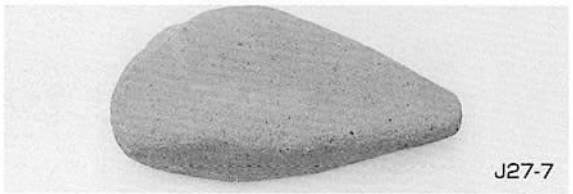

J27-1

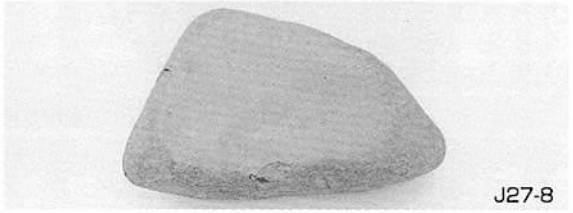

J27-2

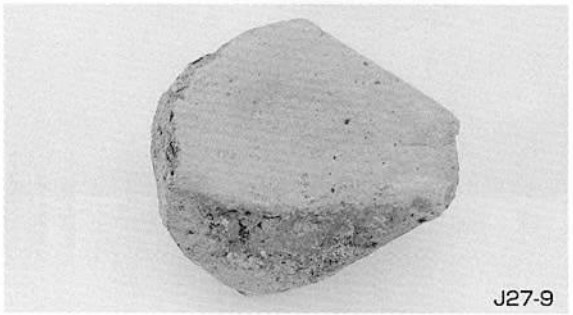

J27-4

J27-5

J27-6

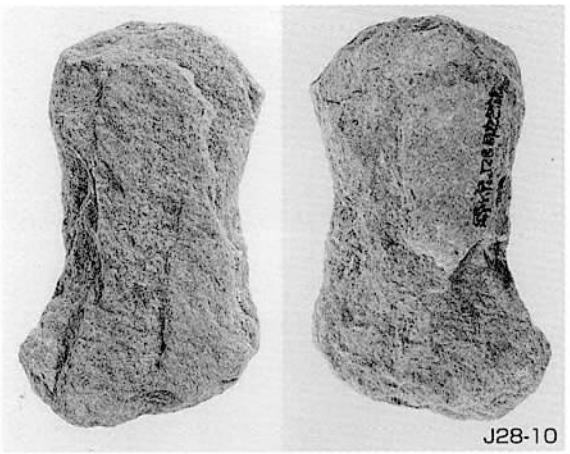

J27-7

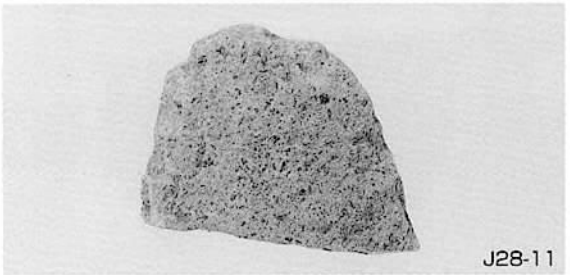

J27-8

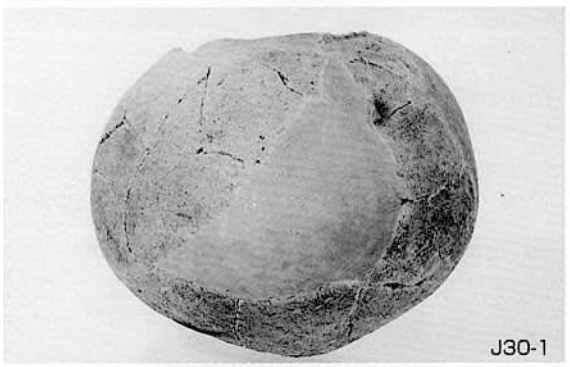

J27-9

J27

出土遺物17（住25・27）

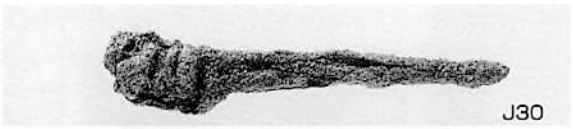

J28-10

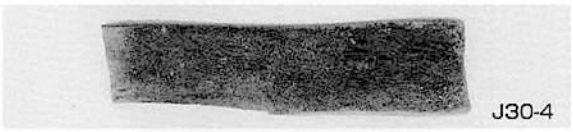

J28-11


J30-1

J30-1

J30-2

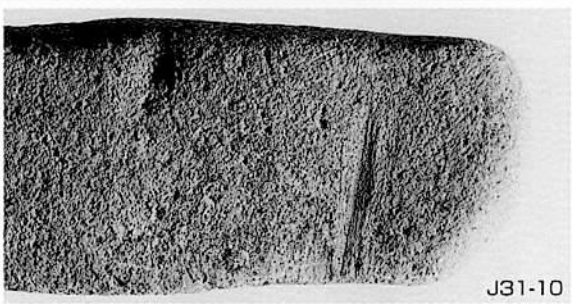

J30

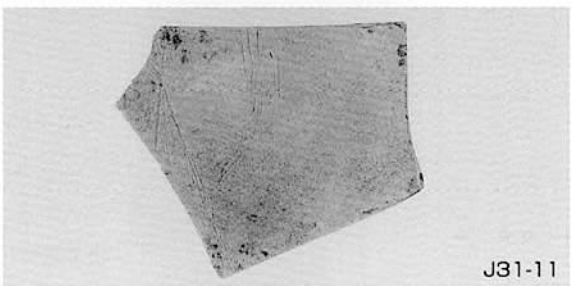

J30-4

J31-2

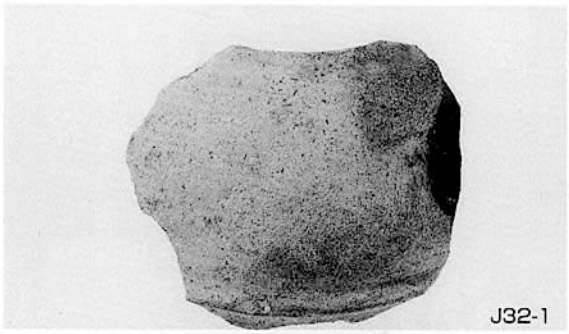
J31-9

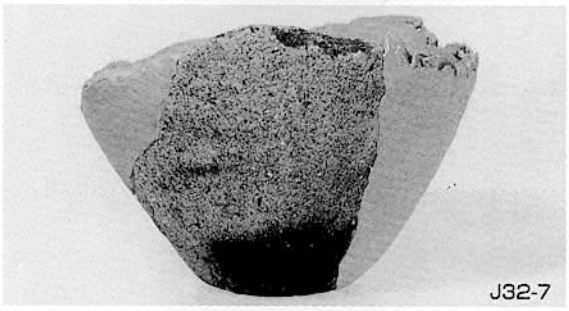
J31-10

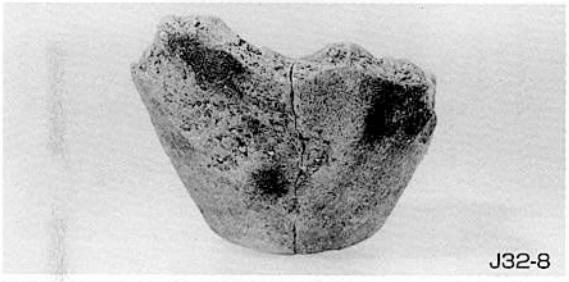

J31-10

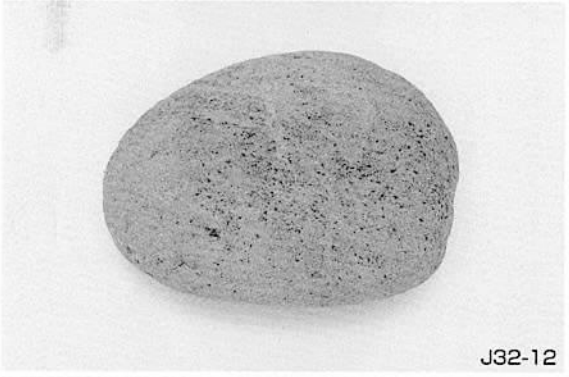

J31-11

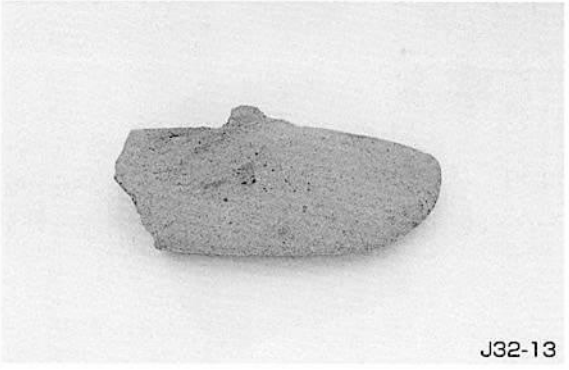
出土遺物18（住28・30・31）

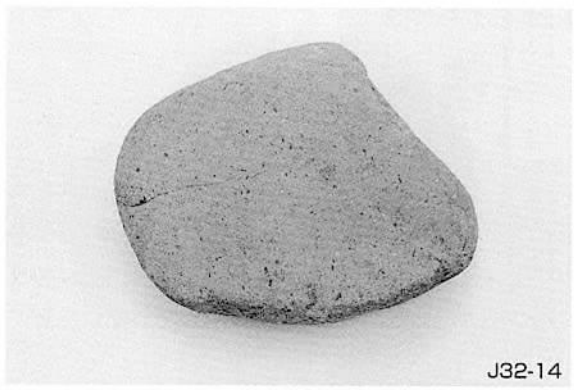

J32-1


J32-7


J32-8


J32-12


J32-13

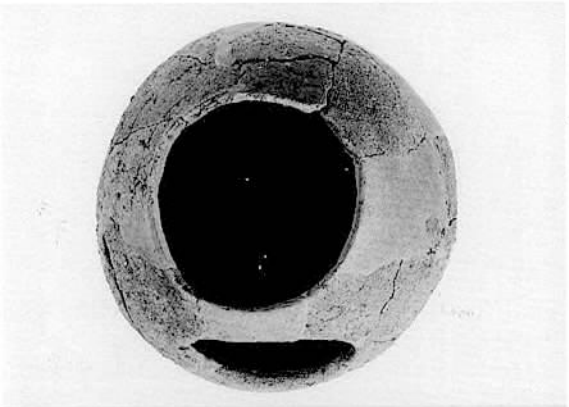

J32-14

J34-1

J34-2

J34-3

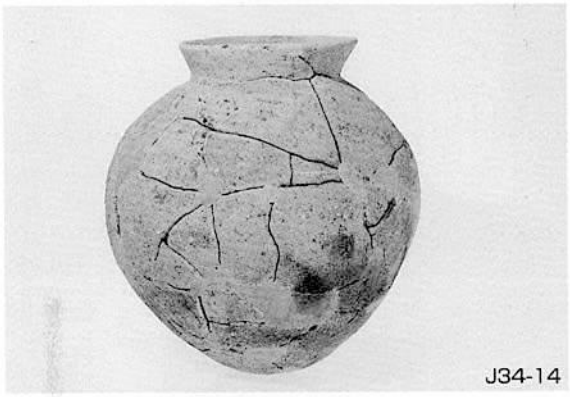
出土遺物19（住32・34）



出土遺物（住34）

J34-13

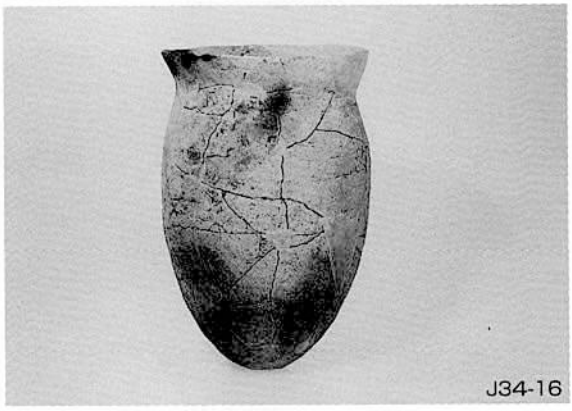
J34-17


J34-14

J34-18

J34-15

J34-19


J34-16

J34-20

出土遺物21（住34）

J34-21

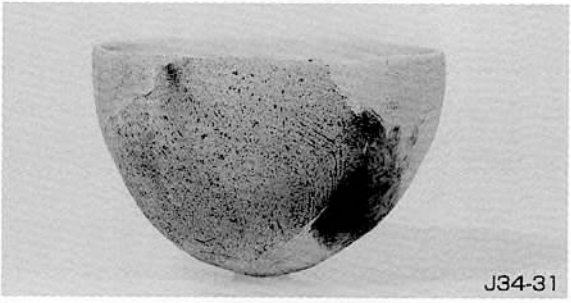
J34-27

J34-22

J34-28

J34-29

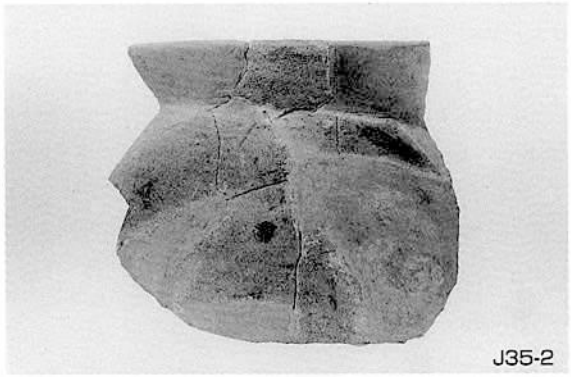
J34-25


J34-31

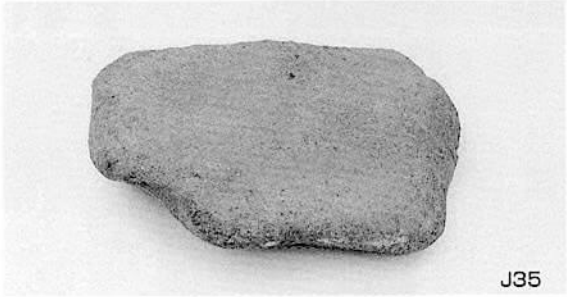
J34-26

J34-31

出土遺物22（住34）


J35-2

J38-2


J35

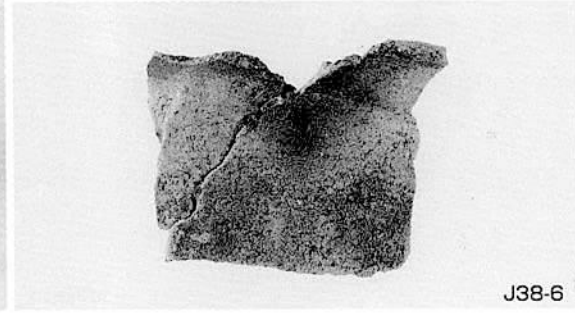
J38-2

J36

J38-4

J38-1

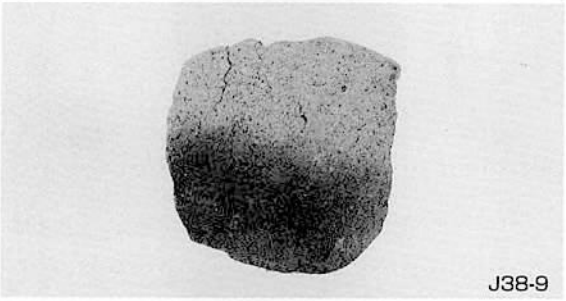
J38-5


J38-6

出土遺物23（住35・36・38）

J38-7

J38-8


J38-9

J38-10

J38-11

J38-15

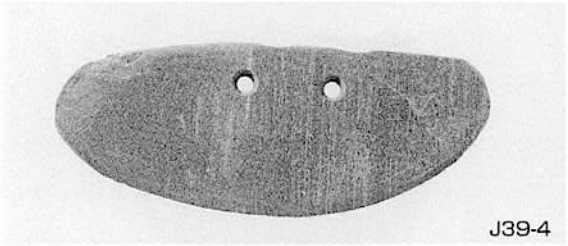
J38-13

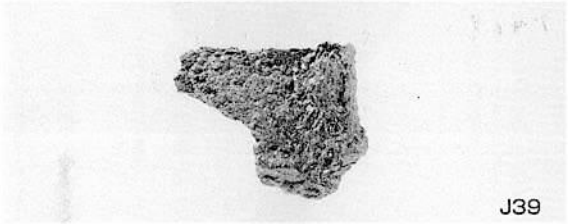
J38-14

J39

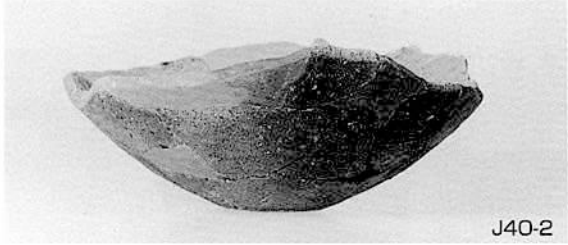
出土遺物24（住38・39）

J39-3


J39-4

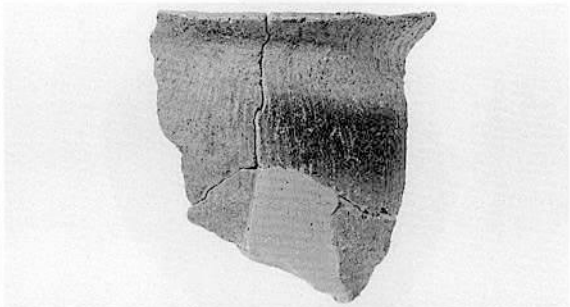

J39

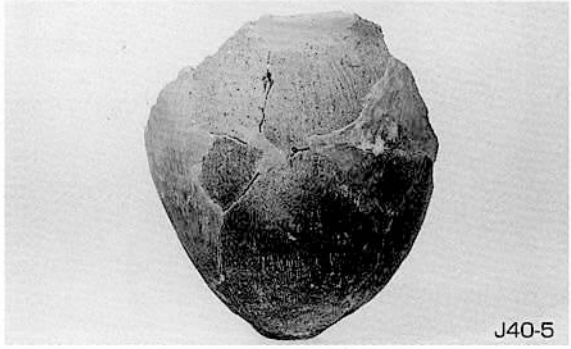
J40-1

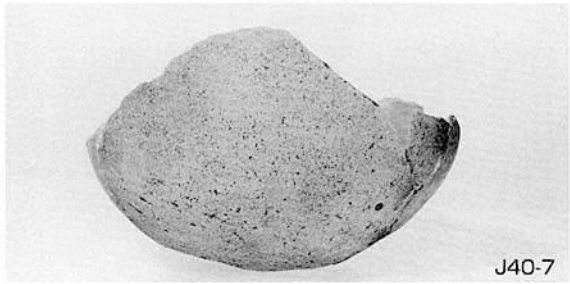

J40-2

J40-3

J40-4




J40-5


J40-7

出土遺物25（住39・40）

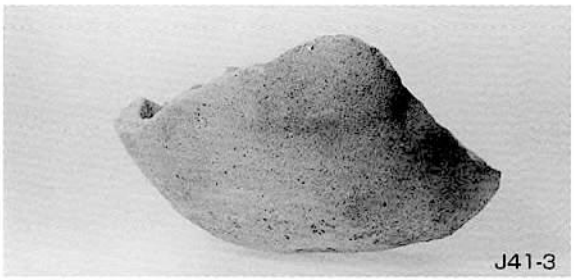
J40-8

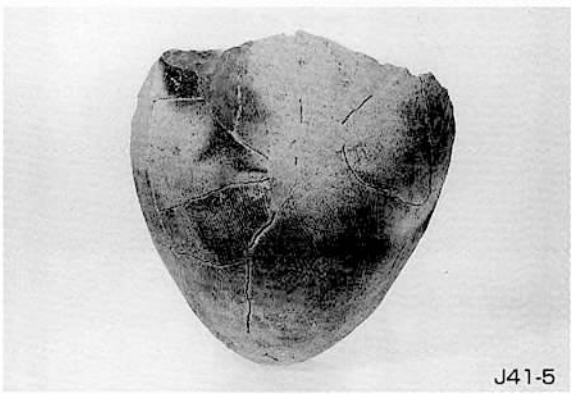
J40-9

J40-10

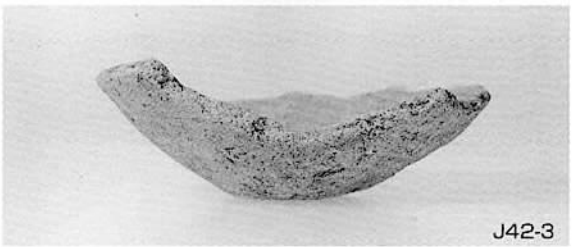
J41-1

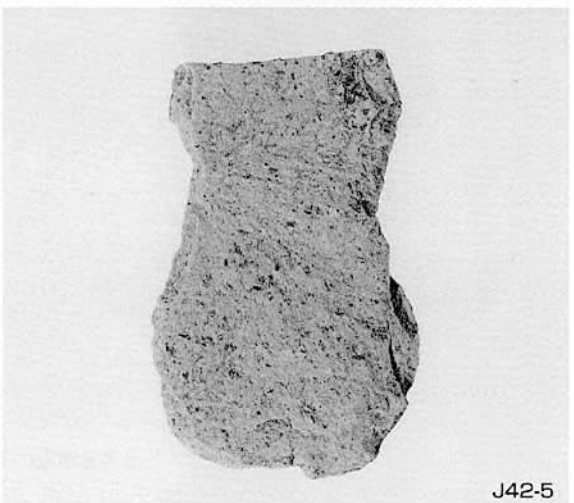
J41-2


J41-3

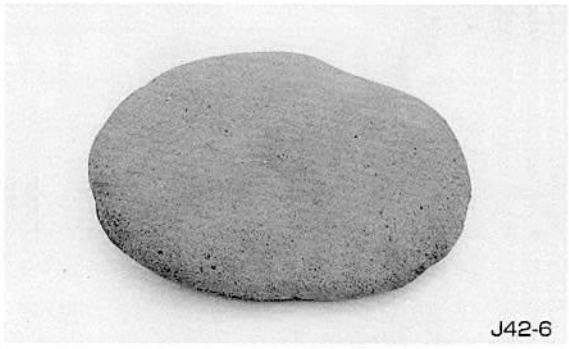

J41-5

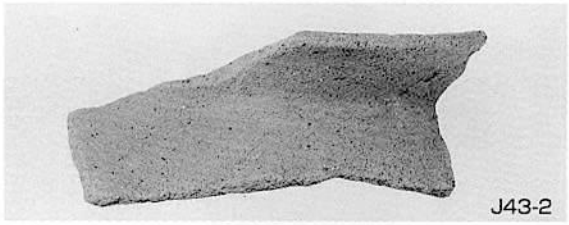
J41

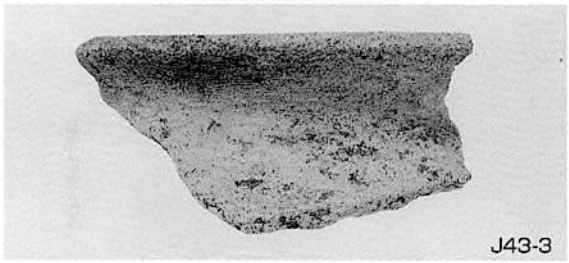

J42-3

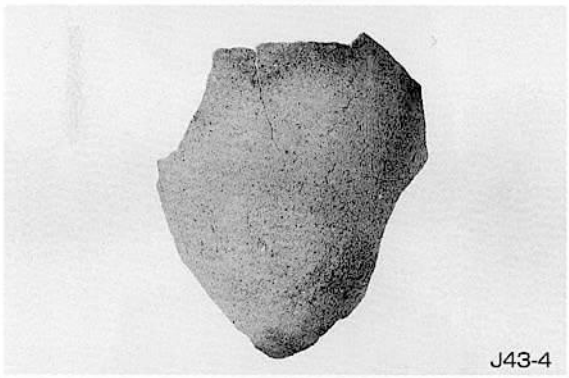

J42-5

出土遺物26（住40・41・42）


J42-6


J43-2

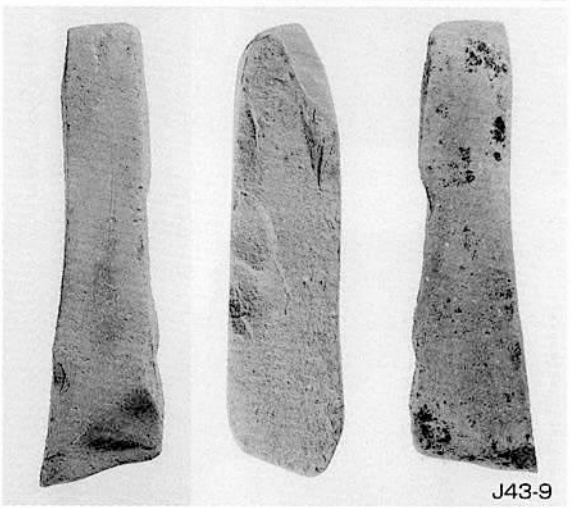

J43-3

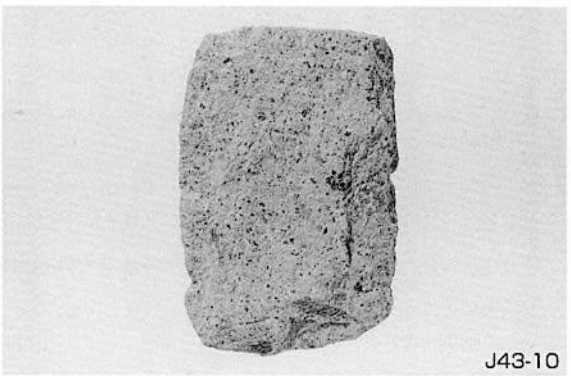

J43-4

J43-5

J43-7

J43-8


J43-9

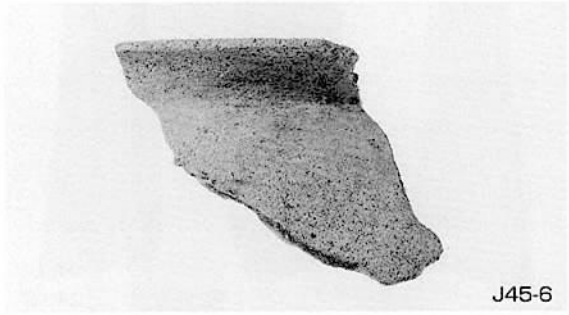

J43-10

出土遺物27（住42・43）

J44-2

J45-1

J45-2

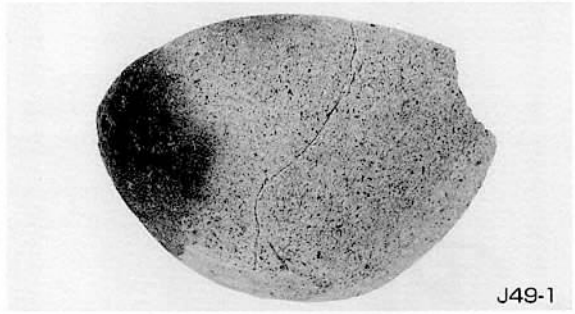

J45-6

J47-1

J47-2

J47-3

J47-4

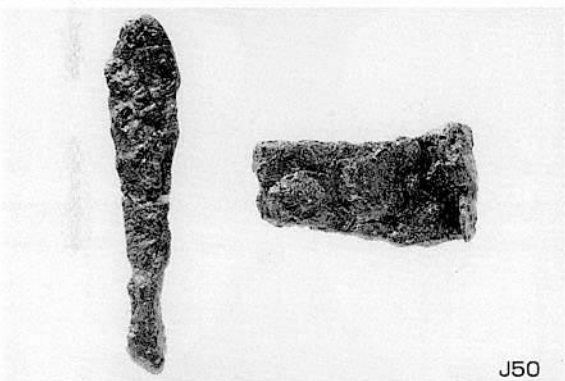

J49-1

J49-2

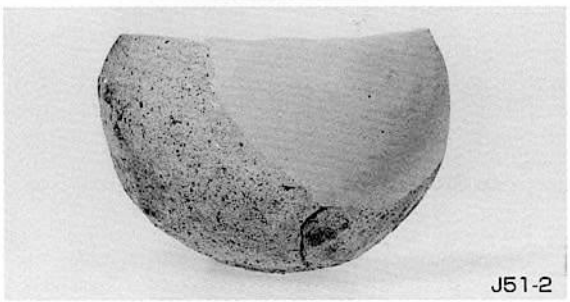
出土遺物28（住44・45・46・47・49）

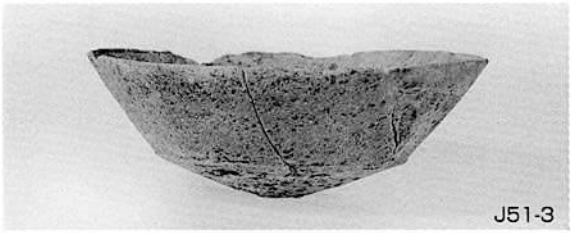
J49-3

J50


J50

J51-1


J51-2


J51-3

J51-4

J52-1

J52-2

出土遺物29（住49・50・51・52）

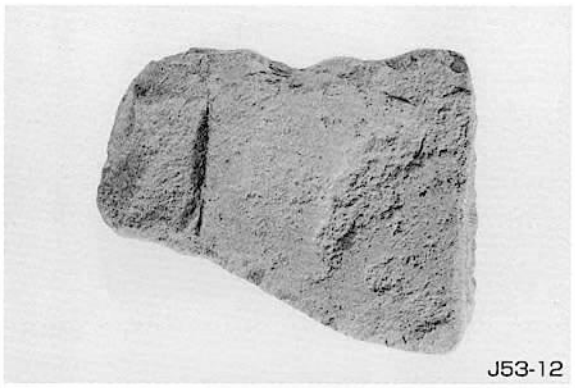
J52-3

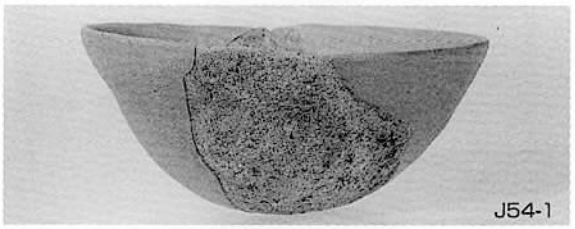
J52-4

J52-5

J53-1

J53-9


J53-12


J54-1

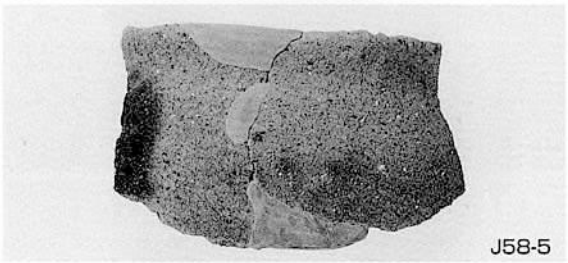
J54-2

J58-1

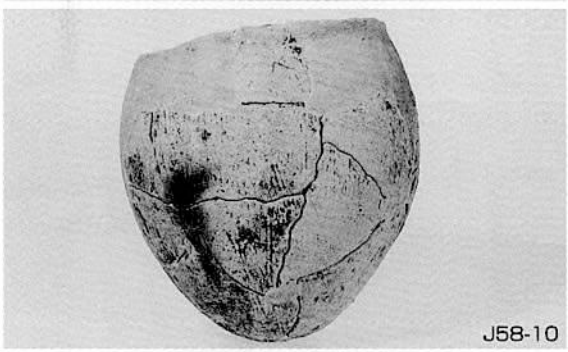
J58-2

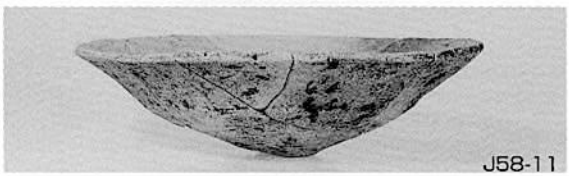
出土遺物30（住52・53・54・58）

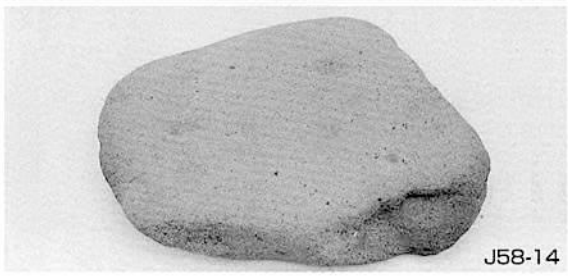
J58-4


J58-5

J58-9

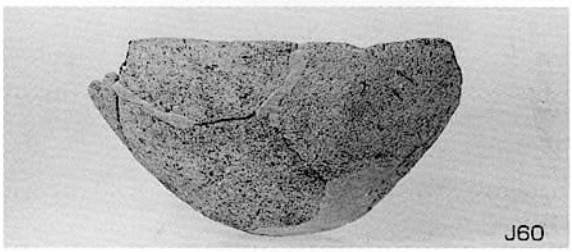

J58-10

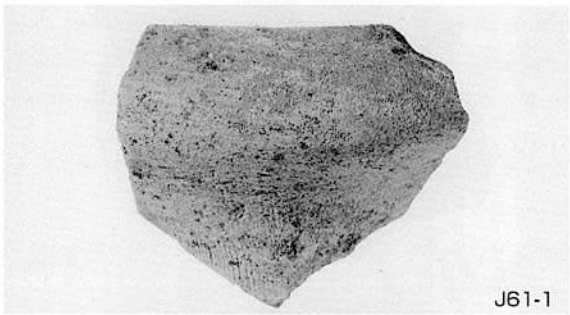

J58-11

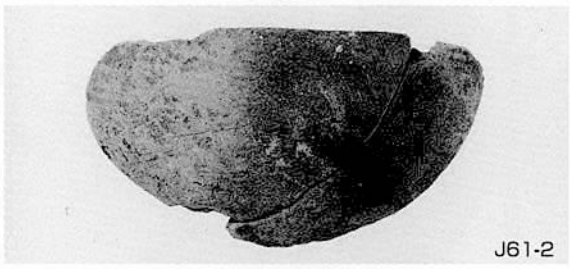

J58-14

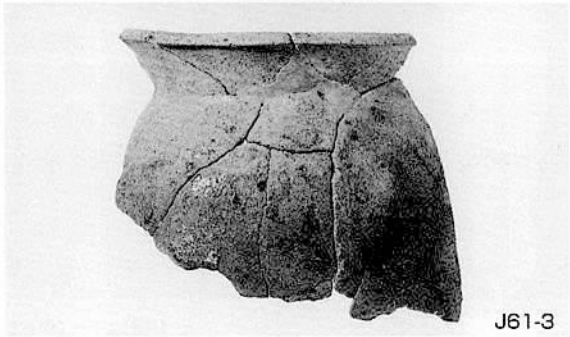
J59-1

J59-2


J60

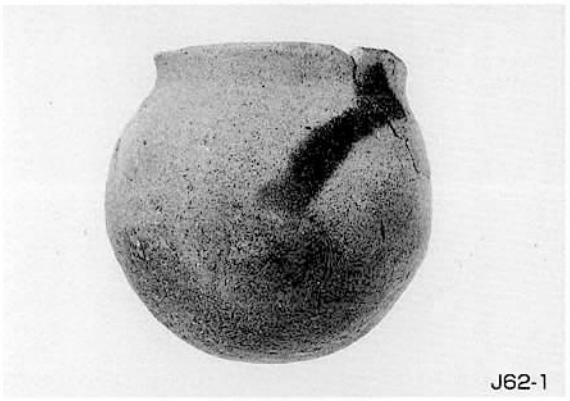

J61-1

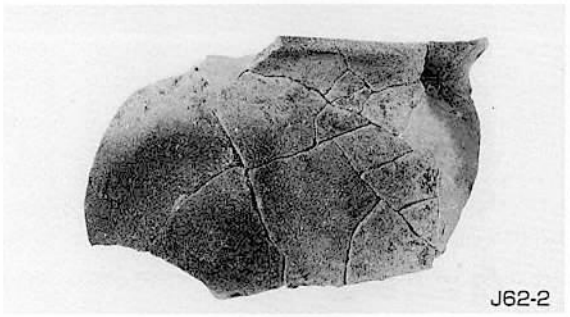

J61-2


J61-3

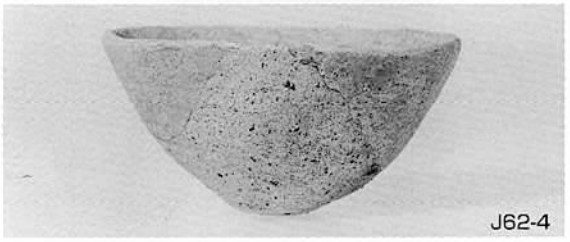
出土遺物31（住58・59・60・61）

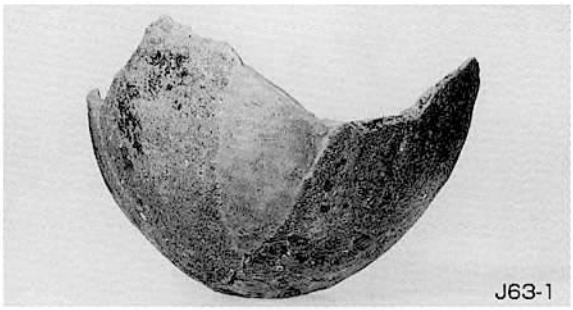
J61


J62-1


J62-2

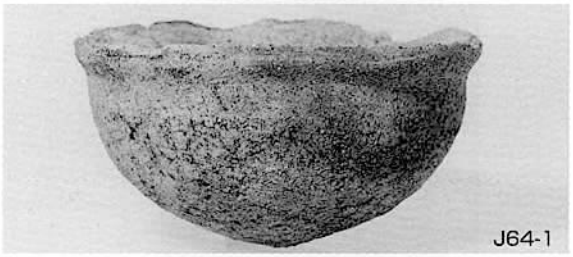
J62-3

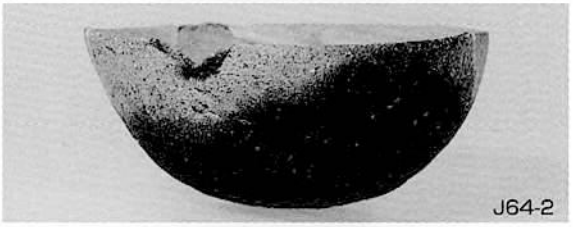

J62-4


J63-1

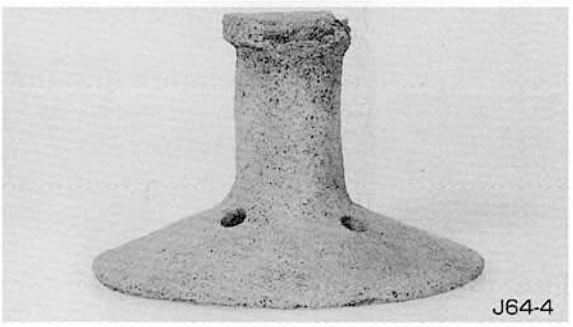
J63-2

J63-3


J64-1

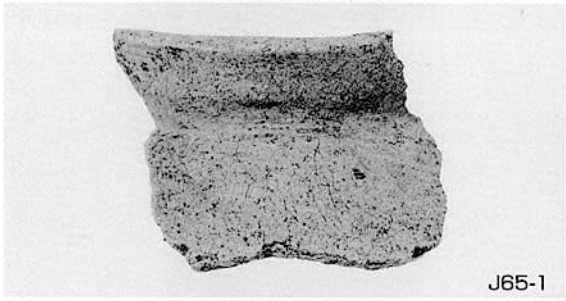

J64-2

J64-3


J64-4

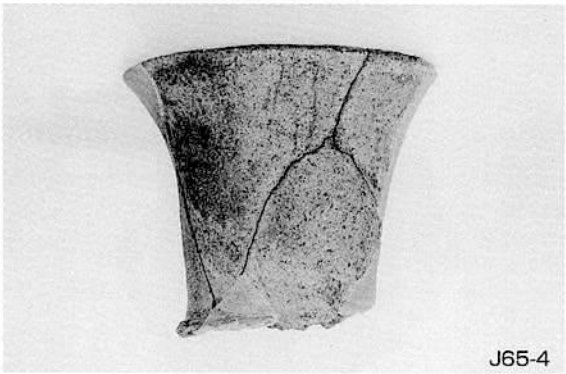
出土遺物32（住61・62・63・64）

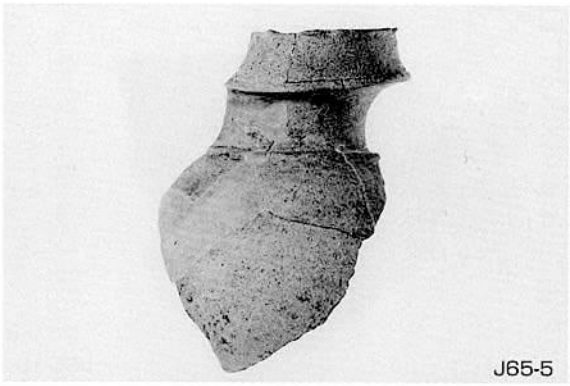
J64-5


J65-1

J65-2

J65-3


J65-4


J65-5

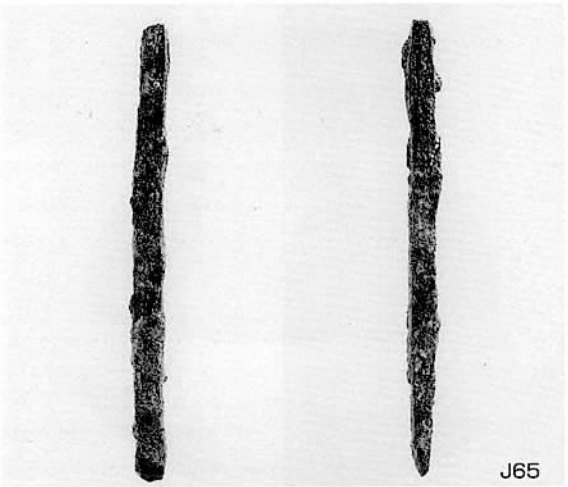
J65-6

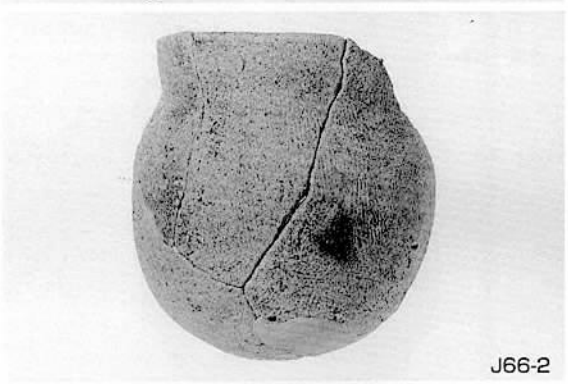
J65-8

J65-9

出土遺物33（住64・65）

J65-10


J65


J66-2

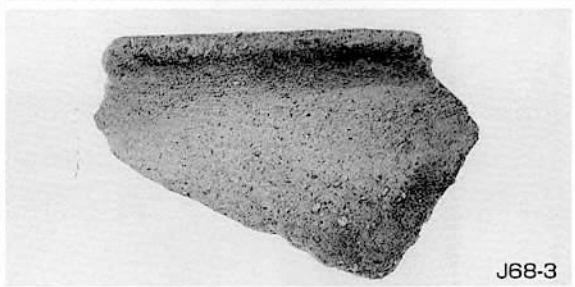
J66-3

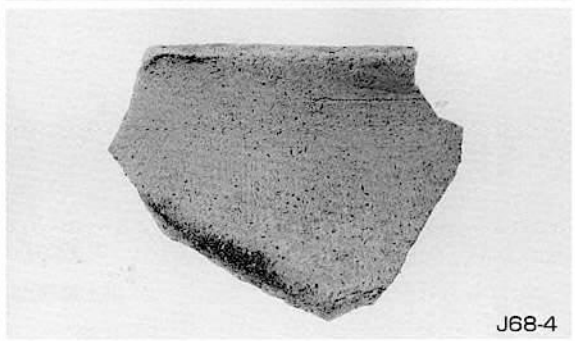
J66-5

J67-2

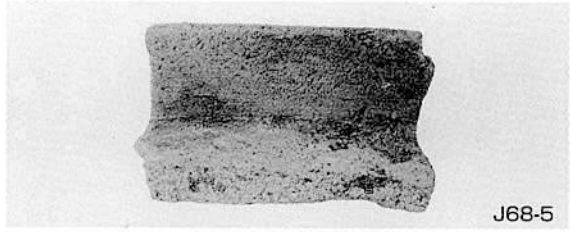
J68-1

J68-2

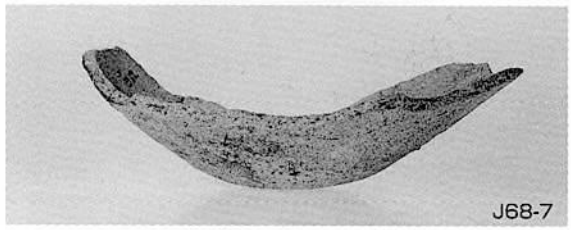

J68-3

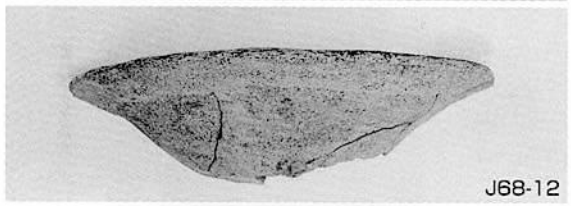

J68-4

出土遺物34（住65・66・67・68）

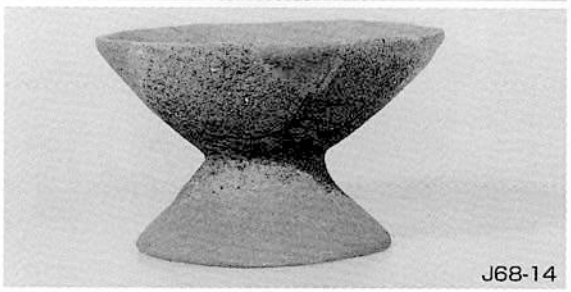

J68-5

J68-6

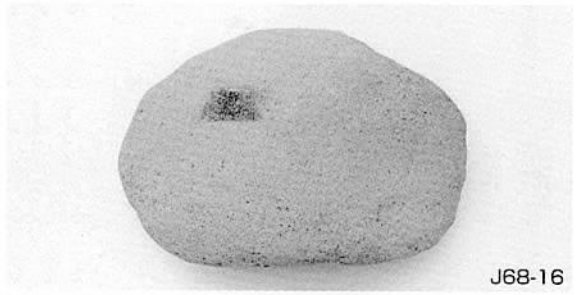

J68-7


J68-12

J68-13


J68-14

J68-15


J68-16

J69-1

J69-2

J69-3

J69-4

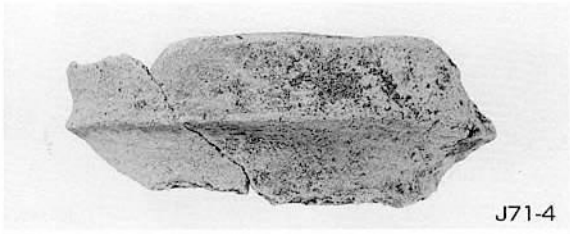
出土遺物35（住68・69）

J69-6

J71-1

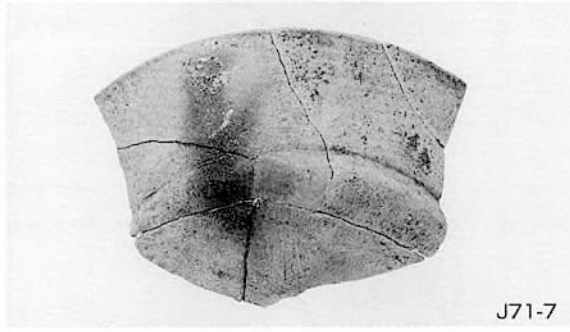
J71-2

J71-3


J71-4

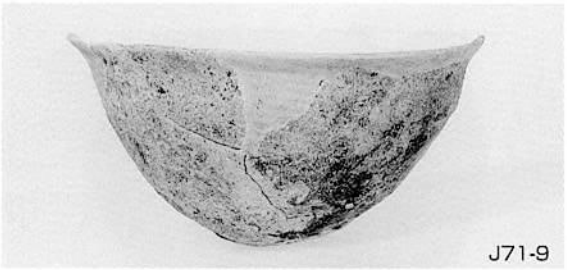
J71-5

J71-6


J71-7

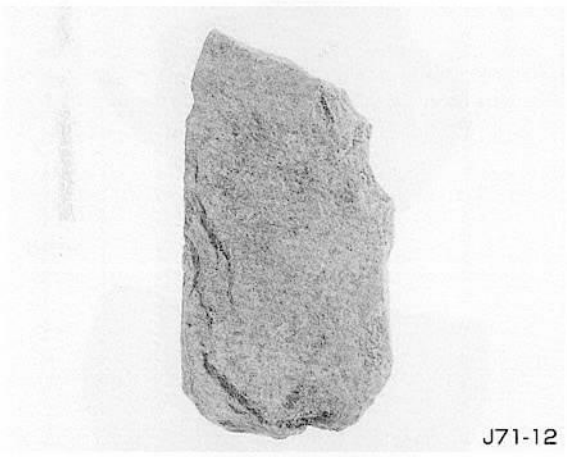
J71-8

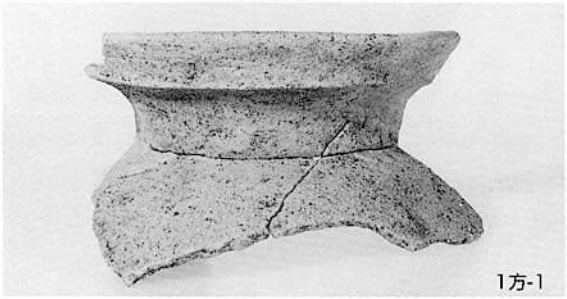
出土遺物36（住69・71）


J71-9

J71-10

J71-11


J71-12

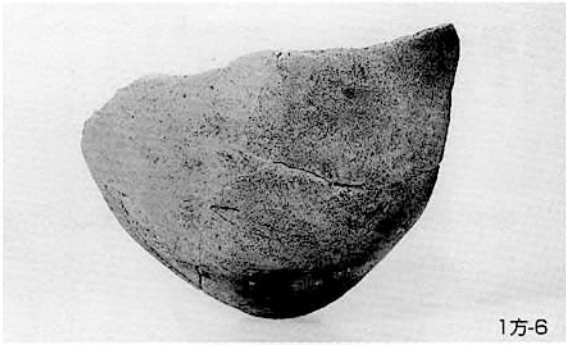

1方-1

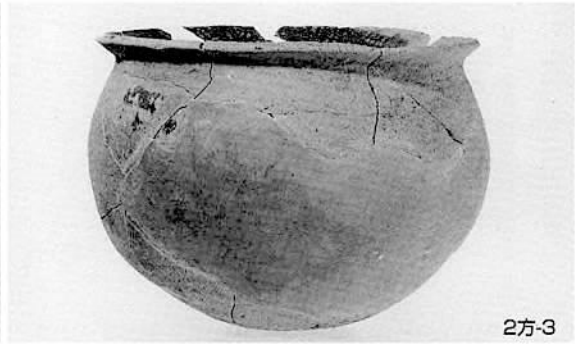
1方-3

1方-4

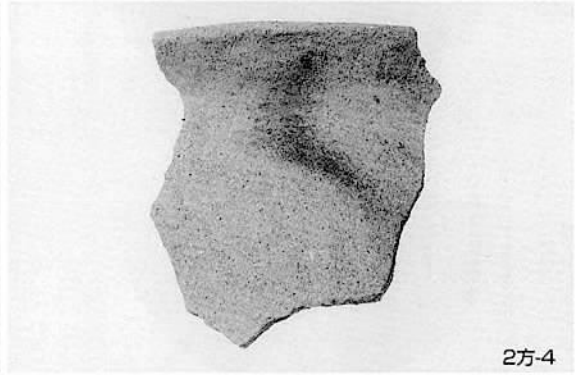
1方-5

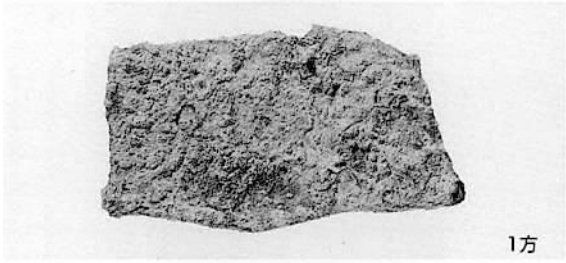
出土遺物37（住71・1号方形周溝）


1方-6


2方-3

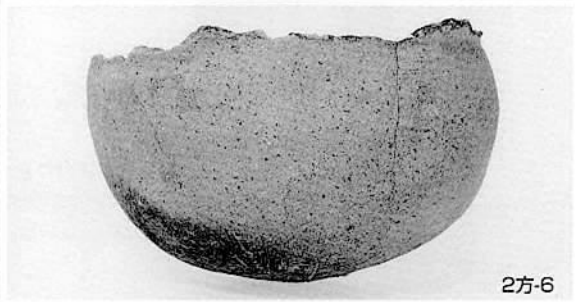
1方-8


2方-4


1方

2方-5

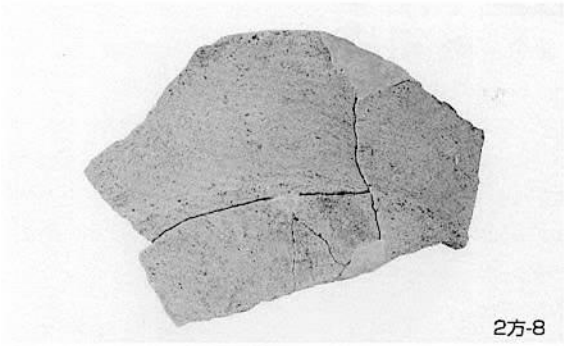
2方-1


2方-6

2方-2

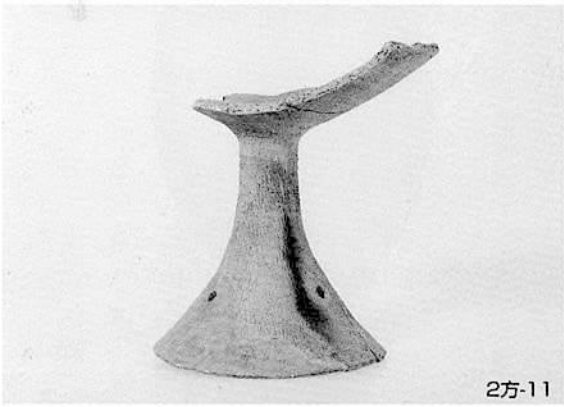
2方-7

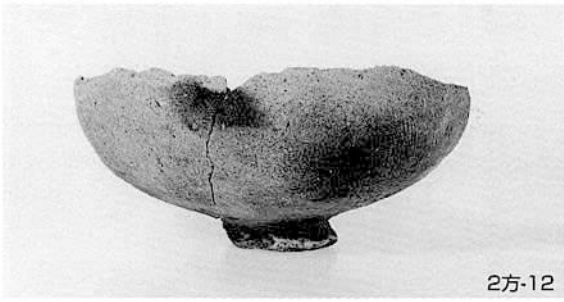
出土遺物38（1号方形周溝・2号方形周溝）


2方-8

2方-9

2方-10


2方-11


2方-12

3方-1

3方-2

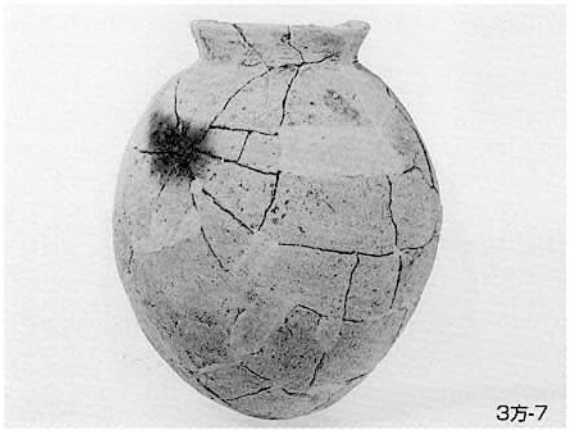
3方-3

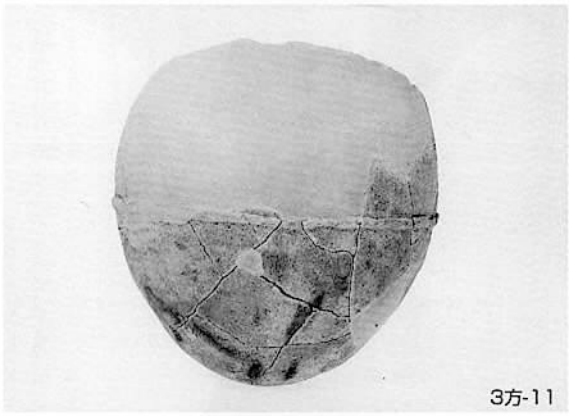
3方-4

出土遺物39（1号方形周溝・2号方形周溝）

3方-5

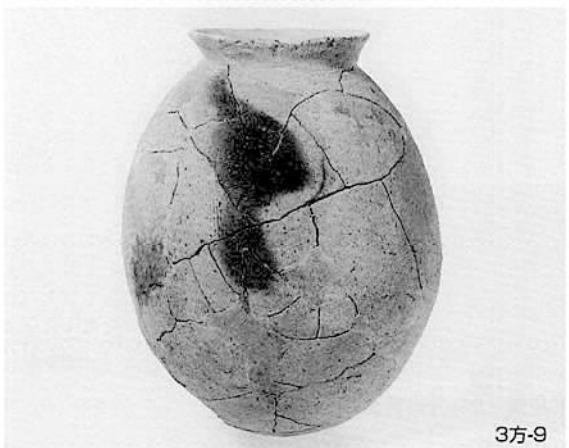
3方-10


3方-7


3方-11

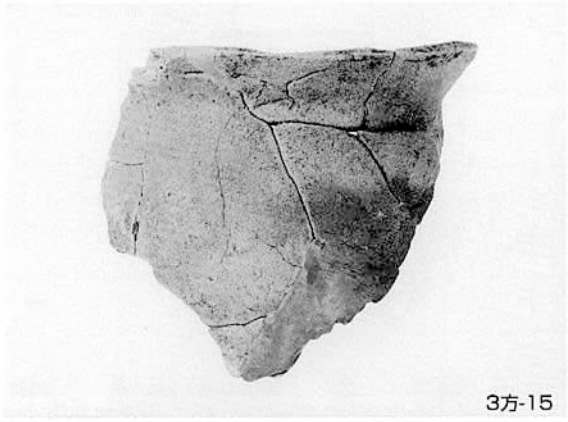
3方-8

3方-12


3方-9

3方-13

出土遺物40（3号方形周溝）


3方-15

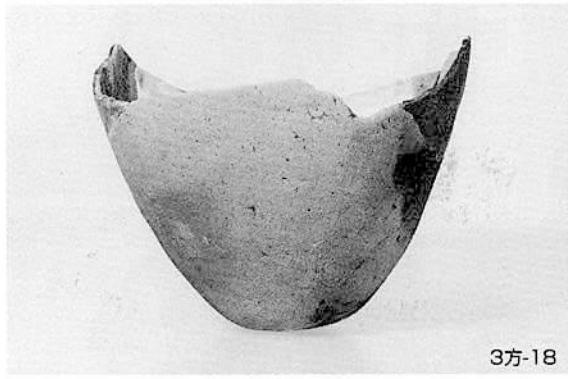
3方-19

3方-16

3方-20

3方-17

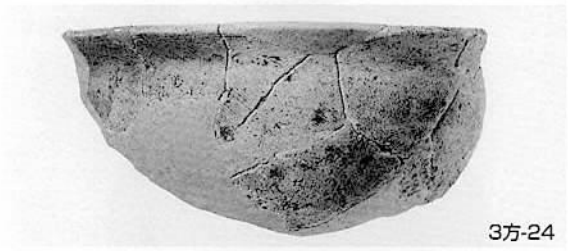
3方-21


3方-18

3方-22

出土遺物41（3号方形周溝）

3方-23

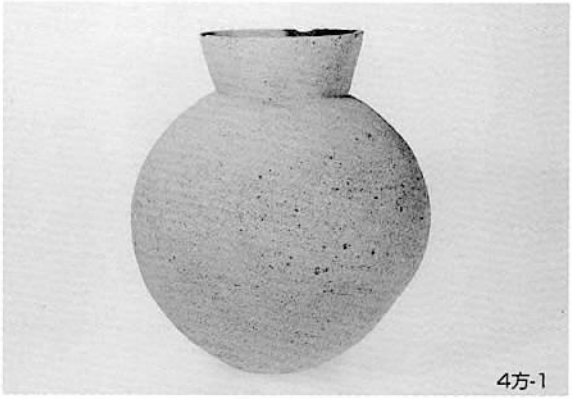

3方-24

3方-25

3方-26

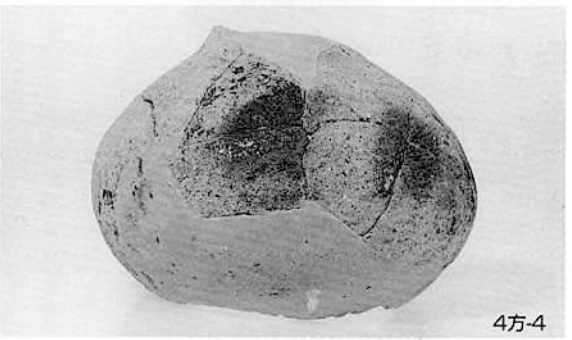
3方-29

3方-30


4方-1

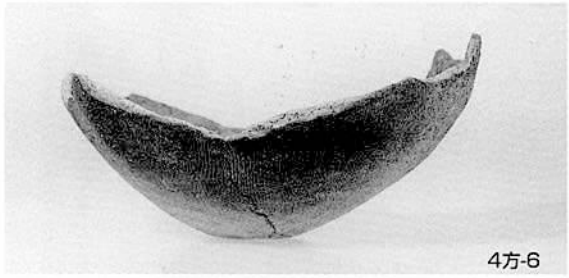
4方-2

4方-3


4方-4

4方-5

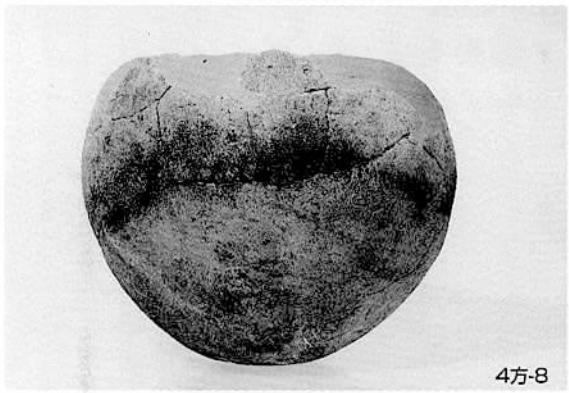
出土遺物42（3号方形周溝・4号方形周溝）


4方-6

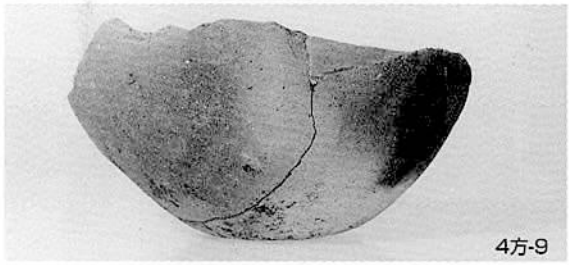
4方-11

4方-7

4方-12

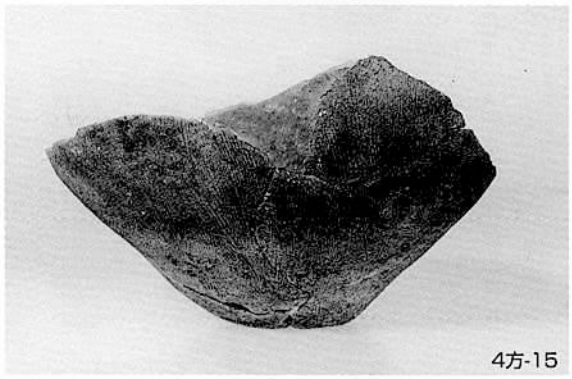

4方-8

4方-13

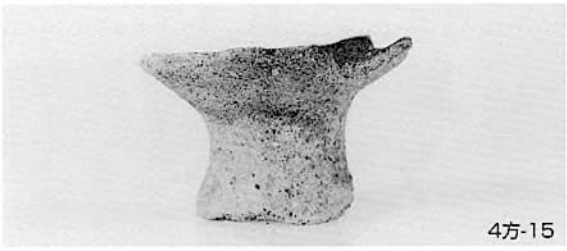

4方-9

4方-14

4方-10


4方-15

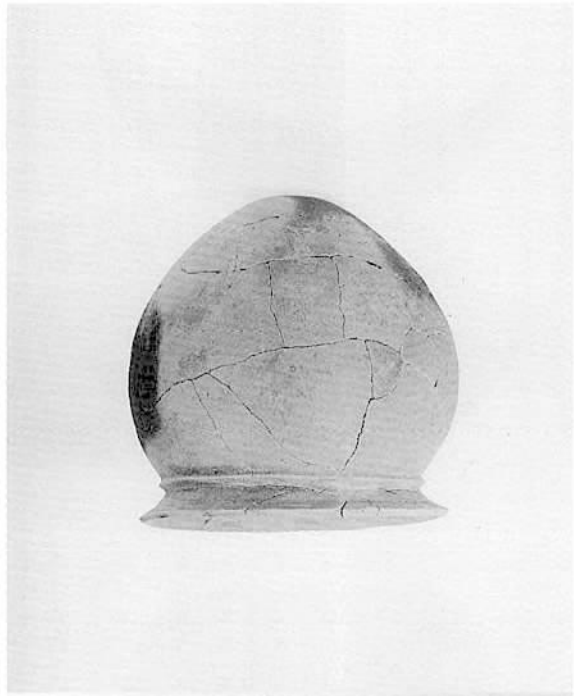
出土遺物43（4号方形周溝）


4方-15

4方-16

4方-19

4方-20



1号甕棺

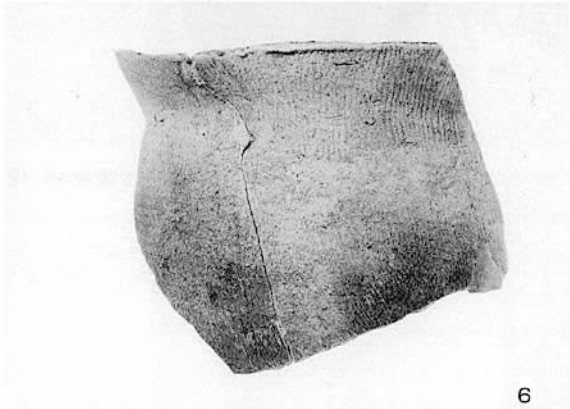
出土遺物44（4号方形周溝・1号甕棺）

2号甕棺

3

5

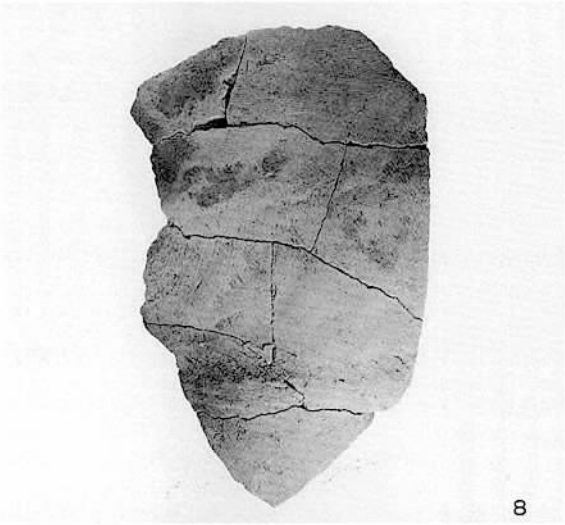
4

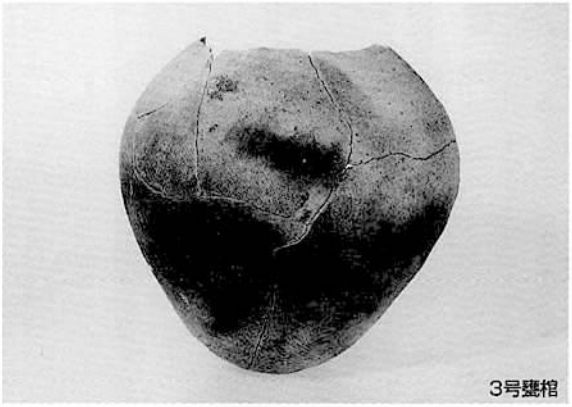


6

出土遺物44 (2号甕棺)

7


8

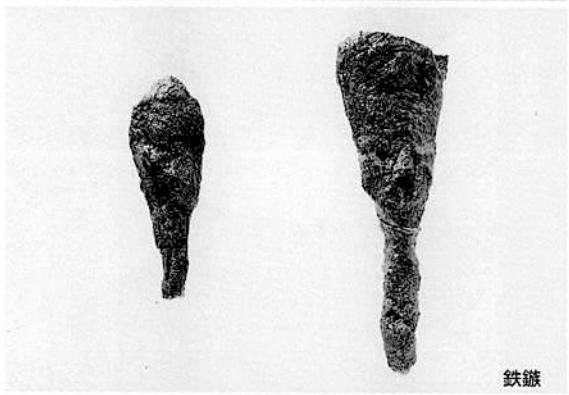

3号甕棺

9

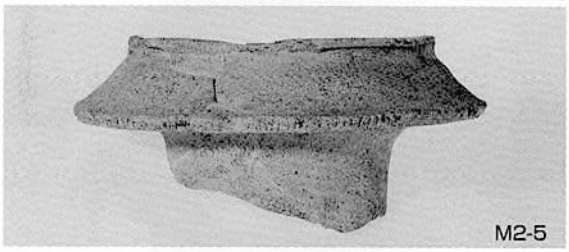
3

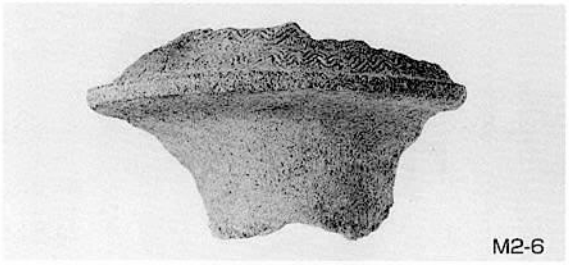
出土遺物46（2号甕棺・3号甕棺）

ガラス玉


鉄鏃

M2-4


M2-5


M2-6

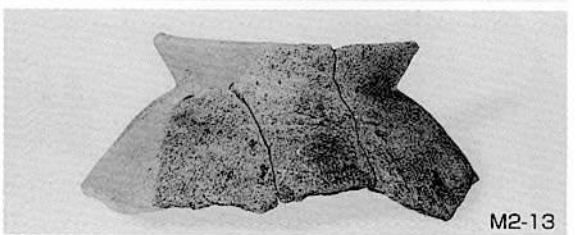
M2-8

M2-9

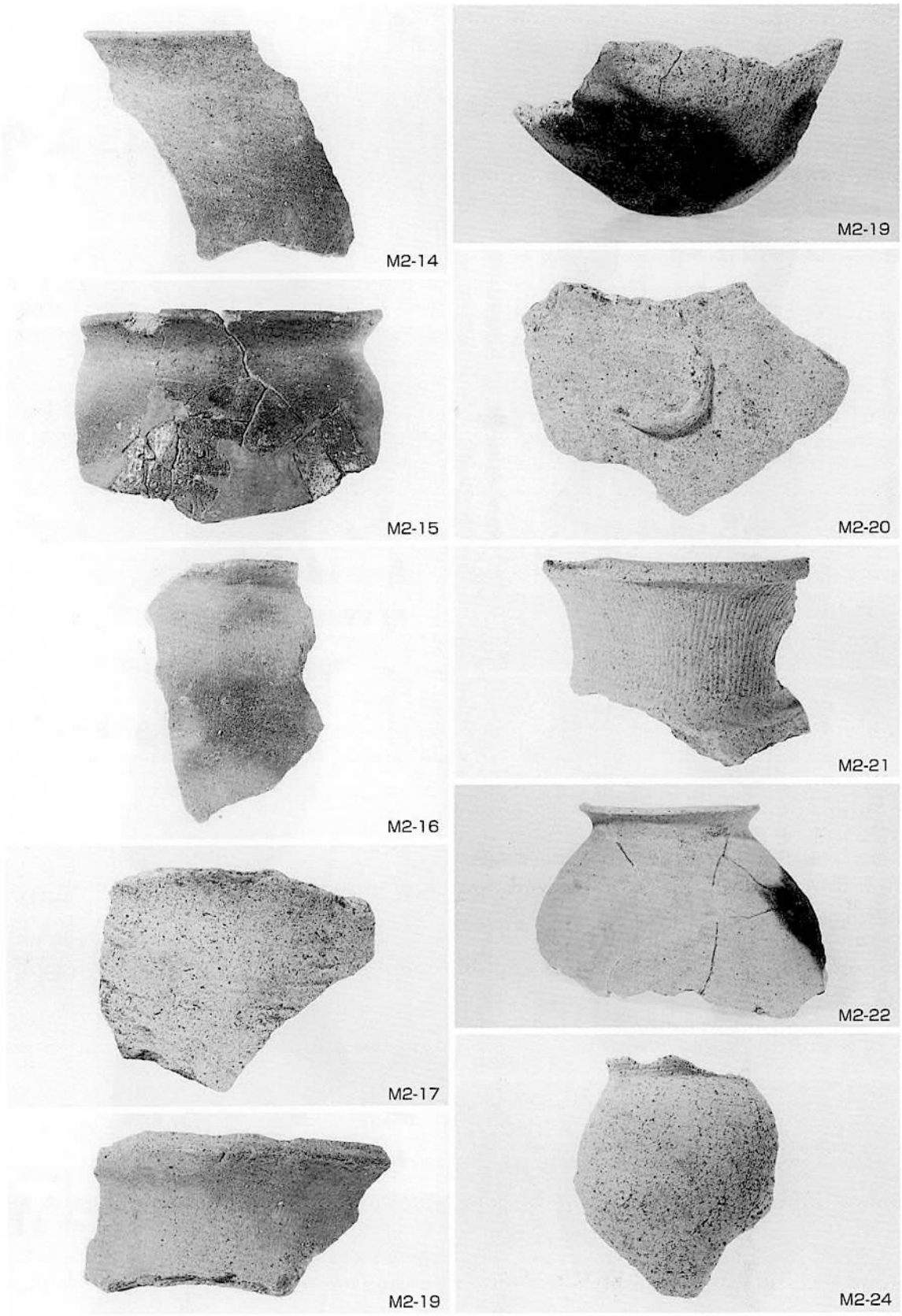
M2-10

M2-11

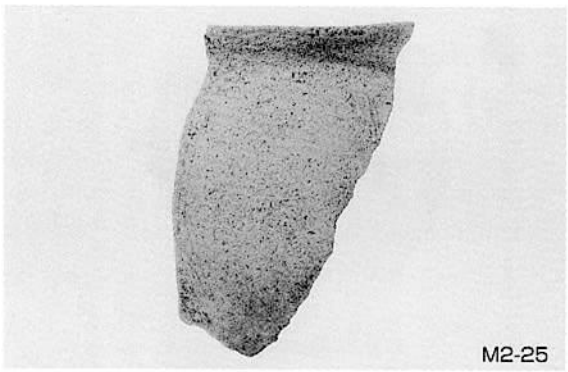
M2-12


M2-13

出土遺物47（2号溝状遺構;ガラス製品・鉄製品・土器）



出土遺物48（2号溝状遺構;土器）

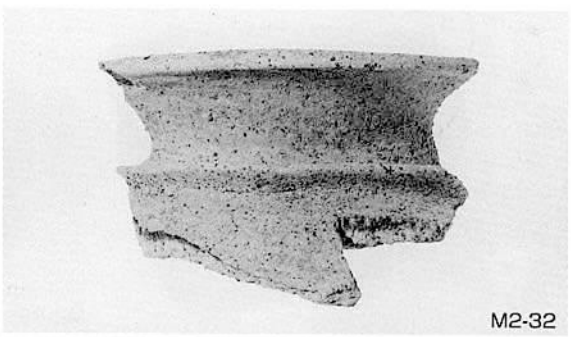

M2-25

M2-27

M2-28

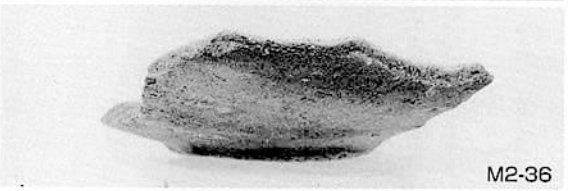
M2-29

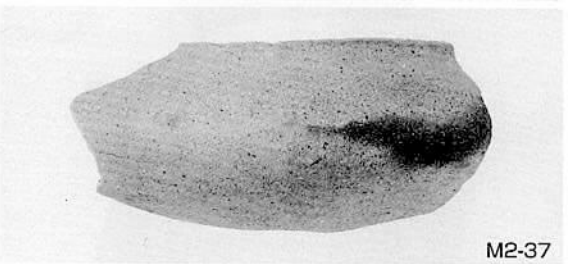
M2-30


M2-32

M2-33

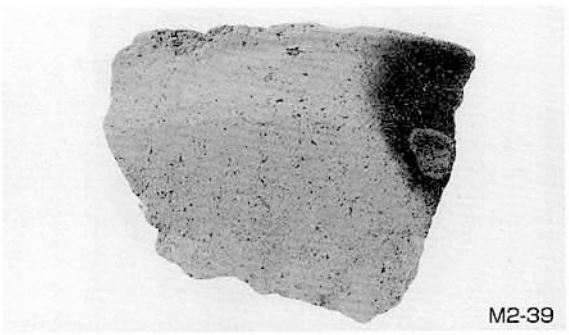
M2-34

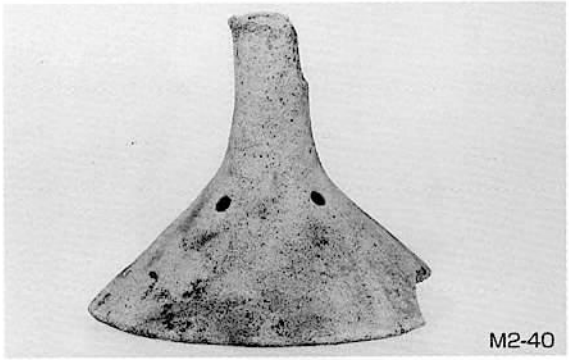

M2-36


M2-37

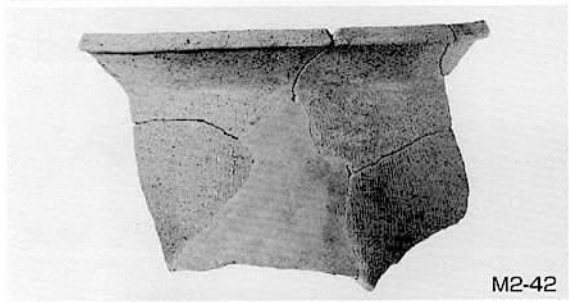
M2-38

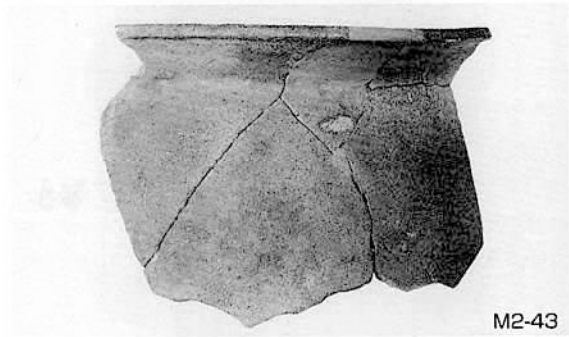
出土遺物49（2号溝状遺構;土器）


M2-39


M2-40

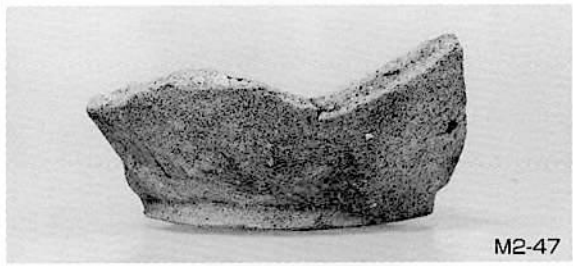
M2-41

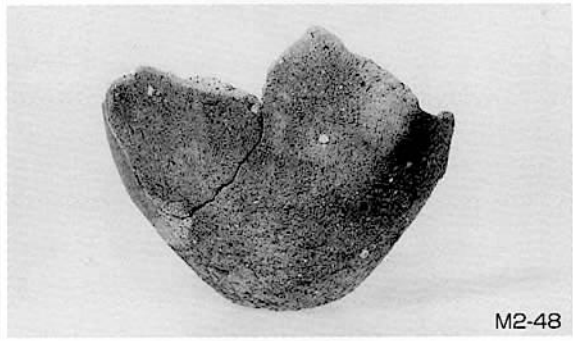

M2-42


M2-43

M2-45

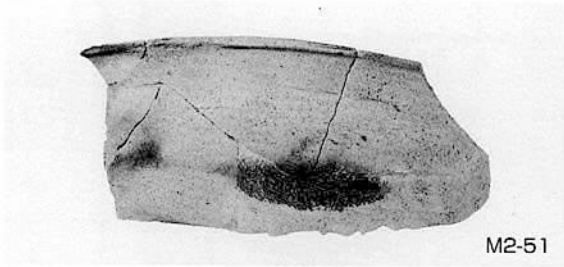
M2-46


M2-47

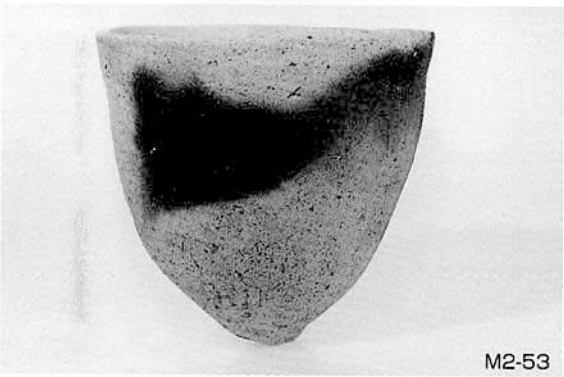

M2-48

M2-49

出土遺物50（2号溝状遺構;土器）


M2-51

M2-52

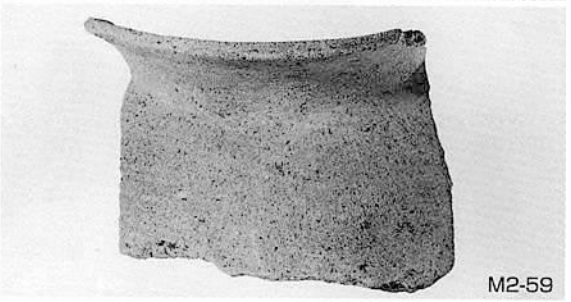

M2-53

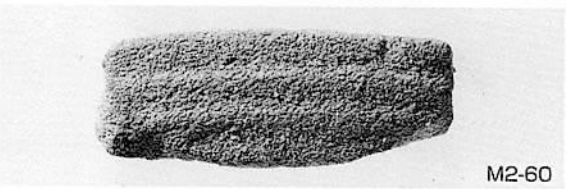
M2-55

M2-56

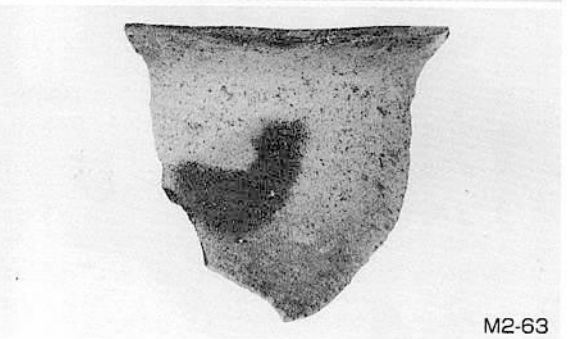
M2-57

M2-58


M2-59


M2-60

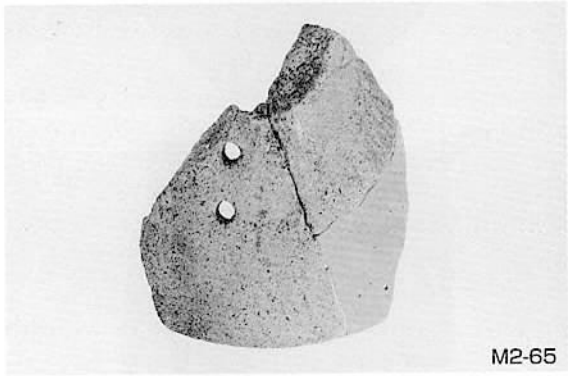
M2-61


M2-63

出土遺物51（2号溝状遺構;土器）

M2-64

M2-73


M2-65

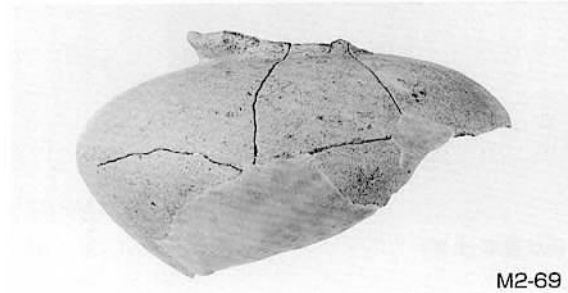
M2-74

M2-66

M2-76

M2-68

M2-77


M2-69

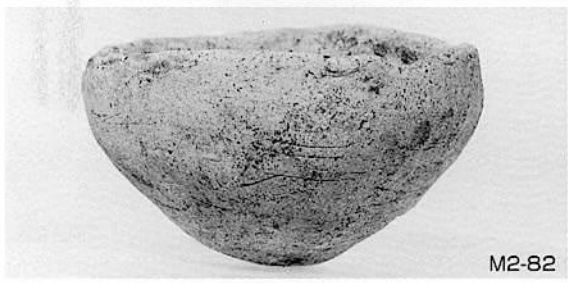
M2-78

出土遺物52（2号溝状遺構;土器）

M2-79

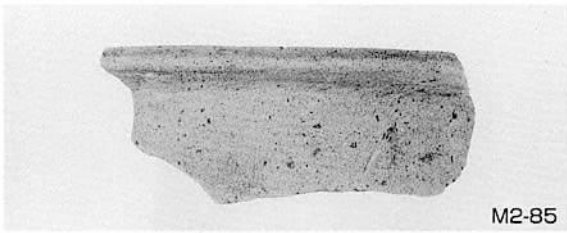
M2-80

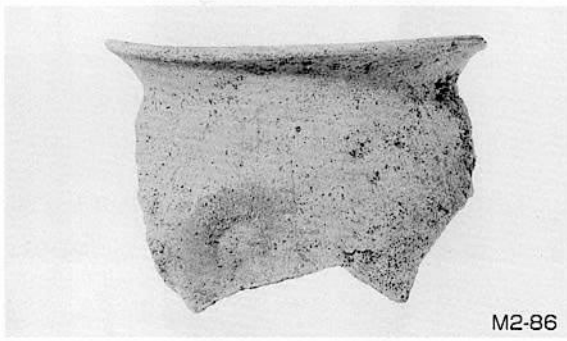
M2-81


M2-82

M2-83

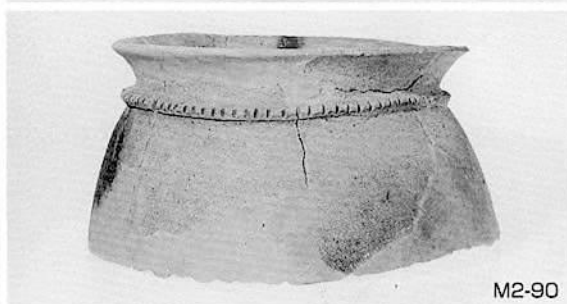
M2-84


M2-85


M2-86

M2-87

M2-88


M2-90

出土遺物53（2号溝状遺構;土器）

M2-91

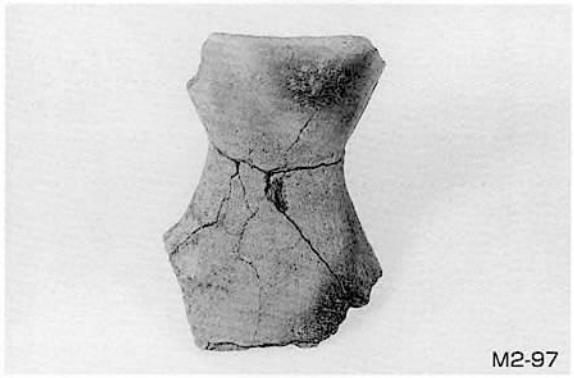
M2-92

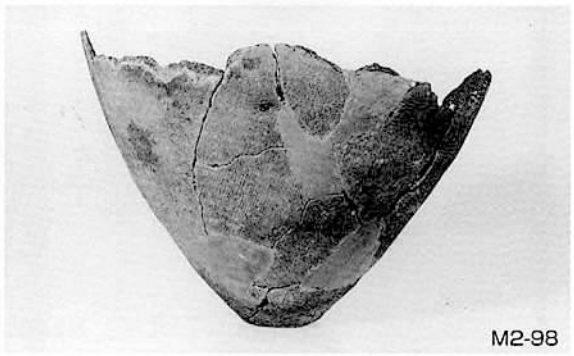
M2-93

M2-94

M2-95

M2-96

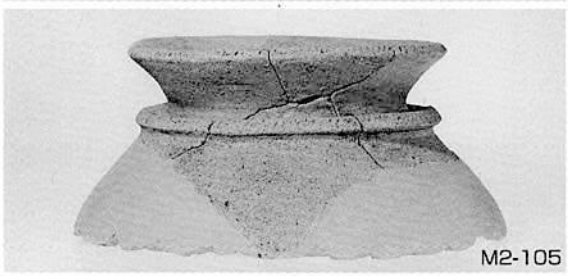

M2-97

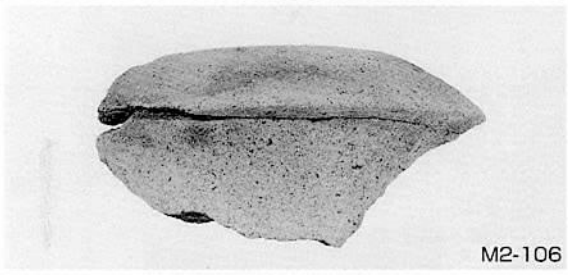

M2-98

M2-100

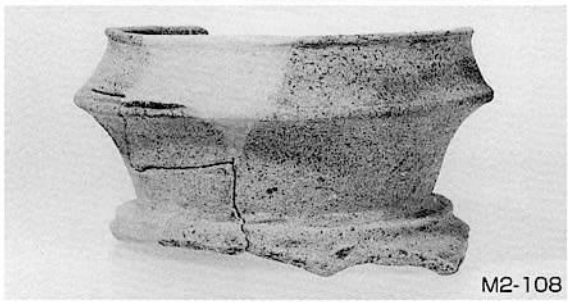
出土遺物54（2号溝状遺構;土器）

M2-103


M2-105

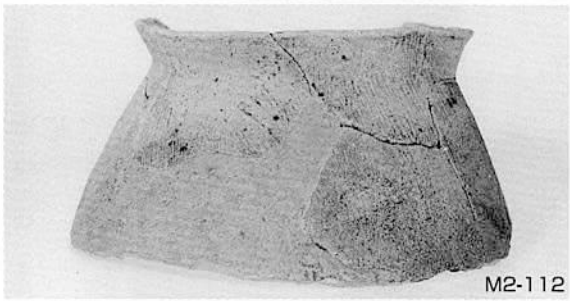

M2-106

M2-107


M2-108

M2-109

M2-110


M2-112

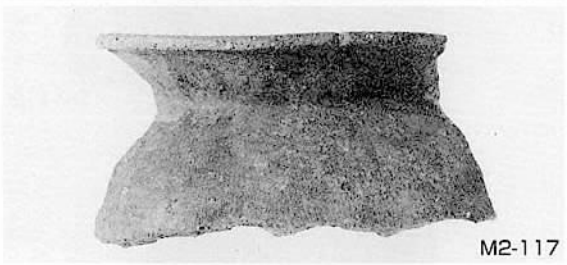
M2-113

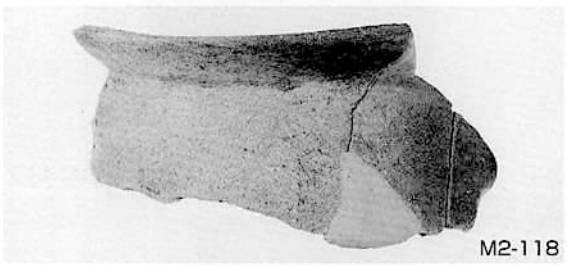
M2-114

M2-115

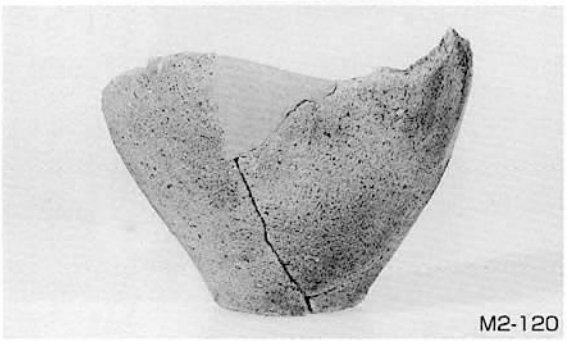
出土遺物55（2号溝状遺構;土器）

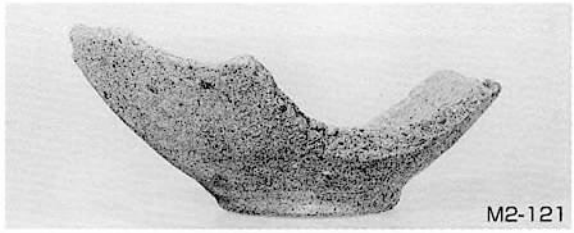
M2-116

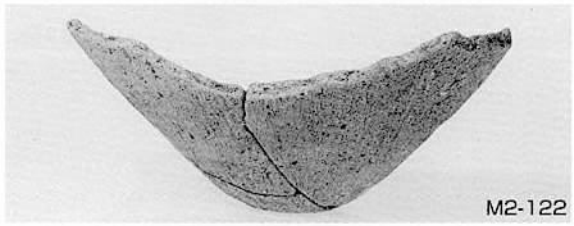

M2-117


M2-118

M2-119


M2-120


M2-121


M2-122

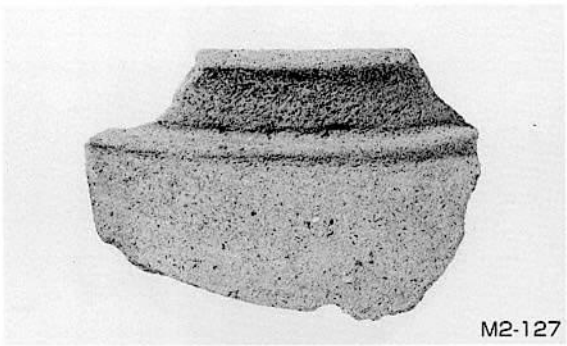
M2-123

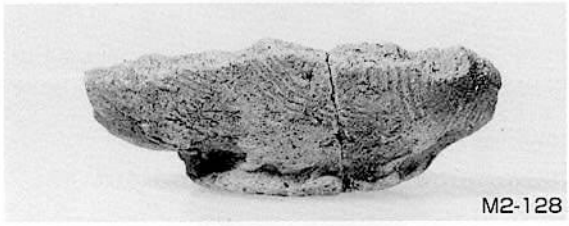
M2-124

M2-125

M2-126

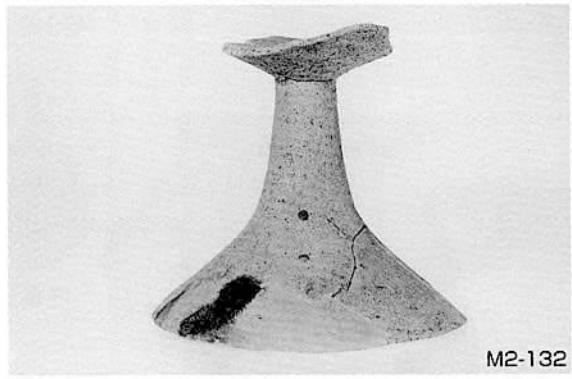
出土遺物56（2号溝状遺構;土器）

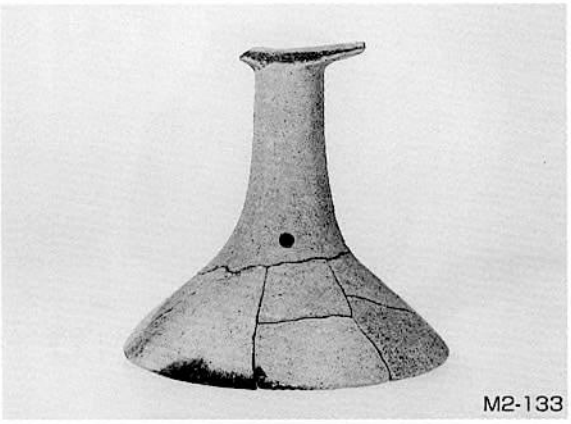

M2-127


M2-128

M2-129

M2-130


M2-132

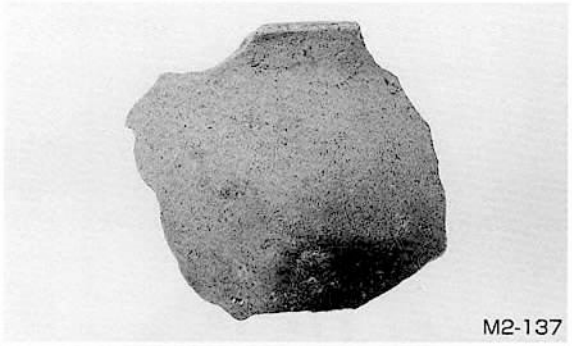

M2-133

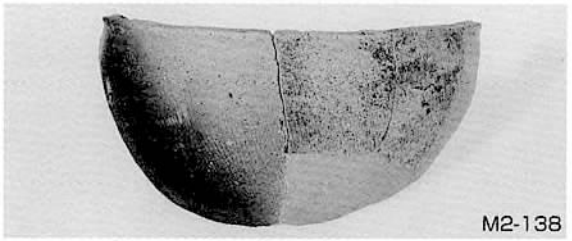
M2-134

M2-135

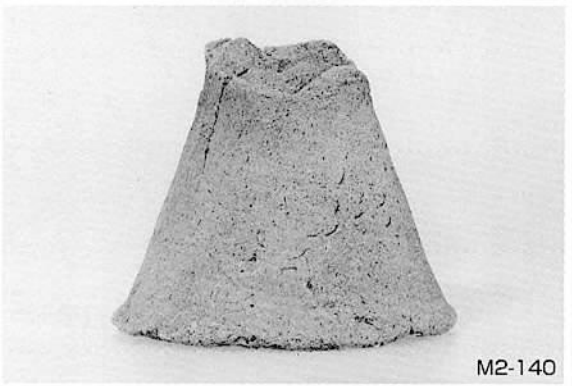
M2-136

出土遺物57（2号溝状遺構;土器）


M2-137

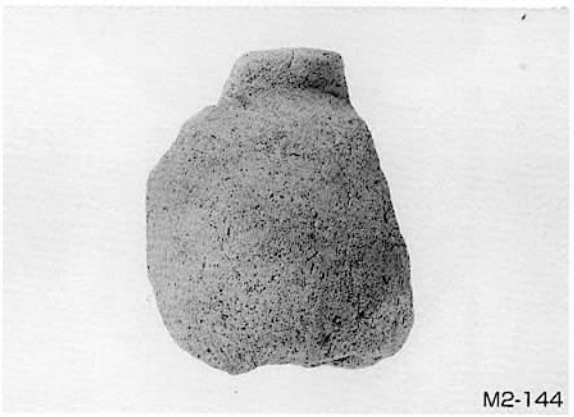

M2-138

M2-139


M2-140

M2-141

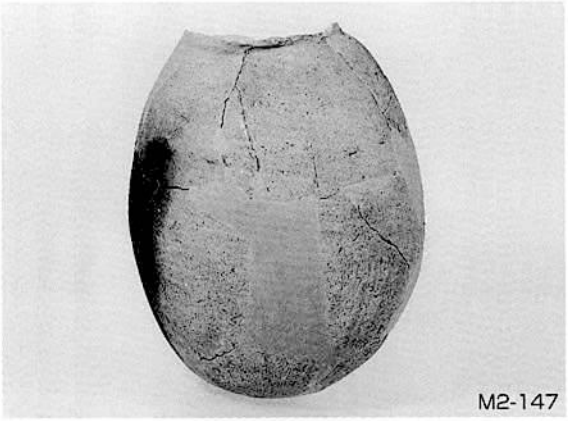
M2-142


M2-144

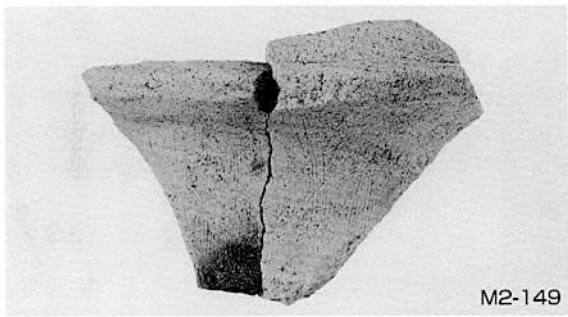
M2-145

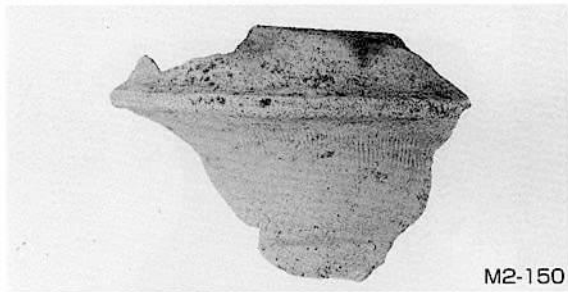
M2-146

出土遺物58（2号溝状遺構;土器）

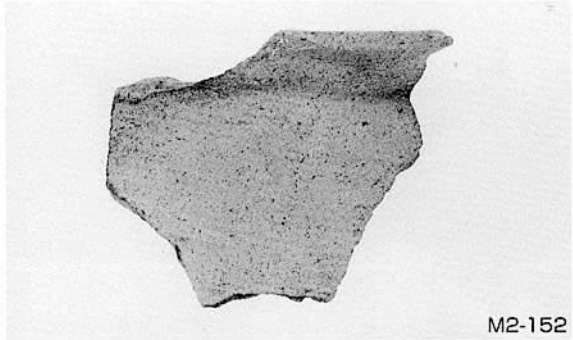

M2-147

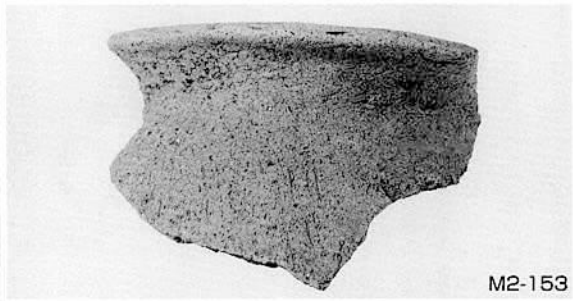
M2-148


M2-149

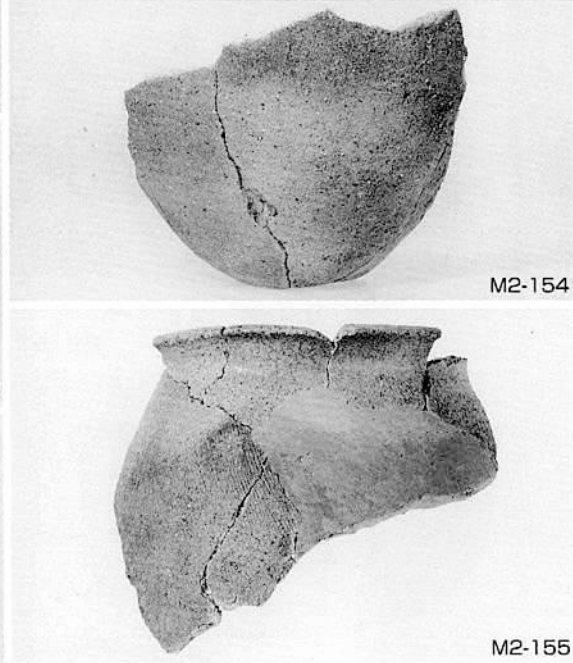

M2-150

M2-151

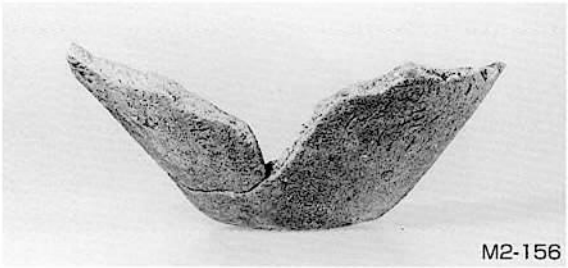

M2-152


M2-153

M2-154

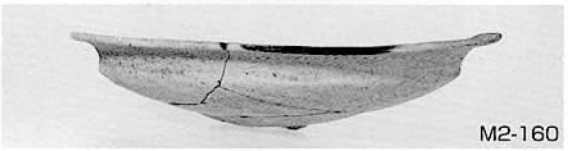

M2-155

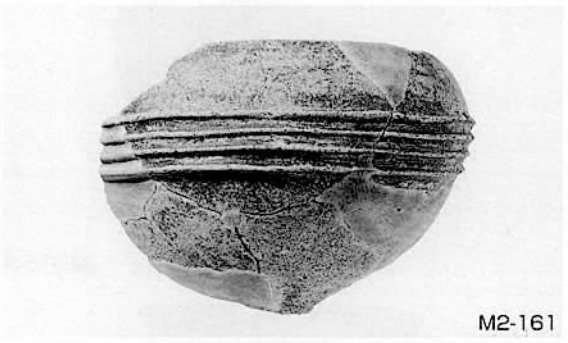
出土遺物59（2号溝状遺構;土器）

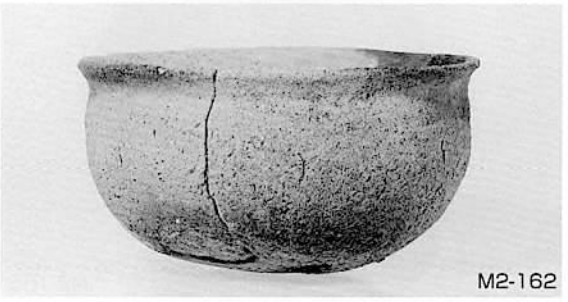

M2-156

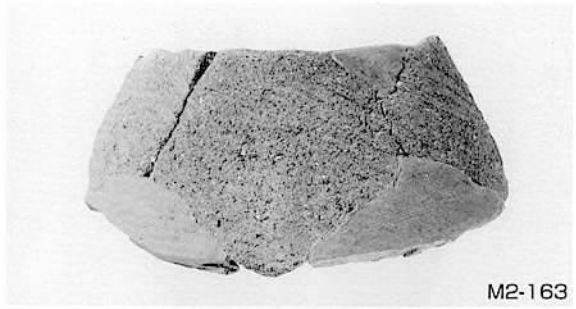
M2-158

M2-159


M2-160


M2-161


M2-162

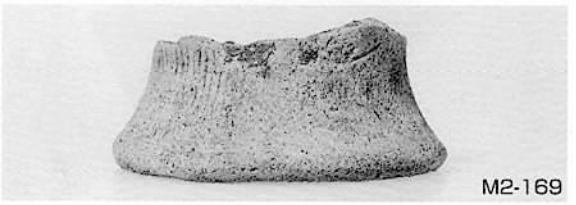

M2-163

M2-164

M2-165

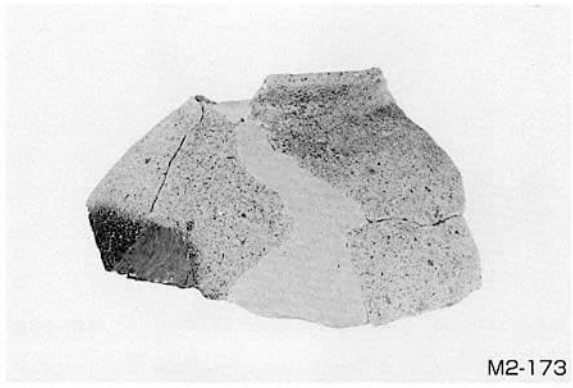
M2-166

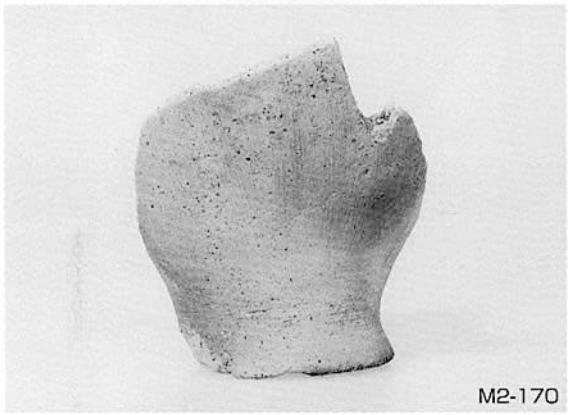
M2-167


M2-169

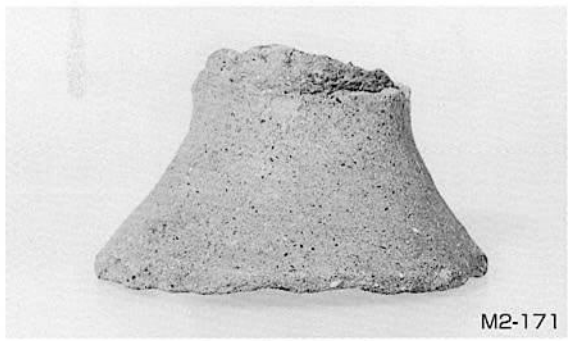
出土遺物60（2号溝状遺構;土器）

M2-168


M2-173

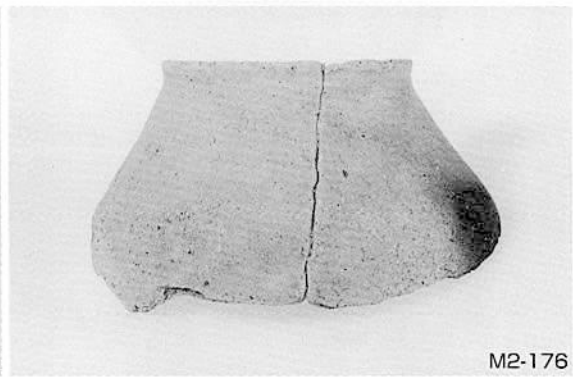

M2-170

M2-174


M2-171

M2-175

M2-172


M2-176

出土遺物61（2号溝状遺構;土器）

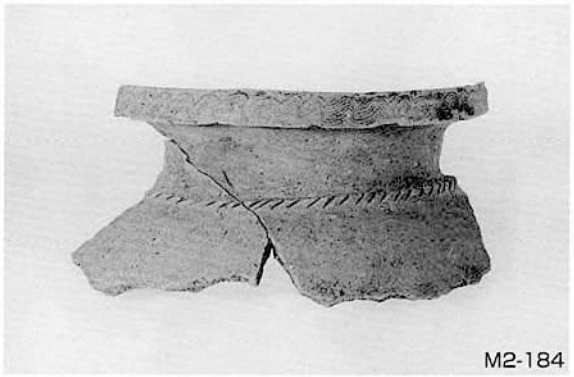
M2-178

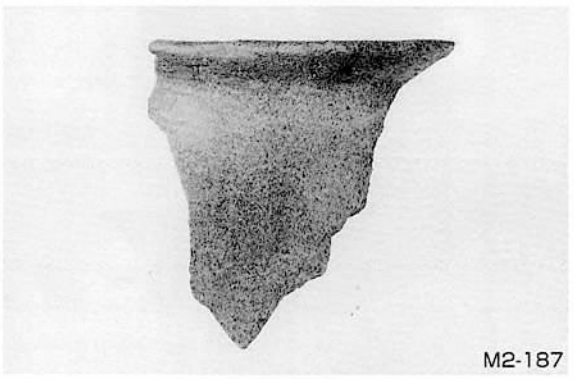
M2-179

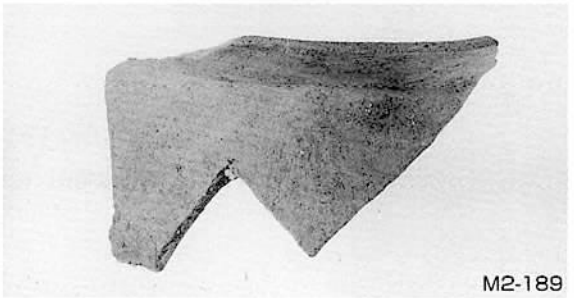
M2-180

M2-181

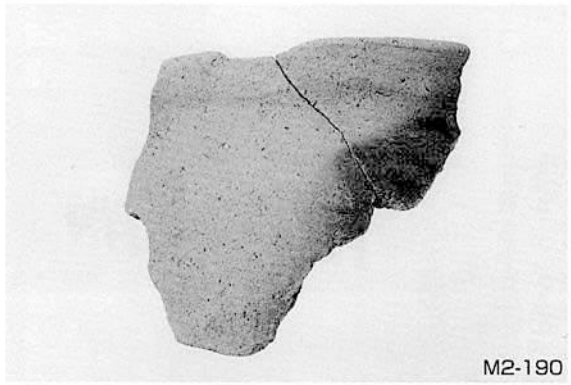
M2-182

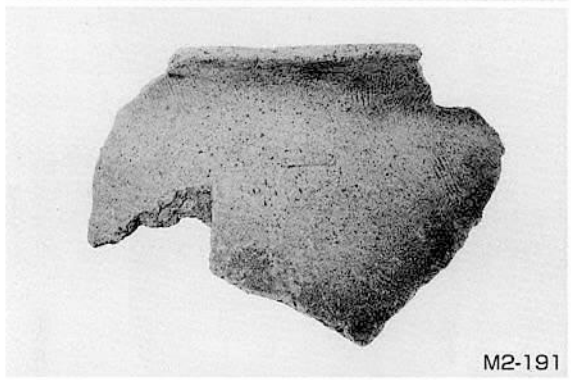

M2-184

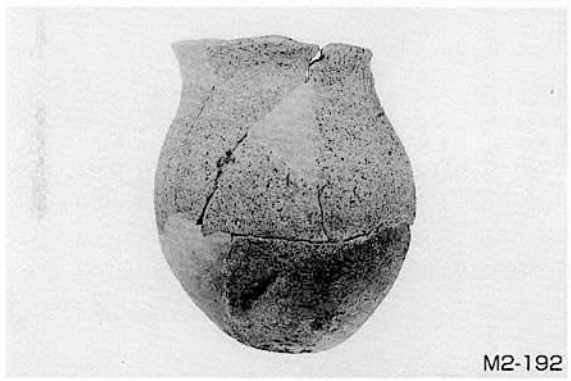

M2-187


M2-189

出土遺物62（2号溝状遺構;土器）

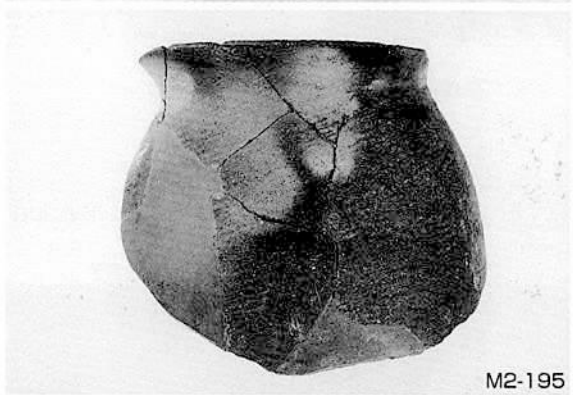

M2-190


M2-191

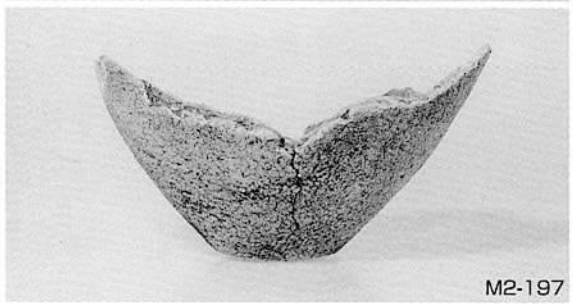

M2-192

M2-193

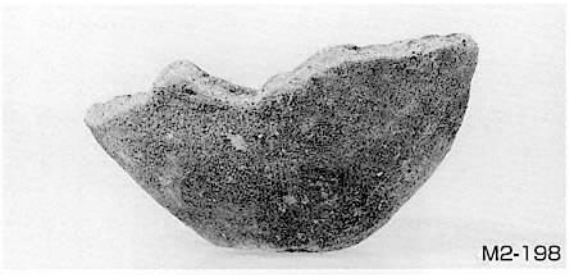
M2-194


M2-195

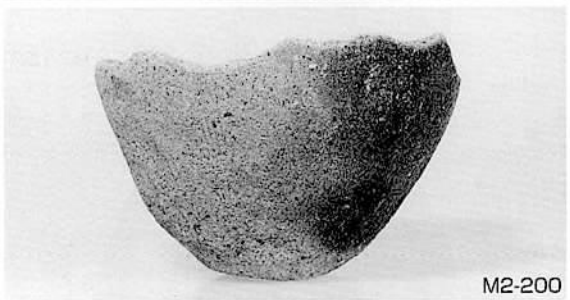
M2-196


M2-197

出土遺物63（2号溝状遺構;土器）

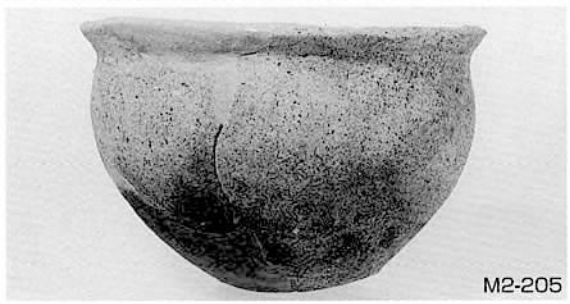

M2-198

M2-199


M2-200

M2-201

M2-204


M2-205

M2-206

M2-207

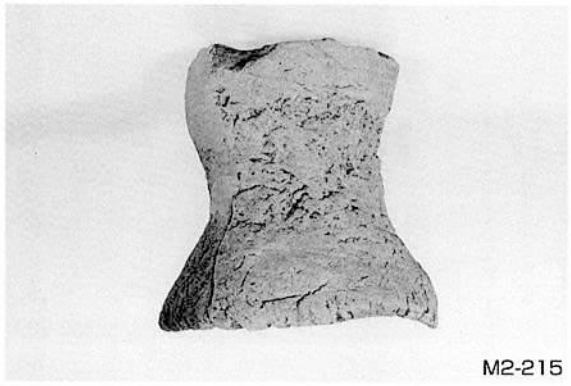
M2-208

M2-209

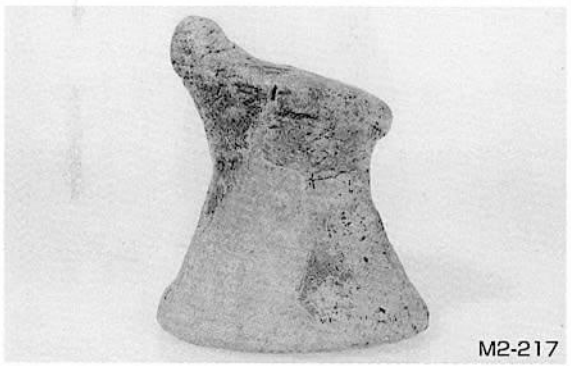
M2-210

M2-211

出土遺物64（2号溝状遺構;土器）


M2-215

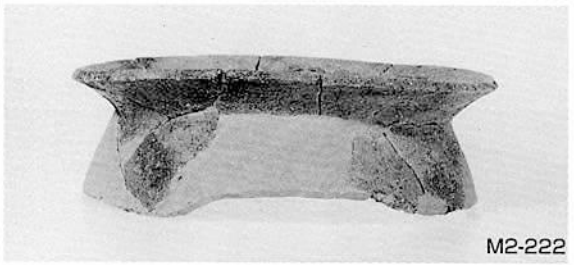
M2-216


M2-217

M2-219

M2-220

M2-221


M2-222

M2-224

出土遺物65（2号溝状遺構;土器）

M2-226

M2-227

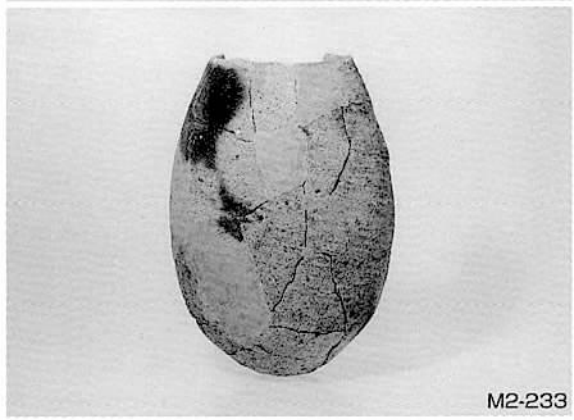
M2-228

M2-229

M2-230

M2-231

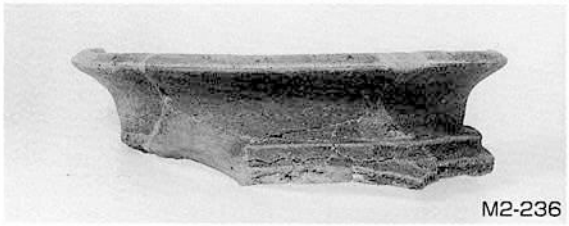
M2-232


M2-233

M2-237

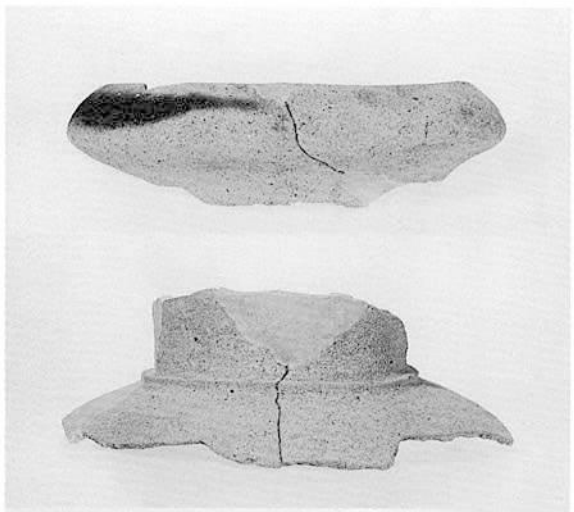
出土遺物66（2号溝状遺構;土器）

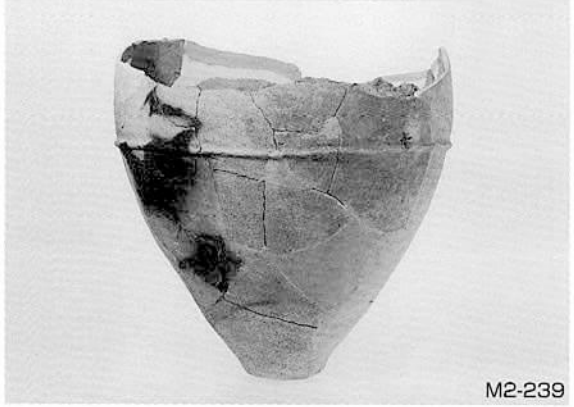
M2-235


M2-236

M2-237

M2-238

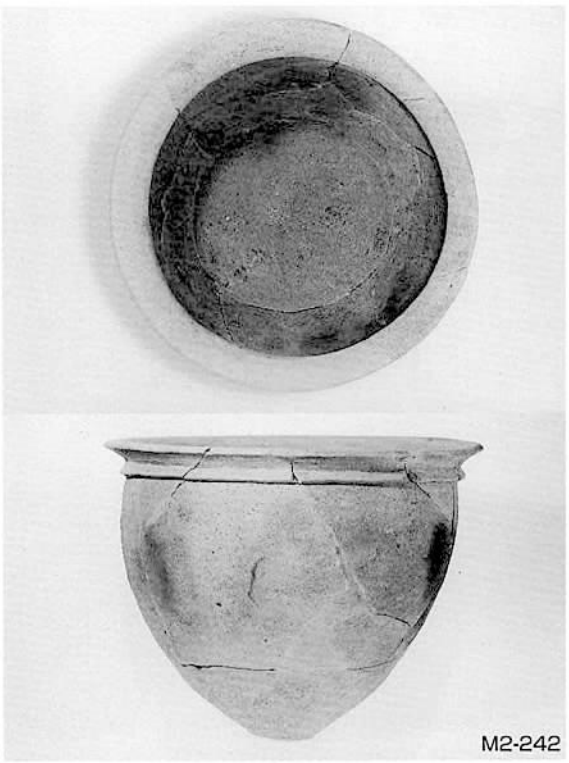


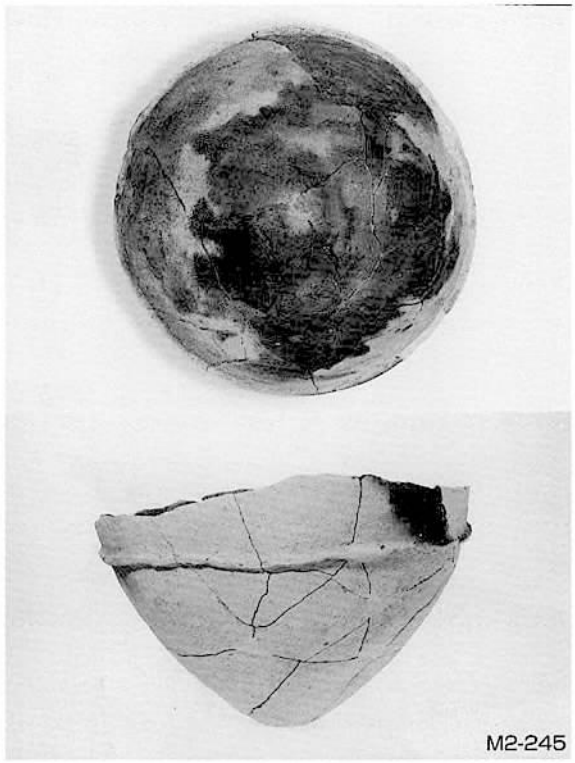

M2-239

M2-240

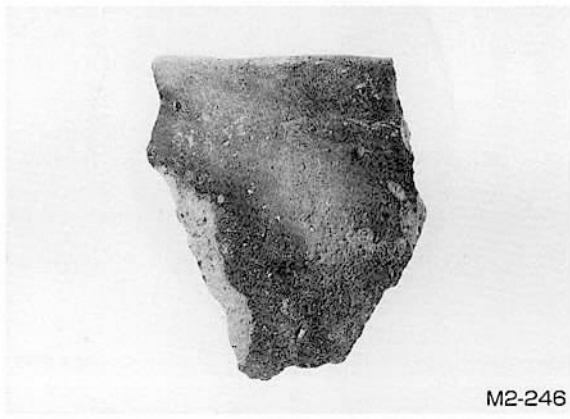
M2-241

出土遺物67（2号溝状遺構;土器）

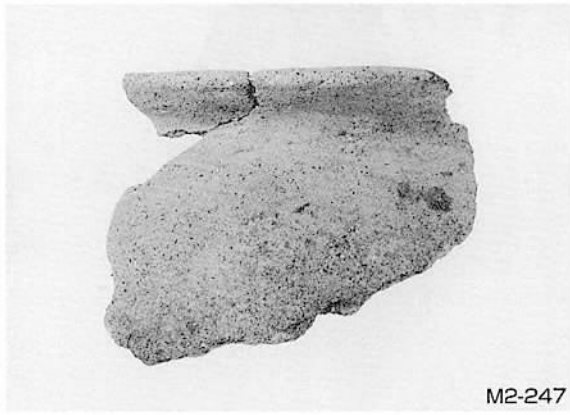

M2-242


M2-245

M2-243

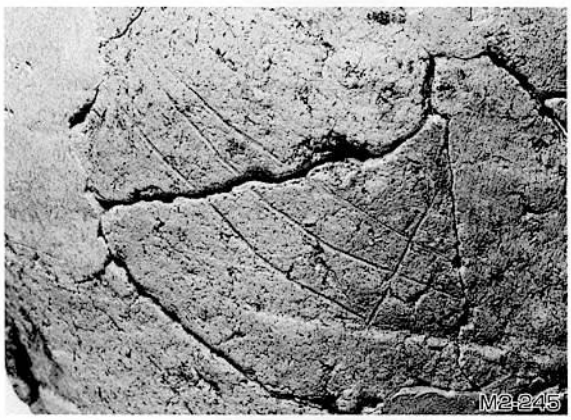

M2-246

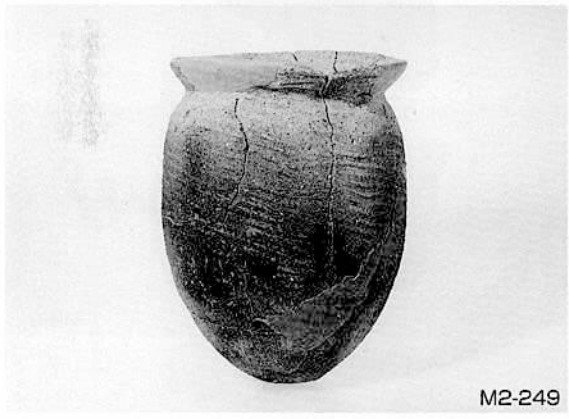
M2-244


M2-247

出土遺物68（2号溝状遺構;土器）

M2-245


M2-245

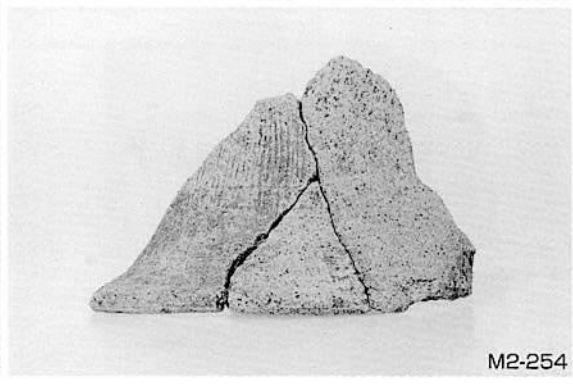

M2-249

M2-250

M2-251

M2-252

M2-253


M2-254

出土遺物69（2号溝状遺構;土器）

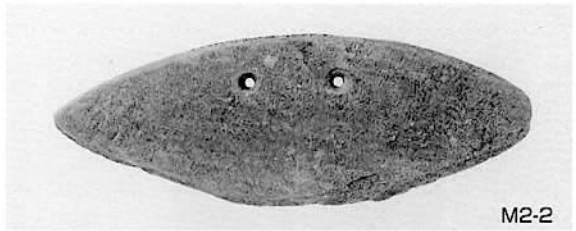
M2-254

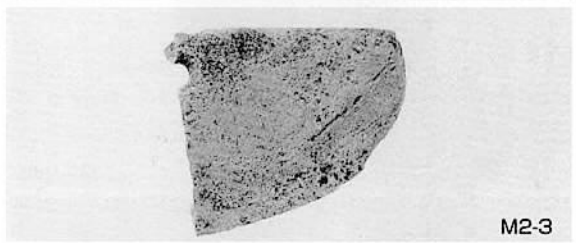
M2-257

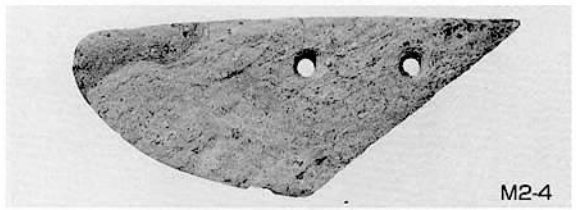
M2-258

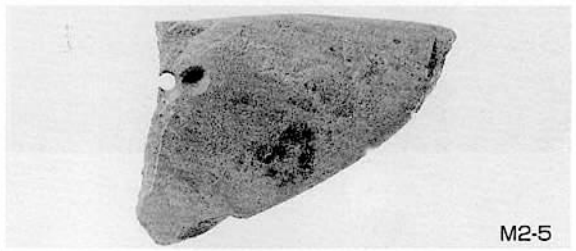
M2-259

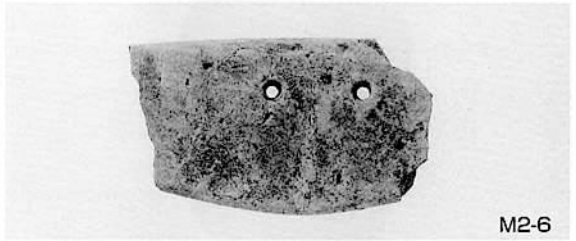
M2-260

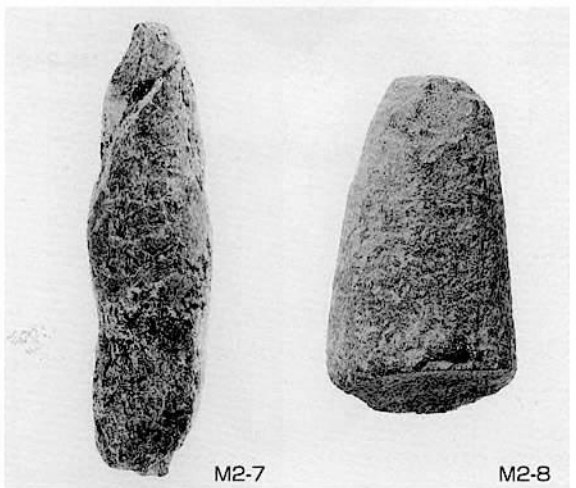

M2-2


M2-3

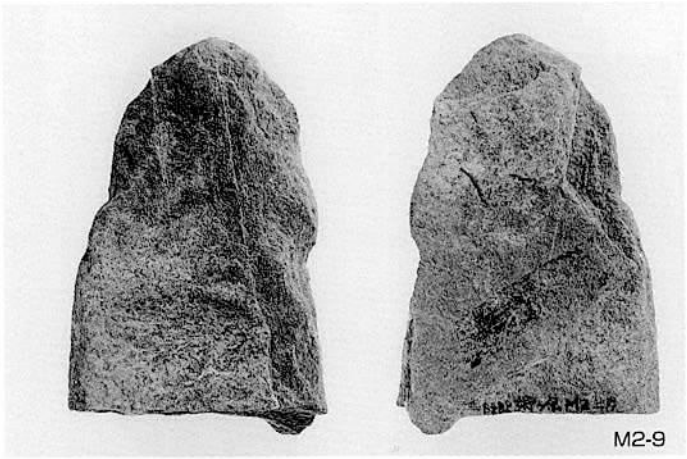

M2-4

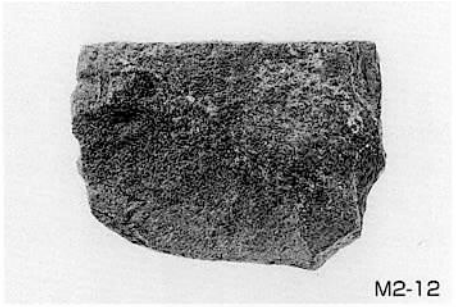

M2-5

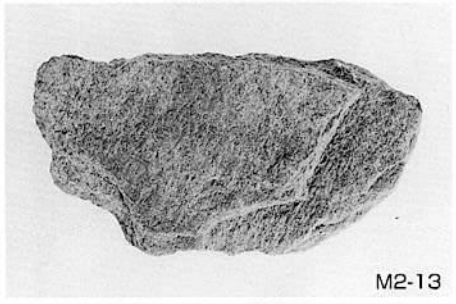

M2-6


M2-7 M2-8

出土遺物70（2号溝状遺構;土器・石製品）

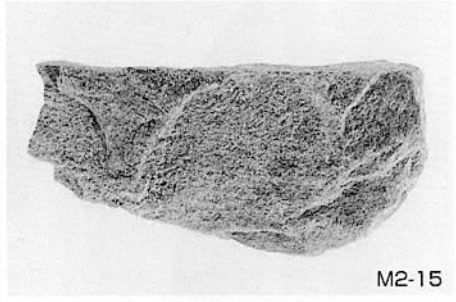

M2-9

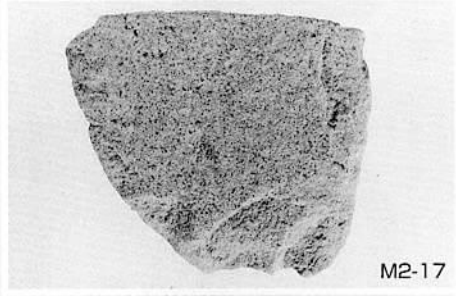

M2-12


M2-13

M2-10

M2-11


M2-15

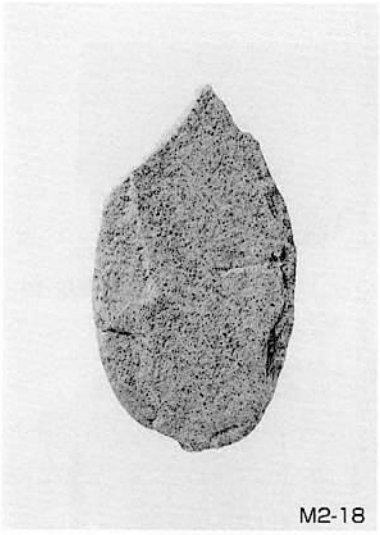

M2-17

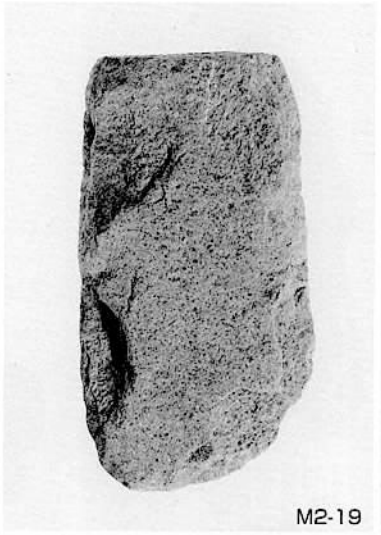
M2-14

M2-16

M4-12

出土遺物71（2号溝状遺構;石製品）


M2-18


M2-19

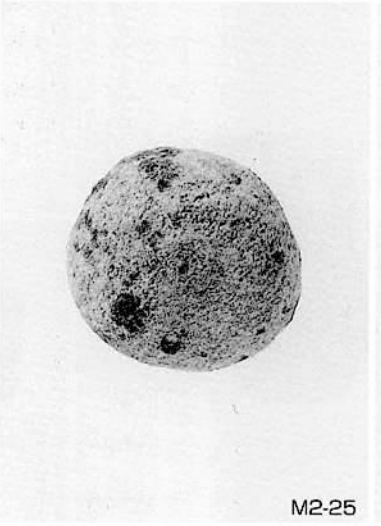
M2-20

M2-21

M2-22

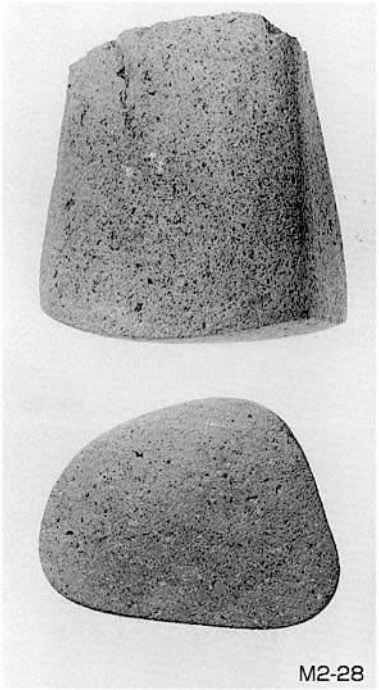
M2-23

M2-24


M2-25

M2-26

出土遺物72（2号溝状遺構;石製品）


M2-28

M2-29

M2-31

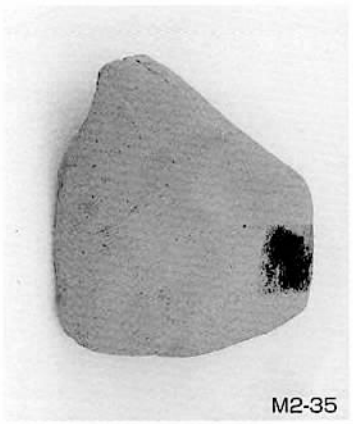
M2-30

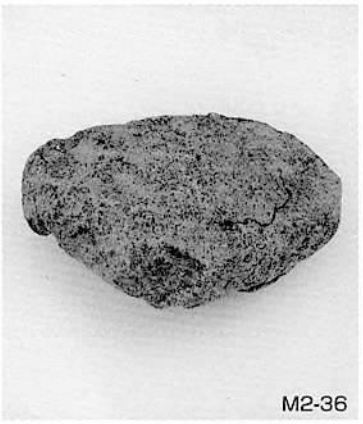
M2-32

M2-33

M2-34

出土遺物73（2号溝状遺構;石製品）


M2-35


M2-36

M2-38

M2-37

M2-39

M2-40

M2-41

M2-42

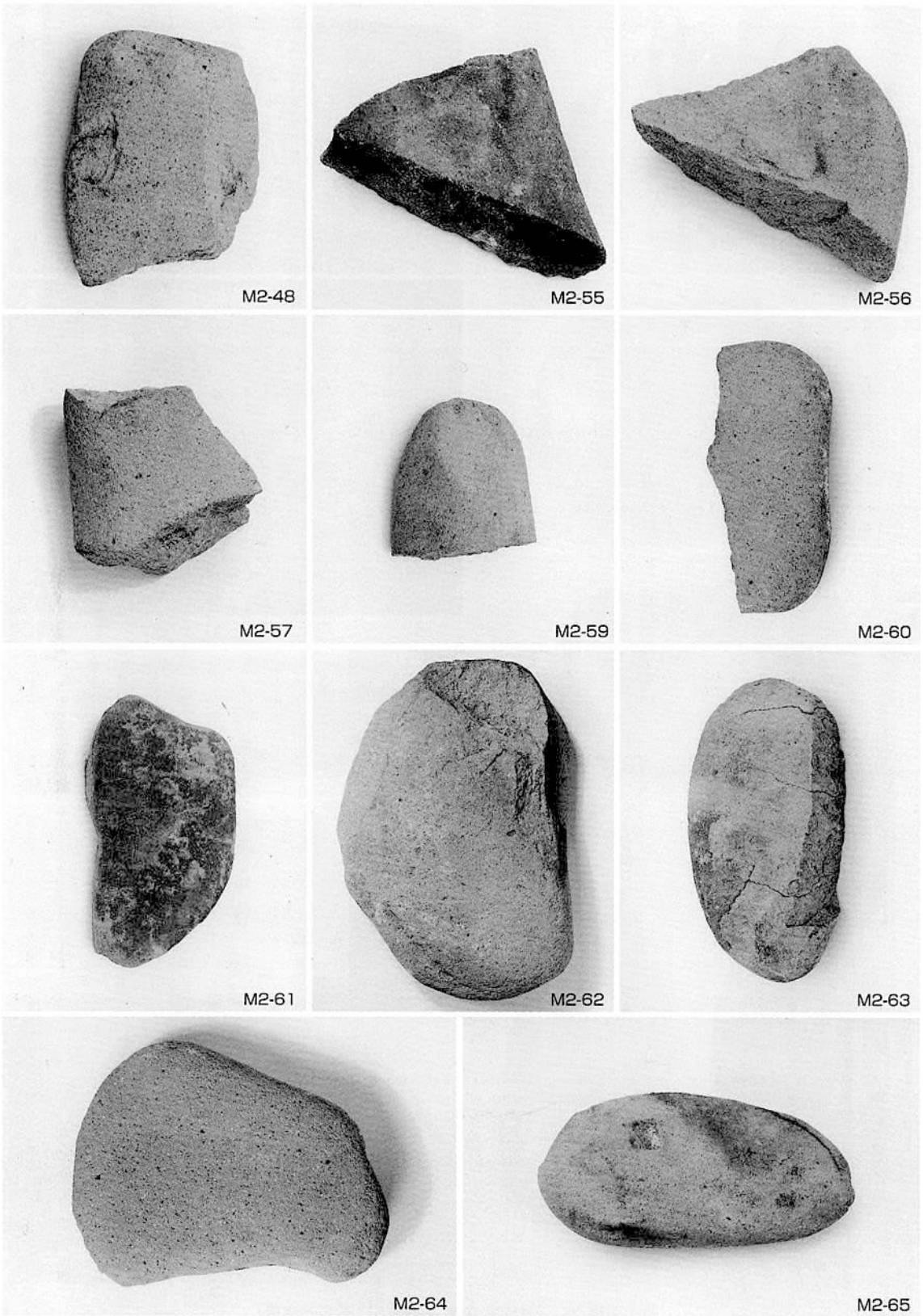
M2-44

M2-45

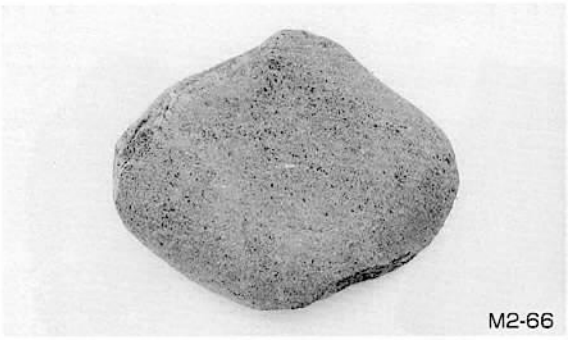
M2-46

M2-47

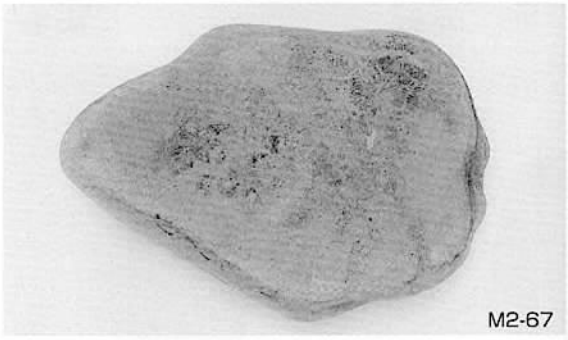
出土遺物74（2号溝状遺構;石製品）



出土遺物75（2号溝状遺構;石製品）

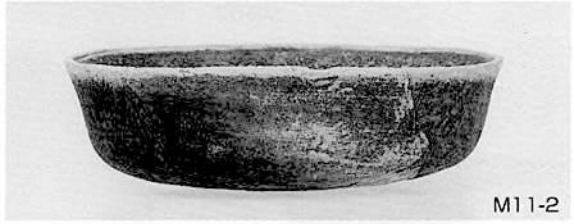

M2-66

M11-2


M2-67

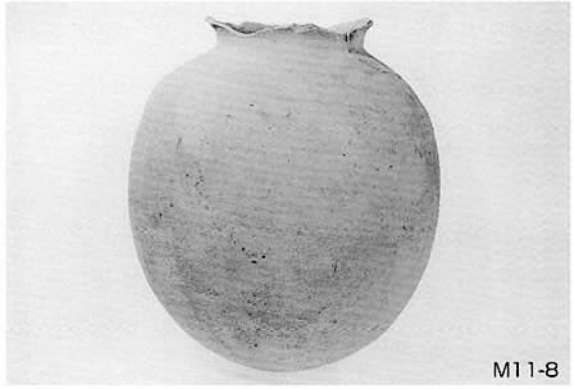
M11-2

M2-68

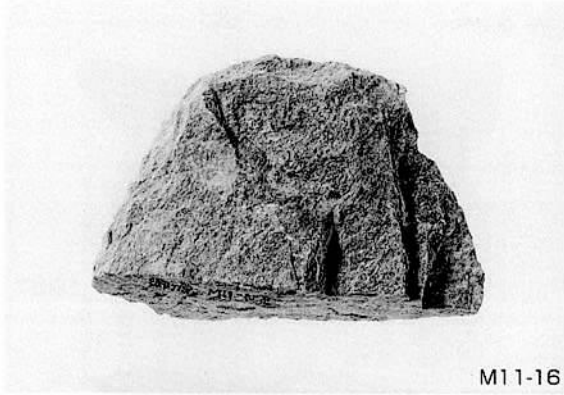

M11-2

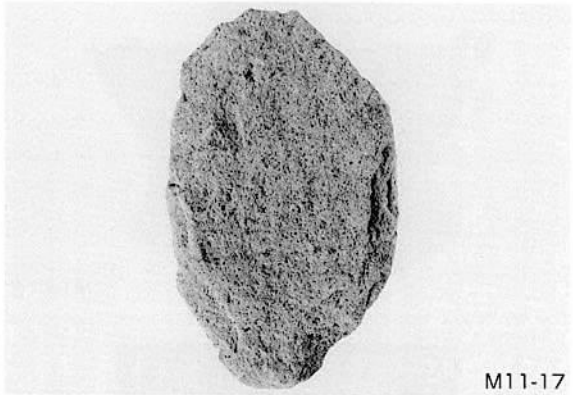
M4

M11-6


M11-8

出土遺物76（2号溝状遺構;土器4・11号溝状遺構）


M11-16

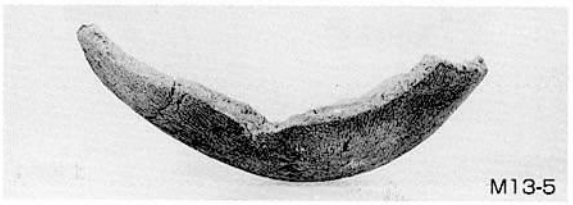

M11-17

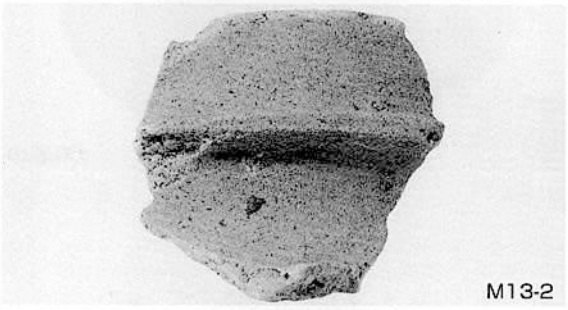
M11-18

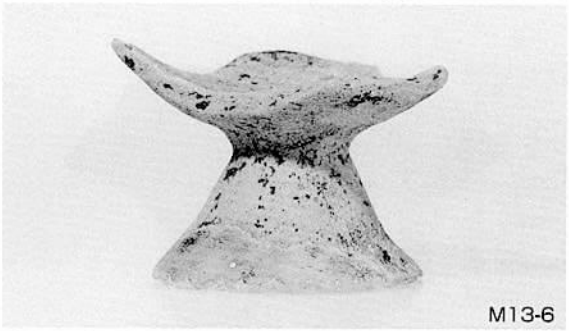
M11-19

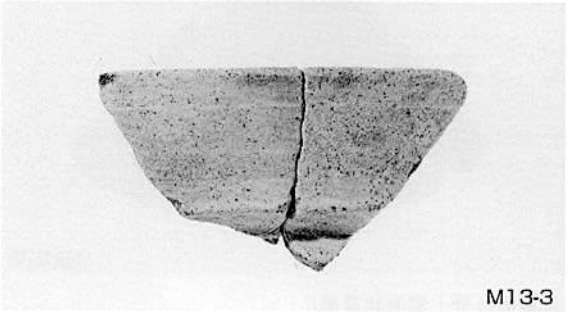
M11-20

M13-1


M13-5

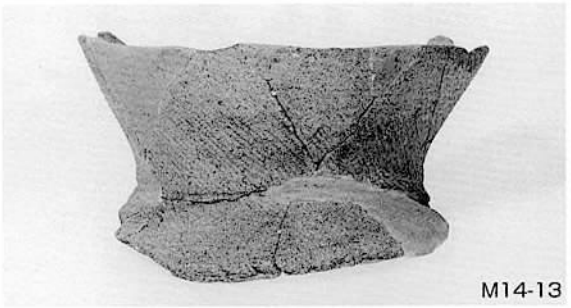

M13-2

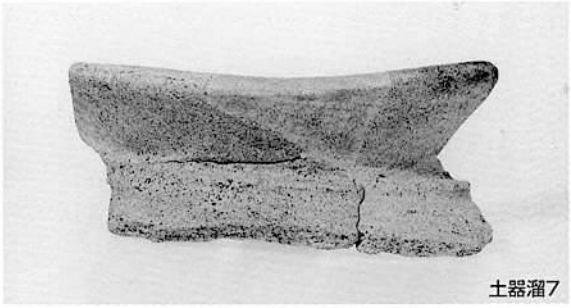

M13-6

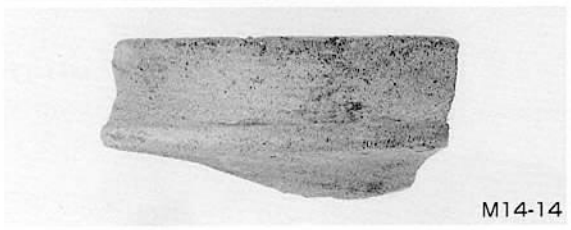

M13-3

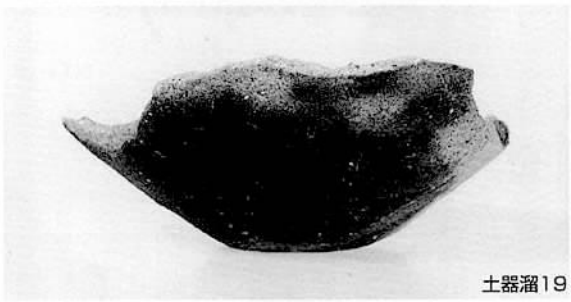
M13-12

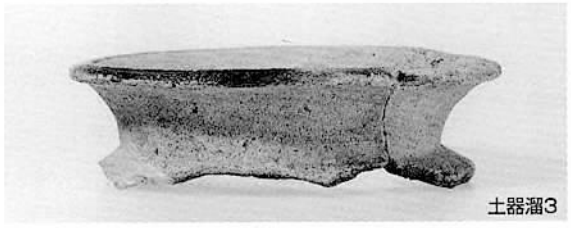
出土遺物77（11号溝状遺構・13号溝状遺構）

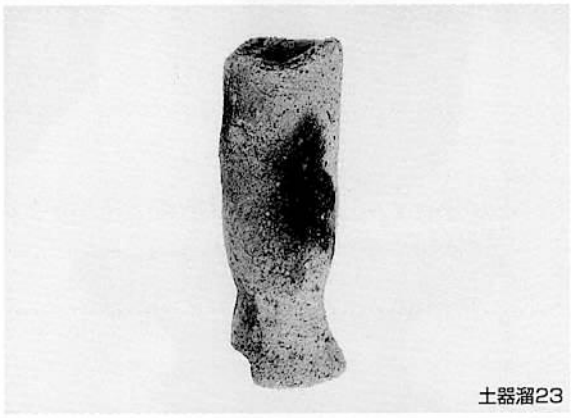

M14-13


土器溜7

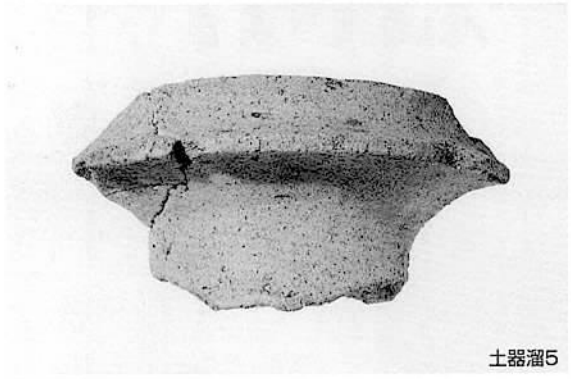

M14-14

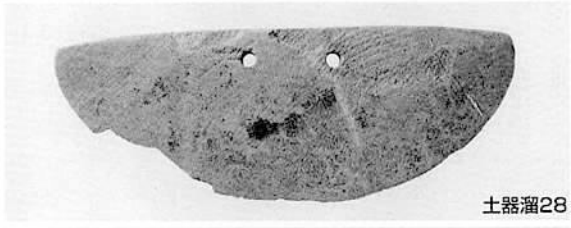

土器溜19

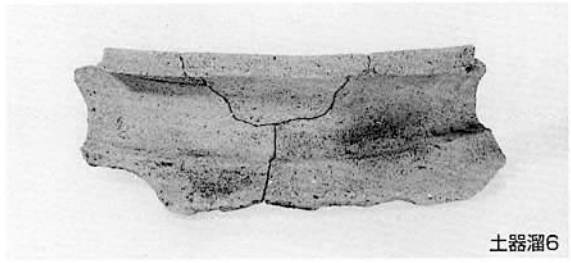

土器溜3

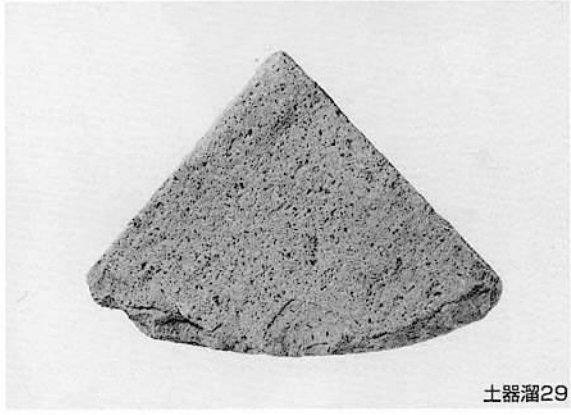

土器溜23

土器溜4

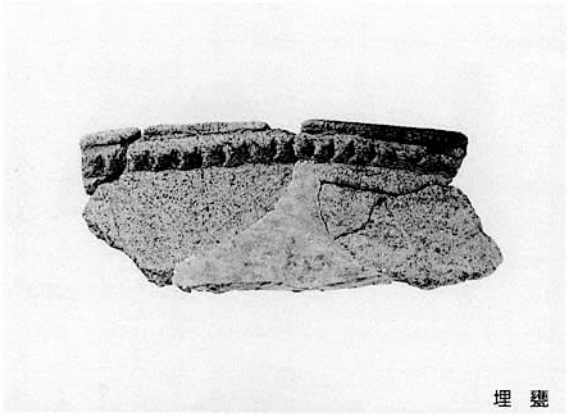

土器溜5

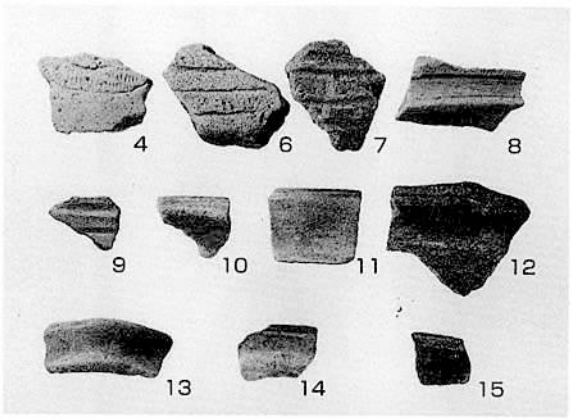

土器溜28

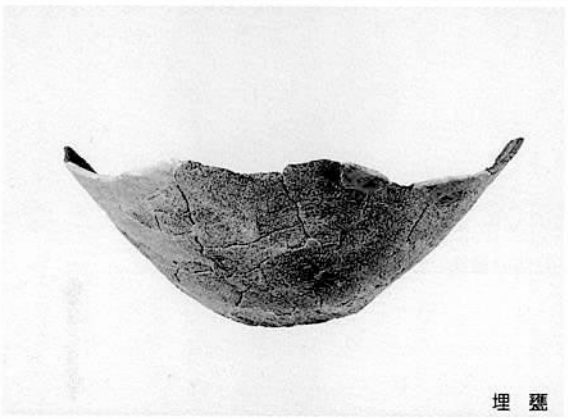

土器溜6

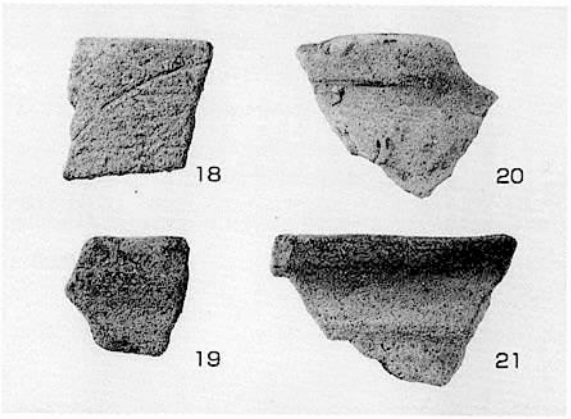

土器溜29

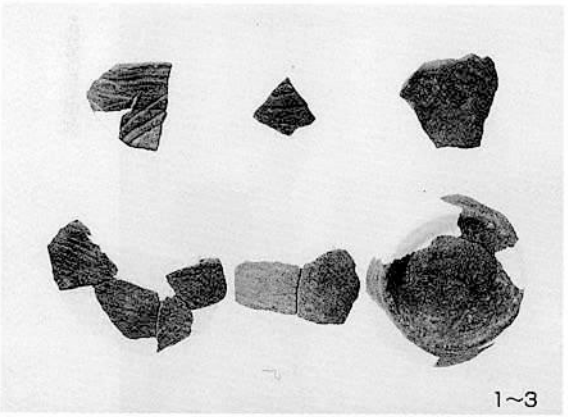
出土遺物78（14号溝状遺構;1号土器溜状遺構）

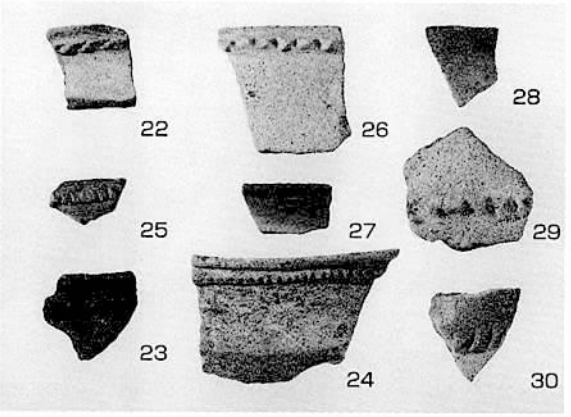


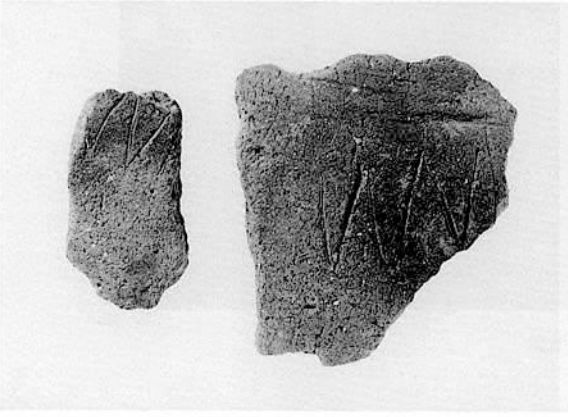


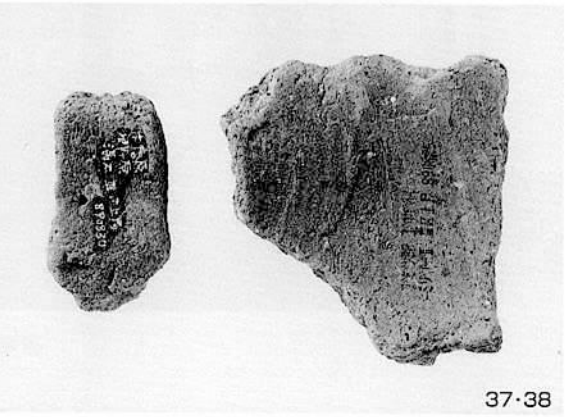




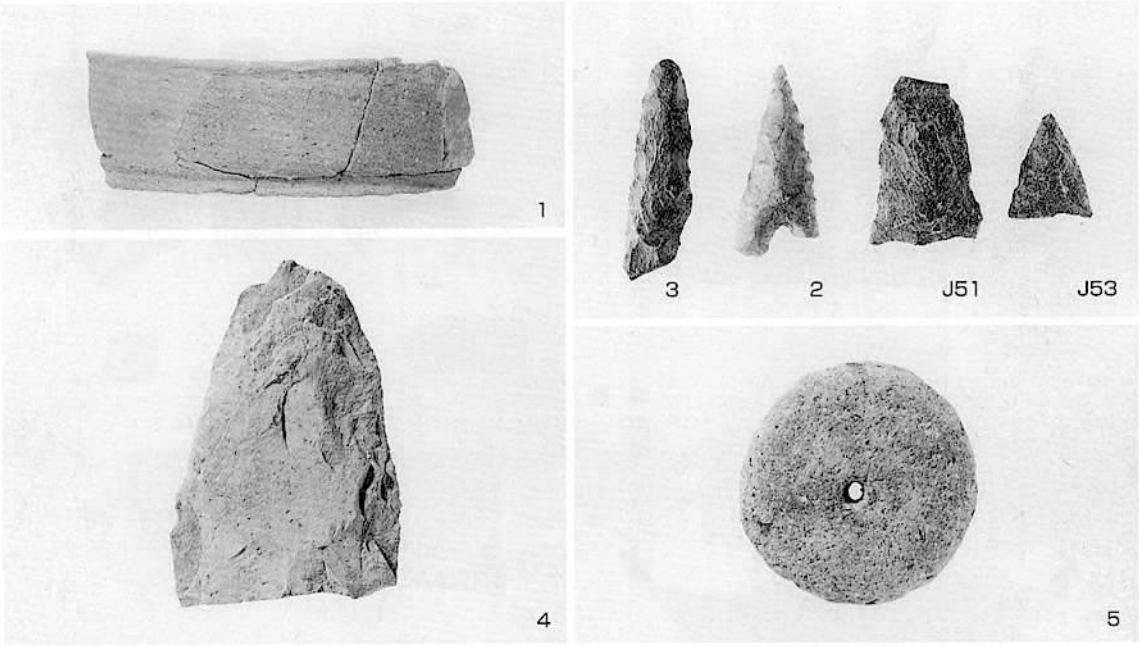








出土遺物79（埋甕・縄文土器）



出土遺物80（その他の遺物）

調査風景

報告書抄録

ふりがな	ごうがはるいせき
書名	郷ヶ原遺跡
巻次	
シリーズ名	一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第10集
編集者名	飛野博文
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577　福岡県福岡市博多区東公園７－７　☎092-651-1111
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
郷ヶ原	福岡県(ふくおかけん) 築上郡 大平村(たいへいむら) 大字下唐原(おおあざしもとうばる)	40645	960180	33度 33分 30秒	131度 11分 3秒	1988.04.11 ～1988.09.15	約6,500㎡	道路(豊前バイパス)建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項
郷ヶ原	散布地	縄文時代	埋甕	1基	後・晩期土器、打製石斧など	
	集落	弥生時代	住居跡	67軒	土器、鉄製品、石製品	弥生末～古墳初の大集落
			方(円)形周溝遺構	5基以上	土器、鉄製品	
			甕棺	3基		
			溝状遺構	2条以上	土器、ガラス玉、鉄製品	環濠となる
	集落跡	古代～中世	溝状遺構	2条以上	土器	

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

一般国道10号　郷ヶ原遺跡

平成10年３月31日

編集　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

発行　福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕３丁目16番36号

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 9	登録番号 14